

一般国道8号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅸ

箕輪遺跡Ⅱ

2015

新潟県教育委員会

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道8号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅸ

^{みの}箕 ^わ輪 遺跡Ⅱ

2015

新潟県教育委員会

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟県教育委員会は、国道建設などの道路事業に伴う発掘調査を行っており、その成果を発掘調査報告書として公表してまいりました。本書は国道8号柏崎バイパス建設に伴い実施した、柏崎市箕輪遺跡の発掘調査報告書です。

国道8号は新潟市を起点とし、日本海沿いに北陸地方を縦断し、京都に至る総距離561.2kmの主要幹線道路です。新潟県と北陸地方および京阪地方を結び、新潟県の産業・経済・文化の交流と発展に大きな役割を果たしています。

しかし、現在の柏崎市域では市街化の進展及び交通需要の増加に伴い、慢性的な交通混雑を引き起こしているのが現状です。柏崎バイパス建設事業は、このような問題を解決し、広域地域との交流促進、都市交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画されました。

箕輪遺跡は奈良時代から平安時代を中心とする遺跡で、掘立柱建物と川跡などが検出され、川跡からは大量の土器・陶器、木製品が出土しました。土器・陶器には「上殿」と墨書された土師器・須恵器や、京都産の緑釉陶器などがあり、木製品には駅家に関する木簡や漆塗りの鏡、皿や曲物など多様な容器類があります。これら多様な出土遺物から箕輪遺跡は古代三島駅、三島郡の郡衙に関連した遺跡であることが明らかとなりました。

今回の報告書が、地域の歴史を解明する資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と知識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助を頂いた、柏崎市教育委員会ならびに地元住民の方々、発掘調査報告書から報告書刊行に至るまで格別の配慮を賜りました国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所に対して厚く御礼申し上げます。

2015年1月

新潟県教育委員会

教育長 高井盛雄

例 言

- 1 本報告書は、新潟県柏崎市枇杷島字箕輪 3014 番地 3 ほかに所在する箕輪遺跡の発掘調査記録である。「箕輪遺跡Ⅱ」は新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団が発行する箕輪遺跡の 2 回目の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、一般国道 8 号柏崎バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 3 本発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼し、1996（平成 8）～2000（平成 12）年度に実施した。本報告書は 1998（平成 10）年に実施した調査の一部および 1996（平成 8）・1997（平成 9）・1999（平成 11）・2000（平成 12）年に実施した調査の記録である。
- 4 埋文事業団は、1996（平成 8）～2000（平成 12）年度の掘削作業などを、株式会社航友組に委託し、発掘調査を実施した。
- 5 整理作業及び報告書作成にかかる作業は、県教委が埋文事業団に委託し、主に 2013（平成 25）年度に実施した。
- 6 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 7 遺物の注記は、「ミノ」とし、調査年度（西暦下二桁）・出土地点・層位などを併記した。
- 8 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 9 調査番号は土器・陶磁器・土製品、石器・石製品、金属製品と木製品でそれぞれ通し番号とした。本文及び挿図・観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 10 本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に [] で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第Ⅵ章については各分析の文末に掲載した。
- 11 各種図版・挿図作成や本文編集は、有限会社不二出版に委託した。
- 12 木製品の樹種同定は株式会社 パレオ・ラボ（黒沼保子）に委託した。
- 13 本書の編集は春日真実（埋文事業団 課長代理）・坂上有紀（同 嘱託員）が担当した。執筆分担は以下のとおりである。なお第Ⅶ章 3D については坂田由紀子の原稿に坂上が加筆・修正した。また、第Ⅶ章 5 は『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成 11 年度』の原稿の表現・釈文を一部変更して掲載した。
第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅴ章 1～5、第Ⅷ章 1・4・6 …… 春日
第Ⅲ章・第Ⅳ章、第Ⅴ章 5、第Ⅷ章 3 …… 坂上
第Ⅵ章 …… 黒沼保子
第Ⅶ章 2 …… 小野本 敦
第Ⅶ章 5 …… 小林昌二・相澤 央
- 14 調査成果の一部は現地説明会資料 [1996・1997・1999]、埋蔵文化財調査事業団 年報平成 6～9 年 [埋文事業団 1996～1999]、埋文にいがた第 20・28・29・81・85 号 [埋文事業団 1997・1999・2000・2012・2013]、遺跡発掘調査報告書 99・2000 [埋文事業団 1999・2000] など公表しているが、本報告をもって正式な報告とする。
- 15 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略 五十音順）
相澤 央 小林昌二 坂井秀弥 田口昭二 高橋信一郎 松村忠司 百瀬正恒 山田昌久
京都市埋蔵文化財センター 多治見市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査	2
3 調査の体制	4
A 試掘確認調査	4
B 本発掘調査	4
4 整理作業	6
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	7
1 地理的環境	7
2 歴史的環境	8
A 柏崎周辺の古代・中世概観	8
B 柏崎周辺の古代遺跡	16
第Ⅲ章 遺 跡	17
1 グリッドの設定と地区名	17
2 基本層序	17
第Ⅳ章 遺 構	21
1 概 要	21
2 記載の方針	21
3 各 説	22
A A 区	22
B B・C 区	22
C D 区	24
D E 区	25
E F 区	27
F G 区	27
G H 区	28
第Ⅴ章 遺 物	31
1 概 要	31
2 土器・陶磁器	31
A 分 類	31

B 各 説	36
3 土 製 品	46
4 石器・石製品	46
5 製鉄関連遺物・金属製品	47
6 木 製 品	48
A 記載の方針	48
B 各 説	49

第VI章 自然科学分析 (樹種同定)	65
--------------------	----

第VII章 ま と め	75
-------------	----

1 土器・陶磁器	75
A 古代土器・陶磁器の編年	75
B 古代の土師器煮炊具について	90
C 中世の土器・陶磁器について	93
2 土器の製作状況について	94
A 目的と方法	94
B 検討対象	94
C 分 析	94
D 小 結	97
3 木 製 品	99
A 組成について	99
B 容器について	99
C 柱根について	101
D 壺踵について	102
4 遺 構	105
5 木筒について	108

《要 約》	113
-------	-----

《引用・参考文献》	114
-----------	-----

《観 察 表》	118
---------	-----

掘立柱建物	118
遺 構	121
土器・陶磁器観察表凡例	125
土器・陶磁器 (古代)	126
土器・陶磁器 (中世)	150
土 器 (縄文時代～古墳時代)	151
木 製 品 (容器)	152
木 製 品 (容器以外)	155
土製品、石器・石製品	159
製鉄関連遺物・金属製品、銭貨	160

挿図目次

第 1 図	柏崎ハイバスの法線と遺跡の位置……………1	第 27 図	木製品の光学顕微鏡写真 (2)……………72
第 2 図	箕輪遺跡の調査経過……………2	第 28 図	木製品の光学顕微鏡写真 (3)……………73
第 3 図	試掘確認調査トレンチの位置と地区名称……………3	第 29 図	木製品の光学顕微鏡写真 (4)……………74
第 4 図	箕輪遺跡の位置 (1)……………9	第 30 図	土器・陶磁器の編年案 1……………76・77
第 5 図	箕輪遺跡の位置 (2)……………10	第 31 図	土器・陶磁器の編年案 2……………78・79
第 6 図	箕輪遺跡の位置 (3)……………11	第 32 図	土器・陶磁器の編年案 3……………80・81
第 7 図	刈羽郡域の荘・保……………12	第 33 図	土器・陶磁器の編年案 4……………82・83
第 8 図	柏崎地域の主要遺跡の消長……………13	第 34 図	土器・陶磁器の編年案 5……………84・85
第 9 図	遺跡分布図……………14	第 35 図	墨書土器の変遷……………86・87
第 10 図	各地域の時期別遺跡数……………15	第 36 図	胎土 E 群の土師器……………89
第 11 図	グリッドの設定と地区の呼称……………19	第 37 図	柏崎平野の煮炊具……………91
第 12 図	基本層序……………20	第 38 図	中世の土器・陶磁器……………92
第 13 図	遺構の平面・断面形態、地積状況の分類……………21	第 39 図	輸入陶磁器の破片数……………93
第 14 図	G 区 SE4 から出土した編物……………27	第 40 図	土師質土器皿・小皿の分類別出土量……………93
第 15 図	古代の土器・陶器分類 1 (食器類)……………32	第 41 図	一致したハケメ……………95
第 16 図	古代の土器・陶器分類 2 (土師器煮炊具)……………33	第 42 図	A 類系・B 類系細部写真……………96
第 17 図	古代の土器・陶器分類 3 (貯蔵具)……………34	第 43 図	地点 1・2 における土器の製作状況……………98
第 18 図	弥生時代後期～古墳時代前期の土器分類……………34	第 44 図	木製品の組成……………99
第 19 図	土師質土器の分類……………34	第 45 図	流路における挽物の組成……………99
第 20 図	古代土器の機能別構成比率の変化……………43	第 46 図	挽物の口径分布……………99
第 21 図	木製品の部位名称と計測部位……………49	第 47 図	轆轤爪痕の模式図……………100
第 22 図	挽物・曲物の部位名称と計測部位……………49	第 48 図	曲物底板の径分布……………100
第 23 図	木取りの分類……………49	第 49 図	曲物蓋板の径分布……………100
第 24 図	曲物の部位名称……………52	第 50 図	木製鏝の分類……………103
第 25 図	曲物の組じ方模式図……………52	第 51 図	箕輪遺跡出土土鏝の種類例……………103
第 26 図	木製品の光学顕微鏡写真 (1)……………71	第 52 図	箕輪遺跡調査区と周辺の地形……………106

表目次

第 1 表	土器・陶磁器の器種分類……………35	第 8 表	容器類の用材傾向……………69
第 2 表	胎土の分類……………36	第 9 表	建築材の樹種構成……………70
第 3 表	土器・陶磁器の器種構成比率 (1)……………44	第 10 表	編年対照表……………88
第 4 表	土器・陶磁器の器種構成比率 (2)……………45	第 11 表	E 区 SB117 木取りと形態・樹種の関連……………102
第 5 表	木製品の集計……………50	第 12 表	木製鏝 出土遺跡一覧……………104
第 6 表	容器の集計……………51	第 13 表	箕輪遺跡の動向……………107
第 7 表	器種別の用材傾向……………68		

図版目次

【図面図版】		図版 5	B・C 区個別図 3 (SB1・2)
図版 1	全体図	図版 6	B・C 区個別図 4 (SB2、SE6・10・12・16、SK13・14・15・17、ビット)
図版 2	B・C 区全体図・個別図 1 (SK3・5・8、SX1・4、SD3)	図版 7	B・C 区個別図 5 (流路 1)
図版 3	B・C 区分別図	図版 8	B・C 区個別図 6 (流路 2)
図版 4	B・C 区個別図 2 (SB1、SA1)	図版 9	B・C 区個別図 7 (流路 1・2)

図版 10	A区・D区全体図・個別図 (A区SK1・2、D区SK15・16・18・22)	1-5e 層)	図版 39	土器・陶磁器 13 (B・C区土器集中地点 1-5e 層)
図版 11	E区・F区全体図・分割図 1・個別図 1 (E区SD12・95、SX37、SK102、P68・69)		図版 40	土器・陶磁器 14 (B・C区土器集中地点 1-5e 層)
図版 12	E区分割図 2・個別図 2 (SK7・52・73・76、SD8・89、P67・126)		図版 41	土器・陶磁器 15 (B・C区土器集中地点 1-5e 層)
図版 13	E区分割図 3・個別図 3 (SK34・74、SD45・110、SX35、P50・111)		図版 42	土器・陶磁器 16 (B・C区土器集中地点 1-5e 層)
図版 14	E区個別図 4 (SB1・4)		図版 43	土器・陶磁器 17 (B・C区土器集中地点 1-5e 層、B・C区流路 1・2-5 層)
図版 15	E区個別図 5 (SB2・5)		図版 44	土器・陶磁器 18 (B・C区流路 1・2-6～8 層、B・C区その他)
図版 16	E区個別図 6 (SB3・6・7)		図版 45	土器・陶磁器 19 (B・C区その他、A区、E区SD12)
図版 17	E区個別図 7 (SB117、SA116、ビット)		図版 46	土器・陶磁器 20 (E区SB1・SX2・SK7・その他の遺構、D・E・F・G区包含層ほか)
図版 18	G区全体図・個別図 (SE4、SK3・6・7、SD1、SX2・8)		図版 47	土器・陶磁器 21 (D・E・F・G区包含層ほか)
図版 19	H区全体図・個別図 1 (SK12・40・67・72、SD17・38、SA1、ビット)		図版 48	土器・陶磁器 22 (D・E・F・G区包含層ほか、H区流路 14 下層土器集中地点 1)
図版 20	H区分割図 1		図版 49	土器・陶磁器 23 (H区流路 14 下層土器集中地点 1)
図版 21	H区分割図 2		図版 50	土器・陶磁器 24 (H区流路 14 下層土器集中地点 1)
図版 22	H区個別図 1 (SB1・4)		図版 51	土器・陶磁器 25 (H区流路 14 下層土器集中地点 1)
図版 23	H区個別図 2 (SB2・3)		図版 52	土器・陶磁器 26 (H区流路 14 下層土器集中地点 1)
図版 24	H区個別図 3 (流路 14 遺物出土状況)		図版 53	土器・陶磁器 27 (H区流路 14 下層土器集中地点 1)
図版 25	H区個別図 4 (流路 14)		図版 54	土器・陶磁器 28 (H区流路 14 下層土器集中地点 1)
図版 26	H区個別図 5 (流路 14、SA75、SX76)		図版 55	土器・陶磁器 29 (H区流路 14 下層土器集中地点 1、同 2)
図版 27	土器・陶磁器 1 (B・C区遺構、B・C区流路 1・2-2 層、2' 層)		図版 56	土器・陶磁器 30 (H区流路 14 下層土器集中地点 2)
図版 28	土器・陶磁器 2 (B・C区流路 1・2-3 層、3' 層、4a 層、B・C区土器集中地点 2-5a・5b 層、同 5c・5d 層)		図版 57	土器・陶磁器 31 (H区流路 14 下層土器集中地点 2、同 3)
図版 29	土器・陶磁器 3 (B・C区土器集中地点 2-5c・5d 層、同 5e・5e' 層)		図版 58	土器・陶磁器 32 (H区流路 14 下層土器集中地点 3)
図版 30	土器・陶磁器 4 (B・C区土器集中地点 2-5e・5e' 層)		図版 59	土器・陶磁器 33 (H区流路 14 下層土器集中地点 3、同 4)
図版 31	土器・陶磁器 5 (B・C区土器集中地点 2-5e・5e' 層)		図版 60	土器・陶磁器 34 (H区流路 14 下層土器集中地点 4、H区流路 14 上・中層土器集中地点 1、同 2、同 3)
図版 32	土器・陶磁器 6 (B・C区土器集中地点 2-5e・5e' 層)		図版 61	土器・陶磁器 35 (H区流路 14 上・中層土器集中地点 3、同 4、SB1、SX76、SK67、H区その他の遺構、H区包含層ほか)
図版 33	土器・陶磁器 7 (B・C区土器集中地点 2-5e・5e' 層)			
図版 34	土器・陶磁器 8 (B・C区土器集中地点 2-5 層ほか、B・C区土器集中地点 1-5a・5b 層、同 5c 層、同 5d 層)			
図版 35	土器・陶磁器 9 (B・C区土器集中地点 1-5d 層)			
図版 36	土器・陶磁器 10 (B・C区土器集中地点 1-5d 層)			
図版 37	土器・陶磁器 11 (B・C区土器集中地点 1-5d 層、同 5e 層)			
図版 38	土器・陶磁器 12 (B・C区土器集中地点			

図版 62 土器・陶磁器 36 (H区包含層ほか、その他・追加)、土製品 1

図版 63 土製品 2、石器・石製品 1

図版 64 石器・石製品 2

図版 65 石器・石製品 3、製鉄関連遺物・金属製品 1

図版 66 製鉄関連遺物・金属製品 2

図版 67 木製品 1 (B・C区 SB1)

図版 68 木製品 2 (B・C区 SB1・SK7・流路 1-5 層)

図版 69 木製品 3 (流路 1-5 層)

図版 70 木製品 4 (流路 1-5 層)

図版 71 木製品 5 (流路 1-5 層)

図版 72 木製品 6 (流路 1-6a 層、流路 2-5 層)

図版 73 木製品 7 (流路 2-5 層)

図版 74 木製品 8 (流路 2-5 層)

図版 75 木製品 9 (流路 2-5 層)

図版 76 木製品 10 (流路 2-5 層、D区、E区 SB2・3)

図版 77 木製品 11 (E区 SB1・8・4)

図版 78 木製品 12 (E区 SB7・SB117・SA116・ビット・杭)

図版 79 木製品 13 (E区 ビット・杭、H区 SB1・3)

図版 80 木製品 14 (H区 SB1)

図版 81 木製品 15 (H区 SB4・SX76・流路 14-上層・同-中層)

図版 82 木製品 16 (流路 14-中層)

図版 83 木製品 17 (流路 14-中層)

図版 84 木製品 18 (流路 14-中層)

図版 85 木製品 19 (流路 14-中層)

図版 86 木製品 20 (流路 14-中層・同-下層)

図版 87 木製品 21 (流路 14-下層)

図版 88 木製品 22 (流路 14-下層)

図版 89 木製品 23 (流路 14-下層)

図版 90 木製品 24 (流路 14-下層)

図版 91 木製品 25 (流路 14-下層)

図版 92 木製品 26 (流路 14-下層)

図版 93 木製品 27 (流路 14-下層)

図版 94 木製品 28 (流路 14-下層)

図版 95 木製品 29 (流路 14-下層)

図版 96 木製品 30 (流路 14-下層)

図版 97 木製品 31 (流路 14-下層)

図版 98 木製品 32 (流路 14-下層)

図版 99 木製品 33 (流路 14-下層)

図版 100 木製品 34 (流路 14-下層)

図版 101 木製品 35 (流路 14-下層)

図版 102 木製品 36 (流路 14-下層)

図版 103 木製品 37 (流路 14-下層、SA75、階段状遺構)

【写真図版】

図版 104 遺跡遠景、B・C区流路 1・2

図版 105 B・C区 SB1・2、H区 SB1~3・流路 14、基本層序

図版 106 古代の土器・陶器 (H区、B・C区土器集中地点 1・2)

図版 107 墨書土器、緑軸陶器、青磁、白磁・青花、黒色土器

図版 108 木製品・鈔帯金具・砲彈

図版 109 土器の焼成痕跡 1

図版 110 土器の焼成痕跡 2・土器の消費痕跡 1

図版 111 土器の消費痕跡 2・その他

図版 112 遺構 1 B・C区、E区、H区完掘

図版 113 遺構 2 A区完掘・SK2、B・C区 SB1

図版 114 遺構 3 B・C区 SB1・2、SE6・7・10

図版 115 遺構 4 B・C区 SK8・13・14・15、SE12・16、E10y17-Pt1

図版 116 遺構 5 B・C区 F11a14-Pit1・流路 1

図版 117 遺構 6 B・C区流路 1・2

図版 118 遺構 7 B・C区流路 1・2

図版 119 遺構 8 B・C区流路 1・2、D区完掘・SK22、E区 SB1

図版 120 遺構 9 E区 SB1・2、SK4

図版 121 遺構 10 E区 SB2・3

図版 122 遺構 11 E区 SB4・5・7・8

図版 123 遺構 12 E区 SB8・117

図版 124 遺構 13 E区 SB117、SA116、SK7・102、P30

図版 125 遺構 14 E区 P99・P100・SD95・土器出土状況、F区完掘、G区 SK3

図版 126 遺構 15 G区 SE4・SD1、H区 SB1

図版 127 遺構 16 H区 SB1・2

図版 128 遺構 17 H区 SB2・3・4、P4、SD15・16

図版 129 遺構 18 H区 SD17・38、SX50・76、流路 14

図版 130 遺構 19 H区流路 14下層、SA75

図版 131 遺構 20 H区流路 14下層

図版 132 遺構 21 H区流路 14

図版 133 土器・陶磁器 1 (B・C区遺構、B・C区流路 1・2-2層・2'層)

図版 134 土器・陶磁器 2 (B・C区流路 1・2-3層・3'層・4a層、B・C区土器集中地点 2-5a・5b層、同 5c・5d層)

図版 135 土器・陶磁器 3 (B・C区土器集中地点 2-5c・5d層、同 5e・5e'層)

図版 136 土器・陶磁器 4 (B・C区土器集中地点 2-5e・5e'層)

- 図版 137 土器・陶磁器 5 (B・C区土器集中地点
2-5e・5e' 層)
- 図版 138 土器・陶磁器 6 (B・C区土器集中地点
2-5e・5e' 層)
- 図版 139 土器・陶磁器 7 (B・C区土器集中地点2-5
層ほか、B・C区土器集中地点1-5a・5b層、
同-5c層、同-5d層)
- 図版 140 土器・陶磁器 8 (B・C区土器集中地点
1-5d 層)
- 図版 141 土器・陶磁器 9 (B・C区土器集中地点
1-5d 層、同-5e 層)
- 図版 142 土器・陶磁器 10 (B・C区土器集中地点
1-5e 層)
- 図版 143 土器・陶磁器 11 (B・C区土器集中地点
1-5e 層)
- 図版 144 土器・陶磁器 12 (B・C区土器集中地点
1-5e 層)
- 図版 145 土器・陶磁器 13 (B・C区土器集中地点
1-5e 層)
- 図版 146 土器・陶磁器 14 (B・C区土器集中地点
1-5e 層)
- 図版 147 土器・陶磁器 15 (B・C区土器集中地点
1-5e 層、流路1・2-5層)
- 図版 148 土器・陶磁器 16 (B・C区流路1・2-6～8
層、B・C区その他)
- 図版 149 土器・陶磁器 17 (B・C区その他、A区、E
区SD12・SB1・SX2・SK7・その他の遺構、
D・E・F・G区包含層ほか)
- 図版 150 土器・陶磁器 18 (D・E・F・G区包含層ほか)
- 図版 151 土器・陶磁器 19 (D・E・F・G区包含層ほか、
H区流路14下層土器集中地点1)
- 図版 152 土器・陶磁器 20 (H区流路14下層土器集
中地点1)
- 図版 153 土器・陶磁器 21 (H区流路14下層土器集
中地点1)
- 図版 154 土器・陶磁器 22 (H区流路14下層土器集
中地点1)
- 図版 155 土器・陶磁器 23 (H区流路14下層土器集
中地点1、同2)
- 図版 156 土器・陶磁器 24 (H区流路14下層土器集
中地点2、同3)
- 図版 157 土器・陶磁器 25 (H区流路14下層土器集
中地点3、同4)
- 図版 158 土器・陶磁器 26 (H区流路14下層土器集
中地点4、H区流路14上・中層土器集中地
点1、同2、同3)
- 図版 159 土器・陶磁器 27 (H区流路14上・中層土
器集中地点3、同4、SB1、SK67、SX76、
H区その他の遺構、H区包含層ほか)
- 図版 160 土器・陶磁器 28 (その他・追加)、土製品、
石器・石製品1
- 図版 161 石器・石製品2、製鉄関連遺物・金属製品1
- 図版 162 製鉄関連遺物・金属製品2
- 図版 163 木製品1 (B・C区SB1・SE7・流路1-5層)
- 図版 164 木製品2 (B・C区流路1-5層)
- 図版 165 木製品3 (B・C区流路1-5層)
- 図版 166 木製品4 (B・C区流路1-5層)
- 図版 167 木製品5 (B・C区流路1-5層)
- 図版 168 木製品6 (B・C区流路2-5層)
- 図版 169 木製品7 (B・C区流路2-5層)
- 図版 170 木製品8 (B・C区流路2-5層)
- 図版 171 木製品9 (D区、E区SB1・2・3・6)
- 図版 172 木製品10 (E区SB4・8・117、SA116、ビッ
ト・杭・包含層)
- 図版 173 木製品11 (E区SD95・ビット・杭・包含層、
H区SB1・SB3)
- 図版 174 木製品12 (H区SB4、SX76、流路14-上
層・中層)
- 図版 175 木製品13 (H区流路14-中層)
- 図版 176 木製品14 (H区流路14-中層)
- 図版 177 木製品15 (H区流路14-中層・下層)
- 図版 178 木製品16 (H区流路14-下層)
- 図版 179 木製品17 (H区流路14-下層)
- 図版 180 木製品18 (H区流路14-下層)
- 図版 181 木製品19 (H区流路14-下層)
- 図版 182 木製品20 (H区流路14-下層)
- 図版 183 木製品21 (H区流路14-下層)
- 図版 184 木製品22 (H区流路14-下層)
- 図版 185 木製品23 (H区流路14-下層)
- 図版 186 木製品24 (H区流路14-下層)
- 図版 187 木製品25 (H区流路14-下層)
- 図版 188 木製品26 (H区流路14-下層)
- 図版 189 木製品27 (H区流路14-下層・SA75・階
段状遺構)

第I章 序 説

1 調査に至る経緯

一般国道8号柏崎バイパスは、柏崎市長崎を起点に、同市藤波に至る延長11.0kmの幹線道路である。交通混雑の解消、広域地域との交流促進、都市交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画され、1987（昭和62）年に事業化された。1991（平成3）年度から用地買収、1993（平成5）年度から工事着手して整備が進められている。これらを受けて、建設省（現国土交通省、以下、国交省）と新潟県教育委員会（以下、県教委）との間で、事業用地内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

柏崎市茨目（国道252号）～柏崎市城東1丁目（国道353号）間のバイパス法線予定地の分布調査は、県教委から依頼を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下埋文事業団）が1994（平成6）年3月16・17日に実施した。分布調査の結果を受け、県教委は、周知の箕輪遺跡の範囲が拡大する可能性が高く、他にも未周知の遺跡が存在する可能性が高いことから、80,000m²の試掘確認調査が必要であることを国交省に報告している。1995（平成7）年2月に実施された国交省・県教委・事業団三者による埋蔵文化財の取り扱いに関する調整会議では、1995（平成7）年度に試掘確認調査を実施し、本発掘調査が必要な場合は1996（平成8）年度以降に実施することで合意した。

埋文事業団は県教委の依頼を受け、1995（平成7）年8月7日～10月12日に箕輪遺跡の試掘確認調査を実施した。調査対象区内では弥生時代から中世の遺構・遺物が広範囲で確認でき本発掘調査面積は41,000m²と回答している。

本発掘調査は1996（平成8）年5月7日から開始し、冬期の中断期間を挟んで2000（平成12）年9月5日に終了した。5年間の調査面積の合計は28,120m²である。このうち1998（平成10）年に調査した8,470m²のうち170m²と2000（平成12）年度に調査した3,000m²については『箕輪遺跡Ⅰ』[高橋ほか2002]で報告済みであり、本書では1996・1997・1999（平成8・9・11）年調査分と1998（平成10）年に調査した8,470m²のうち8,300m²について報告を行う。



第1図 柏崎バイパスの法線と遺跡の位置
(国土地理院「柏崎」図野町 1:50,000を縮小)

2 調査の経過

A 試掘確認調査

試掘確認調査は1995（平成7）年8月7日から10月12日にかけて実施した。調査対象面積70,000㎡、調査面積1,600㎡、試掘確認率は2.3%である。調査の方法は、事業用地内にトレンチを任意に設定し、掘削用重機および人力で掘削・精査を行い、土層堆積状況、遺構・遺物の検出状況、トレンチの位置などを図面・写真に記録するものである。調査の結果、19～51トレンチ、57～60トレンチ、78・80・81トレンチから遺物が出土し、26・31・60トレンチでは遺物が集中して出土した。また、遺構は23・60トレンチなどから溝6条、土坑1基、ピット1基を検出した（第3図）。出土遺物は主に古代～中世の土器・陶磁器であり、箕輪遺跡は古代から中世にかけての遺跡で41,000㎡の本発掘調査が必要と判断した。なお、本調査必要範囲41,000㎡の中には本発掘調査を実施しなかった側道部分や現道部分を含んでいる。そのため1996～2000（平成8～12）年の本発掘調査面積の合計28,120㎡とは一致しない。

B 本発掘調査

本発掘調査は1996（平成8）年度から2000（平成12）年度の5年間実施した。『箕輪遺跡Ⅰ』で報告済の2000年度を除く、1996～1999（平成8～11）年度の調査経過について記述する。

1996（平成8）年度 A・B・C区の調査を実施した。調査期間は5月7日～11月20日である。11月9日に現地説明会を実施し、主にB・C区の調査成果を公開した。現地説明会参加者は260名である。A区（1,350㎡）の調査を終了し、B・C区（8,300㎡）は次年度の継続調査とした。

1997（平成9）年度 B・C・D区の調査を実施した。調査期間は4月14日～11月28日である。9月13日に現地説明会を実施し、主にB・C区の調査成果を公開した。現地説明会参加者は410名である。B・C区（8,300㎡）とD区の一部（1,000㎡）の調査を終了した。

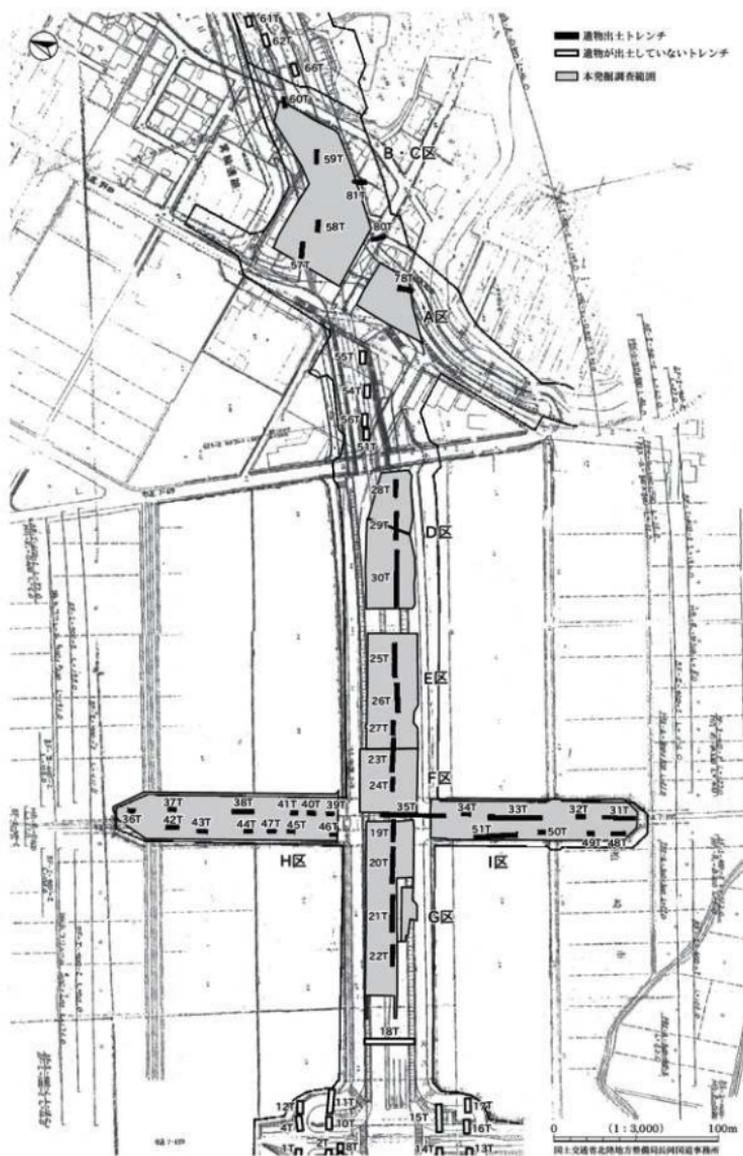
1998（平成10）年度 D・E・F・G・I区の調査を実施した。調査期間は4月13日～12月22日である。現地説明会は実施していないが、柏崎バイパス建設に伴い発掘調査を実施している小峯遺跡の現地説明会にこれまでの出土遺物の一部を展示した。D・F区、G区の過半、I区の一部（8,470㎡）の調査を終了した。

1999（平成11）年度 E・G・H区の調査を実施した。調査期間は4月14日～12月3日である。10月9日に現地説明会を実施し、主にE区・H区の調査成果を公表した。現地説明会参加者は378名である。E・H区、G区の一部（6,000㎡）の調査を終了した。

地区/年度	1996（平成8）年	1997（平成9）年	1998（平成10）年	1999（平成11）年	2000（平成12）年	備考
A区						1,350㎡
B・C区						8,300㎡
D・E・F・G区						12,550㎡
H区						2,750㎡
I区						3,170㎡
調査終了面積	1,350㎡	9,300㎡	8,470㎡	6,000㎡	3,000㎡	合計 28,120㎡

調査実施 調査終了

第2図 箕輪遺跡の調査経過



第3図 試掘確認調査トレンチの位置と地区名称

3 調査の体制

発掘調査の体制は以下のとおりである。すでに報告済のI区の調査のみ実施した平成12年度の調査体制は記載していない。

A 試掘確認調査

1995（平成7）年度

調査期間 1995年8月7日～10月12日
調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）
調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括 藍原直木（事務局長）
管理 山上利雄（総務課長）
庶務 泉田 誠（総務課 主事）
調査総括 亀井 功（調査課長）
指導 寺崎裕助（調査課 第二係長）
調査担当 中澤 毅（調査課 第二係主任調査員）
調査職員 大滝正人（調査課 第二係文化財調査委員）

B 本発掘調査

1996（平成8）年度

調査期間 1996年5月7日～11月20日
調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）
調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括 藍原直木（事務局長）
管理 山上利雄（総務課長）
庶務 泉田 誠（総務課 主事）
調査総括 亀井 功（調査課長）
指導 寺崎裕助（調査課 第二係長）
調査担当 中澤 毅（調査課 第二係主任調査員）
調査職員 甲田 治（調査課 第二係文化財調査委員）
山下 健（調査課 第二係嘱託員）
支援 株式会社 帆苺組

1997（平成9）年度

調査期間 1997年4月14日～11月28日
調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）
調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

總 括 須田益輝 (事務局長)
 管 理 若槻勝則 (總務課長)
 庶 務 泉田 誠 (總務課 主事)
 調査總括 亀井 功 (調査課長)
 指 導 寺崎裕助 (調査課 第二係長)
 調査担当 中澤 毅 (調査課 第二係主任調査員)
 調査職員 大滝正人 (調査課 第二係文化財調査委員)
 山下 健 (調査課 第二係嘱託員)
 支 援 株式会社 帆荷組

1998 (平成 10) 年度

調査期間 1997年4月13日～12月22日
 調査主体 新潟県教育委員会 (教育長 野本憲雄)
 調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 總 括 須田益輝 (事務局長)
 管 理 若槻勝則 (總務課長)
 庶 務 権谷久雄 (總務課 主事)
 調査總括 本間信昭 (調査課長)
 指 導 寺崎裕助 (調査課 第二係長)
 調査担当 斎藤清六 (調査課 第二係主任調査員)
 調査職員 小田由美子 (調査課 第二係主任調査員)
 岡田和則 (調査課 第二係主任調査委員)
 和泉宏之 (調査課 第二係主任調査委員)
 山下 健 (調査課 第二係嘱託員)
 桑原 喬 (調査課 第二係嘱託員)
 松島悦子 (調査課 第二係嘱託員)
 支 援 株式会社 帆荷組

1999 (平成 11) 年度

調査期間 1997年4月14日～12月4日
 調査主体 新潟県教育委員会 (教育長 野本憲雄)
 調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 總 括 須田益輝 (事務局長)
 管 理 若槻勝則 (總務課長)
 庶 務 権谷久雄 (總務課 主事)
 調査總括 本間信昭 (調査課長)
 指 導 高橋 保 (調査課 第二係長)
 調査担当 岡田和則 (調査課 第二係主任調査員)

4 整理作業

調査職員 渡辺孝弘（調査課 第二係文化財調査員）

本田彩子（調査課 第二係文化財調査員）

坂田由紀子（調査課 第二係嘱託員）

支 援 株式会社 帆苺組

4 整理作業

遺物の水洗・注記は可能な限り現地で実施した。1996～1999（平成8～11）年度の冬季間は本格的な整理作業に向けての基礎整理（遺構図面修正・各種台帳作成・土器接合など）を実施した。本報告書作成のための本格的な作業は、2013（平成25）年度に新潟県埋蔵文化財センターにおいて実施し、2014年度に印刷・刊行した。整理の体制は以下のとおりである。

整理期間 2013（平成25）年4月1日～2014（平成26）年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 高井盛雄）

整理実施機関 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括 木村正昭（事務局長 2013（平成25）年4月1日～12月31日）

土肥 茂（事務局長 2014（平成26）年1月1日～3月31日）

管 理 熊倉宏二（総務課長）

庶 務 仲川国博（総務課 班長）

整理 総括 高橋 保（調査課長）

整理 担当 春日真実（調査課 課長代理）

整理 職員 坂上有紀（調査課 嘱託員）

整 理 小熊紀子・小倉睦子・小林智恵子・小林智美・田口和子・鶴田須美子・

室塚真弓（調査課 嘱託員）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

位 置 箕輪遺跡は、柏崎市枇杷島3014番地3ほかに所在し、北緯37度21分11秒、東経138度33分58秒に位置する。柏崎市は、新潟県の海岸部中央やや南西よりに位置し、2005年5月1日に刈羽郡西山町・高柳町と合併し、現在の市域が形成された。市の北西は日本海に面し、北東を三島郡出雲崎町、東を長岡市、南を十日町市、南西を上越市と接する。江戸時代は、北国街道と長岡街道（北国街道と魚沼街道を結ぶ街道）の分岐点があり、現在も、国道8号から分岐する国道116号、JR信越線から分岐するJR越後線の起点であり、陸上交通の要衝となっている。また、日本海が東西日本をつなぐ重要な通路であることはいうまでもない。

地 勢 箕輪遺跡の所在する柏崎平野は、鶴川と鯖石川、鯖石川の支流である別山川によって形成された幅約7km、長さ約18kmの沖積平野である。その東・西・南の三方は東頸城丘陵、刈羽・三島丘陵と刈羽三山と呼ばれる米山（標高992.6m）、黒姫山（標高889.5m）、八石山（標高518m）などに代表される山地に囲まれている。こうした山地・丘陵の縁辺には沖積地が広がり、一部は日本海に面し段丘面が局部的に存在する。また、海岸部には砂丘（荒浜砂丘）が発達し、標高が70mを越える地点も存在する。砂丘の内陸には湿地性の沖積地が展開する〔鈴木1988・1989〕。

柏崎平野は、平野を北流する鶴川・鯖石川によって東部・中央部・西部に三区区分できる。東部は鯖石川以東の地域で、丘陵や沖積地・砂丘が発達している。刈羽・三島丘陵などの丘陵地帯、八石山から続く山地（三島山地）、別山川・長島川流域の沖積地、日本海沿岸の砂丘地が北北東-南南西方向にのびる。

中央部は鯖石川・鶴川に沿って黒姫山から続く山地（黒姫山地）や丘陵が南-北方向にのび、その縁辺では段丘面の発達が目立つ。段丘は樹枝状に開析され、縁辺は沖積地に接している。

西部は鶴川左岸一帯で、砂丘や沖積地は少なく、米山から続く山地（米山山地）が発達する。米山山地の西部は海岸に達し断崖をなすが、東部では狭小な段丘面が確認できる〔大野・徳間1990〕。

植 生 柏崎市の森林植生は、海岸部に常緑広葉樹林や風衝性のカシワ林が分布し、内陸の山地にはブナ林が分布する〔相沢1986〕。延徳三（1491）年、細川政元と同道し加賀・越中を経て越後に至った冷泉為広は、府中から柏崎にいたる道筋を「(前略)次アウミ川^里、川次クシラ浪^里、次岡山アリ、柏の木多、コレヨリ柏崎ト伝(後略)」と記しており、柏崎にはカシワが多く自生しており、このことが地名の由来となったことを示唆している。天然記念物に指定されている宮川の「宮川神社社叢」はシロダモやカシワが群生している。また、西山町石地の御島石部神社裏の高地には約3,000m²の広さにスダジイの老木が密集しており、「御島石部神社シイ樹叢」の名称で新潟県指定天然記念物となっている。

ブナ林は米山や黒姫山周辺にみられる。このほか鯖石川流域の大沢では標高100～150mという比較的低地にブナ林があり新潟県緑地環境保全地域となっている。

また、市内にはケヤキの大樹が多く残っている。新道の「鶴川神社の大ケヤキ」は根まわり14mの大木で天然記念物に指定されている。高柳町岡野町の「貞観園のモミとケヤキ」は新潟県指定天然記念物でケヤキの幹囲は4.5mである。椎谷の「椎谷観音大樺」、高柳町新ヶ原の「原新神社の樺」もケヤキの大樹で、

柏崎市指定天然記念物となっている。

箕輪遺跡周辺の地形 箕輪遺跡は柏崎平野の西部、鶴川右岸、丘陵先端付近の沖積地に位置する。遺跡の北側を源田川、南側を横山川が流れる。これら2つの小河川はいずれも鶴川の支流で、源田川は鮎石川の左岸地域へ、横山川は箕輪遺跡南側の丘陵に存在する藤橋東遺跡群や軽井川南遺跡群などの製鉄遺跡へつながっている（第5図）。

2 歴史的環境

A 柏崎周辺の古代・中世概観

古 代

越後国 越後国などの北陸道の諸国は、越国を分割することにより成立した。分割の正確な時期は不明であるが、天武一二年から一四年（683～685）に行われた国境策定作業時と推測されている〔鐘ヶ江1993〕。成立当初の越後国は、阿賀野川以北の地域であり、箕輪遺跡の所在する柏崎平野は越中国に属していた。柏崎平野周辺が越後国に含まれるようになるのは、大宝二年（702）に越中国の西部（頸城郡・魚沼郡・蒲原郡・蒲原郡）が越後国に編入されてからである〔米沢1980〕。

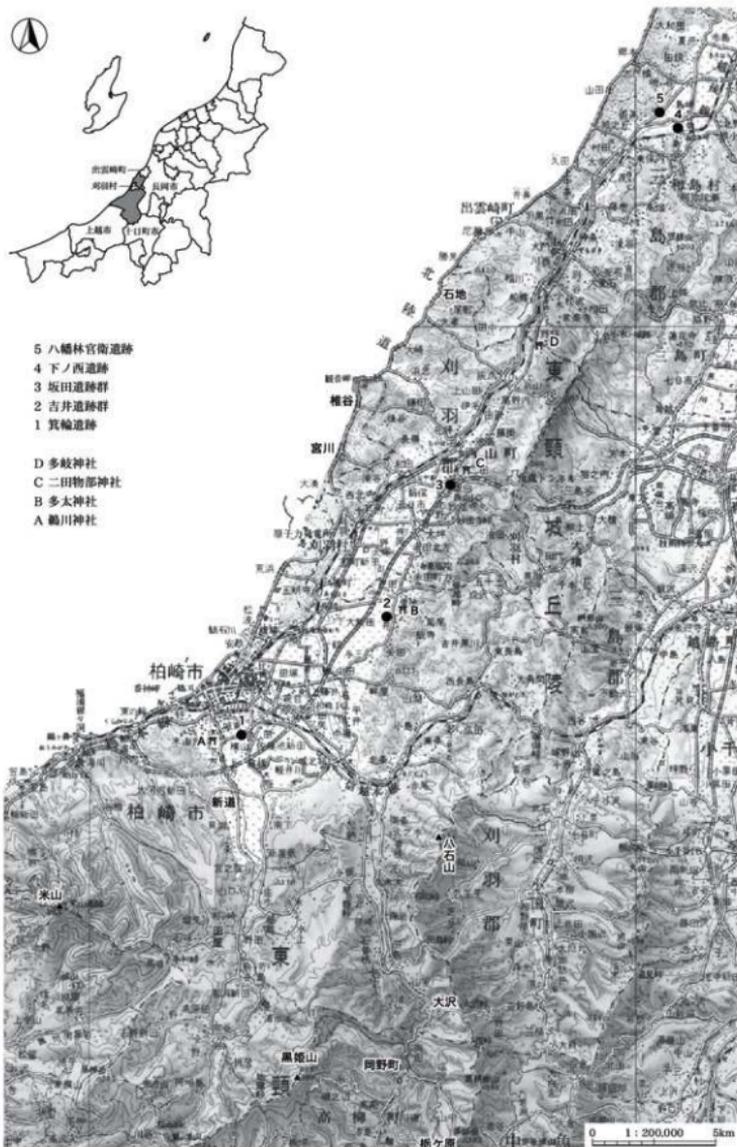
三嶋郡 柏崎平野周辺は当初古志郡に属していた。古志郡は現在の柏崎市・刈羽村、長岡市の大半と見附市の南部に及ぶ広大な範囲を有していたと推定できる。柏崎平野周辺は9世紀前半頃に三嶋郡として分立する。三嶋郡における郷名としては10世紀に成立したとされる『倭名類聚鈔』に「三嶋」・「高家」・「多岐」の三郷が記され、地名や式内社（およびその論社）などの検討から、三嶋郷が鶴川流域、高家郷が鮎石川・長島川流域、多岐郷が別山川流域と推測されている〔金子1990〕。箕輪遺跡は三嶋郷に所在した遺跡と推定できる。

『延喜式』に記された北陸道の駅家のうち、「三嶋」と「多太」は三嶋郡に存在した駅家と考えられる。第Ⅶ章でやや詳しく述べるように、箕輪遺跡は近隣に古代三嶋郡衙・三嶋駅が存在した可能性が高いが、古代古志郡衙・大家駅が近接して存在したと推測される長岡市八幡林官街遺跡・下ノ西遺跡（第4図4・5）は、箕輪遺跡の北北西約31.5km（約60里）に位置している〔高橋2008〕。三嶋駅と大家駅両遺跡の間付近には西山町二田の物部神社（第4図C）があり、二田物部神社の南西には古墳時代から中世の遺跡が密集する坂田遺跡群〔長沢^注2007、岡本^注2008、中島^注2009・2010〕が存在する。

延喜式内社 延喜式神名帳には三嶋郡の神社として御嶋石部神社・物部神社・鶴川神社・多岐神社・三嶋神社・石井神社の六座が記されている。御嶋石部神社は北条の御嶋石部神社（第9図F）・西山町石地の御嶋石部神社（同B）、物部神社は西山町二田の物部神社（同D）、鶴川神社は高柳町高尾の鶴川神社（同G）・宮場の鶴川神社（同I）・新道の鶴川神社（同K）・野田の鶴川神社（同L）、多岐神社は西山町別山の多岐神社（同C）・曾地の多多神社（同E）、三嶋神社は剣野町の三嶋神社（同J）、石井神社は西山町石地の石井神社（同A）・西本町の石井神社（同H）などが論社となっている〔花ヶ前2002〕。

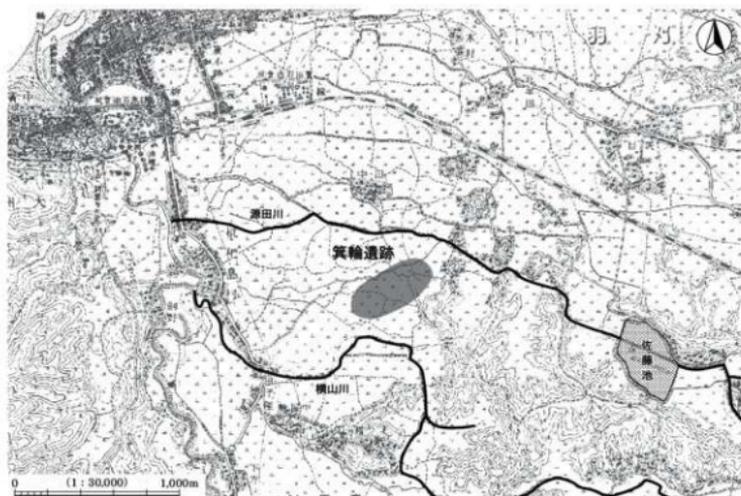
中 世（第7図）

柏崎地域の荘・保 『吾妻鏡』文治二年（1186）三月一二日条の「三箇国庄々未進注文」には、柏崎平野に所在する荘園として「宇河荘」・「佐橋荘」・「比角荘」があり、これらの荘園は寄進地系荘園として11世紀末から12世紀中頃に成立したと考えられる〔荻野1983〕。宇河荘は鶴川流域のほか鮎石川左岸

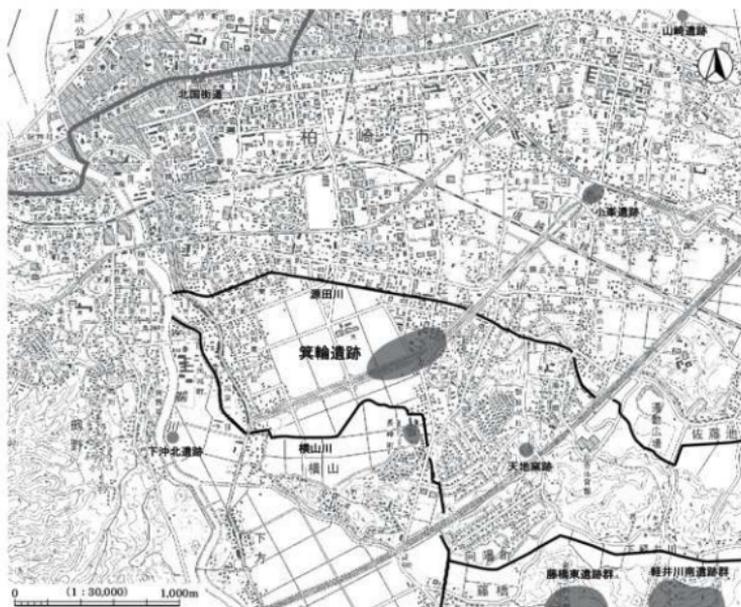


第4図 箕輪遺跡の位置(1)

(国土院発行 1 : 20,000、「長岡」平成8年7月1日、「高田」平成10年2月1日)

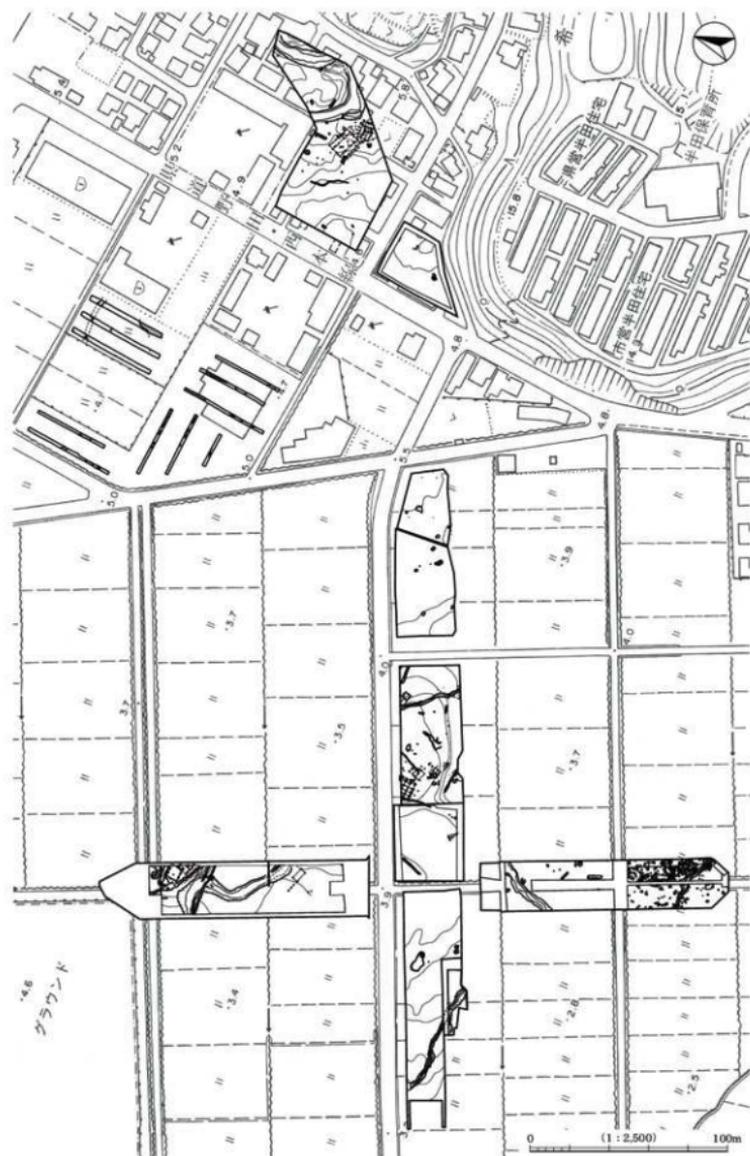


(国土地理院発行 1:25,000「船崎」明治 25 年 4 月 30 日)



(国土地理院発行 1:25,000「船崎」平成 19 年 7 月 1 日)

第 5 図 奥州運河の位置 (2)

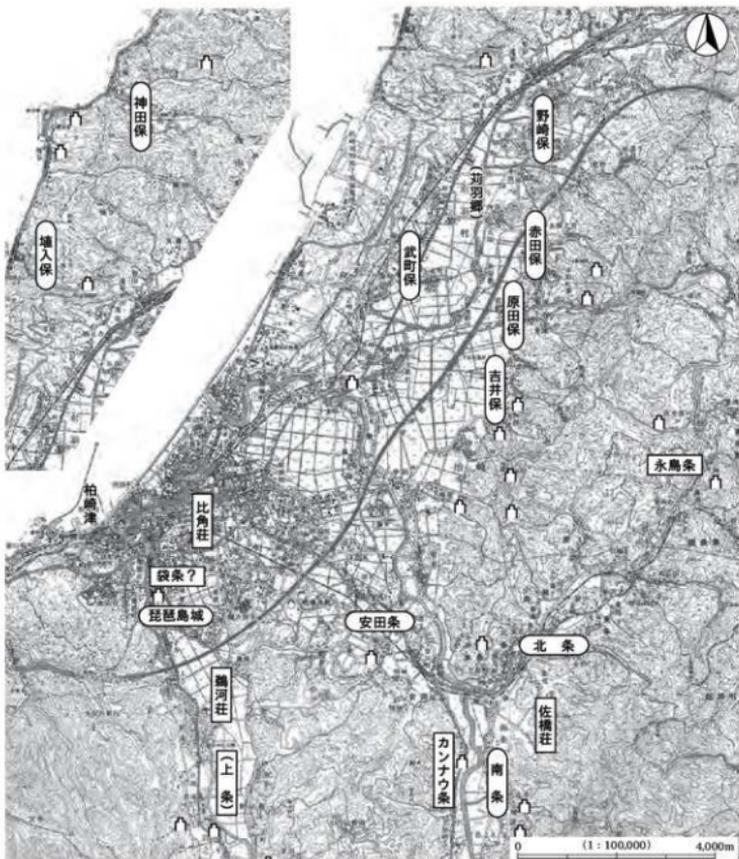


第6図 箕輪遺跡の位置(3) (柏崎市 柏崎市街図其14・15を改変)

の安田周辺も荘域としており、比角荘とは「鏡の沖」と呼ばれる湖沼により比角荘と隔てられていたと推測される。中世の箕輪遺跡は宇河荘に所在していた可能性が高い。比角荘は現在の柏崎市市街地を中心とする地域に所在したと推測できる荘園であるが、貞治三年（1364）以降史料上で確認できなくなる。佐橋荘は鮎石川上・中流域と長島川流域に所在した荘園である。

別山川流域や北東の岸部には中世の荘園は無く中世後期から江戸時代の史料では「野崎保」・「原田保」・「赤田保」・「殖生保」などの名称が見え、また『明月記』正治元年（1199）正月廿二日条、正和二年（1313）の「源光広和与状写」には「羽羽郷」の記載があり、国衙領となっていたものと考えられる。

中世後期の諸勢力 中世後期の柏崎地域には、越後を代表する有力氏族が存在した。越後毛利氏は宇河荘安田条（柏崎市安田周辺）と佐橋荘の領主であった。越後毛利氏は長島川流域の佐橋荘北条の領主であ



第7図 刈羽郡城の荘・保（品田₁₉₈₉:2012より転載）
 （国土地理院発行 1：50,000「柏崎」平成2年「岡野町」昭和60年原図）

る北条氏、宇河荘安田家の領主である毛利安田氏などに分派し、柏崎地域における最大の勢力を誇っていた。

羽村村赤田周辺に存在した赤田保の領主は斎藤氏である。北条氏・毛利安田氏・斎藤氏は、戦国時代～織豊期における越後の上杉・長尾政権下で重臣として活躍した一族である。

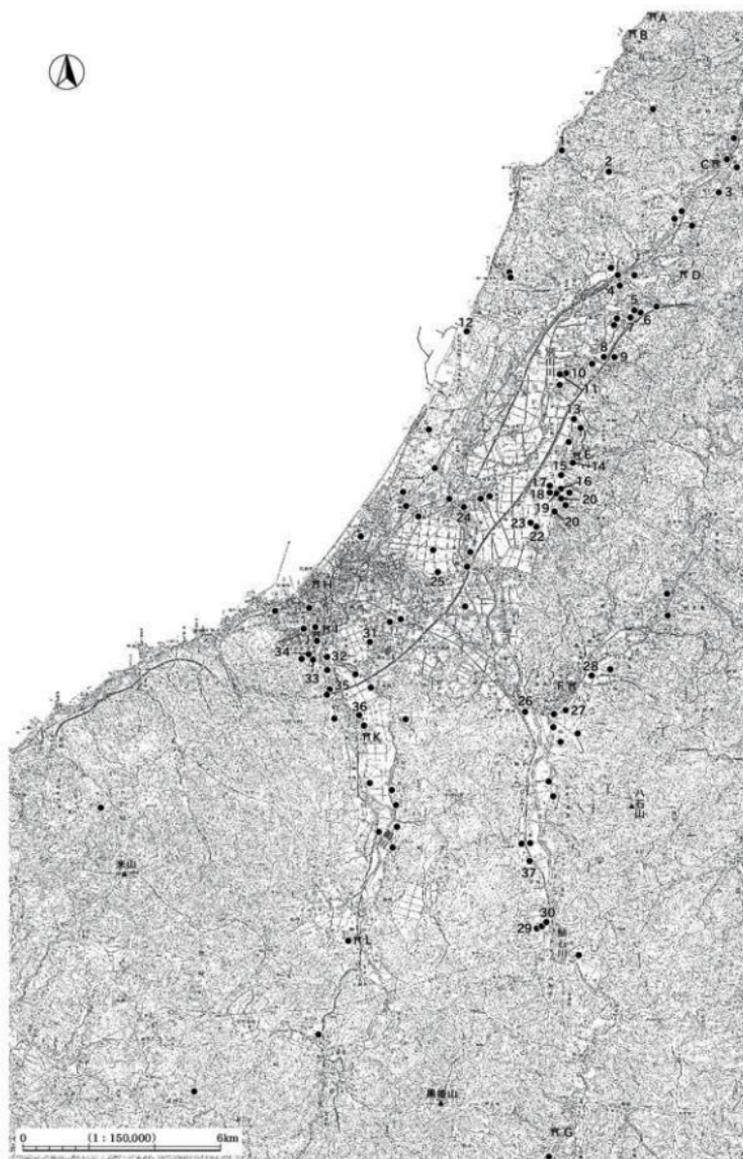
鶴川上流域の宇河荘上条は、上杉氏一門の上条上杉氏の拠点であった。鶴川下流域、箕輪遺跡北西約1kmには琵琶島城がある。上杉氏の被官である宇佐美氏が配置されたとする意見があるが、宇佐美氏は16世紀前半には小野要害（上越市柿崎区）に所在している〔県史164・3212〕。なお、建治元年（1275）年の「六条八幡宮造営注文」に越後国御家人として「宇佐美平太跡」の記載があり、南北朝以降の史料にみられる宇佐美氏はこの末裔の可能性が高い〔高橋1997〕。

港町柏崎 「梅花無尽蔵 続群十二下」には長享二年（1488）に柏崎を訪れた僧万里集九が「柏崎市場之面三千余家、其外深巷凡五六千戸」と柏崎の繁栄ぶりを記している。

永正二～九年（1505～1512）に成立した連歌師 宗長の句集「壁草」には柏崎を歌った句があり、連歌会が町人主催で催されていた可能性が指摘されている〔矢田1999〕。

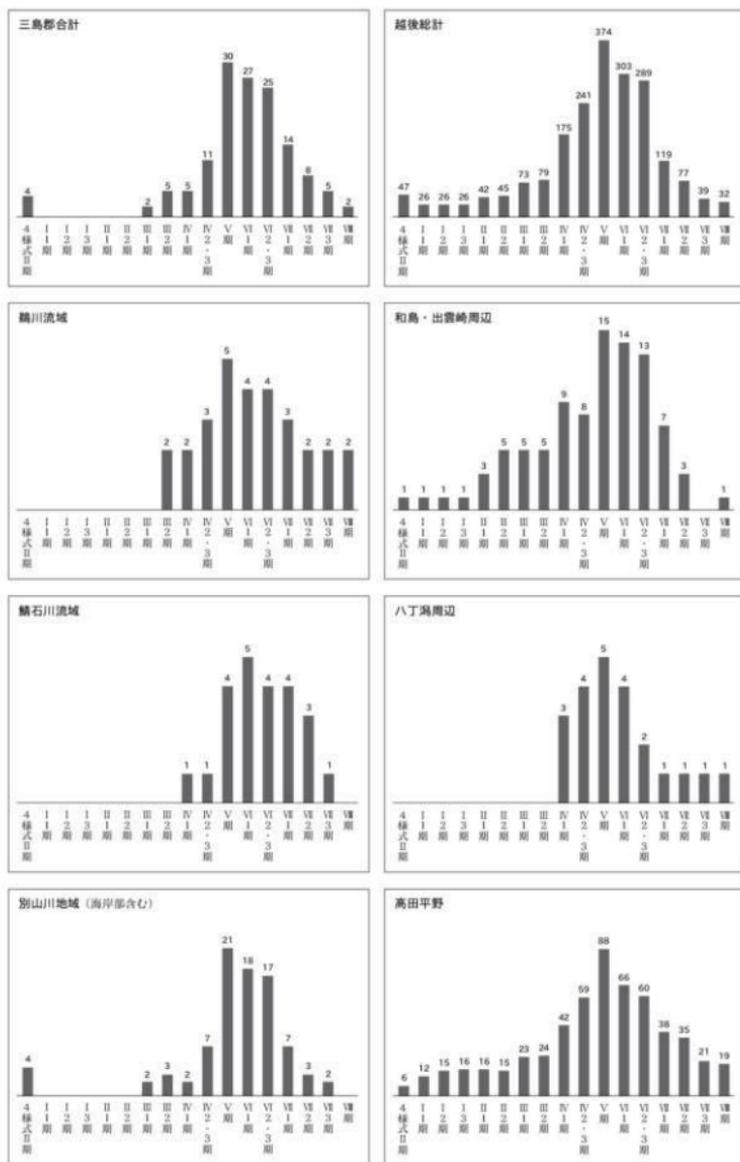
地域	遺跡名	4種式 日附	I 1期	I 2期	I 3期	II 1期	II 2期	II 3期	III 1期	III 2期	III 3期	IV 1期	IV 2期	V 期	VI 1期	VI 2期	VI 3期	VII 期	文 献
青森	1 高橋田																		金子誌④-1983
	2 月ノ町																		中島2001
	4 二軒沖																		中島誌④-2010
	12 羽田大平																		高田誌④-1985b
	18 戸口																		高田1987
	11 松川																		高田誌④-1990
	8 松田																		斎藤誌④-1998
	10 山ノ塚																		斎藤1999
	17 野瀬																		中島2001
	18 宮脇																		斎藤誌④-1998
	17 五井本上																		高田誌④-1985a
	7 沼田中宮																		吉村誌④-2005
	5 利門遺跡																		中島誌④-2010
	6 沼田																		中島誌④-2010
	3 沼野内																		長澤誌④-2007
	24 舟田																		沼田誌④-2009
	22 寺三																		沼田誌④-1982
23 江ノ下																		中野誌④-2006	
15 石塚																		高田誌④-2008	
16 乳岩																		高田1992	
13 松木A																		高田誌④-1985a	
21 鶴田内																		斎藤1995	
14 北田																		高田誌④-1985a	
9 宮ノ首																		高田誌④-1990	
鶴川中流域	28 吉敷屋																		中島2003
	25 沼田																		高田誌④-2012
	26 下河原																		伊藤誌④-2013
	29 沼田																		石川誌④-2012
	30 沼田																		高田2003
	27 池の森																		中野誌④-2001
	37 山ノ首																		中野誌④-2001
鶴川下流域	31 宮脇																		新潟市史編さん委員会1987
	32 北伊達																		平谷誌④-1998
	34 柳沢																		高橋誌④-2002
	35 鶴田																		本居
	36 沼田																		山崎誌④-2005
	33 柳沢																		石川誌④-2014

第8図 柏崎地域の主要遺跡の消長



第9圖 遺跡分布圖

(国土地理院発行 1:50,000 「柏崎」昭和63年12月28日、「岡野町」昭和60年1月30日、「柏崎」平成2年2月1日)



第 10 図 各地域の時期別遺跡数

永祿七年(1564)上杉輝虎(謙信)は、戦乱により荒廃した柏崎港を復興するため柏崎の長役荒浜屋宗九郎に制札を発し、新役の停止と町人の帰還を命じ、同九年(1566)には再度諸税の免除と町屋の再建を促している[泉史266・588]。また天正八年(1580)に上杉景勝は「御館の乱」で戦禍を受けた柏崎の諸商業の復興のために七カ条の制札を発している[泉史2279]。

「梅花無尽蔵」の記述は誇張が含まれているとしても、15世紀には柏崎が港町として発展しており、16世紀前半には連歌会が催され、16世紀後半には上杉氏にとって重要な港であったことが確認できる。

B 柏崎平野周辺の古代遺跡

古代遺跡の分布 第9図に柏崎平野周辺の古代遺跡を示した。① 柏崎平野北東の海岸部、② 別山川上・中流域、③ 別山川左岸の丘陵裾付近、④ 鯖石川・別山川の合流点付近、⑤ 鯖石川の上流域および長島川の流域、⑥ 鶴川の中・上流域、⑦ 鶴川の下流域などに遺跡分布のまとまりがみられる。上述の郷域の想定が正しいとするならば①・②・③は多岐郷、④・⑤は高家郷、⑥・⑦は三嶋郷となる。また、延喜式内社およびその論社との対応関係をみると、①は西山町石地の御嶋石部神社・石井神社(A・B)、②は西山町別山の多岐神社(C)、④は西山町二田の物部神社(D)、⑤は北条の御島石部神社・石井神社(E・F)、⑥は野田の鶴川神社(G)、⑦は新道の鶴川神社・宮場の鶴川神社・剣野町の三島神社・西本町の三島神社などがある。

古代遺跡の存続期間 第8図に柏崎地域の古代主要遺跡(発掘調査が行われた古代の遺跡、遺物が相当量採集された古代の遺跡)の存続期間を示した(時期区分は春日1999・2010など参照)。古墳時代4様式Ⅱ期(古墳時代後期)の遺跡は一定量確認できるが、古代Ⅰ・Ⅱ期(7世紀)の遺跡はほとんど確認できず、古代Ⅲ期(8世紀初頭～前葉)から古代Ⅳ期(8世紀中葉～9世紀初頭)に遺跡が微増し、古代Ⅴ期(9世紀前葉)に遺跡が急増し、古代ⅦⅠ期(10世紀初頭)には古代Ⅴ期かそれ以前に成立した遺跡の多くが廃絶し、遺跡数が大幅に減少する。

時期別遺跡数 第8図を基に、第10図に時期別の遺跡数を示した。第10図の遺跡数は、第8図と同様の作業を各地域で行い、集計した遺跡数である。鶴川流域はⅢ1期～Ⅳ2・3期(8世紀初頭～9世紀初頭)、ⅦⅠ～ⅦⅢ期(10世紀初頭～12世紀前葉)の遺跡が定量確認でき、Ⅴ期～Ⅵ2・3期(9世紀前葉～末)以外の遺跡数が少ない鯖石川流域・別山川流域とは異なった様相である。また、鯖石川流域ではⅥ1期に遺跡数のピークがあるが、別山川流域ではⅤ期に遺跡数のピークがある。

三島郡全体と越後の他地域の時期別の遺跡数を比較すると、他地域に比べⅣ2・3期(8世紀末～9世紀初頭)以前の遺跡が少ない。このことは、Ⅴ期(9世紀前葉)に遺跡が急増していると言い換えることができる。三島郡ではⅣ2・3期の遺跡数は11、Ⅴ期の遺跡数は30であり、増加率(増加量/増加前の量×100)は約170%である。越後全体、和島・出雲崎周辺、八丁潟周辺(長岡市北東部から見附市南部)、高田平野でもⅤ期は遺跡数のピークにあたるが、Ⅳ2・3期からⅤ期の増加率は25～87.5%であり、三島郡と比較すると低い。なお、三島郡(柏崎平野周辺)、和島・出雲崎周辺、八丁潟周辺はⅣ2・3期にはいずれも古志郡に属していた地域であるが、3地域におけるⅤ期以前の遺跡数の推移は大きく異なる。和島・出雲崎周辺ではⅡ1期～Ⅳ2・3期(7世紀後葉～9世紀初頭)の遺跡が一定量存在するが、八丁潟周辺ではⅢ2期(8世紀前葉)以前の遺跡が現状では確認できずⅣ1期(8世紀中葉)に遺跡が急増する。

三島郡(柏崎平野周辺)は前述のとおりⅣ2・3期以前の遺跡数は少なく、Ⅴ期(9世紀前半)以降遺跡が増加する。3地域とも異なった遺跡数の推移が確認できる。

第三章 遺 跡

1 グリッドの設定と地区名 (第 11 図)

グリッドは、南北(真北)－東西方向に沿って 50m の方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッドの呼称は西から東へアラビア数字で 1、2、3…、北から南へアルファベットの大きい文字で A、B、C…とし、組み合わせて A1、A2…、B1、B2…のように表示した。さらに大グリッド内を 10m 四方に 25 分割して中グリッドとし、さらに 2m 四方に 25 分割したものを小グリッドとした。中グリッド・小グリッドは各グリッドの北西隅を基点として、中グリッドではアルファベットの小さい文字 a～y の 25 文字、小グリッドは 1～25 のアラビア数字を付した。表記は「G3x1」「F10a5」などとなる。調査区西側に位置する I4 グリッド杭 (I4 グリッド北西隅) の座標は、X=149801.806、Y=6161.923、調査区東側に位置する F10 グリッド杭の座標は、X=149951.806、Y=6461.923 である。

箕輪遺跡の調査範囲は法線距離で約 590m と長大で、調査も複数年度にわたることから、主に調査年度によって便宜的に区分し地区名を付した。調査では地区ごとに 1 から遺構番号を付しているため、混乱を避けるためにグリッドと合わせて地区名も表記する。

2 基本層序 (第 12 図)

調査区内で最も標高の高いところは B・C 区北側の丘陵下で約 4.2m を測るが、ピット集中地点より西側では約 4.0m とやや急に低くなり、そこから西側に向かっては緩やかに傾斜している。D 区中央付近では 2.8m、G 区西側に至ると 2.3m となる。

上述した通り、箕輪遺跡の調査区は東西 590m にもおよび、A～C 区と D 区の間は約 90m の距離がある。A～C 区は丘陵下、D 区～H 区は平地(現況水田)であり、層位の様相が若干異なることから、基本層序はそれぞれで設定されている。また、G 区も独自に設定されており整理作業段階で統一することは困難であったため、そのまま掲載することとした。以下、A～C 区、D～F・H 区、G 区の順で示す。

A～C 区

- I 層：黄灰色土 (表土) 2.5Y4/1 しまり弱、粘性強
- II 層：暗灰黄色土 2.5Y5/2 しまり弱、粘性中 一部 0.5cm 前後の炭化物少量、径 0.2cm 前後の白土粒を含む。
- III 層：暗灰黄色土 2.5Y4/2 しまり中、粘性中 部分的に径 10mm 前後の炭化物を少し含む。径 2cm 前後の白土粒を含む。
- III' 層：暗灰黄色土 2.5Y4/2 しまりやや弱、粘性中
- IV 層：黒褐色土 2.5Y3/2 しまり中、粘性強 遺物包含層。
- V 層：黒褐色土 2.5Y3/2 しまり中、粘性中 VI 層土粒を含む。
- VI 層：にぶい黄色土 2.5Y6/4 しまり強、粘性中 遺構確認面。

2 基本層序

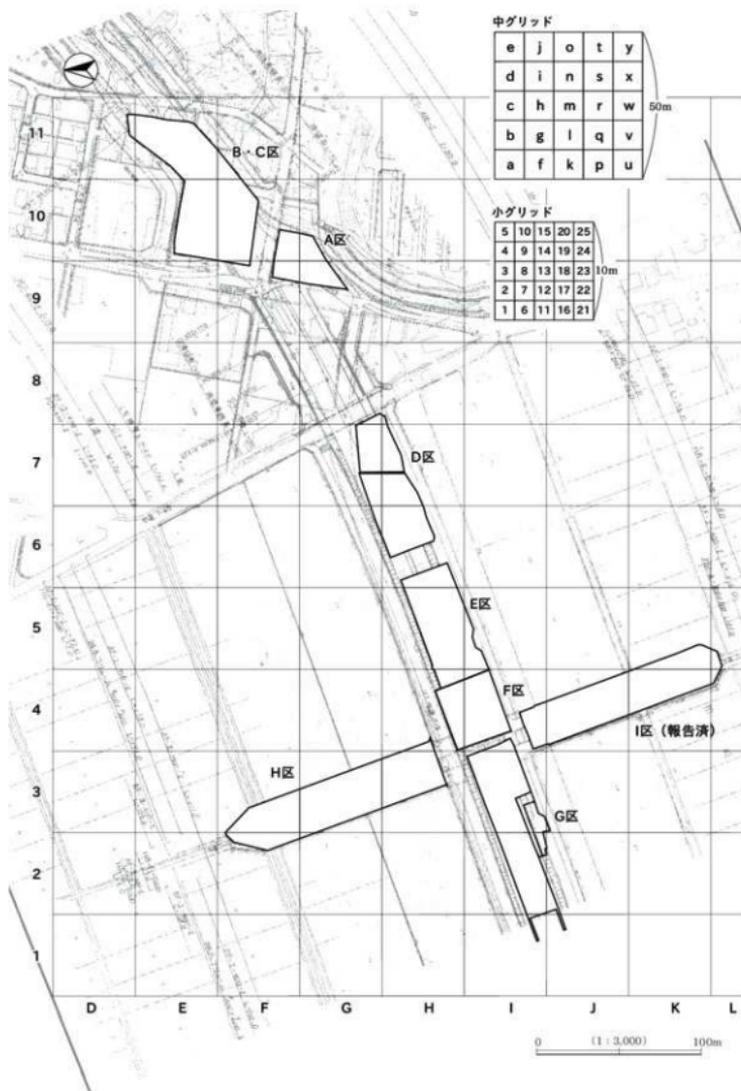
- Ⅶa層：黄褐色土 2.5Y5/4 しまり中、粘性やや弱 砂質シルトを多く含む。
Ⅶb層：黄灰色土 2.5Y5/1 しまり中、粘性やや弱 青灰色砂質シルトを多く含む。
Ⅶc層：黄灰色土 2.5Y5/1 しまり中、粘性やや弱 やや酸化している。
Ⅶd層：暗灰色砂質シルト 2.5Y5/2 しまり中、粘性やや弱
Ⅷ層：青灰色砂質シルト 5BG6/2 しまりやや強、粘性弱

D～F区・H区

- I層：黒褐色土 2.5Y3/1 しまり中、粘性やや弱 径0.5cm前後の炭化物を含む。
II層：黄灰色土 2.5Y4/1 しまり中、粘性やや弱 径0.5～1cmの炭化物を含む。
III層：黄灰色土 2.5Y4/1 しまり中、粘性中 径1～2cm前後の酸化土粒ブロック・腐植物を含む。
IV層：黒褐色土 2.5Y3/1 しまり中、粘性中 腐植物を含む。
V層：黒色土 2.5Y2/1 しまり中、粘性中 径0.5cm前後の炭化粒・腐植物を含む。E区のみⅤa, b, c層に細分される。
Ⅵ層：暗褐色土 10YR3/3 しまり中、粘性強 径1～2cmの石灰質土ブロック・Ⅶ層ブロック、径1cm前後の炭化物・腐植物を含む。古代の遺物包含層である。
Ⅵa層：にぶい黄褐色土 10YR4/3 しまり中、粘性強 径0.5～1cmの炭化粒・腐植物や流木を多く含む。古代の遺物包含層。下層からは古墳時代の遺物も出土した。D区のみ存在する層である。
Ⅶa層：灰黄色土 2.5Y5/2 しまり強 青灰色シルトを含む。遺物包含層。E区西側のみに存在する。
Ⅶb層：灰白色土 2.5Y7/1 しまり中、粘性中 腐植物を含む。遺物包含層。E区西側のみに存在する。
Ⅶc層：黄灰色土 2.5Y4/1 しまり中、粘性中 径1～2cmの炭化物を多く含む。遺物包含層。E区SD95以東のみに存在する層である。
Ⅷ層：灰色土 7.5Y5/1 しまりなし、粘性強 Ⅵ層土が多く混入し、腐植物を多く含む。遺構確認面である。
H区は削平が著しく、包含層が残る地点はごく一部である。北側（G3a, cグリッド）ではI～IV層まで残っているが、南側のH3c, dグリッドではI層の下が地山層という状況である。
A～C区のIV層がD～H区のV層に対応する可能性が高い。

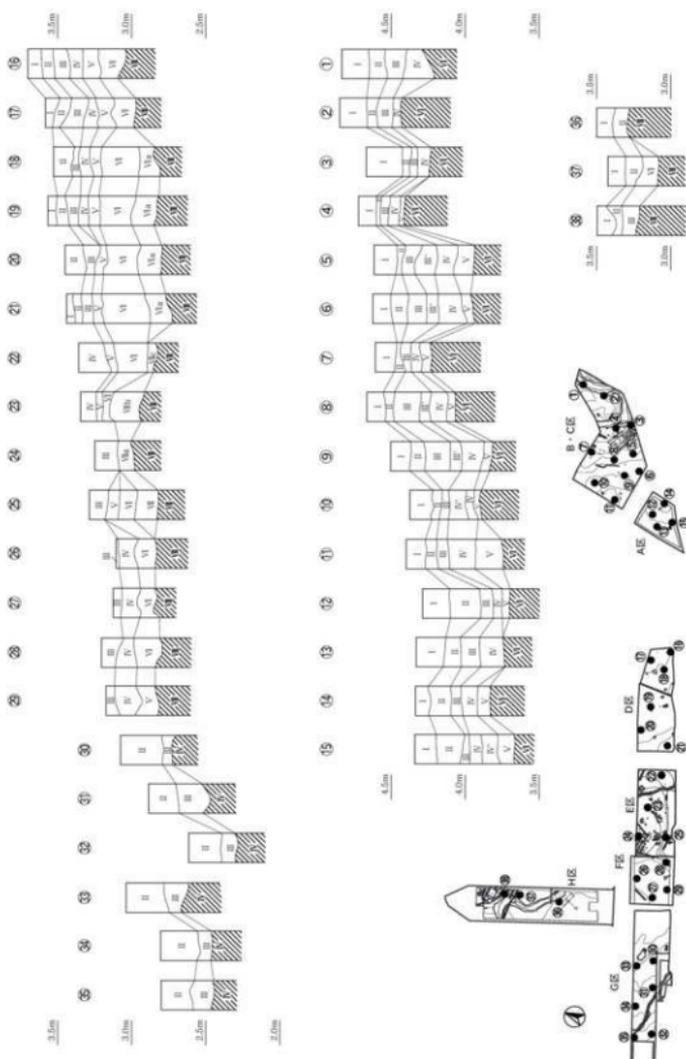
G区

- I層：黒褐色土（表土） しまり中、粘性やや弱 炭化粒を含む。
II層：褐色土（水田耕作土） しまり中、粘性中 炭化粒を少量含む。耕作による攪乱。古代・中世の遺物が出土した。
III層：暗灰褐色粘質土 III層より青み強い しまり強、粘性強 酸化粒を含む。遺物包含層である。
IV層：灰黄色粘質土 しまり強、粘性強 酸化粒多量、炭化粒を少量含む。遺構確認面である。



第11図 グリッドの設定と地区の呼称

2 基本層序



第 12 图 基本层序

第四章 遺 構

1 概 要

調査区北側(H区)と東側(B・C区)では蛇行する自然流路の岸辺に掘立柱建物を6棟検出した。調査区中央付近(E区)で掘立柱建物を9棟検出したほかは、土坑や溝・ピットなどが散在する様相となっている。出土遺物から、調査区北側の流路と建物は8世紀後半～9世紀前半、中央付近は9世紀前半、東側の流路は9世紀後半～12世紀前半頃と時期が分かれ、遺跡の変遷がうかがえる。ただし、自然流路以外の遺構では全体的に遺物の出土は少なく、時期が特定できないものも多い。

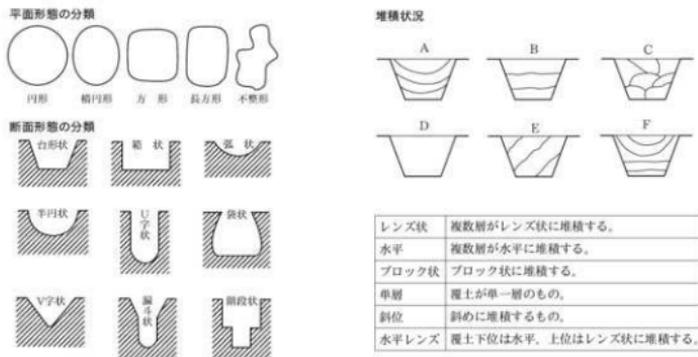
2 記載の方針

遺構類別の略号は、掘立柱建物=SB、井戸=SE、土坑=SK、溝=SD、ピット=Pit(B、C区)・P(それ以外の地区)、杭列=SA、性格不明遺構=SXとした。

遺構番号は、調査年度により付け方が異なる。B・C区では、ピットは小グリッドごとに1から番号が付され、SK・SXなどピット以外の遺構は種別ごとに1から順に付されている。このためピットについてはグリッド名を合わせて表記する。それ以外の地区は、種別の関係なく1から通し番号となっている。ただし掘立柱建物については、基本的には1から付されている。なお、いずれの地区においても欠番などが生じているため、遺構の番号数=遺構の数ではないことに留意いただきたい。

土層の記載については、複数年度にわたる調査で多くの調査員が携わっていることや、調査範囲が複数に分割されているなどの理由から、統一された記載ではない可能性がある。

本文の記載は、遺構番号の重複があることから、種別ごとではなく地区ごとに行う。形態・規模など基礎的な項目は観察表に記し、それ以外の情報を中心に記述する。本文・観察表における平面形・断面形の



第13図 遺構の平面・断面形態、堆積状況の分類(加藤1999・荒川ら2004を改変)

分類は〔加藤 1999〕を、覆土堆積状況の分類は〔荒川ほか 2004〕に準拠する（第 13 図）。遺構の切り合い関係は、「新>旧」のように示した。

3 各 説

A A 区（図版 10・113）

A 区では土坑が 2 基検出されたのみである。SK1・2 は接しているが切り合いは不明である。どちらの土坑も平面形は不整形で、底面の凹凸が著しい。SK1 の覆土には炭化物が認められないが、SK2 の下層は炭化物を多く含み、底面から自然木が出土した。

B B・C 区

掘立柱建物 2 棟、井戸 4 基、土坑 11 基、溝 1 条、ピット 89 基、性格不明遺構 4 基、杭 3 本、自然流路が検出された。調査区の東側を流路が蛇行し、流路の西側に掘立柱建物・井戸などの遺構が並ぶ。掘立柱建物と井戸・土坑などが重複するが、遺物の大多数は流路からの出土であり、新旧関係や帰属時期を特定できない遺構が多い。

1) 掘立柱建物（図版 3～5・105・113・114）

SB1 は E10・11、F10 グリッドに位置する。規模は桁行 5 間、梁間 2 間の身舎に、2 面廂が付くと推測できるが、廂の間隔は身舎よりも狭く 6 間となる。身舎の中央に中柱が 2 基並ぶ。面積は 120.8m²で、桁行方向は N-53°-W である。柱根が残っている柱穴を見ると、半打込式のものが多いようである。出土遺物はわずかで、2 基から土師器が少量出土したのみであることから、帰属時期の特定に至らなかった。

SB1 から南側に 1.1m のところには、桁行方向と平行してピットが 5 基並んでおり、SA1 とした。いずれのピットにも柱根は残存していない。調査時に断面図は作成されていないが、記録から深さ 10～20cm 程度と推測する。

SB2 は、SB1 の東側に近接しており、F11 グリッドに位置する。整理段階で掘立柱建物の可能性が高いと判断したものである。SB1 とは桁行方向が異なり、N-87°-W である。規模は桁行 3 間、梁間 2 間の身舎の北側と東側に廂が付くものと推測される。身舎と廂では柱間隔が一致しない。建物全体の規模は 8.3m × 5.5m で面積は 45.7m² である。柱根の残るピットはない。調査時に断面図が作成されていないものがほとんどであるため深さや底面標高は不明である。出土遺物は、2 基からわずかに出土したのみであり、帰属時期は特定できない。

2) 井 戸（図版 3・6・114・115）

SE6 は E10x20 グリッドに位置し、SB1 と重複している。断面形は U 字状で、上部はやや広がる。3・5 層は地山の崩落土である。10 世紀後半から 11 世紀前葉の土師器有台碗・小皿が出土している。発掘調査段階では 5 層までとされていたが、完掘後の断ち割り写真から、5 層の下にさらに 2 層堆積していた可能性が高いと判断した。直下の層（6 層）は、灰色土（粘土か）に炭化物を青灰色土ブロックが多く含まれる層で、ブロックは層上部に多く見受けられる。最下層（7 層）は地山の青灰色粘土よりややくすんだ色調で、底面には若干濃い色調の薄層が入るように見える。断面図は写真から推測し追加したが、土層

説明を行うのは不可能であるため空欄とした。

SE7はF10e20・25グリッド、SB1から4mほど南に位置している。断面形は漏斗状である。1～4層はVI層ブロックを含む層で、人為的な埋土と考えられる。5層は地山の崩落土、6～11層は腐植物を含む粘土層である。7または8層から土師器無台椀が正位で出土した(図版114・報告No.7)。土師器小皿も出土しており、いずれも11世紀前半から後半に位置づけられる。そのほか、木製品(曲物側板・円形板)も出土している。

SE10はE10t20グリッド、SB1と流路2の間に位置しており、SB1からは4mほど北に位置する。断面形は台形状で、やや上部が球形に開くかたちである。SE7同様、上部の層は地山ブロックが混入し、間に炭化物の薄層が2層入る。遺物は出土していない。

SE12はE10y5グリッド、SB1の北側に近接している。断面形はU字状で上部は一部階段状になっている。4・6層は地山の崩落土である。遺物は土師器無台椀・小皿、珠洲焼甕が出土している。

SE16は、F11a19グリッドに位置し、SB2と重複する。断面形は漏斗状であるが、下部はえぐられている。覆土は黒褐色土を主体とし、1層は包含層のIV層が入り込んでいる。6層からは板状や杭状の木製品が出土している。そのほか、土師器無台椀が出土した。SB2のF11a19-Pit4を切っており、ピットよりも新しい。覆土は下層ほど濃い色調を呈し、グラデーション状となっている。

発掘調査段階では6層までと認識されていたが、完掘後の断ち割り写真から、6層の下にさらに2層堆積していたと判断した。7層は黒色土(粘土か)にかなり大きな地山ブロックが混入していると推測でき、最下層(8層)は地山と7層土が混ざり合ったような、くすんだ色調に見える。SE6同様、断面図のみ追加を行った。

3) 土坑・ピット・性格不明遺構(図版3・6・115・116)

土坑は11基検出された。数が少ないこともあるが、覆土や堆積の様相はすべて異なる。SK5は調査区北西側の端に位置する。その覆土はすべて包含層で炭化物を含まず、底面は凹凸が著しく、立ち上がりも不明瞭であることから、遺構ではない可能性もある。SK8はひょうたん形を呈し、掘り込みが浅い皿状の土坑である。北側から土器がまとも出土した。SK13・SK15はVI層土粒を含む層が主体である。SK15はPitに切られている。SK17は調査区北端に単独で存在し、黒色粘土層が主体を占める。最下層は腐植土を含み、3・4層は地山ブロックを含む層である。井戸である可能性もある。

ピットは掘立柱建物のあるE10y、E11u、F10e、F11a・bグリッドに集中している。建物複数存在する可能性があると考え検討を行ったが、整理作業段階で1棟を追加したのみである。直径20～30cmで円形を呈するものが大半であるが、覆土は類型化できず、遺物の出土もわずかである。

SX1・SX2は、SK5と同様の理由により遺構でない可能性もある。ただし、SX2については溝2条ととらえることもできるかもしれない。SX4は、流路2の岸辺に位置している。流路側では遺構の立ち上がりがなく、縦断面を見ると階段状になっている。流路に近接することもあり、階段状遺構であった可能性も考えられる。SX1からは土師器無台椀が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

4) 自然流路(図版7～9・116～119)

流路1は、調査区の北東側、E11d～nグリッドにかけて、南北に走る川跡である。南側、北側ともに調査区外へ延びており、南側は規模・堆積状況や遺物の年代から流路2につながると推定できる。つ

まり流路1・2は同一流路である可能性が高いということであるが、調査時の記載通り、便宜上流路1・2と呼ぶこととする。幅は5.3～8.1m、深さは1.6mであり、南側がやや深くなっている。覆土は8層に分けられ、6e層下端が、遺跡が形成された当時(9世紀後半頃)の川底であり、7・8層はそれ以前の時期の河川堆積層である。北側(D11w・x)の下層ではえぐられた痕跡が確認できる。

西側(E11c・d)川岸から川底にかけての堆積土からは遺物が多く出土し、特に5e層～5e層では土器や木製品、自然木の集中域が認められた。遺物の遺存状態は良好で、略完形の土師器無台碗などが数個重なって出土した例も多く見られることから、完形品を一括廃棄したものと推測される。種類は土師器碗・皿、須恵器杯・黒色土器碗など食膳具が圧倒的に多く、その中でも土師器無台碗が多数を占め、完形品も多い。また墨書土器が多く認められる。また、緑釉陶器が4個体、完形に近い状態で復元できたことが特筆される。

木製品も多数出土したが、挽物盤・曲物といった容器、斎串や形代などの祭祀具が多いのが特徴的である。それぞれ20点以上出土している。自然木は、遺物に比して川の中央部分に多く見られ、川の流れに沿うものが大半である。直交する太い材も検出したが、塚状遺構は認められなかった。自然木の集中域は、流路南側と北側の調査区縁辺部でも検出された。

流路2は、調査区の東側、E11k～wグリッドにかけて、東西方向に蛇行する川跡である。東側、西側ともに調査区外へ延びており、前述したように流路1とつながる可能性が高い。幅は5.0～11.4m、深さは1.9mで、中央部分が最も深い。蛇行部分の南側にはテラス状の平坦面があり、隣接して階段状の遺構が認められる。階段は5段あり、⁷段上寸法(1段の高さ)が20～42cm、踏面の奥行は20cm弱と53cm前後の2つがあるが、人が登り降りするにはかなり急傾斜である印象を受ける。覆土は流路1と同様の堆積を示すことから、層位を統一した。8層に分けられる。

流路2でも、テラス状の平坦面から川底にかけて、小規模ながら遺物の集中域が認められ、土器や木製品が数多く出土した。流路1同様、土器は土師器碗を中心に食膳具が多数を占め、木製品では挽物盤・曲物などの容器が多い。ただし黒色土器においては、流路1では無台碗であったのに対し流路2では有台皿が多いこと、祭祀具がほとんど認められないなど、流路1とは異なる点も見受けられる。土器と木製品では出土層位のピークに違いが見られ、土器では5e層であるのに対し木製品は5c層である。

C D 区 (図版10・119)

検出されたのは土坑5基、ピット5基のみである。よって記載は種別の関係なくまとめて行う。F区・G区も同様とする。

SK15の西側は明瞭な掘り込みが認められるが、東側は不明瞭で深さはなく、底面は凹凸が著しい。遺物は出土しなかった。SK16は検出面から5cm程掘り下げたところで炭化物の広がりが確認された。土器の薄片が二十点ほど混在していたが、弥生時代後期の釜と判断できる。掘り込みは不明瞭であり、覆土は自然堆積である。SK17・18もSK16同様、掘り込みは不明瞭で覆土は自然堆積である。遺物は出土していない。SK22は検出の段階から正円形を呈していた。20cm程掘り下げた時点で、土坑側面に沿うかたちで木枠の一部を検出し、中央にはタケ類と思われる材が束の状態出土した。枠も束と同じ材であることから、束は、枠を撤去した後に廃棄されたものかもしれない。調査所見によると、覆土の様相から近現代の可能性もあるということである。

D E 区

掘立柱建物9棟、土坑10基、溝11条、ビット34基、性格不明遺構5基、杭17本（杭列9本含む）が検出された。調査区の西端に掘立柱建物が3棟重複し、近接して2棟存在するなど遺構が集中している。調査区東側には調査区を縦断する溝が走り、その溝に近接して掘立柱建物1棟と杭列が見つかった。遺構が集中する部分の周辺には掘り込みの浅い溝や性格不明遺構が散在している。

1) 掘 立 柱 建 物 (図版 14 ~ 17・119 ~ 124)

SB1・2・3は調査区西端のH4t・H5pグリッドに位置し、3棟が重複している。3棟とも北側は調査区外へ延びる可能性があり規模は断定できないが、SB1は桁行5間、梁間2間以上、SB2は桁行4間、梁間3間以上、SB3は桁行3間、梁間2間以上で、SB1とSB3は総柱建物と考えられる。SB2とSB3は切り合い関係が認められ、P94はSB3-P98に、P87はP83に切られることからSB3の方が新しいと言える。SB1とは直接の切り合いが認められないため、新旧関係は不明である。柱の据え方は、SB1では打込式のものが4基見られるが、SB2・SB3では認められない。一方、SB2では南側の柱穴3か所で礎盤が検出された。出土遺物は土師器小片が大半で、このほかに土師器無台碗・釜、須恵器無台杯（胎土B群）が認められる程度である。

SB4はH5u・vグリッドに位置する総柱建物である。桁行2間、梁間2間である。北西側の柱筋は直線的でなく、張り出したかたちになっている。P39は開渠掘削時に検出したもので、認識できたのは柱穴底部のみであるが、柱間隔が等しいこと、底面標高がほぼ同じレベルであることからSB4の柱穴とした。なお、P40はSX2-2の下から検出されたため、SX2-2より古い。

SB5はSB4の南東側に近接しており、桁行方向も近い。暗渠排水溝が通るため全容は不明であるが、桁行2間、梁間2間の総柱建物と推測する。残存する5つの柱穴には柱根がすべて残っており、うち4本の柱が掘立式である。P145は柱筋の延長上にあり、この建物と関連するビットの可能性もある。

SB6は、SB4・5の南4mほどに位置し、一部は調査区外に延びる。桁行方向がSB5とほぼ同じであり、規模も同じである。ただし柱はすべて調査段階では杭とされていたもので、建物との認識がなかったことから、記録類が不足しており不明な点もある。

SB7はH5p・uグリッドに位置し、桁行2間、梁間2間を測る。柱穴が2か所検出されていないが、その柱筋が直線的であったこと、ほかのビットには柱根が残存していることから建物と判断した。

SB8はSD95の東側に隣接している。SB6同様、調査段階では杭列と認識されていた。P119①～③・⑤と杭119④では、底面標高が異なり柱根の加工も異なることから、杭119④は単独の遺構と判断し、残りの杭4本は掘立柱建物の可能性があると考えた。柱根は直径10cmほどであり、桁行1間、梁間1間と規模も小さいため、掘立柱建物というよりも簡易的な構造物かもしれない。

SB117は、1棟のみ調査区北東部で検出された。H5j・n・oグリッドに位置し、桁行2間、梁間2間を測る。他の建物とは桁行方向が異なり、N-22°-Eを示す。柱の据え方はすべて掘立式で、径60cm前後の大きなビットが配される。埋土は地山との区別が難しい。棟持柱がやや張り出している（近接棟持式）。柱根はすべてのビットで残存しているが、木取りは丸木1点、半割1点、分割6点と一律ではない。柱根はすべて北東ないし東方向に傾いている（図版17・123・124）。発掘調査では倉庫の可能性が高いと考え、中柱の検出に努めたが検出されなかった。

SB4～8、SB117を構成するピットから遺物は出土していない。

SB1・2・3は桁行方向をほぼ同じくすること、柱穴が重複していることから、近い時期に建て替えられたものと推測できる。SB4・5・6・7は桁行方向が近似しており、ある程度間隔を置いていることから、同時期に存在した可能性が高い。SB117も、SB4～7と桁行方向こそ異なるが、これらは皆正方形に近い建物であり、建物の方向自体は同じとも言えることから、同時期の可能性もあると考える。

2) 土坑・ピット (図版 11～13・17・124・125)

SK2は、検出した時点では長径5mほどの不整形を呈していたが、断面から3つの遺構に分かれることが判明した。楕円形を呈する北側の遺構をSK2-1、不整形を呈する南側の遺構をSK2-2とした。また東側については、調査時SK2の下からP28が検出されたと認識していたが、断面図がP28と重なること、SK2は東側まで延びていないことが確認できたため、新旧関係はないと判断し平面図および断面図を修正した。P40については、SK2-2の下から検出されたことから、SK2-2より古い。よってSB4はSK2-2よりも古いことになる。

SK7の2層からは土師器無台椀が2個体、正位で出土した。土坑の北側に位置しており、半載後完掘する段階で出土した。同じ層からは土師器片数点が出土しており、1層からも土師器片十数点と須恵器片1点が出土している。

SK34はSB4の西側に位置する土坑である。覆土は4層に分かれ、3・4層は自然堆積層と思われるが、2層は炭化物が多く含まれ、薄く層状に見えるところもある。出土遺物はない。

SK73は検出した時点では空豆状であったが、半載し発掘したところさらに南側へ掘り進めることができると判明した。よって完掘時の形状が半載時と異なっている。SK74・76はともに直径約60cm、深さ約10cmで、遺物が含まれない。遺物は出土しなかった。

SK102は長径約380cmを測る大きな土坑である。覆土は7層に分けられるが、2層は炭化物を多量に含む層で、遺物が多く出土した。遺物は土師器片で、焼けたような痕跡が認められる。土師器は古墳時代前期に帰属するものである。

P11-51のラインは、SB4の柱筋と平行しており、SB4と関連する遺構の可能性もある。P30はSB7と重複する位置にある。底面近くから古墳時代前期の器台が1点出土した。そのほかの遺物は出土していない。P50・57・59・67・68・93は柱根が残存しているが、建物などと関連付けることができなかった。ただ、P67・68・69の配置がL字状であることから、掘立柱建物の柱穴であった可能性も考えられる。

P99・100はSD95の底面近くにおいて、岸の両側に向かい合った状態で検出されたことから、SD95よりも古い遺構である。覆土はVII層を埋め戻していることから、地山との判別が非常に困難であったが、わずかな炭化物を指標とした。丸木の外側のみ残した状態の、断面弧状の木製品が出土した。丸木の内部が劣化して外側のみが残ったと当初は予測したが、先端が平らに加工されていることから、この状態が完成形であることがわかった。2基が向かい合っていることから、SD95に関する遺構であった可能性が高い。その他の出土遺物は認められない。

P132は柱根の残るピットである。覆土、柱根の傾きともSB117のピットと近似している。調査区東端に位置することから、調査区外にSB117同様の掘立柱建物が存在する可能性も考えられる。

SA116はSB117の一部重複しているが、直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。4本ずつ2列をなしている。杭は8本とも北東から南西方向に倒れた状態で検出された。杭①より杭④、杭⑤より

杭⑧のほうが深く打ち込まれており、底面標高が低い。杭の間隔は55～73cm程、杭列間は2mである。調査段階では杭列としていたが、掘立柱建物である可能性も否定できない。

3) 溝・性格不明遺構 (図版 11・13・17・125)

SD8・89・110は幅40～50cm前後・深さ10～16cm程で、近似している。SD8は掘立柱建物・ピットの東側に位置し、覆土上面から弥生時代中期の緑色凝灰岩製管玉が1点出土した(図版64・1184)。SD89は調査区西端に位置し、両端は調査区外へ延びる。P98(SB3)・P94(SB2)と重複しており、それらよりも新しいと記録されているが、出土物を見るといずれの溝からも古墳時代前期の土師器が認められ、矛盾が生じている。

SD12・SD45は、調査区中央部分で検出された。南側は暗渠が通っており、暗渠の南側ではどちらの溝も確認できなかった。SD12の覆土は2層に分けられ、2層の灰白色粘土層には径5～15mmの石灰粒が多く含まれることが特徴的である。遺物はどちらの層からも出土し、120点程度である。古代の遺物が主体であるが、古墳時代前期の高杯脚部などが数点出土している。

SD78のみVI層上面で検出されたことから、ほかの遺構よりも帰属時期は新しい可能性も考えられるが、出土遺物からは時期差が見い出せない。

SD95は、調査区を南北に縦断する溝で、調査区外に延びる。覆土は2層に分けられ、遺物は主に2層から出土している。出土遺物は古墳時代前期の土師器を主体として須恵器・土錘・木製品(木錘・盤・椀・杭)・種子などである。土師器は細片が多いが、釜と小型器台が認められた。覆土は自然堆積と判断できることから、自然流路であろう。底面に傾斜は見られないため、流れの方向は不明である。

SX4は、検出した段階で明らかにP1-11に切られていた。覆土は2層に分かれ、1層には炭化物が多く含まれる。古墳時代前期の土師器片が少量出土した。

E F 区 (図版 11・125)

溝3条とビット5基のみ検出した。溝はいずれも幅40cm前後、深さ15cm前後の浅いもので、覆土は単層である。SD1は南側を試掘トレンチで切られており、全長は不明である。珠洲焼片や近世陶磁器の破片が出土している。SD8・11では遺物は出土しなかった。ビットは5基とも調査区南東隅で検出された。どのビットの覆土も2層に分けられ、同じ堆積を示す。P6以外は底面に凹凸が見られる。P4のみ9世紀の土師器長釜や鍋が出土している。

F G 区 (図版 18・125・126)

井戸1基、土坑3基、溝1条、ビット1基、性格不明遺構2基が検出されたのみである。

SE4は、SK6・7の東隣に位置する。1・2層はごくわずかに炭化物が含まれるのみで地山と酷似しており、検出は困難であった。断面形はU字状を呈するが上部のみわずかに開くかたちである。15層は黒い腐植土で、黒色の植物茎のようなものが隙間なく敷き詰められていた。黒色であるが炭化した様子は認められなかった。この植物は樹



第14図 G区SE4から出土した編物
(底面から撮影)

種同定を行っていないが「埋めてよし」の草である可能性がある。13～16層は自然堆積層と考えられるが、1～11層は地山ブロックが多く混入するなど、人為的な埋土と判断できる。12層は崩落土である。13層から未加工のひょうたんが見つかり、その下からおそらくタケ材で編まれたカゴがほぼ完全な形で出土した(第14図)。写真から編み方は六つ目編みと判断できる。そのほか土師器・須恵器が出土している。

SX2・SK3もSE4同様、覆土が地山土に酷似しているため判別が難しく、2度目の精査で検出された。当初ひとつの遺構と認識していたが、平面形が不自然であったため、複数の遺構が重複していると考え調査を進め、切り合いを確認した。SK3がSX2より新しい。SK3は不整形で底面も凹凸著しく、風倒木の可能性もあると考えたが、覆土は自然堆積であることから、遺構と判断した。2・3層から9世紀前半に属する土師器(長釜・小釜・鍋)と須恵器(無台杯)が出土している。SX2は長径が10mに達するが、明瞭な掘り込みが認められないことから住居跡ではないと考える。遺物はSK3同様、土師器と須恵器が2層から多く出土した。比較的大きな破片が認められる。

SK6・7はSE4の西側で近接して検出された。長軸で半截したところ2基の土坑が重複していることが判明した。SK6がSK7よりも新しい。どちらも掘り込みは浅く、遺物の出土は少ない。覆土がSE4と近似していることから、同時期と考える。

SD1は調査区西側を斜めに走っており、両端は調査区外へ延びる。検出は容易であった。覆土は自然堆積で、自然流路と判断できる。遺物は4層から出土した。特に、調査区北端の12pグリッドから土師器が少量まとまって出土しているが、細片が多い。

SX8は、1999年調査区で検出された遺構で、SD1とつながるように検出されたことからSD1として調査を行ったが、完掘後に1998年度の図面と合わせたところ、12x・yグリッドにおいては別の遺構であると判断した。SD1との新旧関係は不明である。

E区の遺構出土遺物は概ね9世紀前半のものであることから、帰属時期もほぼ同様と考えられる。

G H 区

H区は調査区中央を市道が縦断していたが、試掘確認調査ではほとんど遺構・遺物が検出されなかったことから、市道両側部分を先行調査し、その結果により市道の取り扱いを決定することとして調査を進めた。しかし、市道の東側で掘立柱建物が検出され、さらに市道をまたぐようにして大きく蛇行する流路が検出されたことから、市道の西側部分を調査した後に切り回しの市道を設置し、市道を撤去することになった。市道の撤去は農繁期後に行われ、その後発掘調査を行ったという経緯がある。さらに用水路がG3q～rグリッドにかけて東西に横切っていることもあり、H区の調査は小面積ごとに行われている。

1) 掘立柱建物・杭列(図版19～23・126～128)

H区からは4棟検出したが、そのうち3棟は三方を浅い溝状遺構(SD38・50・17)に囲まれている。

SB1は、F3v・wグリッドに位置する。東側は調査区外に延びることから規模は断定できない。桁行4間以上、梁間1間であるが、梁間の間隔が6mと広すぎることから、柱穴を検出できなかった可能性もある。P4・P27は側柱からの距離がほぼ等しく、中柱になる可能性もある。ただしP4についてはSB2との関連する可能性も考えられるため断定はできない。掘形はすべて方形または長方形を呈し、柱の据え方はすべて掘立式であることなど、SB2・3とは異なる様相を示す。SB2・3と重複しているが、柱穴の切り合いは認められない。出土遺物はSB1～3とも土師器の釜が主体であることから、詳細な時

期特定は難しい。

SB2は、F3q・vグリッドに位置する。桁行3間、梁間2間で、北東隅のピットは調査区外である。調査段階ではP31はSB2に含まれていなかったが、柱筋上にありP41に相対する位置にあることから、P41とともに棟持柱である可能性が高いと考えた。SB1とは異なり柱根の残存率が低く、2か所のみである。SB3とは桁行方向も一致し、ほぼ同位置に建て替えられたと思われるが、柱穴の切り合いが見られないことから新旧関係は不明である。

P3・4はそれぞれSB3・SB2の桁行方向の延長線上にあり、何らかの関連があった可能性も否定できないが、さらにP4についてはSB1の中柱であった可能性も指摘できる。

SB3は、F3q・vグリッドに位置する。桁行3間、梁間2間で、側柱の柱筋が平行しない。SB2同様、北東隅のピットは調査区外である。棟持柱はSB2と共通であると推測している。SB3とは桁行方向も一致し、ほぼ同位置に建て替えられたと思われるが、柱穴の切り合いが見られないことから新旧関係は不明である。

SB4・SA1は、上述の3棟とは離れ、流路の対岸(G3x・y、H3dグリッド)に位置する。桁行1間、梁間1間で、桁行の間隔が非常に大きい。柱の据え方は4本とも掘立式で、柱根の直径10～15cmである。P23とP53については、発掘調査時の排水溝掘削により、上半が破壊されてしまっている。

南側の柱筋と平行してSA1を検出した。SA1の杭間隔は2.1～2.2mで、P53はそれらと間隔を同じくすることから、そちらに連なる可能性も否定できない。SA1のP63・64・65の平面形は円形、深さは11～25cmで、すべてのピットに柱根が残り、直径は10cm前後である。

2) 土坑・ピット (図版19・20・128)

SK12はSB1の内側に位置しているが、新旧関係は不明である。調査区外に延びており、楕円形を呈する。1層から土師器片が出土している。

SK40・76は調査区北端で2基並んでいるが、調査の都合上、別々に検出した。SK40は、検出段階では小土坑と考えられていたが、調査を進めるにつれ規模が拡大することが判明した。覆土は炭化物がわずかに認められるのみで、検出は困難であった。掘り込みは浅く、遺物は、磨滅した土師器片数点のみである。SK76は最後に調査を行った北側市道部分から検出した。平面形はほぼ円形を呈するが、内側に3か所くぼみを有する。底面近くからは礎盤状の木製品が出土し、覆土中から多くの土器が出土した。土器の年代は9世紀前半に位置づけられる。

SK67はSD17覆土中で検出した。当初はSD17の遺物集中部分との認識で調査を進めていたことから、図面は本来の掘り込みよりも浅い。覆土は炭化物・焼土を多量に含み、多くの土器が出土した。SK72はSD17の底面で検出されたが、覆土は炭化物がわずかに認められる程度であった。遺物は土師器数点が出土したのみである。

3) 溝・自然流路 (図版20・21・24～26・128～132)

SD17は流路14の北側で北西-南東方向に延びる溝である。調査当初、掘立柱建物の雨落ち溝と認識していたが、その後調査を行った市道下へ延びていることが判明し、雨落ち溝ではないと判断した。土器片が少量出土している。先述した通り、SK67・72よりも新しい。調査所見によると、G3cグリッドにおいて流路14-2を切っておりSD17が新しいとの記録があるが、断面図等では残っており検証できない。

SD15・16・51 は東西方向に延びる溝であり、一連のものと考えられる。流路 14 が埋没した後、構築されたものである。掘り込みは浅く深さは 4cm 程である。SD18 も流路 14 を切っている。南東側は調査区外に延び、北西側は用水路があるため中断された。用水路の北側では検出できなかったことから、この付近で取束するものと考えられる。

流路 14 は G3～F3 グリッドにかけて、調査区の中央を南北に蛇行する川跡である。南側から北側に向かって流れていたと想像できるが、南北端ともに調査区外へ延びている。幅は 4.3～9.4m、深さは 1.3m である。

G3b グリッド南側では、岸の両側と中央部分に階段状遺構が検出された。径 8cm 程度の棒状や板状、弓状の木を流路と平行に置き、その両端に短い棒材を直角に設置している。現在登山道で見られるような施設である。右岸が最も段数が多く、3 段以上ある。また、下流側の調査区端 (G3a6) では、流れに直交する方向で長い棒状材が 3 本出土した。2 本が平行した状態で、それらより 10cm 下からもう 1 本が出土した。長さ 200cm 程、直径は 8cm 前後の丸木で、表面は滑らかである。木材には明瞭な加工痕が認められなかったため推測に過ぎないが、堰状遺構などの一部の可能性もあるかもしれない。

覆土は多いところで 36 層に分けられ、14～16 層下層が、遺跡が形成された当時 (8 世紀後半頃) の川底である。それより下層はそれ以前の河川堆積層で、遺物を含まない。本来は幅約 10～16m である (図版 19 破線部分)。覆土は大きく 3 つに分けられ、便宜的に上層・中層・下層とした。下層からは土器・木製品が多量に出土しており、下流右岸 (蛇行部の外側) に遺物の集中する部分が 3 か所認められた。ほとんど磨滅しておらず、完形に近い状態のものもあることから、川岸から投棄されたものと推定できる。ただし B・C 区の流路とは異なり食器類の一括廃棄は認められず、むしろ、釜などの土器煮炊具が多い。木製品は曲物、挽物盤などの容器類が多く、190 点ほど出土している。そのほかに斎串や箸、鎌、田下駄などが認められるが、特筆されるものとしては、桶 (?)・黒漆塗りの壺錠、木筒が挙げられる。ただし 1 号～3 号木筒は中層からの出土である (木筒の内容については第 VIII 章 5 参照)。

また、下層からは長さ 1～7m 以上の大木が多く出土した。その一部は、根が張った状態から倒れたと推測できるもので、この木の下から遺物が出土していることから、木は遺物が流路に堆積した後倒れて埋没したと判断できる。また、倒木の下からは 6 号木筒が出土し、近接して須恵器の杯蓋が 2 個体、正位で出土した。流路の岸にはそのような木々が茂っていたということがあり、現在とは異なる風景が広がっていたことが想像される。また、端面に加工痕の認められるものが 2 点出土した。1 点は長さ約 7.3m、直径約 50cm を測るもので、遺跡形成以前に堆積した層から出土した。前述したように、これらの層からは土器などの遺物は全く出土していない。

G3I10 グリッド、右岸側の 12 層 (SPA-A') からは礫の集中域を検出した (図版 21・132)。範囲は約 60×40cm で、16 点確認された。いずれの個体も被熱し赤変、あるいはススが付着している。礫のレベルはほぼ水平で、掘り込みは認められなかった。

G3c グリッドの支流は、幅 275～370cm、深さは 60cm で、覆土は 4 層に分けられる。遺物は 3 層から多く出土した。調査段階では流路 14 とは別の遺構との認識があったが、出土土器から時期差は認められない。出土遺物は土器のみである。

第V章 遺 物

1 概 要

遺物には土器・陶磁器、土製品、石器・石製品、金属製品、木製品がある。出土量は土器・陶磁器、木製品が多く土製品、石器・石製品、金属製品の量は少ない。土器・陶磁器 → 土製品 → 石器・石製品 → 金属製品 → 木製品の順に報告する。

2 土器・陶磁器

土器・陶磁器は平箱(内法54cm×幅34cm×深10cm)換算で284箱出土した(整理後の箱数)。古代の土器・陶器が大半を占めるが、古墳時代の土器、中世の土器・陶磁器が定量有り、縄文時代・弥生時代の土器も少量確認できる。地区別ではB・C区、H区が多く、他の地区は少ない。以下では土器・陶磁器の分類を記した後、図版27～62に添って地区毎に記述する。

A 分 類

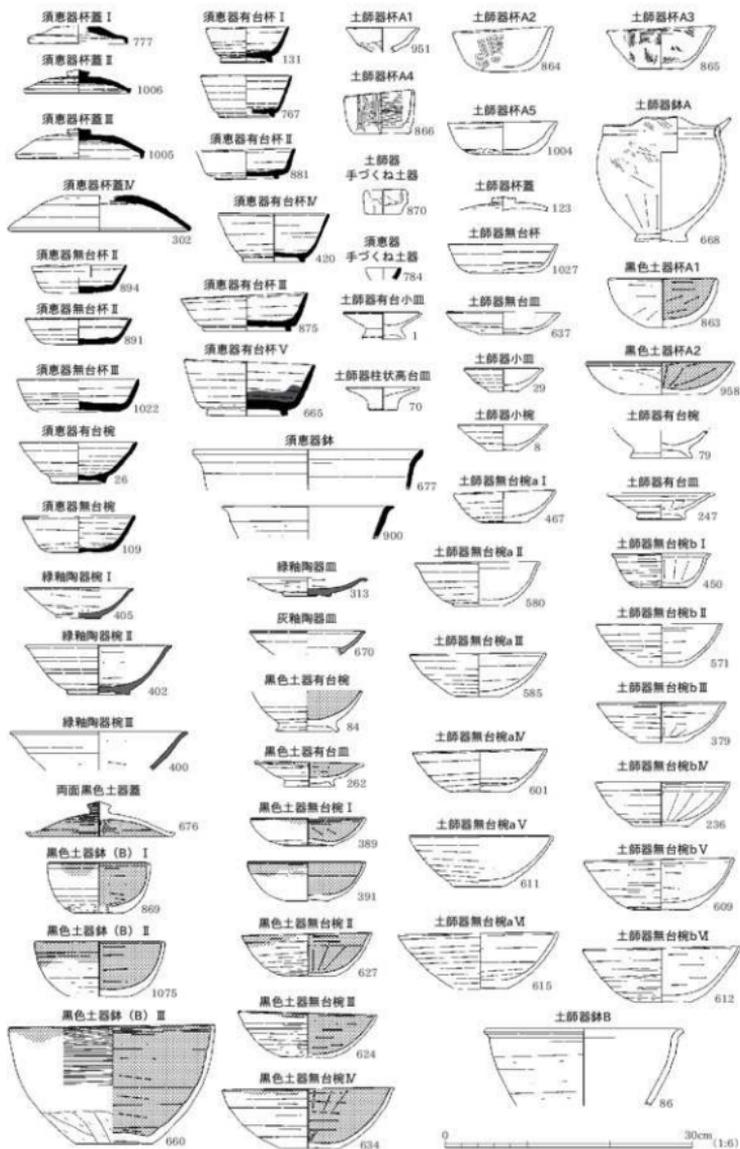
古 代

古代の土器・陶器の分類は(焼き物の)種類と器種により大別し、法量(口径・器高)・調整技法・系譜・細部の形態などにより細分した(第15～17図、第1表)。

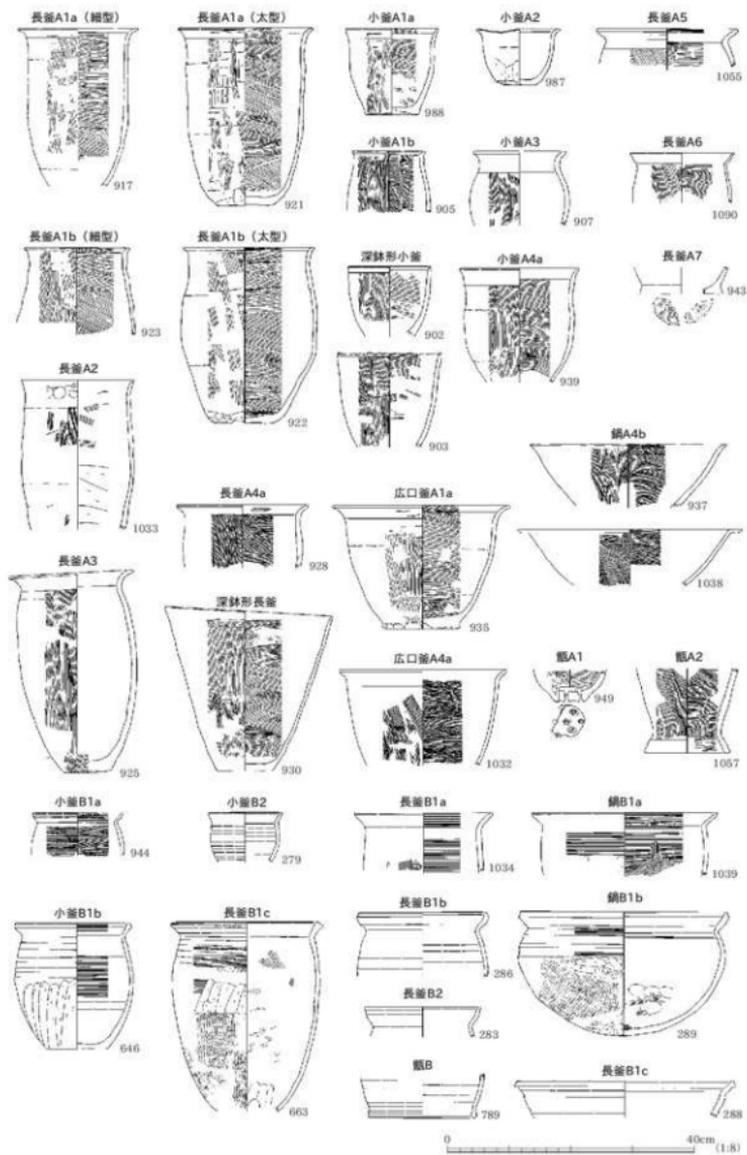
食器には須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器がある。須恵器の器種には杯蓋・有台杯・無台杯・有台碗・無台碗・鉢があり、杯蓋・有台杯・無台杯は法量により細分する。土師器・黒色土器は非ロクロ成形(A系)のものとロクロ成形(B系)のものがある。非ロクロ成形の土師器食器には杯・鉢があり、杯は口縁部・底部等の形態により細分した。ロクロ成形の土師器には杯・無台碗・小皿・小碗・有台碗・無台皿・有台皿・有台小皿・柱状高台皿があり、無台碗は再調整(ヘラミガキやロクロケズリ・ヘラケズリ)の有無、法量による細分を行った。非ロクロ成形(A系)黒色土器の量は少ないが、杯が確認できる。ロクロ成形(B系)黒色土器は有台碗・無台碗・有台皿・鉢が確認できる。無台碗は法量により4種、鉢は3種に細分する。

煮炊具は土師器のみであり、須恵器技法を用いないもの(A系)と須恵器技法を用いるもの(B系)に大別する。器種には長釜・小釜・鍋・広口釜・甗があり、このうち広口釜はA系のみ確認できる器種である。またA系の長釜には細身のものとやや胴部の太いものがある。A系は系譜、内外面の調整、口縁形態などで細分した。B系は系譜(北陸系と北信系)や、口縁端部の形態により細分した。

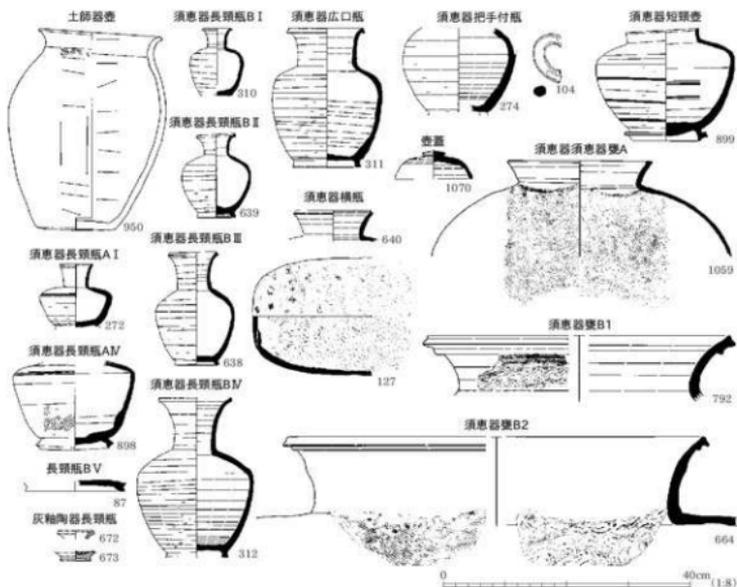
貯蔵具は須恵器・灰釉陶器・土師器が確認でき、須恵器が大半を占め土師器・灰釉陶器は少ない。土師器は壺、灰釉陶器は長頸瓶のみ確認できる。須恵器には壺瓶類と甗があり、壺瓶類は口頸部が長い瓶と、口頸部の短い壺に大別し、胴部・口頸部の形態や大きさにより細分した。ただし横瓶は慣例に従い、口頸部が短くても横瓶のままとした。



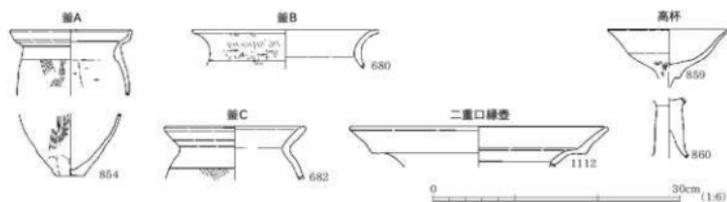
第15図 古代の土器・陶器分類1(食膳具)



第16図 古代の土器・陶器分類2 (土師器煮炊具)



第17図 古代の土器・陶器分類3 (貯蔵具)



第18図 弥生時代後期～古墳時代前期の土器分類



第19図 土師質土器の分類

須恵器煮膳具

無台杯Ⅰ	口径 11.6cm 以下
無台杯Ⅱ	口径 11.7 ~ 13.4cm
無台杯Ⅲ	口径 13.7cm 以上

杯蓋Ⅰ	口径 12.0cm 以下
杯蓋Ⅱ	口径 12.3 ~ 13.5cm
杯蓋Ⅲ	口径 14.6 ~ 16.3cm
杯蓋Ⅳ	口径 20cm 以上

有台杯Ⅰ	口径 10.9cm 以下、器高 3.3 ~ 5.2cm
有台杯Ⅱ	口径 10.7 ~ 12.4cm、器高 3.4 ~ 4.0cm
有台杯Ⅲ	口径 12.8 ~ 15.8cm、器高 3.7 ~ 4.7cm
有台杯Ⅳ	口径 12.5 ~ 14.4cm、器高 5.7 ~ 7.2cm
有台杯Ⅴ	口径 14.5 ~ 15.6cm、器高 6.9 ~ 7.2cm

有台碗	口径・器高は有台杯Ⅲに近いが、体部の外傾度が大きく底部が小さいもの。
無台碗	無台杯に比べ器高が高く底部が小さいもの。

土師器の大別

A系	須恵器技法を用いないもの。
B系	須恵器技法を用いるもの。

黒色土師杯の分類

杯A 1	底部が丸底
杯A 2	底部が平底

土師器杯の分類

杯A 1	口縁部が屈曲・外反する。
杯A 2	口縁部が外傾し、底部が丸底気味になる。
杯A 3	口縁部が外傾し、底部が平底になる。
杯A 4	口縁部が直立し底部が平底となる。
杯A 5	須恵器の無台杯様の形態となる。

土師器無台碗（B系）の分類

無台碗 a	再調整を行わない。
無台碗 b	ヘラミガキ・ロクコケズリなど再調整を行う。

煮炊具の分類

長釜	長胴で大型の煮炊具。細身のものやや太いものがある。
深鉢形長釜	口縁部が外傾もしくは内彎する平底の釜。
広口釜	胴に比べ器高が高く、口径がやや小さい。底部は平底になる。
鍋	胴部が半球形となる大型で広口の煮炊具。
小釜	長釜に比べ小型・短胴の煮炊具。
瓶	底部に孔を持つか胴狭けとなる煮炊具。

土師器長釜・小釜・鍋の分類

A系	須恵器技法を用いない。	1	内面は密な縦方向のハケメ、外面は疎らな縦方向のハケメで粘土層の接合痕が残る。	a	口縁部の屈曲が緩い。
			b	口縁部が強く屈曲する。	
		2	内外面ともハケメが疎らなもの。		
		3	外面に密な縦方向のハケメ、内面にナデを行う。		
		4	内外面とも密なハケメを行う。	a	口縁部の屈曲が緩い。
				b	口縁部が強く屈曲する。
		5	いわゆる西古志型（長釜）。		
6	近江系（長釜）の影響を受けたもの。				
7	東北系のもの。				
B系	須恵器技法を用いる。	1	北陸系のもの。	a	口縁端部が丸いか、挟い面を持つ。
				b	口縁端部を上方に積み上げる。
				c	口縁端部が比厚するまたは、上下に拡張する。
2	北信系のもの。				

貯蔵具

土師器	壺	長釜に比べ胴部最大径が大きく胴部の括れが明瞭なもの。外面はヘラミガキを行う。	
須恵器	長頸瓶	口頸部が長い瓶。器高 12cm 前後（Ⅰ）、器高 15cm 前後（Ⅱ）、器高 18cm 前後（Ⅲ）、器高 25cm 前後（Ⅳ）、器高 30cm 以上（Ⅴ）の 5 種の大きさがある。	A 肩部が張る長頸瓶 B 肩部が丸い長頸瓶
	広口瓶	長頸瓶 B に比べ広口で頸部が短い瓶。	
	把手付瓶	「C」字状の把手が肩部片側につく瓶。	
	短頸壺	略球形の胴部に直立する短い口縁部が付く壺。	
須恵器	横瓶	伏形の胴部に外反する口縁部がつくもの。	
	甕 A	単口縁の甕。	
	甕 B1	口縁部に凸帯・波状文がつく甕。	
	甕 B2	口縁部に凸帯があり、無文の甕。	

第 1 表 土器・陶磁器の器種分類

須恵器の胎土

A群	石英・長石・雲母など花崗岩起源の大型の鉱物を多く含む粗い胎土。阿賀北地域の須恵器窯の主体的な胎土。
B群	軟質の白色小粒子を定量含む胎土。きの細かいB1と、砂質の強いB2の2種がある。有台杯I・無台杯にはB1、その他の器種にはB2が主に用いられる。佐渡市（旧佐渡郡羽茂町）小泊窯跡など佐渡市南西部の須恵器窯の胎土。
C1群	小型の石英・長石を少量含む比較的精良で粘土質の強い胎土。上越地域では高田平野東側の未野・日向窯跡群で主体的な胎土。他地域では新潟市東部の新津（丘陵）窯跡群、長岡市東部の東山（丘陵）窯跡群でも主体的な胎土である。阿賀北の須恵器窯の一部にも見られる胎土。
C2群	砂質もしくはシルト質で均質な胎土。高田平野関川左岸に点在する須恵器窯に主体的にみられる。
C3群	海綿骨針を定量含む砂質の強い胎土。長岡市西部の旧和島村から三島郡出雲崎町にかけて分布する西古志窯跡群や浜海川流域に点在する須恵器窯に主体的にみられる。

土師器の胎土

A群	砂粒を多く含む粗い胎土。褐色・黒褐色の色調をするものが多い。1・2期、5・6期に定量確認できる。
B群	1mm以下のやや角張った石英・長石・雲母、赤色の小粒を少量含むシルト質の胎土。各時期を通じ多く確認できる。
C群	混入物が少ない精良な粘土質の胎土。B系の黒色土器や土師器有台皿・無台碗（B）b類に多い。
D群	シルト質で均質な胎土。須恵器C1群に似る。4期に定量確認できる。
E群	2mm前後の灰色・赤色のチャート風の円礫を多く含む粘土質の胎土。1～4期にかけて定量確認できる。
F群	2mm前後のやや大型の石英・長石を定量含む。1～4期にかけて少量確認できる。

第2表 胎土の分類

弥生時代後期～古墳時代前期

釜・壺・器台・高杯などの器種が確認できる。出土量の多い釜は細分したが（第18図・第3表）、他の器種は細分しない。

中世

土師質土器の器種は、皿と小皿があり、品田・水澤などの論考に倣い〔品田1991・1999ab、水澤2005〕、成形技法・形態などにより細分した（第19図・第4表）。輸入陶磁器は山本〔2000・2010〕・上田〔1982〕・森田〔1982〕・小野〔1982〕の分類、瀬戸焼・美濃焼（大窯含む）は藤澤〔1993・2008〕、珠洲は吉岡〔1994・2003〕の分類にそれぞれ従う。

B各説

1) B・C区

主要遺構（図版27 1～12）E10t-Pit1（1～3）からは、土師器有台小皿（1）・小皿（2）・小釜B2（3）が出土している。SE7（4～7）は土師器小皿（4）と無台碗a（5～7）が出土している。E10y17-Pit1（8～10）は土師器小碗（8）と無台碗a（9・10）、SEGは土師器小皿（11）、E10f20-Pit1は土師器小碗（12）が出土している。いずれも後述する流路1・2・2層・2層・3層・3層に近い時期のものと考えられる。

流路1・2・2層（図版27 13～27）流路1・2はB・C区の東側を蛇行する河川（跡）で多くの土器が出土した。本報告では便宜的に東側の流路を「流路1」、西側の流路を「流路2」としたが、一連の河川であった可能性が高い。2層・2層・3層・3層・5d層・5e層などから土器・陶磁器が多く出土している。

2層からは土師器小皿（13）・柱状高台皿（14～17）・有台碗（19）、黒色土器無台碗（18）・有台碗（20～25）、須恵器有台碗（26）・鉢（27）などが出土した。土師器柱状高台皿が多く確認できる。11世紀後半～12世紀を中心とした時期の土器群と考える。口縁部残存率計測法による土器・陶磁器の機能別構成比率は食膳具86.5%、貯蔵具7.5%、煮炊具6.0%であり、貯蔵具・煮炊具が定量確認できるが、これは下層（5a～5e層）の土師器・須恵器が混入した結果と考える。須恵器（26・27）も下層からの混入の可能性が高い。

流路1・2・2層（図版27 28～58）土師器小皿（28～33）・小碗（34～39）・無台碗A類（40・41）

43～47・柱状高台皿(48・49)・有台碗(50・51)、黒色土器有台碗(52～57)、須恵器有台杯(58)などが出土した。小皿のほかには小碗が一定量確認でき、底径4cm未満の小型の柱状高台皿が未確認である。11世紀中葉～後葉を中心とした時期の土器群と考える。口縁部残存率計測法による土器・陶磁器の機能別構成比率は食膳具99.2%、貯蔵具0.3%、煮炊具0.5%であり、食膳具が大半を占める。40・41・58は下層からの混入の可能性が高い。28は、他の土器より新しくなる可能性が高い。

流路1・2-3層(図版28・62 59～87・1118・1120) 土師器小皿(60～67)・柱状高台皿(59・68～71・77)・無台碗a類(72～76)・有台碗(78～81)・鉢B系(86)・長釜B1c類(85)、黒色土器有台碗(82～84・1118)、須恵器長頸瓶B V類(87)・白磁皿(1120)などが出土した。1120は大宰府分類〔山本2000〕の皿V類などに分類されるもので、C期に位置づけられるものとする。11世紀中葉を中心とした時期の土器群と考える。口縁部残存率計測法による土器・陶磁器の機能別構成比率は食膳具94.8%、貯蔵具1.1%、煮炊具4.1%である。72・85～87は下層からの混入の可能性が高い。また59・68～71・77は土層誤認などにより、より上位の土層に含まれる土器を3層の土器として取り上げた可能性がある。

流路1・2-3'層(図版28 88～104) 土師器柱状高台皿(88)・土師器小皿(89・90)・土師器無台碗a類(96～98)・有台碗(100)、黒色土器無台碗(99)・有台碗(101～103)、須恵器把手付瓶(104)などが出土した。11世紀前葉を中心とした時期の土器群の可能性が高い。口縁部残存率計測法による土器・陶磁器の機能別構成比率は食膳具99.4%、貯蔵具0.6%である。99・104は下層からの混入の可能性が高い。また97・98は土層誤認などにより、より上位の土層に含まれる土器を3'層の土器として取り上げた可能性がある。

流路1・2-4a層(図版28 105～109) 土師器柱状高台皿(105)・無台碗a(106・108)・小釜B1b(107)、須恵器無台碗(109)が確認できる。106～109は10世紀初頭～前葉の土器群の可能性が高い。

土器集中地点2-5a層・5b層(図版28 110～113) 流路2西岸のE11v周辺の土器集中地点を土器集中地点2とする。5a～5c層にかけて土師器・黒色土器・須恵器が多数出土した。

5a・5b層からは土師器無台碗a I類(110)・小皿または小碗(111)・小釜B2類(112)、須恵器有台杯I類(113)が出土した。110～112は古代VII I～VII 2期の土器群の可能性が高い。

土器集中地点2-5c・5d層(図版28・29 114～129) 114～127は5c層、128・129は5d層出土である。土師器無台碗b I類(114)・無台碗a I類(115～119・129)・無台碗a II類(120)・小皿(122)・杯蓋(123)・小釜B2類(126)、黒色土器有台皿(121)、須恵器無台杯II類(124・125・128)・横瓶(127)などが出土した。125は底部外面中央、128・129は体部外面に墨書がある。125は墨痕が薄いが「中山」、128は崩れた文字だが「今」の可能性が高い。9世紀後葉を中心とする時期の土器群と考える。

土器集中地点2-5e層・5e'層(図版29～33・62 130～289・1119) 食膳具には須恵器有台杯I類(131)・有台杯II類(132)・有台杯IV類(130・133)・無台杯I・II類・無台碗(135～164)、土師器小碗(165・166)・無台碗a I類(167～171・176～226)・無台碗b I類(172～175)・無台碗a II類(227～233・237)・無台碗b III類(234・235)・無台碗a III類(238～241)・無台碗a V類(243)・無台碗b VI類(236・242)・有台皿(245～254)、黒色土器無台碗I類(244)・無台碗II類(1119)・有台皿(255～270)などがある。須恵器食膳具の胎土はB群が主体を占めるが、それ以外のものも一定量確認できる。底部切り離し技法は回転釜切り(130・132～145・152～164)と回転系切り(131・146～151)がある。土師器無台碗b類には口クロケズリやヘラミガキの他に手持ちケズリを行うもの(172～174・235)が

ある。黒色土器は無台碗が少なく有台皿が主体を占める。

貯蔵具は須恵器横瓶 (271・275)・長頸瓶 A 類 (272・273)・把手付瓶 (274) などがあり、胎土は B 群以外のものが多い。図示したものは全て胎土 B 群以外のものである。

煮炊具は土師器小釜 (276～282)・長釜 (283～287)・鍋 (288・289) がある。いずれも B 系で口縁端部を積み上げる 1b 類のほか、口縁端部を上下に拡張する 1c 類 (284・287・288)、北信系の B2 類 (279・283) が確認できる。289 は胴部中位付近にヘラケズリを行うもので、9 世紀後葉以降の大型煮炊具 (長釜・鍋) に一定量見られる手法である。9 世紀後葉を中心とする時期の土器群と考える。口縁部残存率計測法による機能別構成比率は食膳具 96.3%、貯蔵具 0.4%、煮炊具 3.3% である。

土器集中地点 2-5 層・5' 層・5 層下 (図版 34 290～293) 須恵器有台杯 (290)・無台杯 (291)、黒色土器有台皿 (292)・無台碗 (293) を図示した。290・291 はともに胎土 B 群であり、291 には底部外面に「十」の墨書がある。293 は底径から考え、無台碗 I 類ないし II 類となる可能性が高い。

土器集中地点 1-5a 層・5b 層 (図版 34 294～303) 流路 I の調査区北端付近 E11c・d・h・i の境界周辺の土器集中地点を土器集中地点 I とする。5a～5e 層にかけて土師器・黒色土器・須恵器・緑軸陶器などの土器・陶磁器類が多数出土した。

294 は「5 層」の注記があり、便宜的にここで記述する。灰軸陶器皿で、美濃産でケヶ丘窯式と考える。303 は 5a 層からの出土で長釜 B2 類である。295～302 は 5b 層からの出土で、土師器無台皿 (295)・無台碗 a I 類 (296～300)・無台碗 a III 類 (301)、須恵器杯蓋 IV 類 (302) がある。無台碗 a I 類には底径が小さく身の深いもの (298～300) がある。302 の胎土は B 群で有台杯以外の他の器種の蓋の可能性もある。9 世紀末葉頃を中心とする時期の土器群と考える。

土器集中地点 1-5c 層 (図版 34 304～312) 須恵器無台杯 II 類 (304～306)・広口瓶 (311)・長頸瓶 B 類 (310・312)、土師器無台碗 a I 類 (307～309) などが出土した。304～306 はいずれも胎土 B 群で 304・305 は体部外面に「上段」の墨書がある。310～312 の胎土も B 群である。

土器集中地点 1-5d 層 (図版 34 313～399) 食膳具には緑軸陶器皿 (313)、須恵器杯蓋 III 類 (314)・杯蓋 II 類 (315)・無台杯 II 類 (316～323)、土師器小碗 (324)・無台碗 a I 類 (325・327・330～374)・無台碗 b I 類 (328・329)・無台碗 a II 類 (376～378)・無台碗 a III 類 (380～386)・無台碗 b III 類 (379)・無台碗 a IV 類 (387)、黒色土器無台碗 (389～391) などが出土した。313 は軟質の焼き上がりで口縁に緑彩がある。316～318・325 は体部外面、327・390 は底部外面に墨書がある。このうち 316・317・325 の墨書は「上段」であるが、器高の低い 316・317 は横位、器高の高い 325 は正位に記載されている。土師器無台碗 b 類はヘラミガキを行うもの (329・379) と手持ちケズリをおこなうもの (328) がある。黒色土器無台碗 I の 389・391 は暗文風のヘラミガキを行うもので、このうち 391 は縦のヘラミガキにより内面を 3 区画に区分し、それぞれの区画に草花文を描いている。

貯蔵具は須恵器広口瓶 (392)・長頸瓶 IV 類 (393) などが出土した。392・393 の胎土はともに B 群である。煮炊具は土師器小釜 B1b 類 (394・395)・長釜 B1c 類 (397・398)・鍋 B1c 類 (399) が出土した。9 世紀末葉を中心とする時期の土器群と考える。

土器集中地点 1-5e 層 (図版 37～43 400～647) 食膳具は緑軸陶器碗 (400～405)・須恵器杯蓋 (419)・有台杯 IV 類 (406・420～422)・無台杯 I・II 類 (407～418・423～445)、土師器小碗 (453・481)・無台碗 a I 類 (446・447・454～480・482～524・526～528・530・531・533～556)・無台碗 b I 類 (448～452)・無台碗 a II 類 (525・529・532・557・559～564・566～568)・無台碗 b II 類 (558)・

無台碗 aIII 類 (565・569・573～599)・無台碗 bIII 類 (570～572)・無台碗 aIV 類 (600～606)・無台碗 aV 類 (611)・無台碗 bV 類 (608～610)・無台碗 aVI 類 (614・615)・無台碗 bVI 類 (612・613)・無台皿 (637)、黒色土器無台碗 I 類 (633)・無台碗 II 類 (619・627～632)・無台碗 III 類 (616～618・620～626)・無台碗 IV 類 (634～636) などがある。緑軸陶器碗はいずれも京都産と考える。402 を除き軟質の焼き上がりで 404・405 は緑彩がみられる。406～417・446・447・557・616 には墨書がある。406～411 は「上殿」が記されたもので、器高の高い須恵器有台碗 IV 類 (406) は正位に記されるが、器高の低い須恵器無台碗 II には横位に記されるもの (407～409・411) が多い。412～416 は「見」が記されたもので、412 は底部外面左寄りに、413～415 は体部に逆位に記される。須恵器食膳具の胎土は B 群が大半を占めるが、C2 群 (423・424) も少量確認できる。C2 群とした 2 点はともに器高が低く底径が大きいもので、混入の可能性が高い。土師器無台碗 b 類にはロクロケズリを行うもの (448)、ヘラミガキを行うもの (558・572・607)、ロクロケズリとヘラミガキを行うもの (449・450・452・571・608～610・612・613)、持ちちケズリとヘラミガキを行うもの (451・609) がある。

貯蔵具は須恵器長頸瓶 B 類 (638・639)・横瓶 (640) などがある。胎土は 638 が B 群、639・640 は C2 群である。煮炊具は土師器小釜 B2 類 (641)・小釜 B1b 類 (642・644・646)・長釜 B1c 類 (647) などがある。9 世紀末葉を中心とする時期の資料と考える。土器・陶磁器の機能別構成比率は食膳具 98.8%、貯蔵具 0.6%、煮炊具 0.6% である。

流路 1・2-5 層 (図版 43 648～664) 流路 1・2 の 5a～5e 層から出土した土器集中地点 1・2 以外の土器・陶磁器である。須恵器無台杯 II 類 (648・649)・甕 B2 類 (664) に、土師器無台碗 a I・II 類 (651～653・656～659)・無台碗 b 類 (650・654・655)・柱状高台皿 (661)・小皿 (662)・長釜 B1c 類 (663)、黒色土器鉢 III 類 (660) などが出土した。663 は胴部中位付近にヘラケズリ行う。9 世紀後葉以降の大型の煮炊具に一定量見られる手法である。

流路 1・2-6～8 層出土土器 (図版 44 665～668) 河川 1・2 の 5e 層より下位 (6～8 層) からも土器が少量出土しており、以下で一括して記述する。須恵器有台杯 V 類 (665)、土師器無台碗 b I 類 (666)・鉢 A 系 (668)、黒色土器杯 A2 類 (667) などが出土した。665・666 は底部外面回転糸切りで、665 は体部下半にロクロケズリを行う。666 は体部下半に持ちちケズリを行う。667・668 は内外面ともヘラミガキを行う。666 は 9 世紀前葉、665・667・668 は 8 世紀後葉かそれ以前のものとする。

その他の土器 (図版 44・45・62 669～738・1127) 669～678 は主に包含層から出土した古代の土器で、緑軸陶器碗 I (669)、灰軸陶器皿 (670)・長頸瓶 (671～673)、須恵器無台杯 II 類 (674)・鉢 (677・678)、土師器無台碗 b I 類 (675)、両面黒色土器蓋 (676) を図示した。669 は還元硬質の焼き上がりで底部は削り出しの蛇の目高台であり、京都産と考える。670～673 は精良な胎土で美濃産と考える。675 は底径が大きく底部外面から体部下半にかけて持ちちケズリを行う。

679～685・1127 は古墳時代前期の土器で、土師器釜 B 類 (679～681・683)・釜 C 類 (682・684)・小型器台 (685・1127) がある。滝沢編年 [2005] の 8～10 期を中心とする時期の土器群と考える。

686～738 は中世～近世初頭の土器・陶磁器である。土師質土器皿 (686～693)・小皿 (694～698)、青磁小碗 (699・700・702)・碗 (701・702・704・706・707)・稜花皿 (703)・杯 (705)、白磁皿 (708～710・713)・杯 (711・712)、青花碗 (714～717)・皿 (718)、瀬戸焼・美濃焼 (大窯含む) 卸皿 (719)・天目碗・小天目碗 (720～722)・水注 (723)・緑軸小皿 (724・725)・稜皿 (726)、珠洲焼密 R 種 (727～729)・壺 T 種 (730)・播鉢 (731)、肥前系陶器碗 (732)・小杯 (733)・鉢または向付 (734)・皿 (735～

738) などが出土した。土師質土器皿・小皿はT1類(686～689・696)が比較的多く、輸入陶磁器は山本編年[山本2010]のH～J期のものが比較的多く確認できる。

2) A 区(図版45 739～756)

古代の土器も出土しているが、中世の遺物を中心に図化した。土師質土器皿(739～742)・小皿(743・744)・青磁碗(745・746・748)・白磁碗(749)・杯(750)・青花皿(751)・瀬戸焼・美濃焼皿(747・752)・花瓶(753)・珠洲焼播鉢(754・755)・甕器系陶器播鉢(756)などが出土した。土師質土器皿・小皿はR1類(739～743)が主体を占めるが、輸入陶磁器は山本編年[山本2010]のH～J期のものが主体を占め、C期・D期のものは少ない。

3) D・E・F・G区

E区SD12(図版45 757～764) 須恵器杯蓋Ⅱ類(757)・有台杯Ⅳ類(758・759)・無台杯Ⅱ類(760～762)・土師器小椀(764)・小釜B系(763)などが出土した。須恵器食器具は胎土B群(758・759・761)とそれ以外のもの(758・760)が混在する。土師器小椀(764)は器高が低く底径が比較的大きい。9世紀前葉を中心とする時期の土器群と考える。

E区・G区その他の遺構(図版46 765～775) 765・766はE区SB1のピットから出土した土師器無台椀aⅠ類で9世紀前葉～後葉のものとする。767～769はE区SX2からの出土で、767は9世紀前葉に多くみられる胎土B群の須恵器有台杯Ⅰである。770・771はE区SK7から出土したもので、ともに土師器無台椀aⅠ類で、器高が低く、よく似た器形である。9世紀前葉～後葉のものとする。772はE区SD95出土の土師器杯A4類である。類例がなく編年的な位置づけが難しい。E区SD95は古墳時代前期の土器が一定量出土しており、古墳時代前期の土器の可能性もある。775はG区SE4出土の須恵器無台杯Ⅱで、胎土はB群である。底部の器壁は比較的厚く9世紀前葉のものとする。

D・E・F・G区包含層ほか(図版46～48 776～862) 776～792は古代の土器である。緑軸陶器碗(776)・須恵器杯蓋Ⅰ類(777)・杯蓋Ⅲ類(778)・有台杯Ⅱ類(779)・手づくね土器(784)・甕A(790・791)・甕BⅠ(792)・土師器甕(789)などが出土した。776は還元軟質の焼き上がりで環高台がつく。東海産の可能性が高い。784は還元硬質の焼き上がりであることから須恵器としたが、土師器の可能性もある。792は胎土や色調から考え、転用研削具 図版63 1157～1160と同一個体の可能性が高い。

793～853は中世～近世初頭の土器・陶磁器である。土師質土器皿(793～798)・小皿(799～803)・瓦器風炉(804)・鉢(805)・青磁碗(806～808・810)・小椀(809)・杯(811)・盤(812～814)・水注(815)・白磁皿(816・817・819)・杯(818)・碗(820)・青花碗(821・823・824)・小椀(822)・皿(825)・瀬戸焼・美濃焼(大窓含む)平椀(826)・天目椀(827)・香炉(828)・端反皿(829)・丸皿(830・831)・珠洲焼播鉢(832～844)・壺T種(846・847)・甕器系陶器播鉢(848・849)・肥前系陶器椀(850)・皿(851・852)・小杯(853)などが出土した。土師質土器皿は厚手で器高の高いT1b類(795～798)・輸入陶磁器は山本編年[山本2010]のE～J期のもの、珠洲はV～VI期の播鉢(835～842)が多く確認できる。肥前系陶器850・851には鉄絵がある。

854～862は弥生時代後期～古墳時代の土器で釜A類(854・855)・釜B類(856)・釜C類(857)・器台(858)・高杯(859～862)が出土した。854・855は滝沢編年[滝沢2005]の2期(古)、856～862は8～10期を中心とする時期のものとする。

3) H 区

流路 14 下層土器集中地点 1 (図版 48 ~ 55・62 863 ~ 950・1125) 流路 14 下層 (8 ~ 14 層) の F3u・F3v・G3a 周辺から出土した土器である。食膳具には黒色土器杯 A1 類 (863)・鉢 B I 類 (869)、土師器杯 A2 類 (864)・杯 A3 類 (865)・杯 A4 類 (866)、須恵器杯蓋皿類 (871)・杯蓋 II 類 (872)・有台杯 III 類 (874 ~ 879)・有台杯 II 類 (880 ~ 884)・無台杯 III 類 (886)・無台杯 I・II 類 (885・887 ~ 895・1125)・鉢 (900)、土師器無台碗 b I 類 (896) などが出土した。A 系の黒色土器・土師器食膳具は胎土 E 群 (863 ~ 865) が多く、須恵器食膳具は胎土 C1 群が多い。867 は底部外面に木葉痕がある。871・1125 は内外面に漆が付着する。874 は有台杯 IV 類としたが口径 15.8cm と他のものに比べ大型で、有台盤とすべきものかもしれない。883・885 は底部外面中央右寄りに墨書があり 883 は「力」、885 は「王」と考える。

貯蔵具は須恵器長頸瓶 A (898)・長頸瓶 B (897)・短頸壺 (899)、土師器壺 (950) などが出土した。897・898 は肩部に円盤閉塞を行う。高台は 897 が外端接地、898・899 が内端接地である。950 は胎土 E 群で内外面ともヘラミガキを行う。煮炊具は土師器小釜 (901 ~ 910・939・944 ~ 947)・長釜 (911 ~ 930・948)・広口釜 (931 ~ 936)・鍋 (937・938)・瓶 (949) などがある。A 系が主体を占め B 系 (944 ~ 948) は少ない。941 は砂痕、943 は木葉痕が底部外面にみられる。945 は胴部下半にロクロケズリを行う。これらのほか手づくね土器 (870) が確認できる。これらの土器群は 8 世紀前葉～中葉を中心とする土器群で、前後の時期の土器も一定量含むものとする。土器類の機能別構成比率は食膳具 43.8%、貯蔵具 1.6%、煮炊具 54.0%、その他 0.6% である。

流路 14 下層土器集中地点 2 (図版 55 ~ 57 951 ~ 998) 流路 14 下層 (8 ~ 14 層) の G3b・c から出土した土器である。食膳具は土師器杯 A1 類 (951)・杯 A2 類 (952 ~ 954)・杯 A5 類 (955)、黒色土器杯 A1 類 (957)・杯 A2 類 (958)・無台杯 (972)・無台碗 a I・II 類 (973 ~ 980)・無台碗 a III 類 (981)、須恵器有台杯 III 類 (959 ~ 962)・有台杯 II 類 (963)・無台杯 III 類 (964)・無台杯 II 類 (965 ~ 971) などが出土した。A 系の土師器・黒色土器食膳具の胎土は E 群 (953 ~ 955・958) が多く、須恵器食膳具の胎土は C1 群が主体を占めるが、B 群・C2 群も確認できる。964・973 の底部外面には墨書があり 961 は「山口」、973 は「太々女」と考える。

貯蔵具は須恵器壺または瓶の肩部破片 (982)・甕 A 類 (983) が出土した。982 は頸部が太く円盤閉塞は確認できない。胎土は 982・983 とともに C2 群である。煮炊具は土師器小釜 (984 ~ 988)・長釜 (989 ~ 994・998)・広口釜 (995)・鍋 (996) などが出土している。B 系は少なく (998)、A 系が大半を占め、A 系には外面にヘラケズリを行うものが定量確認できる (987・989・991)。997 は土器の破損による割れ目に添って帯状に黒色の付着物があり、土器の補修を目的としたものの可能性がある。これらの土器群は 8 世紀中葉～後葉を中心とする時期の土器群と考えるが、これに先行する土器を少量、後続する土器を定量含むものとする。土器類の機能別構成比率は食膳具 42.6%、貯蔵具 0.4%、煮炊具 57.0% である。

流路 14 下層土器集中地点 3 (図版 57 ~ 59 999 ~ 1039) 流路 14 下層 (8 ~ 14 層) の G3g・l・m・r から出土した土器である。食膳具は土師器杯 A1 類 (1001)・杯 A3 類 (1002・1003)・杯 A5 類 (1004)・無台杯 (1027)、須恵器杯蓋皿類 (1005)・杯蓋 II 類 (1006・1007)・有台杯 III 類 (1011・1012)・有台杯 II 類 (1102 ~ 1010・1013 ~ 1019)・有台杯 I 類 (1021)・無台杯 III 類 (1022)・無台杯 II 類 (1023 ~ 1026) などがある。須恵器食膳具の胎土は C1 群が主体を占めるが、A 群 (1011) も確認できる。1027

は底部外面に手持ちケズリを行う。

煮炊具は小釜A系(1028)・同B系(1035・1036)・長釜A系(1029・1030・1033)・同B系(1034)・広口釜A系(1031・1032)・鍋A系(1037・1038)・同B系(1039)がある。長釜・広口釜・鍋は内外面のハケメがあまり顕著で無いA2類(1029・1033)・内外面ともハケメが密にみられるA4類(1030・1032・1037・1038)などが確認でき、A1類は少ない。このほか手づくね土器(999・1000)が出土した。8世紀末葉を中心とする時期の土器群と考える。土器類の機能別構成比率は食膳具73.7%、煮炊具21.7%、その他4.7%である。

流路14下層土器集中地点4(図版59・60 1040～1059) 流路14下層(8～14層)のG3x周辺から出土した土器である。食膳具は土師器無台杯(1048)・須恵器杯蓋Ⅲ類(1040)・杯蓋Ⅱ類(1041)・有台杯Ⅲ類(1042)・有台杯Ⅱ類(1043・1044)・無台杯Ⅱ類(1045～1047)などがある。須恵器食膳具の胎土はC1群が主体を占める。1044は底部外面中央左寄りに「天」の墨書がある。

貯蔵具は甕A類(1059)・煮炊具は小釜A系(1051・1052)・同B系(1050・1053・1054)・長釜A類(1055・1058)・瓶A類(1057)などがある。1053・1054は同一個体の可能性が高く、下半にロクロケズリを行う。1055は口縁部にヨコナデを行い、口縁端部に面を持つもので、西古志型長釜あるいはその影響を受けたものとする。1058は口縁部外面に粘土塊が付着する。1057は下端が「ハ」字状になる瓶A2類である。このほか手づくね土器が出土した(1049)。9世紀初頭～前葉を中心とする時期の土器群と考える。土器類の機能別構成比率は食膳具42.6%、貯蔵具5.6%、煮炊具44.6%、その他7.2%である。

流路14上・中層土器集中地点1(図版60 1060～1067) 流路14上層(1～3層)・中層(4～7層)のF3u・F3v・G3a周辺から出土した土器である。須恵器無台杯Ⅲ類(1060)・土師器無台椀aⅠ類(1061～1066)・無台椀bⅡ類(1067)などが出土した。1060は底部外面にロクロケズリを行う。また、底部外面には漆が付着する。1061～1067は中層のF3v21から出土した。胎土B群の1065・1066の形態から考え、B・C区流路1-5e層土器集中地点1(図版37～43 400～646)と同時期(9世紀末葉頃)の土器群と考える。

流路14上・中層土器集中地点2(図版60 1068～1074) 流路14上層(1～3層)・中層(4～7層)のG3b・cから出土した土器である。須恵器有台杯Ⅱ類(1068)・有台杯Ⅲ類(1069)・無台杯Ⅱ類(1072)・壺蓋(1070)・土師器無台椀aⅠ類(1073)・無台椀bⅤ類(1074)などが出土している。1072は酸化軟質の焼き上がりであるが胎土や形態・手法などから考え須恵器と判断した。1074は外面に墨書がある。

流路14中・上層土器集中地点3(図版60・61 1075～1093) 流路14上層(1～3層)・中層(4～7層)のG3g・1・m・rから出土した土器である。食膳具は黒色土器鉢Ⅱ(1075・1076)・須恵器杯蓋Ⅲ(1078)・杯蓋Ⅱ類(1077・1079)・有台杯Ⅱ類(1080)・無台杯Ⅰ・Ⅱ類(1081～1088)・土師器柱状高台皿(1092)・有台椀または皿(1093)などがある。須恵器食膳具の胎土はC1群が主体を占めるが、B群(1087・1088)も確認できる。1077・1081～1084は「王」の墨書がある。墨書される部位は、杯蓋の1077は内面、無台杯の1081～1084は底部外面である。墨書の位置は1081は右上だが、他は中央上位である。1092・1093は円形に割り揃えを行う。煮炊具は土師器小釜B1類(1089)・長釜A6類(1090)・広口釜A系(1091)がある。1090は他の煮炊具に比べ器壁が薄く、口縁部が受口状となる。1092・1093を除き、9世紀前葉を中心とした時期の土器群と考える。

流路14上・中層土器集中地点4(図版61 1094～1096) 流路14上層(1～3層)・中層(4～7層)のG3x周辺から出土した土器である。須恵器杯蓋Ⅲ類(1094)・杯蓋Ⅱ類(1095)・土師器小椀もしくは

小皿(1096)などがある。

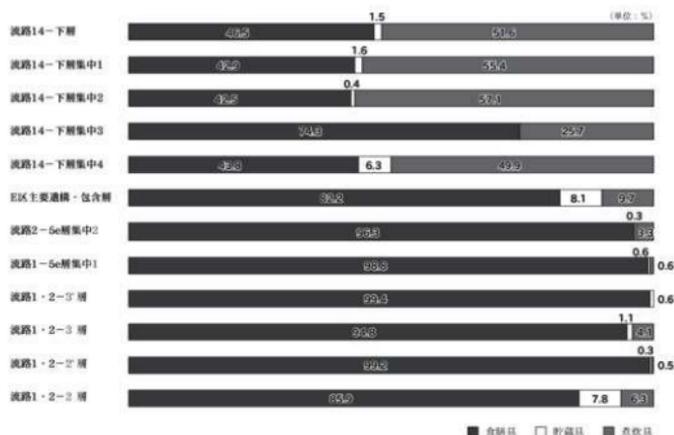
その他の遺構(図版61 1097～1106) 1097・1098はH区SB1のP30から出土した土器で、A1b類の釜類である。8世紀中葉～9世紀初頭を中心とする時期の土器群と考える。1099～1101はSX76から出土した土器類である。1099は須恵器有台杯IV類で、外面下部から底部外面にかけてロクロケズリを行う。胎土はB群である。1102・1103はSK67出土の土器群で、ともにA系の土器器釜類である。1106はSD38出土の須恵器有台杯で、底部外面に墨書がある。

H区包含層ほか出土土器(図版61・62 1107～1117) 1107～1109は須恵器有台杯で、1107・1109は胎土B群、1108は胎土C2群である。1108は底部回転糸切りで、底部外面に墨書がある。1110は弥生土器釜で、外面に柳波状文がある。信州地方に主体的に分布する弥生時代中期後半の百瀬式のものとする。1111・1112は弥生時代後期から古墳時代前期の土器で、1111は釜、1112は壺である。1111は内面にヘラケズリを行う。1113は土師質土器皿T1b類である。口縁端部は丸く、外面のヨコナデの幅は広く、器壁が厚い。1114・1116は瀬戸焼・美濃焼で1114は天目焼、1116は鉦皿である。1117は肥前系陶器皿で見込みに胎土目、口縁部内面には鉄絵がある。

4) その他・追加(図版62 1118～1132)

1118は黒色土器有台椀と考える。B・C区流路1-3層から出土した。1119は黒色土器無台椀で内外面にヘラミガキを行うが、底部外面は回転糸切り後無調整である。B・C区土器集中地点2の5e層から出土した。1120は白磁皿でV類などの可能性がある。流路1-3層出土で他の土師器・黒色土器に伴う可能性がある。1121は土師質土器皿R1類である。F10dのIV層出土で、内面にカキメが巡ることから古代の土師器小釜B系の可能性もある。1122は緑釉陶器皿もしくは椀で内面に篋描きの文様がある。素地の焼き上がりは還元硬質である。

1123～1126は漆付着土器で、1123・1124はF区北東のE区との境界付近で出土した土師器無台



第20図 古代土器の機能別構成比率の変化

区分	種類	器種	流路1・2・3期			流路1・2・3期			流路1・2・3期			
			口縁部残存率/36	破片数	比率(残存率)	口縁部残存率/36	破片数	比率(残存率)	口縁部残存率/36	破片数	比率(残存率)	
食類	煎茶器	杯蓋	6.0	7	4.5%	2.0	1	0.3%	0.0	2	0.0%	
	煎茶器	有台杯	6.0	5	4.5%	0.0	1	0.0%	0.0	3	0.0%	
	煎茶器	無台杯	36.0	61	27.0%	24.0	7	3.2%	9.0	18	3.3%	
	煎茶器	有台陶	3.0	2	2.2%				0.0	3	0.0%	
	煎茶器	無台陶	0.0	2	0.0%				1.0	3	0.4%	
	煎茶器	鉢	6.0	2	4.5%	3.0	1	0.4%				
	土師器	有台陶	2.0	8	1.5%	0.0	27	0.0%	0.0	13	0.0%	
	土師器	柱状高台皿	0.0	5	0.0%	0.0	1	0.0%	13.0	3	4.8%	
	土師器	小皿	6.0	2	4.5%	87.5	19	11.8%	46.0	21	17.1%	
	土師器	小皿×小陶	32.0	133	24.0%	299.0	431	40.4%	46.0	127	17.1%	
	土師器	無台陶	3.0	61	2.2%	36.0	44	4.9%	39.0	101	14.5%	
	土師器	有×無台陶	7.0	9	5.2%	236.0	112	31.9%	60.0	36	22.3%	
	土師器	鉢							7.0	3	2.6%	
	黒色土器	有台陶	3.5	10	2.6%	7.0	15	0.9%	7.0	24	2.6%	
	黒色土器	無台陶	0.0	6	0.0%	0.0	2	0.0%	0.0	2	0.0%	
	黒色土器	有×無台皿				5.0	2	0.7%	11.5	3	4.3%	
	黒色土器	有×無台陶	5.0	19	3.7%	35.0	33	4.7%	16.0	14	5.9%	
	小計		115.5	332	86.5%	734.5	696	99.2%	255.5	376	94.8%	
	貯蔵	煎茶器	壺瓶類	10.0	19	7.5%	2.0	16	0.2%	3.0	21	1.1%
		煎茶器	横瓶	0.0	10	0.0%	0.0	1	0.0%	0.0	8	0.0%
煎茶器		壺	0.0	20	0.0%	0.0	11	0.0%	0.0	11	0.0%	
小計			10.0	49	7.5%	2.0	28	0.2%	3.0	40	1.1%	
土師器		小蓋	4.0	14	3.0%	3.0	7	0.4%	0.0	16	0.0%	
土師器	長蓋	0.0	11	0.0%	1.0	10	0.1%	4.0	14	1.5%		
土師器	蓋	2.0	3	1.5%	0.0	1	0.0%	3.0	3	1.1%		
土師器	長蓋×蓋	2.0	85	1.5%	0.0	18	0.0%	4.0	52	1.5%		
小計		8.0	113	6.0%	4.0	36	0.5%	11.0	85	4.1%		
その他	煎茶器	小片	0.0	4	0.0%				0.0	1	0.0%	
	土師器	小型	0.0	212	0.0%	0.0	263	0.0%	0.0	174	0.0%	
	土師器	小片	0.0	888	0.0%	0.0	623	0.0%	0.0	431	0.0%	
	総計		133.5	1,598	100%	740.5	1,646	100%	269.5	1,107	100%	

区分	種類	器種	流路1・2・3期			流路1-5e期土器集中1			流路2-6e期土器集中2		
			口縁部残存率/36	破片数	比率(残存率)	口縁部残存率/36	破片数	比率(残存率)	口縁部残存率/36	破片数	比率(残存率)
食類	煎茶器	杯蓋	1.0	1	0.3%	20.0	6	0.2%	0.0	1	0.0%
	煎茶器	有台杯	0.0%	119.5	20	0.9%	123.0	13	2.3%		
	煎茶器	無台杯	0.0%	930.5	214	7.4%	1,018.0	151	18.8%		
	煎茶器	鉢	0.0%					0.0	1	0.0%	
	土師器	有台陶	0.0	22	0.0%						
	土師器	柱状高台皿	0.0	1	0.0%						
	土師器	小皿	9.0	2	2.7%						
	土師器	小皿×小陶	208.0	242	62.9%	0.0	4	0.0%	0.0	2	0.0%
	土師器	無台陶	23.0	102	7.0%	5,429.5	2,865	43.0%	2,645.0	1,100	48.7%
	土師器	有×無台陶	75.5	77	22.8%	5,232.0	2,593	41.4%	482.0	238	8.9%
	土師器	有台皿							347.0	92	6.4%
	土師器	無台皿				30.0	6	0.2%			
	土師器	鉢	3.0	1	0.9%	0.0	1	0.0%			
	黒色土器	有台陶	0.0	9	0.0%			0.0%	0.0	1	0.0%
	黒色土器	無台陶	0.0	4	0.0%	592.0	279	4.7%	54.0	29	1.0%
	黒色土器	有台皿							479.5	111	8.8%
	黒色土器	有×無台皿			0.0%			0.0%	69.0	25	1.3%
	黒色土器	有×無台陶	9.0	11	2.7%	66.0	57	0.5%	5.5	15	0.1%
	黒色土器	鉢							0.0	1	0.0%
	緑釉陶器	有台陶				71.5	20	0.6%			
小計		328.5	472	99.4%	12,491.0	6,065	98.8%	5,223.0	1,780	96.3%	
貯蔵	煎茶器	壺瓶類	2.0	13	0.6%	53.0	7	0.4%	16.0	10	0.3%
	煎茶器	横瓶	0.0%	17.5	8	0.1%	3.0	9	0.1%		
	煎茶器	壺	0.0	8	0.0%	0.0	21	0.0%	0.0	2	0.0%
	小計		2.0	21	0.6%	70.5	36	0.6%	19.0	21	0.4%
	土師器	小蓋	0.0	2	0.0%	54.0	128	0.4%	78.0	128	1.4%
土師器	長蓋	0.0	5	0.0%	18.0	16	0.1%	61.0	269	1.1%	
土師器	蓋	0.0	2	0.0%	2.0	6	0.0%	45.0	46	0.8%	
土師器	長蓋×蓋	0.0	12	0.0%	4.0	60	0.0%	0.0	69	0.0%	
小計		0.0	19	0.0%	78.0	210	0.6%	184.0	512	3.3%	
その他	煎茶器	小片	0.0	114	0.0%	0.0	1	0.0%			
	土師器	小型	0.0	360	0.0%	0.0	1,694	0.0%	0.0	114	0.0%
	土師器	小片	0.0	360	0.0%	0.0	24	0.0%	0.0	52	0.0%
	総計		330.5	986	100%	12,639.5	6,300	100%	5,438.0	2,479	100%

※「×」は「または」に同じ

第3表 土器・陶磁器の器種構成比率(1)

区分	種類	器種	Ⅰ区土室遺構・包含層			Ⅱ区土室遺構・包含層			Ⅲ区土室遺構・包含層		
			Ⅰ層部残存率/36	破片数	比率(残存率)	Ⅱ層部残存率/36	破片数	比率(残存率)	Ⅲ層部残存率/36	破片数	比率(残存率)
食類	原志窯	鉢蓋	48.0	38	11.2%	17.0	5	3.4%	98.0	4	10.9%
	原志窯	有白鉢	30.0	26	7.0%	87.0	7	17.4%	373.0	39	41.4%
	原志窯	無白鉢	96.0	86	23.3%	81.0	7	16.2%	147.0	22	16.3%
	原志窯	有×無白鉢	8.0	7	1.9%	9.0	3	1.8%			
	土師窯	有白碗	0.0	1	0.0%						
	土師窯	鉢(赤ロクロ)	11.0	8	2.6%				37.5	9	4.2%
	土師窯	小皿	0.0	1	0.0%						
	土師窯	無白鉢				5.0	8	1.0%	1.5	5	0.2%
	土師窯	無白碗	113.0	143	26.3%	12.0	4	2.4%			
	土師窯	有×無白鉢									
	土師窯	有×無白碗	54.0	51	12.6%				6.0	6	0.7%
	土師窯	鉢	0.0	2	0.0%						
	黒色土師	鉢(赤ロクロ)	0.0	5	0.0%	2.0	5	0.4%	0.0	2	0.0%
	黒色土師	有白碗	0.0	1	0.0%						
	黒色土師	無白碗	0.0	2	0.0%						
	黒色土師	有×無白碗	2.0	6	0.5%						
	貯蔵	小計		362.0	377	84.2%	213.0	39	42.6%	663.0	87
原志窯		香水瓶	3.0	8	0.7%				0.0	1	0.0%
原志窯		横瓶	0.0	1	0.0%				0.0	1	0.0%
原志窯		甕	28.0	131	6.5%	28.0	26	5.6%			
土師窯		甕(赤ロクロ)							0.0	3	0.0%
土師窯		小計	31.0	140	7.2%	28.0	26	5.6%	0.0	5	0.0%
土師窯		小蓋A				40.0	35	8.0%	10.0	15	1.1%
土師窯		小蓋B	7.0	87	1.6%	31.0	20	6.2%	9.5	1	1.1%
土師窯		長蓋A				8.0	20	1.0%	39.5	47	4.4%
土師窯		長蓋B	28.0	34	8.0%	0.0	2	0.0%	10.0	74	1.1%
土師窯		鍋A				4.0	2	0.8%	12.0	9	1.3%
土師窯		鍋B	3.0	6	0.7%				8.0	7	0.9%
土師窯		長蓋B×鍋B	1.0	103	0.2%	0.0	2	0.0%			
土師窯		広口釜							12.0	7	1.3%
土師窯		釜類A	0.0	6	0.0%	140.0	717	28.0%	94.0	569	10.4%
土師窯		瓶A				0.0	13	0.0%			
点炊		小計		37.0	236	8.6%	223.0	811	44.6%	195.0	729
	原志窯	小片	0.0	9	0.0%						
	土師窯	小型	0.0	710	0.0%	0.0	1	0.0%			
	土師窯	小片	0.0	34	0.0%				0.0	5	0.0%
	土師窯	手づくね土器				36.0	1	7.2%	42.0	2	4.7%
	土師窯	手づくね土器									
	小計		430.0	1,506	100%	500.0	878	100%	900.0	828	100%

区分	種類	器種	Ⅳ区土室遺構・包含層			Ⅴ区土室遺構・包含層			Ⅵ区土室遺構・包含層		
			Ⅳ層部残存率/36	破片数	比率(残存率)	Ⅴ層部残存率/36	破片数	比率(残存率)	Ⅵ層部残存率/36	破片数	比率(残存率)
食類	原志窯	鉢蓋	4.0	2	0.3%	67.0	19	2.0%	186.0	32	3.0%
	原志窯	有白鉢	155.5	29	11.0%	353.0	47	10.7%	968.5	122	15.7%
	原志窯	無白鉢	262.0	57	18.6%	331.0	70	10.0%	821.0	156	13.3%
	原志窯	有×無白鉢	8.0	6	0.6%	7.0	7	0.2%	24.0	16	0.4%
	原志窯	鉢				2.0	1	0.1%	2.0	1	0.0%
	土師窯	鉢(赤ロクロ)	60.0	19	4.3%	97.0	31	2.9%	196.5	64	3.2%
	土師窯	無白鉢	12.0	6	0.9%	12.0	10	0.4%	21.5	28	0.5%
	土師窯	無白碗	70.0	14	5.0%	376.0	98	11.4%	462.0	115	7.5%
	土師窯	有×無白鉢							12.0	4	0.2%
	土師窯	有×無白碗	17.0	13	1.2%	170.0	65	5.1%	198.0	86	3.2%
	黒色土師	鉢(赤ロクロ)	9.0	12	0.6%	16.0	6	0.5%	25.0	20	0.4%
	黒色土師	鉢(赤ロクロ)	3.0	2	0.2%				3.0	2	0.0%
	黒色土師	鉢				18.0	8	0.5%	18.0	8	0.3%
	小計		601.5	160	42.6%	1,449.0	362	43.8%	2,947.5	654	47.7%
	原志窯	香水瓶	0.0	5	0.0%	26.0	43	0.8%	26.0	49	0.4%
	原志窯	甕蓋	0.0	1	0.0%				0.0	1	0.0%
	原志窯	横瓶	0.0	1	0.0%				0.0	2	0.0%
原志窯	甕	6.0	13	0.4%	0.0	11	0.0%	34.0	46	0.6%	
土師窯	甕(赤ロクロ)	0.0	8	0.0%	27.0	79	0.8%	27.0	90	0.4%	
小計		6.0	28	0.4%	53.0	133	1.6%	87.0	188	1.4%	
土師窯	小蓋A	61.0	22	4.3%	121.0	69	3.7%	231.5	127	3.8%	
土師窯	小蓋B	20.0	7	1.4%	70.0	83	2.1%	136.0	126	3.0%	
土師窯	長蓋A	62.5	101	4.5%	429.5	571	13.0%	91.0	285	1.5%	
土師窯	長蓋B	22.0	10	1.6%	44.0	193	1.3%	540.0	723	8.7%	
土師窯	鍋A	6.0	6	0.4%	5.0	7	0.2%	27.0	21	0.4%	
土師窯	鍋B				8.0	15	0.2%	16.0	22	0.3%	
土師窯	長蓋B×鍋B	0.0	1	0.0%	0.0	5	0.0%	0.0	8	0.0%	
土師窯	広口釜	6.5	4	0.5%	99.0	115	3.0%	111.0	122	1.8%	
土師窯	釜類A	625.0	5,485	44.3%	995.0	5,305	30.1%	1,884.0	12,162	30.5%	
土師窯	瓶A				0.0	1	0.0%	0.0	14	0.0%	
土師窯	小蓋A×瓶A				14.0	6	0.4%	14.0	6	0.2%	
小計		804.0	5,636	57.0%	1,785.5	6,370	54.0%	3,040.5	13,616	49.3%	
原志窯	小片	0.0	1	0.0%	0.0	1	0.0%	0.0	2	0.0%	
土師窯	小型	0.0	0.0%	0.0%	0.0	26	0.0%	0.0	30	0.0%	
土師窯	小片	0.0	2	0.0%				0.0	5	0.0%	
土師窯	手づくね土器	0.0	2	0.0%	20.0	2	0.6%	98.0	7	1.6%	
小計		1,411.5	5,829	100%	3,307.5	6,894	100%	6,173.0	14,502	100%	

※「×」は「または」に同じ

第4表 土器・陶磁器の器種構成比率(2)

碗で、内面全面に漆が付着する。1125・1126はH区流路14下層から出土した須恵器無台杯Ⅱ(1125)と有台杯Ⅰ類(1126)でともに内外面に漆が付着しており、このうち1126の内面は全面に漆が付着する。

1127はBC区流路2-5e層から出土した土師器小型器台で、外面と受部内面にヘラミガキ・赤彩を行う。1128は弥生時代中期の小松式の釜で頸部から胴部にかけて櫛状工具による直線文・鋸歯状文を施す。出土地点は不明。1129・1130は縄文土器でB・C区流路1・2から出土した。1129は中期前葉の新崎式、1130は後期中葉の加曽利B1式と考える。

1131～1133は製塩土器である。1131はバケツ形となる大型製塩土器の口縁部で内面はハケム調整、外面には粘土紐の巻き上げ痕が残る。H区流路14下層土器集中地点4から出土した。1132・1133はB・C区から出土した底部破片で、2点とも底部の粘土板の外側から粘土紐を巻き上げるタイプのものである。製塩土器は約9,500g出土しており、大半はH区流路14からの出土であるが(約8,800g)、B・C区、E区からも少量出土している。いずれもバケツ形で底部は粘土板の外側から粘土紐を巻き上げるタイプのものである。

3 土 製 品

土製品には支脚・紡錘車・土鍾・土器片転用研削具などがある(図版62・63 1134～1161)。平箱(内法54cm×幅34cm×深10cm)で0.5箱程度出土した(整理後の箱数)。以下、種別毎に記述する。

支脚(図版62 1134～1135) 1134・1135は円筒支脚で円形の透かしを持つ。1134はH区流路14の下層、1135はB・C区流路1からの出土である。ともに製塩土器に伴う支脚の可能性はある。

1136～1139は円柱型の支脚である。いずれもH区流路14からの出土で、上層出土のものも存在するが、本来下層の土器群に伴う時期のものとする。1140も支脚と考えたが他の円柱型の支脚に比べ著しく細く長い。古墳時代前期の高杯の脚部の可能性も考えられる。

紡錘車(図版62 1141・1142) 2点出土し2点とも図示した。ともにH区流路14下層土器集中地点2からの出土で、1141は断面形が台形、1142は長方形となる。

土鍾(図版62 1143～1146) 太型のもの(1143)と細型のもの(1144～1146)がある。1145は下端に「V」字状の欠損がある。他に太型土鍾の破片が4点出土している。

転用研削具(図版63 1147～1161) 小型・平面形が円形で側面に摩耗痕がみられ「土器片円盤」と呼称されることもあるもの(1147～1155)、大型で正面・側面に摩耗痕がみられるもの(1156～1161)がある。1147は土師器長釜または鍋B系の胴部破片を利用したもので、他のものに比べ大型である。1148は珠洲焼甕または壺T種の胴部破片を素材としたもの、1149～1153は瓷器系陶器の壺・甕・播鉢などの胴部破片を素材としたもの、1155は肥前系陶器甕もしくは皿の底部破片を素材としたものである。1156～1160は須恵器甕を素材としたもので、このうち1157～1160は同一個体の甕(図版46 792)の胴部破片を素材としたものとする。1161は珠洲の甕または壺T種の胴部破片を素材としたものである。

4 石器・石製品

石器は平箱(内法54cm×幅34cm×深10cm)で3箱出土した(整理後の箱数)。砥石や温石など古代か

ら中世の石器の他に、打欠石錘・磨製石斧・石鏃・打製石斧・磨石類・筋砥石・小玉・管玉など古墳時代から縄文時代の石器も定量存在する。

1162～1167はH区流路14から出土した石器で、1163が上層出土であるほかは下層出土である。1163は粒子の細かい泥岩製の砥石で鴨滝産の可能性がある。1165は砂岩製の凹石で、古代以前の石器の可能性もある。

1169・1170・1172・1173はB・C区流路1・2出土の砥石で、1169・1170が5e層、1172・1173が2層からの出土である。1172・1173は軽石を素材とした砥石である。

1174は断面形が三角形の特異な形態の砥石、1175は凹孔を持つ滑石製の石製品で温石の可能性もある。

1171・1176～1185は古代以前の石器で、このうち1176～1181・1185は縄文時代の石器と考える。1176～1178は石錘、1179は磨製石斧・1180・1181は石鏃、1185は打製石斧である。1185は珪化した頁岩を素材とする。

1171は左側面に筋状の窪みがある筋砥石である。正・裏面に円形の浅い窪みがある。年代は弥生時代中期から古墳時代前期と考える。1182・1183は滑石製の小玉、1184は径6mmとやや太い緑色凝灰岩製の管玉である。年代は、1182・1183が古墳時代中期を中心とする時期、1184は古墳時代前期後半を中心とする時期の可能性が高い。

1186～1188は叩石・凹石などで、古代から中世の遺物の可能性もある。

5 製鉄関連遺物・金属製品

フイゴ羽口 (図版65 1189・1190) 2点とも径約7cmのフイゴ羽口である。1189はB・C区流路1、1190はH区流路14から出土した。フイゴ羽口は約1,620g。平箱(内法54cm×幅34cm×深10cm)で1箱出土した(整理後の箱数)。B・C区が1,073gと過半を占めるが、H区からも509g出土している。B・C区流路1・2やH区流路14から一定量出土しており、古代のものが多いと考えている。

鉄滓 (図版65 1191) 1191は凹部を持つ鉄滓である。凹部は敲打や研削などにより人工的に作られたものとする。鉄滓は約25.8kg。平箱(内法54cm×幅34cm×深10cm)で6箱出土した(整理後の箱数)。このうち約21.7kgがB・C区からの出土である。

金属製品 (図版65・66 1192～1235) 金属製品は平箱(内法54cm×幅34cm×深10cm)で2箱出土した(整理後の箱数)。煙管や簪、銭貨の寛永通宝など江戸時代(以降)と考えるものの出土も多く、これらについては図化しなかった。図示したものの中にも近世以降の金属製品が含まれている可能性がある。

1192～1198はH区流路14出土の金属製品で、刀子(1192～1194・1197)・曲刃鎌(1196)・帯金具の丸軋(1198)などがある。1198は外面に漆が付着する。1199はB・C流路15e層出土の刀子である。全長約30cmで、刀子としては大型である。

1207～1210は銃弾で4点出土しすべて図化した。4点とも球形の銃弾で、最も大型の1207は径15mm、重さ18.1g。最も小型の1210は径10mm、重さ5gである。

1210～1235は銭貨である。寛永通宝以外の銭貨は59枚出土しており、内訳は唐銭4枚、北宋銭36枚、明銭10枚、その他・不明9枚である。

6 木 製 品

箕輪遺跡では、自然流路から多量の木製品が出土した。多様な種類が認められるが、挽物盤や曲物底板などの容器類が目立つ。B・C区での流路では、容器に加えて畜串の多さも特筆される。流路以外の遺物では掘立柱建物の柱根が挙げられる。残存部分の下半すべて加工痕が認められるものや平坦な底面を持つものなど、建物によって異なることもある。全体の出土量は、小型木製品が平箱（内法54×34×10cm）185箱、大型木製品は150×90×60cmの水槽6つ分（平箱換算で223箱）にのぼる。

A 記載の方針

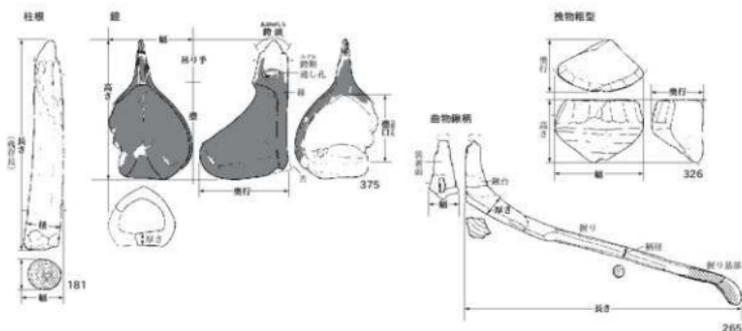
分類・呼称 器種が明らかなもの、推測できるものについては『木の考古学 出土木製品用材データベース』[伊東・山田編 2012]・『木器集成図録 近畿原始篇』[奈良国立文化財研究所（以下、奈文研とする）1993]『木器集成図録 近畿古代篇』[奈文研 1985]に従ったが、特定できないものも多く、『木の考古学』における木製品分類のような器種の細分までは記していない。容器のうち、漆塗りのものを「漆器」あるいは「漆塗り□□（無台盤など）」としたが、それ以外は白木地のものである。敢えて「白木地□□」とは表記しない。曲物底板については、木釘孔の認められるものを底板とし、認められないものは円形板とした。そのため、本来は底板であってもその個体の残存率が低いために木釘孔がなく、円形板としたものもあろう。また、周縁が有段となり（奈文研分類Dタイプ）木釘孔の認められないものは『木器集成図録』に倣い蓋としたが、本来の用途とは異なる可能性がある。

それ以外の用途不明のものについては、形状・断面形から、便宜的に以下のように分類した。ただしこれは記述する際の便宜的なもので厳密な分類ではない。棒状（円）：断面形が円形の棒状のもの。ただし、断面が多角形でも、円形を志向したと思われるものは、ここに分類した。棒状（角）：断面形が多角形で、幅と厚さの比率が概ね2:1未満の棒状のもの。棒状（平）：断面形が多角形あるいは楕円形で、幅と厚さの比率が概ね2:1程度の扁平なもの。棒状としたものの幅は小型品であれば4cm程度におさまる。板状：幅と厚さの比率が概ね3:1程度以上のもの。短冊状：板状のうち、厚さ5～6mmまでの薄いもので、幅は3cm程度までのもの。加工材：棒状にも板状にも該当しない不定形なもの。

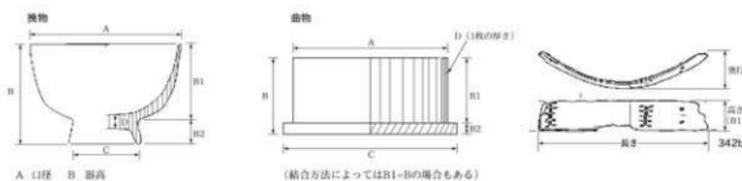
器種の特定できないものは、遺物の天地の判断も困難な場合が多い。天地が不明なものについては、レイアウト上、長い面を縦方向とした。上下とも欠損している棒状や板状のものについては、図化あるいは写真撮影での設置の容易さから決定している場合があり、本来の天地とは異なる可能性があることを予め承ていただきたい。なお、本文中の「現状」とは保存処理が施された状態のことを指す。

部位名称と木取り 部位名称と計測位置は第21図のとおりである。第21図には普遍的に出土するのは掲載していない（柱根を除く）。観察表の記載は、容器以外は基本的に長さ（残存長）、幅、厚さであるが、幅と直径が大きく異なる場合はどちらも記載した（第21図柱根）。木取りについては第23図のとおりである。

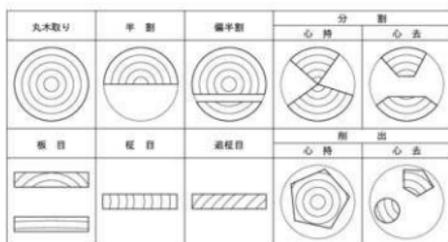
加工痕の表現 加工痕は新旧関係を意識して表現するように努めた。柱根や杭の加工痕付近は劣化が進んでいる場合が多いが、これは「柱材を柱穴に設置するまでに生じた損傷の原因として、周囲よりも腐蝕が進行しやすくなった」可能性があるという[荒川^{ほか}2004]ことから、青田遺跡に倣い範囲を図化している。



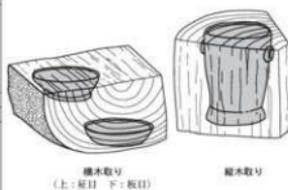
第 21 図 木製品の部位名称と計測部位



第 22 図 挽物・曲物の部位名称と計測部位 (挽物は [春日aa 2012] より転載・改変)



第 23 図 木取りの分類



B 各 説

地区・遺構・包含層の順に述べ、さらに分類ごとに述べていくが、容器以外の製品は出土数が少ないものも多く、場合によってはまとめて記載することとする。

1) B・C 区

SB1 (1～11)

1・2は中柱、3～7は身舎、8～11は廂部分の柱根である。劣化が著しく加工痕の不明瞭なものが多い。1・10・11は底面が残存せず加工痕は不明である。2・7は尖度の異なる2面を持つもので、その

6 木 製 品

分類群	品種名	品種別名	流1	流2	流14上	流14中	流14下	流14内産物	BC区	D区	E区	F区	G区	H区	計		
容器	漬物	無白鹽	20	28		11	47		1	4	2				113		
		有白鹽	1	2		1	2								6		
		有白鹽	6													6	
		無白鹽				2	3									5	
		有白鹽	1	2		2	3									8	
		有白種		1												1	
		黒？(漆器)	1													1	
		蓋				1										1	
		合子					1									1	
		鹽未成品						8								8	
		粗型						5								5	
		漬物	身		1		1	8									10
			底板のみ	3	7		15	29			1						55
			蓋	1			2	3									6
	蓋板のみ		4	3		3	16									26	
	側板のみ		11	14		4	22			3	3					57	
	別物		鉢 未成品か			1										1	
	工具	籠	横籠					1			1	1				3	
			納		1		1	1		1	1					5	
		釣子形・鮎杖品		1												1	
			刷毛					1								1	
炎火具		火燗件					1								1		
		火燗口		1	1	1	2								5		
農耕土木具		鍬	直柄鍬身(平鍬)				1	3				1				5	
			曲柄鍬身				1									1	
		鋤	一本鋤(平鋤)		1											1	
			鋤柄				1									1	
	件	整件	1			2									3		
	田下駄	板田下駄					1								1		
編み具	鉢	3			2									5			
漁撈具	浮子					4									4		
	網の柄					2									2		
武器・武具・馬具	弓	素木弓				1									1		
		弓腔					1								1		
	腰掛具	横物	腰掛下駄	1	1										2		
		帯	横籠(流出し)	1			1								2		
調理加工具	納約	身・身+柄				4								4			
		柄				1	6								7		
食事具	箸	(机)	2	1	1	5	19		1	3					32		
		(天板)					1								1		
祭祀具	香申	(香申状も含む)	15	3		2	16								36		
		形代	刀子形	1			1								2		
		馬形	2												2		
		舟形か				1									1		
経量具・文房具	木簡・札	木簡				3	3								6		
		その他製品	2				3								5		
部材(建築材含む)	短冊状		8	5		5	29		1	5	2	1			56		
			8	12		11	55		1		1	1		1	90		
	板状(円形板含む)		8	17		9	41		3(1)	18	7	14	1	1	119		
		板物素材か		1			5								6		
	棟状		18	6	2	23	100		1	9	5	2	2	1	169		
		加工材	11	14	1	8	62	1	3	2	1				102		
	柱根		1			1			1	21(16)	41(43)	29(16)			4	98	
		礎盤(?も含む)				1	1				1(1)				3		
	板杭											3			3		
		杭	24	21	2	11	32	25	28	12	18	9				182	
計			155	141	8	135	553	27	61	60	97	28	3	23	1292		
			296			724					272						

*種実はこちらに含まれていない。()は別立村建物から出土した数(内訳)である。

第5表 木製品の集計

角度は側面から見てそれぞれ20°と48°、6°と50°でやや異なる。6は裏面が劣化して大きく崩れているが、底面の加工痕は比較的明瞭で、断面は七ないし八角形を呈する。タンニンが底面全面に付着している。そのほか、1・2・7・11で底面にタンニンが認められる。樹種は7がケヤキのほかはすべてクリである。9は未分析だが広葉樹と判断できる。

SE7 (12～15)

4点出土した。12・13は曲物側板である。12は本綴じの部分で、刃物痕が1本認められる。綴じの目安としたものであろうか。本綴じが2列、小綴じは1列以上存在する。本綴じの前列は内3段綴じと推測できる。14は円形または半円形の板であらう。方形の孔が1か所、円形の孔が大小4か所確認できるが不規則な配置である。刃物痕も認められる。

流路1-5層 (15～94)

「5層」としたが、5層はa～eの5層に細分され、木製品は5b・5c・5d・5e層から出土した。このうち最も多いのは5e層で、次いで5c層である。流路1では5層からの出土が91%を占め圧倒的に多いが、5層のほか3層、6～8層からもわずかではあるが出土している。

撈物 (15～35) 31点出土したうち、無台盤が多数を占める。無台盤 (16～27)のほかは有台皿 (28～33)、有台盤 (34)、有台椀 (35)が認められる。流路からの出土点数と内訳は第22表のとおりである。有台盤は7点出土したが、本遺跡では流路1が最も多い。流路1出土の有台盤は口縁の立ち上がりかほとんど認められず、皿状を呈することが特徴的である。無台盤・有台盤ともに、内面あるいは外面、内外面に刃物痕を有するものが多く見られる。

無台盤は口径14.0～22.3cmのものがある。16の内面にはわずかに黒色の付着物が認められ、黒漆塗りであった可能性もある。横木・板目取りであるが、板目取りのものはわずかである。19は内外面黒漆塗りで、ほかの個体に比して器壁が薄い。22・25・26は内外面とも比較的平滑に仕上げられる。23は口縁部が一部歪んでおり、その部分は体部が急角度で立ち上がる。27の底部外面中央には轆轤爪痕が4か所残り、爪痕の周縁に凹みがめぐる。口縁外面には加工痕がめぐる。轆轤爪痕は18・21・26にも残る。器形にはそれほど個体差は見られないが、体部の立ち上がりが直線的で底部境が明瞭なもの (26・27)と、緩やかに立ち上がり底部境が曖昧なもの (19・22・23など)がある。

有台盤は口径13.8～17.5cmのものがある。28・32は底部外面に加工痕が残るが完成品と判断した。32は外面の1/2程度が炭化し、内外面に刃物痕が認められる。炭化した後に刃物痕が付される。35は内外面黒漆塗りの有台椀である。高台接地面のみ漆が剥落していることから、使用による摩耗と推測できる。

器種名	器種細分名	流1	流2	流1・2計	流14上	流14中	流14下	流14計	BC区	D区	E区	合計	
撈物	無台盤	20 (1)	28	48	11 (1)	47	58	114	1	4	2	113	
	有台盤	1	2	3		1	2	3				6	
	有台皿	6	0	6								6	
	無台椀	0	0	0	2	3	5					5	
	有台椀	1 (1)	2 (1)	3	2	2	4					7	
	有台杯	0	1	1		1		1				2	
	皿か (漆器)	1	0	1									1
	蓋					1		1					1
	合子					1		1					1
	検検						1	1					1
	器未成品							8	8				8
	粗型							5	5				5
	曲物	身	0	1	1	1 (1)	9 (1)	10					11
底板のみ		3 (1)	7 (1)	10		15	29	44		1		55	
蓋		0	1	1		2	3	5				6	
底板のみ		4	3	7		3	16	19				26	
側板のみ		11	14	25		4	22	26	3	3		57	
割物	鉢 (未成品か)				1			1				1	
	樽					1	6	7				7	
	盤か						1	1				1	
	櫃か						2	2				2	
		47	59	106	1	45	155	201	4	8	2	321	

() は漆塗りの内訳

第6表 容器の集計

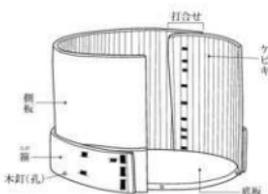
曲物(36~49) 18点出土したが大半が側板のみで、全形がわかるものはない。36は直径35cmを測る大型品で、側板の下部には箍を有する。側板は身・箍ともに柾目板が使用される。側板・箍ともに2か所で綴じ、側板と底板とは12か所木釘で結合される。木釘は2か所残る。内面は全面に縦方向のケビキが入り、部分的に斜方向にも施される。37・38・44~48は側板である。47は底板に結合するものであるが、それ以外は身か蓋か判断できない。37は板厚0.7cmとかなり厚く、大型品の可能性もある。縦方向に加えて斜め2方向からもケビキが施される。44のケビキは全面ではなく、一部確認できない部分がある。図の正面に樺皮綴じ孔、奥に木釘孔が1か所認められる。45は内面全面に黒色付着物が認められ、樺皮が2か所残る。器壁が0.1cmと非常に薄く、木取りは板目である。

40・41は底板、39・42・43は盖板である。49は底・蓋のどちらか断定できないが、片面に黒漆が塗られていることから曲物と判断した。漆は、両側縁では縁取りのように付着しているが、それよりも内側では不明瞭である。内外面とも刃物痕がわずかに見られる。39は側縁に台形状の抉りが見られることから、転用した可能性がある。

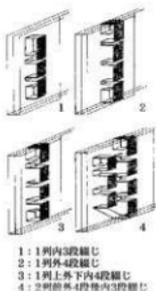
容器以外の製品(50~73) 50は挽き出しの横櫛で、肩部に丸みを持つタイプのものである。歯数は3cmあたり30枚と細かい。樹種はイスノキで、新潟県には分布しないことから、搬入品と判断できる。51は上部1/3ほどから上端に向かってやや細めており、木釘が1か所打ち込まれている。形態と大きさから、柄杓の柄と推測できる。断面形はほぼ正方形を呈する。52は丸木の下端を丸く加工し、上部をやや細く作出したもので、竖杵の一部と考えられる。54・55はほぼ同じ法量であるが、同一の材ではないようである。半割材の両側縁中央付近に「く」字形の抉りを入れる。樹種はどちらもリョウブである。なお、この2点と同様のものが、55と同じグリッド(E11n12)から出土している。56は曲物盖板を再加工し杓子状にしたもので、長さは16.6cmである。もとの盖板のサイズとしては、本遺跡から出土している盖板のなかでは小ぶりである。側縁の縁はそのまま残し、柄上部にわずかに稜を有する。表裏面に刃物痕が見られる。

57~66・69~71は斎串、67・68は馬形、72・73は斎串の可能性のあるものである。斎串は側面の切込みが上からのみのもの(58~62)と、上から・下から・上からの3か所に切込みを入れるもの(63~65)などがある。66は上からの切込みに加えて中央部分で緩やかに抉る。67は左側面の抉りによって頭と頸を区別し、右側面の2か所の抉りによって鞍を表している。68も同様の形状と推測されるが全形は不明である。表裏面に刃物痕が多数認められる。なお、斎串・形代は流路1では20点出土したが流路2では1点のみであり、様相が異なる。

部材・加工材など(74~90) 74は短冊状、75~78は棒状である。75は断面正方形を呈し、下部をわずかに細く作出するが加工痕は不明瞭である。上部には細かい加工が認められる。76~78は箸状木製品の可能性もある。79は右側縁下部に半円形の小さな抉りを有し、裏面には表皮が残る。80・81



第24図 曲物の部位名称



1: 1列内3段綴じ
2: 1列外4段綴じ
3: 1列上下内4段綴じ
4: 2列前後4段内3段綴じ

第25図 曲物の綴じ方模式図

はほぼ同一規格の部材または製品である。楕円形を縦半分にしたような形で、弧状を呈する側縁は外形に沿って孔が約1cm間隔で配される。図の上下側では間隔が狭いのに対し中央付近ではやや広く、1.8cmとなるところもある。孔と側面との間には筋状の圧痕が認められるか所があり、紐で縛って使用したことがうかがえる。もう一方の側縁は直線状で、孔は上部に2か所、さらに間隔をあけて2か所見られる。側面には細かい加工痕、片面に刃物痕が認められる。82～85も部材である。82は両側とも柄状となる。83は両端を丸く整え、左側縁に孔をあける。不整形であるが欠損ではない。85は上部左右に小孔が2か所あるが、右側は未貫通である。上下端とも残存するが、曲物側板の転用品である可能性も考えられる。86は四角柱状の部材で、中心にある柄孔には柄が残る。両側面には刃物痕が見られ、特に左側面下部は刃物が当たったことにより凹み変形している。上部は劣化が進み加工痕は不明瞭である。形状から木槌の頭部などの可能性もあるが、両端部に敲打痕は確認できない。87は丸木の先端のみ丸く加工するが、下端は欠損のため全形は不明である。節の多い材を使用している。88は断面方形の棒状部材である。中央には欠込みがあり、その上下には一辺1.5cmの孔が4か所配され、うち3か所で柄材が残る。右側面の先端近くには木釘孔があり、木釘がわずかに残る。裏面上部には削り取ったような痕跡があるが、意図的なものかどうかは判断できない。表面に加工痕がわずかに認められるが不明瞭である。心持材であるが、心は材の中心ではなく偏っている。89は曲物蓋板の側縁を短辺として長方形に再加工したものであるが、曲物側板と結合していた時の榫皮が残る。表裏面に刃物痕が認められる。90は片端近くでわずかに凹むが、紐などの緊縛痕は認められない。もう一方の端部は欠損している。柄杓柄の可能性もある。

杖(91～94) 91表面は加工範囲が広く、裏面は下端近くのみである。下端はつぶれている。92は表裏面2方向からのみの加工で、節も一部平坦に加工される。93・94の加工も2方向からのみである。

流路1-6a層(95～97)

95・96は大きさが異なるものの形状は近似する。丸木を使用するが全面を加工し、96については断面をやや方形に仕上げている。上端は細かく加工し中心部をわずかに突出させる。97は刀子形である。刀身と柄との間に段を有し、身と柄を区別する形態で、比較的丁寧なつくりである。刀身と柄の長さの比率はほぼ同じである。刃先は細かく欠損しているが、使用によるものかどうか判断できない。

流路2-5層(98～111)

流路1同様、5a～5e層のものを一括した。流路1同様、5層からの出土が91%と大多数である。ただし流路2では5c層がその半数を占め、次に5d層・5e層となる。また、5層以外では3層、4層、6層、8層からわずかに出土している。

撓物(98～118) 32点出土した。流路1同様に無台盤が多数を占める。無台盤(98～113)のほかは有台盤(114・115)、有台椀(116・117)、有台杯(118)が認められる。出土点数と内訳は第22表のとおりである。無台盤・有台盤ともに、内面あるいは外面、内外面に刃物痕を有するものが多く確認でき、これは遺跡全体に共通する。

無台盤は口径16.6cmから37.8cmのものが認められる。98は口縁端部に幅広の面を持つ。内外面に刃物痕が見られ、体部外面に加工痕を残す。99は器壁が薄く、口縁端部は内外面とも面を有する。底部には轆轤爪痕と思われる針状の痕跡が4か所認められるが、断定はできない。101は轆轤爪痕が明瞭に見られる。底部周縁は削られ厚みを減ずるが、中央部分は厚みを持つ。未成品の可能性もある。103は体部の立ち上がり直線的で、大きく開く。110も同様である。104はほかの個体と器形が異なるが、劣化と乾燥による歪みが影響している可能性がある。107は内外面とも平滑に仕上げられる。110の底

部外面は轆轤目が明瞭に観察できる。刃物痕と炭化の痕跡もわずかに認められる。112 外面も一部炭化している。内外面とも刃物痕が認められる。113 は本遺跡では最大の個体で、器形が他の一般的なものとは異なる。口径と底径の差が小さく、非常に浅い。口縁端部は摘みあげられたような形状で、平坦な面が作り出され、溝がめぐる。外面底部周縁はロクロケズリ痕が明瞭である。有台盤は 2 点のみの出土で、口縁端部まで残存する個体がなく、全形は不明である。114 は高台内側の削りが一様ではなく、実測図左側では高台接地面とその内側とにほとんど差がない。轆轤爪痕が 5 か所明瞭に認められる。116 の有台碗は形態が緑釉陶器に類似し、口縁は玉縁状である。117 は有台碗で、底面の器壁が非常に薄くなっているが、劣化によるものかもしれない。高台内側は明瞭な稜を持たず崩れた印象である。118 は本遺跡唯一の有台杯である。口径 10cm と小型で、体部の立ち上がりが垂直に近い。底部外面はわずかに凹むが高台の内側は削出されない。全面黒漆塗りであるが、底部外面のみ粗い。高台端部は欠損し漆は剥落している。

曲物 (119～137) 26 点出土した。流路 1 同様、側板が多数を占める。119 は底板と側板が結合した状態で、木釘も 4 か所すべて残存するが、上端は欠損しているため器高は不明である。内面のケビキは縦方向に加え斜方向にも施されるが、斜方向ケビキは部分的である。内面全面に黒色付着物が認められ、黒漆の可能性もあるが断定できない。120～123 は底板である。120 の内外面とも加工痕は比較的明瞭で、側面にも部分的に加工痕が見られる。木釘は 6 か所のうち 4 か所で残存する。121 は片面、おそらく内面が黒漆塗りである。側縁に曲線状の刃物痕が認められるが、外形と平行せず取束する。122 下面図右側の木釘孔は欠損のため孔が大きく見えているが、左側が本来の大きさで直径は 2mm 程である。130 と同じ位置から出土しており、同一個体の可能性がある。124 は直径 52cm と大型であり、内外面に刃物痕が多数確認できる。周縁に段を有し木釘孔が認められないことから便宜的に蓋板としたが、側板との結合が不明であることから底板の可能性も否定できない。あるいは楕円形である可能性もある。125～127 は蓋とした。125 は蓋板の一部欠損しているが全形がわかるものである。蓋板と側板との結合は 4 か所、側板同士の結合は 2 か所で、本綴じは上内外下 3 段綴じである。蓋板周縁に、側板結合とは関係のない貫通孔が 1 か所見られる。126 は周縁の段を作り出す際の刃物痕、加工痕が観察できる。榫皮は 2 か所残るが、その位置から 125 同様 4 か所で結合したと思われる。128～137 は側板で、137 は大型品と推測される。131～133・136 はケビキが認められない。129・131 は榫皮綴じ（いずれも内 3 段綴じ）が残る。132 は木釘孔と榫皮綴じ孔が確認でき、孔は近接して 2 か所あけられている。137 の一見孔に見える部分は欠損である。

容器以外の製品 (138～145) 138 は火鑽白であるが、棒状の製品を転用した可能性が高い。上端は丸く作り、表面は比較的丁寧に加工し面取りされるが、裏面は割れ裂いた面のままであることから、おそらく本来は断面円形の製品であったと推測できる。孔のある右側面中央付近は加工痕が見られるが、火鑽白として使用する以前の加工である。140 は円形板と推測したが、曲物底板である可能性もある。141 は木軸で、柄の上部と身の先端が欠損している。身の断面形は菱形を呈し、前面と後面の区別が困難である。肩は柄から水平のび、肩幅と刃部最大幅とがほぼ同じという形態である。表とした面には擦痕、裏とした面には圧痕やキズが観察できるが、キズは新しいものである可能性が高い。142 は連筒下駄で、前壺の位置が右に偏っていることから、左足用であることがわかる。前筒はすべて欠損しており、後筒も端部が欠損している。裏面の筒と台座の境界では、筒を作り出す際の刃物痕、擦痕が残る。踵と接する部分は剥落が認められる。143 は上部を山形に作る短冊状で、番車の可能性が高い。144・145 も番車の

可能性がある。上部を欠損するが下部は両側面から削り込む。145 下部は細かく削られていることから若干階段状を呈している。

部材・加工材など (146～157) 146 は上半分を表裏面から加工、上下端をV字状に尖らせる。下端の加工は折り取りの痕跡が部分的に見られた。表面にはわずかながら刃物痕も見られる。147・148 はどちらも短冊状で加工痕が比較的明瞭である。150 は上下端が加工される。152 は上下とも欠損している。箸状木製品の可能性もある。153 は先端をわずかに細く削り、わずかに圧痕も観察できる。もう一方の端は欠損しているが、柄杓柄の可能性も考えられる。155 は先端の加工が不明瞭であるが、下端から13cmほどの部分に筋状の圧痕がめぐる。これも柄杓の柄かもしれない。154 は上下端を加工するが表裏面は割り裂いたままの状態と思われる。礎盤あるいは製品の素材であろうか。樹種はトチノキであることから、挽物盤などの素材となる可能性も考えられる。156・157 は部材である。156 は中心線上に孔が3か所あけられるが間隔は一定でない。

流路 2-4 層 (158)

出土は3点のみで、158 のほかは板状である。158 は中心線上に孔が3か所あけられ、間隔はほぼ同じである。上下とも欠損している。

出土位置不明 (159)

丸木を細め、端部を有頭状に作りだすもので、柄の端部もしくは陽物形の可能性が考えられる。劣化のため一部加工痕が不明瞭である。樹心が抜け空洞化している。

2) D 区 (160～166)

掲載遺物はすべて包含層出土であることから、一括して述べる。160 は挽物無台盤で外面に加工痕が多数残る。下面図左側は割り裂いた面（以下、割裂面とする）と思われることから、加工によって右側の厚みを減らそうとしたものと推測できるが、未だ平坦ではない状態である。轆轤爪痕が5か所、刃物痕も明瞭に残る。樹種はヒノキで、本遺跡ではこの1点のみである。それに加えて、160 は他の個体と比較して稜が明瞭で加工痕、轆轤目も明瞭であり様相が異なることから、より新しい時期に帰属する可能性がある。161 の曲物底板には木釘が2か所残るが、木釘は2cm以上であることが確認できた。162・163 は曲物側板で、いずれもケビキは縦に斜方向が加わる。164 は側縁に1か所孔があり、近接して細い切込みのようなものが見えるが、人為的なものかどうかは判断できない。165 は横槌である。柄から肩にかけてなだらかに広がり、身と柄の境界が不明瞭な形態である。身の表面には多数の刃物痕が深く入ったことにより、若干小さくなったと思われ、また劣化も進んでいる。柄の加工痕は表面では明瞭であるが、裏面は劣化と欠損のため大部分が不明瞭である。身の一部は炭化している。166 は工具柄が破損したものを火鑽白として再利用したものであろう。柄元にわずかな切込みを入れており、直下はわずかに凹むが、明瞭な緊縛痕は確認できない。茎孔は細かい削り込みにより作り出していることが、割れた面（実測面の裏面）からうかがえる。茎孔の大きさから刀子あるいは鑿の柄と考えられる。火鑽白としては破損した側面下部を使用している。

3) E 区

SB3 (167・168)

167 は劣化が著しく表面もヒビが目立ち、端部は残存しない。わずかに側面の加工痕が認められる程

度である。168も劣化が著しい。両側面から加工される。表面は割裂面が残り、本来は丸木取りであったものが破損したと推測する。実際にこの個体も3片が接合している状態である。樹種はキハダである。

SB2 (169～171)

169は劣化が進み加工痕は不明瞭であるが、底面は残存していると判断できる。全体に振れている。169と170とは法量が全く異なるが、樹種は同じである。170も169同様、劣化が進み下端の加工痕は不明である。171はP20-2から出土した礎盤である(図版121)。下端は表裏面から加工し断面V字状としているが、上端は不明である。SB2では上記の掲載個体のほか、P33から175と近似した加工材が出土している。柱根の樹種は3点とも(167も含む)カツラである。

SB1 (172～175)

172～174は下部全面を緩やかな角度で削り、加工痕の範囲は下端から30～50cm程度にも及ぶ。このような形態の柱根が確認されるのはE区SB1のみである。これらの柱根は3個体とも木取り・樹種が異なる。172は残存長90cmである。木取りは心去削出で木目はほぼ直線であることから、素材は直径1mを軽く超えるような相当大きい材であったと推測される。174も分割材だが心持材であり、表皮近くまで使用しているとすると、素材の直径は30cm前後となる。173は丸木材である。中央付近に横断する痕跡は新しいキズである。樹種は172がオニグルミ、173がケヤキ、174がクリである。175は両端が加工されており、根絡みなどの可能性が考えられる。なお、現存するものはすべて掲載したが、このほかにP1-3、P1-4、P3からも柱根を検出したとの調査記録がある。

SB6 (176・177)

いずれも加工痕のある下部のみ残存しており、劣化しているものの加工痕は明瞭である。2点とも樹種はカエデ属、木取りは丸木取りである。掲載個体以外にP108・P112からも下端部が出土している。肉眼観察では樹種は同じものと推測する。

SB8 (178～181)

178～180の3点は下部をV字状に細く加工するのに対し、181のみやや平坦に作り出す。加工痕は明瞭で、加工痕には年輪が明瞭に見えるのが特徴的である。樹種同定を行ったのは178・181のみで、トネリコ属シオジ節であるが、肉眼観察から残り2点も同じである可能性が高い。

SB4 (182～185)

183は節のある材で、直径約7cmと細い。184は表面が割裂面で加工は右側面しか認められず、柱根の一部と判断できる。185の裏面も劣化が著しく加工痕が見られないが、本来の面であったかどうかは判断できない。4点とも幅広いヒビが入り劣化が著しい。すべてオニグルミである。掲載個体以外ではP38・P54・P72から出土したとの記録がある。

SB7 (186)

下部は加工痕も明瞭であるが、それ以外は劣化が進んでいる。加工は表面と左側面の2面のみである。掲載遺物以外はP41(図版122)、P15・P29から出土しているが、破片のみである。

SB117 (187～194)

すべての柱穴に柱根が残存していた。棟持柱2点のみ様相が異なるが、ほかの6点は樹種・木取りとも共通している。木取りは分割材であるが、細かく見ると、心持材で所謂「ミカン割」のもの(189・192)、心去材で「ミカン割」のもの(187・188)、心去材で扁平なもの(190・191)がある。加工はSB1と対照的に底面を平坦に作り出す。劣化が進み大部分の加工は不明瞭である。樹種はすべてオニグルミで

ある。棟持柱 193 は半割材で底面平坦、樹皮を有し、樹種はトネリコ属シオジ節、194 は下部を V 字状に加工する。樹心は図の左側に偏っているが丸木取りで、樹種はカツラである。

SA116 (195～199)

8 点のうち 5 点を図化した。①から④、⑤から⑧に向かって深く打ち込まれているが(図版 17)、それが杭の残存長にも反映している。丸木の下部を尖らせるのみであるが、196 は分割材の可能性もある。樹種は 196 以外すべてカエデ属と同定され、196 も肉眼観察から同じである可能性が高いと考える。掲載個体以外の樹種は、肉眼観察では広葉樹と判断できるが、詳細は不明である。

ビット・杭・包含層 (200～208)

掘立柱建物以外のビット・杭、包含層から出土したものを一括した。200 は P48 からの出土した柱根である。加工は 2 面のみであるが、加工の深さは左右の面で異なる。201・204 も 2 面のみ加工であるが劣化が著しく、加工痕は不明瞭である。202 は 3 面を加工するもので、裏面には表皮が残っていた。202・203 は加工痕が比較的明瞭である。205・206 は板状で、下端を斜めに切り落とすが、刃物の入る角度・位置は異なる。どちらも P100 からの出土である。207 は左側縁に方形孔を持つ板状の部材である。孔のある部分から上下に向かってやや薄くなっており、表裏面には加工痕ががすかに残る。208 は黒漆塗りの箸状木製品である。漆は剥落しており新しいキズが目立つ。出土層位から、より新しい時代に帰属する可能性がある。

SD95 (209～213)

209・210 は挽物無台盤でいずれも口径 16.8cm である。210 は口縁部の立ち上がりがほぼ垂直になっているが、全体的に歪みが見られるため、本来の器形ではない可能性が高い。

211 は直柄平鎌の身で、半分ほど欠損している。孔の縦断面はハの字状である。面の前後は判断できなかったため、刃物痕の認められる面を図化した。下部は鉄刃装着のため一段細くなし、刃部は両面から斜めに加工し稜を作り出している。なお、樹種同定分析の切片が採取できず分析していないため樹種は不明である。212 の杭は表皮が残り、上端を斜めに加工している。213 は上端を平坦に、下端を丸く加工し、中央部分を細める。錘と推測するが劣化のため加工痕は不明瞭である。

4) H 区

SB3 (214)・SB4 (222・223)

SB3 では P34・37 から柱根が、P61 からは木片が出土したが、どの個体も劣化が進んでいる。214 はひび割れも著しく、本来の直径は不明である。SB4 では P23・25・53 から柱根が出土したが、SB3 同様劣化が進んでおり、3 個体とも加工痕が不明瞭である。222 の底面は平坦に加工したものと推測されるが、223 は加工の範囲自体判然としない。現状を観察したが半割材か欠損か判断できず、木取りも不明である。なお、SB2 では P5・P42 から柱根が出土している。

SB1 (215～221)

検出したビット 7 基すべてから柱根が出土した。柱の直径は 20cm 前後で、すべて心去材を削出して使用している。底面形態は 2 種類確認できる。ひとつは平坦なもの、もうひとつは尖度の異なる 2 面を持つもので、その角度は側面から見て概ね 10°と 60°である。215・217・220・221 の 4 個体が該当する。劣化が進んでいるものも多く、217 は底面中央以外、215・218 は全体的に加工痕が不明である。219 は表面が若干欠損しており、表面側の加工痕も劣化し不明瞭ではあるが、底面 1/3 ほどに角度が変わる

ラインが認められることから、2面を持つと判断した。216は底面自体の状態は良いが加工痕は不明瞭で、これは摩耗によるものと考えられる。

SX76 (224)

224はSX76のほぼ中央、底面付近から出土した(図版129)。中心部に長方形の孔が見られる。上下端とも劣化しているが、下端右側は加工痕らしき痕跡も見え、概ね本来の形であると推測する。裏面は中央に向かって厚みを減じているように見えるが、劣化が進んだことによるものである。

流路 14-上層 (225～227)

出土数はわずかで、掲載した3点のほかは棒状・加工材・杭が5点出土したのみである。225は割物の鉢であろうか。北陸では該期に鉢の出土例がなく、一辺30cm程度のもは小型の槽としているが、一辺20cm程度と小さいこともあり、鉢としておく。器壁が2～3cmあるのに対し底厚はわずか3mmと極端に異なる。削り痕も不規則に残ることから、未成品の可能性もある。正面には口縁部と平行に長いヒビが入る。平面形はほぼ円形であるが、底部内面は長方形になるように削り抜く。226は火鑽白である。上部は相欠状で、右側縁に2か所切欠き認められるが炭化しておらず、未使用である。227は箸状木製品で、上下端とも欠損している。

流路 14-中層 (228～279)

挽物(228～238) 19点出土している。出土量はそれほど多くないが、蓋や合子といった希少な遺物が認められる。無台盤が最多器種であることはB・C区と変わらない。228・229・231は無台盤で、228底面中央には「主」もしくは「王」の刻書らしき刻みが認められるが、劣化が進み明瞭でない。229は内外面に刃物痕が見られ、外面は炭化した部分のみ刃物痕が残り、炭化部分以外は風化している。本来、刃物痕は全面にあった可能性がある。231は内外面黒漆塗りの優品で、底部内外面には刃物痕が多数残る。230は有台盤で、口縁端部を欠くが口径と底径(高台径)にそれほど差がない器形であろう。体部の立ち上がりは直線的で、縁が明瞭である。内外面に刃物痕が多数残る。232・233は無台碗である。232は歪んでおり、体部の立ち上がりが図の左右でかなり異なるため、そのまま図化した。轆轤爪痕が明瞭に残る。233は轆轤爪痕が1か所認められ、部分的に炭化している。234は有台杯、235・236は有台碗である。235は高台中心部に「王」の刻書が確認できる。236はベタ高台で高さが2.5cmもある。体部がほとんど残っておらず器形は不明である。轆轤爪痕が5か所明瞭に残る。237はつまみを有する蓋であるが、つまみ端部は欠損している。内面には轆轤爪痕が4か所明瞭に残る。木取りは板目取りである。238は合子の身である。体部はほぼ直立するものと考えられるが、現状では口径の1/2近くが内傾している。歪みによるものと思われるが、断定できないことから念のため図化した。

曲物(239～252) B・C区の流路では側板が最も多かったのに対し、流路14では底板の多さが目立つ。中層では65点出土し、うち15点が底板である。239は綴じが2か所あり側板が2枚重ねで残る。上端もしくは下端は残存するが木釘孔は確認できない。243と同じ位置から出土しており同一個体の可能性がある。241は下部に籬をはめるタイプのもので、内面は黒漆塗りである。木釘孔は7か所不均等に配し、木釘は若干斜めに打ち込む。側板にはケビキ痕が部分的に入る。木取りは側板が柱目であるが籬は板目で一致しない。240・242～247は底板である。木釘孔は4～6か所あり、刃物痕が入る個体も多い。直径は17～21cmの範囲でほぼおさまる。240は木釘孔2孔一対でおそらく4か所であると推測できる。また曲線状の焼印を持つ。わずかではあるが断面形が逆台形を呈することから、おそらく掲載した面は底部外面と推測できる。251は蓋、248～250・252は蓋板である。底板と側板との綴じは4か所で、中

心線に対して左右対称であることが多い。251の蓋板側面には加工痕が残り、木取りは珍しく板目である。側板同士の縫じは2か所で4段縫じ以上である。ケビキは側板が重なる部分を中心とした限られた範囲のみである。蓋板上面の左右側縁には曲線状の焼印がある。器高は7.0cmもあることから、身である可能性も否定できない。252蓋板は側板が結合していた部分が凹んでいる。側板は部分的に残存しているが(252b)、高さは2.1cmとかなり浅い。2枚重なった状態で密着しており、外面側の板厚はわずか0.1cmである。

その他の製品(253～273) 別物は図化したものが1点のみであるため本項にまとめた。253は槽で、楕円形を呈すると推測する。口縁部は明瞭な稜を有する。254・255は着状木製品で、どちらも直線状ではない。257は部材であるが曲物側板を転用している。上部左右側面を切欠き、中央に1か所孔を穿つ。260は直径10cmの円形材で、裏面側縁は斜めに加工し断面形は台形となる。小さいが挽物粗型である可能性も否定できない。261・262は錘であろう。長さは約17cmとほぼ一致するが、断面形はやや異なり、厚さは2倍近くの差がある。263直柄平鍔は表面に若干加工痕が見られる。柄孔の断面形から着柄角度は41°～78°となり、孔の上下では角度がかなり異なる。264は鋤柄で刃部は欠損している。面取りを行い、丁寧に仕上げている。裏面側は把手の握部などをやや丸く仕上げしており、図の裏面側が前面となると推測される。裏面には新しいキズが多く見られる。265は曲柄鍔の柄である。鍔台の上端は欠損しているが紐を掛けるための袂りがあったと考える。鍔台の下部には長方形の孔があり、紐掛けと柄により身と結合させたものと思われる。握り基部は部分的に炭化している。266は火鑽白で、上下端とも加工する。表面いっばいに火鑽孔が4か所あり、うち3か所は炭化している。267～269は木筒である。269は内外面とも平滑に仕上げているが、267はささくれが目立ち、268は表面に加工痕が残る。内容など詳細は第七章5を参照されたい。270は素木弓で、端部を削り込み弦を作り出す。全面に細かい削りが施され、節を削る部分もある。節が同じ高さにめぐることから樹種はイヌガヤと推測される。271は斎車で、切込みは上から・下から・上からの3か所である。272は舟形と考えるが、左右側面に木釘が残り、下端には貫通しない孔がある。273は刀子もしくは鑿の柄と推測する。加工は丁寧に、断面円形に仕上げる。下端近くに表面のみ切込みを作出するが、紐等で緊縛したような圧痕は認められない。内面は割裂面と判断した。

部材・加工材など(274～279) 274は短冊状、275～278は棒状、279は加工材である。274上部は加工痕が見られる。上端は平坦に、下部は丸く作り出す。277・278は、上端から10cmほどの部分から先端に向かってわずかに細める。278は上部に細かい削りが認められる。柄杓の柄である可能性も考えられる。279は上端を平坦に切断し、下端は斜めに加工する。表面は加工痕がほぼ全面に認められる。樹種はケヤキで榎目取りであることと、法量から、挽物盤の素材になる可能性も考えたいが、あるいは礎盤かもしれない。

流路14-下層(280～501)

挽物(280～326) 68点出土した。そのうち無台盤が52点と圧倒的に多い。下層の特徴は未成品・粗型が認められることである。280～310は無台盤である。口径14.5～35.4cmのものが出土した。281・282・297・306は体部の立ち上がり直線的である。282底外面中央には「王」刻書が認められる。これは中層出土の2点とは異なり、刻みが深く明瞭である。文字に近接して轆轤爪痕も見られる。284・287・289・292・295・296・304は底外面周縁が凹み中央は盛り上がる。このうち284・304以外は厚みもあり凹凸も残ることから、未成品の可能性が高い。285・286・287・290・309・318の底外面

には同心円状の機械的な圧痕が認められる。中心は針状で器面に深く突き刺したものと推測される。轆轤爪痕の一種であろうか。

291は口径に対して底径が小さく、身がやや深めで、ほかの個体とは異なる。299は底外面にやや深い溝がめぐる。301・302・310は口縁端部に稜を有する。全体的に厚みがありしっかりとしたつくりである。304は轆轤爪痕が5か所明瞭に残り、器壁を貫通して内面にまで現れる。底外面には直径3mm程の浅い凹みが2か所あり、その内部は炭化している。308内面は斑状に炭化している。板目取りである。309は中心に向かって厚みを減ずる。底外面に加工痕と刃物痕がわずかに残る。

311・312は有台盤である。312は高台を明瞭に作り出し、内外面とも平滑に仕上げる。313～315は無台碗としたが、313は杯としたほうが適切かもしれない。316は金属器を模倣したものであろうか、口縁部は内弯し、内外面ともに沈線が入る。317は有台碗でベタ高台を持つ。高台の厚さは5.5cmにも及ぶが、器面の調整から完成品と判断した。318は有台碗の高台のみ残存している。内面は1/2ほど炭化している。321の器形は無台盤であるが中心部に径1.5cmほどの楕円形孔がある。器形からここに記載したが、蓋あるいは瓶底板の可能性も考えられる。319・320・322～326は粗型または製作途中のものである。319は轆轤爪痕が残り、側面(体部)には轆轤挽き痕が認められるが、上面(内面)は凹凸が残る。320・324・325は無台盤の未成品であろう。324・325は裏面(外面)周縁を斜めに削り落とす。表面(内面)は比較的平滑である。320は内外面とも轆轤挽きされ、内面をわずかに削る。324・325は成形段階、320は整形段階か。322は厚みのある状態で、周縁部よりも中心部に厚みを持つ。323は略楕円形で側面に加工痕が認められる。丸木の中心で分割しており心を有する。326は碗または杯の粗型と推測される。上から見ると扇形を呈するが、左右側面は割裂面と判断されることから、本来は円形であったと推測できる。正面形は独楽のような形で、上部は粗く削り、下部は轆轤挽きの痕跡がかすかに残る。

刺物(327～333)9点出土した。希少であるためできる限り図化した。327は劣化が著しく破片の状態ではあるが、内面を削り抜いた痕跡が認められ、形状から桶と推測される。木取りは縦木取りで、年輪界に沿って樹心を削り抜く。328も桶の可能性があり、おそらく2個1対の突起が付されると考えられる。口縁からは体部下半にかけては緩やかにすぼまる深鉢形で、底部近くで鋭く屈曲し裾に向かって広がる。上から見るとやや歪な楕円形を呈する。縦木取りで心去材を使用しており、年輪の弧から原木の直径は70～90cm程度の大きい材であると推測される。330の盤は年輪界に沿って盤を削り出す。上下のみ縁を作出するが内面の削りが緩やかであるため、稜は不明瞭である。樹種はスギであるが節の多い材である。329・331・332は長方形の槽または盤である。すべて横木取りであるが、329以外は板目材を用いる。331口縁端部は右側縁を除いて欠損している。裏面は割裂面そのままに近い状態と考える。332aと332bは、同一個体と考えられるが接合しない。両側縁に円形の凹みが見られ、右側縁下部にはさらにL字形に貫通する孔がある。縁は平坦で4cm前後の幅を有し、内面の削りは浅い。333は上下左右とも欠損しており、槽の中央部分と推測できる。樹種は330がスギであるほかは、ケヤキ、エノキ属、モクレン属であり、針葉樹と広葉樹が混在する。333図面下部(口縁に近い部分)は劣化が進み器壁は薄くなっており、本来の厚さをとどめない。

曲物(334～358・360～363)曲物も流路14下層で最も多く出土し、78点を数える。そのうち底板が29点で最多であるが、蓋板も16点出土している。身では径が小さくやや高さのあるもの(334・335)、径は大きく高さのないもの(336・338・341・342)、径が大きくやや高さのあるもの(340)の3タイプが認められる。334は側板が1/2程度残り、木釘は6か所すべて残存する。綴じは2か所で、外

側は下外6段綴じということは確実であるが、上部は樺皮が欠損しているため不明である。ケビキは打合せ部分のみ認められる。335は打合せ部分の側板外面を斜めに加工し薄くする。綴じは2か所で、本綴じは前外5段後内1段綴じである。ケビキは打合せ部分のみに施される。底板の厚さが均一でなく、図面左から右に向かって薄くなる。336は木釘結合であるが縁に段を持つもので、本道跡では珍しい。ケビキ痕は見られず、1列の樺皮綴じが6か所あり、本綴じは上下内6段綴じ、そのほかは内7ないし8段綴じである。木釘が7か所すべて残る。338は完形品である。335と逆で打合せ部分内面の側板を削って薄くする。綴じ始めの位置と底面の刃物痕が一致している。綴じは2か所で、側板端部に接するほど近い。上下内3段綴じである。ケビキは認められない。339は内面全面が黒漆塗りである。底内面は中央部分で剥落しており、使用による摩耗と推測できる。綴じは2か所、木釘は4か所すべて残る。上端は欠損しており器高は不明である。341底板の断面形がやや台形状となり、図化した面は内面と考えられる。内面には曲線状の焼印が認められる。342は底面側縁に曲線状の刃物痕が認められるが、外形と平行せず取束する。木釘は7か所が残り、底板に対し斜めに打ち込まれる。掲載した面は外面の可能性ある。両面に刃物痕が見られる。側板は残存する破片に樺皮綴じ3列が2か所、1列1か所も認められ、過剰な印象さえ受ける。すべて内綴じである。ちなみに側板の弧と底板の弧の径は一致する。337・340は身の側板である。337は大型品で、掲載したもののほかに図左端に接合する2片があり、側板の残存長は78cmに達することから、底板の直径は25cm以上と推測できる。側板の綴じ孔は切込みではなく円孔で、内2段綴じとする。340は側板のみであるが口縁部は完全に残っており綴じは2か所、5段以上の綴じと推測できる。木釘が1か所残る。343～350は底板である。343は側面と右側縁に加工痕が見られる。板厚は図面右側で厚くなっていることから、均一にするために削ったと考えられる。344は右側縁に切込みのような孔が1か所認められる。綴じ孔であろうか。347は底板と接する部分のみ側板が残る。底内面は縦方向の平行する加工痕が見られ、若干凹凸が残る。外面の凹凸は劣化によるものである。底板と側板の間に木片が1点認められ、楔として機能したものと考えられる。348は木釘孔が多く9か所あり、特に図面下部に集中している。349は刃物痕が多数見られる。刃物痕が施された後に炭化したことが観察できる。図面上部は不明瞭ではあるが縁が認められる。350は周縁に段を有し木釘孔が残る。351は楕円形になると思われ、直径は不明である。周縁は有段で、段が形成される部分に孔が穿たれる。352～358は蓋である。側板と蓋板との結合は4か所でほぼ統一されているが、356のみ5～6か所であったと推測される。さらに樺皮が外縁を超えて巻かれているのが特徴的である。352は側板同士の綴じは1か所で上下内外3段綴じ、蓋板内面は加工痕が残る。353蓋上面には刃物痕が多数見られ、機械的な同心円形の圧痕が2か所認められる。内面全面に黒色付着物が見られるが、これは黒漆の可能性も指摘できる。便宜的に蓋と分類したが、器高が5.5cmもあり身かもしれない。358は縁部分に孔が1か所あり、孔の内面は炭化している。360蓋板の図面右側が薄くなっているのは劣化によるものである。縁には側板が結合していたことによる圧痕が観察できる。側板の高さは1.8cmであることから器高は2.85cmとなる。361は大型で推定直径54cmにも及ぶ。残存率が低いので楕円形曲物である可能性も考えられる。362は上部に篋がつくタイプのもので、大型である。掲載した2片のほかに接合しない1片があり、側板長はのべ122cmに達することから、仮にこれらの破片同士が重なったとしても底板の直径は35cm以上であろう。図面ではケビキ痕が全面に施されるが、掲載外の破片ではケビキは部分的である。363は身の側板で、木釘孔は2孔1対である。綴じ孔は337同様、切込みではなく円孔である。側板の残存長から底板直径は20cm前後と推測できる。

工具・農具 (359・364～409) 359・368 は上部が欠損しているが竪柱の可能性ある。359 は上部を細く削り断面六角形に作り出すが、下部は表面を大きく削り断面は不整形である。下端から 1/3 程の部分が表裏面ともやや凹む。劣化のため痕跡は残っていないが、敲打によるものかもしれない。368 は劣化が著しく加工痕の単位も不明瞭である。359 は丸木、368 は心去材を用いている。364 は上部が相欠状で、欠損している上端に孔が存在した可能性があることから部材と判断できるが、火鑽白として転用される。365 も火鑽白である。切欠きは 5 か所あり、4 か所が使用され炭化している。366 は火鑽料であろう。片端は丸くなり、炭化している。炭化部分の直径と 365 の孔径は約 1cm で一致する。367 は刷毛の柄である。柄元の面中央で長辺に平行する割れ目を入れて毛を抜くもので、平刷毛である。細い角棒状で、柄は断面多角形に削り出す。柄元と周辺には着色前の漆が付着しており、漆塗り用であったと判断できる。369 は円形板の中央に孔が穿たれたものと考えられる。側縁は劣化し残は不明瞭である。蓋の可能性もある。

370 の横樋は丸木を削り細めて柄を作り出しており、身と柄は明瞭に分かれる。柄部分は細い加工痕が残る、身は加工痕に加えて刃物痕、敲打痕が認められる。敲打痕は裏面の同じ位置にも見られる。371 は板状の田下駄で、民具の「ナンバ」に類似した形態のものである [細井 2012]。隅丸方形を呈し、表面中央に U 字状の棒 (以下、U 字棒) がある。上部は欠損しているが、上端の幅 (棒の内側) は約 11cm と推測できる。U 字の形はやや歪で、特に踵側 (下部) は狭い。通常、棒に直交する緒孔が 2 孔または 4 孔あるのだが、孔は全く認められない。裏面には突起を 4 個削り残す。突起は六または七角柱状で、中央に偏る。図面右側 (履いた時には左側) の突起は欠損している。表面は全体的に爪先側 (上部) に向かって傾斜しており、履くとやや前のめりになると想像される。緒孔が存在しないこと、また棒に紐掛けの圧痕が認められないことから 371 は未成品の可能性が高い。372～374 は直柄平鎌の身である。いずれの個体も孔は方形で、鉄刃装着用に左右側面を切欠き、一段細く作出する。372・373 は上部をハの字状に加工し側縁中央は直線的となるのに対し、374 は袂りに至るまでなだらかな弧状となる。いずれの個体も着柄角度は不明である。

375 は馬具の籠である。足先が袋状になる壺籠で無花果型と呼ばれる形態である (第 VII 章 3 参照)。壺から縁にかけての一部と、舌を欠損している。外面は全面に黒漆が塗られるが、壺の爪先においてはわずかに欠損している。壺と籠籠受け吊り手が一体化した一木造りで、踏込部を内側から削り抜いており、加工痕が残る。壺口の大きさは推定幅 13cm、奥行 13cm、高さ 12cm である。壺は舌先形を呈し、甲中央に稜を有する。壺の縁は玉縁状に幅広く、厚く作り出す。吊り手の頂部は三角形の突起を有し、幅広く厚い。吊り手付け根付近に、長方形の籠籠通し孔が穿孔されている。通し孔は上面が摩耗しており、草紐のようなもので吊るされていたと推測される。丁寧なつくりで黒漆が塗られていることから、儀仗用の籠であったと考えられる。吊り手部を垂直にした場合、壺口の下辺がやや左下がりになることから、この籠は左足用と判断できる。

376～378 は柄杓である。3 点とも身はひょうたんを利用する。376・377 は柄が身を貫通している。身の口縁部を加工した痕跡が不明であることから、現状では欠損しているかあるいは割れ口をそのまま使用したと推測される。376 は身の歪みが著しく側面は割れている。柄は下端を細める。377 は柄の先端を削り段を作り出して身に差し込む。378 身の口縁部は整形され、柄は黒漆塗りである。身には黒褐色の漆が内外全面に付着している。内面は夾雑物の混じる黒褐色の漆が厚く付着し、皺が多く見られるが、外面は黒漆塗りの部分も認められる。黒褐色漆の付着は内面よりも少ないことから、おそらく優品であつ

た黒漆塗りの柄杓を漆要具として転用し、精製・着色前の漆を汲むなどに利用したものと推測される。

379～381は両端左右に抉りを持つ棒状材で、浮子の可能性があるものを一括したが3点とも形態が異なる。381は板状で表面の両端以外を削り薄くすることで段を作出する。382は挽き出しにより歯を作出する横櫛であるが、歯は大部分が欠失している。383～390は箸状木製品である。386は両端の表裏を削り山形状とするが、両側あるいは片側を明瞭に細める個体はない。391～400は斎串、401～405は上部が欠損しているが斎串の可能性があるものである。391は上から・下から・上からの3か所に切込みがなされるが、浅いために側面が毛羽立つような感じにはならない。398は両側面を緩やかに抉る。406は刀子形で下部を欠く。上部右側面にはわずかだが炭化部分が認められる。407～409は木筒である。407は上部に抉りを有し下部をV字状となす。408・409はそれぞれ上端・下端を欠損する。内容については第七章3を参照されたい。

部材・加工材など(410～486) 410～412は平らな棒状材に孔が穿たれる部材で、孔の大きさや間隔は様々である。413は上部が半円形の抉りまたは円形の孔が施される部材である。側面は丸身を持ち丁寧なつくりである。上下とも欠くため想像となるが、網針である可能性も否定できない。類別としては新発田市(旧豊浦町)発久遺跡【川上^{ほか}1991】・新潟市の場遺跡【小池・藤塚1993】がある。414は台形状の薄板の側縁に孔をあけるもので、側縁には加工痕が残る。416上端は欠損より新しい加工痕が認められることから、この形状で再利用したことがうかがえる。417は長方形板材の四隅に一辺4～5cmの孔を穿つ。上端は平坦に加工するが、下端は斜めに加工する。机の天板あるいは腰掛の可能性もある。418～420は建築部材と推測する。418の素材は心持で厚みのある材である。中央部分を欠込状に作りその中心に直径12cmの孔を穿つ。上端は斜めに、下端は平坦に加工する。樹種はクリで重量感がある。419は上下両側面を細め、方形孔を3か所等間隔で配する。420は角材の上下に長方形の孔があり、孔には柄が残る。下部の孔に残る柄材は2点あり、うち1点には細片が楔として打ち込まれている。楔は上部の孔にも認められる。421・422は全く同じ形態であるが木取りは異なり、421は心去材、422は心持材を削り出している。422右側面は新しいキズと考えられる痕跡が多く加工痕が不明瞭である。新潟市の場遺跡【小池・藤塚^{ほか}1993】で出土した「ネリ櫛」の柄と非常に近似するが、422は両端とも残存しており、左右(図面では上下)対称にならない。423は何らかの製品の一部と考えられる。上部を緩やかに削って細め、下端は丸く仕上げている。両側面は表裏面に面取りが見られ、丁寧なつくりである。424上部は両面を、下部は表面を斜めに加工するが、端部はさきくれが残り折断した可能性が高い。425は右側縁を抉って一段細める。上下とも欠損しているため全形は不明であるが、全体的に丁寧なつくりである。

426～428は柄を持つ部材である。426は本来全面黒漆塗りであったと推測でき、黒漆が部分的に残る。427・428は断面正方形で柄は本体と同幅とするものであるが、428は幅・厚さとも上部に向かってやや細く作り出す。429は樹皮の残る心持材の下部を4面から加工して断面長方形に仕上げ、方形の柄孔を穿つ。柄孔には柄材が残る。上端は断面円形の柄を作出するが、端面と側面の境界はつぶれており稜は不明瞭である。やや節の多い材である。430は上下両側面に「く」字状の抉りを持つ部材である。心持材の表裏面を削ったもので、側面は素材の面が残る。裏面は凹凸が見られるが新しいキズによるものである。431は棒状材の下部をわずかに裾広がりとなし、相欠状に作出した部分に円形孔をあける。433は上下端とも残る。表面を連続して削り、上半分はやや細くする。434は上端近くと上部1/4程度に切込みを入れ、その間をわずかに細く作出する。上端の面中央で長辺に平行する割れ目を入れる。刃物などの柄か。435は上下を削り細め柄状に作り出す。本体は断面円形に近い多角形を呈するが、柄部分は表裏

面に対して側面を細くする。436～438はL字状を呈する部材であるが、437については図の上部右側面が端面かどうか判断できないため、L字状とならない可能性もある。3点とも下端は残る。438はL字の角部分（細くなる部分）をわずかに細く削る。全体的に虫食いの穴が多数あり劣化が進んでいる。

439～461は棒状木製品である。441は下端が炭化し、下部に長辺と平行する割れ目が確認できる。442は上端近くに圧痕がめぐる。下部を欠くが浮子の可能性がある。444～446・448は上端と上部の2か所に圧痕または削りが認められることから、柄杓柄の可能性が高いと考えたいが、断定できないためここに掲載した。447・449は片端を削り細めるが圧痕は見られない。450～452は下部を杭状に尖らせるものである。452は上端に細かい加工痕が認められる。462の表面などは加工痕が残らず、断面は整った円形を呈し丁寧なつくりである。上部がわずかに細くなる。463は上端近くをわずかながら削り込んでいるが、左側を欠くためその形態は不明である。表面下部を削り薄く作り出す。側面中央の平行する線状痕は、1回の加工で生じた凹凸であり刃物痕ではない。466は厚みのある板材の側縁を浅く抉るものである。

467・468は樹皮のついた半割材を使用し、上下端を加工する。表面は大平が割裂面のままであるが、上端の加工痕が一部裏面まで及ぶことから、この状態で使用したものと推測できる。467・468は未同定ではあるが、肉眼観察から同じ樹種と思われる。469も467・468と同じ形態と考えられるが、表面も削り下部を薄くする点が異なる。471は心持材の上端を丸く作出し、下部は表裏面からのみ削り杭状となす。472は心持材の上下を斜めに加工し表裏面は平坦にするが、側面は自然面を残す。表面中央は方形に割り込み内面には刃物痕が残る。図面左下には節と枝が切り落とされずに残る。473表面には外形より一回り小さい割り込みが施され、左側面に貫通する。左側面の加工は、スリット状に貫通した部分の周辺を後から加工したと考えられる。表面割り込みの内面は細かい加工痕が残る。左側面以外の面は非常に丁寧なつくりであるが、左側面のみ割裂面に若干の加工を加えた程度で、その差が著しい。

474～478は加工材である。474は半円形を呈するが、本来円形であった可能性がある。樹種はケヤキであることから、円形であれば挽物の素材である可能性も指摘できる。種は明瞭である。475は表裏面に多数の刃物痕が見られ、加工痕が残る。削りは比較的粗いため表裏面には凹凸が残る。四隅を斜めに切り落とし、側面も面取りする。作業台または礎盤の可能性はあるが、あるいはここから周縁を残して割り込み、刃物盤となる可能性も考えられる。476～478は下端をV字状に作り出す板材で、樹種はいずれもケヤキである。礎盤の可能性もあるが、樹種と形態から挽物盤の素材となる可能性も考えておきたい。479は半割材で下部に2か所方形の割り込みが見られる。480は上下端とも加工されるが、図面右下部は欠損である。上面にはタンニンが付着している。479・480の2点とも樹種はケヤキであり、480は柱根とは様相が異なることから、腕など高さのある挽物の素材となる可能性もある。481もケヤキ製で、幅と厚さから挽物盤の素材となる可能性がある。482・483は調査時に同じ番号で取り上げられており、同一個体かもしれない。482・483は80cm、484は110cmを超える長さであることから、建築部材などの可能性も考えられる。485・486は心持材の下部のみを加工し尖らせる杭である。

SA75 杭 (487～489) 3点とも樹皮のついた心持材で、湾曲している。下端の表面のみ削るという簡易な加工である。

階段状遺構 構成材 (490～501) すべてSA75同様、心持材の下部のみ加工するものである。加工は全面にめぐるもの(492・495・501)、一部以外全面にあるもの(493～497)、2面のみ(490・500)、一面のみ(491・499)と多様である。樹種も様々で、同定したものの中ではほとんど異なる樹種であった。

第VI章 自然科学分析(樹種同定)

はじめに

柏崎市に所在する官衙関連遺跡である真輪遺跡では、古代や中世の堀立柱建物や井戸、土坑、川跡などから出土した木製品 257 試料について樹種同定を行った。

試料と方法

試料は、曲物や挽物などの容器が多く、その他に工具や農耕土木具、漁労具、編み具、服飾具、食事具、調理加工具、祭祀具、文房具、建築部材、土木材など、計 257 試料である。曲物は側板と底板が揃っている試料は、それぞれから試料を採取したため、分析総数は 270 点となった。なお、木製品のうち 200 試料は、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団によって切片が採取された。55 試料は、糖アルコールで保存処理された木製品の破片から株式会社パレオ・ラボが切片採取を行った。残り 2 試料は、1999 年度に保存処理を行った際、パレオ・サーヴェイ株式会社により切片採取と同定が行われた。

木製品から、剃刀を用いて 3 断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取した。この切片をガムクロロールで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡を用いて観察と写真撮影を行った。プレパラートは財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

結果

同定の結果、針葉樹はマツ属単維管束亜属とスギ、ヒノキの 3 分類群、広葉樹はオニグルミ、アサダ、クリ、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属(以下アカガシ亜属と呼ぶ)、コナラ属コナラ節(以下コナラ節と呼ぶ)、エノキ属、ケヤキ、モクレン属、カツラ、ツバキ属、イスノキ、ナシ亜科、アカメガシワ、キハダ、ヌルデ、カエデ属、トチノキ、モチノキ属、ケンボナンシ属、イイギリ、リョウブ、エゴノキ属、ハイノキ属サワフタギ節(以下サワフタギ節と呼ぶ)、トネリコ属シオジ節(以下シオジ節と呼ぶ)、ガマズミ属の 26 分類群、計 32 分類群が確認された。なお、結果一覧は巻末の観察表に記す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を第 24 ~ 26 図に示す。

(1) マツ属単維管束亜属 *Pinus* subgen. *Haploxyton* マツ科 第 24 図 1a-1c (473)

仮道管と垂直および水平樹脂道。放射柔組織。放射仮道管からなる針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道でエビセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の壁は平滑である。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don スギ科 第 24 図 2a-2c (119)

仮道管と放射組織。樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に通常 2 個並ぶ。

(3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 第 24 図 3a-3c (339 側板)

仮道管と放射組織。樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型〜ヒノキ型で、1 分野に 2 個存在する。

(4) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino クルミ科

第24図 4a-4c (263)

やや大型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して散在し、晩材部で径を減ずる半環孔材である。軸方向柔組織は線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性で、1~4列幅である。

(5) アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 第24図 5a-5c (374)

径中型の道管が、単独あるいは放射方向に数個複合して、ややまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、1~4列幅である。

(6) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 第1図 6a-6c (220)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で主に単列である。

(7) ブナ属 *Fagus* ブナ科 第24図 7a-7c (140)

小型で単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は単一のもので階段状の2種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、2~数列のもの、広放射組織の3種類がある。

(8) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第24図 8a-8c (165)

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

(9) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 第24・25図 9a-9c (499)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と広放射組織の2種類がある。

(10) エノキ属 *Celtis* ニレ科 第25図 10a-10c (327)

大型の道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では径を減じた薄壁の小道管が集団をなして接線から斜めに配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状~翼状となる。道管の穿孔は単一である。小道管の内壁にらせん肥厚がみられる。放射組織は3~8列幅の異性で鞘細胞がある。上下縁辺の膨らんだ細胞中に結晶を含む。接線断面において放射組織と軸方向柔組織が層界状に配列する。

(11) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 第25図 11a-11c (238)

大型の道管が年輪のはじめに1列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は3~5列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

(12) モクレン属 *Magnolia* モクレン科 第25図 12a-12c (475)

小型の道管が、単独もしくは3~4個複合して均等に分布する散孔材である。木繊維の壁は薄い。道管相互壁孔は対列~階段状、道管の穿孔は単一である。放射組織は1~2列幅で、上下端の1~2細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

(13) カツラ *Cercidiphyllum* カツラ科 第25図 13a-13c (170)

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で30程度となる。放射組織は1~3列幅で、平伏細胞と方形細胞からなる異性である。

(14) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 第25図 14a-14c (472)

小径の道管がほぼ単独で密に分布する散孔材で、晩材に向けてやや径を減じる。道管の穿孔は10段程

度の横棒からなる階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に2~4細胞連なる異性で、1~3列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。円形に著しくふくれた大型の結晶が単列部に認められる。

(15) イスノキ *Distylium racemosum* Siebold et Zucc. マンサク科 第25図 15a-15c (50)

小型で角張った道管が、単独あるいは数個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状である。軸方向柔組織は散在もしくは帯状~線状にいびつに配列する。放射組織は1~3列幅の異性で、細胞中に結晶を含む。

(16) ナシ亜科 Subfam. *Maloideae* バラ科 第25図 16a-16c (382)

小型の道管が、ほぼ単独で均等に分布する散孔材である。軸方向柔組織が短線状となる。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織および放射組織中に大型の結晶が連なる。放射組織は異性で、1~3列幅となる。

(17) アカメガシワ *Mallotus japonicus* (Thunb. ex Murray) Muell. Arg. トウダイグサ科

第25・26図 17a-17c (486)

やや厚壁で丸い道管が、晩材部に向けて徐々に径を減じ、晩材部では小道管が放射方向に配列する半環孔材である。軸方向柔組織は短接線状である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列の異性である。

(18) キハダ *Phellodendron amurense* Pupr. ミカン科 第26図 18a-18c (260)

大型で丸い道管が早材部に配列し、晩材ではごく小型で薄壁の小道管が集団をなして帯状~斜線状に配列する環孔材である。道管に赤褐色の樹脂が見られ、穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、1~6列幅できれいな紡錘形となる。

(19) スルデ *Rhus chinensis* Mill. ウルシ科 第26図 19a-19c (490)

大型の道管が、年輪のはじめに単独もしくは数個複合して配列する半環孔材である。晩材部では道管の大きさは徐々に減じ、年輪の終わりで小道管が集団をなして接線状~斜線状に配列する。道管の穿孔は単一である。放射組織は平伏細胞と直立細胞が混在する異性で、1~3列幅である。

(20) カエデ属 *Acer* カエデ科 第26図 20a-20c (177)

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において木部繊維の壁厚の違いによる雲紋状の模様が見られる。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織はほぼ同性で、1~5列幅である。

(21) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 第26図 21a-21c (237)

やや小型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列で、すべて平伏細胞で構成される同性である。接線断面において放射組織は層界状に配列する。

(22) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 第26図 22a-22c (425)

小型の道管が、放射方向に数個複合して分布する散孔材である。道管の穿孔は20~40段程度の階段状で、道管にはらせん肥厚が明瞭である。放射組織は多列で、ほぼ同性である。

(23) ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科 第26図 23a-23 (423)

やや大型の道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では厚壁で小型の道管が単独もしくは2~3複合して散在する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1~3列幅である。

(24) イイギリ *Ilesia polycarpa* Maxim. イイギリ科 第26図 24a-24c. イイギリ (488)

小型の道管が単独もしくは数個放射方向孔に複合して、年輪内に均等に分布する散孔材である。道管の

樹種同定

穿孔は単一で、道管相互壁孔は交互状で大きい。放射組織は直立または方形細胞が上下に2～4細胞連なる異性で、細胞幅は1～3列である。

(25) リョウブ *Clethra barbinervis* Siebold et Zucc. リョウブ科 第26図 25a-25c (55)

小型で角張った道管が、単独で分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管の穿孔は40段以上の階段状である。放射組織は4～8列程度の異性である。

(26) エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 第26・27図 26a-26c (359)

小型の道管が、放射方向に数個複合して分布する散孔材で、晩材部で道管が小型になり数も減る。軸方向柔組織は短接線状となる。道管の穿孔は10段程度の階段状である。放射組織は1～4列幅で、異性である。

(27) ハイノキ属サワフタギ節 *Symplocos* sect. *Lodhra* 第27図 27a-27c (95)

小型の道管が、ほぼ単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は30段程度の階段状である。軸方向柔組織は散在～短接線状である。放射組織は1～3列幅程度で、上下2～4直立細胞の異性、単列部と多列部の幅はほぼ同じである。

(28) トネリコ属シオジ節 *Fraxinus* sect. *Fraxinaster* モクセイ科 第27図 28a-28c (200)

年輪のはじめに大型の道管が数列並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小道管が単独もしくは放射方向に2～3個複合して散在する。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、1～3列幅である。

分類群 / 節種分類	工具	工具?	歯輪 土木具	鋸 み具	洗 分具	鋸 歯具	管 器	管 器?	食 事具	調理 加工具	調理 加工具?	祭祀 具	文 房具	建築 材	土 木材	その他	計
マツ属中葉管束亜属																1	1
スギ	5	1			2		10	1	1	4		9	4			16	62
ヒノキ							26			1	1	1	2			2	33
オニグルミ														14	1		15
アサダ			1														1
タリ													17			1	18
ブナ属			1														1
コナラ属アカガシ亜属	2														1	3	6
コナラ属コナラ節				1											3		4
エノキ属						1										1	2
ケヤキ			4			48	1						4			5	62
ケヤキ?						1											1
モクレン属			2			1	2										3
カツラ													4				4
ツバキ属	1															2	3
イスノキ						1											1
ナシ亜科					2												2
アカメガシワ															1		1
キハダ													2	1	2		5
ヌルデ															1		1
カエデ属															7		7
トチノキ			1				5							1	1	1	9
モチノキ属																1	1
ケンボナン属															1	2	3
イイギリ			1											4	2		7
リョウブ				2													2
エゴノキ属			1														1
ハイノキ属サワフタギ節																1	1
トネリコ属シオジ節													3	3	1	7	7
ガマズミ属															1		1
計	8	1	11	3	2	4	102	2	1	5	1	10	6	45	25	44	270

第7表 器種別の用材傾向

(29) ガマズミ属 *Viburnum* スイカズラ科 第27図 29a-29c (497)

小型の道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は40段以上の階段状である。放射組織は異性で、1～4列幅で細胞高が高い。

考 察

器種別の用材傾向を第7表に示し、各器種について考察を行う。各分類群の材質については、[平井1996]と[伊東^{ほか}2011]を参照した。

工具および工具?は、スギとアカガシ亜属、ツバキ属が確認された。スギは火鑽白や火鑽材に利用されており、軽軟で加工容易な材である。アカガシ亜属は工具柄と掛矢、横植、ツバキ属は横植に利用されていた。アカガシ亜属とツバキ属は重硬および強靱な材である。堅硬さが必要な器種にはアカガシ亜属とツバキ属、加工の容易さが必要な器種にはスギが選択利用されたと思われる。

農耕土木具はアサダ、ブナ属、ケヤキ、モクレン属、トチノキ、イイギリ、エゴノキ属が確認された。モクレン属とトチノキ、イイギリは軽軟で加工容易、アサダ、ブナ属、ケヤキ、エゴノキ属は重硬な材である。新潟県における古代以降の鍬や鋤には重厚なアカガシ亜属やコナラ属の材が多く利用されるが[久田2012]、今回の分析ではみられなかった。

編み具の錘は、コナラ節とリョウブであった。コナラ節は重硬、リョウブも比較的硬重な材で、どちらも割裂しにくい。錘には重さがあり、丈夫な材を選択したと推測される。

漁具の浮子は、スギであった。北陸地方では浮子にはスギが多用される傾向がある[久田2012]。スギは軽軟で油分を含むため、浮子としても適材であったと思われる。

服飾具では、連南下駄はモクレン属、櫛はイスノキとナシ亜科であった。モクレン属は軽軟な材で、下駄としてもスギとともによく利用される[久田2012]。櫛に利用されていたイスノキは、非常に重硬および緻密な材で、ナシ亜科の材も比較的硬重および緻密な材である。特にイスノキは櫛の素材として多用されるが、暖帯以南に生育するため本遺跡を含む新潟県には分布しない。したがって他の地域から素材もしくは製品として流入したと推測される。

容器では、曲物と挽物・割物で用材傾向に違いが見られた(第8表)。曲物はスギとヒノキの針葉樹2分類群が確認されたが、曲物の側板と底板では、特に樹種の選択性はみられなかった。スギとヒノキは軽軟で木理直通であり、製材が容易である。また、全般に水湿に強いので、水場での利用にも適している。挽物・割物は、ケヤキが47点とケヤキ?が1点で大多数を占めており、その他にトチノキが5点、モクレン属が2点、ヒノキとエノキ属が各1点みられた。ケヤキは重硬で靱性があるが加工は比較的容易な材で、漆器木地などの挽物にも多用される樹種である。新潟県では古代の挽物・割物にケヤキを多用する傾向があり[久田2012]、本遺跡の用材傾向とも一致する。その他の樹種ではエノキ属は重硬だが耐朽性が低く狂いが出やすく、トチノキとモクレン属、ヒノキは軽軟な材である。器の形状や用途によって異なる材を利用した可能性がある。

食器の箸はスギ、調理加工具と祭祀具、文房具はスギとヒノキであった。いずれも加工容易な針葉樹を利用したと推測される。

建築部材は柱材がほとんどで、全体ではクリ17点でオニグルミが14点と多く、その他にケヤキとカツラが4点、シオジ節が3点、

分類群/器種	曲物	挽物 割物	その他	計
スギ	17	2	19	
ヒノキ	25	1	26	
エノキ属		1	1	
ケヤキ		47	1	48
ケヤキ?		1	1	
モクレン属		2	2	
トチノキ		5	5	
計	42	57	3	102

第8表 容器類の用材傾向

樹種同定

分類群	主体時期		8～9世紀			9世紀前半			9世紀後半		9世紀後半～後葉			10～11世紀?	計
	地区		H			E			BC		E			BC	
	遺構	SB1	SB3	SB4	奥路 14	SB1	SB2	SB3	奥路 2	SB4	SB117	P48	P67	SB1	
オニグルミ		1	1	1		1	1			4	5				14
クリ		6			1	1								9	17
ケヤキ					2	1								1	4
カツラ							2	1			1				4
キハダ			1				1								2
トチノキ									1						1
トネリコ属シオジ節											1	1	1		3
計		7	1	2	3	3	3	2	1	4	7	1	1	10	45

第9表 建築材の樹種構成

キハダが2点、トチノキが1点確認された。いずれも大木に生長する樹木であり、クリとケヤキ、シオジ節は重硬、オニグルミは硬さ中庸、キハダとカツラ、トチノキは比較的軽軟な材である。また、地区や遺構ごとに樹種構成に違いがあり、クリが多い遺構やオニグルミが多い遺構、多種類の樹木を用いている遺構がみられた（第9表）。新潟県における柱の用材傾向は縄文時代～江戸時代までクリが主体であり、古代以降はクリ以外の樹種は地域ごとに用材傾向が異なる〔久田 2012〕。柏崎市周辺は用材傾向が集成されていないが、上越市ではクリ以外の樹種でオニグルミとカツラが多く、比較的近い用材傾向を示す可能性はある。

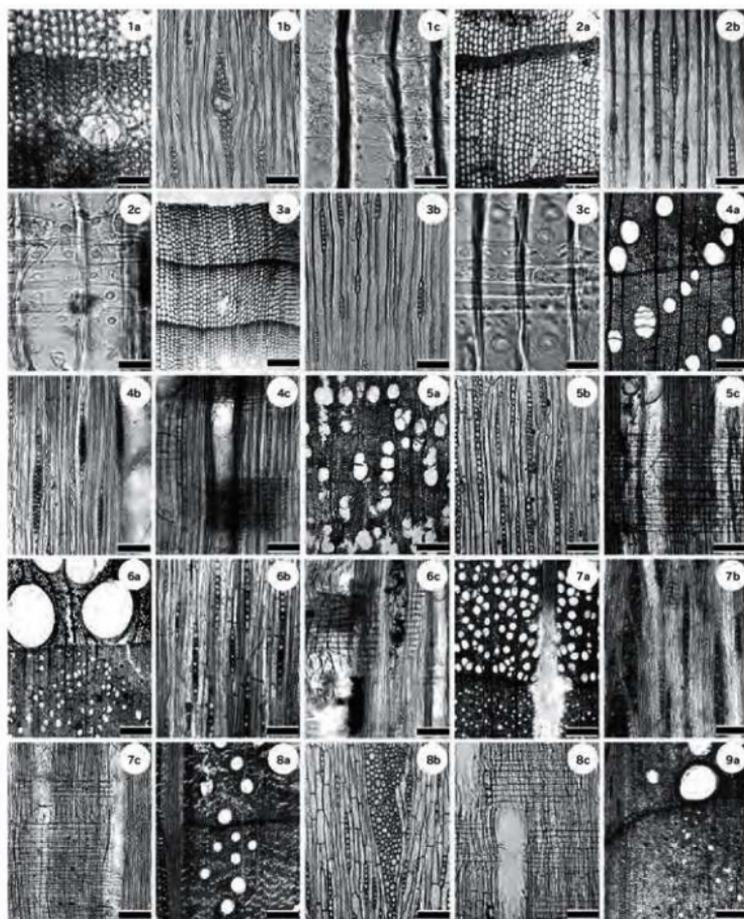
土木材の杭には多様な広葉樹が用いられており、オニグルミ、アカガシ亜属、コナラ節、アカメガシワ、キハダ、スルデ、カエデ属、トチノキ、ケンボナシ属、イイギリ、シオジ節、ガズミ属が確認された。オニグルミやシオジ節、キハダは沢沼などの湿潤地、アカメガシワやスルデ、コナラ節は日当たりの良い二次林などに生育する樹種であり、遺跡周辺の植生を反映している可能性がある。

その他では、部材はスギが多く、板状や加工材などの用途不明品ではスギの他にケヤキやクリ、キハダ、ツバキ属、ケンボナシ属など多様な分類群が確認された。

木製品全体では、挽物・制物容器の点数が多い影響により、ケヤキが62点で最も多く確認された。次に、スギが62点とヒノキが33点で針葉樹が多くみられたが、最も多くの種類の器種に利用されていたのはスギであった。北陸地方はスギを多用するスギ文化圏であるため〔鈴木 2002〕、周辺地域の木材利用傾向と一致するが、器種によって木材の利用傾向が異なっており、用途に応じて適した材を選択利用していたと推測される。

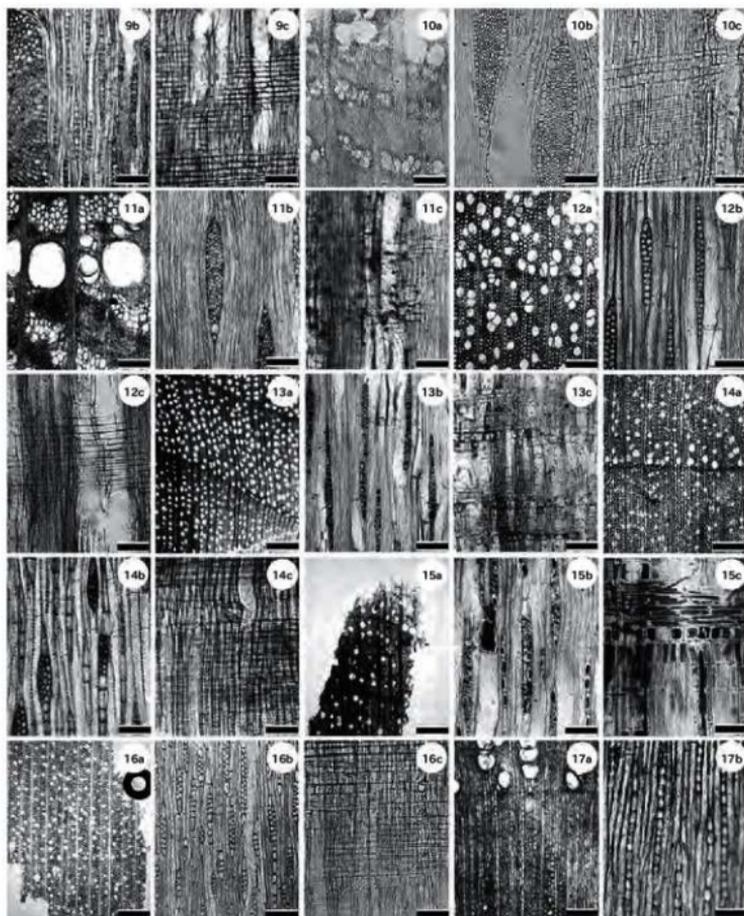
引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌 .238p, 海青社。
 伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—.449p, 海青社。
 平井信二（1996）木の百科 .394p, 朝倉書店。
 久田正弘（2012）中部日本海側—福井県・石川県・富山県・新潟県—, 伊東隆夫・山田昌久編「木の考古学—出土木製品用材データベース—」: 210-223, 海青社。
 鈴木三男（2002）日本人と木の文化 .255p, 八坂書房。



1a-1c. マツ属単維管束亜属 (473), 2a-2c. スギ (119), 3a-3c. ヒノキ (339 側板), 4a-4c. オニグルミ (263),
 5a-5c. アサダ (374), 6a-6c. クリ (220), 7a-7c. ブナ属 (140), 8a-8c. コナラ属アカガシ亜属 (165),
 9a. コナラ属コナラ節 (499)
 a: 横断面 (スケール=250 μm), b: 接線断面 (スケール=100 μm), c: 放射断面 (スケール=1.3 : 25 μm ,
 4-8 : 100 μm)

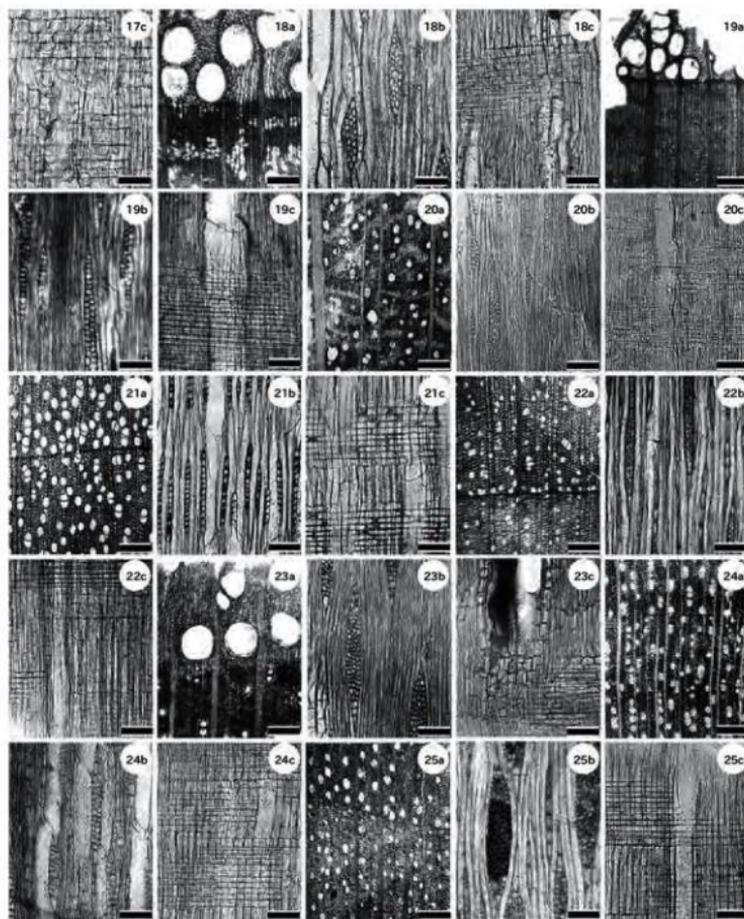
第 26 図 木製品の光学顕微鏡写真 (1)



9b-9c. コナラ属コナラ節 (499), 10a-10c. エノキ属 (327), 11a-11c. ケヤキ (238), 12a-12c. モクレン属 (475),
 13a-13c. カツラ (170), 14a-14c. ツバキ属 (472), 15a-15c. イスノキ (50), 16a-16c. ナシ亜科 (382),
 17a-17b. アカメガシワ (486)

a: 横断面 (スケール=250 μ m), b: 接線断面 (スケール=100 μ m), c: 放射断面 (スケール=100 μ m)

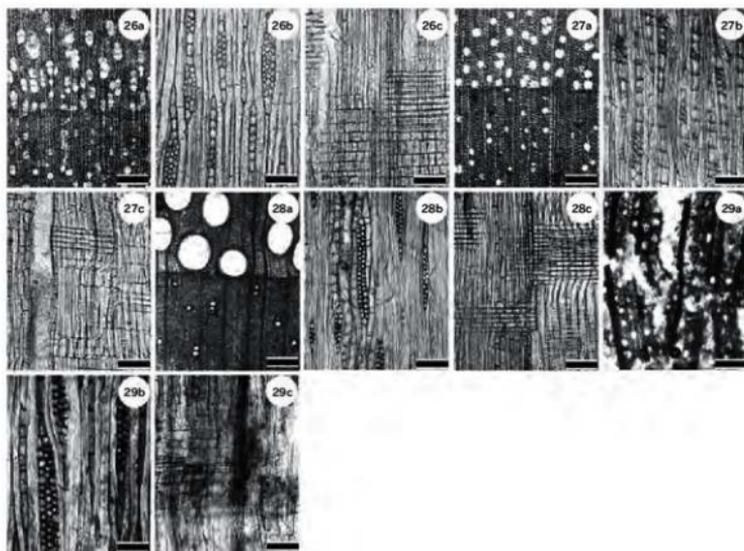
第 27 図 木製品の光学顕微鏡写真 (2)



17c. アカメガシワ (486), 18a-18c. キハダ (260), 19a-19c. スルデ (490), 20a-20c. カエデ属 (177),
 21a-21c. トチノキ (237), 22a-22c. モチノキ属 (425), 23a-23c. ケンボナシ属 (423),
 24a-24c. イイギリ (488), 25a-25c. リョウブ (55)

a: 横断面 (スケール=250 μm), b: 接線断面 (スケール=100 μm), c: 放射断面 (スケール=100 μm)

第 28 図 木製品の光学顕微鏡写真 (3)



26a-26c. エゴノキ属 (359), 27a-27c. ハイノキ属サワフタキ節 (95), 28a-28c. トネリコ属シオンジ節 (200), 29a-29c. ガマズミ属 (497)

a: 横断面 (スケール=250 μm), b: 接線断面 (スケール=100 μm), c: 放射断面 (スケール=100 μm)

第 29 図 木製品の光学顕微鏡写真 (4)

第七章 ま と め

1 土器・陶磁器

A 古代土器・陶磁器の編年

1) 編年(案)の概要

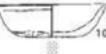
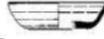
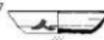
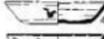
箕輪遺跡からは8世紀から11世紀の土器・陶磁器が出土した。これらは流路(自然の川跡の可能性が高い)からの出土がほとんどであり、一括性は低くある程度の時間幅がある資料と考える。しかし、これだけの長期間の土器が出土した遺跡は柏崎平野では他に無く、器種構成も多様である。以下、既存の研究[坂井1984・1989、春日1999・2005・2010、伊藤2001・品田2012など]を参考にしながら編年(案)を示す(第28～32図)。

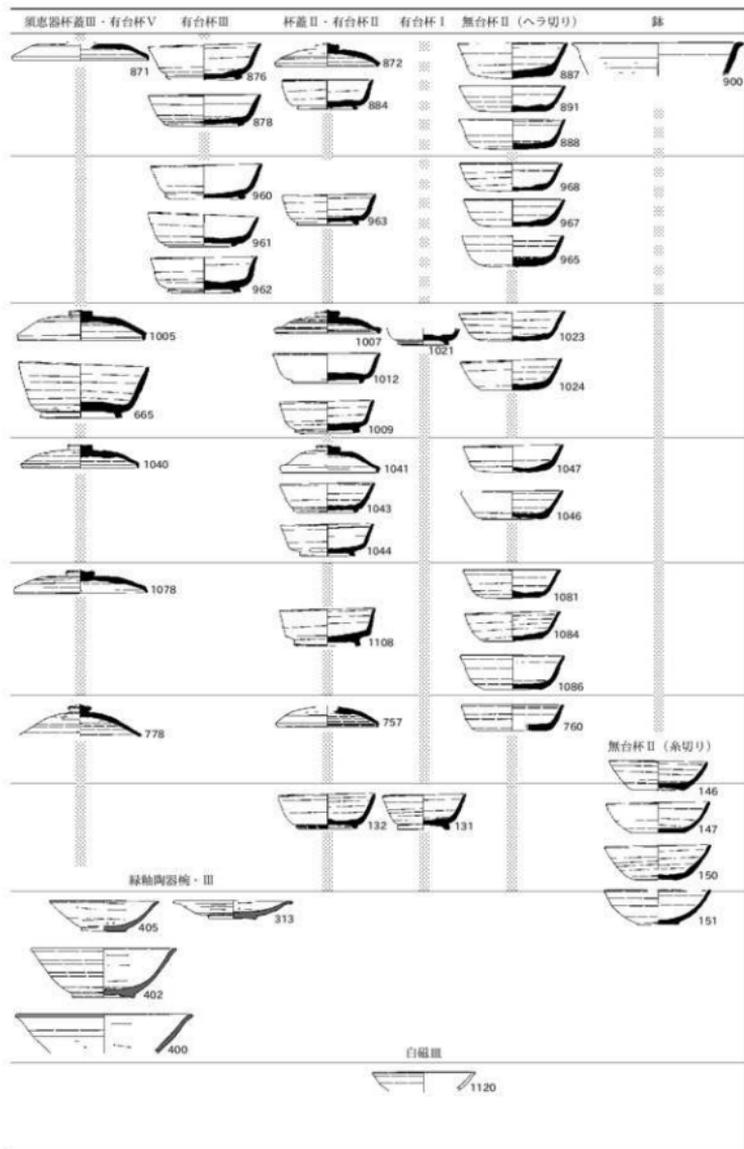
1 期 食膳具に須恵器のほかに、土師器・黒色土器A系(須恵器技法を用いないもの)が一定量確認でき、煮炊具はA系(須恵器技法を用いないもの)が主体を占める時期。土師器・黒色土器B系は土師器無台杯(972)と黒色土器鉢(869)が確認できるが、量的には僅かである。H区流路14下層土器集中地点1を1期(古)、H区流路14下層土器集中地点1に比べ土師器杯A2類・須恵器有台杯IV類・須恵器無台杯II類がやや小型となるH区流路14下層土器集中地点2を1期(新)とした。

2 期 食膳具は須恵器が主体を占め、1期に確認できた黒色土器A系は未確認で、土師器A系も減少する。須恵器食膳具は有台杯IVが未確認で、有台杯IIが増加する。有台杯I・V類は1期(以前)から存在する可能性が高いが、出土例が増すのは当期以降であろう。土師器B系の食膳具は無台杯(1027・1048)が確認できるが、量は少ない。煮炊具は、土師器A系が主体を占める点は1期と同様だが、広口釜は減少傾向にあり、鍋が増加する。土師器A系の食膳具が少量確認でき(1001～1004)、やや大型の有台杯II(1012)が確認できるH区流路14下層土器集中地点3を2期(古)、土師器A系の食膳具が大幅に減少し食膳具のほとんどが須恵器となるとともに、有台杯IIがやや小型となるH区流路14下層土器集中地点4を2期(新)とする。

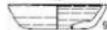
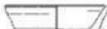
3 期 土師器A系の食膳具がほとんど確認できなくなり、食膳具の大半を須恵器が占めるようになる。また煮炊具は土師器B系が増加する。須恵器はこれまで主体を占めた胎土C1・C2群(主に高田平野に所在する須恵器窯跡群産)に加え、胎土B群(主に佐渡小泊窯跡群産)が確認できるようになる。煮炊具は資料数が少ないが、土師器A系は確認できるが、土師器B系が主体を占めていたものと考え。胎土B群須恵器が少量しか確認できず、ロクロ成形の土師器食膳具が未確認のH区河川14中層土器集中地点3や同SX76出土土器を3期(古)、胎土B群須恵器が増加しロクロ成形の土師器食膳具が増加するE区SD12を3期(新)とする。

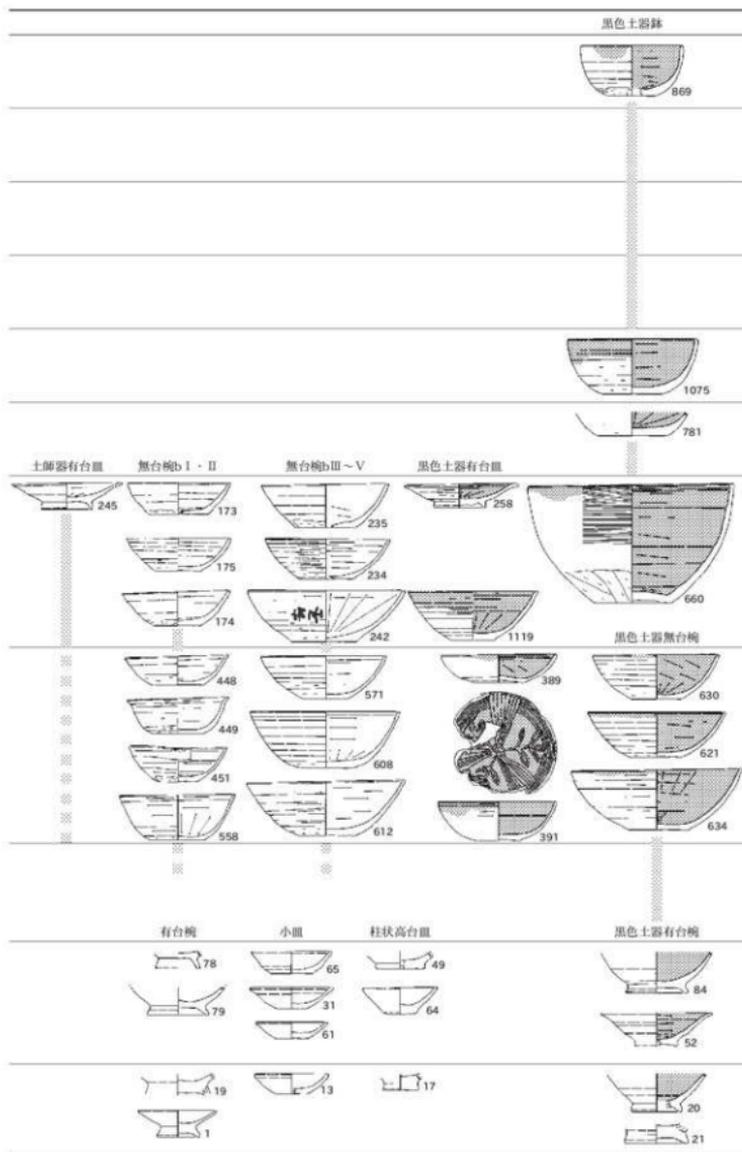
4 期 胎土C1・C2群の須恵器が大幅に減少し、食膳具の主体を胎土B群の須恵器・B系(ロクロ成形)の土師器・黒色土器が占めるようになる。胎土B群の有台杯IIIはやや小型化し高台が低くなる。また、有台杯Iは未確認である。無台杯は薄手となり体部から口縁部の開きが大きくなる。胎土C1・C2群の須恵器は底部回転系切りのものが増加する。煮炊具では土師器A系は確認できなくなり、土師器B系のみになる。長釜・鍋の口縁部は比厚するもの(663)や上下に大きく拡張するもの(398)がある。土師

	黒色土器 (A系)	土師器杯A1	杯A2	杯A3	杯A4・5	手づくね土器
1期 (古)	 863		 864	 865	 866	 870
1期 (新)	 957  958	 951	 954  952		 955	 1071
2期 (古)		 1001	※ ※ ※	 1002	 1004	 1000  999
2期 (新)		※ ※ ※	※ ※ ※	※ ※ ※		 1049
3期 (古)	 1099	須恵器 (胎土B群) 有台杯 I  1109	無台杯 I  1087  134			
3期 (新)	 758	 767	 761  762		 772	
4期 (古)	 130	※ ※	 137  143  144	有台碗	無台碗	
4期 (新)	 419  406  421		 414  407  445  444			
5期			※ ※ ※	 26	 109	

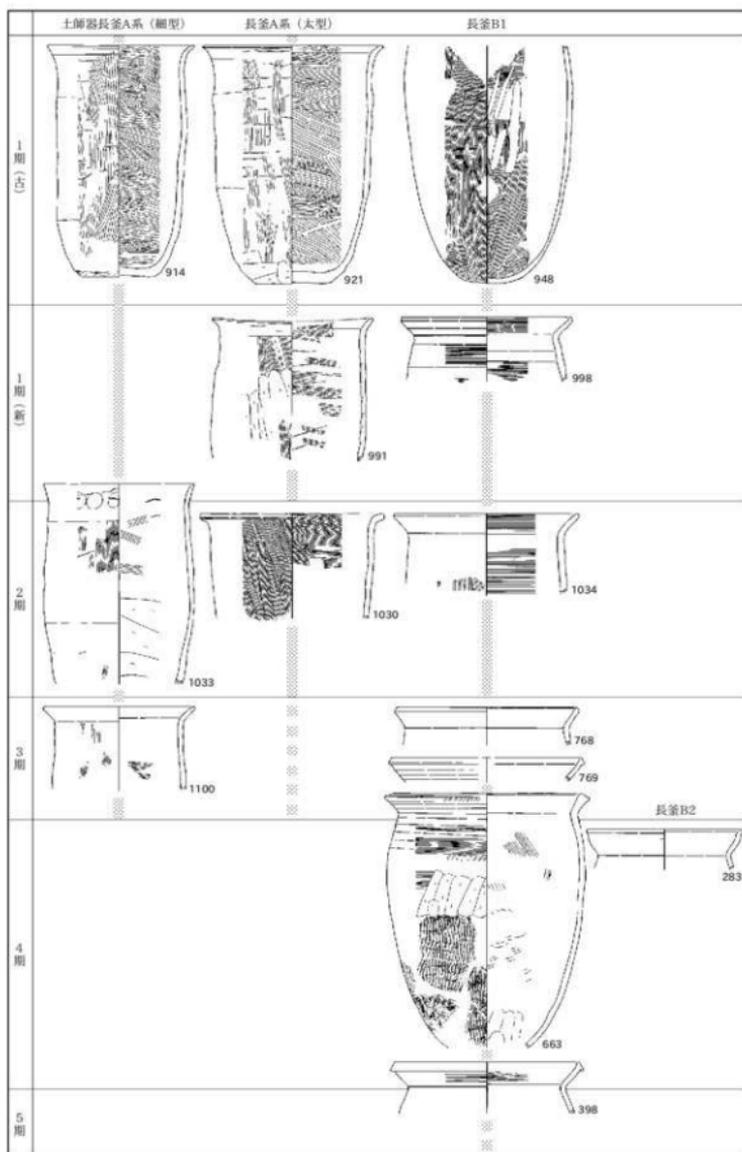


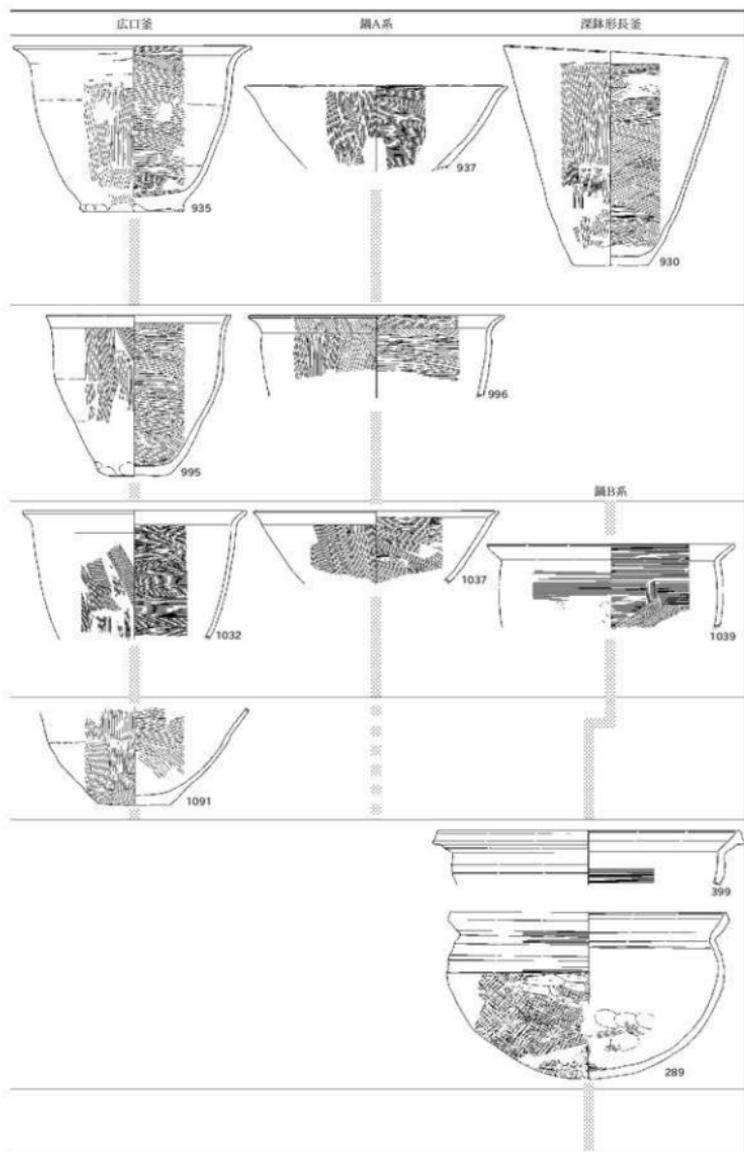
第 30 図 土器・陶磁器の編年案 1

土師器無台杯	
1期(新)	
1期(古)	 972
2期(新)	 1027
2期(古)	 1048
	無台碗a I 無台碗a II 無台碗a III 無台碗a V・VI
3期(新)	
3期(古)	小碗  770
4期(古)	
	
4期(新)	
	
	 615
5期(古)	
5期(新)	
6期	 7

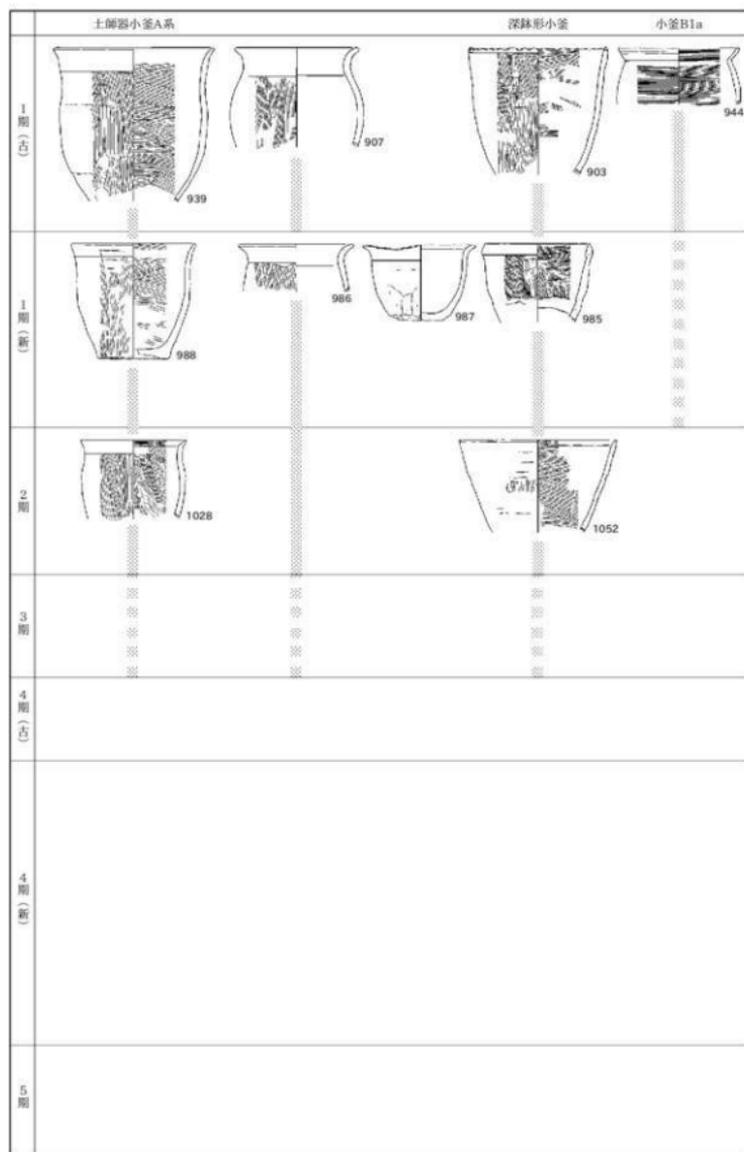


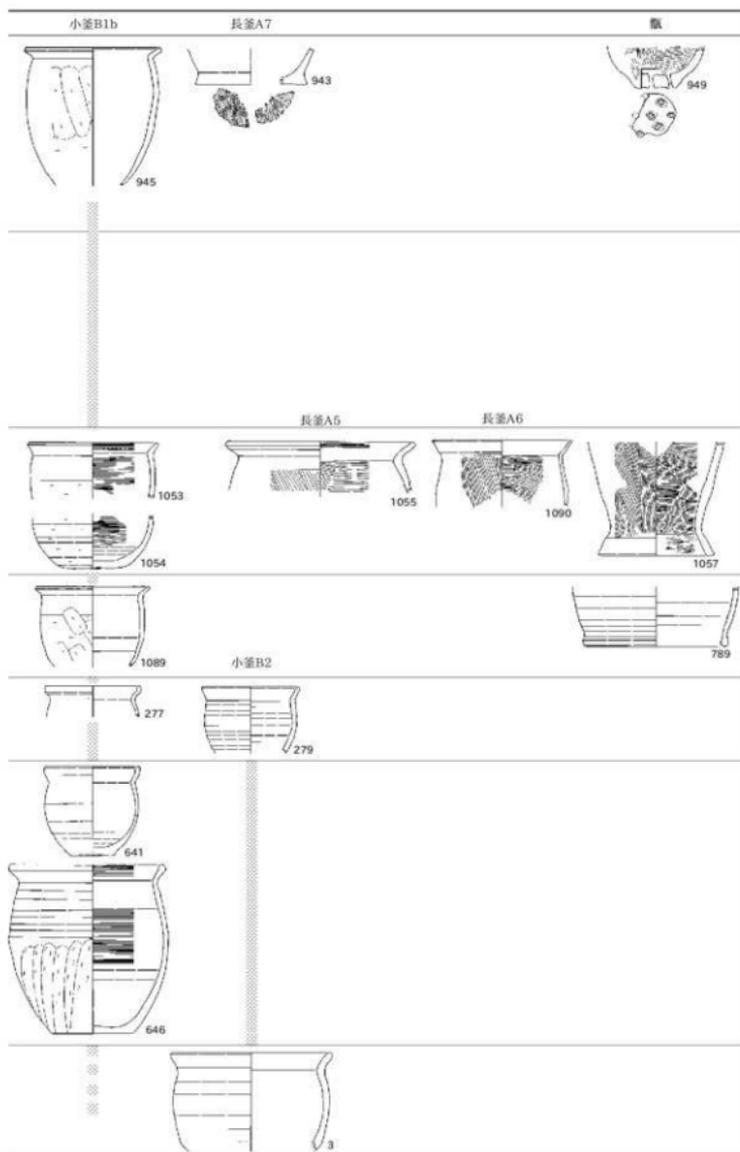
第 31 図 土器・陶磁器の編年案 2



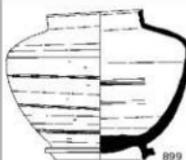
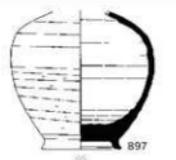
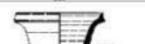
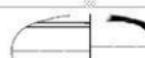
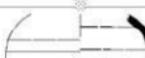
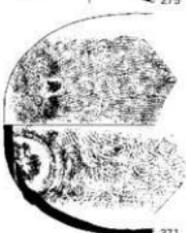


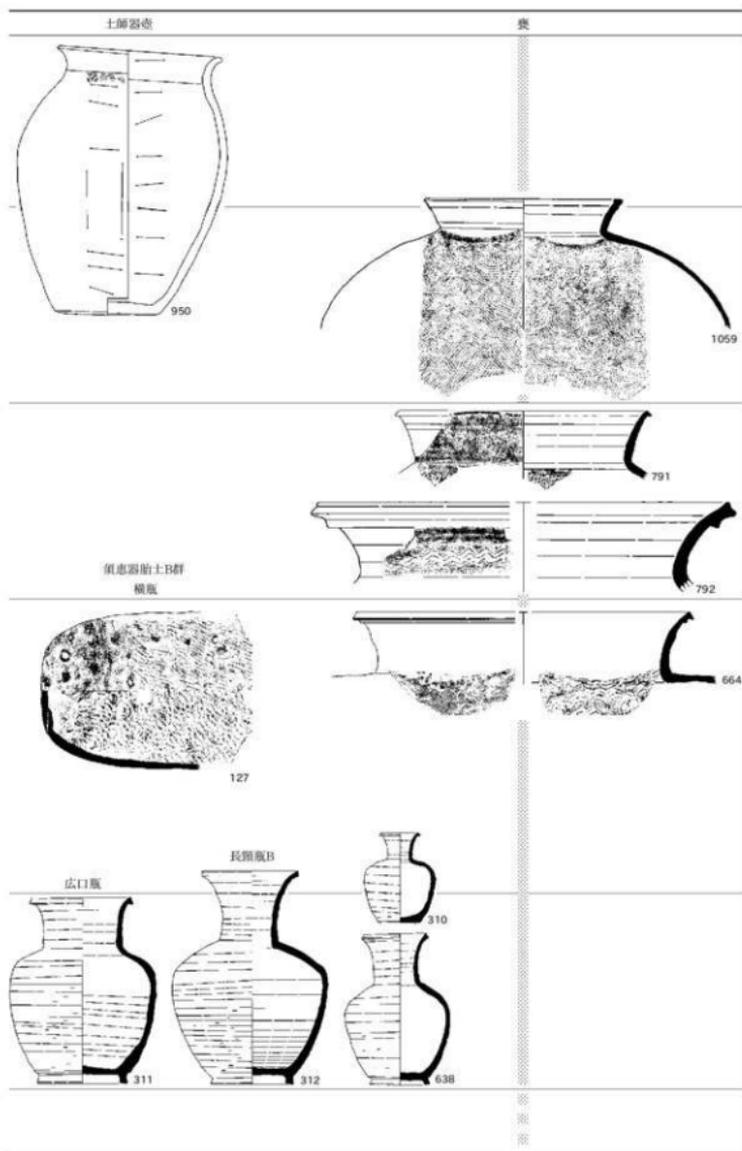
第 32 図 土器・陶磁器の編年案 3





第 33 図 土器・陶磁器の編年案 4

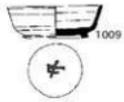
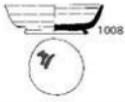
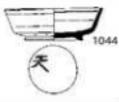
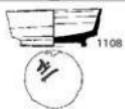
	須恵器短頸壺	長頸瓶A	長頸瓶B	長頸瓶(小型)
1期	 899	 898	 897	
2期				
3期	<p>横瓶</p>  787  788		 785	 786
4期(古)	 275  273  274  272  271			
4期(新)	 640			 639
5・6期				



第 34 図 土器・陶磁器の編年案 5

器無台碗は、5～6種の法量分化があり、ヘラミガキを行うb類が多く確認できる。須恵器の胎土C1・C2群が定量確認できるB・C区流路2-5e層土器集中地点2を4期(古)、須恵器がほぼ胎土B群のみとなるB・C区流路1-5e層土器集中地点1を4期(新)とする。B・C区流路2-5e層土器集中地点2出土土器とB・C区流路1-5e層土器集中地点1出土土器の違いはこのほかに、①土師器・黒色土器有台皿の有・無、②緑釉陶器碗・皿の有・無、③黒色土器無台碗の少・多などもあげられるが、これらは必ずしも時期差を表すものではないと考えている。

5期 須恵器食膳具、土師器者炊具・無台碗Ⅲ～Ⅵ類・無台碗b類、黒色土器無台碗などが大幅に減少する時期。土師器無台碗I・有台碗・小碗・小皿、黒色土器有台碗などが確認できる。定型的な小皿が確認できないB・C区E10y17pit1を5期(古)、定形的な小皿、黒色土器・土師器有台碗が確認できる土

	「山口」	「三・四・七・八」	「中」・「中山」	「上一」	「天」
1期(新)					
2期(古)					
2期(新)					
3期(古)					
3期(新)					
4期(古)					
4期(新)					

としたH区流路14下層土器集中地点3からは「三」または「川」・「中」・「上一」・「王」、2期(新)としたH区流路14下層土器集中地点4からは「天」が確認でき、「上一」は3期(古)にも確認できる(1108)。また、「王」は3期(古)としたH区流路14中層土器集中地点3から5個体出土している。本遺跡で同一文字が複数確認できるようになるのは、3期からである。

4期になると墨書土器の出土量は増加する。4期(古)としたB・C区流路2-5e層土器集中地点2の墨書土器には、「四」・「八」・「中山」・「王」・「六口」・「人」・「今」などが確認でき、5c層・5d層出土のものも含めると、「中山」・「六口」は2個体、「人」は3個体、「今」は4個体出土している。4期(新)としたB・C区流路1-5e層土器集中地点1の墨書土器は、「中山」・「勳」・「上殿」・「見」などが確認でき、5c層・5d層出土のものも含めると「上殿」は12個体、「今」は4個体確認できる。「中山」はB・C区流路2-5e層土器集中地点2(4期(古))から引き続き確認できるものであるが、書体は異なる。「中山」は北東約3kmの山崎遺跡[石川²⁰¹²]でも出土している。

3) 胎土E群の土師器について

本報告で胎土E群とした土師器は、赤色・灰色のチャート風の2mm前後の円礫を多く含む粘土質胎土である。本遺跡出土の土師器の胎土はB群としたものが各時期を通じて主体を占めるが、E群としたものも1期(古)～4期(新)まで一定量確認できる。E群は他との識別が比較的容易で、形態や技法も他と異なる特徴的なものが多い。E群とした土器群が特定の集団と対応するものなのかどうか、また対応するとした場合それはどのような集団なのか今後検討すべき課題は多いが、以下、第34図に添って、必要に応じ第28～32図と比較しながらE群とした土器群の変遷を確認し、土師器においても須恵器同様、胎土の分類毎に変遷を明らかにすることが重要であることを確認したい。

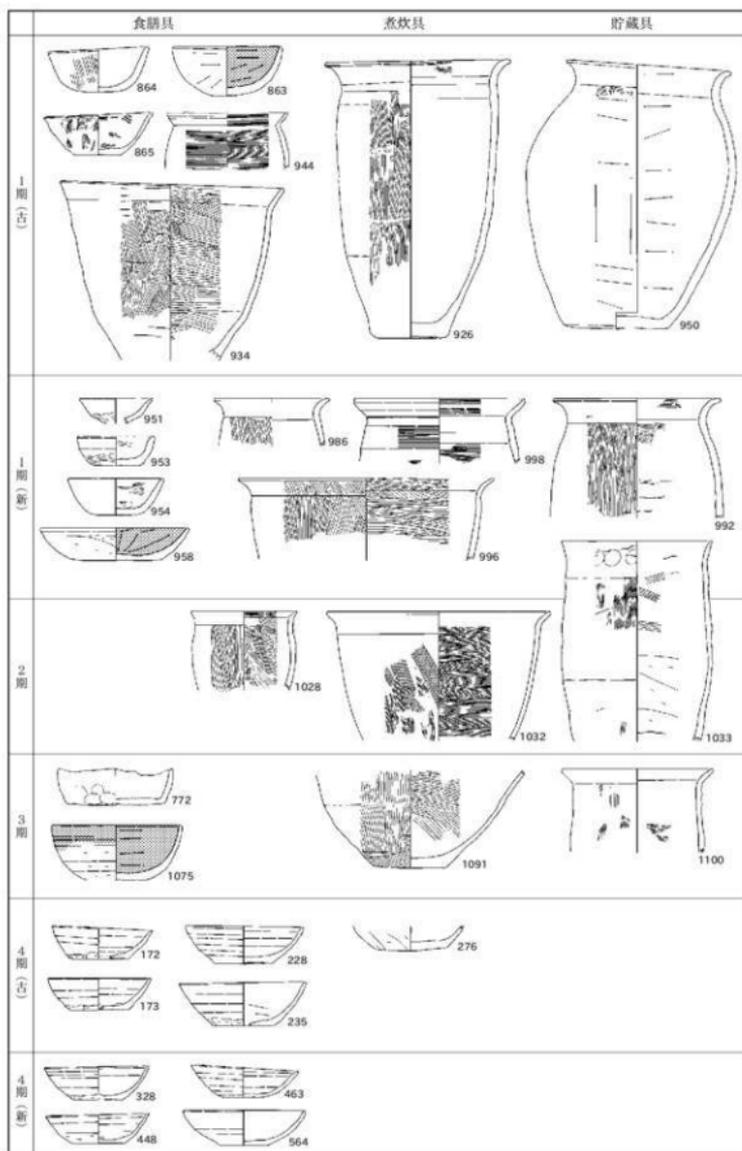
1期は黒色土器杯、土師器杯・小釜・長釜・広口釜・壺などが確認できる。926・986・992は口縁部がヨコナデ、胴部外面がハケメ、胴部内面がナデ、器壁がやや厚く、口縁端部は丸い。これは、口縁部のヨコナデが明瞭でなく、胴部外面が疎らな縦方向のハケメで粘土紐の巻き上げ痕を残し、胴部内面に密に横方向のハケメを行う胎土B群の長釜・広口釜(第30図914・921・935など)とは異なる。926・986・992などで確認できる器壁がやや厚く、口縁部が丸い形状は土師器杯864・953・954、黒色土器杯863などの食膳具や土師器壺950などにも共通する。胎土B群の土師器杯(866・952・1002)は器壁が薄く、体部下半に手持ちケズリ痕や指頭圧痕が残っており、胎土E群とは調整・形態が異なっている。1期の胎土E群の土師器には、914などと同様の調整技法による934、内外面に密なハケメ調整を行う996、B系(須恵器技法を用いる土師器)の994・998など多様で、上記の特徴を持つ土器のみで構成されていないが、器種間を横断して共通する特徴を持つ土器群が存在する。

2期は土師器小釜・長釜・広口釜が確認でき、土師器杯は未確認である。1期に確認できた「口縁部がヨコナデ、胴部外面がハケメ、胴部内面がナデ、器壁がやや厚く、口縁端部は丸い」土師器煮炊具は未確認である。胎土と器形・調整技法の相関は不明瞭である。

3期は黒色土器鉢、土師器杯・長釜が確認できる。黒色土器鉢1075はB系(須恵器技法を用いるもの)だが、土師器杯772、長釜1100はA系(須恵器技法を用いないもの)である。当期は食膳具・煮炊具にB系が増加する時期であるが、胎

本書	春日2010
	III 2期
1期(古)	IV 1期
1期(新)	IV 2期
2期(古)	IV 2期
2期(新)	IV 3期
3期(古)	V 期
3期(新)	
4期(古)	VI 1期
4期(新)	VI 2・3期
5期(古)	VII 1期
5期(新)	VII 2期
6期	VII 3期
	VIII 期

第10表 編年対照表



第36図 胎土E群の土師器

土 E 群には依然として伝統的な手法による土師器杯や長釜が確認できる。

4 期は土師器無台碗・小釜が確認できる。土師器無台碗は器高が低く、体部下半付近に手持ちケズリを行うものが多い(172・173・235・328)。4 期の土師器無台碗で、手持ちケズリを行うものは胎土 E 群のみである。また、手持ちケズリを行わない 228・463・556 も同時期の土師器無台碗と比較すると器高が低い。

また 1 期(古)とした 864 と 1 期(新)とした 953・954 を比較すると、953・954 がより小型であり、4 期(古)とした 172・173 と 4 期(新)とした 328、IV 期(古)とした 228 と 4 期(新)とした 564 を比較すると、4 期(新)とした 328・564 の底径がより小さい。

以上のように、1・3・4 期の胎土 E 群の土師器は、胎土 B 群とは異なる器形や成形技法・調整技法が確認でき、1 期(古)から 1 期(新)、4 期(古)から 4 期(新)にかけて、独自の変遷も確認できた。このような器形や成形技法・調整技法の差は、これまで時期差として認識される場合も多かったと考えるが、土師器の生産地や生産集団の違いがこのような差を生じさせている可能性もある。

B 古代の土師器煮炊具について

本項では土師器煮炊具の成形技法や形態をもとに柏崎地域の地域性について検討する(第 35 図)。

1) A 系煮炊具について

箕輪遺跡では、A 系の煮炊具(ハケメ成形で長胴・平底)が、1 期(8 世紀前葉から後葉)から 2 期(8 世紀末葉～9 世紀初頭)を通じ相当量確認でき、3 期(9 世紀前葉)にも確認できるが、4 期(9 世紀後葉～9 世紀末葉)には A 系煮炊具は確認できず、B 系(須恵器技法を用いた土師器)のみとなる。

越後の多くの地域では、1 期に B 系の煮炊具が増加・定着し、2 期には A 系の煮炊具が確認できなくなるか大幅に減少し、ほぼ B 系のみとなる。箕輪遺跡の煮炊具の様相は越後の中ではやや特異な様相といえる。ただし、このような土器様相は柏崎平野全域にみられるものではない可能性が高い。別山川右岸の海岸砂丘に所在する刈羽大平遺跡(第 9 図 12)では、1 期に先行する 8 世紀初頭頃を中心とする時期の遺跡であるが、B 系煮炊具が一定量確認できる[品田^{ほか}1985]。また、鮎石川中流域の音無瀬遺跡(第 9 図 28)や別山川左岸の萱場遺跡(第 9 図 18)では、2 期の煮炊具は B 系が大半を占め、A 系煮炊具はごく少量である[品田^{ほか}1990・2012、伊藤^{ほか}2013]¹⁾。一方、別山川と鮎石川の合流点付近に位置する角田居遺跡(第 9 図 24)では、3～4 期の須恵器・土師器食膳具とともに A 系の長釜が出土している[品田^{ほか}1999a]。1～3 期の柏崎平野では、鶴川・鮎石川下流域とそれ以外の地域で煮炊具の様相に違いがあった可能性がある。

2) 土師器長釜・小釜 B2 類について

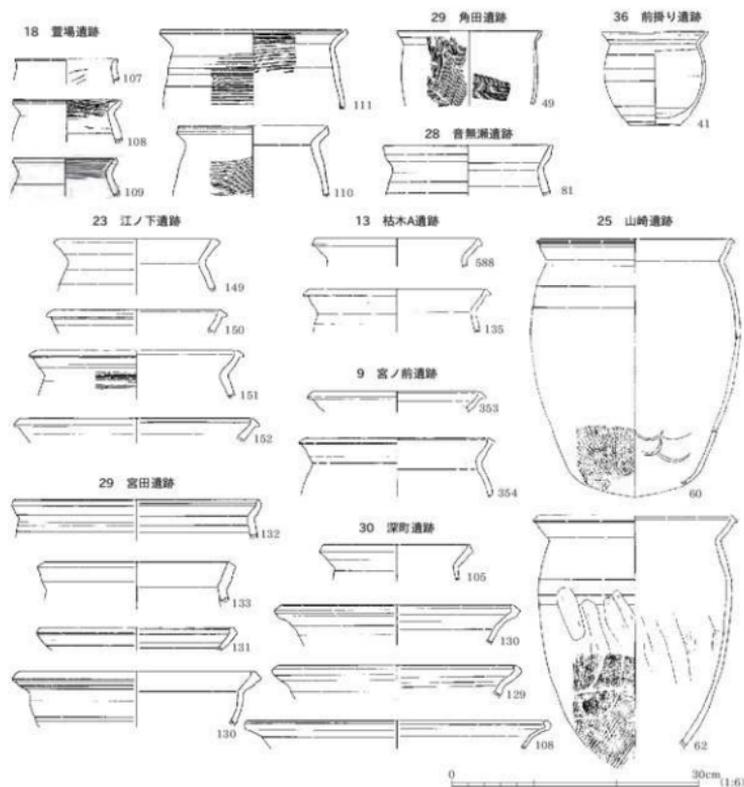
第 V 章 2 では B 系の土師器長釜・小釜を北陸型の 1 類と北信型の 2 類に大別した。長釜・小釜 B2 類(北信型)は、その名称が示す通り長野県北信地域を中心に分布する煮炊具で、越後の頸城地域(西頸城含む)、魚沼地域も主要分布域である。越後では上記 2 地域以外では基本的に出土しないものと考えていたが、箕輪遺跡で少量確認でき、鶴川中流域の前掛り遺跡(第 9 図 36)[品田^{ほか}1997]、鮎石川中流域の音無瀬遺跡(第 9 図 28)[品田^{ほか}2012]でも確認できる。柏崎地域では、音無瀬遺跡が東限であり、西半に偏

1) ただし、2011(平成 23)年の調査では、詳細な時期は不明だが A 系の煮炊具が出土している。

在する。柏崎地域の西部と東部で出土する頻度に差がある可能性がある。分布状況から頸城地域からの波及をえるのが穏当な解釈であるが、前掛り遺跡や音無瀬遺跡などのやや内陸寄りの遺跡からの出土例を考えると、魚沼地域からの波及の可能性もある。

3) 土師器長釜・鍋 B1c 類について

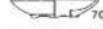
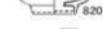
第Ⅴ章 2 では北陸型とした長釜・鍋 B1 類を口縁端部の形態により a～c の 3 種に細分した。c としたものは口縁端部が比厚するか上下に拡張するもので、箕輪遺跡の 4 期の長釜・鍋では主体を占める。同様の形態の土師器長釜は別山川下流域左岸の江ノ下遺跡・枯木 A 遺跡（第 9 図 23・13）〔品田_{ほか} 2008・斎藤 1995〕、別山川中流域の宮ノ前遺跡（第 9 図 9）〔中島 2003〕、鮎石川下流の山崎遺跡（第 9 図 25）〔石川_{ほか} 2012〕などで確認できる。しかし、鮎石川上流域の宮田遺跡・深町遺跡（第 9 図 29・30）〔中野・



第 37 図 柏崎平野の煮炊具
(遺跡の番号は第 9 図 (14 頁) に一致、土器の番号は各報告書に一致)

伊藤 2001] では、B1c 類は宮田遺跡の鍋 (135) などごく僅かである。4 期の柏崎地域では鮎石川上流域とそれ以外の地域で煮炊具の様相に違いがあった可能性がある。

以上のように煮炊具の成形技法・形態などから柏崎地域内の地域性について検討した。柏崎地域は日本海に面し、他の三方を山地に囲まれた地勢的にはまとまりのある地域である。しかし、土師器煮炊具の様相を概観すると、いくつかの小地域に区分できる可能性が高い。1) ~ 3) で示した小地域のエリアは一致しておらず、このことは土師器の地域性を発現させている要因が多様であることを示していると考え

	白磁	黒色土器	土師器・土師質土器R1類	
C 期	 1120	 84	 75	 65
			 79	 60
			 61	 13
		 7	 17	
		 19		
	 708		 740	 743
	 749	青磁	 739	土師質土器T1類
D 期		 806		
E 期		 807		 799
F 期		 811		 793
G 期		 810		 795
				 744
H 期	 709	 745	土師質土器T2類	
	 711	 808		 798
	 712			土師質土器R2類
I 期	 820	 746	 692	 802
	 816			 801
J 期	 823	 701		
	 717	 809		

第 38 図 中世の土器・陶磁器

が、具体的な要因については今後の課題である²⁾。なお今回示した地域性は、限られた資料の中での検討であり、今後の資料の増加を待って再度検証すべきものと考えている。

C 中世の土器・陶磁器について

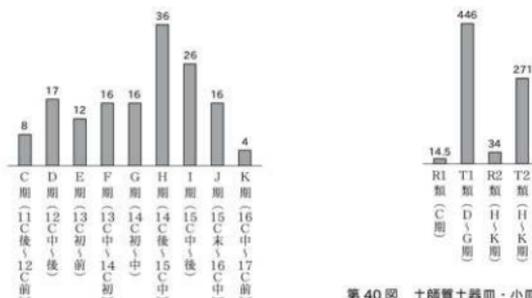
箕輪遺跡では中世（12世紀後半～16世紀）の遺構は掘立柱建物1棟と井戸が数基あるのみだが、土器・陶磁器は一定量出土した。この理由は不明だが、後世の改変により遺構が掘削された可能性がある。以下、出土した土器・陶磁器をもとに、中世の箕輪遺跡の存続期間などを検討する。

輸入陶磁器は、山本信夫の編年でC期からK期のものが確認できる。C期からD期にかけて増加し、E～H期も一定量確認できる。H期に急増し、以後I～K期にかけて減少する。遺跡の最盛期はH期（14世紀後半～未定～15世紀中葉）と考える（第37図）。

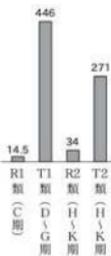
珠洲焼はV期、瀬戸焼・美濃焼は古瀬戸後期のものが多く、このことも上記の想定を裏付ける。土師質土器皿・小皿はT1類が最も多く、T2類はT1類の6割程度、R2類は1割以下である（第36図）。

土師質土器皿は陶磁器との共存例がないが、既存の研究を参考にすると〔品田1999ab, 水澤2005〕、C・D期にはR1類が主体を占めていたものとする。E・F期には793のような薄手で口径の大きいT1類、G期には795のような厚手で口径の大きいT1類、H期の前半には798のような厚手で口径がやや小さく、指頭圧痕が下部に残らないT1類が伴う可能性が高い。

H期の後半からJ期にはR2類・T2類が土師質土器の主体を占めていたものとするが、箕輪遺跡出土の土師質土器でR2類とT2類の出土量を比較すると約1:9でT2類が圧倒的に多い。当期のR2類とT1類の比率は、地域により異なるものとするが、箕輪遺跡のこうした状況が柏崎平野（または柏崎平野の特定の地域）で一般化できるのか、あるいは他地域と比較した場合のような特徴を持つかについては検討できなかった。今後の課題としたい。



第39図 輸入陶磁器の破片数



第40図 土師質土器皿・小皿の分類別出土量
(数値は口径部残存率によるもので、x/36を表す)

2) 例えば、長釜・小釜 B2 類の分布状況は胎土 C2 群の須恵器の分布状況と関連する可能性がある。

2 土器の製作状況について

A 目的と方法

箕輪遺跡における古代の土器（以下、土師器を指すものとする）の多くはハケメ調整によって仕上げられている。横山浩一が明らかにしたように、ハケメは板状の工具による木目の擦痕であるため〔横山 1979〕、同一工具の同一端面を用いて調整した土器には原則的に同じ痕跡が残されることになる。下総型埴輪を素材に、型式学的な分類とハケメ調整痕の相関性を検討することにより個人の製作品（同工品）を分別した犬木努の研究はこの原理を応用したものである〔犬木 1995 ㉔〕。犬木は、製作者個人の「くせ」に起因する「手法属性」を共有する資料群においてハケメ調整痕の一致が確認できる場合、それらは一人の製作者が同一工具を用いて製作した蓋然性が高いと判断している。本節ではこうした先行研究に学びながら、箕輪遺跡における土器の製作状況を検討する。土器の器面に現れるハケメと工具の関係や円化の方法等は城倉正祥の研究〔城倉 2007・2009 ㉔〕も参考にした。

B 検討対象

本節で行う分析は、土器の製作者の活動期間という限られた時間での議論が中心となるため、検討資料にある程度の一括性が保証されることが前提となる。箕輪遺跡においては、H 区流路 14 下層の土器集中地点 1～4（以下、地点 1～地点 4 と表記）の土器群がこの条件を満たす。地点 1～4 は、出土した須恵器の形態から、地点 1・2 はほぼ同時期だが後者がやや新しく、以降地点 3、地点 4 の順に形成されたとみられる。

箕輪遺跡出土土器は、成形にロクロを用いるものとそうでないものに大別できる。後者は、平底でハケメ調整を主体とする土器群であり、杯類ではナデ・ミガネで仕上げるものや手捏ねのものを含む。これらは、集落内で生産されたいわゆる「ドメスティックな土器」〔都出 1989：291-292 頁〕と考えられる。一方、前者は集落外部からもたらされた流通品である。本節の目的上、ロクロ成形の土器は対象から除外される。なお、ロクロ成形の土器は地点 1～地点 4 のいずれにおいても客体的な存在であることから、ドメスティックな土器の不足を補う程度の役割であったと考えてよいだろう。

さらに、4 か所の土器集中地点のうち、地点 3・地点 4 は分布状況がやや散漫であり、資料数も少ないため、地点 1 の 53 点と地点 2 の 20 点の合計 73 点の土器を検討対象に定める。

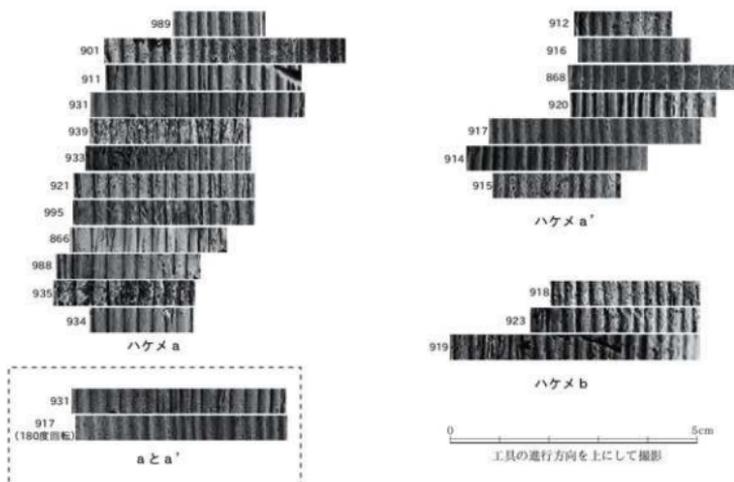
C 分析

1) 地点 1 における製作状況

第 41 図は土器のハケメをデジタルカメラで接写し、同縮尺で配列したものである。左側の番号は実測図の番号に対応する。ハケメは基本的に遺存状態のよい土器の内面から採取した。

地点 1 では、複数個体に共通するハケメとして a・a'・b の 3 種が確認できる。a と a' は、一方を 180 度回転させるとパターンが完全に一致する。

ハケメ a の土器は 9 個体、ハケメ a' の土器は 7 個体存在する。これらには、以下のような共通する特徴が指摘できる。①：長釜のプロポーションが胴部下位から頸部までほぼ一定の寸胴形である。②：長釜・



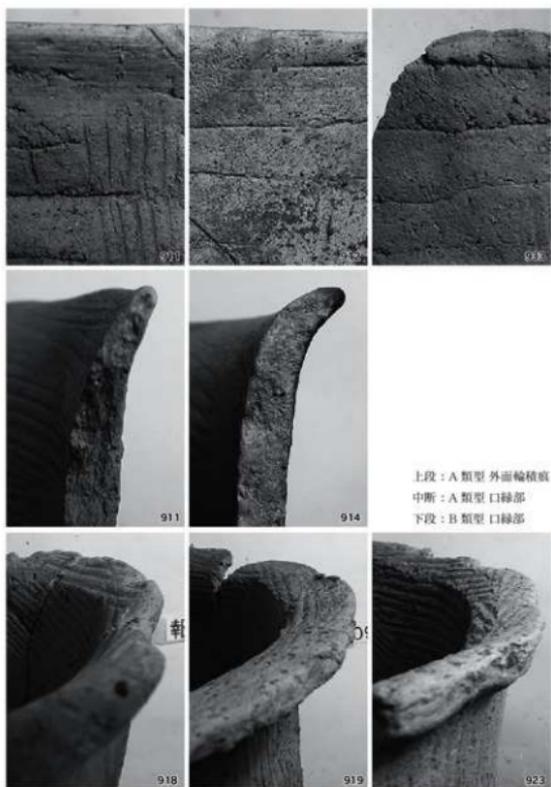
第 41 図 一致したハケメ

広口釜とも、口縁部のみをわずかに外反させる（第 42 回中段）。③：胴部の輪積痕が消ききれずに残る（第 42 回上段）。④：底部付近にヘラケズリを施す。これらの特徴の一つ一つは他の土器にも散見するが、①～④を併せ持つものはハケメ a および a' の土器に限られる。また、形態が異なるため同一の基準で比較が難しい杯（866）や小釜（901）においても、③の特徴は一致する。以上から、これらの土器は同一人物の製作品であり、ハケメ a および a' はこの製作者が使用した 1 本の工具（工具 A）の表裏の端面によって生じたものと考えられる。上述のように、ハケメ a と a' が 1 対 1 に近い比率（9 対 7）で存在することは、工具の表裏が調整の都度、無作為に選択されたことを示唆している。以下ではこれらの土器を、A 類型と呼ぶことにしよう。

一方のハケメ b の土器 3 個体には以下の共通点が見出せる。①：プロポーションは胴部上位が若干膨らむ。②：口縁部の上端を鋭く屈曲させる（第 42 回下段）。これらも土器の製作方法とハケメの一致が対応し、特に②は非常に特徴的な手法であることから、特定の工具（工具 B）を用いた一人の製作者によるものと考えてよいであろう。これらを B 類型とする。

ハケメ b には、a と a' のようにパターンが逆となるものが確認できない。しかし、城倉正祥が実験によって示したように〔城倉 2007〕、同一工具の表裏のハケメは必ずしも逆パターンになるわけではない。すなわち、a と a' のような正逆の関係にあるハケメによって工具の表裏が認識できるのは、工具の幅が薄く、柾目の木取りがなされている場合に限られる。つまり、工具 B の裏面で調整された土器も、認識できないだけで実際には存在する可能性を考慮する必要がある。そこで、B 類型の手法属性①・②をもとに可能性のある土器を求めれば、905 や 922 はハケメの遺存状態が悪く比較できないものの候補となる。

地点 1 では以上のほか、①：胴部内面に丁寧なナデを施しハケメを残さない。②：長釜の器高が高い。③：頸部が窄まり口縁部が強く外反する。④口縁端部が丸みを帯びる。という特徴を備えた土器群が存在



第 42 図 A 類型・B 類型細部写真

する。これらは相互に類似度が高く、かつ他の土器との型式学的距離が最も隔たった一群である。しかし、①の特徴によりハケメの採取が難しいこともあり、確実に同一ハケメと認定できるものが見出せない。とは言え、6点という個体数はA・B類型の個体数を考慮すると複数の製作者を想定する必然性もないため、これらをC類型としておく。

以上の検討より、地点1の土器53個体のうち、A類型が16個体、B類型が3～5個体、C類型が6個体抽出できる。地点1出土土器には、遺存状態が悪く検討に耐えないものも含まれるため、各類型が全体に占める割合は実際にはもう少し高いものと思われる。A類型は、長釜の23個体中9個体、広口釜の5個体中4個体と、約半数を占める。また、杯類を含む幅広い器種においてA類型が存在することは、製作個数の多さとあわせ熟練の製作者像をイメージさせる。

産棄地点の一括性は必ずしも製作時期の同時性を保証するものではないが、以上の検討結果は、一定の期間に存在した土器製作者とその製作個数比を反映したものとみてよいであろう。

2) 地点2における製作状況

3個体の土器にハケメaが確認できた。B類型の土器は存在しない。C類型の土器は2個体である。

ハケメaを持つ土器の手法属性について検討すると、長釜(989)は、口縁端部が小さく外反する点、胴部外面にハケメ調整後ケズリを加える点が地点1のA類型と相違する。988は小釜、995は長釜に分類され、サイズはやや異なるが、各部位のサイズ比はA類型の広口釜に近い。ただし、988・995はいずれも胴部下半が逆台形に直線的に開き、胴部中位(第41図に矢印で示した部分)で屈曲し、上位はほぼ垂直に立ち上がる。こうした形状は、胴部中位まで粘土紐を外向きに積み上げた後、一定の乾燥期間において上位の製作を行った場合に生じると考えられ、2個体が同じ手法で製作されたことを示すとともに、胴部全体が曲線的に立ち上がるA類型の広口釜とは明確に区別される。

地点2は検討対象とする資料数が少ないため、地点1と同じ水準で議論を行うことはできない。それでも、地点2におけるハケメaの土器が、いずれも地点1のA類型と手法属性を異にする点は注目してよいだろう。これらの土器群をA'類型としておこう。

3) 地点1から地点2にかけての変化とその評価

では、A類型とA'類型はいかなる関係にあるのだろうか。

地点1と地点2の時期差は、出土した須恵器の形態から相対的に判断されたものであるから、一概に地点1の出土土器が地点2のそれより新しいとは限らない。しかし、A類型とA'類型に関する限り、出土地点の違いと土器の形態差が対応関係にあることから、前者の製作時期が後者に先行する蓋然性は高いと言える。これを土器の製作者の問題として捉えなおすと、①：一人の製作者の製作手法が変化した(A類型とA'類型の製作者は同一人物)、②：ある製作者から別の製作者へ工具Aが移動した(製作者は別人物)、という二通りの解釈が成立しうる。現時点で判断を下すことは困難であるが、土器作りの民族誌調査では熟練の製作者ほど身体技法が安定し土器の形態も均質化する傾向が指摘されていることを参考にすれば[中園 2014₂₂]、②の可能性が高いとは言えるかもしれない。

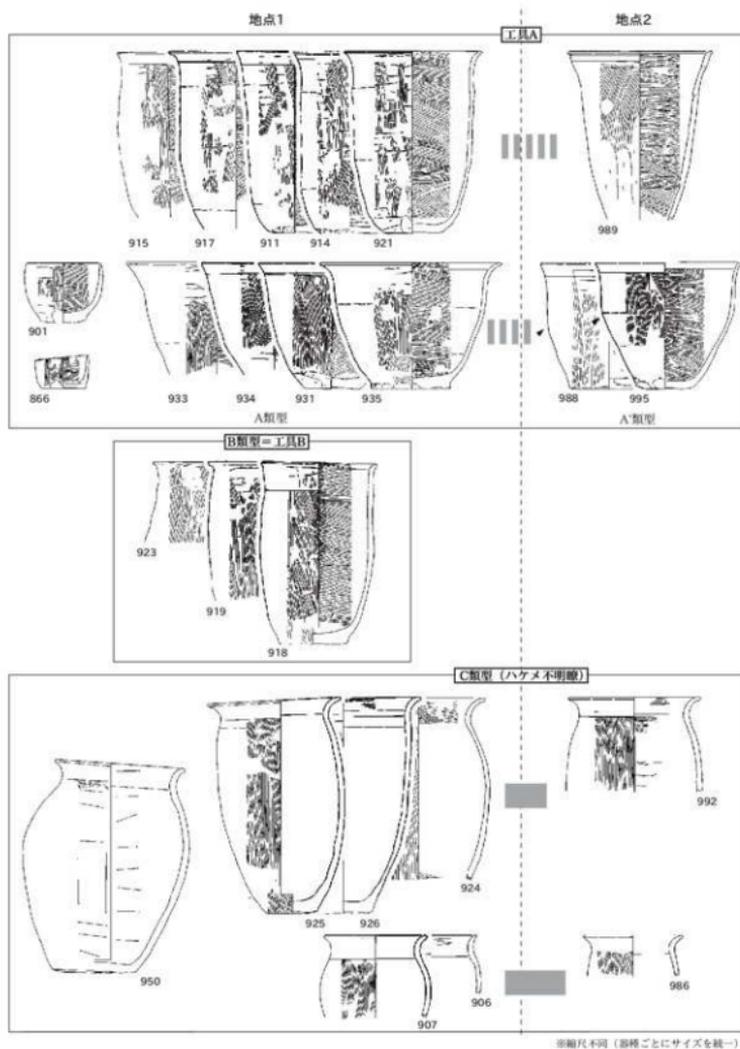
いずれにしても、一人の土器製作者の活動期間や工具の耐用年数はそれほど長く見積もれないことから、今回のようなケースは地点1と地点2の時期差がわずかであったために起こり得たものと思われる。

D 小 結

以上の検討結果を記して結びとする。

- (1) 箕輪遺跡では、観察条件が良好な一部の土器について個人の製作品を識別することができる。
- (2) 同時期に活動した土器製作者の製作個数は均等ではなく、偏りがある。
- (3) 地点1と地点2では、同一のハケメで手法属性の異なる土器群が存在することから、製作者間で工具が移動した可能性がある。

今後は、分析事例を蓄積し、2点目や3点目に挙げた製作状況の意味や背景について追及していく必要があるだろう。



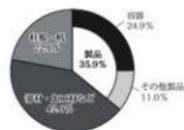
第43図 地点1・2における土器の製作状況

3 木 製 品

A 組成について

箕輪遺跡から出土した木製品は1292点に及ぶ(種実・削り屑などは除く)。第Ⅴ章第5表に示した通り、流路からの出土が約80%を占める。全体では部材・加工材が最も多く42%、次いで製品が36%である(第44図)。製品は流路以外での出土量はわずかであり、流路出土遺物における製品の比率はさらに高く、約50%となる。製品のうち約70%が容器であることは特異的である。剣物と曲物が数量的には拮抗しているが、曲物は出土状況により側板と底・蓋板それぞれを計測していることから、本来の個体数は挽物が最も多いと推測できる。容器について詳細は次項で述べる。容器以外の製品では斎串と箸状木製品(流路14のみ)が突出しており、その他は流路においても数点しか確認できない。

同一の河川と考えられる流路1と流路2とで比較すると、流路2では挽物の有台皿・斎串がほとんど認められないことが特徴的である。時期差とともに場の性格の違いを示している可能性があるかもしれない。



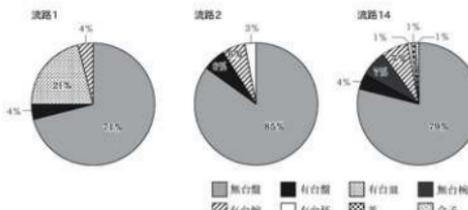
第44図 木製品の組成

B 容器について

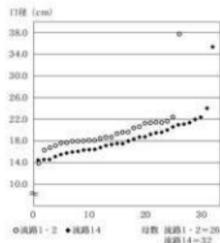
本遺跡から出土した容器類は321点¹⁾のぼり、そのうち96%が流路からの出土である。流路であることから一括性について論じることは難しいが、出土した土器から年代幅は比較的限定されることから、組成や傾向などについて検討してみたい。それぞれの種類について述べる。

挽物 第Ⅴ章でも述べたように、無台盤が圧倒的に多く約80%を占めることは、どちらの流路とも一致する。ただしその他の器種で違いが出ており、一方のみ出土した器種として流路1では有台皿、流路14では無台碗・蓋・合子・種椀が挙げられる。また、未成品や粗型、素材は流路14のみで確認できる。合子や種椀など仏教的な器種は8世紀中葉から9世紀前葉に特徴的なものというところであり、有台皿や瓷器系の椀などは9世紀後半から末頃に位置づけられる[川畑1997]。木製品からも流路1・2と流路14との時期差がうかがえる。

無台盤は多数出土したことから、口径分布図を作成した(第46図)。流路1では口径14.0~22.3cm



第45図 流路における挽物の組成



第46図 挽物の口径分布

1) 挽物未成品・粗型は含むが、素材は含まない。

のものがあり平均18.8cm、流路2では16.6～37.8cmで平均19.0cm²⁾、流路14では14.5～35.4cmで平均18.2cmである。流路14のほうが若干小さいという結果が出たが、分布範囲はほぼ同じである。グラフを見ると、35cm以上の大型品が1点ずつ突出しているほかは、途切れずに分布している。

今回出土した挽物のうち、30点ほどに轆轤爪痕が確認できた。観察したところ、少なくとも3種類の爪が存在することが判明した(第47図)。爪痕は基本的に5つで、①すべて平行するもの、②中心に向かって直交するもの、③並列する3つが平行し、上下2つは直交するもの、の3つ



第47図 轆轤爪痕模式図

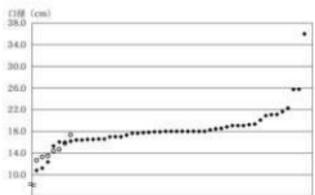
である。237のように、見たところ②で4爪という配置も存在する可能性がある。ただし仕上げの整形により中心の爪痕が削られた可能性も考えられることから、少なくとも3種類とした。

木取りについては、すべて横木取りであり大多数が柁目取りであるが、5点のみ板目取りであった。その5点の樹種はトチノキであり、ほかはすべてケヤキ(推定も含む)である。柁目取り-ケヤキ・板目取り-トチノキという樹種と木取りの関連が、本遺跡では明瞭に示された。ただし器種は5点とも異なり、樹種と器種との関連性はないようである。

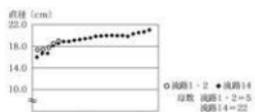
曲物 数量としては挽物と同程度出土しているが、側板と底板あるいは蓋板とが別々に出土する例が多く、さらに器高も不明なものが多い。

身(底板)と蓋(蓋板)の径分布を第48・49図に示す。身は16.2～19.2cmに分布が集中し、11～15cm程度、20～22cm程度、25cm程度、36cmに概ね区分できる。これは[川畑1997]で示された北陸地方の径分布とほぼ一致する(ただし、北陸では40cm以上の大型品も分布するが、本遺跡では出土していない)。法量では川畑のいう「浅身」³⁾(336・338)「やや浅身」(241)の2タイプが確認でき、「深身」はない。また、蓋は16.0～21.0cmに分布がまとまる⁴⁾。身と同基準でみるとすべて「やや浅身」タイプである。本報告では第V章で述べた通り周縁が有段となり(奈文研分類Dタイプ)木釘孔の認められないものは蓋、木釘結合のもの(奈文研分類Fタイプ)を身としたが、Dタイプは北陸北西部では確認できず、特に新潟県で濃密に分布することから、曲物の技術系譜が異なるのではないかとこの論もある[川畑1996]。他遺跡の例と合わせ使用痕などのさらなる検討が必要であり、今後の課題としたい。

木取りについては、底板はほとんどが柁目取りで90%近くを占めるのに対し、蓋板では比較的板目取りも多くその比率は約25%となり、形態による違いが見られる。側板ではさらに板目取りの比率が高くなり33%程となる。中には、側板本体は柁目取りで蓋は板



第48図 曲物底板の径分布



第49図 曲物蓋板の径分布

- 2) 流路2では口径37.8cm、流路14では35.4cmの個体のみ分布が突出しているため、平均値には含めていない。
- 3) 指数の具体的な数値が提示されていないため、論文挿図から推測し、器高指数(器高/底径)が0.45～0.5程度以上は深身、0.2以上がやや浅身、それ以下は浅身として本遺跡の個体を計測した。
- 4) 124は推定径52cmであるが、曲物でない可能性もあることからここでは除外した。

目取りという個体もある(241)。柱目が主体であることは変わりないが、それぞれで若干異なることは興味深い。樹種については、スギあるいはヒノキのみであるが、その比率などについては分析個体が少ないため不明である。側板と底板の樹種は同一とは限らず、336・339のように底板はスギで側板はヒノキとそれぞれ異なる例も認められる。

割物 流路14からのみ出土した。9世紀前半頃まで出土例があるということで、流路の年代と合致する。鉢(?)と桶、盤・槽が確認できる。弥生時代後期以降の技法を受け継ぐもので、北陸東部に分布がほぼ限定されるという[川畑1997]。本遺跡では長さ60cmを超える大型品が確実に3点以上出土しており、曲物では40cm以上の大型品が出土していないことから、割物から曲物への転換が行われていなかったことがうかがえる。

C 柱根について

本遺跡では掘立柱建物15棟検出したことから、多くの柱根が出土した。ここでは柱根の形態(下部の加工)と木取り、樹種などの関連について見てみたい。なお、すべての柱穴から柱根が出土していないこと、さらに樹種同定を行ったものは限られることから、以下の結果をもって断定できないという制約はある。しかしながら建物によっては概ねの傾向が見えてくると考え、検討を行った。

BC区SB1 柱穴30基のうち柱根が残るものは16基であるが、底面が劣化しているものが多い。加工がわかるものはわずか4点であるため分類はできないが、実度の異なる2面を持つものが2点見られる(6・7)。樹種は分析10点のうち9点がクリ、1点がケヤキ(7)である。7は特徴的な柱根であるが、建物内の位置としては特殊ではない。木取りは丸木、半割・分割材があり、半割・分割材は心持かもしくは心に近い部分まで認められるが、樹種・形態との関連性はないようである。

E区SB1 柱穴12基⁵⁾のうち柱根は6点出土したが、第V章で述べた通り残存するのは3点である。いずれも下部を細長く加工する特徴的な形態であるが、3点とも木取り・樹種が異なる(心去割出・心持割出・丸木/オニグルミ・クリ・ケヤキ)。3点とも側柱であるが、残存する柱根が少ないことから関連性は不明である。

E区SB2 柱穴8基のうち柱根が3点、礎盤が2点出土した。柱根の木取りは2点とも丸木取り、樹種はカツラである。礎盤はオニグルミ(171)とカツラ(167)である。数は少ないながらSB1と異なる樹種が多いことは興味深い。

E区SB4 柱穴9基のうち柱根が残るものは8基で、4点を図化、同定した。樹種はすべてオニグルミである。木取りは、丸木取りが2点以上あることは確実にであるが、そのほかは劣化のため判断としない。両側の隔柱となるP31(182)とP27(183)とで直径が全く異なることはやや気になるところである。

E区SB6 検出した柱穴6基とも柱根が残るが、V字状に加工した下部のみの残存であり、2点を図化・同定した。樹種はカエデ属である。木取りは丸木取りで、いわゆる杭状である。

E区SB8 柱穴4基とも柱根が残る。木取りはすべて丸木取りで、形態は3点が杭状、1点はやや平坦である。樹種は2点同定しトネリコ属であった。肉眼観察では残りの2点も同じ材と推測される。

E区SB117 柱穴8基とも柱根が残る。SB117は本遺跡で唯一棟持柱をもつ建物であるが、側柱と棟持柱とで形態等に違いが見られる(第11表)。ちなみに、一部重複するSA116の杭については、木取

5) E区SB1・2・3・6、H区SB1・2・3は第V章でも述べたが一部は調査区外に延びていることから、柱穴の数と建物の柱数は一致しない。

りは全点丸木取りで杭状、樹種は4点同定したがすべてカエデ属であった。

H区 SB1 掘形が方形を呈する柱穴であるが、検出した柱穴7基すべて柱根が残存する。木取りは心去りの分割材で、樹種は7点のうち1点がオニグルミ、ほかはク

リである。形態は平坦なものや尖度の異なる2面を持つものの2種類があり、平坦なものは北西から数えて2番目の側柱(両側2本)であり、位置と何らかの関連があるかもしれないが、柱穴の一部は調査区外で全容が明らかではないことから推測にとどまる。また、いずれも分割材であることから、素材の大きさを推定してみたところ、平坦なものは直径45cm程度、2面を持つものは直径60～80cmという結果となった。ただしこれは、素材の表皮近くまで使われたという前提のものであり、さらに年輪の弧が一定していないために憶測の域を出ないが、素材の大きさと柱根形態とが関連する可能性が示されたと考える。

以上、建物ごとに述べてきたが、個別では関連性がうかがえる例があるものの、全体に共通する傾向などは認められなかった。時期差もあると推測されることから当然のことかもしれない。ただし、E区SB4・6・8やSA116など比較的小さい建物や杭列については、丸木取りで杭状のものがほとんどで、樹種も単一とする傾向があると言えそうである。

利用樹種全体でみると、クリ・オニグルミが多い。次いでトネリコ属・カエデ属、数は少ないがカツラ・ケヤキ・キハダの7種類が認められた。新潟県では縄文～江戸時代までクリが主体となり、その他の樹種が多様であることが特徴的で、その多様性は旧市町村ごとに異なるという〔久田2012〕。〔久田前掲〕では柏崎市のデータはないため単純には比較できないが、その他の市町村をみると、本遺跡で見られる樹種はすべて含まれている。割合の差こそあれ樹種自体はそれほど変わらないことがうかがえる。

D 壺 鐘 について

木製鐘(古墳時代～古代)は本遺跡を含め全国で39遺跡で52例しか確認されていない。輪鐘・壺鐘・半舌鐘の3種類に分類でき(第50図)、そのうち壺鐘は42例ほどで最も多く出土している。

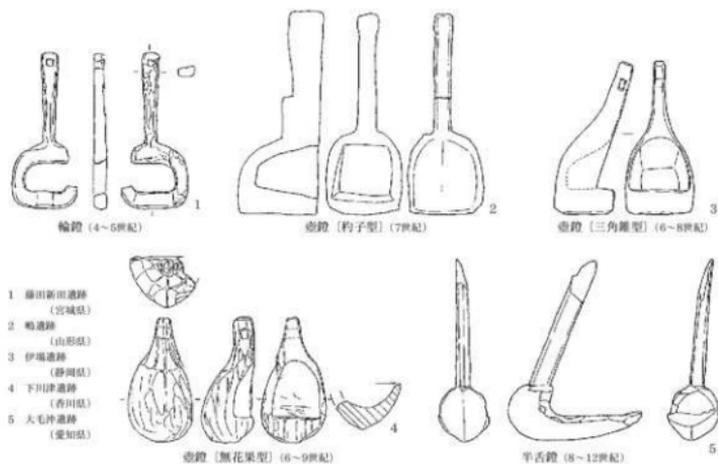
壺鐘は、6～9世紀頃にかけて見られる形態で、輪鐘の先に足先を入れる壺がついたものである。材質は木製のほか、木芯鉄板張製(木芯を鉄板で覆い鋲留めしたもの)・金属製があり、形態的特徴からさらに杓子型、三角錐型、無花果型に分類される(第50図)。杓子型の木製壺鐘は、山形市嶋遺跡例が認められるのみである。その名の通り杓子形を呈し、吊り手が長い。三角錐型は、壺と吊り手との境が不明瞭で、正面形は三角形あるいは二等辺三角形を呈する。また、吊り手が杓子型より短いという特徴を有する。無花果型は三角錐型を全体的に丸くしたかたちである。杓子型・三角錐型より後出する型で、最も出土例が多い。

無花果型の木製壺鐘には、金属製品を模したものと、そうでないものとの2種類が認められる。前者に相当する木製壺鐘の例として、埼玉県下田町遺跡〔赤熊¹³⁾2006〕、大阪市四天王寺旧境内遺跡〔松本¹⁴⁾1999〕、新潟県草野遺跡〔水澤2004b〕があげられる(第51図)。壺部は舌先形を呈し縁を有する。壺部と吊り手の境は明瞭で、長方形の吊り手には横長長方形の鐘軛通し孔が穿たれる。また玉縁状の幅広く厚い縁を持つなど、正倉院御物等に見られる金属製壺鐘を模していると推測できる。後者の例として、香川県下川津遺跡〔藤好¹⁵⁾1990〕が認められるが、吊り手と壺部の境は不明瞭で、全体的に丸みを持つ。前者に比して踏込部の幅が狭く、奥行きが浅い。

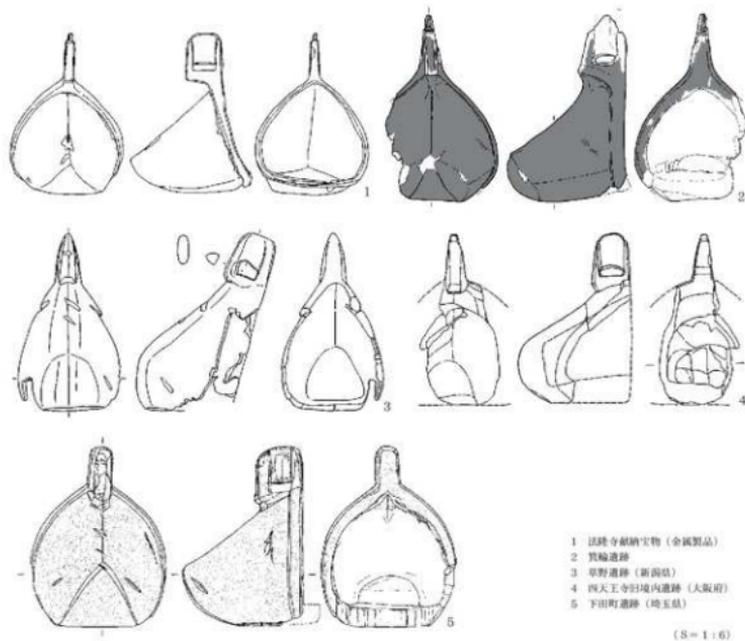
本遺跡例は前者に分類できる。下田遺跡例は8世紀前半、四天王寺旧境内遺跡例は8世紀後半、石田

	側柱		後柱	
	P117 ①～⑥		P117 ⑦	P117 ⑧
	報告No.187～192		報告No.193	報告No.194
木取り	分割		半割	丸木
形態	底面平坦		底面平坦	V字状
樹種	オニグルミ		トネリコ属	カツラ

第11表 E区SB117 木取りと形態・樹種の関連



第50図 木製鏡の分類 ([永井1996]を転載・改変, ()は主体時期)



(S=1:6)

第51図 冥輪遺跡出土土鏡の類例

3 木製品

遺跡名	所在地	分類、数	副種	出土状況	年代	備考
藤 向 (まきむく)	奈良県藤井市	鍔跡、1	アガガシ	古墳周縁	4C初	
藤田新田	宮城県仙台市	鍔跡、1	ケヤキ	河川跡	5C後半	左隻
龍原北 (しほみやま)	大阪府四條畷市	鍔跡、2			5C後半	
神宮寺	滋賀県長浜市	鍔跡、1		河川跡	5C末～6C後半	黒漆塗、木製鍔出土
船 田 (ふねのた)	山形県山形市	鍔跡 (約)、1	不明		8～9C	木製鍔出土
池 守	長野県長野市	鍔跡 (三)、1	クワ	河川跡	5C末～6C初頃	木製鍔出土
下山門 (しもやまと)	埼玉県福岡市	鍔跡 (三)、1	—	河川跡	6C	
伊 場	静岡県浜松市	鍔跡 (三)、1	シロダモ	溝	6C後半	木製鍔出土
六太入 (むくろい)	三重県津市	鍔跡 (三)、2	ケヤキ 1	大溝	6～7C	木製鍔 3点出土
諏訪本	埼玉県熊谷市	鍔跡 (三)、1			6～7C	
上河北 (かみこうき)	福井県福井市	鍔跡 (三)、1	—	河川跡	7C	木製鍔出土
観音寺	徳島県徳島市	鍔跡 (三)、1		河川跡	7C	
小籠田	埼玉県行田市	鍔跡 (三)、2	イヌガヤ	河川跡	8C	鍔部に左右対称の彫り
玉 渡	福井県若狭町	鍔跡、1			6C	
牛 西 (うしにし)	滋賀県東近江市	鍔跡、2			8C初頃	木製鍔出土
鮎子田 (あずな)	東京都京都市	鍔跡 (無?)、1	(計)	河川跡	5C後半～6C前半	石製か
水 壱 (みづいち)	京都府京都市	鍔跡 (無)、1	—	河川跡	6C後半	
山 西	愛知県豊川市	鍔跡 (無)、1		河川跡?	6C末～7C初頃	鍔跡の鳩胸部片、木製鍔出土
末住庵寺 (ましゆい)	愛知県松山市	鍔跡 (無)、2	—		6～7C初頃	1例の可能性も
安武・深田	福岡県上野	鍔跡 (無)、1		河川跡	6～8C	
井上薬師寺	福岡県小郡市	鍔跡 (無)、1		大溝	6～8C	
下川津 (しもかわつ)	香川県坂出市	鍔跡 (無)、4	ケヤキ 1、クスノキ 1、ヤナギ属 1	河川跡	7C	黒漆塗、左隻 2 右隻 1 不明 1、木製鍔出土
原代遺跡群	長野県東御市	鍔跡 (無)、1	ケヤキ	河川跡	7～8C	石製か
西河原森ノ内	滋賀県野洲市	鍔跡 (無)、2		河川跡	8C前半	木製鍔出土
下田町 (しもがまち)	埼玉県熊谷市	鍔跡 (無)、1	クスノキ	河川跡	8C前半	黒漆塗
山 崎	愛知県田原市	鍔跡 (無)、2		河川跡	8C前半	2例 1対、木製鍔出土
四天王寺御境内	大阪府大阪市	鍔跡 (無)、1	—	井戸	8C後半	黒漆塗、左隻
箕 輪	新潟県柏崎市	鍔跡 (無)、1	バラ科ナシ果科	河川跡	8C後半～9C初頃	黒漆塗、左隻 2
弘福町	福岡県北九州市	鍔跡 (無)、1		河川跡	8C後半～9C	
草 野	新潟県内子市	鍔跡 (無)、1	クスノキ	河川跡	8～9C	
多賀城跡	宮城県多賀城市	鍔跡 (無)、1	—	河川跡	8～9C	
石 田	福岡県北九州市	鍔跡 (無)、1	ケヤキ	河川跡	8～9C前後	
白 坪 (しろつぎ)	鳥取県大田市	鍔跡 (無)、1		河川跡	10C初頃前後	
道 伝 (どうでん)	山形県山形市	平舌跡、1	—	SDI	9C前半	
古志田東 (ふるしだけひ)	山形県米沢市	平舌跡、2	—	河川跡	9C前半	
獅子ヶ谷 (みこがや)	静岡県藤枝市	平舌跡、1	クスノキ	河川跡	8C	
袴 袋 (はかば)	兵庫県豊岡市	平舌跡、1			9C	黒漆塗、銅製黒漆鍔出土
唐 倉 (からぐら)	静岡県島田市	平舌跡、1	クスノキ	河川跡	10～11C	木製鍔出土
大毛沖 (おほけりき)	愛知県一宮市	平舌跡、1	サカキ	河川跡	10～11C	黒漆塗

*鍔跡 (約)：約子型、(三)：三角彫型、(無)：無花彫型 副種—：不分析、空欄：不明

第12表 木製鍔 出土遺跡一覧 (〔永井 1996・森田 1997・梅崎 1990〕に追加・改変)

遺跡例は 8～9 世紀に比定されており、帰属時期もほぼ一致する資料である。この時期の金属製鍔の吊り手は、吊り手が緑金に逆「L」字状に付くことで、前方に突出する形態をとる。一方、木製鍔は吊り手補強のためか、緑金に相当する玉縁状の縁から鍔頂部にかけて吊り手が付き、吊り手が突出した印象を与えない。金属製鍔はその出現初期において吊り手頂部に三角形の突起を持つが、この突起はやがて消失し、L字形の縁を持つ長方形の吊り手となる〔坂本 1985〕。本遺跡例は、長方形の吊り手に三角形の突起が頂部につくもので、同時期のほかの鍔には認められない形態的特徴を持つ。鍔軸通し孔の穿孔方向は壱口に直交し、下田町遺跡例などと同様である。本遺跡例は否を欠損しており、その形態は不明であるが、正倉院御物の金属製鍔に見られる様な短い舌を持っていたと推測される。したがって、本遺跡例は細部において若干の違いが認められるものの、概ね正倉院御物の金属製鍔に類似する鍔と判断できる。

本遺跡から出土した木製黒漆塗鍔は、金属製鍔を模した儀仗用の優品で、かなり身分の高い人物の所有物と考えられる。本遺跡例は舌等が欠損しているが全体的な遺存状態は良好で、古代の馬具について考える上で貴重な資料である。今後の類例増加を待ちさらさら検討していきたい。

4 遺 構

建物跡の年代

H区SB1～3はF3に位置する掘立柱建物である。SB1は調査外南東にさらに伸びる可能性がある。H区SB1のP30、H区SB2・3に近接し平行する溝SD38からは1期の土師器・須恵器が出土している。またH区SB1～3の南西に位置する流路14土器集中地点1・2下層からは1期の土器が多量に出土し、同中層からは4期の土器が1～3号木簡（図版85 267～269）を伴い出土しているが、量的には下層ほど多くない。したがってH区SB1～3は、4期に下る可能性を否定できないが、1期の建物の可能性が高い。

H区SB4はG・H3に位置する1×1間の小規模な建物である。SA1や柱根を伴うP70などが近くにあり、本来は他にも建物が存在したが後世に削平された可能性が高い。SB4も本来はもっと大型の建物であった可能性もある。北東には流路14土器集中地点4があり、下層から2期（新）の土器がまとまって出土している。SB4は2期（新）の建物の可能性が高い。

E区は西側に掘立柱建物が集中する。SB1～3は調査区外北側に建物跡が広がっており、近接して別の建物が存在した可能性もある。SD12・SX2から3期の土器が出土しており、SB1・SK7出土土器は、3期～4期（古）のものであろう。他の遺構や包含層出土土器も3期～4期（古）の中に納まるものが大半である。E区の建物（SB1～7・117）のほとんどがこの中に納まる可能性が高い。

B・C区は流路1の西側に掘立柱建物を2棟検出した。SB2は柱穴覆土から珠洲焼甕胴部破片が出土している。詳細な時期は不明だが、SB2は中世の掘立柱建物と考える。SB1は4期（古）に位置づけた土器集中地点1が南西に近接して存在することから、このころの建物と考えることも可能だが、小型で円形となる柱穴の形状や、両面に庇を持ち、中柱がみられる建物型式などから考え、5・6期まで下る可能性が高い。周辺のビツや井戸に5・6期の遺物を出土するものが一定量見られる点もこのことを補強する。

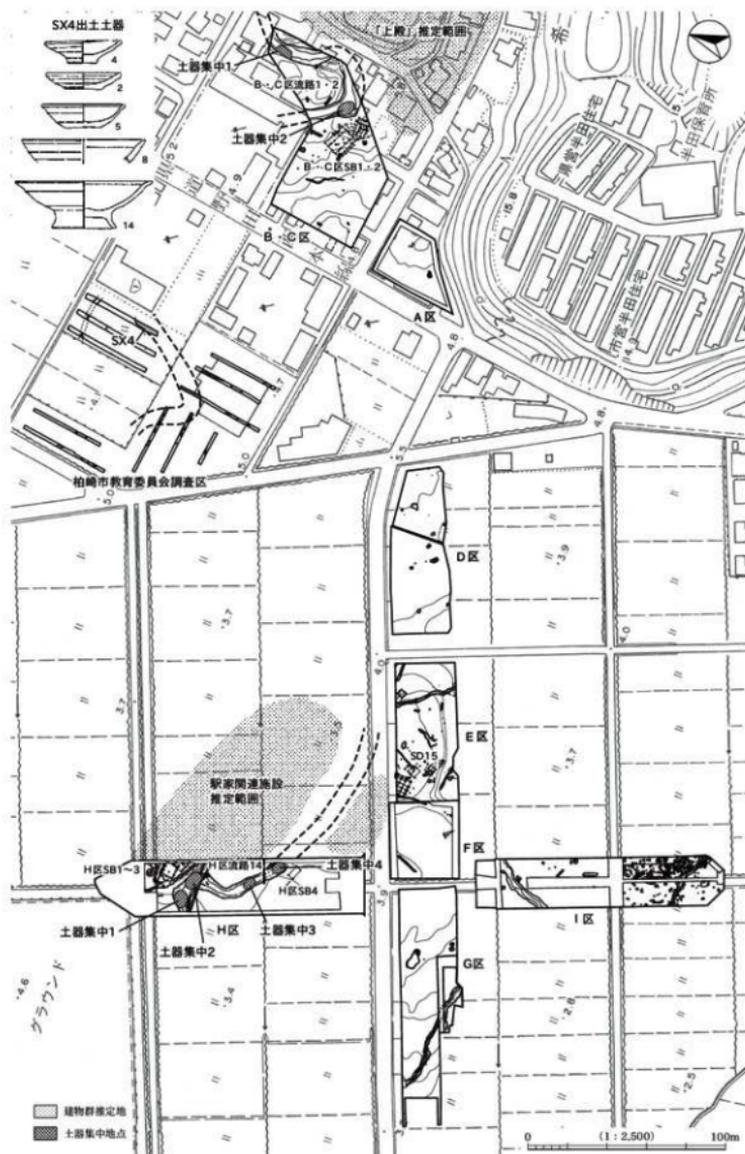
出土文字資料の時期と建物跡

本遺跡の出土文字資料のうちH区流路14から出土した1～6号木簡とB・C区土器集中地点1-5d・5e層から出土した「上殿」墨書土器は特に重要と考える。1～6号木簡は駅家に関連するものと推測でき（本章5参照）、相伴した土器類から考え、1～3号木簡は4期、4～6号木簡は2期（古）である。「上殿」は、有力者の居宅などを表していると推測でき、墨書土器の形態や相伴した他の土器類から時期は4期（新）と考えている。上記の（建物跡と出土文字資料の）時期に大きな誤りが無いとすれば、1～6号木簡と「上殿」墨書土器と同時期の建物は、調査区内では検出されていない。

建物跡の分布

B・C区、H区では流路に近接して建物跡を検出した。またH区流路14はE区SB1・2・3に向かって調査区外へ伸びており、E区の建物の多くも、流路に近接していると考えられる。箕輪遺跡では多くの建物が流路に近接して存在する。

E区・H区の遺構の分布状況を考えて、H区東側・E区北側には流路14に近接して建物（群）が存



第 52 図 箕輪跡調査区と周辺の地形（柏崎市発行「柏崎市街図其14・15」を改変）

在した可能性が高い。存在するとすれば、駅家に関連する施設や「駅家村」と呼称される集落の一部が含まれているものと推測できる。

B・C区は遺構の分布状況から考え、調査区南側にも建物(群)が存在した可能性が高い。B・C区南側には、低い丘陵地が存在するが、「上殿」もしくは「上殿」に関連する施設が、丘陵上と丘陵裾に存在していた可能性がある。

小 結

このように考えるならば、1996(平成8)年～2000(平成12)年に柏崎バイパス建設に伴い実施した箕輪遺跡の発掘調査は、遺跡の外縁をかすめるように調査が行なわれた可能性が高い。H区東側・E区北側の水田部や、B・C区南側に残存する畑地や丘陵上などには駅家や「上殿」に関連する遺構が遺存している可能性が高い。

なお、H区流路14とB・C区流路1・2はともに覆土上位から5・6期の土器、中位から4期の土器、下位から1・2期の土器が出土し、規模も近似する。また柏崎市教育委員会が1992(平成4)年に実施した5次確認調査で検出したSX4からは6期に土器が出土している。H区流路14とB・C区流路1・2、柏崎市教育委員会5次確認調査SX4はA・D～F区の北側を蛇行しながら西流する一連の流路である可能性がある。B・C区、E区、H区にみるように流路に近接して建物が存在したとすれば、D区北側や柏崎市教育委員会が試掘確認調査を実施した地点の近くにも古代の建物(群)が存在した可能性が考えられる。

年代	時期/地区	H区主要土器群	H区建物	E区主要土器群	E区建物	B・C区主要土器群	B・C区建物	出土文字資料
800	1期(古)	(流14集1下)	SB1～3					
	1期(新)	(流14集2下)						
	2期(古)	(流14集3下)					4～6号木簡(H区)	
	2期(新)	(流14集4下)	SB4					
	3期(古)							
	3期(新)	(流14集3中)		(SD12・SX2)	SB1～7・117			
900	4期(古)	(流14集1・2中)		(SK7)		(集2-Se層)		1～3号木簡(H区)
	4期(新)					(集1-Se層)		「上殿」集書(B・C区)
	5期(古)					(E10y17Pt11)		
	5期(新)					(流1・2-2層)	SB1	
	6期					(流1・2-2層)		

凡例：■ 遺物・遺構多い ■ 遺物・遺構定数あり □ 遺物・遺構少ない

第13表 箕輪遺跡の動向

(「流」は流路、「集」は土器集中地点、「下」は下層、「中」は中層の略、架地の濃淡は盛衰のイメージ)

5 木簡について

柏崎市箕輪遺跡からはこれまでに合計6点の木簡が出土している。その内3点についてはすでに現地説明会資料で紹介しているが、その後の調査によって解説がすすんだ点もあるため、これらの木簡についても改めて釈文および解説を行い、最後に箕輪遺跡出土の木簡の意義について述べる。

1号木簡 (図版85 269)

釈文

・「^{〔出事カ〕} 牒 三宅史御所 應□□□ □并□×

・「^{〔時カ〕} □不^{〔並置カ〕}過可到来於^{〔家カ〕}駅家村勿□□×

(259) × 35 × 5 019

形状 上端および左右端は現状をとどめているが、下端は欠損している。

文字 「牒」は「牒」の異体字である。「宅」は^{〔ウカ〕}（うかんむり）の二画目が長く、^{〔マカ〕}（まだれ）のようになっていること、^{〔トカ〕}（と）の異体字の「疋」とも考えられるが、裏面の「家」がやはり、うかんむりの二画目を長くしていることから、木簡記載者の特徴と考えるのが妥当である。オモテ面の「應」の次の文字は、墨痕不鮮明で解説が困難であるが、「勘」と読めるかもしれない。裏面の「駅」の字形は平城宮木簡に類似例がある。（『平城宮木簡』3-3131）

書式 書き出しの「牒」の下を一字分けて「三宅史御所」と宛所を記し、さらに一字分けて「應□□□□」^{〔出事カ〕}と事書きを記している。オモテ面で確認される最後の文字は「来」と読めそうであり、「まさに□出すべき事」という事書きに続けて出すべき物品名が書かれているものと考えられる。

内容 差し出しは欠損のため明確になしえないが、6号木簡とともに後に検討する。「三宅史御所」を宛先とする「牒」という書式による文書木簡である。

牒は、律令公文書の文書形成の一つ。令の規定では、①所管を異にする同等の役所の間で用いられた「移」を転用したもの。したがって、僧綱・寺院などと俗官との間の報答に用いられるもの。②主典以上の官人が役所に上申する際に用いるものの2種類があった。しかし、実際には多様な用いられ方をしている。

この牒木簡の場合は、差し出しが不明であることから、宛先の「三宅史御所」との関係が明確でない。しかし、「應（まさに～すべし）」「可到来（到来すべし）」という文言を含んでいることから、上意下達的な性格のものと考えられる。

牒の木簡はこれまでに平城宮・京跡などから複数出土しているが、地方出土のものは、滋賀県野洲郡中主町湯ノ部遺跡出土のものだけである。しかしこれは、牒の文書の範式（手本）で、実際に牒として機能したものではない。つまり、箕輪遺跡出土の1号木簡は、実際に機能した牒木簡としては地方で初めての出土例である。

木簡の記載内容は、「まさに□出すべき事」という事書きに続けて物品名が書かれていることから、「三宅史御所」に対する物品請求を行っているものと考えられ、さらには、裏面に「可^{〔到〕}来^{〔来〕}於^{〔家〕}駅家村^{〔家〕}」(駅家村に到来すべし)とあることから、その物品を「駅家村」に運ぶよう命令していると考えられる。命令を

受けた「三宅史御所」では、物品を「駅家村」に運ぶものにこの榾木簡をもたせ、「駅家村」での物品の検収作業などを行った後に、木簡は廃棄されたと考えるのが妥当であろう。

次に、いくつかの注目すべき文言についてふれる。

第一に、1号木簡の宛所の「三宅史御所」は、「三宅史」(人名) + 「御所」と考えられる。「三宅史(みやけのみひと)」は、『新撰姓氏録』河内国諸蕃にみえ、また周防国玖珂郡にもその分布が知られる(延喜八年「周防国玖珂郡戸籍」『平安道文』一)。越後国では、『純日本紀』延暦三年(784)十月戊子条に蒲原郡の人として、姓を異にするが、「三宅連笠雄麻呂」の名がみえる。また、『延喜式』神名帳には、古志郡(三嶋郡分部後)の式内社として「三宅神社」が記されている。『式内社調査報告』によれば、その所在は、長岡市妙見町、同市六日市町に比定されている。木簡の記載によって、「三宅史」と三宅神社との関係が想定される。

第二に、「人名 + 御所(所)」の例は、次に示す例のように、長屋王家木簡や二条大路木簡などに多くみられ、何らかの組織・機構的な存在であったと考えられる。

神田古

・安信大刀自御所米一升 「道万呂」○

受物部立人

・御所進米五升 九月十六日 ○

223 × 21 × 3 011

(『平城宮発掘調査出土木簡概報 21 - 長屋王家木簡 1 -』)

・榾 大友史生所 種置一籠

〔書史カ〕

□□足嶋

・付使進度勿緩

四月五日

276 × 34 × 4 011

(『平城宮発掘調査出土木簡概報 30 - 二条大路木簡 4 -』)

これらの「御所(所)」は米の支給を受けたり、文書の受け取り主体となっていることから、単なる居所を示すのではなく、何らかの組織・機構的な存在であったと考えられる。1号木簡に「三宅史御所」が榾の宛所としてみられることは、地方においてもこのような組織・機構的存在のあったことを示している。

第三に、「駅家村」は、文献・出土文字資料を通じて初見である。類似の例としては、「駅家郷」(『平城宮発掘調査出土木簡概報 31』)、「駅里」(『藤原宮出土木簡(二)』)がある。「駅家郷」は、駅家の様々な労働に従事する駅戸の集団で、駅家近辺に集住していたと考えられている。このことから、1号榾木簡が出土した箕輪遺跡の付近に駅家が存在していたと考えてよい。『延喜式』には、越後国の駅家として10の駅が記載されている。このうち三嶋駅については、これまでの研究において、具体的な位置の比定にそれぞれ違いがあっても、およそ柏崎市近辺とすることは諸説一致していた。今回の木簡の出土によって、箕輪遺跡近辺に三嶋駅が存在していた可能性がきわめて強くなった。

2 号 木 簡 (図版 85 268)

積 文

・×十伊加忍上神十十□×

・× $\begin{matrix} \text{十} \\ \text{十} \\ \text{十} \\ \text{十} \end{matrix}$ [] ×

(109) × (26) × 3 081

形 状 上下端および右端が欠損している。また中央部付近で折れている。

内 容 オモテ面には、「伊加忍上神」と神名を記している。また、表裏面ともに「十」のような記号を記すが、意味は不明である。神名を記載する点、および次に述べる3号木簡と共通した記号を記す点などから、呪術的な行為に用いられたものと考えられる。

3 号 木 簡 (図版 85 267)

積 文

× $\begin{matrix} \text{〔田カ〕} & \text{〔加神カ〕} \\ \text{□□□□} & \text{[] □□} \end{matrix}$

死

人十十得罪

(117) × (32) × 3 081

形 状 上下端および右端が欠損している。

内 容 1行目は文字の右半分を欠いているため解読が困難だが、最後の文字は「神」と読めそうである。2号木簡と共通する「十」のような記号がみられ、また、「死」「得罪」という語句が記されていることから、呪術的なものと考えられる。

4 号 木 簡 (図版 98 407)

積 文

$\begin{matrix} \text{〔木カ〕} \\ \text{「石未マ大調」} \end{matrix}$

176 × 28 × 3 033

形 状 上端部に左右から切り込みを入れ、下端は尖らせている。上端の左側を若干欠損するが、ほぼ完形の荷札木簡である。オモテ面のみ記載がみられ、裏面には墨痕が認められない。

内 容 2文字目は「未」であるが、長屋王家木簡の例（『平城宮発掘調査出土木簡概報 21』）から、「石木部」でよいだろう。「石木部大調」は人名と考えられるが、ウジ名「石木部」は越後国では初見である。ウジ名としての「石木部」は、長岡京跡出土木簡に越前国大野郡大山郷戸主「石木部広国」があり（『長岡京木簡 2』789）、地名としては、長屋王家木簡に越前国坂井郡「石木部里」がみられ（『平城宮発掘調査出土木簡概報 21』）、越前国にその分布が知られる。「大調」という人名の例は、平城宮跡出土木簡に「三島大調」が確認される（『平城宮発掘調査出土木簡概報 32』）。また「大調」は、人名ではなく、貢納物としての「調」に尊称の「大」をつけた呼称の可能性もある。そのような例としては、次に掲げる島根県出雲市三田谷1遺跡出土の木簡がある。

島根県出雲市三田谷 I 遺跡出土木簡 (『木簡研究』20)

- ・ 右依大調進上件人
- ・ 感寶元年調五月廿一日□□

(284) × 33 × 10 015

5 号 木 簡 (図版 98 408)

积 文

- ・ □ ^(我カ) □ □ ^(請カ) 穂 □ □ 矢
- ・ 霧 易 勿 彖

(162) × (19) × 2 081

形 状 上端および左右端に欠損する。下端は原状。

内 容 必ずしも明確になしえないが、仮に裏面とした文字とその書き方に特徴があり、一種の習書とも考えられる。裏面には、文字の一部に「勿」を有する文字を間隔をあけて書き連ねている。「霧」は「處」の、「彖」は「券」のそれぞれ異体字である。

6 号 木 簡 (図版 98 409)

积 文

- ・ 「牒 小池御×
- 右依取今月六日×
- []
- []
- 早送□助勿 [¹⁾]
- 故牒々到達状

(99) × (36) × 3 081

形 状 五片の断片に割れているが、上端と右端は原状をとどめている。左端と下端は欠損しており、3行目の文字は半分欠けている。

書 式 書き出しの「牒」の下を1字分あけて「小池御□(所か)」と宛所を記している。裏面の「故牒々到達状」(故に牒す。牒到らば状に准じよ。)は、牒の書き止め文言であり、正倉院文書中の牒に多くみられる。

この木簡では、表裏両面に3行以上にわたって記載している。文書木簡で3行書きの例(歴名部分の3行書きは除く)としては、次に掲げる平城宮跡出土のものなどがある。

平城宮跡出土木簡 (『平城宮木簡 1』56)

- ・ 「符三野マ石嶋等 □□
- 右為打 勅旨紙召宜知此状以
- []
- ・ 「莫為怠違符到奉行
- 大属錦部進真道
-]

179 × (32) × 6 011

1) 『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成十一年度』の報告では、釈文が、早送□助□ [] となっていたが、本書では、その後再読を行った「相澤 2004」に倣い、この釈文とした。

これらの木簡では、1行目に宛所や事書きの文言を記し、2行目以降に命令内容などを具体的に記すという記載の仕方をしている。このことは、木簡においても紙の文書における行替えを意識して行取りが行われているものと理解できよう。

内 容 「小池御口(所か)」を宛先として出された牒の木簡。「小池御口(所か)」は人名(小池) + 御所で、1号牒木簡の「三宅史御所」と同様、何らかの機構・組織的なものと考えられる。内容は欠損などのため明確にしないが、オモテ面に「依れ取_レ今月六日_ニ〜」(今月六日〜(を)取めるに依りて)とあることや、裏面に「早送」(早く送れ)という文言のあることから、何らかの物品を送ることを命じたものと考えられる。差し出しは欠損のため不明であるが、この牒木簡の宛先が1号牒木簡の宛先と異なっている点が注目される。つまり、宛先を異にする2点の牒木簡が同一遺構から出土しているものであり、このことと物品の請求という木簡の記載内容からすれば、これら2点の牒木簡は、木簡の宛先で廃棄されたのではなく、宛先から物品などととも木簡の差し出し元に戻ってきて、そこで廃棄されたと考えのが妥当である。

最後にこれまでに出土した木簡の意義について若干述べる。箕輪遺跡からは、牒木簡2点、荷札木簡1点、習書木簡1点、呪術的行為に伴うと考えられる木簡2点の計6点の木簡が出土している。すでに述べたように、2点の牒木簡は、物品の請求に関わるものと考えられ、木簡の宛先から物品とともに、木簡の差し出し元に戻ってきていると考えられる。箕輪遺跡は1号牒木簡の「可_レ到_ニ来_ニ於_ニ駅家村_一」(駅家村に到来すべし)という記載や、木製黒漆塗りの壺鐘の出土などから、駅家(駅路を往来する駅使に対して食料や宿所を提供し、馬の糞ぎたてを行う施設)関係の遺跡と推定される。これが妥当とすると、2点の牒木簡は、駅家が発行した木簡の可能性がある。駅家(長)が発行した文書としては、平安期の史料が2点ほどあるが(『平安遺文』1:54・57)、8世紀に遡る史料は皆無である。また、箕輪遺跡出土の2点の牒木簡は、物品の請求という駅家経営の実態を示しており画期的な資料である。とくに箕輪遺跡出土木簡において、外部(「三宅史御所」「小池御所」)に対して物品の請求を行っている点が注目される。これまで駅家の財源については、令の規定などから、駅田(駅家の様々な支出を賄うために設定された田)からの獲穫によると考えられてきたが、物資調達の実態については不明な点が多かった。箕輪遺跡出土の木簡は、駅家で用いられる物資がどのようにして調達されていたのか、その一端を示すものである。4号荷札木簡は、外部に対して請求された物品が、実際に箕輪遺跡に送られていたことを示しているだろう。このような物品の請求は、2点の牒木簡が示すように、文書によって行われており、駅家においても文書による行政が行われていたことが分かる。一種の習書と考えられる5号木簡は、そのような文書行政に携わる役人が三嶋駅に存在し、広範な文書行政が行われていたことを示している。2号木簡と3号木簡は、その記載内容から呪術的行為に伴って用いられた木簡と考えられ、交通施設である駅家において呪術的行為が行われていたことを示している。遠江国敷郡家あるいは栗原駅家に関わる遺跡と考えられている伊場遺跡においても呪符木簡が出土しており、その共通性がうかがえ、交通と呪術的行為との関係を考える上で貴重な資料である。

箕輪遺跡出土木簡については、1号牒木簡・6号牒木簡の宛所である「三宅史御所」「小池御所」の実態や駅家との関係、さらには国部との関係など不明な点が多くあり、今後の課題である。

(2000年1月 脱稿)

要 約

本書でこれまで述べたことのうち、古代の箕輪遺跡に関することを中心に要約する。

- 1 箕輪遺跡は柏崎市枇杷島字箕輪 3014 番地 3 ほかに所在する。鶴川右岸の丘陵先端付近の沖積地に所在し、旧状は水田・宅地であった。国道 8 号柏崎バイパスの建設に伴い、1996（平成 8）年～2000（平成 12）年に発掘調査を実施した。
- 2 調査の結果、奈良・平安時代（8～11 世紀）と中世（12～16 世紀）の遺構・遺物を検出した。
- 3 遺構は、掘立柱建物 15・井戸・土坑・溝・ピットのほか、自然流路がある。出土物には駅家に関する木筒や「上殿」と記された墨書土器があり、遺跡の性格は官衙関連遺跡と考える。
- 4 掘立柱建物の年代は、掘立柱建物の柱穴や建物周辺から出土した土器から考え、調査区北東の H 区 SB1～3 が 8 世紀中葉～後葉、H 区 SB4 が 9 世紀初頭、調査区西寄りの E 区 SB1～8・117 が 9 世紀前葉～後葉、調査区東端の B 区・C 区 SB1 は 10～11 世紀、B 区・C 区 SB2 は中世と考えた。
- 5 8 世紀中葉から 11 世紀の土器が流路を中心に相当量出土し、これらを基に土器編年案を提示した。また、H 区流路 14 から出土した土師器煮炊具の形態的特徴とハケメ工具の同定から、土師器の製作状況について考察を行った。
- 6 木製品も流路から多く出土した。出土した製品のうち容器が約 7 割を占めることが特徴的である。容器の中では無台盤の多さが際立っている。木製盤には未成品があり、遺跡内かその周辺で挽物生産が行われていた可能性が高い。
- 7 掘立柱建物の柱穴から柱根が多く出土した。柱根は多様な樹種・形態が確認できる。
- 8 木製品のなかで特筆されるものは黒漆塗の壺鐘で、県内では初例である。北西に位置する H 区流路 14 から出土したもので、年代は共伴した土器から 8 世紀末～9 世紀初頭と考える。無花果型に分類され、正倉院御物等に見られる金属製品を模倣したものと推測する。
- 9 流路 14 からは駅家に関する木筒が出土した。木筒の年代は共伴した土器から考え 4～6 号木筒が 8 世紀末頃、1～3 号木筒が 9 世紀後葉～10 世紀初頭頃と考える。
- 10 4～6 号木筒は 8 世紀代の駅家に関連する木筒として重要である。木筒の内容は、1・6 号木筒が物品の請求に関するもの、2・3 号木筒が呪術に関連するもの、4 号木筒が荷札木筒、5 号木筒が習書木筒である。これにより、駅家の物品請求と請求先からの送付、駅家の呪術行為の一端が明らかとなった。また、1 号木筒の内容から箕輪遺跡周辺が「駅家村」と呼ばれる地域であったことが明らかとなった。
- 11 H 区流路 14、B 区・C 区流路 1・2、平成 4 年度に柏崎市教育委員会が実施した試掘確認調査で検出した SX4 の最上層から出土した土器の年代はいずれも 11 世紀後半から 12 世紀前半であり、これら 3 つの遺構は蛇行しながら西流し鶴川へと連なる同一の流路であった可能性がある。
- 12 古代の掘立柱建物 14 棟のうち、H 区、B 区・C 区の 5 棟は流路沿いに位置し、E 区で検出された SB1～7・117 も流路 14 に隣接している可能性が高い。箕輪遺跡では多くの建物が流路に添って存在する。11 の想定が正しいとすれば、調査区北側には流路に添って建物跡が定量存在する可能性がある。
- 13 今回の発掘調査区内には駅家の中核施設となる建物跡は確認できない。また、「上殿」と記された墨書土器が出土した B 区・C 区でも「上殿」に相当する建物跡は確認できない。今回の調査区周辺にこれらに相当する施設が遺存している可能性がある。

引用・参考文献

- 相澤 央 2004 「柏崎箕輪遺跡出土土簡の「駅家村」と交通」『前近代の潟湖河川交通と遺跡立地の地域史的研究』研究代表者 小林昌二
- 相沢陽一 1986 「柏崎・羽羽地方の植物」『柏崎市立博物館館報』No.1 柏崎市立博物館
- 赤熊浩一・瀧瀬芳之 2006 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第319集 下田町遺跡Ⅲ』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史¹⁾ 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 青田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯塚武司 1997 「古代多摩丘陵の木工生産」『研究論集』XIII 東京都埋蔵文化財センター
- 石川智紀²⁾ 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第241集 山崎遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川智紀³⁾ 2014 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第246集 剣野沢遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 伊東隆夫・山田昌久⁴⁾ 2012 『木の考古学—出土木製品用材データベース』海青社
- 伊藤啓雄 2001 「VI-2 宮ノ下遺跡群における古代土器の様相」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集 宮ノ下遺跡群』柏崎市教育委員会
- 伊藤啓雄⁵⁾ 2013 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第72集 音無瀬Ⅱ』柏崎市教育委員会
- 犬木 努 1995 「下総型埴輪基礎考—埴輪同工品論序説—」『埴輪研究会誌』1
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
- 上原真人 1996 「容器の種類と両期」『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製食器<第1分冊 発表要旨>』埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 梅崎忠司 1990 『北九州市埋蔵文化財調査報告書第88集 石田遺跡』財団法人北九州市教育文化事業団
- 海老名高・福田豊彦 1992 「『田中 頼氏旧藏典籍古文書』「六条八幡宮造営注文」について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第45集 国立歴史民俗博物館
- 大野隆一朗・徳間正一⁶⁾ 1990 『大地』『柏崎市史』上巻 新潟県柏崎市史編纂委員会
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- 岡本郁栄⁷⁾ 2008 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第53集 坂田遺跡群Ⅱ』柏崎市教育委員会
- 荻野正博 1983 「越後国中世荘園の成立」『新潟史学』第16号 新潟史学会
- 小田由美子 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第149集 滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究会』No.2
- 春日真実 1996 「新潟県の概要」『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製食器<第2分冊 北海道・東北・関東・中部>』埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 春日真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について—「今池編年」・「下ノ西編年」・山三貫編年」の検討を中心に—」『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 春日真実 2009 「越後における古代掘立柱建物」『新潟県の考古学』II 新潟県考古学会
- 春日真実 2010 「貞観五年の地震痕跡再考—百瀬正恒氏からの批判に対する反論—」『三面川流域の考古学』第8号 奥三面を考える会
- 春日真実⁸⁾ 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第228集 山岸遺跡(本文編)』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 1999 「第V章1 遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉A遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鎌ヶ江宏之 1993 「国制の成立—令制国・七道の形成過程—」『日本律令制論集』上巻 吉川弘文館

- 金子拓男 1990 『第6章 第3節 三島郡の分立、第5節 交通と交通路、第6節 延喜式内神社』『柏崎市史』上巻 新潟県柏崎市史編さん委員会
- 金子拓男ほか 1983 『西山町文化財調査報告書第1集 新潟県刈羽郡西山町 高塚B遺跡発掘調査報告書』西山町教育委員会
- 金子正典・滝沢規朗・丸山一昭 1999 「第3章 弥生時代・古墳時代 第2節 土器 第3項 弥生後期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 川江秀孝ほか 1978 『伊場遺跡発掘調査報告書第3冊 伊場遺跡 遺物編1』浜松市教育委員会
- 川上貞雄ほか 1991 『箕神村文化財調査報告書8 発久遺跡発掘調査報告書』箕神村（現阿賀野市）教育委員会
- 川畑 誠 1994 「石川県内出土の木製食器・容器に関する覚書」『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
- 川畑 誠 1996 「北陸地方の木製食器の概要」『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製食器<第1分冊 発表要旨>』埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 川畑 誠 1997 「木製食器からみた9世紀」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 柏崎市史編さん委員会 1982 『柏崎市史資料集 考古編2』
 柏崎市史編さん委員会 1987 『柏崎市史資料集 考古編1』
- 川端 誠 1995 「石川県内の古代建物に関する基礎的考察—掘立柱建物を中心に—」『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報』財団法人 石川県埋蔵文化財保存協会
- 北野博司 1988 「重ね焼の観察」『辰川西部遺跡群1』石川県立埋蔵文化財センター
- 小池邦明 1999 「第5章 第2節 陶磁器の組成と変遷 第1項 中世前期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 小池邦明・藤塚 明 1993 『新潟市の場遺跡』新潟市教育委員会
- 小村 茂ほか 編 1989 『角川地名辞典15 新潟県』角川書店
- 斎藤 亨 1995 『刈羽村埋蔵文化財調査報告書第2集 枯木A遺跡』刈羽村教育委員会
- 斎藤 亨 1999 『刈羽村埋蔵文化財調査報告書第4集 弘川遺跡』刈羽村教育委員会
- 斎藤 亨ほか 1998 『刈羽村埋蔵文化財調査報告書第3集 弘川・山ノ脇遺跡』刈羽村教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1984 『新潟県埋蔵文化財報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989 「第VII章 まとめ」『山三賀II遺跡』新潟県教育委員会ほか
- 坂井秀弥・高橋 保 1994 「新潟県」『日本土器製塩研究』株式会社青木書店
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991 「佐渡の須志器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 笹澤正史 2003 「古代—時代概説」『上越市史 資料編2 考古』上越市編さん委員会
- 笹澤正史・水沢幸一 2000 「伝坐徳寺跡の遺物様相」『上越市史研究』第6号 上越市史専門委員会
- 坂本美夫 1985 『馬具』ニュー・サイエンス社
- 品田高志 1987 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第8 帝国石油新長岡ライン埋蔵文化財発掘調査報告書』柏崎市教育委員会
- 品田高志 1988 「柏崎・刈羽の古代土器製塩」『柏崎市立博物館館報』No.3 柏崎市立博物館
- 品田高志 1991 「越後の中世土師器」『新潟考古学談話会会報』第8号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1992 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第17 行塚遺跡』柏崎市教育委員会
- 品田高志 1993 「越後における古代と中世の前期—土器類と漆器の食器具からみた若干の検討—」『新潟考古学談話会会報』第11号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1997 「越後における古代・中世の漆器—漆器食器具を中心として—」『新潟考古学談話会会報』第7号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1997 「北陸における古代と中世の木製食器」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 品田高志 1999a 「第5章 第3節 第1項 中世土師器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院

- 品田高志 1999b 「越後における中世後期の土師器Ⅲ—京都系土師器第2波の流入と展開—」『中世土師器の基礎研究』XIV 日本中世土器研究会
- 品田高志 1999c 「越後における中世後期の土師器Ⅳ—京都系土師器第2波の流入と展開」『京都系土師器Ⅳの伝播と受容—中世後期を中心に—』日本中世土器研究会
- 品田高志 2003 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第42集 下川原』柏崎市教育委員会
- 品田高志 2012 「V-1 音無瀬遺跡における古代土器の様相」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第68集 音無瀬1』柏崎市教育委員会
- 品田高志^{a,b} 1985a 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4集 吉井遺跡群』柏崎市教育委員会
- 品田高志^{a,b} 1985b 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5集 羽羽大平・小丸山』柏崎市教育委員会
- 品田高志^{a,b} 1990 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13集 吉井遺跡群Ⅱ』柏崎市教育委員会
- 品田高志^{a,b} 1997 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第26集 前掛り』柏崎市教育委員会
- 品田高志^{a,b} 1999 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32集 角田』柏崎市教育委員会
- 品田高志^{a,b} 2008 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第52集 江ノ下』柏崎市教育委員会
- 品田高志^{a,b} 2011 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第63集 剣野』柏崎市教育委員会
- 品田高志^{a,b} 2012 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第68集 音無瀬1』柏崎市教育委員会
- 城倉正祥 2007 「埴輪製作に使用された刷毛目工具」『埴輪研究会誌』11
- 城倉正祥 2009 『埴輪生産と地域社会』学生社
- 鈴木郁夫^{a,b} 1988 『土地分類基本調査 岡野町』新潟県
- 鈴木郁夫^{a,b} 1989 『土地分類基本調査 柏崎・出雲崎』新潟県
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 高橋一樹 1997 「越後国頸城地域の御家人—「六条八幡宮造営注文」をてがかりに—」『上越市史研究』新潟県上越市
- 高橋 保 2008 「第Ⅱ章2 歴史的環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第189集 寺前遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 保^{a,b} 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第109集 箕輪遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2005 「土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心に—」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年輪の設定—加賀地域にみる7世紀から11世紀中頃にかけての土器群の推移—」『シンポジウム 北陸の古代土研究の現状と課題 報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 1996 「古代の食器様式をもとめて」『第39回埋蔵文化財研究会 古代の木製食器<第1分冊 発表要旨>』埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究会実行委員会
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 鶴巻康志^{a,b} 1999 『第5章 中近世 第2節B 中世後期』『新潟県の考古学』高志書院
- 田海義正^{a,b} 1982 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第30集 尾野内遺跡 芦ヶ崎特跡』新潟県教育委員会
- 戸根与八郎^{a,b} 1992 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 木崎山遺跡』新潟県教育委員会
- 永井久美男 1994 『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』兵庫埋蔵財調査会
- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧 1996年度版』兵庫埋蔵財調査会
- 永井宏幸 1996 『古代木製鏝小考』『古代』第102号 早稲田大学考古学会
- 永井宏幸^{a,b} 1996 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集 大毛沖遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 長沢眞生^{a,b} 2007 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第50集 坂田遺跡群1』柏崎市教育委員会
- 中島義人 1983 『西山町文化財調査報告書第1集 新潟県刈羽郡西山町 高塩B遺跡発掘調査報告書』西山町教育委員会
- 中島義人 2001a 『西山町文化財調査報告書第5集 新潟県刈羽郡西山町 畠田遺跡発掘調査報告書』西山町教育委員会
- 中島義人 2001b 『西山町文化財調査報告書第6集 新潟県刈羽郡西山町 井ノ町遺跡発掘調査報告書』西山町教育委員会
- 中島義人 2003 『西山町文化財調査報告書第7集 新潟県刈羽郡西山町 宮ノ前遺跡発掘調査報告書』西山町教育委員会

- 中島義人^{12a)} 2009 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第56集 坂田 柏崎市教育委員会』
- 中島義人^{12a)} 2010 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第58集 坂田遺跡群Ⅲ 柏崎市教育委員会』
- 中國 聰 2014 「土器製作者の個人同定は考古学に何をもたらすか」『日本考古学協会第80回総会研究発表要旨』
- 中野 純・伊藤啓雄 2001 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集 宮ノ下遺跡群』 柏崎市教育委員会』
- 中野 純・平吹 靖^{12a)} 2006 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第47集 与三』 柏崎市教育委員会』
- 中野 純^{12a)} 2009 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第48集 角田Ⅱ』 柏崎市教育委員会』
- 中山正典 1993 『曲物の制作技法と形態』『食生活と民具』 雄山閣出版
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代篇』 奈良国立文化財研究所 史料第27冊
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』 奈良国立文化財研究所 史料第36冊
- 新潟県 1982 『新潟県史』資料編3 中世一 文書編Ⅰ
- 新潟県 1983 『新潟県史』資料編4 中世二 文書編Ⅱ
- 新潟県 1984 『新潟県史』資料編5 中世三 文書編Ⅲ
- 花ヶ前盛明 2002 『越佐の神社一式内社六十三』 新潟日報事業社
- 久田正弘 2012 「V 遺跡出土木製品の種類と地域性 17章 中部日本海側」木の考古学—出土木製品データベース— 海青社
- 平吹 靖^{12a)} 1998 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第28集 山王前』 柏崎市教育委員会』
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史編Ⅳ』 愛知県瀬戸市
- 藤澤良祐 1995 「中世陶器（古瀬戸）」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
- 藤巻正信 1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第27集 西田・鶴巻田遺跡群』 新潟県教育委員会
- 藤巻正信 1989 「土器片円盤について」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- 藤好史郎^{12a)} 1990 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡』 香川県教育委員会^{12a)}
- 細井佳浩 2012 「新潟県における木製農具「ナンバ」について—小考—」『新潟考古』 新潟県考古学会
- 松本啓子^{12a)} 1999 「第Ⅵ章 四天王寺境内遺跡の調査」『大阪市埋蔵文化財調査報告—1996年度—』財団法人大阪市文化財協会
- 水澤幸一 2002 『中条町埋蔵文化財調査報告第25集 船戸坂田遺跡4・5次 船戸川崎遺跡6次』中条町（現胎内市）教育委員会
- 水澤幸一 2004a 「至徳寺遺跡の中世後期土器（補遺）」『上越市史研究』第9号 上越市史専門委員会
- 水澤幸一 2004b 「中条町埋蔵文化財調査報告書第30集 草野遺跡2次」中条町教育委員会
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』第16号 新潟考古学会
- 村田晃一^{12a)} 1994 『宮城県埋蔵文化財調査報告書第163集 藤田新田遺跡』 宮城県教育委員会
- 森田勝三 1997 「矢作川河床遺跡の木製鋳と木製鋳の変遷」『石巻文化財』第9号 愛知県豊橋市石巻地区文化財保存会
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
- 矢田俊文 1999 「戦国期越後の守護と守護代」『中世の越後と佐渡』 高志書院
- 山崎忠良^{12a)} 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第140集 東原町遺跡・下津北遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 山本信夫 2000 『大宰府条坊跡ⅩⅤ—陶磁器分類編—』大宰府市の文化財第49集 大宰府市教育委員会
- 山本信夫 2010 「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究』30 日本貿易陶磁研究会
- 横山浩一 1979 「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』23
- 吉岡康暢 1994a 「中世須志郎の研究」吉川弘文館
- 吉岡康暢 1994b 『日本海域の土器・陶磁器〔中世編〕』六興出版
- 吉岡康暢 2003 『珠洲焼概論』平成15年度埋蔵文化財専門職員実務研修資料集① 新潟県教育庁文化行政課
- 吉村 晶^{12a)} 2005 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第45集 吉井水上遺跡群』 柏崎市教育委員会
- 米沢 康 1980 「大宝二年の越中国四部分割をめぐって」『信濃』第32巻6号 信濃史学会

観察表

擬立柱建物観察表 (1)

尺 標：黒 線→柱位置
出上遺物：上：土師器、赤：須恵器、青：赤銅器、桃：珠洲焼、部：漆器、木：木製品

地区	遺構番号	グリッド	桁行 (m)		梁間 (m)		床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位
B・C	SB1	E10a, F10e	12.2		9.9		120.8	-	両面廊	北西	N53°W
柱穴番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱穴間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1	E10a20 -P01	円形	U字状	26.0	24.0	36.0	3.80	1-2	2.2		
2	E10y16 -P02	○ 円形	船状	39.0	36.0	52.0	3.67	2-3	1.8	土	
3	E10y17 -P02	○ 円形	船状	45.0	43.0	43.0	3.80	3-4	3.8		
4	E10y24 -P02	○ 円形	(船状)	43.0	43.0	(45.0)	3.44	4-5	2.2		
5	F10e5 -P01	○ 円形	U字状	32.0	29.0	(49.0)	3.55	5-6	2.2		
6	F11a1 -P01		橋内形	-	30.0	22.0	-	-	6.7	2.7	土塼台構
7	E11a21 -P01		円形	-	24.0	20.0	-	-	7-8	3.0	
8	E11a17 -P01		円形	U字状	37.0	33.0	44.0	4.01	8-9	2.5	
9	E11a11 -P01	○ 円形	(船状)	42.0	38.0	(40.0)	3.63	9-10	2.0		
10	E10y15 -P01	○ 円形	U字状	38.0	31.0	(41.0)	3.52	10-11	3.6		
11	E10y8 -P01		円形	U字状	41.0	40.0	35.0	3.86	11-12	2.1	
12	E10y7 -P01		円形	階段状	41.0	37.0	53.0	3.69	12-13	2.1	
13	E10y1 -P01		橋内形	階段状	35.0	25.0	47.0	3.78	13-14	2.9	
14	E10y6 -P01		橋内形	船状	29.0	23.0	32.0	3.92	14-15	3.9	
15	E10y13 -P01	○ 円形	船状	24.0	23.0	-	-	-	15-16	3.9	
16	E10y19 -P01		円形	船状	34.0	31.0	(30.0)	3.45	16-7	4.4	
17	E10x25 -P01		円形	-	54.0	48.0	-	-	17-18	1.8	
18	E10y21 -P01	○ 円形	船状	38.0	34.0	(44.0)	(3.91)	18-19	1.8		
19	E10y22 -P01	○ 円形	船状	24.0	23.0	(25.0)	(3.97)	19-20	1.8		
20	F10e2 -P01	○ 円形	-	30.0	27.0	-	-	-	20-21	2.0	
21	F10e3 -P01	○ 円形	-	26.0	23.0	-	-	-	21-22	2.1	
22	F10e9 -P01	○ 円形	U字状	36.0	31.0	(31.0)	3.80	22-23	2.2		
23	F10e10 -P01		円形	-	34.0	20.0	-	-	23-4	2.2	
24	E10e23 -P01		円形	扇形状	42.0	39.0	58.0	3.73	24-25	2.2	
25	E10y3 -P01	○ 円形	階段状	21.0	21.0	30.0	3.92	25-26	2.1		
26	E10y4 -P01	○ 円形	U字状	30.0	27.0	45.0	3.64	26-27	1.8		
27	E10y10 -P02	○ 円形	U字状	27.0	23.0	28.0	3.95	27-28	1.8		
28	E10y10 -P01		円形	-	26.0	25.0	-	-	28-29	2.1	
29	E11a6 -P03		円形	U字状	26.0	25.0	50.0	3.72	29-30	2.2	
30	E11a12 -P01		円形	U字状	34.0	32.0	52.0	3.64	30-8	2.3	

地区	遺構番号	グリッド	桁行 (m)		梁間 (m)		床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位
B・C	SD2	F10a・b	8.3		5.5		45.7	-	平・並面廊	東西	N87°W
柱穴番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱穴間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1	F11a16 -P01		橋内形	-	46.0	30.0	-	-	1-2	1.6	
2	F11a17 -P01		橋内形	-	43.0	30.0	-	-	2-3	3.5	土、珠簾
3	F11a19 -P04	(円形)	V字状	37.0	23.0	40.0	3.96	3-4	1.3		
4	F11a20 -P01		円形	-	26.0	24.0	-	-	4-5	3.7	
5	F11a10 -P01		円形	-	28.0	24.0	-	-	5-6	1.7	
6	F11a9 -P01		円形	U字状	26.0	24.0	51.0	3.91	6-7	3.1	
7	F11a7 -P01		円形	U字状	35.0	31.0	29.0	4.12	7-8	1.5	
8	F11a6 -P01		橋内形	-	42.0	26.0	-	-	8-9	1.8	
9	F11a2 -P03		橋内形	-	30.0	22.0	-	-	9-10	3.1	土
10	F11a3 -P02		円形	-	21.0	20.0	-	-	10-11	3.3	
11	F11a5 -P02		円形	-	24.0	19.0	-	-	11-12	1.8	
12	F11b1 -P03		円形	-	31.0	28.0	-	-	12-13	2.0	
13	F11b6 -P01		円形	-	27.0	27.0	-	-	13-14	1.4	
14	F11b11 -P02		円形	-	26.0	25.0	-	-			

地区	遺構番号	グリッド	桁行 (m)		梁間 (m)		床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位
E	SB1	H4, H5g	5間 (9.6)*		2間 (5.1)*		49.0	9C前半	能柱	東西	N84°W
柱穴番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱穴間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1	P8	円形	台形状	45.0	43.0	36.0	2.67	1-2	2.1		
2	P1-4	円形	階段状	46.0	42.0	38.0	2.63	2-3	1.9	土	
3	P1-3	○ 円形	船状	17.0	17.0	18.0	-	3-4	2.0	土	
4	P1-2	○ 円形	-	19.0	18.0	54.0	2.45	4-5	1.9	土	
5	P1-1	○ 橋内形	台形状	64.0	48.0	60.0	2.49	5-6	1.8	土長壁	
6	P3	橋内形	扇形状	71.0	45.0	44.0	2.66	6.7	2.6	>SX4	
7	P1-5	○ 円形	-	16.0	15.0	65.0	2.38	7-8	2.6	土塼 (赤)	
8	P1-9	橋内形	弧状	60.0	47.0	48.0	2.62	8-9	1.8	土塼台構、須恵灰土B	
9	P1-10	○ 橋内形	台形状	92.0	76.0	87.0	2.20	9-10	2.5	土塼 (赤)	
10	P1-6	橋内形	扇形状	70.0	44.0	43.0	-	10-11	2.1		
11	P25	円形	U字状	26.0	20.0	30.0	-	11-12	1.9		
12	P1-8	○ 橋内形	弧状	110.0	61.0	32.0	2.70	12-3	2.7	土塼台構	

掘立柱建物観察表 (2)

地区	遺構番号	グリッド	桁行 (m)		梁間 (m)		床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位
E	SB2	H4t, H5p	2間 (8.7) *		3間 (7.9) *		68.7	DC 前半か	掘柱	東西	N83° W
柱穴番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱穴間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1	P98	○	円形	台形状	45.0	43.0	36.0	2.67	1-2	2.6	
2	P94		円形	筒状	94.0	85.0	35.0	2.63	2-3	1.9	<P98 (SB3) <SB9
3	P87		円形	台形状	(94.0)	81.0	27.0	2.76	3-4	1.9	<P83 (SB3)
4	P33	○	楕円形	筒状	115.0	76.0	32.0	2.58	4-5	1.9	
5	P32	○	楕円形	台形状	111.0	72.0	36.0	2.54	5-6	2.7	SB2・3 共通
6	P20-2	○	不整形	台形状	113.0	81.0	46.0	2.60	6-7	2.4	土製台帳 直
7	P5	○	円形	筒状	63.0	59.0	35.0	2.71	7-8	2.7	
8	P22	○	楕円形	筒状	84.0	58.0	35.0	2.72	8-9	2.7	
9	P36	○	円形	台形状	95.0	62.0	29.0	2.54			土製台帳 土 (古積)

地区	遺構番号	グリッド	桁行 (m)		梁間 (m)		床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位
E	SB3	H4t	3間 (5.8) *		2間 (4.8) *		27.8	DC 前半か	掘柱	東西	N84° W
柱穴番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱穴間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1	P98	○	楕円形	台形状	75.0	65.0	42.0	2.56	1-2	1.8	>P94 (SB2)
2	P83		円形	U字状	(47.0)	35.0	31.0	2.72	2-3	1.8	
3	P33	○	楕円形	筒状	115.0	76.0	32.0	2.58	3-4	2.1	
4	P32	○	楕円形	台形状	111.0	72.0	36.0	2.54	4-5	4.8	
5	P1-7	○	円形	漏斗状	28.0	27.0	47.0	-	5-6	2.2	
6	P1-8	○	楕円形	筒状	110.0	61.0	32.0	2.70	6-7	2.3	土製台帳
7	P125	○	円形	半円状	17.0	16.0	15.0	2.87	7-8	1.9	
8	P84	○	楕円形	-	31.0	21.0	-	-	8-9	1.7	土
9	P85	○	円形	U字状	34.0	33.0	33.0	2.74	9-1	2.3	土小溝

地区	遺構番号	グリッド	桁行 (m)		梁間 (m)		床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位
E	SB4	H5a・v	2間 (3.6~3.9)		2間 (3.3~3.5)		12.8	-	掘柱	西北西	N72° W
柱穴番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱穴間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1	P91	○	円形	U字状	21.0	19.0	25.0	2.74	1-2	1.9	
2	P98	○	円形	U字状	23.0	20.0	26.0	2.80	2-3	1.8	
3	P72	○	楕円形	-	25.0	19.0	-	-	3-4	1.7	
4	P46	○	円形	筒状	33.0	27.0	35.0	2.56	4-5	1.6	
5	P54	○	円形	台形状	35.0	31.0	37.0	2.61	5-6	1.6	
6	P49	○	円形	筒状	33.0	32.0	32.0	2.74	6-7	1.8	
7	P27	○	円形	U字状	18.0	17.0	31.0	2.68	7-8	1.6	
8	P40	○	円形	筒状	23.0	19.0	8.0	2.80	8-9	1.8	<SB3>2
9	P39	○	円形	筒状	15.0	14.0	(3.0)	2.74	9-4	2.1	

地区	遺構番号	グリッド	桁行 (m)		梁間 (m)		床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位
E	SB5	H5c, I5b	2間 (2.5~2.7) *		2間 (2.3) *		6.2	-	掘柱か	北西	N68° W
柱穴番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱穴間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1	P103	○	円形	筒状	33.0	31.0	35.0	2.56	1-2	1.4	
2	P114	○	楕円形	半円状	28.0	23.0	18.0	2.81	2-3	1.2	
3	P113	○	円形	漏斗状	38.0	34.0	33.0	2.66	3-4	1.2	
4	P105	○	円形	筒状	26.0	24.0	24.0	2.78	4-5	1.5	
5	P104	○	円形	筒状	35.0	34.0	33.0	2.68	5-2	1.3	

地区	遺構番号	グリッド	桁行 (m)		梁間 (m)		床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位
E	SB6	I5b	2間 (2.7)		2間 (2.1~2.3) *		5.9	-	掘柱	北西	N67° W
柱穴番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱穴間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1	P107	○	-	-	8.0	7.0	14.0	2.72			
2	P142	○	-	-	-	-	-	2-3	1.4		
3	P108	○	-	-	7.0	6.0	16.0	2.72	3-4	1.4	
4	P106	○	-	-	11.0	8.0	35.0	2.55	4-5	1.1	
5	P111	○	-	-	10.0	8.0	13.0	2.75	5-6	1.4	<SD110
6	P112	○	-	-	-	-	-	6-3	1.2	<SD110	

地区	遺構番号	グリッド	桁行 (m)		梁間 (m)		床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位
E	SB7	H5p	2間 (4.5)		2間 (4.2~4.3)		19.1	-	掘柱	北西	N63° W
柱穴番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱穴間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1	P13	○	円形	V字状	27.0	24.0	19.0	2.79	1-2	4.4	
2	P10	○	円形	V字状	26.0	26.0	20.0	2.79	2-3	2.2	
3	P29	○	円形	半円状	34.0	31.0	(27.0)	(2.76)			
4	P15	○	円形	漏斗状	31.0	30.0	24.0	2.83	4-5	2.2	
5	P41	○	円形	U字状	18.0	16.0	33.0	2.54	5-6	2.0	
6	P53	○	円形	筒状	40.0	35.0	32.0	2.66	6-1	2.3	

観察表

擬立柱建物観察表 (3)

地区	通称番号	グリッド	桁行 (m)	架間 (m)	床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位		
E	SB8	H5a	1間 (1.4)	1間 (1.0~1.2)	34.5		徹柱	北東	N56°E		
柱六番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱六間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
P119 ㊦		-	-	-	-	-	-	P119 ㊦-㊦ 1.2			
P119 ㊧		-	-	-	-	-	-	P119 ㊦-㊧ 1.4			
P119 ㊨		-	-	-	-	-	-	P119 ㊦-㊨ 1.0			
P119 ㊩		-	-	-	-	-	-	P119 ㊦-㊩ 1.4			

地区	通称番号	グリッド	桁行 (m)	架間 (m)	床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位		
E	SB117	H5a-j・o	2間 (3.0~3.4)	2間 (2.7~2.9)	9		徹柱	北北東	N22°E		
柱六番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱六間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1 P117 ㊦	○	円形	扇状	57.0	55.0	43.0	2.45	1-2 1.4			
2 P117 ㊧	○	円形	扇状	65.0	56.0	59.0	2.31	2-3 1.6			
3 P117 ㊨	○	楕円形	扇状	67.0	52.0	52.0	2.38	3-4 1.4			
4 P117 ㊩	○	円形	扇状	60.0	57.0	73.0	2.17	4-5 1.3			
5 P117 ㊪	○	楕円形	扇状	70.0	54.0	55.0	2.42	5-6 1.6			
6 P117 ㊫	○	楕円形	扇状	59.0	52.0	46.0	-	6-7 1.3			
7 P117 ㊬	○	楕円形	扇状	69.0	53.0	47.0	2.49	7-8 1.4			
8 P117 ㊭	○	円形	扇状	45.0	41.0	51.0	2.41	8-1 1.5			

地区	通称番号	グリッド	桁行 (m)	架間 (m)	床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位		
H	SB2	F3a-w	4間 (6.5) *	1間 (5.2)	33.8	8C 後~9C 前	徹柱	西北西	N57°W		
柱六番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱六間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1 P7	○	方形	扇状	53.0	49.0	52.0	2.64	1-2 1.4		土釜 (赤)	
2 P8	○	長方形	台形状	73.0	65.0	58.0	2.61	2-3 1.7		土釜 (赤)	
3 P9	○	長方形	台形状	62.0	52.0	58.0	2.62	3-4 1.7		土釜 (赤)、瓦葺×編	
4 P10	○	方形	扇状	58.0	58.0	56.0	2.67	4-5 1.8		土釜 (赤)	
5 P11	○	円形	U字状	44.0	43.0	97.0	2.33			土釜 (赤)	
6 P30	○	方形	扇状	55.0	46.0	52.0	2.60	6-1 5.0		土釜 (赤)	
7 P13	○	方形	台形状	68.0	52.0	81.0	2.45	6-7 1.6			

地区	通称番号	グリッド	桁行 (m)	架間 (m)	床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位		
H	SB2	F3a-y	3間 (6.7~6.8) *	2間 (6.1~6.5) *	42.5	8C 後~9C 前	徹柱	東西	N82°W		
柱六番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱六間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1 P42	○	楕円形	台形状	29.0	22.0	27.0	2.91	1-2 2.2			
2 P44	○	円形	半円状	37.0	33.0	25.0	2.85	2-3 2.5		土釜 (赤)	
3 P5	○	円形	U字状	14.0	11.0	35.0	2.80	3-4 2.2			
4 P28	○	円形	U字状	39.0	24.0	43.0	2.73	4-5 3.2	<P29 (SB3)		
5 P31	○	円形	U字状	35.0	30.0	46.0	2.66			土釜 (赤)	
6 P32	○	円形	半円状	(55.0) (54.0)		46.0	2.68	6-7 2.4		土釜 (赤)	
7 P33	○	円形	U字状	53.0	47.0	43.0	2.61	7-8 1.9			
8 P35	○	円形	U字状	48.0	44.0	55.0	2.58	8-9 2.8			
9 P41	○	円形	U字状	36.0	36.0	41.0	2.70	9-10 3.3			
10 P78	○	円形	半円状	28.0	24.0	22.0	2.86			SB2・3 共通	
P36	○	円形	扇状	30.0	28.0	37.0	2.77			SB2・3 共通	

地区	通称番号	グリッド	桁行 (m)	架間 (m)	床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位		
H	SB3	F3a-y	(6.1~6.4) *	3間 (6.1~6.5) *	39.4	8C 後~9C 前	徹柱	東西	N82°W		
柱六番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱六間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1 P37	○	円形	(半円状)	22.0	22.0	36.0	2.82	1-2 2.1			
2 P34	○	楕円形	U字状	34.0	27.0	37.0	2.73	2-3 2.4		土釜 (赤)	
3 P6	○	円形	半円状	39.0	36.0	30.0	2.86	3-4 2.1			
4 P29	○	楕円形	U字状	47.0	36.0	52.0	2.64		>P28 (SB2)		
5 P49	○	円形	扇半状	39.0	35.0	44.0	2.70	5-6 2.5			
6 P43	○	円形	扇半状	50.0	48.0	46.0	2.66	6-7 1.6			
7 P61	○	円形	U字状	30.0	28.0	39.0	2.70	7-1 6.1			
8 P62	○	円形	扇状	34.0	34.0	32.0	2.80			土釜 (赤)	SB2・3 共通

地区	通称番号	グリッド	桁行 (m)	架間 (m)	床面積 (㎡)	時期	構造	主軸方向	方位		
H	SB4	G3a-y, H3d	1間 (6.1)	1間 (2.8~2.9)	17.4		徹柱	北西	N67°W		
柱六番号	柱	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	柱六間隔	切り合い関係	出土遺物	備考
1 P53	○	円形	台形状	38.0	34.0	25.0	2.74	1-2 6.1			
2 P69	○	円形	台形状	28.0	23.0	10.0	2.87	2-3 2.8			
3 P23	○	円形	U字状	27.0	22.0	61.0	2.51	3-4 6.2			
4 P25	○	円形	U字状	41.0	37.0	57.0	2.45	4-1 3.0			

遺構観察表 (1)

凡 例：縦 線 4は固定線
出土物上：土 土層別、番；金銅器、骨；窯口ロ、珠・珠状物、部；部類、本；木製品

地区	グリッド	遺構番号	平面形	断面形	長さ	幅	深さ	底面高	覆土	柱間	出土遺物	切り合い関係	備考
A	G9/4, 5	SK1	不整形	弧状					レンズ状				
A	G9/4, 9	SK2	不整形	弧状					水平				
B-C	E11m5	SK2	円形	弧状	125.0	118.0	26.0	4.14	レンズ状				
B-C	E11d24, 14	SK3	(横円形)	台形状	237.0	(73.0)	32.0	3.94	レンズ状				
B-C	E10n23	SK5	横円形	弧状 (263.0)	211.0	23.0	3.96	レンズ状					
B-C	E10s19	SK8	横円形	輪状	198.0	121.0	22.0	3.94	レンズ状				
B-C	E11p12	SK11	横円形	-	96.0	64.0	-	-	単層				
B-C	E11u6	SK13	円形	輪状	57.0	(54.0)	24.0	4.18	水平	土			
B-C	E11u22	SK14	円形	台形状	74.0	67.0	31.0	4.11	水平	土			
B-C	F11a11	SK15	円形	弧状 (76.0)	67.0	42.0	3.94	レンズ状	土				
B-C	D11w24	SK17	円形	U字状	51.0	45.0	73.0	3.69	水平・斜位				
B-C	E10z20	SE6	円形	台形状	121.0	109.0	54.0	3.66	レンズ状				
B-C	F10e30	SE7	円形	輪形状	188.0	168.0	104.0	3.24	斜位・レンズ	土層台積、小竈			
B-C	E10z20	SE10	円形	台形状	81.0	74.0	62.0	3.78	水平・レンズ				
B-C	E10y5	SE12	円形	U字状	71.0	65.0	72.0	3.56	水平・斜位	土小竈・小竈・土・珠類			
B-C	F11a19	SE16	円形	輪状	80.0	74.0	71.0	3.64	水平	土層台積		>E19-F164	
B-C	E11q6	SK1	横円形	弧状	232.0	96.0	21.0	4.12	レンズ状	土層台積・土			
B-C	E10c3	SK2	不整形	-	590.0	194.0	-	-	単層				
B-C	E10u22, F10s2	SK3	横円形	-	150.0	90.0	-	-	レンズ状				
B-C	E1116	SK4	横円形	台形状	242.0	82.0	32.0	3.68	レンズ状				
B-C	E1Dr, w ~ F10c	SK9	-	弧状	-	57.0	15.0	3.88	単層	土			
B-C	E10r4	Pt1	円形	-	42.0	40.0	-	-	単層				
B-C	E10a6	Pt1	円形	-	31.0	21.0	-	-	レンズ状	土			
B-C	E10a13	Pt1	横円形	-	30.0	22.0	-	-	単層	主			
B-C	E10a17	Pt1	円形	-	27.0	24.0	-	-	レンズ状				
B-C	E10z23	Pt1	横円形	-	38.0	20.0	-	-	柱版				
B-C	E10d19	Pt1	円形	-	35.0	33.0	-	-	単層	土小竈、有小竈、小竈			
B-C	E10z5	Pt1	横円形	-	31.0	17.0	-	-	レンズ状				
B-C	E10z15	Pt1	円形	輪形状	31.0	28.0	38.0	3.85	水平	土長差			
B-C	E10z19	Pt1	円形	-	30.0	18.0	-	-	レンズ状				
B-C	E10z22	Pt1	円形	-	52.0	44.0	-	-	単層				
B-C	E10z24	Pt1	横円形	-	22.0	16.0	-	-	単層				
B-C	E10z25	Pt2	横円形	-	22.0	18.0	-	-	単層				
B-C	E10y2	Pt1	円形	-	26.0	24.0	-	-	単層				
B-C	E10y10	Pt3	円形	-	26.0	24.0	-	-	柱版	○			
B-C	E10y10	Pt4	円形	-	26.0	24.0	-	-	水平				
B-C	E10y12	Pt1	円形	-	60.0	52.0	-	-	単層				
B-C	E10y13	Pt2	円形	-	24.0	20.0	-	-	柱版				
B-C	E10y17	Pt1	円形	半円状	29.0	27.0	15.0	4.05	レンズ状	土層台積			
B-C	E10y24	Pt1	円形	-	31.0	26.0	-	-	単層				
B-C	E10y25	Pt1	円形	-	30.0	29.0	-	-	-				
B-C	E11u5	Pt1	円形	-	50.0	47.0	-	-	レンズ状	土			
B-C	E11u6	Pt2	円形	-	26.0	24.0	-	-	単層				
B-C	E11u7	Pt1	円形	-	26.0	22.0	-	-	単層				
B-C	E11u7	Pt2	円形	-	25.0	24.0	-	-	単層				
B-C	E11u7	Pt3	円形	-	26.0	24.0	-	-	単層				
B-C	E11u8	Pt1	横円形	-	30.0	22.0	-	-	柱版				
B-C	E11a13	Pt1	円形	-	28.0	24.0	-	-	単層				
B-C	E11a17	Pt1	円形	U字状	37.0	33.0	44.0	4.01	-				
B-C	E11a18	Pt1	円形	-	26.0	23.0	-	-	柱版				
B-C	E11a18	Pt2	横円形	-	24.0	19.0	-	-	-				
B-C	E11a20	Pt1	横円形	-	28.0	22.0	-	-	柱版				
B-C	E11a21	Pt2	円形	-	24.0	21.0	-	-	斜位				
B-C	E11a23	Pt1	円形	-	30.0	29.0	-	-	水平				
B-C	E11a23	Pt2	横円形	-	27.0	18.0	-	-	レンズ状				
B-C	E11a24	Pt1	横円形	-	28.0	22.0	-	-	-				
B-C	F10z2	Pt1	方形	-	85.0	72.0	-	-	単層				
B-C	F10z12	Pt1	横円形	-	50.0	35.0	-	-	単層				
B-C	F10z21	Pt1	円形	-	30.0	27.0	-	-	レンズ状				
B-C	F10z1	Pt1	円形	-	23.0	21.0	-	-	単層				
B-C	F10z4	Pt1	円形	-	29.0	26.0	-	-	単層	土			
B-C	F10z8	Pt1	円形	-	20.0	19.0	-	-	-				
B-C	F10z9	Pt2	横円形	-	27.0	20.0	-	-	単層				
B-C	F10z30	Pt1	円形	-	25.0	22.0	-	-	レンズ状				
B-C	F10z25	Pt1	円形	-	32.0	30.0	-	-	レンズ状			>SE7	

観察表

遺構観察表(2)

地区	グリッド	遺構番号	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	覆土	柱状	出土遺物	切り合い関係	備考
B-C	F10f0	-Pt1	楕円形	-	62.0	33.0	-	-	単層				
B-C	F10f3	-Pt1	楕円形	弧状	62.0	47.0	16.0	3.66	単層				
B-C	F10f4	-Pt1	楕円形	V字状	76.0	30.0	38.0	3.37	斜位		土		
B-C	F1a1	-Pt2	楕円形	-	21.0	16.0	-	-	-				
B-C	F1a1	-Pt3	円形	-	26.0	24.0	-	-	単層		土有台帳・土		
B-C	F1a2	-Pt1	楕円形	-	20.0	14.0	-	-	斜位				
B-C	F1a2	-Pt2	楕円形	-	26.0	18.0	-	-	-				
B-C	F1a3	-Pt1	楕円形	-	32.0	22.0	-	-	レンズ状				
B-C	F1a4	-Pt1	方形	-	38.0	36.0	-	-	単層		土製台帳・土		
B-C	F1a4	-Pt2	楕円形	-	18.0	14.0	-	-	柱状				
B-C	F1a5	-Pt1	円形	台形状	53.0	45.0	34.0	4.09	水平				
B-C	F1a5	-Pt3	円形	-	20.0	20.0	-	-	単層				
B-C	F1a5	-Pt4	楕円形	-	26.0	21.0	-	-	単層				
B-C	F1a6	-Pt2	楕円形	-	26.0	19.0	-	-	柱状				
B-C	F1a7	-Pt2	円形	-	18.0	16.0	-	-	-				
B-C	F1a8	-Pt1	円形	半円状	30.0	36.0	28.0	4.12	水平				
B-C	F1a8	-Pt2	円形	-	27.0	23.0	-	-	単層				
B-C	F1a9	-Pt2	円形	-	20	19	-	-	-		土有台帳		
B-C	F1a9	-Pt3	楕円形	-	31.0	20.0	-	-	ブロック状				
B-C	F1a11	-Pt2	円形	半円状	39.0	38.0	29.0	4.06	水平・斜位		土		
B-C	F1a11	-Pt3	円形	-	29.0	24.0	-	-	レンズ状		土		
B-C	F1a12	-Pt1	円形	-	23.0	22.0	-	-	水平				
B-C	F1a12	-Pt2	楕円形	-	28.0	18.0	-	-	レンズ状				
B-C	F1a13	-Pt1	円形	-	24.0	20.0	-	-	単層				
B-C	F1a13	-Pt2	円形	-	24.0	23.0	-	-	レンズ状				
B-C	F1a13	-Pt3	楕円形	-	24.0	17.0	-	-	-				
B-C	F1a14	-Pt1	円形	半円状	43.0	42.0	23.0	4.15	レンズ状				
B-C	F1a14	-Pt2	円形	-	23.0	22.0	-	-	柱状				
B-C	F1a14	-Pt3	楕円形	-	26.0	18.0	-	-	単層				
B-C	F1a15	-Pt1	円形	-	33.0	30.0	-	-	斜位・レンズ		土		
B-C	F1a15	-Pt2	円形	-	28.0	24.0	-	-	単層				
B-C	F1a15	-Pt3	楕円形	-	34.0	28.0	-	-	柱状				
B-C	F1a16	-Pt2	円形	-	29.0	28.0	-	-	単層				
B-C	F1a18	-Pt2	楕円形	-	37.0	23.0	-	-	ブロック状				
B-C	F1a18	-Pt3	円形	-	23.0	22.0	-	-	柱状				
B-C	F1a19	-Pt2	円形	-	19.0	18.0	-	-	-				
B-C	F1a19	-Pt3	円形	-	21.0	18.0	-	-	柱状				
B-C	F1a20	-Pt2	円形	-	22.0	20.0	-	-	単層				
B-C	F1a21	-Pt1	円形	-	26.0	22.0	-	-	-				
B-C	F1a22	-Pt1	楕円形	-	38.0	23.0	-	-	単層				
B-C	F1b1	-Pt1	楕円形	-	30.0	20.0	-	-	単層				
B-C	F1b1	-Pt2	楕円形	-	33.0	26.0	-	-	単層				
B-C	F1b6	-Pt2	楕円形	-	30.0	20.0	-	-	単層				
B-C	F1b11	-Pt1	楕円形	-	45.0	35.0	-	-	-				
B-C	F1b11	-Pt3	楕円形	-	26.0	20.0	-	-	水平		土製台帳		
B-C	D11・E11	両路1	-	弧状	-	-	-	-	斜位・レンズ				
B-C	E11	両路2	-	弧状	-	-	-	-	斜位・レンズ				
B-C	E11r25	丸	-	-	-	-	-	2.90	-				
B-C	E11r16	丸	-	-	-	-	-	2.83	-				
B-C	E11r21	丸	-	-	-	-	-	2.99	-				
D	G7x7, 8, 12, 13	SK1	不整形	-	33.0	27.0	-	-	-				
D	H7c17	SK2	長方形	-	18.0	14.0	-	-	-				
D	G7r25	G7-r25 P1	円形	弧状	96.0	96.0	14.0	2.78	単層				
D	H7b5	H7-b5 P1	楕円形	弧状	58.0	54.0	18.0	2.64	単層			P1>P2	
D	H7b5	H7-b5 P2	方形	弧状	112.0	109.0	28.0	2.52	単層			P2>P1	
D	H7a14	P10	楕円形	弧状	38.0	32.0	13.0	2.96	単層				
D	H7a25	P12	円形	弧状	21.0	20.0	4.0	2.97	単層				
D	H7b19	SK15	不整形	台形状	218.0	142.0	29.0	2.59	レンズ状				
D	H7g1, 6, 7	SK16	不整形	弧状	394.0	210.0	26.0	2.60	レンズ状		並(湧き泉)		
D	H7a7	SK17	不整形	弧状	167.0	137.0	24.0	2.75	レンズ状				
D	H6o17	SK18	楕円形	弧状	177.0	68.0	16.0	2.57	レンズ状				
D	H6g13	SK22	楕円形	弧状	204.0	160.0	40.0	2.72	ブロック状				
E	H5a8, 9, 13, 14	SK1	楕円形	弧状	131.0	102.0	12.0	2.95	レンズ状				
E	H5o14, 15, 19, 20	SK2-2	不整形	弧状	330.0	243.0	13.0	2.86	レンズ状		重層台帳 B・土		>P40 (SB4)

遺構観察表 (3)

地区	グリッド	遺構番号	平面形	断面形	長径	短径	深さ	底面高	覆土	柱網	出土遺物	切り合い関係	備考
E	H5p16	SK4	不整形	弧状	236.0	87.0	11.0	2.97	レンス状			-P3 (SB1)	
E	H5p24	SK7	円形	平円状	70.0	61.0	46.0	2.74	レンス状		黒無自研土・土無白陶		
E	H5a-p・q	SD8	不整形	平円状	—	62.0	10.0	2.90	単層		土 (古墳)		
E	H5a10	P11	円形	平円状	20.0	20.0	11.0	2.97	単層				
E	H5a-w	SD12	不整形	弧状	(1048.0)	302.0	32.0	2.75	レンス状		研削器、黒無自研、土・土無白陶ほか		
E	H5a2	P14	円形	台形状	11.0	10.0	22.0	2.76	単層				
E	H5p3	P21	円形	平円状	27.0	25.0	19.0	2.90	単層		土無白陶		
E	H5a14	P28	楕円形	平円状	101.0	73.0	40.0	2.66	レンス状				
E	H5p25	P30	円形	扇状	29.0	29.0	22.0	2.82	単層		磁石 (古墳)		
E	H5a17, 18, 22, 23	SK34	不整形	台形状	167.0	149.0	33.0	2.66	レンス状				
E	H5a23・15a3	SK35	不整形	弧状	(256.0)	(52.0)	(11.0)	(2.86)	単層				
E	H5p1	SK37	不整形	—	(119.0)	45.0	30.0	—	レンス状			-P1-10 (SB1)	
E	H5p18	P42	円形	台形状	33.0	31.0	32.0	2.72	レンス状				
E	H5p23	P43	円形	台形状	33.0	33.0	40.0	2.65	柱状				
E	H5p8, 13	P44	楕円形	平円状	69.0	48.0	26.0	2.78	レンス状				
E	H5a3, 4	SD45	不整形	—	(210.0)	(71.0)	(19.0)	(2.70)	単層		土 (古墳)		
E	H5q21	P47	楕円形	弧状	34.0	19.0	17.0	2.82	単層	○			
E	H5a3	P48	楕円形	弧状	56.0	42.0	32.0	2.72	ブロック状	○			
E	H5a11	P50	円形	弧状	20.0	(18.0)	29.0	2.66	柱状	○			
E	H5a11	P51	楕円形	弧状	12.0	8.0	4.0	3.02	単層		木		
E	H5p17, 22	SK52	楕円形	平円状	84.0	38.0	27.0	2.77	レンス状				
E	H5a11	P56	楕円形	扇状	34.0	28.0	32.0	2.73	柱状		木		
E	H5a7	P57	円形	台形状	41.0	35.0	38.0	2.59	単層	○			
E	H5a7	P59	楕円形	台形状	57.0	35.0	32.0	2.66	単層	○			
E	H5a8	SD62	—	扇状?	(72.0)	25.0	38.0	2.54	水平		土 (古墳)		
E	H5a8	P63	円形	扇状?	33.0	25.0	33.0	2.63	ブロック状				
E	H5a17	P64	楕円形	台形状	31.0	21.0	12.0	2.92	柱状		木		
E	H5p8	P67	楕円形	平円状	101.0	43.0	15.0	2.97	レンス状	○			
E	H5a4	P68	円形	扇状	31.0	30.0	21.0	2.92	レンス状	○			
E	H5a6	P69	楕円形	台形状	38.0	32.0	18.0	2.93	ブロック状				
E	H5p14	SK73	不整形	台形状	98.0	77.0	36.0	2.79	水平				
E	H5a7	SK74	円形	台形状	66.0	63.0	20.0	2.87	レンス状				
E	H5a5	SK75 (円形)	弧状	(62.0)	33.0	11.0	2.87	ブロック状					
E	H5a・H6f	SD78	—	弧状	(908.0)	132.0	38.0	3.06	単層		土壘 (跡)、土		
E	H4a22	P86	方形?	弧状	(44.0)	(36.0)	8.0	3.03					
E	H4a-y	SD89	—	弧状	38.0	45.0	16.0		単層		土 (古墳)		
E	H5p4	P90	円形	V字状	40.0	38.0	26.0	2.76	ブロック状		土器等、小遺		
E	H5p5	P91	円形	—	23.0	22.0	—	—	—				
E	H4y3	P93	円形	扇状	32.0	31.0	23.0	2.78	柱状	○			
E	H5a, 6, 7, 9, H6a	SD95	—	弧状	(180.0)	238.0	34.0	2.66	レンス状		土壘ほか (古墳)		
E	H5a20, 25	P99	楕円形	平円状	54.0	44.0	48.0	2.50	水平			-SD95	
E	H5a16	P100	楕円形	平円状	70.0	58.0	28.0	2.68	水平			-SD95	
E	H5p17	P101	円形	平円状	21.0	21.0	19.0	2.82	単層				
E	H5a23 ~ 25・H63, 4	SK102	不整形	弧状	365.0	199.0	28.0	2.72	ブロック状		土 (古墳)		
E	H5a-b	SD110	不整形	弧状	(1300.0)	73.0	15.0	2.73	単層		土 (古墳)		
E	H5a24	H116㊦	—	—	—	—	—	2.87	—	○		SA116	
E	H5a25	H116㊧	—	—	—	—	—	2.74	—	○		SA116	
E	H5a25	H116㊨	—	—	—	—	—	2.76	—	○		SA116	
E	H5a25	H116㊩	—	—	—	—	—	2.55	—	○		SA116	
E	H5a25	H116㊪	—	—	—	—	—	2.72	—	○		SA116	
E	H5a25	H116㊫	—	—	—	—	—	2.79	—	○		SA116	
E	H5a25	H116㊬	—	—	—	—	—	2.76	—	○		SA116	
E	H5a25・j21	H116㊭	—	—	—	—	—	2.55	—	○		SA116	
E	H6a8	H119㊮	—	—	—	—	—	—	—	○			
E	H5a11	P121	楕円形	—	31.0	21.0	—	—	単層	木片			
E	H5a20・h21	SD123	不整形	弧状	(283.0)	144.0	7.0	2.78	単層				
E	H5a9	H124	—	—	10.0	9.0	50.0	2.36	—	○			
E	H4y4	P126	円形	U字状	31.0	28.0	27.0	2.69	単層	○			
E	H5a13	P128	円形	—	10.0	10.0	—	—	柱状				
E	H5y1, 2	SD129	不整形	弧状	391.0	75.0	10.0	2.82	レンス状		土 (古墳)		
E	H5a23・c3, 4	SK130	不整形	弧状	250.0	119.0	7.0	2.89	単層		土 (古墳)		
E	H6f2, 7	P132	円形	扇状	64.0	54.0	58.0	2.23	水平	○			

観察表

遺構観察表(4)

地区	グリッド	遺構番号	平面形	断面形	長さ	方位	深さ	底面高	覆土	材料	出土遺物	切り合い関係	備考
F	H4a17, 21・ H4a13, 15・ b1, 6	SD1	-	弧状	900.0	78.0	10.0	93.0	単層	鉄板			
F	H4b6	P2	円形	弧状	39.0	38.0	16.0	2.84	レンズ状				
F	H4j11	P3	円形	階段状	33.0	32.0	15.0	2.83	水平				
F	H4j11	P4	円形	扇状	24.0	24.0	16.0	2.84	水平		土長差×溝		
F	H4j11	P5	円形	扇状	22.0	20.0	13.0	2.87	水平				
F	H4j11	P6	楕円形	扇状	31.0	18.0	15.0	2.86	水平				
F	H4e2	SD8	不整形	弧状	225.0	43.0	19.0	2.76	単層				
F	H4i11	SD11	不整形	-	274.0	51.0	14.0	2.69	単層				
G	I2p, u, v-y	SD1	-	弧状	-	271.0	43.0	2.02	レンズ状				
G	I3g17, 21・ 25・H1・10	SK2	不整形	弧状	1008.0	474.0	22.0	2.58	レンズ状		覆有台枠・土長差	<SK3	
G	I3f5, 10・mL, 6	SK3	不整形	弧状	250.0	132.0	52.0	2.28	レンズ状		覆有台枠・土長差×溝・小 差ほか	>SK2	
G	I3r15, 20・ a16	SE4	不整形	U字状	186.0	172.0	123.0	1.47	斜位・レンズ				
G	I3i14	P5	円形	V字状	31.0	27.0	36.0	2.36	レンズ状				
G	I3r19	SK6	楕円形	弧状	151.0	118.0	22.0	2.48	レンズ状		土差(溝)・土	>SK7	
G	I3r19, 24	SK7	楕円形	弧状	161.0	145.0	15.0	2.55	レンズ状			<SK0	
G	I2a24, 25・ y12・14, 16, 17	SN8	-	弧状 (105.0)	-	-	15.0	2.31	レンズ状				
H	F3e5	P1	円形	V字状	22.0	21.0	44.0	2.72	単層	○	土差(溝)		
H	F3e5	P2	円形	V字状	26.0	23.0	40.0	2.74	単層		土差(溝)		
H	F3e6	P3	円形	V字状	45.0	43.0	63.0	2.53	水平		土差(溝)・溝状遺		
H	F3e6	P4	楕円形	U字状	35.0	26.0	45.0	2.71	水平		土差(溝)		
H	F3e12	SK12 (楕円形)	半円状		93.0	80.0	23.0	2.95	レンズ状		土差(溝)		
H	F3, G3	虎路 14	-	半円状			430 ~ 940	135.0	2.62	斜位・レンズ			土・遺・木多数
H	G3b10, 15・ c11~13	SD15	-	半円状 (850.0)	60.0	-	-	-	単層		土		
H	F3p・u・v・y	SD17	-	弧状	-	170.0	22.0	2.94	レンズ状		縦桁・土差(溝)		
H	G3a13, 18 ~20	SD18	-	弧状	514.0	124.0	22.0	-	単層		縦溝・土差(溝)		
H	G3e7	P27	(円形)	半円状	30.0	13.0	18.0	3.00	単層				
H	F3q	SD08	-	弧状	1040.0	218.0	23.0	2.83	レンズ状		覆有台枠, 覆有枠, 柱礎ほ か, 土差(溝)		
H	F3i24・q4, 9	SK40	不整形	弧状	208.0	235.0	8.0	2.98	レンズ状		土差(溝)・平づくね		
H	F3p・q	SK60	不整形	弧状	330.0	320.0	20.0	2.92	レンズ状		覆有台枠, 柱礎・土差(溝), 土差		
H	G3e7~12	SD61	不整形	弧状	-	105.0	-	-	単層				
H	F3e21	P68	(円形)	半円状	43.0	22.0	38.0	2.74	ブロック状		土差(溝)		
H	H3j20	P59	楕円形	台形状	41.0	11.0	35.0	2.61	柱礎	○			
H	G3e20	P63	円形	台形状	32.0	31.0	15.0	2.83	単層	○			SA1
H	G3e19	P64	円形	台形状	34.0	29.0	25.0	2.72	単層	○			SA1
H	G3e21	P65	円形	台形状	26.0	22.0	11.0	2.87	柱礎	○			SA1
H	G3e20	SK67	円形	弧状	87.0	78.0	20.0	2.87	単層		土差(溝)		
H	F3e21	P68	円形	半円状	44.0	41.0	22.0	2.78	単層				
H	G3e23	P70	円形	半円状	24.0	22.0	18.0	2.82	単層	○			
H	F3e1	P71	円形	階段状	34.0	34.0	33.0	2.69	単層				
H	F3e25	P72	方形	弧状	94.0	91.0	38.0	2.68	水平				
H	H3d16	P73	円形	半円状	34.0	33.0	26.0	2.77	単層				
H	H3d16	P74	円形	扇状	26.0	24.0	23.0	-	単層				
H	G3a6	SA75	-	-	-	-	-	-	-				虎路 14 内
H	F3i・q	SK76	円形	弧状	375.0	353.0	42.0	2.77	レンズ状		覆有台枠・土長差(溝)・ 木		

土器・陶磁器観察表 凡例

土器・陶磁器観察表 (古代)

器種：第15～17図(32～34頁)の分類に一致する。
グリッド：複数の大グリッド・中グリッドにまたがって出土したものは / - // を用い小グリッドの対応関係を示した。

層位：破片が複数の層位から出土しているものは、もっとも下位の層位を記載した。

口径：正円とならないものは長径を記した。

器高：左右で高さが違うものは、より高いほうの数値を記した。

底径：正円とならないものは長径を記した。高台を持つものは高台の直径を記した。高台径は接地面の径を記した。蓋は括みの最大径を記した。

色調焼成：土器は白色系・赤色径・褐色系に分類した。分類は感覚的で、区別の難しいものが多い。須恵器は酸化硬質のものを「酸硬」、還元硬質のものを「還元」、酸化軟質のものを「酸軟」、還元軟質のものを「還元」として記載した。

胎土産地：「土」は土師器、「須」は須恵器の略で、それぞれ第2表(36頁)に対応する。施軸陶磁器は京都・尾張・美濃などの産地名を記した。施軸陶磁器の産地は作成者(春日)の目視による推定である。

調整：主要な調整痕跡を記載した。「内」は内面、「外」は外面、「口」は口縁部、「胴」は胴部、「体」は体部、「底」は底部の略。貯蔵具・煮炊具は胴部、食器は体部とした。「見込み」は内底面を示す。

消費痕跡：器面の摩耗・欠けや付着物(煤・コゲ・垂書含む)について記載した。部位名称については調整と同じ。

焼成痕跡：土器器については黒斑や赤化の状況を示したが、作成者の理解が十分でないため不備が多い。「紐状黒斑」・「飛沫状黒斑」・「棒状黒斑」・「外面黒化」・「内面白化」については図版109・110参照。須恵器については降灰や黒化の状況から推測される重ね焼きの状況を示したものもある。杯蓋の重ね焼きの分類は北野[1988]に一致する。施軸陶器については施軸範囲やトチン痕跡などについて記載した。

備考：貯蔵具・煮炊具は胴部最大径を記入したのものもある。また底部が丸底・丸底風の土器についても記載した。

土器・陶磁器観察表 (中世)

種類：土器・陶磁器の種類を記した。「瀬戸・美濃」は瀬戸焼もしくは美濃焼、珠洲は珠洲焼の略。

分類：土師質土器皿・小皿は第19図(34頁)に一致する。輸入陶磁器(青磁・白磁・青花)は山本信夫[2000・2010]・上田[1982]・森田[1982]・小野[1982]の分類、珠洲焼は古岡[2003]の分類に一致する。

グリッド・層位・口径・器高・底径：土器陶磁器観察表(古代)と同じ。

調整・施軸・技法など：部位の名称は土器陶磁器観察表(古代)と同じ。

備考：土師質土器は胎土を記入した。分類は以下の通り。

胎土A：大粒の砂粒を多く含む胎土。暗い褐色の色調のものが多い。丸みのある石英が稀に見られる。R1類に多い。

胎土B：Aに比べやや小さい砂粒を定量含む、シルト質の胎土。色調はやや明るめの褐色のものが多い。やや角張った礫・鉱物を含むものが多い。T1b類に多い。

胎土C：比較的精良なやや粘土質の胎土。明るい黄色の色調のものが多い。T1a類に多い。

胎土D：混入物を含まない精良な胎土。胎土Cと区別が難しいものも存在する。白色の色調の物が多い。T2・R2類に多い。

土器観察表(縄文時代～古墳時代)

種類：土器の種類を記した。

器種：弥生時代後期～古墳時代前期の土器は第18図(34頁)に一致する。

グリッド・層位・口径：土器陶磁器観察表(古代)と同じ。
調整など：部位の名称は土器陶磁器観察表(古代)と同じ。

胎土：混入物を主に記載した。織：繊維、英：石英、長：長石、雲：雲母、白：白色小粒、黒：黒色小粒、灰：灰色小粒、赤：赤色小粒、褐：褐色小粒を略したものである。黒・灰はチャートもしくは硬質の砂岩、赤は赤色のチャートが大半を占めると考えている。褐には焼土粒を一定量含む可能性がある。白は風化した軟質のものが大半であるが、長石・石英が風化したものが相当量存在すると推測している。

色調：農林水産省農林水産化学会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帳』に拠り、主に外面の煤や黒斑の無いか所の色調を記載した。

観察表

土器・陶磁器観察表（古代）(1)

No.	種類	図柄	口径		用途	群位	大きさ (cm)			色澤	胎土	調整	消費品	流通品	備考	
			大	小			口径	高さ	底径							
1	土器	有白小皿	F10	f 19	P51		9.4	3.3	5.0	白色系	土A	内外ロクロナデ、高台輪付付籠口クロナデ	不明	内外器類		
2	土器	小皿	E10	f 19	P51	覆土			3.6	赤色系	土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明			
3	土器	小皿	E10	f 19	P51	覆土	19.0			赤色系	土A	内外ロクロナデ	蓋物			
4	土器	小皿	F10	e 25	SR7		3	9.4	2.5	5.0	白色系	土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明	内外器類	
5	土器	無白陶a	F10	e 25	SR7		3		4.0	白色系	石土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物	赤色化		
6	土器	無白陶a	F10	e 25	SR7		3		5.0	白色系	土B					
7	土器	無白陶a	F10	e 25	SR7				5.8	赤色系	石土A	内外ロクロナデ、底周回転転写/内外ロクロナデ	体務スズ	底外器類		
8	土器	小皿	E10	y 17	P51	覆土	10.8	3.2	4.0	赤色系	土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明			
9	土器	無白陶a I	E10	y 17	P51	覆土	13.0	3.9	4.8	赤色系	土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明			
10	土器	無白陶a II	E10	y 17	P51	覆土	13.5	4.2	4.8	赤色系	石土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明			
11	土器	小皿	E10	e 20	SR8	覆土	9.0	2.9	4.6	赤色系	土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物	体務・底外器類		
12	土器	小皿	E10	f 20	P51	覆土	11.2	(2.9)	4.6	赤色系	土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明			
13	土器	小皿	E11	q 23	SR2	2	8.0	2.2	3.5	白色系	土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明	内器類		
14	土器	柱状高白器	E11	d 10	SR1	2			3.5	白色系	石土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明			
15	土器	柱状高白器	E11	c 15	SR1	2			3.6	白色系	土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明			
16	土器	柱状高白器	D11	e 12	SR1	2			3.3	白色系	土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明			
17	土器	柱状高白器	E11	d 1	SR1	2			4.1	白色系	石土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	見込み・底外器類			
18	黒色土器	無白陶	E11	v 19	SR1	2			4.2	白色系	石土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明			
19	黒色土器	有白陶	E11	v 2	SR1	2				白色系	土B	内外ロクロナデ、高台輪付付籠口クロナデ	不明	内外器類		
20	黒色土器	有白陶	E11	p 25	SR1	2			5.9	赤色系	土B	内外ロクロナデ、高台輪付付籠口クロナデ	不明			
21	黒色土器	有白陶	E11	q 11	SR1	2			7.6	白色系	土A	内外ロクロナデ、高台輪付付籠口クロナデ	蓋物	内外器類		
22	黒色土器	有白陶	E11	q 17	SR1	2			3.2	白色系	土C	内外ロクロナデ、高台輪付付籠口クロナデ	高台輪付	底外器類		
23	黒色土器	有白陶	E11	u 5	SR1	2				白色系	土A	内外ロクロナデ、高台輪付付籠口クロナデ	高台輪付	底外器類		
24	黒色土器	有白陶	E11	v 15	SR1	2			6.8	白色系	土A	内外ロクロナデ、高台輪付付籠口クロナデ	不明			
25	黒色土器	有白陶	E11	v 11	SR1	2	16.8			白色系	土B	内外ロクロナデ、高台輪付付籠口クロナデ	不明	口外器類		
26	黒色土器	有白陶	E11	c 10-15-20	SR1	2	14.2	5.1	6.4	緑褐色	黒土	内外ロクロナデ、高台輪付付籠口クロナデ、底外回転転写	内外・高台先頭磨耗	底外器類		
27	黒色土器	鉢	E11	v 11	SR1	2	26.4			緑褐色	黒土		不明			
28	土器	小皿	E11	v 23	SR1	2	8.8	2.8	4.4	白色系	石土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物	底外器類		
29	土器	小皿	E11	v 6	SR1	2	9.5	2.9	3.6	赤色系	石土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物			
30	土器	小皿	E11	v 16	SR1	2	9.4	2.9	4.0	赤色系	土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物	外器類		
31	土器	小皿	E11	v 16	SR1	2	9.8	2.7	3.6	赤色系	石土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物	口内外器類		
32	土器	小皿	E11	v 16	SR1	2	9.2	2.5	4.5	赤色系	石土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物	蓋物無し		
33	土器	小皿	F11	v 14	SR1	2	9.6	2.7	5.3	赤色系	石土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物			
34	土器	小皿	E11	v 11	SR1	2	10.6	3.0	4.3	赤色系	石土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物			
35	土器	小皿	E11	v 17	SR1	2	10.5	3.0	3.6	白色系	土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物			
36	土器	小皿	E11	v 16	SR1	2	10.2	3.1	4.7	赤色系	石土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物	内外器類		
37	土器	小皿	E11	v 11	SR1	2	11.0	3.6	5.4	白色系	土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物	底外器類		
38	土器	小皿	E11	v 12	SR1	2	10.8	2.9	5.4	赤色系	土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物	口内外器類		
39	土器	小皿	E11	v 6	SR1	2	10.8	2.7	5.0	白色系	石土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物			
40	土器	無白陶a I	E11	v 13	SR1	2	12.3	4.0	3.4	赤色系	土D	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明			
41	土器	無白陶a I	E11	v 13	SR1	2	12.0	4.4	6.1	赤色系	石土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明			
42	土器	小皿	F11	v 17	SR1	2			3.7	赤色系	石土A	内外ロクロナデ、底周回転転写	蓋物			
43	土器	無白陶a	E11	v 11	SR1	2			4.9	白色系	土B	内外ロクロナデ、底周回転転写	不明			

観察表

土器・陶磁器観察表 (古代) (3)

No.	種別	器種	グリップ			器位	大きさ (cm)			色澤 斑紋	拍撃 方向	調整	消費材料	製造材料	備考				
			大	中	小		口径	高さ	底径										
90	土師器	小皿	E11	v	11	底縁 2	3'	9.9	2.5	5.3	白色系	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆?					
91	土師器	小皿 小皿	E11	v	17	底縁 2	3'			4.4	褐色系	右	上A	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆	内・体外・底縁 黒漆			
92	土師器	小皿 小皿	E11	v	16	底縁 2	3'			3.7	赤褐色	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆				
93	土師器	無内輪 a	E11	v	11	底縁 2	3'			3.8	白色系	右	上A	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆?				
94	土師器	無内輪 a	E11	v	11	底縁 2	3'			5.8	白色系	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆?				
95	土師器	無内輪 a 小皿	E11	v	7	底縁 2	3'			4.2	赤褐色	右	上A	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆				
96	土師器	無内輪 a	E11	v	17	底縁 2	3'			4.0	白色系	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	底縁黒漆	体外黒漆			
97	土師器	無内輪 a	E11	v	13	底縁 2	3'			5.2	白色系	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆				
98	土師器	無内輪 a	E11	v	13	底縁 2	3'			6.5	褐色系	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	底縁黒漆	内黒漆			
99	黒色土師	無内輪	E11	v	22	底縁 2	3'			6.8	白色系	左	B	内へつゝ方角、唇口アリナシ、底縁同軸垂直	不明	底縁黒漆無し			
100	土師器	有内輪	E11	v		底縁 2	3'			4.5	白色系	上B	内径口アリナシ、高台輪付縁口アリナシ、底縁同軸垂直	不明					
101	黒色土師	有内輪	E11	u	5	底縁 2	3'			6.6	白色系	上A	内へつゝ方角、高台輪付縁口アリナシ	不明					
102	黒色土師	有内輪	E11	v	7	底縁 2	3'			6.3	白色系	上A	内へつゝ方角、高台輪付縁口アリナシ	不明					
103	黒色土師	有内輪	E11	v	18	底縁 2	3'			6.5	白色系	上A	内へつゝ方角、高台輪付縁口アリナシ	赤漆	底外・体外黒漆				
104	灰土師	把手付 小皿	E11	v	14	底縁 2	3'				褐色	裏C2	指頭圧痕	赤漆					
105	土師器	有内輪 白土	E11	d	18	底縁 1	4a			4.0	白色系	右	上A	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	底縁黒漆	内・底外黒漆			
106	土師器	無内輪 a	E11	v	13	底縁 2	4a			6.4	褐色系	上A	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆					
107	土師器	小皿 a	E11	v	12	底縁 2	4a			8.2	白色系	上D	内径口アリナシ	体外赤漆	赤黒漆				
108	土師器	無内輪 a	E11	v	12	底縁 2	4a			4.8	白色系	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆?				
109	灰土師	無内輪 a	D11	a	21/3	底縁 1	4a			13.4	4.5	8.1	褐色	左	裏B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	不明	底縁黒漆	
110	土師器	無内輪 a	E11	p	20 / 15 / 11	底縁 2	5b			13.0	4.7	4.6	白色系	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	不明		
111	土師器	小皿 小皿	E11	p	14	底縁 2	5a			4.7	白色系	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	不明				
112	土師器	小皿 a	E11	p	14	底縁 2	5b			9.5	白色系	上B	内径口アリナシ	赤漆					
113	灰土師	有内輪 b	E11	p	8	底縁 2	5b				7.0	褐色	裏B	内径口アリナシ、高台付縁口アリナシ	見込み・高台黒漆				
114	土師器	無内輪 a	E11	v	20	底縁 2	5c			12.3	3.8	5.0	赤褐色	右	上B	内径・唇上口アリナシ、唇口アリナシ	内・底外赤褐色		
115	土師器	無内輪 a	E11	v	20	底縁 2	5c			11.8	3.9	6.0	赤褐色	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆		
116	土師器	無内輪 a	E11	v	15	底縁 2	5c			12.2	3.6	5.5	白色系	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆		
117	土師器	無内輪 a	E11	w	2	底縁 2	5c			12.6	4.0	5.8	白色系	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆		
118	土師器	無内輪 a	E11	v	15	底縁 2	5c			12.5	4.3	5.1	赤褐色	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	赤漆		
119	土師器	無内輪 a	E11	v	21	底縁 2	5c			12.5	4.4	5.3	白色系	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	黒漆?不明	内内黒漆	
120	土師器	無内輪 a	E11	w	3	底縁 2	5c			14.3	5.2	6.2	白色系	右	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直、板付圧痕	見込み・底外黒漆	内内赤褐色	
121	黒色土師	有内輪	E11	v	13	底縁 2	5c			12.8	2.8	6.5	白色系	右	上B	内へつゝ方角、唇上口アリナシ、唇下口アリナシ、高台付縁口アリナシ	見込み・高台黒漆・内内黒漆	内黒漆	
122	土師器	小皿	E11	y	25	底縁 2	5c			3.4	白色系	上B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	不明					
123	土師器	杯蓋	E11	p	30	底縁 2	5c			2.8	白色系	右	上B	内口アリナシ、唇口アリナシ、唇内輪付縁口アリナシ	内面黒漆				
124	灰土師	無内輪 a	E11	v	13	底縁 2	5c			11.8	4.3	7.6	褐色	右	裏C1	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	見込み・底縁黒漆		
125	灰土師	無内輪 a	E11	v	2	底縁 2	5c			11.8	3.2	6.8	褐色	右	裏B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	見込み・内内・体外赤褐色 上・底外黒漆 底外黒漆「中込」	底縁黒漆	
126	土師器	小皿 a	D11	x	18	底縁 2	5c			11.6	白色系	上B	内径口アリナシ	内内赤褐色					
127	灰土師	杯蓋	E11	v	13	底縁 2	5c				褐色	裏B	唇平口アリナシ、内縁口付唇口アリナシ、唇縁部内縁部接合口アリナシ	不明	見込み				
128	灰土師	無内輪 a	E11	v	3	底縁 2	5d			11.9	3.0	7.4	褐色	左	裏B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	見込み・底外赤褐色 内内赤褐色	底縁黒漆	
129	土師器	無内輪 a	E11	v	18	底縁 2	5d			11.4	4.3	5.2	白色系	右	上C	内径口アリナシ、底縁同軸垂直	見込み・底外黒漆	内内黒漆	
130	灰土師	有内輪 IV	E11	v	7	底縁 2	5e			13.0	6.5	7.1	褐色	左	裏B	内径口アリナシ、底縁同軸垂直、唇口付縁口アリナシ、高台付縁口アリナシ	赤黒漆「中」 底外赤褐色	内縁黒漆無し	

土器・陶器観察表(古代)(4)

No.	種類	形種	サイズ(φ)		用途	大きさ(mm)		色澤	胎土	加工	装飾	文様	消費時期	流通時期	備考	
			大	小		口径	高さ									
131	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 19	竈跡 2	5φ	10.0	4.4	6.2	硝煉	右	眼C2	内外口フコナジ、高台状付け口フコナジ、底面は丸面	白磁釉・灰土、見込み・高台縁部乳	直線垂れ線き	
132	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 13・18	竈跡 2	5φ	11.6	4.4	6.7	硝煉	右	眼C1	内外口フコナジ、高台状付け口フコナジ、底面は丸面	見込み・高台縁部乳	白縁無し	
133	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 12・13	竈跡 2	5φ	14.4	7.2	8.4	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、高台状付け口フコナジ	内面縦状付着物、見込み・高台縁部乳	内縁無し	
134	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 12・14	竈跡 2	5φ	12.8	3.8	8.3	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
135	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 12・13	竈跡 2	5φ	12.3	3.2	7.3	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
136	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 12	竈跡 2	5φ	13.0	3.1	8.4	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
137	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 18	竈跡 2	5φ	12.3	3.3	8.4	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	底面各縁部乳	直線垂れ線き	
138	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 14・18	竈跡 2	5φ	12.7	3.1	8.1	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
139	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 19	竈跡 2	5φ	11.2	2.8	6.7	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	底面各縁部乳	直線垂れ線き	帯柄うすい
140	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 12・13・17	竈跡 2	5φ	12.4	3.2	7.0	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
141	灰土器	無内輪 有外輪	E11	W 6	竈跡 2	5φ	13.1	3.4	8.3	硝煉	右	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
142	灰土器	無内輪 有外輪	E11	W 9	竈跡 2	5φ	11.4	3.1	8.6	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
143	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 15・19・20	竈跡 2	5φ	11.7	2.4	6.8	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
144	灰土器	無内輪 有外輪	E11	W 16	竈跡 2	5φ	12.5	3.0	7.9	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
145	灰土器	無内輪 有外輪	E11	W 16	竈跡 2	5φ	12.7	2.9	7.7	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	底面各縁部乳	直線垂れ線き	
146	灰土器	無内輪 有外輪	D11/E11	N/T 23/22	竈跡 2	5φ	11.9	3.6	6.4	硝煉	右	眼C	内外口フコナジ、底面丸面	底面各縁部乳	直線垂れ線き	
147	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 12	竈跡 2	5φ	12.8	3.8	6.4	硝煉	右	眼C2	内外口フコナジ、底面丸面	見込み・高台縁部乳	直線垂れ線き	
148	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 12・13・17	竈跡 2	5φ	12.3	4.1	6.0	赤色系	右	眼C2	内外口フコナジ、底面丸面	見込み・高台縁部乳	直線垂れ線き	
149	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 12	竈跡 2	5φ	12.9	4.0	5.5	硝煉	右	眼C1	内外口フコナジ、底面丸面	底面各縁部乳	直線垂れ線き	
150	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 12・13・17	竈跡 2	5φ	12.7	4.3	5.4	硝煉	右	眼C2	内外口フコナジ、底面丸面	見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
151	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 12・13	竈跡 2	5φ	12.7	4.3	5.0	硝煉	右	眼C2	内外口フコナジ、底面丸面	見込み・内面縁部乳	内面無し	
152	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 14・15	竈跡 2	5φ	12.5	3.8	8.2	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
153	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 14/20	竈跡 2	5φ	11.7	3.6	7.0	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	底面各縁部乳	直線垂れ線き	
154	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 13	竈跡 2	5φ	12.4	3.8	8.0	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
155	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 19/13	竈跡 2	5φ/5φ	12.7	3.3	7.6	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
156	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 13	竈跡 2	5φ	12.4	3.6	8.2	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
157	灰土器	無内輪 有外輪	E11	W 16	竈跡 2	5φ	12.0	3.0	7.4	硝煉	右	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	見込み・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
158	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 14・15	竈跡 2	5φ	12.6	3.2	7.8	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
159	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 12・18	竈跡 2	5φ	12.3	3.2	7.7	硝煉	右	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
160	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 13・15	竈跡 2	5φ	12.0	3.3	7.2	硝煉	右	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
161	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 20	竈跡 2	5φ	12.2	3.2	7.2	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
162	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 15	竈跡 2	5φ	12.4	2.9	6.5	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	
163	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 19	竈跡 2	5φ	12.7	3.4	7.8	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	底面各縁部乳	直線垂れ線き	
164	灰土器	無内輪 有外輪	E11	V 17	竈跡 2	5φ	12.4	2.7	7.0	硝煉	左	眼B	内外口フコナジ、底面丸面	内面縦状付着物、見込み・内面・底面各縁部乳	直線垂れ線き	

観 察 表

土器・陶磁器観察表 (古代) (5)

No.	種類	器種	グリップ 大 中 小	用途	群位	大きさ (cm)			色澤 形成	胎土 方向	調整	消費材料	製造材料	備考
						口径	高さ	底径						
165	土器類	小瓶	E11 V 19	底跡 2	5e	10.7	4.4	4.8	白色系	右	上 北	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	赤漆	内面刷, 赤糸化
166	土器類	小瓶	E11 V 6	底跡 2	5e			3.4	赤色系	右	上 A	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	赤泥色物付着	
167	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 14・15	底跡 2	5e	13.2	4.0	5.4	白色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み・底赤外縁部 註, 赤糸化	内面刷黒
168	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 19	底跡 2	5e	12.3	4.1	5.2	白色系	右	上 D	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	内面刷付着物, 見 込み・口内・底赤外 縁部, 赤糸化	赤糸化
169	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12	底跡 2	5e	12.2	4.0	4.8	赤色系	右	上 D	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	赤糸化	内面刷
170	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・17	底跡 2	5e	12.5	3.5	5.4	赤色系	右	上 C	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み・底赤外縁部 註	内面刷
171	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 17	底跡 2	5e	12.5	4.3	5.0	白色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み	底赤外縁部
172	土器類	瓶内刷 b 1	E11 V 12・13	底跡 2	5e	12.0	4.1	7.0	赤色系	右	上 E	内・赤上ロクロナ字, 赤 下子持ろくナ字, 底赤 陶軸糸面写	見込み・内面・底赤外 縁部, 口内赤泥化物	
173	土器類	瓶内刷 b 1	E11 V 12・13	底跡 2	5e	12.3	3.9	7.2	赤色系	右	上 E	内・赤上ロクロナ字, 赤 下子持ろくナ字, 底赤 陶軸糸面写	内面刷, 口内赤泥化 物	内面刷黒
174	土器類	瓶内刷 b 1	E11 V 18	底跡 2	5e	13.0	4.4	5.9	赤色系	右	上 E	内・赤上ロクロナ字, 赤 下子持ろくナ字, 底赤 陶軸糸面写	内面刷付着物	
175	土器類	瓶内刷 b 1	E11 V 14・19	底跡 2	5e	12.4	4.1	5.4	赤色系	右	上 A	内・赤上ロクロナ字, 赤 下子持ろくナ字, 底赤 陶軸糸面写	内面刷付着物, 口 内・見込み赤泥, 内 赤泥化物	
176	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 14・19	底跡 2	5e	13.0	3.8	5.6	白色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み・底赤外縁部 註	底赤外縁部, 赤化
177	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・13・ 15	底跡 2	5e	13.1	3.7	5.8	赤色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	赤漆	
178	土器類	瓶内刷 a 1	O11 K 17	底跡 2	5e	12.2	3.6	6.5	赤色系	右	上 E	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	口縁付, 見込み 入赤泥	内面刷黒
179	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12	底跡 2	5e	12.6	3.9	5.3	赤色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み・口内・底赤 外縁部註	赤泥部, 赤化
180	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・17	底跡 2	5e	12.5	4.0	5.8	赤色系	右	上 D	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	口内・見込み赤泥	内面刷
181	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・17	底跡 2	5e	12.8	4.1	5.4	白色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み・底赤外縁部 註, 口内赤泥化物	
182	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・13・ 17	底跡 2	5e	12.3	3.5	5.8	白色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	赤漆	
183	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12	底跡 2	5e	13.2	4.2	6.2	赤色系	右	上 E	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	内面刷付着物, 見 込み・口内・底赤外 縁部註	底赤外縁部
184	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 4・13・ 20	底跡 2	5e	13.2	3.9	5.0	赤色系	右	上 E	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	内面刷付着物, 口 内・見込み赤泥	
185	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12	底跡 2	5e	13.2	4.4	5.6	白色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	口内・赤下・底赤外 縁部註	
186	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 15	底跡 2	5e	12.2	3.8	5.6	白色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	内面刷付着物, 見 込み	
187	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 13	底跡 2	5e	12.3	4.1	5.5	白色系	右	上 D	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写, 輪印付		内外黒
188	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12	底跡 2	5e	12.7	3.9	4.8	白色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み・底赤外縁部 註	内外黒
189	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・13・ 17	底跡 2	5e	12.4	3.9	5.6	赤色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	不明	内外黒
190	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・17	底跡 2	5e	12.0	3.6	5.0	赤色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	内面刷付着物, 見 込み・口内・底赤 外縁部註	
191	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12	底跡 2	5e	12.9	4.2	5.5	赤色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	内面刷付着物, 見 込み・口内・底赤 外縁部註	赤糸化, 内黒
192	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 14・18	底跡 2	5e	12.8	4.2	5.8	赤色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	内面刷付着物, 見 込み・底赤外縁部 註	内外黒
193	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・13	底跡 2	5e	12.0	4.2	5.0	赤色系	右	上 D	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	赤漆	内外赤化
194	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・17	底跡 2	5e	12.7	3.8	5.6	白色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み・底赤外縁部 註	内外赤化
195	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・13・ 17	底跡 2	5e	12.2	3.7	5.6	白色系	右	上 D	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み・底赤外縁部 註, 口内赤泥化物 付着	
196	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・17	底跡 2	5e	12.2	4.0	4.8	輪色系	右	上 D	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み・底赤外縁部 註	内外黒
197	土器類	瓶内刷 a 1	E11 W 16	底跡 2	5e	12.3	3.8	5.4	白色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	摩滅不明	内外赤
198	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 20	底跡 2	5e	12.8	4.3	4.5	白色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み・底赤外縁部 註	赤糸化
199	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・13	底跡 2	5e	12.1	4.2	5.2	赤色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	赤漆	内面刷黒, 赤 泥部
200	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 17・13	底跡 2	5e	12.2	3.9	5.1	赤色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み・口内・底赤 外縁部註	内外赤
201	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12	底跡 2	5e	12.2	3.9	3.2	赤色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	内面刷付着物, 見 込み・口内・底赤 外縁部註, 口内赤 泥化物付着	赤糸化
202	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 11・12	底跡 2	5e	12.6	4.3	5.4	白色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写		赤泥部
203	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 12・13	底跡 2	5e	12.1	4.5	5.5	赤色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	見込み・口内・底赤 外縁部註	
204	土器類	瓶内刷 a 1	E11 V 19	底跡 2	5e	12.3	4.1	4.6	赤色系	右	上 B	内赤ロクロナ字, 底赤陶 軸糸面写	内面刷付着物, 見 込み・口内・底赤 外縁部註, 赤泥	赤泥部

観察表

土器・陶磁器観察表 (古代) (7)

No.	種類	図形	グリップ	寸法	用途	大きさ (cm)			胎土	施釉	装飾	調整	消費材料	製造材料	備考			
						口径	高さ	底径										
249	土師器	有台鉢	E11	v	1-6・7	底跡 2	5e	12.4	2.8	5.8	赤色系	石	上E	内へうミガキ、赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付付接ロコロナデ	赤漆	内赤赤色		
250	土師器	有台鉢	E11	v	12	底跡 2	5e	12.4	3.2	5.6	赤色系	土	上E	内赤へうミガキ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆			
251	土師器	有台鉢	E11	v	7-12・17	底跡 2	5e	12.0	3.7	5.4	赤色系	石	上E	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆	見込み・高台輪摩耗	赤黒	
252	土師器	有台鉢	E11	v	12-13	底跡 2	5e	12.2	3.7	5.4	赤色系	土	上E	内赤へうミガキ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆	見込み・高台輪摩耗		
253	土師器	有台鉢	E11	v	12	底跡 2	5e	12.5	3.5	5.4	赤色系	土	上E	内赤へうミガキ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆	見込み磨かへ割傷		
254	土師器	有台鉢	E11	v	12-17	底跡 2	5e	12.4	3.3	5.6	赤色系	土	上E	内赤へうミガキ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆			
255	黒色土師	有台鉢	E11	v	12-17	底跡 2	5e	13.3	3.0	6.4	白色系	石	上E	内へうミガキ、赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆	赤漆塗布	白黒黒色、赤漆塗布	
256	黒色土師	有台鉢	E11	v	12-17	底跡 2	5e	13.6	2.8	6.3	赤色系	石	上E	内へうミガキ、縹文、赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆	見込み・高台輪摩耗	白内一部白化、白赤一部黒化、赤漆塗布	
257	黒色土師	有台鉢	E11	v	12-13	底跡 2	5e	13.5			白色系	石	上C	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆		白内白色、白赤黒化、赤漆塗布	
258	黒色土師	有台鉢	E11	v	6-12・13	底跡 2	5e	13.0	3.0	6.2	白色系	石	上C	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆		白内一部白化、白赤一部黒化、赤漆塗布	
259	黒色土師	有台鉢	E11	v	12-17	底跡 2	5e	13.6	2.8	6.1	白色系	石	上C	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆		白内一部白化、白赤一部黒化、赤漆塗布	
260	黒色土師	有台鉢	E11	v	12-13・15	底跡 2	5e	13.2	2.9	6.3	白色系	石	上E	内へうミガキ、赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆	見込み摩耗?	白赤一部黒化、赤漆塗布	
261	黒色土師	有台鉢	E11	v	17	底跡 2	5e	13.8	3.0	6.8	白色系	石	上C	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆		白内一部白化、白赤一部黒化、赤漆塗布	
262	黒色土師	有台鉢	E11	v	17	底跡 2	5e	13.2	3.2	6.1	白色系	石	上C	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆	見込み・高台輪摩耗	白内一部白化、白赤一部黒化、赤漆塗布	
263	黒色土師	有台鉢	E11	v	12	底跡 2	5e	13.7	3.3	5.6	白色系	石	上E	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆?		白内一部白化、白赤一部黒化、赤漆塗布	
264	黒色土師	有台鉢	E11	v	12-17	底跡 2	5e	12.4	3.1	6.4	白色系	石	上C	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆		白黒黒色、赤漆塗布	
265	黒色土師	有台鉢	E11	v	12-13・17	底跡 2	5e	12.8	3.0	6.3	白色系	石	上C	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆	見込み・高台輪摩耗	白内一部白化、白赤一部黒化、赤漆塗布	
266	黒色土師	有台鉢	E11	v	12-17	底跡 2	5e	13.0	2.9	6.5	白色系	石	上C	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆	見込み・高台輪摩耗	白内一部白化、白赤一部黒化、赤漆塗布	
267	黒色土師	有台鉢	E11	v	12-17	底跡 2	5e	13.0	3.1	6.6	白色系	石	上E	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆		白黒黒色、赤漆塗布	
268	黒色土師	有台鉢	E11	v	17	底跡 2	5e	13.2	2.9	6.2	白色系	石	上E	内へうミガキ、赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆	見込み・高台輪摩耗	白内一部白化、白赤一部黒化、赤漆塗布	
269	黒色土師	有台鉢	E11	v	12-17	底跡 2	5e	12.3	3.1	5.7	赤色系	石	上E	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	赤漆		白内一部白化、白赤一部黒化、赤漆塗布	
270	黒色土師	有台鉢	E11	v	20	底跡 2	5e				白色系	土	A	内へうミガキ、高台輪付接ロコロナデ	不明			
271	灰土師	鉢	E11	v	17	底跡 2	5e				褐色	黒	C1	赤土ロコロナデ、内赤内赤、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	不明		内赤赤黒、赤土ロコロナデ	
272	灰土師	高脚瓶 A I	F11	v	18	底跡 2	5e	5.4			褐色	石	黒	C1	内・赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	高台磨り跡		最大径 11.8cm
273	灰土師	高脚瓶 A	E11	v/w	12-17・23	底跡 2	5e				褐色	黒	C1	内赤ロコロナデ、内赤ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	不明		内赤赤黒	最大径 11.8cm
274	灰土師	短身付瓶	E11	v/w	19-20・25/1	底跡 2	5e				褐色	石	黒	C2	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	高台磨り跡		最大径 17.8cm 短身付瓶
275	灰土師	鉢	E11	v	12-17	底跡 2	5e	14.8			褐色	黒	C3	内赤ロコロナデ	不明		赤黒	
276	土師器	小笠	E11	v	17	底跡 2	5e				赤色系	土	E	内赤ロコロナデ	内赤	内赤赤黒		
277	土師器	小笠	E11	v	20	底跡 2	5e	11.2			白色系	土	D	内赤ロコロナデ	赤漆	赤黒		
278	土師器	小笠	E11	v	18-19	底跡 2	5e	12.4			白色系	土	E	内赤ロコロナデ	白内赤化	赤土		
279	土師器	小笠	E11	v	12	底跡 2	5e	11.6			白色系	土	E	内赤ロコロナデ	白内赤化	赤黒		
280	土師器	小笠	E11	v	6-11・12-17	底跡 2	5e				赤色系	土	E	内赤ロコロナデ、赤土ロコロナデ	赤漆			
281	土師器	小笠	E11	v	14-15	底跡 2	5e				白色系	石	上E	内・赤土ロコロナデ、赤土ロコロナデ、高台輪付接ロコロナデ	内赤赤黒	内赤赤黒		
282	土師器	小笠	E11	v	9-12・13	底跡 2	5e				白色系	石	上E	内赤ロコロナデ、赤土ロコロナデ	内赤赤黒	内赤赤黒		

観 察 表

土器・陶磁器観察表（古代）(9)

No.	種別	器種	フチツブ		口径	口径	高さ (cm)		色澤	胎地	加工	調整	消費材	製造地	備考	
			大	小			全	口縁								器底
323	土器	瓶	丸	d	6-16	底径	5φ	12.1	2.8	7.9	褐色	左	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	見込み、内赤 外赤線装	内赤線装	
324	土器	小瓶	丸	e	20	底径	1.5φ	11.4	4.2	3.6	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装	
325	土器	瓶	丸	e	20	底径	1.5φ	12.3	4.0	6.8	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	既系外赤線装、赤褐色 上縁、正位		
326	土器	瓶	丸	e	20	底径	1.5φ	4.9	4.9	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	既系外赤線装、既系 外赤線装	見込み、上赤		
327	土器	瓶	丸	d	12	底径	1.5φ	12.7	4.0	3.6	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	見込み、既系外赤線 装、赤褐色		
328	土器	瓶	丸	b	17	底径	1.5φ	12.7	4.2	5.9	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	内赤上ロクロ子、赤 下子付ろろ子、既系回 転車回	見込み内赤装	
329	土器	瓶	丸	e	20	底径	1.5φ	12.8	4.9	6.5	白色系	上	内赤ハタケ子	赤褐色	内赤線装	
330	土器	瓶	丸	d	6	底径	1.5φ	11.9	3.9	5.4	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装	
331	土器	瓶	丸	e	10	底径	1.5φ	12.2	3.9	5.4	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	内赤線装		
332	土器	瓶	丸	d	11	底径	1.5φ	12.6	4.0	5.2	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	見込み、内赤外赤線 装	内赤化	静止車回り
333	土器	瓶	丸	d	11	底径	1.5φ	12.2	3.8	5.0	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	見込み、既系外赤線 装	内赤線装、赤 赤化	
334	土器	瓶	丸	d	16	底径	1.5φ	12.5	3.5	5.9	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色		
335	土器	瓶	丸	d	1	底径	1.5φ	12.6	3.9	4.9	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	内赤線装		
336	土器	瓶	丸	e	15	底径	1.5φ	12.4	4.1	5.0	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装、赤 赤化	
337	土器	瓶	丸	d	16	底径	1.5φ	12.9	4.1	5.2	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装、赤 赤化	
338	土器	瓶	丸	e	15	底径	1.5φ	12.7	3.8	6.0	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装、赤 赤化	
339	土器	瓶	丸	e	20	底径	1.5φ	12.5	3.9	5.9	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装	
340	土器	瓶	丸	e	15	底径	1.5φ	12.9	3.8	5.7	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	見込み、既系外赤線 装	赤褐色	
341	土器	瓶	丸	e	15	底径	1.5φ	12.7	3.9	5.4	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	赤褐色	
342	土器	瓶	丸	e	15/11	底径	1.5φ	12.6	4.1	5.0	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色		
343	土器	瓶	丸	d	6	底径	1.5φ	12.2	4.1	6.2	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	見込み、既系外赤線 装	内赤線装	
344	土器	瓶	丸	e	10	底径	1.5φ	11.9	4.2	5.3	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	既系外赤線 装		
345	土器	瓶	丸	d	12	底径	1.5φ	12.6	4.5	5.9	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装	
346	土器	瓶	丸	e	11	底径	1.5φ	12.4	4.1	4.8	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装、内 赤線装	
347	土器	瓶	丸	d	11	底径	1.5φ	12.2	4.2	5.0	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装	
348	土器	瓶	丸	d	11	底径	1.5φ	11.5	3.9	5.4	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	不明	内赤線装、既 赤線装	
349	土器	瓶	丸	d	6-11	底径	1.5φ	12.0	4.0	6.1	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	内赤線装		
350	土器	瓶	丸	d	6	底径	1.5φ	12.2	4.6	4.7	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装	
351	土器	瓶	丸	d	16	底径	1.5φ	11.6	4.1	5.4	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	見込み、既系外赤線 装	内赤線装	
352	土器	瓶	丸	d	11	底径	1.5φ	12.4	4.6	5.6	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	不明	内赤線装	
353	土器	瓶	丸	d	16	底径	1.5φ	11.8	4.3	5.3	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	見込み、赤下、既系 外赤線装	内赤線装	
354	土器	瓶	丸	b	17	底径	1.5φ	12.5	4.2	5.5	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	内赤線装		
355	土器	瓶	丸	d	11	底径	1.5φ	12.1	4.3	5.3	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装、内 赤線装	
356	土器	瓶	丸	d	16-17	底径	1.5φ	12.1	4.3	5.5	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装	
357	土器	瓶	丸	e	15	底径	1.5φ	12.2	4.2	5.0	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装	
358	土器	瓶	丸	d	11	底径	1.5φ	12.1	4.4	5.8	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	内赤線装	
359	土器	瓶	丸	d	17	底径	1.5φ	12.2	4.4	5.1	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	不明	赤褐色	
360	土器	瓶	丸	d	11	底径	1.5φ	12.4	4.2	5.7	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	見込み線装	赤褐色	
361	土器	瓶	丸	e	20	底径	1.5φ	12.6	4.1	3.6	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	見込み、既系外赤線 装、内赤線装	内赤線装	
362	土器	瓶	丸	e	20	底径	1.5φ	12.2	4.4	5.4	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	赤褐色	
363	土器	瓶	丸	e	10	底径	1.5φ	12.1	3.9	5.3	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	見込み、既系外赤線 装、内赤線装	内赤線装	
364	土器	瓶	丸	e	15	底径	1.5φ	12.3	4.0	5.2	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	赤褐色	赤褐色	
365	土器	瓶	丸	d	11	底径	1.5φ	12.6	3.9	6.3	赤褐色	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	見込み、既系外赤線 装	内赤線装	
366	土器	瓶	丸	e	15	底径	1.5φ	12.5	4.1	5.6	白色系	右	内赤ロクロ子, 既系回 転車回	不明		

土器・陶磁器観察表 (古代) (10)

No.	種類	図柄	デザイン		用途	大きさ (cm)		色澤	胎土	胎土	調整	消費経路	産出経路	備考		
			大	小		口径	高さ								底径	
367	土師器	無内陶 a-1	E11	d 11	底路 1	54	13.1	4.3	5.9	白色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写磁器	見込み・口内・底内陶転写	見込み・底内陶転写	
368	土師器	無内陶 a-1	E11	e 20	底路 1	54	12.7	4.7	5.6	赤色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	漆塗?	内・底内陶転写	内・底内陶転写
369	土師器	無内陶 a-1	E11	d 12	底路 1	54	12.6	4.3	5.6	白色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	漆塗	内外陶転写	内外陶転写
370	土師器	無内陶 a-1	E11	e 11	底路 1	54	13.2	4.3	5.5	白色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	見込み・底内陶転写	内外陶転写	内外陶転写
371	土師器	無内陶 a-1	E11	d 16	底路 1	54	12.2	4.7	5.0	白色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	漆塗	内外陶転写	内外陶転写
372	土師器	無内陶 a-1	E11	d 11	底路 1	54	12.9	4.4	6.0	赤色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	不明	内・底内陶転写	内外陶転写
373	土師器	無内陶 a-1	E11	e 15	底路 1	54	13.1	4.3	5.0	白色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	見込み・底内陶転写	内外陶転写	内外陶転写
374	土師器	無内陶 a-1	E11	d 11	底路 1	54	12.7	4.5	5.6	赤色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	漆塗	内外陶転写	内外陶転写
375	土師器	無内陶 a-1	E11	d 11	底路 1	54			6.0	白色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	見込み・底内陶転写	漆塗	
376	土師器	無内陶 a-1	E11	d 11	底路 1	54	13.4	4.6	5.0	赤色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	漆塗?	底内陶転写	内外陶転写
377	土師器	無内陶 a-1	D11	e 17-18	底路 1	54	14.6	4.7	5.6	白色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	見込み・底内陶転写	口内陶転写	
378	土師器	無内陶 a-1	E11	e 25-20	底路 1	54	14.6	4.9	6.4	赤色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	見込み・底内陶転写	底内陶転写	
379	土師器	無内陶 a-2	E11	e 15	底路 1	54	15.3	5.0	6.0	赤色系	右	土師	内・外上口クロナジ、底内陶転写	見込み・底内陶転写	内外陶転写	内外陶転写
380	土師器	無内陶 a-2	E11	d 6	底路 1	54	14.9	4.7	6.0	白色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	見込み・底内陶転写	内外陶転写	
381	土師器	無内陶 a-2	E11	d 12	底路 1	54	15.5	5.2	6.0	白色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	見込み・底内陶転写	内外陶転写	
382	土師器	無内陶 a-2	E11	e 15-25	底路 1	54	15.5	5.3	6.0	赤色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	漆塗?	内・底内陶転写	内外陶転写
383	土師器	無内陶 a-2	E11	d 11	底路 1	54	15.0	5.0	7.0	赤色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	不明	内外陶転写	
384	土師器	無内陶 a-2	E11	e/h 20/5	底路 1	54	15.3	5.1	6.2	赤色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	底内陶転写	内外陶転写	
385	土師器	無内陶 a-2	E11	d 12	底路 1	54	14.8	5.6	6.1	白色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	口内・外陶転写	内外陶転写	
386	土師器	無内陶 a-2	E11	d 11	底路 1	54	15.3	5.7	6.0	赤色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	漆塗	内外陶転写	
387	土師器	無内陶 a-2	E11	e 20	底路 1	54	16.7	5.4	6.2	白色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	見込み・底内陶転写	内外陶転写	
388	土師器	無内陶 a-2	E11	e 20	底路 1	54	16.8	5.6	6.8	白色系	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	見込み・底内陶転写	内外陶転写	
389	黒土器	無内陶	E11	d 6	底路 1	54	13.9	3.5	5.5	白色系	右	土師	内・外上口クロナジ、底内陶転写	見込み・口内・底内陶転写	内外陶転写	内外陶転写
390	黒土器	無内陶	E11	e 20	底路 1	54			6.0	白色系	右	土師	内・外上口クロナジ、底内陶転写	底内陶転写	内外陶転写	
391	黒土器	無内陶 1	E11	d 2/6	底路 1	54	14.2	4.9	5.2	白色系	右	土師	内・外上口クロナジ、底内陶転写	見込み・口内・底内陶転写	内外陶転写	内外陶転写
392	灰土器	広口瓶	E11	e/h 15-20/16	底路 1	54	10.6		11.1	褐色	左	土師	内・外上口クロナジ、底内陶転写	底内陶転写	内外陶転写	内外陶転写
393	灰土器	長頸瓶	E11	d 6	底路 1	54			11.7	褐色	左	土師	見込み不渡、内口クロナジ	底内陶転写	内外陶転写	
394	土師器	小豆形皿	E11	e 15	底路 1	54	14.6			白色系	土	土師	内外口クロナジ	口内陶転写	内外陶転写	内外陶転写
395	土師器	小豆形皿	E11	e 20	底路 1	54	15.8			白色系	土	土師	内外口クロナジ	内陶転写	内外陶転写	内外陶転写
396	土師器	小豆形皿	E11	d 6	底路 1	54			6.0	赤色系	土	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	内陶転写	内外陶転写	内外陶転写
397	土師器	長足皿	E11	e/h 20/6	底路 1	54	23.0			赤色系	土	土師	口内陶転写、内・外上口クロナジ	漆塗		
398	土師器	長足皿	E11	e/h 5/11	底路 1	54	22.3			赤色系	土	土師	内外口クロナジ	漆塗	内外陶転写	内外陶転写
399	土師器	長足皿	D11	e 21	底路 1	54	36.4			赤色系	土	土師	内外口クロナジ	漆塗	内外陶転写	内外陶転写
400	灰土器	瓶	E11	d 1-6	底路 1	54	21.2			褐色	右	土師	内・外上口クロナジ、底内陶転写	漆塗	内外陶転写	内外陶転写
401	灰土器	瓶	E11	d 6	底路 1	54	17.2	5.1	6.8	褐色	右	土師	内・外上口クロナジ、底内陶転写	漆塗	内外陶転写	内外陶転写
402	灰土器	瓶	E11	e/h 10-15/7.6	底路 1	54	17.5	6.1	7.5	褐色	右	土師	内・外上口クロナジ、底内陶転写	漆塗	内外陶転写	内外陶転写
403	灰土器	瓶	E11	d 16	底路 1	54	18.2			褐色	右	土師	内・外上口クロナジ、底内陶転写	不明	内外陶転写	内外陶転写
404	灰土器	瓶	E11	e/h 20/4-7/11	底路 1	54	16.7			褐色	右	土師	内・外上口クロナジ、底内陶転写	不明	内外陶転写	内外陶転写
405	灰土器	瓶	E11	e/h 10/16	底路 1	54	13.2	3.8	5.3	褐色	右	土師	内・外上口クロナジ、底内陶転写	不明	内外陶転写	内外陶転写
406	灰土器	瓶	E11	e/h 15-20/7.6	底路 1	54	12.5	6.0	7.0	褐色	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	漆塗	内外陶転写	内外陶転写
407	灰土器	瓶	E11	e/h 15/16	底路 1	54	11.9	3.0	6.6	褐色	右	土師	内外口クロナジ、底内陶転写	見込み不渡、底内陶転写	内外陶転写	内外陶転写

土器・陶磁器観察表(古代)(12)

No.	種類	器種	サイズ(mm)			用途	大きさ(mm)			釉薬	出土	調整	消費材料	形成材料	備考	
			大	中	小		口径	高さ	底径							口径
448	土師器	無内輪 b-1	E11	d	2	縄路1	5e	12.5	3.7	6.2	白色系	左	土王	内・外上ロクロナデ、下・底落口ロクロナデ	見込み・底外輪磨削	黒陶質?
449	土師器	無内輪 b-1	E11	c/e	10・15/9	縄路1	5e	12.2	4.5	6.2	白色系	右	土C	内・外上へろろナデ、外下・底落口ロクロナデ	赤漆	内外輪状況良好
450	土師器	無内輪 b-1	E11	c	20	縄路1	5e	11.9	4.2	6.0	白色系	右	土C	内・外上へろろナデ、外下・底落口ロクロナデ	見込み・底外輪磨削	内輪状況良好、赤土付化
451	土師器	無内輪 b-1	E11	d	2	縄路1	5e	11.8	4.4	4.9	赤色系	右	土E	内・外上へろろナデ、外下・底落口ロクロナデ	赤漆	内輪状況良好
452	土師器	無内輪 b-1	E11	d	11	縄路1	5e	12.9	5.3	5.4	白色系	右	土C	内外へろろナデ	赤漆	外輪状況良好
453	土師器	小瓶	E11	d	11	縄路1	5e	11.4	3.7	3.9	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	見込み・底外輪磨削	内輪状況良好、赤土付化
454	土師器	無内輪 a-1	E11	c	20	縄路1	5e	11.9	3.7	3.3	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	見込み・底外輪磨削	内輪状況良好、赤土付化
455	土師器	無内輪 a-1	E11	b	5	縄路1	5e	12.5	3.6	4.9	白色系	右	土C	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	見込みのみ磨削、口内面	赤土付化
456	土師器	無内輪 a-1	E11	c/e	20/11	縄路1	5e	11.8	3.9	5.1	赤色系	右	土D	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内輪状況良好
457	土師器	無内輪 a-1	E11	c/e	15・16/20/11	縄路1	5e	11.8	3.9	5.0	赤色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内外輪状況良好、赤土付化
458	土師器	無内輪 a-1	E11	d	11	縄路1	5e	12.1	3.7	6.0	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	見込み・口内磨削	外輪状況良好
459	土師器	無内輪 a-1	E11	c	30	縄路1	5e	12.0	4.0	6.6	白色系	右	土E	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	不明	底外輪状況良好
460	土師器	無内輪 a-1	E11	c	6	縄路1	5e	11.8	3.8	3.7	赤色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	見込み・底外輪磨削	内外輪状況良好
461	土師器	無内輪 a-1	E11	c	10	縄路1	5e	12.1	3.7	3.8	赤色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内輪状況良好
462	土師器	無内輪 a-1	E11	c/e	15/11	縄路1	5e	12.4	4.0	6.2	赤色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	見込み・底外輪磨削	内輪状況良好
463	土師器	無内輪 a-1	E11	c	20	縄路1	5e	13.0	4.0	4.8	白色系	右	土E	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	内面磨削付着物、見込み・底外輪磨削、口内面磨削	内輪状況良好
464	土師器	無内輪 a-1	E11	d	6	縄路1	5e	11.9	3.6	3.6	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	見込み・底外輪磨削	内輪状況良好
465	土師器	無内輪 a-1	E11	d	16	縄路1	5e	12.3	3.9	3.6	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内輪状況良好
466	土師器	無内輪 a-1	E11	d	1	縄路1	5e	12.5	3.9	5.0	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	見込み・底外輪磨削	内輪状況良好
467	土師器	無内輪 a-1	E11	c	10/11	縄路1	5e	12.2	4.0	6.0	赤色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	口内面磨削	内輪状況良好
468	土師器	無内輪 a-1	E11	d	16	縄路1	5e	12.4	3.9	5.0	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆?	内輪状況良好
469	土師器	無内輪 a-1	E11	d	6	縄路1	5e	12.0	4.0	3.0	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内輪状況良好
470	土師器	無内輪 a-1	E11	c	20	縄路1	5e	12.3	4.0	5.5	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内輪状況良好、赤土付化
471	土師器	無内輪 a-1	E11	c/e	20/6・11	縄路1	5e	12.7	4.0	4.8	白色系	右	土D	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	内面磨削付着物、見込み・口内・底外輪磨削?	内輪状況良好、赤土付化
472	土師器	無内輪 a-1	E11	c	20	縄路1	5e	12.5	3.7	5.0	赤色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	不明	内輪状況良好
473	土師器	無内輪 a-1	E11	c	15・20	縄路1	5e	12.4	4.2	4.8	白色系	右	土E	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	内面磨削付着物、見込みのみ磨削	内輪状況良好
474	土師器	無内輪 a-1	E11	c	20	縄路1	5e	12.7	4.3	5.3	白色系	右	土E	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	見込み・口内・底外輪磨削	内輪状況良好
475	土師器	無内輪 a-1	E11	c	20	縄路1	5e	12.1	4.0	5.3	赤色系	右	土E	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	見込み・底外輪磨削	内輪状況良好
476	土師器	無内輪 a-1	E11	c	30	縄路1	5e	12.8	4.2	5.0	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内輪状況良好
477	土師器	無内輪 a-1	E11	d	11	縄路1	5e	12.4	4.0	3.4	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	底外輪ナデ	見込み入底、底外輪状況良好
478	土師器	無内輪 a-1	E11	d	11	縄路1	5e	12.8	4.2	5.8	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	見込み入底、底外輪状況良好
479	土師器	無内輪 a-1	E11	d	6	縄路1	5e	11.9	4.2	5.2	赤色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内輪状況良好、赤土付化
480	土師器	無内輪 a-1	E11	d	16	縄路1	5e	12.6	4.3	5.5	赤色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内外輪状況良好、底外輪状況良好
481	土師器	小瓶	E11	d	6	縄路1	5e	11.4	4.0	5.8	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内輪状況良好
482	土師器	無内輪 a-1	E11	d	6	縄路1	5e	12.5	4.1	3.0	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	黒陶質?
483	土師器	無内輪 a-1	E11	d	6	縄路1	5e	12.4	4.0	5.5	赤色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内輪状況良好
484	土師器	無内輪 a-1	E11	c	15	縄路1	5e	12.1	4.0	5.5	赤色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	底外輪状況良好
485	土師器	無内輪 a-1	E11	c	15	縄路1	5e	12.4	4.3	5.0	赤色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内輪状況良好
486	土師器	無内輪 a-1	E11	d	16	縄路1	5e	12.2	4.1	5.4	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	口内面磨削	内輪状況良好
487	土師器	無内輪 a-1	E11	d	6	縄路1	5e	12.2	3.9	3.6	白色系	右	土E	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	底外輪磨削、内面磨削	底外・底外付化
488	土師器	無内輪 a-1	E11	c	30	縄路1	5e	12.5	4.2	5.6	赤色系	右	土A	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	見込み・底外輪磨削	内外輪状況良好
489	土師器	無内輪 a-1	E11	d	6	縄路1	5e	12.0	4.2	5.3	赤色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	赤漆	内輪状況良好
490	土師器	無内輪 a-1	E11	d	11	縄路1	5e	12.4	4.2	5.4	白色系	右	土B	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	内面磨削、見込み・底外・底外輪磨削	黒陶質?
491	土師器	無内輪 a-1	E11	d	11	縄路1	5e	11.9	4.0	5.4	赤色系	右	土D	内外ロクロナデ、底落口ロクロナデ	見込み・底外輪磨削	見込み・底外輪磨削、口内付化

観察表

土器・陶磁器観察表（古代）(13)

No.	種類	器種	グリップ 大 中 小	全長	口径	大きさ (cm)		色澤 肌目	傾斜 方向	前土 相対	調整	消費状態	形成状態	備考		
						口径	高さ									
492	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	10/6	底線 1	5e	12.1	4.1	4.8	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤	片割線状肌理	
493	土器類	無内脚 a 1	K11	d	6	底線 1	5e	12.3	4.3	5.4	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	菅原春雄様邸、口内 片割		
494	土器類	無内脚 a 1	K11	c	15	底線 1	5e	11.9	4.2	5.6	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤	内割線状肌理、片 割線状肌理	
495	土器類	無内脚 a 1	K11	d	6	底線 1	5e	12.5	4.3	5.9	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	内野直状存者物、見 込み・口内反仕		
496	土器類	無内脚 a 1	K11	d	6	底線 1	5e	12.3	4.4	5.6	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤	内割線状肌理	
497	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	15・20 /11	底線 1	5e	12.3	4.2	5.4	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	見込み摩耗		内外割線状肌理
498	土器類	無内脚 a 1	K11	d	17	底線 1	5e	12.3	4.3	5.8	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤?		内割
499	土器類	無内脚 a 1	K11	d	6	底線 1	5e	12.4	4.1	5.4	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤	見込み肌理、片 割赤化	
500	土器類	無内脚 a 1	K11	d	11	底線 1	5e	12.3	4.1	5.8	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤	見込み・片割赤 化	
501	土器類	無内脚 a 1	K11	d	11	底線 1	5e	11.8	4.2	6.6	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤	内割線状肌理、底 周回	
502	土器類	無内脚 a 1	K11	d	11	底線 1	5e	11.8	4.4	4.8	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤	内割線状肌理、片 割赤化	
503	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	15/11	底線 1	5e	12.0	4.4	5.8	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	不明		内外割線状肌理
504	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	10/8	底線 1	5e	12.3	4.4	6.7	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	見込み・片割、見込 赤化摩耗、口内反仕 存物		
505	土器類	無内脚 a 1	K11	b	8	底線 1	5e	12.0	4.3	5.0	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	不明		片割赤化
506	土器類	無内脚 a 1	K11	d	6	底線 1	5e	12.3	4.4	5.6	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		内外割赤化
507	土器類	無内脚 a 1	K11	d	12	底線 1	5e	12.0	4.6	5.2	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		片割赤化
508	土器類	無内脚 a 1	K11	d	11	底線 1	5e	11.9	4.6	5.0	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		片割赤化
509	土器類	無内脚 a 1	K11	f	3	底線 1	5e	12.2	4.5	5.0	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	見込み・口内・底周 赤化摩耗		
510	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	20/11	底線 1	5e	11.6	4.2	5.3	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	見込み・底周赤化摩 耗		内外割線状肌理、 片割線状肌理
511	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	16	底線 1	5e	11.7	4.4	5.4	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		内割線状肌理
512	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	20・25/8	底線 1	5e	11.8	4.7	5.6	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り、内面シヤミ 線跡	赤澤		片割赤化
513	土器類	無内脚 a 1	K11	e	10	底線 1	5e	11.9	4.1	5.2	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		片割赤化
514	土器類	無内脚 a 1	K11	d	11	底線 1	5e	11.9	4.5	5.1	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		内割線状肌理、片 割赤化
515	土器類	無内脚 a 1	K11	d	6	底線 1	5e	11.8	4.5	5.2	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	内野直状存者物、見 込み・口内・底周赤 化摩耗		内外割線状肌理、片 割赤化
516	土器類	無内脚 a 1	K11	d	6	底線 1	5e	12.5	5.0	5.2	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	見込み・口内・底周 赤化摩耗		内割赤化、片割赤 化
517	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	15	底線 1	5e	12.0	4.4	5.7	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	見込み磨耗・摩耗、片 割赤化		内割線状肌理、片 割赤化
518	土器類	無内脚 a 1	K11	d	16	底線 1	5e	12.1	4.4	5.7	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	口内反仕存物		底周赤化
519	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	20/13	底線 1	5e	13.0	4.2	6.3	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		内外割赤化
520	土器類	無内脚 a 1	K11	c	20	底線 1	5e	12.7	4.7	5.4	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周 回敷布留り	内野直状		片割赤化
521	土器類	無内脚 a 1	K11	c	20	底線 1	5e	12.2	4.1	4.1	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	見込み磨耗・摩耗、口 内反仕存物		内割線状肌理、片 割赤化
522	土器類	無内脚 a 1	K11	e	25	底線 1	5e	12.3	4.3	4.8	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		片割赤化
523	土器類	無内脚 a 1	K11	d	6	底線 1	5e	11.9	4.5	5.4	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	菅原春雄様邸		
524	土器類	無内脚 a 1	K11	d	16	底線 1	5e	12.4	4.6	4.6	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		内外割線状肌理、 片割赤化
525	土器類	無内脚 a 1	K11	d	3	底線 1	5e	13.4	4.5	6.2	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	口内反仕存物		
526	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	20・25/ 21	底線 1	5e	12.1	4.6	5.6	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		片割赤化
527	土器類	無内脚 a 1	K11	d	11	底線 1	5e	12.8	4.3	6.1	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	見込み・底周赤化摩 耗、内野反仕		片割赤化
528	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	15/16	底線 1	5e	12.7	4.0	5.6	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		底周赤化
529	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	15/13	底線 1	5e	13.3	4.4	5.6	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	内野直状存者物、見 込み磨耗、片割赤化		片割赤化
530	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	11/20	底線 1	5e	13.0	4.4	5.4	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		片割赤化
531	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	10/6	底線 1	5e	12.6	4.5	6.0	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		内外割赤化
532	土器類	無内脚 a 1	K11	c	15	底線 1	5e	13.4	4.3	5.0	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	菅原春雄様邸		内外割線状肌理
533	土器類	無内脚 a 1	K11	c10	15/1	底線 1	5e	12.7	4.3	5.6	赤色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	口内反仕存物		内外赤化
534	土器類	無内脚 a 1	K11	d	12	底線 1	5e	13.0	4.2	5.4	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	見込み磨耗		
535	土器類	無内脚 a 1	K11	e	15	底線 1	5e	13.2	4.0	4.6	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	見込み・底周赤化摩 耗		内外割赤化
536	土器類	無内脚 a 1	K11	d	2	底線 1	5e	13.2	4.4	5.0	白色系	右 上 土	内外口フロナデ、底周回 敷布留り	赤澤		底周赤化

土器・陶磁器観察表（古代）(14)

No.	種類	図柄	サイズ(mm)		器種	大きさ (cm)			釉薬 施装 状況	胎土 色調	調整	消費地群	産出地群	備考	
			大	小		口径	高さ	底径							
537	土師器	無内輪 a-1	E11	d 6	底鉢	5e	12.5	4.4	5.4	赤褐色	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤?	内輪無施装
538	土師器	無内輪 a-1	E11	c 15	底鉢	5e	12.8	4.5	5.7	赤褐色	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	不明(厚底)	内輪無施装, 既 外施装
539	土師器	無内輪 a-1	E11	d 16	底鉢	5e	12.8	4.8	5.4	赤褐色	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	内外無化
540	土師器	無内輪 a-1	E11	c 20	底鉢	5e	13.1	4.3	5.3	白色系	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	内外無化
541	土師器	無内輪 a-1	E11	c14 10-15 /6	底鉢	5e	13.0	4.4	5.6	白色系	右	上D	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	見込み・既外輪 転載あり	内外無化
542	土師器	無内輪 a-1	E11	c18 10/6	底鉢	5e	12.8	4.4	5.8	白色系	右	上B	内外ロクロナデ	見込み厚底, 内外 無化	
543	土師器	無内輪 a-1	E11	d 16	底鉢	5e	12.8	4.5	5.6	白色系	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	内輪無施装 既外施装, 内外 無化
544	土師器	無内輪 a-1	E11	d 6	底鉢	5e	12.9	4.3	6.0	白色系	右	上D	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	見込み・既外輪 転載あり	内輪無施装, 既 外施装
545	土師器	無内輪 a-1	E11	h 5	底鉢	5e	12.7	4.4	5.3	赤褐色	右	上D	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	不明	内外無化
546	土師器	無内輪 a-1	E11	d 2-6	底鉢	5e	12.6	4.5	5.4	赤褐色	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	内外無化
547	土師器	無内輪 a-1	E11	c 10	底鉢	5e	12.5	4.5	5.4	赤褐色	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	内外無化
548	土師器	無内輪 a-1	E11	c18 10/6	底鉢	5e	13.0	4.8	5.5	白色系	右	上C	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤?	外輪無施装
549	土師器	無内輪 a-1	E11	k 17	底鉢	5e	13.1	4.6	5.8	白色系	右	上C	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	見込み内・厚底	内無化
550	土師器	無内輪 a-1	E11	d 6	底鉢	5e	13.2	4.9	5.3	白色系	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	内面・既外輪 転載あり	内輪無施装, 外 無化
551	土師器	無内輪 a-1	E11	c 25	底鉢	5e	11.8	4.4	5.4	白色系	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	内外無化
552	土師器	無内輪 a-1	E11	l 3	底鉢	5e	12.6	4.8	5.5	白色系	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	内無化
553	土師器	無内輪 a-1	E11	c18 15/11	底鉢	5e	12.5	5.0	6.3	赤褐色	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	見込み厚底	既外無化
554	土師器	無内輪 a-1	E11	d 16	底鉢	5e	12.7	4.8	5.4	白色系	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	内輪無施装
555	土師器	無内輪 a-1	E11	d 6	底鉢	5e	12.4	5.2	5.1	赤褐色	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	内外無化
556	土師器	無内輪 a-1	E11	d 6	底鉢	5e	12.2	4.3	6.3	白色系	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	既外輪 転載あり	内輪無施装, 外 輪無施装
557	土師器	無内輪 a-1	E11	c 15	底鉢	5e	14.5	5.5	6.0	赤褐色	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	内外灰化	外無化, 赤化
558	土師器	無内輪 b-1	E11	h 5	底鉢	5e	13.9	5.7	6.4	白色系	右	上C	内外・既外へ 転載あり	香澤	内輪無施装, 既 外輪無施装
559	土師器	無内輪 a-1	E11	d 2	底鉢	5e	13.4	4.7	6.2	白色系	右	上D	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	口内外灰化	既外無化
560	土師器	無内輪 a-1	E11	c 15	底鉢	5e	14.3	4.6	6.5	赤褐色	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	不明	
561	土師器	無内輪 a-1	E11	d 6	底鉢	5e	14.2	4.9	6.3	白色系	右	上D	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	見込み・既外輪 転載あり	内輪無施装, 遺 無化
562	土師器	無内輪 a-1	E11	c 15	底鉢	5e	13.7	4.7	6.0	白色系	右	上D	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	香澤
563	土師器	無内輪 a-1	E11	d 6	底鉢	5e	13.5	4.7	5.6	白色系	右	上C	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	
564	土師器	無内輪 a-1	E11	c18 15-20/ 11	底鉢	5e	14.6	4.4	5.8	白色系	右	上E	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	既外輪 転載あり	既外輪無施装・厚 底, 口内外灰化
565	土師器	無内輪 a-1	E11	d 6	底鉢	5e	14.9	4.7	6.0	白色系	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	見込み・既外輪 転載あり, 口内外 灰化	内外無施装
566	土師器	無内輪 a-1	E11	c18 20/16	底鉢	5e	14.1	5.1	5.4	白色系	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	内外灰化	
567	土師器	無内輪 a-1	E11	h 5	底鉢	5e	14.4	5.0	6.0	白色系	右	上E	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	内外無化	
568	土師器	無内輪 a-1	E11	h 5	底鉢	5e	14.4	5.8	6.0	赤褐色	右	上F	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	内輪無施装, 外 無化
569	土師器	無内輪 a-1	E11	c 20	底鉢	5e	15.5	5.9	5.9	白色系	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	見込み・既外輪 転載あり, 既外 無化	既外無化
570	土師器	無内輪 b-1	E11	c14 25/18	底鉢	5e	15.4	4.9	6.1	白色系	右	上A	内外・赤上ロクロナ デ, 既外ロクロナ デ, 既外輪 転載あり	内小口無 内外灰化	既外無化
571	土師器	無内輪 b-1	E11	d 1	底鉢	5e	15.1	5.3	5.4	白色系	右	上C	内外・赤上ロクロナ デ, 既外ロクロナ デ, 既外輪 転載あり	見込み・内 既外輪 転載あり	内無化
572	土師器	無内輪 b-1	E11	d 16	底鉢	5e	15.2	5.5	6.6	白色系	右	上C	内外・赤上へ 転載あり	香澤	内輪無施装
573	土師器	無内輪 a-1	E11	d 1	底鉢	5e	15.3	4.9	6.6	白色系	右	上E	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	外無化, 赤 無化
574	土師器	無内輪 a-1	E11	c 10-15	底鉢	5e	15.4	5.0	6.8	赤褐色	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤?	内外無化
575	土師器	無内輪 a-1	E11	c 15-20	底鉢	5e	15.3	4.9	6.0	白色系	右	上C	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤?	既外無化
576	土師器	無内輪 a-1	E11	c18 10-15/ 6	底鉢	5e	15.4	5.3	6.7	白色系	右	上D	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	見込み・既外輪 転載あり, 口内外 灰化	内外無化
577	土師器	無内輪 a-1	E11	d 2	底鉢	5e	15.4	5.2	5.3	白色系	右	上B	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	内輪無施装, 外 無化
578	土師器	無内輪 a-1	E11	d 6	底鉢	5e	15.1	5.2	6.6	赤褐色	右	上D	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤?	内外無化
579	土師器	無内輪 a-1	E11	c 20-25	底鉢	5e	15.7	5.5	6.8	赤褐色	右	上D	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	香澤	
580	土師器	無内輪 a-1	E11	d 16	底鉢	5e	15.2	5.5	5.6	赤褐色	右	上D	内外ロクロナデ, 既焼 転載あり	内外灰化	外輪無施装, 赤 無化, 内輪無施 装

観察表

土器・陶磁器観察表 (古代) (15)

No.	種類	器種	口径φ		用途	大きさ (cm)			施彩	出土 場所	調整	消費材料	製造材料	備考	
			大	小		口径	高さ	底径							
581	土師器	無内輪a	III d	1-2	底径 1	5e	15.3	5.4	5.9	白色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	赤漆	底外縁部、赤化
582	土師器	無内輪a	III d	1	底径 1	5e	15.6	5.9	6.6	赤色系	右	上D	内外口フノリ字、底外輪転削面	赤漆	内外縁部
583	土師器	無内輪a	III d	16	底径 1	5e	15.4	5.6	5.8	白色系	右	上D	内外口フノリ字、底外輪転削面	不明	内外縁部
584	土師器	無内輪a	III c/d	10/6	底径 1	5e	15.6	5.0	6.0	赤色系	右	上D	内外口フノリ字、底外輪転削面	不明	底外縁部
585	土師器	無内輪a	III d	1	底径 1	5e	15.5	5.7	6.0	白色系	右	上E	内外口フノリ字、底外輪転削面	赤漆	内縁部、底外縁部
586	土師器	無内輪a	III c/d	10・15/6	底径 1	5e	15.4	5.2	5.8	白色系	右	上E	内外口フノリ字、底外輪転削面	見込み・底外縁部、口内縁部	内外縁部
587	土師器	無内輪a	III c/d	20/11・16	底径 1	5e	15.5	5.6	6.8	白色系	右	上D	内外口フノリ字、底外輪転削面	見込み、口内縁部	底外縁部?
588	土師器	無内輪a	III d	6	底径 1	5e	15.0	5.5	6.4	赤色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	見込み、口内縁部、口内縁部	赤漆部
589	土師器	無内輪a	III d	11	底径 1	5e	14.8	5.5	6.7	白色系	右	上C	内外口フノリ字、底外輪転削面	底外縁部	赤漆部
590	土師器	無内輪a	III c/d	15/11	底径 1	5e	15.0	5.4	6.7	赤色系	右	上D	内外口フノリ字、底外輪転削面	赤漆?	内外赤化
591	土師器	無内輪a	III d	1	底径 1	5e	15.2	5.5	6.0	白色系	右	上E	内外口フノリ字、底外輪転削面	赤漆	
592	土師器	無内輪a	III f	1	底径 1	5e	15.0	5.4	6.0	白色系	右	上E	内外口フノリ字、底外輪転削面	見込み・底外縁部	赤漆部
593	土師器	無内輪a	III d	2・7	底径 1	5e	15.3	5.6	6.4	赤色系	右	上D	内外口フノリ字、底外輪転削面	見込み、口内縁部	内縁部、底外縁部、赤化
594	土師器	無内輪a	III d	11	底径 1	5e	15.5	5.6	6.2	白色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	口内縁部	内外縁部、底外縁部
595	土師器	無内輪a	III c/d	20/16	底径 1	5e	15.0	6.0	6.1	白色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	見込み・底外縁部	内外赤化、赤化
596	土師器	無内輪a	III c	20	底径 1	5e	15.2	6.3	7.1	白色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	見込み・底外縁部、口内縁部	内外赤化、赤化
597	土師器	無内輪a	III c	20	底径 1	5e	15.0	5.7	6.0	白色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	赤漆	内縁部、底外縁部
598	土師器	無内輪a	III c	16	底径 1	5e	15.2	6.2	6.4	赤色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	見込み・底外縁部	底外縁部、赤化
599	土師器	無内輪a	III c/d	10/1-6	底径 1	5e	15.1	6.2	6.6	白色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	見込み・口内・底外縁部	底外縁部
600	土師器	無内輪a	III b	20	底径 1	5e	16.1	4.4	6.5	白色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	見込み・底外縁部	赤漆部
601	土師器	無内輪a	III d	11	底径 1	5e	16.2	5.3	7.0	赤色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	見込み・底外縁部	内縁部
602	土師器	無内輪a	III d	1	底径 1	5e	16.3	5.5	6.9	白色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	赤漆	内縁部
603	土師器	無内輪a	III d	6	底径 1	5e	16.2	5.3	6.5	赤色系	右	上D	内外口フノリ字、底外輪転削面	赤漆	内外縁部
604	土師器	無内輪a	III d	11	底径 1	5e	16.4	5.4	5.4	白色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	口内縁部	赤化
605	土師器	無内輪a	III d	16	底径 1	5e	16.0	5.5	5.6	白色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	口内縁部	内外縁部、赤化
606	土師器	無内輪a	III d	16	底径 1	5e	16.8	5.6	6.5	白色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	赤漆	底外赤化
607	土師器	無内輪b V a	III f 17D	X/a	17/24	底径 1	5e	7.1	7.1	白色系	右	上C	内外・底外ヘラミガキ	赤・口内縁部	
608	土師器	無内輪b V	III c/d	10/6	底径 1	5e	17.9	6.9	6.4	白色系	右	上B	内外ヘラミガキ、再上ロノリ字、再下ロノリ字、底外縁部	見込み・底外縁部	底外赤化
609	土師器	無内輪b V	III d	1	底径 1	5e	18.0	6.4	7.0	白色系	右	上C	再上・内外ヘラミガキ、再中ロノリ字、再下・底外縁部	赤漆	内縁部
610	土師器	無内輪b V	III d	6	底径 1	5e	17.4	7.0	6.7	白色系	右	上C	再上・内外ヘラミガキ、再中ロノリ字、再下ロノリ字、底外縁部	見込み・再中・底外縁部	内外縁部
611	土師器	無内輪a V	III c	20	底径 1	5e	17.3	6.3	6.5	白色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	赤漆	内外縁部
612	土師器	無内輪b V b	III c/d	10・15/20/11	底径 1	5e	19.3	6.9	6.9	赤色系	右	上E	内・再上ヘラミガキ、再下・底外ロノリ字	赤漆、口内・見込み	赤化
613	土師器	無内輪b V b	III d	18・17・21	底径 1	5e	20.4	6.8	6.4	赤色系	右	上B	内・再上ヘラミガキ、再下・再下ロノリ字	不明	内赤化、底外赤化
614	土師器	無内輪a V	III d	11	底径 1	5e	19.8	7.2	6.6	赤色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	赤漆	内縁部、再縁部、底外赤化、底外赤化
615	土師器	無内輪a V	III c	20・25	底径 1	5e	19.3	7.0	6.6	赤色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	見込み、口内縁部	内外縁部、再縁部、赤化
616	黒土土師器	無内輪出	III c/d	10/1-6	底径 1	5e	17.0	6.2	5.7	白色系	右	上B	内・再上ヘラミガキ、再下・底外ロノリ字	赤漆	口内赤化、底外縁部
617	黒土土師器	無内輪出	III d	1	底径 1	5e	16.4	5.4	5.9	白色系	右	上C	内・再上ヘラミガキ、再下・底外ロノリ字	赤漆	口内赤化、再縁部、底外縁部
618	黒土土師器	無内輪出	III c	1-25	底径 1	5e	16.3	5.2	5.7	赤色系	右	上B	内外口フノリ字、底外輪転削面	赤漆	内縁部、再縁部、底外赤化、再下縁部
619	黒土土師器	無内輪出	III c/d	10/6・11	底径 1	5e	15.6	5.2	5.8	赤色系	右	上B	再上・内外ヘラミガキ、再中ロノリ字、再下・底外ロノリ字	赤漆?	口内赤化、底外縁部
620	黒土土師器	無内輪出	III c/d	15/11	底径 1	5e	16.6	5.4	5.8	白色系	右	上B	再上・内外ヘラミガキ、再下・底外ロノリ字	赤漆	口内赤化、再下縁部
621	黒土土師器	無内輪出	III d	2	底径 1	5e	16.7	5.5	6.1	白色系	右	上B	再上・内外ヘラミガキ、再下・底外ロノリ字	赤漆	口内赤化、再下縁部
622	黒土土師器	無内輪出	III c/d	20/11	底径 1	5e	16.0	5.1	6.2	白色系	右	上C	再上・内外ヘラミガキ、再中ロノリ字、再下・底外ロノリ字	見込み・口内・再下・底外縁部	口内赤化、底外赤化、底外赤化

土器・陶磁器観察表 (古代) (16)

No.	種類	図柄	グワツフ		口径	高さ	大きさ (cm)		色澤	胎土	前土	用途	消費地跡	産出地跡	備考	
			大	小			口径	高さ								
623	黒色土器	無内輪	E11 d	16	底縁 1	5e	16.4	5.3	5.6	白色系	右	上 B	外上・内へラミガキ、外下・底縁口クロナデ	見込み・内側・摩耗	口内曇色、底外縁状底面	
624	黒色土器	無内輪	E11 h	10/5	底縁 1	5e	16.8	5.2	6.3	白色系	右	上 B	外上・内へラミガキ、外下・底縁口クロナデ	底外縁摩耗	口内曇色、底外縁状底面	
625	黒色土器	無内輪	E11 c	15/6・11	底縁 1	5e	16.5	5.2	6.4	白色系	右	上 C	外上・内へラミガキ、外下・底縁口クロナデ	見込み摩耗	口内曇色	
626	黒色土器	無内輪	E11 c	20・25	底縁 1	5e	16.0	5.7	6.1	白色系	右	上 B	外上・内へラミガキ、外下・底縁口クロナデ	見込み・内側・摩耗	口内曇色、底外縁状底面	
627	黒色土器	無内輪	E11 c	15・20	底縁 1	5e	15.7	5.3	6.1	白色系	右	上 B	外上・内へラミガキ、外下・底縁口クロナデ	見込み・底外縁摩耗	口内曇色、底外縁状底面	
628	黒色土器	無内輪	E11 c	20	底縁 1	5e	15.8	5.3	6.2	赤色系	右	上 B	外上・内へラミガキ、外下・底縁口クロナデ	底外縁	口内曇色、底外縁状底面	
629	黒色土器	無内輪	E11 d	11	底縁 1	5e	15.5	5.8	6.1	赤色系	右	上 C	外上・内へラミガキ、外下口クロナデ、底外縁状底面	底外縁摩耗	口内曇色、底外縁状底面	
630	黒色土器	無内輪	E11 c	20	底縁 1	5e	15.2	5.5	5.9	白色系	右	上 B	内へラミガキ、外上口クロナデ、外下・底縁口クロナデ	底外縁摩耗	口内曇色、底外縁状底面	
631	黒色土器	無内輪	E11 d	21	底縁 1	5e	15.6	5.5	5.6	白色系	右	上 C	内上・外上へラミガキ、外下口クロナデ、底外縁状底面	見込み・底外縁摩耗	口内曇色、底外縁状底面	
632	黒色土器	無内輪	E11 c	15・20	底縁 1	5e	15.5	5.4	5.7	赤色系	右	上 B	内上・外上へラミガキ、外下口クロナデ	底外縁摩耗	口内曇色、底外縁状底面	
633	黒色土器	無内輪	E11 d	1・6	底縁 1	5e	14.7	4.6	6.1	白色系	右	上 C	内上・外上へラミガキ、外下口クロナデ、底外縁状底面	見込み・底外縁摩耗	口内曇色、底外縁状底面	
634	黒色土器	無内輪	E11 c	15・20 25/11	底縁 1	5e	20.6	7.5	7.2	赤色系	右	上 C	内上・外上へラミガキ、外下口クロナデ	外下摩耗、底外小部	底外縁状底面	
635	黒色土器	無内輪	E11 c	15・20 11	底縁 1	5e	19.5	6.9	6.6	赤色系	右	上 B	内上・外上へラミガキ、外下口クロナデ	底外縁摩耗、外底面	口内曇色無し	
636	黒色土器	無内輪	E11 c	6/6・11	底縁 1	5e	18.6	7.1	7.4	白色系	右	上 C	内外へラミガキ、底外縁状底面	見込み・底外縁摩耗	口内曇色、底外縁状底面	
637	土師器	無内輪	E11 c	20	底縁 1	5e	13.5	2.8	6.0	白色系	右	上 B	内上・外上口クロナデ、外下口クロナデ	見込み・底外縁摩耗	口内曇色、底外縁状底面	
638	灰土器	土師器	E11 c	15	底縁 1	5e	7.6	18.6	7.3	燻煙	左	前 B	内上・外上口クロナデ、外下口クロナデ、高台付付縁口クロナデ	底外縁	口内曇色	
639	灰土器	土師器	E11 d	6	底縁 1	5e	6.0	13.8	6.2	燻煙	右	前 C2	内上・外上口クロナデ、外下口クロナデ、高台付付縁口クロナデ	底外縁	口内曇色	
640	灰土器	土師器	E11 c	15	底縁 1	5e	11.9			燻煙	前 C2	内外口クロナデ	不明	底外		
641	土師器	小笠形	E11 c	10/20	底縁 1	5e	11.3	11.0	5.4	白色系	右	上 D	内外口クロナデ、底外縁状底面	内面底状付着物、外底面	口内曇色	最大径 11.4cm
642	土師器	小笠形	E11 c	15/11	底縁 1	5e	10.0	10.1	4.8	白色系	右	上 D	内外口クロナデ、底外縁状底面	外底、口内曇色	最大径 9.8cm	
643	土師器	小笠形	E11 c	15/11	底縁 1	5e	5.2	10.1	5.2	白色系	右	上 D	内外口クロナデ、底外縁状底面	内面底状付着物、外底面	口内曇色	
644	土師器	小笠形	E11 y	22	底縁 1	5e	7.2			白色系	右	上 B	内外口クロナデ	口内汚	645と同じ	
645	土師器	小笠形	E11 x	17	底縁 1	5e	3.1			白色系	右	上 B	内外口クロナデ、底外下	不明	644と同じ	
646	土師器	小笠形	E11 c	10	底縁 1	5e	18.5	20.8	9.8	赤色系	右	上 B	内外カケメ・口クロナデ、外上・外下口クロナデ、外下底外へラミガキ	内面底状付着物、口内曇色、底外縁状底面	底外縁状底面、底外赤色	最大径 18.5cm
647	土師器	小笠形	E11 c	20	底縁 1	5e	20.0			赤色系	右	上 B	内外口クロナデ			
648	灰土器	無内輪	E11 k	11・12	底縁 2	5c	12.3	3.3	7.3	燻煙	左	前 B	内外口クロナデ、底外縁状底面	見込み・口内・底外縁状底面、底外赤色「方口」正交	底外縁状底面	最大径 9.1cm
649	灰土器	無内輪	E11 n	1	底縁 1	5e	12.2	3.1	7.1	燻煙	右	前 B	内外口クロナデ、底外縁状底面	内面底状付着物、見込み・口内・底外縁状底面	底外縁状底面	
650	土師器	無内輪	E11 h	7	底縁 1	5e	12.0	3.6	6.0	白色系	右	上 E	内上・外上口クロナデ、外下・底縁口クロナデ	見込み・口内・底外縁状底面	内外赤色	
651	土師器	無内輪	E11 n	12	底縁 1	5d	12.0	3.9	6.3	白色系	右	上 E	内外口クロナデ、底外縁状底面	内面底状付着物、見込み・口内・底外縁状底面	内外赤色	
652	土師器	無内輪	E11 x	16	底縁 2	5e	12.0	4.2	5.8	白色系	右	上 B	内外口クロナデ、底外縁状底面、見込みツヤ状底	底外縁	底外縁状底面、底外赤色	
653	土師器	無内輪	E11 n	1	底縁 1	5e	12.3	4.4	5.4	白色系	右	上 B	内外口クロナデ、底外縁状底面	不明	内外赤色	
654	土師器	無内輪	E11 k	18	底縁 2	5e	16.4	5.1	6.0	白色系	右	上 C	内外へラミガキ、底外縁口クロナデ	内底面底状付着物	内外赤色	
655	土師器	無内輪	E11 k	12	底縁 2	5e	13.4	5.0	5.2	白色系	右	上 C	内外・底外へラミガキ	底外縁状底面		
656	土師器	無内輪	E11 k	12	底縁 2	5e	12.0	4.0	5.0	赤色系	右	上 D	内外口クロナデ、底外縁状底面	内面底状付着物、見込み・口内・底外縁状底面	内外赤色	
657	土師器	無内輪	E11 n	1	底縁 1	5e	13.1	4.7	5.3	赤色系	右	上 B	内外口クロナデ、底外縁状底面	不明	底外赤色	
658	土師器	無内輪	E11 n	1	底縁 1	5c	13.2	4.3	4.9	赤色系	右	上 E	内外口クロナデ、底外縁状底面	内面底状付着物	内外赤色	
659	土師器	無内輪	E11 n	1	底縁 1	5e	13.5	4.2	5.6	赤色系	右	上 E	内外口クロナデ、底外縁状底面	内面底状付着物、見込み・底外縁状底面	内外赤色	
660	黒色土器	鉢状高台	E11 n	1	底縁 1	5e	25.0	14.6	9.4	白色系	右	上 B	内外へラミガキ、外上カケメ・外下へラミガキ、底外下底面	内外少底面	口内曇色、底外縁状底面	
661	土師器	鉢状高台	底縁 1 X 2		底縁 1	5	8.4			白色系	右	上 B	内外口クロナデ	底外	口内曇色	
662	土師器	小笠形	E11 k	22	底縁 2	5c	10.1			白色系	右	上 A	内外口クロナデ	不明	口内曇色	

観察表

土器・陶磁器観察表(古代)(17)

No.	種別	図柄	サイズ(mm)			用途	群位	大きさ(mm)			色澤	胎土	焼成	出土	調査	消費品群	産出群	備考
			大	中	小			口径	高さ	底径								
663	土師器	長頸瓶E11	k	12-10-17-22	底径2	5e	23.2				赤色系		土師	内上ロクロナデ、内下同心内帯で長頸ナデ、外上平口部を帯ロクロナデで作り、外中へウラナデで外下胎子用き	外帯	外帯群		
664	灰土器	狭口E11	k	12・23	底径2	5c	(67.0)				褐色		灰C2	口ロクロナデ、体角平行相、体底面は内帯にて内・外上ロクロナデ、外下ロクロナデ、見込み胎子用き、高内帯は口ロクロナデ、底面胎子用き	不明	狭口群		
665	灰土器	有内帯V	H11	v	22	底径1	7e	15.6	6.9	8.6	褐色	石	灰C3	内・外上ロクロナデ、外下胎子用き、高内帯は口ロクロナデ、見込み胎子用き、高内帯は口ロクロナデ、底面胎子用き	見込み・高内帯群	内帯無施		
666	土師器	無内帯b1	D11	v	21	底径1	6	11.8	3.9	5.9	赤色系	石	土師	内・外上ロクロナデ、外下胎子用き、底面胎子用き	赤土	白帯群		
667	黒色土器	杯A2	E11	q	17	底径2	8			7.0	白色系			内・外上ロクロナデ、外下胎子用き	赤土	底帯群		
668	土師器	鉢A	E11	k/p	17-22/4	底径2	8	13.7	14.3	6.3	白色系		土師	外・内上ロクロナデ、外下胎子用き、底面胎子用き	赤土	底帯群		
669	灰土器	狭口瓶E11	k	12/17/4/6/23	V	15.6	5.1	5.9			褐色	石	京都	内・外上ロクロナデ、外下胎子用き	高台群	内帯無施		
670	灰土器	瓶E11	c	23	底	13.6					褐色		美濃	内外ロクロナデ	赤土	赤土群		
671	灰土器	高内帯E11	q	18	底	6.1					褐色		美濃	内外ロクロナデ	赤土	赤土群		
672	灰土器	高内帯E11	q	14	底	5.3					褐色		美濃	内外ロクロナデ	赤土	赤土群		
673	灰土器	高内帯E11	q	21	V					4.4	褐色		美濃	内ロクロナデ、外・底面ロクロナデ、高内帯は口ロクロナデ	赤土	赤土群		
674	灰土器	無内帯E10	v	4	底	12.9					褐色		美濃	内外ロクロナデ	赤土	赤土群		
675	土師器	無内帯b1	E11	v	12		12.2	4.8	7.2	赤色系	石	土師	内・外上ロクロナデ、外下胎子用き	内帯無施	赤土	赤土群		
676	河内黒色土器	瓶E11	v	16	V	17.1	4.3	2.9			褐色		土師	内外上ロクロナデ	赤土	赤土群		
677	灰土器	鉢E10	m/f	21/14	V	27.6					褐色		灰C2	内外ロクロナデ	不明			
678	灰土器	鉢E10	l	13	V	20.8					褐色		美濃	内外ロクロナデ	白帯群			
679	灰土器	杯E10	v	14・18/6/23	底	12.3					褐色	石	灰C2	頂部ロクロナデ、外下内ロクロナデ	内帯無施	赤土	赤土群	
678	灰土器	有内帯E11	v	12	底	14.0	6.3	8.0			褐色	左	美濃	内外ロクロナデ、底面胎子用き、高内帯は口ロクロナデ	見込み・内・底面胎子用き	内帯無施		
679	灰土器	有内帯E11	v	24	底	13.4					褐色	右	美濃	内外ロクロナデ	口内帯群	内帯無施		
680	灰土器	有内帯E11	v	2-3・7	底	12.4	3.2	8.9			褐色	灰C1	内外ロクロナデ、底面胎子用き	赤土	内帯群			
681	灰土器	有内帯E11	v	23/2	底	12.0	3.3	8.2			褐色	灰B	内外ロクロナデ、底面胎子用き	内帯無施	赤土	赤土群		
682	灰土器	無内帯E11	v	2	底	12.4	2.8	8.0			褐色	石	美濃	内外ロクロナデ、底面胎子用き	見込み・内・底面胎子用き	赤土	赤土群	
683	土師器	小壺E11	v	2	底					5.3	赤色系	石	土師	内・外上ロクロナデ、外下胎子用き	外帯、内帯			
684	土師器	小壺E11	v	2-3・6	底	11.0	3.7	6.1			白色系	石	土師	内外ロクロナデ、底面胎子用き	不明			
685	土師器	無内帯a1	H11	l	9	底	1	3.0			白色系	石	土師	内外ロクロナデ、底面胎子用き	厚底で不明			
686	土師器	無内帯a1	H5	p	7	底	2	5.0			白色系	石	土師	内外ロクロナデ、底面胎子用き	底面胎子用き	内・底面胎子用き		
687	土師器	有内帯E11	G1E		SX2	10.9	5.2	6.5			褐色		美濃	内外ロクロナデ、底面胎子用き、高内帯は口ロクロナデ	見込み・内・高内帯胎子用き、高内帯胎子用き	赤土	赤土群	
688	土師器	長頸瓶E11	G1E		SX2	21.8					白色系		土師	内外ロクロナデ	赤土	赤土群		
689	土師器	長頸瓶E11	G1E		SX2	23.0					白色系		土師	内外ロクロナデ	不明			
690	土師器	無内帯a1	H5	p	24	底	3	12.8	4.0	5.4	赤色系	石	土師	内外ロクロナデ、底面胎子用き	厚底で不明			
691	土師器	無内帯a1	H5	p	24	底	3	12.8	3.7	5.0	赤色系	石	土師	内外ロクロナデ、底面胎子用き	赤土	白帯群		
692	土師器	杯A4	H5	l	24	底	2	13.7	4.5	11.7	白色系	土師	土師	内外ナデ・胎子用き、胎子用き	赤土	赤土群		
693	土師器	無内帯b1	E2	p	22	底	4	6.6			白色系	石	土師	外上・内ロクロナデ、外下・底面胎子用き	不明			
694	土師器	無内帯a1	G1E		SX3			6.1			赤色系	石	土師	内外ロクロナデ、底面胎子用き	不明			
695	土師器	無内帯E11	G1E		SX4			7.4			褐色		美濃	内外ロクロナデ、底面胎子用き	赤土	赤土群		
696	灰土器	狭口瓶E11	d	6	底			6.8			褐色		美濃	内帯、口縁部外帯ロクロナデ、頂部ロクロナデ	内帯群、頂部群			
697	灰土器	杯E11	b/v	4/15/18	底	11.8					褐色	石	灰C2	内・外上ロクロナデ	内帯群			
698	灰土器	杯E11	p	10	底			2.8			褐色	石	灰C2	頂部ロクロナデ、胎子用き、高内帯は口ロクロナデ、外下胎子用き	内・胎子用き			
699	灰土器	有内帯E11	m	17-19/23/19/24	底	12.0	3.8	7.7			褐色	灰C1	内外ロクロナデ、底面胎子用き、高内帯は口ロクロナデ	口内・見込み・高内帯胎子用き				
700	灰土器	無内帯E11	p	21	底	12.4	3.3	8.9			褐色	石	灰C2	外上・内ロクロナデ、外下・底面胎子用き	不明			
701	黒色土器	杯A2	H5	v	16-17	底		9.0			赤色系	土師	内上ロクロナデ、外下胎子用き	赤土	底帯群			
702	土師器	無内帯a1	H5	p	2	底		12.3	3.8	5.0	赤色系	石	土師	内外ロクロナデ、底面胎子用き	不明			

土器・陶磁器観察表 (古代) (18)

No.	種類	図柄	グリップ			用途	大きさ (cm)			色澤	胎土	前土	調整	消費材料	成形材料	備考
			大	中	小		口径	高さ	底径							
783	土器	製内輪 a1	H7	b	5	流路	上	12.7	4.0	5.1	赤褐色	右	上下	内径ロクロナデ, 底外周転車取り	不明	内径赤色
784	灰土器	手づくね土器	14	a	4	古野		4.2			濃緑		縦一	手づくね?	赤漆?	内径緑漆
785	土器	五輪盤	14	d	14	古野		10.4			濃緑		縦C2	内径ロクロナデ	流路? 高台版り付け流ロクロナデ	流路上下版厚肌
786	土器	赤丸盤	H4	v	19	古野				5.8	濃緑	右	縦C2	内径ロクロナデ, 底外周ヘラツキリ, 底外周転車取り, 高台版り付け流ロクロナデ	赤漆?	赤漆
787	灰土器	横瓶	G3	h/3	7/22	流路	上	11.8			濃緑		縦A	内径ロクロナデ	赤漆?	赤漆
788	土器	横瓶	G3	h/3	7/22	流路	上				濃緑		縦A	内径ロクロナデ	赤漆?	赤漆
789	土器	瓶B	H6	l	21	V野				16.9	白色系	上	B	内径ロクロナデ	赤漆?	赤漆
790	灰土器	瓶A	H5	D	2-8-29/4-8-9-14/2-6	V野	上	23.0			濃緑		縦C1	内径ロクロナデ, 底外周ヘラツキリ, 底内周心内凹	赤漆	赤漆
791	灰土器	瓶A	H5	D	10/8	V野	上	30.0			濃緑		縦B	内外輪子取し流ロクロナデ, 内径ロクロナデ, 底外周ヘラツキリ, 底内周心内凹	赤漆	赤漆
792	灰土器	瓶B1	H5/10/12	0/11	14-25/3-9-13/22	V野	上	48.7			濃緑		縦C2	内径ロクロナデ, 再凸部, 流路, 底外周心内凹	赤漆	赤漆
803	黒色土器	杯A1	F3	v	21-22/23	流路	下	13.0	6.0	-	赤褐色	上	E	内径外ヘラツキ	内面流紋付着物	内径黒漆 丸底
804	土器	杯A2	F3/G3	v/b	22/3-9	流路	下	12.0	5.6	6.0	白色系	上	E	内径外ヘラツキ, 内ナデ	内径黒漆, 底外周厚肌	内径内黒漆
805	土器	杯A3	F3	v	21	流路	下	13.0	5.3	5.4	白色系	上	E	内径外ヘラツキナデ, 底ナデ	内面流紋付着物	内径黒漆
806	土器	杯A4	F3	v	22-23	流路	下	8.2	5.5	6.0	白色系	上	E	内径外ヘラツキ, 底外周厚肌, 内径土製流紋	赤漆	赤-底外黒漆
807	土器	杯A	F3	v	23	流路	下				5.9	白色系	上	E	内径ナデ	底外黒漆
808	土器	杯4ナミ	F3	v	22-23	流路	下	12.0			赤褐色	上	E	口ヨコナデ, 内径外ヘラツキ	赤漆	赤漆
809	黒色土器	杯B1	F3	v	19-20/22	流路	下	12.2	6.2	6.0	赤褐色	右?	E	内径外ヘラツキナデ, 高上口ナデ, 外ナデロクロナデ	底外黒漆	内径赤色, 底外黒漆
810	土器	手づくね土器	F3	v	23	流路	下	4.5	3.1	4.2	白色系	上	E	手づくね	赤漆	底外下-底外黒漆
811	灰土器	杯高直	F3	v	23	流路	下	16.3		3.0	濃緑	右	縦C2	外下-内径ロクロナデ, 流路ロクロナデ, 底外周り付け流ロクロナデ	内面流紋付着物	土製
812	灰土器	杯高直	F3	v/b	19/21	流路	下	12.3	2.9	2.8	濃緑	右	縦C1	外下-内径ロクロナデ, 流路ロクロナデ, 底外周り付け流ロクロナデ	内面流紋付着物, 底外周厚肌, 内径黒漆	土製
813	灰土器	杯高直x直	F3	v	19	流路	下				濃緑	右	縦A	外下-内径ロクロナデ, 流路ロクロナデ, 底外周り付け流ロクロナデ	内面流紋付着物, 底外周厚肌, 底外周心内凹	内径黒漆
814	灰土器	有内輪	F3	v	21	流路	下	15.8	4.0	12.6	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 底外周転車取り, 高台版り付け流ロクロナデ	内面流紋付着物, 見込み-内径-高台版厚肌	内径黒無し
815	灰土器	有内輪	G3	a	7	流路	下	15.3	4.7	10.8	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 底外周転車取り, 高台版り付け流ロクロナデ	見込み-内径-外下厚肌, 高台版厚肌, 底外周心内凹	内径黒無し
816	灰土器	有内輪	F3	v	2	流路	下	13.6	4.5	9.3	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 底外周転車取り, 高台版り付け流ロクロナデ	見込み-内径, 内面厚肌, 高台版厚肌	内径黒無し
817	灰土器	有内輪	F3/G3	v/b	22/9	流路	下	13.3	4.7	9.4	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 底外周転車取り, 高台版り付け流ロクロナデ	内面流紋付着物, 見込み-内径-高台版厚肌	内径黒無し
818	灰土器	有内輪	F3/G3	v/b	23-20	流路	下	13.5	4.0	9.7	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 底外周転車取り, 高台版り付け流ロクロナデ	見込み-内径-高台版厚肌, 内径黒	内径黒無し
819	灰土器	有内輪	F3	v	24	流路	下	13.6		(9.6)	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 見込み止ナデ, 底外周転車取り, 高台版り付け流ロクロナデ	内面流紋付着物, 平面厚肌, 高台版厚肌, 高台版り付け流ロクロナデ	内径黒無し
820	灰土器	有内輪	F3/G3	v/b	19/2	流路	下	11.2	4.1	8.0	濃緑	右	縦C2	内径ロクロナデ, 見込み止ナデ, 底外周転車取り, 高台版り付け流ロクロナデ	赤漆	内径黒無し (流正色)
821	灰土器	有内輪	F3	v	22	流路	下	11.8	3.9	7.7	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 底外周転車取り, 高台版り付け流ロクロナデ	見込み-内径-高台版厚肌	内径黒無し
822	灰土器	有内輪	F3	v	17-22	流路	下	11.5	3.8	7.4	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 底外周転車取り, 高台版り付け流ロクロナデ	見込み-内径-外下厚肌, 高台版厚肌	内径黒無し
823	灰土器	有内輪	F3	v	24+25	流路	下	11.2	3.7	8.0	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 底外周転車取り, 高台版り付け流ロクロナデ	見込み-内径-外下厚肌, 高台版厚肌, 底外周心内凹	内径黒無し (流正色)
824	灰土器	有内輪	F3	v	20	流路	下	10.9	4.1	7.5	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 底外周転車取り, 高台版り付け流ロクロナデ	内面流紋付着物, 見込み-内径厚肌, 高台版厚肌	内径黒無し
825	灰土器	製内輪I	F3	v	25	流路	下	11.4	3.7	6.2	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 底外周転車取り	底外周心内凹, 底外周厚肌	底外周心内凹
826	灰土器	製内輪G	G3	a/11/13	13/2/14	流路	下	13.8	3.4	9.2	濃緑	右	縦C3	外上-内径ロクロナデ, 外下-底外周ロクロナデ	赤漆	流路で上に小型品を置く
827	灰土器	製内輪D	F3	v	22	流路	下	13.1	4.4	9.6	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 見込み止ナデ, 底外周転車取り	内径-見込み-底外周厚肌	底外周心内凹
828	灰土器	製内輪E	F2/G3	v/b	22/9	流路	下	12.7	3.7	9.3	濃緑	右	縦C1	内径ロクロナデ, 底外周転車取り	見込み-内径-底外周心内凹	底外周心内凹

観察表

土器・陶磁器観察表 (古代) (19)

No.	種別	器種	グリップ		形状	大きさ (cm)			色澤	胎土	前土	用途	消費地	産出地	備考		
			大径	小径		口径	高さ	底径									
889	直立部	無白粉 目	F3	v	22	底径 14	下径	12.4	3.7	8.6	燻	右	裏C1	内外クロコナ子、底外周 軌道寄り縁手持ちケズ リ・急勾	見込み・底外縁線 粗	直取車取つき	
890	直立部	無白粉 目	F3	v/b	22/6	底径 14	下径	12.8	3.6	7.0	燻	右	裏C2	内外クロコナ子、底外周 軌道寄り	底外縁線粗い・厚縁	直取車取つき	
891	直立部	無白粉 目	F3	v	21	底径 14	下径	12.8	3.2	8.1	燻	右	裏C1	内外クロコナ子、底外周 軌道寄り	口内・見込み・外下・ 底外縁線粗	直取車取つき	
892	直立部	無白粉 目	F3	v	19	底径 14	下径	12.5	3.2	7.6	燻	右	裏C1	内外クロコナ子、底外周 軌道寄り	見込み・底外縁線 粗	直取車取つき	
893	直立部	無白粉 I	F3	v	23	底径 14	下径	11.5	3.3	7.3	燻	右	裏C1	内外クロコナ子、底外周 軌道寄り	内外縁線粗い・厚縁、 底外縁線・見込み	直取車取つき	
894	直立部	無白粉 I	F3	v	25	底径 14	下径	11.4	3.5	8.0	燻	右	裏C1	内外クロコナ子、底外周 軌道寄り	口内・見込み・外下・ 底外縁線粗	直取車取つき	
895	直立部	無白粉 I	F3	v	23	底径 14	下径	11.4	3.8	6.6	燻	右	裏C1	外上・内口クロコナ子、 底外縁線寄り、底外縁 手持ちケズ	見込み・底外下縁 粗	直取車取つき	
896	直立部	無白粉 b I	F3	v	20	底径 14	下径	12.6	3.8	5.4	赤色系	右	I C	内へウキ厚、外上へウ キ厚、外下・底外口 クロコナ子	底外縁線粗い・厚縁	蓋取無し	
897	直立部	長頸瓶 B IV	F3/ G3	w/b	17-18- 22-23/ 14-15 13	底径 14	下径			9.2	燻	右	裏C2	外上・内口クロコナ子、 底外口クロコナ子、底 外縁線寄り、蓋取寄り 付け口クロコナ子	高台頸線粗	肩取無し	最大径 16.8cm 肩取無し
898	直立部	長頸瓶 A IV	G3/ H3	w/	9/4・5 9/1・6	底径 14	下径			11.1	燻	右	裏C1	外上・内口クロコナ子、 外下口クロコナ子・底 外口クロコナ子・底外 縁線寄り、蓋取寄り 付け口クロコナ子	高台頸線粗い・欠け	肩取無し	最大径 19.8cm 肩取無し
899	直立部	短頸瓶	G3	g	6- 15/3- 13-22	底径 14	下径	11.5	18.5	10.8	燻	右	裏C1	内外クロコナ子、カサ 、外上クロコナ子、外下 口クロコナ子・底縁、 底外縁線粗、蓋取 寄り、蓋取寄り付け 口クロコナ子	高台下部線粗い・欠け	肩取無し	最大径 22・6cm
900	直立部	鉢	G3	g	3	底径 14	下径	21.0			燻	右	裏C3	外上・内口クロコナ子、 外下口クロコナ子	赤澤	内取無し	
901	土師部	深鉢形 小盃	F3	v	24・25	底径 14	下径	11.8	8.6	7.3	白色系	土	土	外ハケメ・ナ子、内ハケ メ、底内ナ子、底外不 塗	赤澤	内取	
902	土師部	深鉢形 小盃	F3	v	22・23	底径 14	下径	13.2			白色系	土	土	口ヨコナ子、外ハケメ	赤澤、内取	赤澤	
903	土師部	深鉢形 小盃	F3/ G3	w/b	24/4	底径 14	下径	16.6			白色系	土	土	内外ヨコナ子、底外ハケ メ、内ハケメ・ナ子	赤澤、口内取	赤澤	
904	土師部	小盃 A1b	F3	w/b	21/9- 14・18 16-20	底径 14	下径	16.0			赤色系	土	土	内外ヨコナ子、内外ハ ケメ、外下縁取付	赤澤、口内取	赤澤	
905	土師部	小盃 A1a	F3	v	24・25	底径 14	下径	11.7			赤色系	土	土	外ハケメ、口内ヨコナ子、 底内ナ子	赤澤、口内取	赤澤	
906	土師部	小盃 A3	F3	v	22・23	底径 14	下径	13.1			白色系	土	土	口ヨコナ子、外ハケメ、 内ナ子	赤澤、口内取	赤澤	
907	土師部	小盃 A2	F3	v	23	底径 14	下径	15.1			白色系	土	土	口ヨコナ子、外ハケメ、 内ナ子	赤澤、口内・体内取 付	赤澤	
908	土師部	小盃 A1b	F3/ G3	w/v	24/5	底径 14	下径	15.0			赤色系	土	土	外ハケメ・ナ子、内ハケ メ	赤澤、口内取	赤澤	
909	土師部	小盃 A1a	F3	v	24	底径 14	下径	13.2			赤色系	土	土	口ヨコナ子、体内外ハ ケメ	口内取	赤澤	
910	土師部	小盃 A	F3	v	30	底径 14	下径			4.4	赤色系	土	土	口ヨコナ子、体内・底外 縁寄りナ子、底外ハケ メ	赤澤、内取	赤澤	
911	土師部	長盃 A1a	F3/ G2/ G3	v	22・23	底径 14	下径	16.7	26.3	7.8	赤色系	土	土	口ヨコナ子、体内・底外 縁寄りナ子、底外ハケ メ	底外縁線粗、僅・ コケ敷し	赤澤	
912	土師部	長盃 A1a	F3/ G2/ G3	w/	21/10/ 1-2	底径 14	下径	15.2	24.5	9.7	白色系	土	土	口ヨコナ子、体内外ハ ケメ	赤澤、内取	赤澤	
913	土師部	長盃 A1a	F3/ G2/ G3	w/	21-24 /21-22 //1	底径 14	下径	16.3			赤色系	土	土	口ヨコナ子、体内外ハ ケメ	赤澤、内取	赤澤	
914	土師部	長盃 A1a	F3/ G3	w/b	22-23/ 19-20	底径 14	下径	17.6	28.4	9.0	赤色系	土	土	口ヨコナ子、体内・底外 上ハケメ、底外下ハラ ズリ、底外縁、底取付 部	赤澤	内取無し	
915	土師部	長盃 A1a	F3/ G3	w/b	23/2	底径 14	下径	17.1			赤色系	土	土	口ヨコナ子、体内外ハ ケメ	赤澤、内取	口内取	
916	土師部	長盃 A1a	F3/ G3	w/b	21/1	底径 14	下径	17.6			白色系	土	土	口ヨコナ子、体内外ハ ケメ	赤澤	内取	
917	土師部	長盃 A1a	F3/ G3	w/b	22-23/ 2	底径 14	下径	19.6			赤色系	土	土	口ヨコナ子、体内・底外 上ハケメ、底外下ナ 子	赤澤	内取	
918	土師部	長盃 A1b	F3	v	19-20/ 21-22 23-24 25	底径 14	下径	17.7	28.5	10.6	白色系	土	土	内外ヨコナ子、体内外ハ ケメ、底外ハケメ	赤澤	赤澤	
919	土師部	長盃 A1b	F3	v	21	底径 14	下径	16.6			赤色系	土	土	内外ハケメ	赤澤、内取	赤澤	
920	土師部	長盃 A1a	F3	v	24	底径 14	下径	18.4			赤色系	土	土	内外ヨコナ子、内外ハケ メ	赤澤	赤澤	
921	土師部	長盃 A1a	F3/ G3	w/b	22-23/ 2-3	底径 14	下径	21.5	29.3	9.6	赤色系	土	土	口ヨコナ子、体内・底外 上ハケメ、底外下ハラ ズリ、底外縁、底取付 部	赤澤、内取	内外取	
922	土師部	長盃 A1b	F3/ G3	w/b	22-23/ 14	底径 14	下径	21.2	28.9	9.9	赤色系	土	土	外上・内口ナ子、外下 口ナ子、底外縁・ハ ケメ	赤澤、外取こぼれ、 内取		
923	土師部	長盃 A3	F3/ G3	w/b	20/1-2	底径 14	下径	17.0			白色系	土	土	内外ハケメ	赤澤、内取	赤澤	
924	土師部	長盃 A3	F3/ G3	w/	21-22 /2/15	底径 14	下径	20.6			赤色系	土	土	口ヨコナ子、底外ハケ メ、体内ナ子・ハケ メ	赤澤	赤澤	

土器・陶磁器観察表（古代）(20)

No.	種類	図形	グリップ		用途	大きさ (cm)			色澤	胎土	焼成	調整	消費材料	製造材料	備考		
			手	全		口径	高さ	底径									
925	土器	長頸 A3	F3/G3	v/s	19-20 21-22 23-24 25/2	底径 14	下頸	20.4	33.4	7.7	赤褐色	土 E	口ヨコナデ、係内ハケム、係内ナデ	赤褐色	赤褐色		
926	土器	長頸 A3	F3/G3	v/s	22-23 22-24 25/2	底径 14	下頸	22.0	34.3	8.9	赤褐色	土 E	口ヨコナデ、係内ハケム、係内ナデ	赤褐色	赤褐色		
927	土器	長頸 A4a	F3/G3	v/s	22-23 22-24 25/2	底径 14	下頸	19.1	31.0	9.0	赤褐色	土 E	口ヨコナデ、係内ハケム、係内ナデ	赤褐色	赤褐色		
928	土器	長頸 A4b	F3/G3	v	22-23 22-24 25/2	底径 14	下頸	21.4			白色系	土 E	口ヨコナデ、係内ハケム	赤褐色	赤褐色		
929	土器	長頸 A2b	F3/G3	v/s	22-23 22-24 25/2	底径 14	下頸	19.2		10.0	白色系	土 B	内外ナデ、底内ナデ	赤褐色	内内赤		
930	土器	長頸 A2b	F3/G3	v	21-22 21-22 23/2	底径 14	下頸	27.2	27.1	8.8	赤褐色	土 B	口ヨコナデ、係内ハケム、係内ナデ	赤褐色	内内赤	内蓋	
931	土器	広口蓋 A4a	F3/G2/G3	v/s	21/10 19-20 21-22 23/2	底径 14	下頸	23.1	19.8	8.2	赤褐色	土 B	口ヨコナデ、係内ハケム、係内ナデ	赤褐色	赤褐色	底内蓋	
932	土器	広口蓋 A1a	F3/G3	v/s	21-22 22-23 23/2	底径 14	下頸	32.0			白色系	土 E	口ヨコナデ、係内ハケム	赤褐色	内内赤	蓋	
933	土器	広口蓋 A1a	F3/G3	v	22-23 22-24 25/2	底径 14	下頸	28.7			白色系	土 E	内ナデ、ハケム（蓋付）	赤褐色	蓋付無し？		
934	土器	広口蓋 A1a	F3/G3	v/s	21-22 21-23 24/2	底径 14	下頸	26.9			白色系	土 E	口ヨコナデ、係内ハケム	赤褐色	内内赤		
935	土器	広口蓋 A4b	F3/G2/G3	v/s	21/10 19-20 21-22 23/2	底径 14	下頸	28.5	20.3	12.7	白色系	土 B	口ヨコナデ、係内ハケム	赤褐色	内内赤	係内・口内蓋	
936	土器	広口蓋 A4b	F3/G3	v	17-19 20-22 23/2	底径 14	下頸	31.0			赤褐色	土 A	内外ハケム	赤褐色	赤褐色		
937	土器	蓋 A4b	F3/G3	v	22-23 22-24 25/2	底径 14	下頸	31.6			赤褐色	- 土 A	口ナデ、係内ハケム	赤褐色	赤褐色		
938	土器	蓋 A4a	F3/G3	v	21-22 21-23 24/2	底径 14	下頸	22.9			赤褐色	土 B	口ヨコナデ、内ナデ、内ハケム	赤褐色	内内赤		
939	土器	小蓋 A4a	F3/G3	v/s	21-23 18-19 20/2	底径 14	下頸	19.2			赤褐色	土 E	口ヨコナデ、係内ハケム	赤褐色	係内下蓋付物		
940	土器	蓋 A3	F3/G3	v	23-24 23-24 25/2	底径 14	下頸		10.0		白色系	土 E	内外ハケム、係内ハケム	赤褐色	赤褐色		
941	土器	蓋 A3	F3/G3	v/s	22/1-2 23-24 25/2	底径 14	下頸		9.8		白色系	土 A	底内ナデ、底内ナデ	赤褐色	底内蓋		
942	土器	蓋 A3	F3/G3	v	23-24 23-24 25/2	底径 14	下頸		9.0		赤褐色	土 B	内ナデ、内ハケム	赤褐色	赤褐色		
943	土器	蓋 A7	F3/G3	v	21-22 21-23 24/2	底径 14	下頸		13.4		白色系	土 E	内ナデ、内ハケム	赤褐色	赤褐色	係内・底内蓋	
944	土器	小蓋 B1a	F3/G3	v/s	21-23 18-19 20/2	底径 14	下頸	14.5			赤褐色	土 E	内外口ナデ、カキ	赤褐色	口内蓋付物		
945	土器	小蓋 B1b	F3/G3	v	22-23 24-25 26/2	底径 14	下頸	16.2			赤褐色	土 F	内・口ナデ、係内口ナデ	赤褐色	内上蓋付物	下蓋	
946	土器	小蓋 B1a	F3/G3	v	17-18 18-19 19/2	底径 14	下頸	14.2			白色系	土 B	内外口ナデ	赤褐色	内蓋		
947	土器	小蓋 B1a	F3/G3	v	24-25 24-25 26/2	底径 14	下頸	12.8			白色系	土 D	内外口ナデ	赤褐色	口内蓋付物		
948	土器	長頸 A3	F3/G3	v/s	22-23 22-24 25/2	底径 14	下頸				白色系	土 E	内ハケム、ナデ、内ナデ	赤褐色	内ナデ	丸底	
949	土器	瓶 A1	F3/G3	v	21-22 21-23 24/2	底径 14	下頸		4.4		赤褐色	土 B	内外ハケム、底内ナデ	赤褐色	底内蓋	蓋付無し	
950	土器	壺	F3/G3	v	21-22 21-23 24/2	底径 14	下頸	19.5	33.0	12.7	赤褐色	土 E	口ヨコナデ、口内ナデ、係内ハケム	赤褐色	内内蓋付物	内内蓋	
951	土器	杯 A1	G3/B3	b	9-10 9-10 11/2	底径 14	下頸	8.7			赤褐色	土 B	内・内ナデ、内ナデ	赤褐色	底内蓋		
952	土器	杯 A2	G3/B3	c	21-22 21-23 24/2	底径 14	下頸	8.7	4.5	4.6	白色系	土 B	口ヨコナデ、内・係内ハケム	赤褐色	赤褐色	蓋	
953	土器	杯 A2	G3/B3	b	10-11 10-11 12/2	底径 14	下頸	9.0	3.6	6.0	白色系	土 E	内外ハケム	赤褐色	内外蓋付物		
954	土器	杯 A2	G3/B3	b	4-8 4-8 9/2	底径 14	下頸	11.6	4.5	6.5	白色系	土 E	内ハケム	赤褐色	見込み・底内蓋	内蓋	
955	土器	杯 A5	G3/B3	b	15-16 15-16 17/2	底径 14	下頸	11.9	4.1	7.3	白色系	土 E	内ハケム、内ナデ	赤褐色	内内蓋付物	内内蓋	
956	土器	杯 A	G3/B3	b	24-25 24-25 26/2	底径 14	下頸		6.1		白色系	土 E	内ナデ、底内ナデ	赤褐色	蓋・コップ	丸底	
957	土器	黒色土器 杯 A1	G3/B3	b	14-15 14-15 16/2	底径 14	下頸	12.0			白色系	土 F	内ハケム、内ナデ	赤褐色	見込みの蓋		
958	土器	黒色土器 杯 A2	G3/B3	b	23-24 23-24 25/2	底径 14	下頸	17.8	4.0	10.9	白色系	土 E	内ハケム、内ナデ	赤褐色	内内蓋付物	内内蓋	
959	土器	有内柄 壺	G3/B3	b	4-10 4-10 11/2	底径 14	下頸	14.6	4.4	10.1	褐色	右 黒 C2	内外口ナデ、内ナデ	赤褐色	内内蓋付物	見込み・口内・外下蓋付物	内内蓋無し（蓋正位）
960	土器	有内柄 壺	G3/B3	b	4-10 4-10 11/2	底径 14	下頸	13.5	4.4	9.8	褐色	右 黒 C1	内外口ナデ、内ナデ	赤褐色	内内蓋付物	見込み・口内・外下蓋付物	内内蓋無し
961	土器	有内柄 壺	G3/B3	b	9/10 9/10 10/2	底径 14	下頸	13.3	4.3	8.6	褐色	右 黒 C1	内外口ナデ、内ナデ	赤褐色	内内蓋付物	見込み・口内・高台蓋付物	内内蓋無し（蓋正位）
962	土器	有内柄 壺	G3/B3	b	19-20 19-20 21/2	底径 14	下頸	12.8	4.5	8.6	褐色	右 黒 C2	内外口ナデ、内ナデ	赤褐色	内内蓋付物	見込み・口内蓋	内内蓋無し
963	土器	有内柄 壺	G3/B3	b	10-11 10-11 12/2	底径 14	下頸	11.1	3.9	7.8	褐色	右 黒 C3	内外口ナデ、内ナデ	赤褐色	内内蓋付物	見込み・高台蓋付物	内内蓋無し

観察表

土器・陶磁器観察表（古代）(21)

No.	種類	器種	口径φ		用途	大きさ (cm)			胎土 色澤	胎土 色澤	胎土 色澤	調整	消費材料	製造材料	備考
			大	小		口径	高さ	底径							
964	直取器	無内線器	G3	b	9・20・14	下野	14.4	3.8	8.4	磨製	右	黒C1	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	見込み・口内・底面刷毛施装、底面黒色付着物	直取器右置き
965	直取器	無内線器	G3	b	9	下野	12.0	3.8	7.5	磨製	右	黒C1	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	見込み・口内・底面刷毛施装	直取器右置き
966	直取器	無内線器	G3	b	15・20	下野	12.8	3.6	8.1	磨製	右	黒C1	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	内外面刷毛付着物、見込み・口内・底面刷毛施装	直取器右置き
967	直取器	無内線器	G3	b	8	下野	12.1	3.4	8.3	磨製	右	黒C1	内外ロクロナデ、底面刷毛施装、飯付口痕	見込み・口内・底面刷毛施装	直取器右置き
968	直取器	無内線器	G3	c	16	下野	12.3	3.4	8.1	磨製	右	黒C1	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	内面刷毛付着物、見込み・口内・底面刷毛施装	直取器右置き
969	直取器	無内線器	G3	b	9・10・20	下野	13.0	3.4	8.6	磨製	右	黒C2	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	見込み・口内・底面刷毛施装	直取器右置き
970	直取器	無内線器	G3	b	25	下野	12.2	3.5	8.5	磨製	右	黒B	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	見込み・口内・底面刷毛施装	直取器右置き
971	直取器	無内線器	G3	b/c	10・3・7	下野	12.4	3.6	8.8	磨製	左	黒C2	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	赤漆?	直取器右置き
972	土師器	無内線器	G3	b	9	下野	13.8	3.1	8.3	白色系	上	B	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	磨製不明	
973	土師器	無内線器 a1	G3	b	1	下野	12.8	4.1	5.2	赤色系	右	D	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	見込み・口内・底面刷毛施装、赤漆(土を灰)付着	
974	土師器	無内線器 a1	G3	b	6	下野	11.9	3.9	6.1	赤色系	右	E	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	口内・底面刷毛施装、内面赤色付着物	
975	土師器	無内線器 a1	G3	b	8	下野	11.6	3.9	5.3	赤色系	右	D	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	内面刷毛付着物、口内・見込み・底面刷毛施装	赤漆
976	土師器	無内線器 a1	G3	b	1	下野	12.2	3.7	5.6	赤色系	右	B	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	口内・見込み・底面刷毛施装、内面刷毛付着物	
977	土師器	無内線器 a2	G3	b	2	下野	13.4	4.3	6.0	赤色系	右	D	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	口内上・底面刷毛施装	赤漆
978	土師器	無内線器 a2	G3	b	1	下野	12.7	4.2	5.6	赤色系	右	C	内外ロクロナデ、底面刷毛施装、口内刷毛施装	内面刷毛付着物、底面刷毛・口内刷毛	
979	土師器	無内線器 a1	G2	b	6	下野	12.3	4.1	4.9	赤色系	右	D	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	赤漆?	右下置
980	土師器	無内線器 a1	G3	b	1	下野	12.6	4.7	5.6	白色系	右	D	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	内面刷毛施装、口内・見込み・底面刷毛施装	
981	土師器	無内線器 a2	G3	b	8	下野	14.8	4.2	6.4	赤色系	右	E	内外ロクロナデ、底面刷毛施装	赤漆	内面置
982	直取器	磨製器	G3	b/c	24/4	下野				磨製	黒C2	内外ロクロナデ	赤漆	前面置	
983	直取器	磨 A	G3	b	4・9・10	下野	26.4			磨製	黒C2	内外ロクロナデ	赤漆		
984	土師器	深鉢形小盆	G3	b	20・25	下野	12.6	10.7	7.8	白色系	上	B	内外上ハケメ、内外下ナデ、底面不調敷、内粘土	赤漆、口内刷毛	右下置
985	土師器	深鉢形小盆	G3	b	30	下野	12.6			白色系	上	B	内外上ハケメ、内外下ナデ、底面不調敷、内粘土	赤漆	
986	土師器	小盆 A3	G3	b	4	下野	13.8			赤色系	上	E	口コナデ、底面ハケメ、内外下ナデ	赤漆、口内刷毛	
987	土師器	小盆 A2	G3	b	9・14	下野	13.4	9.3	5.6	赤色系	上	B	口コナデ、内外上ハケメ、内外下ナデ、底面不調敷	赤漆、口内刷毛	体存・底面置
988	土師器	小盆 A1a	G3	b	4・9	下野	14.8	14.2	8.6	赤色系	上	B	口コナデ、内外上ハケメ、内外下ナデ、底面不調敷	赤漆、内面刷毛	内面置
989	土師器	長盆 A1b	G3	b	2・3・4	下野	18.0			白色系	上	B	口コナデ、内外上ハケメ、内外下ナデ	赤漆	内面置
990	土師器	長盆 A4a	G3	b	24	下野	20.8			白色系	上	B	口コナデ、内外上ハケメ	赤漆	
991	土師器	長盆 A2	G3	b	9・14・15	下野	19.3			赤色系	上	B	口コナデ、内外上ハケメ、内外下ナデ、底面不調敷	赤漆、内面刷毛	内面置
992	土師器	長盆 A3	G3	b	6	下野	20.2			赤色系	上	E	口コナデ、内外上ハケメ、内外下ナデ	赤漆、口内刷毛	
993	土師器	長盆 A2	G3	b	4・9	下野	20.6			白色系	上	B	内外上ハケメ・ナデ	赤漆	
994	土師器	長盆 A1b	G3	b	3・14・15	下野	21.4			赤色系	上	E	内外上ハケメ、内外下ナデ、底面不調敷	赤漆、内面刷毛	
995	土師器	広口器 A	G3	b	13・14・18	下野	22.1	19.8	8.8	赤色系	上	B	口コナデ、内外上ハケメ、内外下ナデ、底面不調敷	赤漆、口内刷毛	体存・底面置
996	土師器	磨 A4	G3	b	9・10・15	下野	30.8			赤色系	上	B	口コナデ、内外上ハケメ	赤漆、内面刷毛	体存置
997	土師器	磨製 A	G3	b	17	下野			8.0	白色系	上	B	内外上ハケメ、底面不調敷	内面刷毛、底面赤色付着物	
998	土師器	長盆 B1b	G3	b	3・4	下野	20.6			赤色系	上	E	内外ロクロナデ・オケメ	赤漆、内面刷毛	
999	土師器	手づくお土器	G3	g	8	下野	4.7	2.9	2.8	赤色系	上	B	粘土刷毛仕上げ、飯付口痕	赤漆	底面置
1000	土師器	手づくお土器	G3	g	4	下野	5.3	3.3	3.3	白色系	上	B	手づくぬ	赤漆	
1001	土師器	杯 A1	G3	f		下野			4.6	赤色系	上	A			
1002	土師器	杯 A3	G3	g	3・4・5	下野	14.2	6.0	7.5	白色系	上	B	内外上ハケメ、内外下ナデ、底面不調敷、内粘土	赤漆	内面置
1003	土師器	杯 A3	G3	g	13・18	下野	11.6			赤色系	上	B	内外上ハケメ・ナデ	赤漆	内面置、外縁刷毛

土器・陶磁器観察表 (古代) (22)

No.	種類	器種	サイズ 大 中 小	用途	大きさ (cm)			色澤 形状	制作 地域	調整	消費材料	形成材料	備考
					口径	高さ	底径						
1004	土師器	杯 A3	G3 G 9	灰黒	下野	13.2	4.1	7.9	白色系	上 A	外上・内ナナ、外下・底ナナ持ちちろナナ	内面灰化	黒割製し
1005	灰土師	杯高田	G3 I 16	灰黒	下野	15.2	3.7	2.8	褐色	右 東 C1	外下・内口クロナナ、高田口クロナナ、底高田口付横口クロナナ	内面麻織付着物、内面灰化	1層
1006	灰土師	杯高田	G3 m 16	灰黒	下野	12.7	2.9	2.7	褐色	右 東 C2	外下・内口クロナナ、高田口クロナナ、底高田口付横口クロナナ	赤褐色	1層
1007	灰土師	杯高田	G3 m 16	灰黒	下野	12.5	2.9	3.0	褐色	右 東 C1	外下・内口クロナナ、高田口クロナナ、底高田口付横口クロナナ	内面灰	1層
1008	灰土師	杯白林	G3 G 7	灰黒	下野	11.8	3.7	7.6	褐色	右 東 C1	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	見込み内・厚肌、底高田口付横口、高田口付横口	内面灰無し
1009	灰土師	杯白林	G3 m 11	灰黒	下野	11.3	4.1	6.5	褐色	右 東 C2	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	内面麻織付着物、底高田口付横口、高田口付横口	内面灰無し
1010	灰土師	杯白林	G3 r 3	灰黒	下野	10.7	4.1	6.6	褐色	右 東 C1	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	内面麻織付着物、内高田口付横口、高田口付横口	内面灰無し
1011	灰土師	杯白林	G3 G 必 8・13・22/4	灰黒	下野	13.6	4.1	8.4	褐色	右 東 A	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	見込み・口内・高田口付横口	内面灰無し
1012	灰土師	杯白林	G3 I 9	灰黒	下野	12.8	3.7	8.7	褐色	右 東 C1	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	赤褐色	内面灰無し
1013	灰土師	杯白林	G3 G 7/5	灰黒	下野	12.4	4.0	8.3	褐色	右 東 C1	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	見込み・口内・高田口付横口	内面灰無し
1014	灰土師	杯白林	G3 I 3	灰黒	下野	12.3	3.6	10.0	褐色	右 東 C2	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	見込み・口内麻織	内面灰無し
1015	灰土師	杯白林	G3 I 9	灰黒	下野	11.8	3.8	7.9	褐色	右 東 C2	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	見込み麻織	内面灰無し
1016	灰土師	杯白林	G3 r 3	灰黒	下野	11.6	4.0	6.7	褐色	右 東 C2	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	内面麻織付着物、見込み内・厚肌、高田口付横口	内面灰無し
1017	灰土師	杯白林	G3 m 11・22	灰黒	下野	11.2	3.9	7.6	褐色	右 東 C1	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	内面麻織付着物、見込み・口内麻織	内面灰無し
1018	灰土師	杯白林	G3 m 22	灰黒	下野	11.3	3.4	7.6	褐色	右 東 C1	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	赤褐色	内面灰無し
1019	灰土師	杯白林	G3 I 9	灰黒	下野	11.3	3.8	8.7	褐色	右 東 C2	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	内面麻織付着物、見込み・口内・高田口付横口	黒とセト
1020	灰土師	杯白林	G3 m 22/5	灰黒	下野	11.8			褐色	右 東 C1	内外口クロナナ	赤褐色	内面灰
1021	灰土師	杯白林	G3 I 9	灰黒	下野				褐色	右 東 C1	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	赤褐色	内面灰
1022	土師器	無口鉢	G3 U/m 10・15/11	灰黒	下野	14.7	4.0	10.0	褐色	左 東 C2	外上・内口クロナナ、外下・底ナナ持ちちろナナ	内面麻織付着物、見込み・口内・底高田口付横口、底高田口付横口	直接赤紅焼き
1023	土師器	無口鉢	G3 G 8	灰黒	下野	12.7	3.7	8.8	褐色	右 東 C1	内外口クロナナ、底高田口付横口	見込み・口内・底高田口付横口	直接赤紅焼き
1024	土師器	無口鉢	G3 m 17・21	灰黒	下野	12.2	3.9	7.4	褐色	右 東 C1	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	見込み・口内・底高田口付横口	直接赤紅焼き
1025	土師器	無口鉢	G3 G 8	灰黒	下野	12.0	4.1	7.7	褐色	右 東 C1	内外口クロナナ、見込み停止ナナ、底高田口付横口	見込み・口内・底高田口付横口	直接赤紅焼き
1026	土師器	無口鉢	G3 r 4	灰黒	下野	12.4	4.0	8.4	褐色	右 東 C1	内外口クロナナ、見込み停止ナナ、底高田口付横口	底高田口付横口・右中底高田口付横口	直接赤紅焼き
1027	土師器	無口鉢	G3 G 8・13	灰黒	下野	13.2	3.2	9.4	白色系	右 上 B	内外口クロナナ、底高田口付横口、高田口付横口クロナナ	内面灰化	
1028	土師器	小盃 A1b	G3 G 6	灰黒	下野	12.6			白色系	上 E	口内コナナ、外ナナ	赤褐色、内面麻織	黒割製し
1029	土師器	長盃 A2	G3 G 必 10・3・13・15・17/4	灰黒	下野	16.5			白色系	上 E	口内コナナ、外ナナ	赤褐色	
1030	土師器	長盃 A3b	G3 G 8・13	灰黒	下野	22.0			白色系	上 E	内外ハケメ	赤褐色、内面麻織	口内麻織
1031	土師器	広口盃 A1a	G3 G 18・23	灰黒	下野	24.0			白色系	上 B	外ナナ・ハケメ (総合焼成)、内ハケメ	赤褐色	
1032	土師器	広口盃 A2a	G3 G 必 24/3	灰黒	下野	27.1			白色系	上 E	口内コナナ、外ハケメ	赤褐色	口内麻織
1033	土師器	長盃 A2	G3 G 3・4・8	灰黒	下野	18.1			白色系	上 E	外・内ハケメナナ、内下ハケメ	赤褐色、内面灰	口内麻織
1034	土師器	長盃 B1a	G3 G 18・23	灰黒	下野	22.1			赤褐色	上 A	外上口クロナナ、外下ハケメ、内口クロナナ・赤ナナ	赤褐色、内面灰	
1035	土師器	小盃 B	G3 G 16・23	灰黒	下野			10.0	赤褐色	上 A	外ナナ	灰化物?	
1036	土師器	小盃 B	G3 G 8	灰黒	下野			3.4	白色系	上 A	外上口クロナナ、外下ナナ持ちちろナナ、内ハケメ	赤褐色	丸底製
1037	土師器	盃 A4b	G3 r 13	灰黒	下野				赤褐色	上 A	口内コナナ、外ハケメ	赤褐色、内面灰	
1038	土師器	盃 A4b	G3 G 4・9	灰黒	下野	36.6			赤褐色	上 E	口内コナナ、内外ハケメ	赤褐色、内面灰	
1039	土師器	盃 B1a	G3 G 必 21/3・22/3・4/4	灰黒	下野	30.0			白色系	上 B	内外口クロナナ、外ナナ・外下ナナ持ちちろナナ、内外ハケメ	赤褐色、内面灰	黒割製し?

観察表

土器・陶磁器観察表 (古代) (23)

No.	種類	図形	口径	高さ	底径	用途	大きさ (cm)			色澤	胎土	調整	消費材料	成形法	備考
							口径	高さ	底径						
1040	灰土器	林道B	G3	5	底径14	下腹	14.7	2.8	3.1	褐色	左	灰C1	外下・内口ロコナデ、胴部ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	内腹面紋付着物、全体厚肌、高台脚型	Ⅱ類A
1041	灰土器	林道B	G3	4/5・9/8-10	底径14	下腹	12.3	3.4	3.1	褐色	右	灰C2	外下・内口ロコナデ、胴部ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	内腹面紋付着物、全体厚肌、高台脚型	Ⅱ類B(内腹紋)
1042	灰土器	有白群	G3	4	底径14	下腹	13.7	4.1	8.6	褐色	右	灰C1	内腹口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ、高台脚型	内腹面紋付着物、全体厚肌、高台脚型	内腹面無し
1043	灰土器	有白群	G3	4・5・10	底径14	下腹	12.0	3.7	7.2	褐色	右	灰C1	内腹口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ、高台脚型	内腹面紋付着物、全体厚肌、高台脚型	内腹面無し
1044	灰土器	有白群	G3	5	底径14	下腹	11.6	4.0	6.8	褐色	右	灰C1	外上・内口ロコナデ、外下ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	見込み・高台脚型、内腹面紋付着物、全体厚肌、高台脚型	内腹面無し
1045	灰土器	無白群	G3	9	底径14	下腹	13.4	3.7	10.0	褐色	右	灰C1	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	内腹面紋付着物、全体厚肌、高台脚型	直腹面厚肌
1046	灰土器	無白群	G3	5	底径14	下腹	13.0	3.5	9.0	褐色	右	灰C1	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	内腹面紋付着物、全体厚肌	直腹面厚肌
1047	灰土器	無白群	G3	4	底径14	下腹	12.6	3.4	9.4	褐色	右	灰C2	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	内腹面紋付着物、全体厚肌	直腹面厚肌
1048	灰土器	無白群	G3	4/5	底径14	下腹	12.4	4.0	38.9	白色系	左	灰B	外上・内口ロコナデ、外下ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	内腹面紋付着物、全体厚肌	直腹面厚肌
1049	土器	手づくね土器	G3	9	底径14	下腹	2.9	3.0	1.8	白色系	-	上B	手づくね	赤褐色	
1050	土器	小笠形	G3	8・9	底径14	下腹	13.1			白色系	上B		口ロコナデ、外ハケ、内方キ	白内化物	
1051	土器	深鉢形	G3	3・4・8・9-10	底径14	下腹	16.1	14.0	7.4	白色系	上E		口外コナデ、体外ハケ、底込み、口付付ロコナデ、底外不調	白内化物	内外両面
1052	土器	深鉢形	G3	10	底径14	下腹	21.2			白色系	上E		外ハケ、底込み、口付付ロコナデ	赤褐色、白内化物	
1053	土器	小笠形	G3	9	底径14	下腹	15.5			白色系	右	上A	外上ロコナデ、外下ロコナデ、内方キ	赤褐色、白内化物	内外両面
1054	土器	小笠形	G3	9-10	底径14	下腹			7.7	白色系	右	上A	外上ロコナデ、内上キ、外下ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	赤褐色	下腹面
1055	土器	瓦蓋	G3	3	底径14	下腹	22.4			白色系	上E		口コナデ、内外ハケ、内方キ	赤褐色	
1056	土器	蓋形	G3	3-4	底径14	下腹	10.7			白色系	上E		外ハケ、内方キ、底外不調	赤褐色、内方キ	
1057	土器	蓋形	G3	2・4・5・14	底径14	下腹			12.6	白色系	上E		内外ハケ、下腹コナデ	赤褐色	赤褐色
1058	土器	蓋形	G3	6/8・9-9/24	底径14	下腹	23.3		11.6	白色系	上E		外ハケ、外ハケ、外下ロコナデ、ハケ	赤褐色	内外両面
1059	灰土器	無白群	G3	5	底径14	下腹	22.9			褐色	灰C1		口ロコナデ、体外厚肌、底込み、口付付ロコナデ	赤褐色	胴部小型厚肌
1060	灰土器	無白群	G3	12	底径14	上腹	14.1	3.8	9.0	褐色	左	灰C3	外上・内口ロコナデ、外下・底外口ロコナデ	内腹面紋付着物、全体厚肌	直腹面厚肌
1061	土器	無内胸	F3	v 21	底径14	中腹	12.6	4.2	5.6	白色系	右	上D	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	見込み・底外厚肌、内方キ	
1062	土器	無内胸	F3	v 21	底径14	中腹	12.2	3.8	5.3	白色系	右	上D	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	内腹面紋付着物、口内・見込み・底外厚肌	内外赤化
1063	土器	無内胸	F3	v 21	底径14	中腹	12.2	4.2	5.4	白色系	不明	上D	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	見込み・底外厚肌	底面無し
1064	土器	無内胸	F3	v 21	底径14	中腹	12.3	4.3	4.9	白色系	右	上D	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	口内・見込み・底外厚肌	内腹化
1065	土器	無内胸	F3	v 21	底径14	中腹	11.4	4.1	5.2	白色系	右	上B	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	内腹面紋付着物	内腹面厚肌
1066	土器	無内胸	F3	v 21	底径14	中腹	11.9	4.2	5.8	白色系	右	上B	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	見込み・厚肌	内外赤化
1067	土器	無内胸	F3	v 21	底径14	中腹	13.4	4.6	6.9	白色系	右	上C	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	底外厚肌	内腹面
1068	灰土器	有白群	G3	c	底径14	中腹	12.0	4.1	8.6	褐色	右	灰C1	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	内腹面紋付着物、全体厚肌、高台脚型	内腹面無し
1069	灰土器	有白群	G3	c 16	底径14	中腹	12.8	3.9	7.6	褐色	右	灰C1	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	全体厚肌、高台脚型	内腹面無し
1070	灰土器	香蓋	G3	b/c 23/1・2	底径14	上腹	9.3	3.5	2.8	褐色	右	灰C1	外上・内口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	内腹面紋付着物	正位厚肌
1071	土器	手づくね土器	G3	b 6	底径14	中腹	3.2	1.8	1.7	白色系	右	上B	手づくね	赤褐色	
1072	灰土器	無内胸	G3	c 7	底径14	中腹	12.6	3.5	9.8	褐色	右	灰C1	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	厚肌不明	直腹面厚肌
1073	土器	無内胸	G3	b 2	底径14	中腹	11.8	4.2	4.6	白色系	右	上B	内外口ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	内腹面紋付着物、全体厚肌	
1074	土器	無内胸	G3	b 8	底径14	中腹	17.3	6.6	7.2	白色系	右	上C	外上・内口ロコナデ、外下・底外口ロコナデ	赤褐色	内外両面
1075	黒色土器	鉢形	G3	1/3 14/3	底径14	5腹	15.5	6.8	7.2	白色系	右	上E	外上・内口ロコナデ、外下・底外口ロコナデ	赤褐色	口内赤化
1076	黒色土器	鉢形	G3	1 20	底径14	中腹	16.8			白色系	右	上E	外上・内口ロコナデ、外下・底外口ロコナデ	赤褐色	内外赤化、底外厚肌
1077	灰土器	林道B	G3	f 5	底径14	上腹	13.0	3.3	3.0	褐色	右	灰C1	内下・外下ロコナデ、胴部ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	内腹面紋付着物、全体厚肌、高台脚型	Ⅱ類
1078	灰土器	林道B	G3	m 6	底径14	上腹	16.0	2.9	3.5	褐色	右	灰C1	内下・外下ロコナデ、胴部ロコナデ、底込み、口付付ロコナデ	不明	Ⅱ類

土器・陶磁器観察表(古代)(24)

No.	種類	図柄	サイズ(mm)	用途	大きさ (cm)			色澤	焼成	出土	調査	消費品群	流通品群	備考	
					口径	高さ	底径								
1079	灰土器	林道II	G3 I 19	炭焼 14	中群	12.3	3.5	2.4	燻焼	右	灰C1	内・外下口フクロナデ、内蓋部付フクロナデ、蓋部付フクロナデ	見込み・底面・蓋面付フクロナデ	内蓋部付	
1080	灰土器	有内柄 III	G3 g 9/3	炭焼 14	上群	11.8	3.6	7.4	燻焼	右	灰C1	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	見込み・内口・蓋面付フクロナデ	内蓋部付	
1081	灰土器	有内柄 III	G3 I 20	炭焼 14	中群	11.8	3.5	6.6	燻焼	右	灰C1	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	見込み・内口・蓋面付フクロナデ	内蓋部付	
1082	灰土器	有内柄 III	G3 Un 20/16	炭焼 14	中群	12.4	3.8	8.0	燻焼	右	灰C1	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	見込み・内口・蓋面付フクロナデ、底面付フクロナデ	内蓋部付	
1083	灰土器	有内柄 III	G3 r	炭焼 14	中群	11.8	3.0	8.1	燻焼	右	灰C1	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	見込み・内口・蓋面付フクロナデ、底面付フクロナデ	内蓋部付	
1084	灰土器	有内柄 I	G3 m 21	炭焼 14	中群	11.4	3.7	7.2	燻焼	右	灰C1	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	見込み・内口・蓋面付フクロナデ、底面付フクロナデ	内蓋部付	
1085	灰土器	有内柄 I	G3 m 21	炭焼 14	中群	12.2	4.0	8.1	燻焼	右	灰C1	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	蓋面付	内蓋部付	
1086	灰土器	有内柄 I	G3 g 20・24・25	炭焼 14	上群	12.6	4.3	7.1	燻焼	右	灰C1	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	蓋面付	内蓋部付	
1087	灰土器	有内柄 I	G3 m1 16・21・22・23・27	炭焼 14	上群	13.2	3.8	8.0	燻焼	左	灰B	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	見込み・内口・蓋面付フクロナデ	内蓋部付	
1088	灰土器	有内柄 III	G3 I 3 8・9・23	炭焼 14	中群	12.1	3.0	8.0	燻焼	左	灰B	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	見込み・内口・蓋面付フクロナデ	内蓋部付	
1089	土師器	小笠 B1b	G3 I 3	炭焼 14	5群	18.6			白色系	右	I B	外上・内口フクロナデ、外下口フクロナデ、ヘラナデ	養内、内下掛け		
1090	土師器	長足 A6	G3 I 19	炭焼 14		17.0			赤色系	一	I B	口コナデ、保ハケメ	蓋面付		
1091	土師器	広口器	G3 e 22	炭焼 14	中群			8.6	赤色系	I	E A	外ハケメ、内ハケメ、子、底面付	養内、内口付		
1092	土師器	柱状高台	G3 m 18	炭焼 14				4.8	赤色系	右	I B	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	蓋面付		
1093	土師器	有内柄 × 蓋	G3 g 14	炭焼 14	上群			6.2	白色系	I	B	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ、内・外下口フクロナデ	蓋面付		
1094	灰土器	林道II	G3 x 8	炭焼 14	中群	14.9	3.8	2.7	燻焼	右	灰C1	内内外口フクロナデ、蓋部付フクロナデ	見込み・内口・蓋面付フクロナデ	内蓋部付	
1095	灰土器	林道II	G3 x 10	炭焼 14	上群	13.4	2.3	2.4	燻焼	右	灰C1	内内外口フクロナデ、蓋部付フクロナデ、蓋部付フクロナデ	蓋面付	内蓋部付	
1096	土師器	小瓶 × 小壺	G3 x 21	炭焼 14	上群			4.2	赤色系	右	I B	内内外口フクロナデ、外下口フクロナデ	蓋面付		
1097	土師器	小笠 A1b	F3 w 1	P30 II群	13.3				白色系	土	B	内内外口フクロナデ、外下口フクロナデ、蓋面付	養内		
1098	土師器	長足 A1b	F3 w 1	P30 II群	18.3				赤色系	土	I B	口コナデ、内外ハケメ	蓋面付		
1099	灰土器	有内柄 IV	F3 q 1	SK76	13.4	7.2	8.2	燻焼	左	灰B	I B	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	蓋面付	内蓋部付	
1100	土師器	長足 A4a	F3 q 1	SK76	横土	18.1			白色系	土	E	口コナデ、保ハケメ	内口付	内蓋部付	
1101	土師器	杯 A3	F3 q 1	SK76	横土			5.0	赤色系	土	E	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ			
1102	土師器	長足 A	F3 u 5 12a・b	P67	横土			12.0	白色系	土	E	内内外口フクロナデ	蓋面付		
1103	土師器	長足 A1b	F3 u 5	P67	横土	15.6			白色系	土	E	内内外口フクロナデ	蓋面付		
1104	灰土器	林道II	G3 c16 22・23・24	48	上群	15.8	2.8	3.2	燻焼	右	灰C1	内内外口フクロナデ、蓋部付フクロナデ	見込み・内口・蓋面付フクロナデ	内蓋部付	
1105	灰土器	林道II	F3 b16 25/16	SK30	横土	13.5			燻焼	右	灰C1	内内外口フクロナデ、蓋部付フクロナデ	内蓋部付	日 A類	
1106	灰土器	有内柄 G2/G3	q1 12/22・23	SH38 横土/VI群				7.5	燻焼	右	灰C1	内内外口フクロナデ、蓋部付フクロナデ	見込み・高台部付フクロナデ	内蓋部付	
1107	灰土器	有内柄 IV	G3 I 17・18	V群	13.4				燻焼	左	灰B	内内外口フクロナデ	内口部付	内蓋部付	
1108	灰土器	有内柄 III	G7/H7 c16 6・17/3	V群	11.4	4.7	7.0	燻焼	右	灰C2	I B	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	内口・見込み・高台部付	内蓋部付	
1109	灰土器	有内柄 I	F3 w 1 6	II群				5.2	燻焼	左	灰B	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	蓋面付		
1118	黒土土師	有内柄 III	E11 q 16	埋5e	13.8				白色系	土	B	内内外口フクロナデ、外下口フクロナデ	蓋面付		
1119	黒土土師	有内柄 III	E11 v 20	埋5e	15.7	6.1	3.4	白色系	右	土	E	外上・内ハケメ、外下口フクロナデ、底面付フクロナデ	見込み・外下口フクロナデ、底面付フクロナデ	内蓋部付	
1122	緑釉陶器	杯 × 壺		古群					燻焼			草履形・蓋面付	不明		
1123	土師器	有内柄 III	H4 w 14	古群				5.8	赤色系	土	F	蓋面付	不明		
1124	土師器	有内柄 III	H4 X 20	古群				5.8	白色系	土	F	蓋面付	不明		
1125	灰土器	有内柄 III	F3 u 24	炭焼 14	下群	12.0	3.4	7.6	燻焼	右	灰C2	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	内蓋部付	内蓋部付	
1126	灰土器	有内柄 I		炭焼 14	下群	10.2	3.3	7.3	燻焼	右	灰C2	内内外口フクロナデ、底面付フクロナデ	内蓋部付	内蓋部付	
1131	製磁土師	ハケメ型	G3 e/K 23/10	炭焼 14	下群				白色系	赤・黒系		外巻き上げ用、内ハケメ	蓋面付		
1132	製磁土師	ハケメ型	E11 v 13	炭焼 2	F				赤色系	砂多		内ナデ、外ナデ	蓋面付		
1133	製磁土師	ハケメ型	E11 d 6	炭焼 1	F				赤色系	砂多		外巻き上げ用	蓋面付		

観察表

土器・陶磁器観察表（中世）(1)

No.	種類	器種	形状	Aグループ	中Aグループ	中Bグループ	通観	層位	日附	器高	口径	調査・発掘地・注目など	備考	
686	土師器	土師	T1a 製	K11	d	10	1	IV	11.7			赤土・内ヨコナテ, 底不剥離	胎土 A	
687	土師器	土師	T1b 製	E10	w	1	IV	器壁	13.0			赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 B	
688	土師器	土師	T1b 製	E10	cm	24	IV	器壁	11.6			赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 B	
689	土師器	土師	T1b 製	K11	d	1	IV	器壁	10.4			赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 C	
690	土師器	土師	T1a 製	E10	w	3	IV	器壁	14.0			赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 A	
691	土師器	土師	T2 製	F10	i	1	IV	器壁	12.6			赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 A	
692	土師器	土師	T2 製	F10	b	2	IV*	器壁	12.2	2.1		赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 D	
693	土師器	土師	T2 製	F10	d	21	IV	器壁	12.2			赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 A	
694	土師器	土師	K2 製	E10	a	10	IV	器壁	9.8	2.0	6.4	内外ヨコナテ, 底剥離(胎土剥離)		
695	土師器	土師	K1 製	F10	b	25	IV	器壁	8.0			内外ヨコナテ, 底剥離(胎土剥離)		
696	土師器	土師	T1a 製	K11	d	25	IV	器壁	7.8	1.3	6.0	赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 A	
697	土師器	土師	T2 製	F10	c	1	IV	器壁	9.2			赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 A	
698	土師器	土師	T2 製	F10	k	4	IV	器壁	8.2			赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 A	
699	青磁	小瓶	逆卵形	K11	i	9	IV	器壁	11.5*			底剥離(赤土)		
700	青磁	小瓶	高上田ヨコナテ	F10	g	6	IV	器壁	12.4			底剥離(赤土)		
701	青磁	小瓶	高上田ヨコナテ	D11	x	15	IV	器壁	14.0			底剥離(赤土)		
702	青磁	小瓶	高上田Y 製	K11	cm	18	IV	器壁	12.0			内縁(赤土)		
703	青磁	桜花皿	高桜花皿	F11	s	1	IV	器口	13.8			内縁(赤土)		
704	青磁	梅	高上田 Y 製	E10	w	21	IV	器壁				内縁(赤土)		
705	青磁	鉢	高上田 Y 製	E10	w	9	IV	器壁			6.6	底剥離(胎土), 足込(赤土)		
706	青磁	鉢	高上田ヨコナテ	D11	x	24	IV	器壁				底剥離(胎土), 足込(赤土)		
707	青磁	鉢	高上田ヨコナテ	F10	hn	20	IV	器壁			5.0	底剥離(胎土)		
708	白磁	鉢	V 製(古)	E11	c	16	V	器壁		11.6		外不剥離		
709	白磁	鉢	森田 Y 群	F10	e	7	IV	器壁	10.6	2.3	5.6	赤土剥離, 縁筋, 器口高台, 足込		
710	白磁	鉢	森田 Y 群	F10	i	1	IV*	器壁			3.9	赤土剥離, 縁筋, 器口高台, 足込		
711	白磁	内鉢	森田 Y 群	F10	e	7	IV	器壁		8.8		外不剥離		
712	白磁	内鉢	森田 Y 群	F10	g	12	IV	器壁			3.0	外不剥離		
713	白磁	内鉢	森田 Y 群	E11	e/K	11/13	IV	器壁		11.7	2.4	6.4	高台(黒砂)	
714	青瓦	瓦	小野組 Y 群	E10	s	2	IV	器壁				高台(黒砂)		
715	青瓦	瓦	小野組 C - Y 群	F10	i	25	IV	器壁				高台(黒砂)		
716	青瓦	瓦	小野組 C 群	F11	a	6	IV	器壁			6.0	高台(黒砂)		
717	青瓦	瓦	小野組 C 群	E11	n	7	IV	器壁			3.8	高台(黒砂)		
718	青瓦	瓦	小野組 Y 群	F10	h	21	IV	器壁			6.1	高台(黒砂)		
719	黒土	土師	後製	E10	w	22	IV	器壁	16.7			口縁部(胎土剥離)		
720	黒土	土師	後製	F10	d	11	IV	器壁	12.2			胎土剥離		
721	黒土	土師	後製	K11	g	14	IV	器壁	9.5			胎土剥離		
722	黒土	土師	後製	E11	g	22	IV	器壁			4.9	胎土剥離, 赤土剥離		
723	黒土	土師	後製	F10	i	4	IV	器壁		1.3	2.6	2.5	胎土剥離, 赤土剥離	
724	黒土	土師	後製	E10	y	2	I	器壁	10.0			口縁部(胎土剥離)		
725	黒土	土師	後製	E10	x	1	IV	器壁			4.0	胎土剥離(赤土)		
726	黒土	土師	後製	F10	sl	9-15/7	IV	器壁	10.1	2.1	6.2	内外剥離(赤土)	口外ヨコナテ	
727	黒土	土師	後製	F10	i	15	IV	器壁	9.0			内外剥離(赤土)		
728	黒土	土師	後製	E11	h/h/m	13/2-20/15	IV	器壁			1.0	内外剥離(赤土), 底剥離(赤土)		
729	黒土	土師	後製	F10	a	16	IV	器壁	10.4			内外剥離(赤土)		
730	黒土	土師	後製	E11	m	5	IV	器壁				内外剥離(赤土)		
731	黒土	土師	後製	F10	j	13	IV	器壁	10.1	6.5	3.8	内外剥離(赤土)		
732	黒土	土師	後製	E11	m	18	IV	器壁				赤土剥離		
733	黒土	土師	後製	K11	i	2	I	器壁	8.3	4.7	3.9	赤土剥離, 底剥離(胎土剥離)		
734	黒土	土師	後製	F11	a	1	IV	器壁				赤土剥離		
735	黒土	土師	後製	F10	c	6	IV	器壁	10.9	3.6	3.6	胎土剥離, 赤土剥離		
736	黒土	土師	後製	F11	v		IV	器壁	10.6			胎土剥離, 赤土剥離		
737	黒土	土師	後製	F10	j	6	IV	器壁	12.8			胎土剥離		
738	黒土	土師	後製	F10	i	23	IV	器壁			3.6	胎土剥離, 赤土剥離		
739	土師器	土師	K1 製	G10	a	15-19/20	IV	器壁	14.0	3.6	6.9	内外剥離(赤土), 底剥離(赤土)	胎土 D	
740	土師器	土師	K1 製	G10	a	21	IV	器壁			5.6	内外剥離(赤土), 底剥離(赤土)	胎土 D	
741	土師器	土師	K1 製	G9	j	8	IV	器壁			6.7	内外剥離(赤土), 底剥離(赤土)	胎土 A	
742	土師器	土師	K1 製								6.0	内外剥離(赤土), 底剥離(赤土)	胎土 B	
743	土師器	土師	K1 製	G10	f	1	IV	器壁	6.4	1.4	4.0	内外剥離(赤土), 底剥離(赤土)	胎土 B, 赤土剥離(胎土)	
744	土師器	土師	T1b 製	F10	v	23	IV*	器壁	7.4	1.6	6.0	赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 B	
745	青磁	鉢	高上田 C 日製	G10	a	5	IV	器壁	13.0			赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 B	
746	青磁	鉢	高上田ヨコナテ	G10	f	1	IV	器壁	13.0			赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 B	
747	青磁	鉢	高上田 Y 製	G7	w	13	IV	器壁			6.7	赤土剥離	胎土	
748	青磁	鉢	高上田 Y 製	G10	a	22	IV	器壁			6.0	赤土剥離	胎土	
749	白磁	鉢	高上田 Y 製	F9	y	23	IV	器壁			3.4	赤土剥離	胎土	
750	白磁	鉢	高上田 Y 群	G9	e	16	IV	器壁			3.4	足込(胎土剥離), 高台(胎土)		
751	青瓦	瓦	森田 Y 群	F10	m	7	IV	器壁	11.8	2.0	6.4	高台(黒砂)		
752	黒土	土師	後製	F10	w	11	IV	器壁	12.2			外不剥離		
753	黒土	土師	後製	G9	a	22	IV	器壁			14.0	胎土剥離, 高台(胎土)		
754	黒土	土師	後製	G9	j	5	IV	器壁				内外剥離(赤土)	胎土(赤土剥離)	
755	黒土	土師	後製	G9	j	18	IV	器壁				内外剥離(赤土)		
756	黒土	土師	後製	G9	d	15	IV	器壁				内外剥離(赤土)		
793	土師器	土師	T1a 製	H4/15	s-1/c	20-25/16-18・21/6-8	V	A 群	12.0	2.6	5.4	赤土・内ヨコナテ, 底不剥離	胎土 A	
794	土師器	土師	T1a 製	H6	j/c	17-18/17	V	B 群	12.6	2.9	5.8	赤土・内ヨコナテ, 底不剥離	胎土 B	
795	土師器	土師	T1b 製	H6	e	19-24	V	B 群	12.0	3.7		赤土・内ヨコナテ, 底不剥離	胎土 B	
796	土師器	土師	T1b 製	H6	h	13	V	B 群	11.8	3.3	6.4	赤土・内ヨコナテ, 底不剥離	胎土 B	
797	土師器	土師	T1b 製	H7	f	17	IV	器壁	11.8			赤土・内ヨコナテ, 底不剥離	胎土 B	
798	土師器	土師	T1b 製	H4	i	10	IV	器壁	10.0	3.4		赤土・内ヨコナテ, 底不剥離	胎土 B	
799	土師器	土師	T1a 製	D 区(高台・赤土)					9.0			赤土・内ヨコナテ, 底不剥離	胎土 B	
800	土師器	土師	K1 製	H4	e	16	IV	器壁	7.3	1.4	5.4	内外剥離(赤土), 底剥離(赤土)		
801	土師器	土師	K2 製	H6	j	18	V	器壁	8.1	2.1	5.8	内外剥離(赤土), 底剥離(赤土)		
802	土師器	土師	T2 製	F10	w	1	IV	器壁	9.2	1.9		赤土・赤土ヨコナテ, 底不剥離	胎土 A	
803	土師器	土師	T2 製	D 区(高台・赤土)					8.4	1.6	3.2	赤土・内ヨコナテ, 底不剥離		

土器・陶磁器観察表(中世)(2)

No.	種別	器種	分類	入アフリット	中アフリット	赤アフリット	通眼	磨削	口縁	胎土	底径	底厚	調査	発掘地・包法など	備考
804	瓦器	城戸		15	e	1	V	滑						各々タンク文	
805	瓦器	鉢		1E7	e	13	吉	滑						内帯ナリテ	
806	青磁	碗	瀬上型	H5	n	9	吉	滑					13.9		
807	青磁	碗	瀬上型	G5	n	10	吉	滑					14.9		
808	青磁	碗	瀬上白文型	G7	u	24	V	滑					15.8		内帯無文
809	青磁	小碗	瀬上白文型	H7	k	8	V	滑					11.0		内帯無文
810	青磁	碗	瀬上型	H5	j	21	吉	滑						5.0	
811	青磁	鉢	瀬上型	F15			表	表・縦						6.0	高白陶磁類, 底込み文
812	青磁	鉢	瀬上型	F14			表	表・上							
813	青磁	碗	瀬上型	H4	b	24	吉	滑							
814	青磁	碗	瀬上型	H4	w	22	吉	滑						10.2	
815	青磁	水注	瀬上型	H5	v	6	V	a	滑						長脚・内面無文
816	白磁	鉢	森田王型	F15			表	表・縦						6.4	
817	白磁	鉢	森田分群	H4	e	8	吉	滑					8.8		
818	白磁	鉢	森田分群	H4	w	12	吉	滑						3.0	
819	白磁	鉢	森田分群	H5	v	17	吉	滑						5.0	
820	白磁	鉢	森田王型	H7	c	20	吉	滑						5.0	高白陶磁類
821	青瓦	碗	小野梅分群	H4	g	5	吉	滑					14.0		
822	青瓦	小碗	小野梅分群	G2	u	10	吉	滑						2.6	
823	青瓦	碗	小野梅分群	G8	u	1	V	滑							
824	青瓦	碗	小野梅分群	G15			表	表・縦							
825	青瓦	鉢	小野梅分群	H4	r	10	吉	滑					12.0	2.3	10.0
826	瀬戸・瓦器	平碗	後期	H6	o	10	V	滑					16.2		内外口クロナリ, 赤下露筋
827	瀬戸・瓦器	天目碗	後期~大塚	H4	a	22	滑	滑						11.2	輪文, 赤下露筋
828	瀬戸・瓦器	舟形	後期~大塚	H7	b	25	滑	滑						10.0	輪文, 赤下露筋
829	瀬戸・瓦器	碗	後期	G2	m/r	16/25	滑	滑						12.2	底心露筋
830	大塚	丸鉢		G3			滑						9.0	1.9	5.7
831	大塚	丸鉢		G3	o	9	吉	滑							5.5
832	珠洲	磁鉢	丹型	H4	t/g	2/22	滑								見込み露筋
833	珠洲	磁鉢		F15			表	表・縦							
834	珠洲	磁鉢	丹型	F15			輪								
835	珠洲	磁鉢	V型	G2	u	17	V	滑							
836	珠洲	磁鉢	V型	G3	a	6	吉	滑							
837	珠洲	磁鉢	V型	H4	b	11	吉	滑							
838	珠洲	磁鉢	V型	H6	e	9	V	滑					35.8		内外口クロナリ, 内面黒目, 口縁露筋
839	珠洲	磁鉢	V型	H4	m	6	吉	滑							
840	珠洲	磁鉢	V型	H7	d	11	吉	滑							
841	珠洲	磁鉢	V型	H5	n	5	V	滑							
842	珠洲	磁鉢	V型	G2	a	21	日	滑							内外口クロナリ, 内面黒目, 口縁露筋
843	珠洲	磁鉢		G2	p	19	日	滑							
844	珠洲	磁鉢		H4	u	25	吉	滑							
845	珠洲	器	文様	G2	w	5	滑							10.4	
846	珠洲	器	文様	H4	v	19	吉	滑					22.0		口クロナリ
847	珠洲	器	文様	H7	d	1	滑						10.0		黒目, 底赤色切り
848	漆器	漆碗		G3	i	1	滑								
849	漆器	漆鉢		G7	u	24	吉	滑					16.0		内面口
850	漆器	漆碗		H4	v	24	吉	滑					11.0		底心
851	漆器	漆鉢		G3	k	9	吉	滑					10.0		高白磁類
852	漆器	漆鉢		H7	f	17	V	滑					10.4	2.3	6.2
853	漆器	漆鉢	小鉢	H4	b	5	吉	滑					5.0	2.2	3.6
1113	上野原	器	T1b型	F3	g/v	7/13	滑						10.4	3.2	6.1
1114	瀬戸・瓦器	天目碗	後期~大塚	G3	b	1	滑								5.0
1115	青瓦	鉢	小野梅分群	F3	v	12-14	滑								4.0
1116	瀬戸・瓦器	磁鉢		G3	m	6-9	V	滑					(32.4)	6.4	16.2
1117	漆器	漆鉢		G3	e	1	滑						13.4	4.5	3.2
1120	白磁	鉢	V型など	H11	e/d	24/21	露筋1	吉	滑				12.7		内外無文
1121	土師瓦土器	鉢	R1型	F10	d	22	吉	滑					4.6		内外赤, 赤口クロナリ, 底赤目

土器観察表(縄文時代~古墳時代)

No.	種別	器種	入アフリット	中アフリット	赤アフリット	通眼	磨削	口縁	胎土	調査	底径	底厚	調査	発掘地・包法など	備考
679	土師器	器	11			SK5		25.5	白・黒・赤	不明					
680	土師器	器	E11	b	17	5a		22.0	白・赤・黒	白口コナリ, 内外ハケメ					
681	土師器	器	E11	k	16	5		19.0	白・赤・黒	白口コナリ, 内外ハケメ					赤燻
682	土師器	器	E11	v	13	5a		16.0	白・赤・黒	白口コナリ, 内外ハケメ					赤燻
683	土師器	器	E11	k	17	6a		14.1	白・赤・黒	白口コナリ, 内外ハケメ, 内外ハケメ入り					赤燻
684	土師器	器		v	12	4b		8.0	白・赤・黒	白口コナリ, 内外ハケメ					赤燻
685	土師器	器	E11	v	4	4		8.0	白・赤・黒	内外ハケメ, 内外ハケメ					赤燻
684	赤土師	器	A105	v	16	Va		14.6	白・赤・黒	白口コナリ, 内外ハケメ入り, 内外ハケメ					赤燻
686	赤土師	器	A17	g	7	SK16		13.5	白・赤・黒	露筋で不明					赤燻
686	土師器	器	H5	o	15	SK30		13.6	白・赤・黒	白口コナリ, 内外ハケメ, 内外ハケメ					赤燻, 口内底無文
687	土師器	器	H16	i	17	V3		13.0	白・赤・黒	白口コナリ, 内外ハケメ					赤燻
688	土師器	器	H15	p	25	F20		10.0	白・赤・黒	変形, 内外ハケメ					赤燻
689	土師器	器	H5	o	11	Va		14.8	白・赤・黒	露筋で不明, 赤燻					
690	土師器	器	H6	b	20	滑			白・赤・黒	不明					
691	土師器	器	H5	i	25	Vb			白・赤・黒	露筋で不明					特殊赤燻
692	土師器	器	H5	w	2	SD12			白・赤・黒	露筋で不明					
1110	赤土師	器	G3	b	21	露筋14		20.4	白・赤・黒	内外ハケメ, 露筋3露筋状文, 内外ハケメ					赤燻
1111	土師器	器	G25	b	12	4b		15.5	赤・白	白口コナリ, 内外ハケメ, 内外ハケメ入り					赤燻
1112	土師器	器	G3	b	8・9・13	露筋14		31.1	赤・赤・黒	内外ハケメ					赤燻
1127	土師器	器	E11	k	13	5a		9.5	白・赤・黒	露筋, 内外ハケメ					
1128	赤土師	器						15.3	白・赤・黒	白口コナリ					
1129	縄文土器	磁鉢	E11	q	17	露筋2		8	赤・灰	片磨削付文, 露筋露筋文, 内外露筋状文・ハケメ, 内外ハケメ					赤燻, 内外口, 出土地点不明, 赤燻
1130	縄文土器	磁鉢	E11	e	5	露筋1		5a	滑	磨り消し, 縄文など, 露筋露筋文					露筋露筋

観 察 表

木製品観察表 (容器) (1)

凡 例 材 質 観測には測定紙、観測板を用く(→)は、未測定・肉観測によるものである。
 注 記 * 正法、奥、奥、内、合子の内径、外：合子の外径 ()、積算値に*があるものは注文である。物物の長、幅は存在、存在である。
 観 考 内：内径、外：外径、底：底面、幅幅径、縦、木打孔については完前品の木製数を記入した。

報告 No.	種類	材質	木取り	加工位置				寸法 (cm)				備 考				
				取込	プロット	位置	通数番号	壁と 開口	A 口径	B 深高	筒 身長		C 底径	D 厚さ		
015	漆製皿	モリノキ	縦木・横材	BC	E31c22	測器1(占)	5							0.5	漆作り(表:赤色、底:緑青褐色)	
016	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31b15	測器1	5c	14.0	1.9		10.0	0.5	内:漆色付新物付(付・)	1.0	内:漆色付新物付(付・)	
017	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31d2	測器1	5c	16.1	1.4		12.0	0.6		1.0		
018	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31d1	測器1	5c	17.0	1.3		14.0	0.3		1.0		
019	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31d16	測器1	5c				12.2	0.25	内底、漆塗	1.0		
020	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31b20	測器1	5b	17.9	1.6		14.4	0.55	幅幅径 内: 対物皿	1.0		
021	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31d11	測器1	5c	18.0	1.5		12.8	0.7	幅幅径 内: 対物皿	1.0		
022	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31d6	測器1	5c	18.6	1.7		15.5	0.4		1.0		
023	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31c25	測器1	5d	19.6	2.35		15.2	0.5		1.0		
024	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31d11	測器1	5c	19.7	1.7		15.8	0.45		1.0		
025	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31b5	測器1	5b	21.4	1.65		18.2	0.65	内底、対物皿	1.0		
026	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31d1	測器1	5c	21.7	2.0		17.7	0.5	幅幅径 内: 対物皿	1.0		
027	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31c12	測器1(占)	5c	22.3	1.7		20.0	0.65	幅幅径 内: 対物皿	1.0		
028	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31b20	測器1	5c	13.8	1.2	0.9	0.3	9.7	0.7		1.0	
029	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31d6	測器1	5c			0.55	10.5	0.75	一部炭化	1.0		
030	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31g22	測器1	5d	18.2	1.5	0.9	0.6	10.4	0.75		1.0	
031	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31c20	測器1	5c	15.2	1.7	1.4	0.3	10.5	0.85		1.0	
032	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31b15	測器1	5c	16.2	2.1	1.2	0.9	11.8	0.9	底: 炭化、内底、対物皿	1.0	
033	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31b20	測器1	5c	15.6	1.4	1.05	0.35	11.7	0.97		1.0	
034	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31b13	測器1	5d	17.6	1.4	0.8	0.6	13.6	0.8	内: 対物皿	1.0	
035	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31c25	測器1	5d	17.6	4.75	4.15	0.6	8.4	0.8	内底、漆塗	1.0	
036	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31p15	測器2	5d	16.0	1.45		14.2	0.7	内底、対物皿	1.0		
039	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31v6	測器2	5c	17.5	1.3		14.2	0.5	幅幅径 内: 対物皿	1.0		
100	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31c1	測器2	5c	17.5	1.75		13.8	0.6		1.0		
101	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31p15	測器2	5d	17.8	2.5		13.7	1.1	幅幅径 内: 対物皿	1.0		
102	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31p15	測器2	5d	17.8	1.75		14.8	0.5	内底、対物皿	1.0		
103	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31v6	測器2	5c	18.0	1.5		13.0	0.7	内底、一部炭化	1.0		
104	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31g2	測器2(占)	5c	17.6	1.4	0.8	0.6	14.3	0.8	内: 対物皿	1.0	
105	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31v6	測器2	5d	18.6	1.7		15.5	0.75		1.0		
106	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31v7	測器2	5d	19.3	1.8		15.8	0.6		1.0		
107	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31c1	測器2	5c	18.4	1.8		14.0	0.6	内底、対物皿	1.0		
108	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31v10	測器2	5c	20.4	1.2		16.0	0.5	内底、対物皿	1.0		
109	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31p15	測器2	5d	20.6	1.8		13.1	0.5	幅幅径 内: 対物皿	1.0		
110	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31p15	測器2	5c	21.4	2.0		16.0	0.8	一部炭化、内: 対物皿	1.0		
111	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31v6	測器2	5c	21.3	2.08		18.8	0.8	内底、対物皿	1.0		
112	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31k12	測器2	5c	21.2	1.8		17.3	0.65	底: 一部炭化、内底、対物皿	1.0		
113	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31v7	測器2	5c	21.8	1.3		20.6	0.6	底: 一部炭化、内底、対物皿	1.0		
114	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31p15	測器2	5c				0.55	16.0	0.8	幅幅径 内: 対物皿	1.0	
115	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31v7	測器2	5c				0.4	10.0	0.6		1.0	
116	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31p15	測器2	5c	24.8	5.3	4.5	0.8	12.6	1.0		1.0	
117	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31p15	測器2	5c				13.8	0.6		1.0		
118	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	BC	E31v2	測器2	5d	10.0	5.5	5.1	0.4	6.6	1.2	内底、漆塗	1.0	
160	漆製の蓋	ヒノキ	縦木・横材	D	H7b4 V1 V3a			19.6	1.8		16.9	0.9	幅幅径 内: 対物皿	1.0		
209	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	E	H5d3	S095	2	16.8	1.5		14.5	0.65	底: 対物皿	1.0		
210	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	E	H5d1	S095	2	16.8	1.7		16.4	0.8	幅幅径 17	1.0		
228	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v5	測器14	中	18.5	1.6		13.8	0.7	積算(上)か 一部炭化	1.0		
229	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v10	測器14	中	18.8	1.8		16.6	0.6	一部炭化、内底、対物皿	1.0		
230	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v9	測器14	中				0.6	21.8	0.95	内底、対物皿	1.0	
231	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v7	測器14	中	17.6	2.05		14.4	0.6	内底、漆塗、対物皿	1.0		
232	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G3a16	測器14	中	12.8	4.4		8.3	0.8	幅幅径 内: 対物皿	1.0		
233	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v7	測器14	中	15.4	2.7		10.8	0.7	底: 一部炭化	1.0		
234	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v10	測器14	中				0.4	9.0	0.6	幅幅径 内: 一部炭化	1.0	
235	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v16	測器14	中				1.05	11.6	0.5	積算(上)か 底: 対物皿	1.0	
236	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v4	測器14	中				2.4	10.2	0.8	幅幅径 内: 対物皿	1.0	
237	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v10	測器14	5	18.8						幅幅径 内: 対物皿	1.0	
328	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v10	測器14	中	内 16.5 外 17.2	5.7		16.0	0.5		1.0		
368	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v5	測器14	下	14.5	1.4		12.0	0.5		1.0		
381	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v23	測器14	下				12.0	0.8		1.0		
382	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v3	測器14	下	15.5	1.3		13.1	0.6	積算(上)	1.0		
383	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v23	測器14	下	14.6	1.5		11.0	0.85		1.0		
384	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v23* G2v3	測器14	下	15.1	1.4		15.6	0.75		1.0		
385	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v22	測器14	下	15.8	1.9		13.2	0.65	幅幅径 内: 同心円状加工	1.0		
386	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v16	測器14	下	16.0	1.6		13.2	0.45	底: 同心円状加工	1.0		
387	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v18	測器14	下				14.0	1.1	幅幅径 内: 対物皿	1.0		
388	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v4	測器14	下	16.4	1.5		13.9	0.6	幅幅径 内: 対物皿	1.0		
389	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v4	測器14	下	16.3	1.7		13.1	1.0		1.0		
390	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v15	測器14	下	17.2	1.3		14.8	0.8	底: 同心円状加工	1.0		
391	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v22, 23	測器14	下	18.4	2.4		13.3	0.4		1.0		
392	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v12, 17	測器14	下	16.8	1.8		14.0	1.35	幅幅径 内: 炭化	1.0		
393	漆製の蓋	ケヤナギ	縦木・横材	H	G2v4	測器14	下	17.4	1.5		15.6	0.7	幅幅径 内: 炭化	1.0		

木製品観察表（容器）(2)

報告 No.	種別	組織	本取リ 期日	加工状態			A 口径	B 筒高	H 筒長	質量 (g/cm)			C 容積	D 径	備 考	
				ドリッド 単位	濃縮番号	富士 標記				容積	22 高の 乾貯	容積率				
294	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m13	昭和 14	下野					14.6	0.7			
295	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m5	昭和 14	下野	17.6	1.8			15.5	1.2	糖縁系 5		
296	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m15	昭和 14	下野	18.1	1.8			16.5	1.15	糖縁系 11 : 一部炭化		
297	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m25	昭和 14	下野	18.8	2.15			17.2	0.7			
298	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	F3n21	昭和 14	下野	19.3	1.5			18.7	0.85	糖縁系 10 対物性		
299	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m23	昭和 14	下野	20.6	1.05			16.8	0.8	炭系・一部炭化		
300	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	F3n16	昭和 14	下野	19.6	1.8			16.0	0.6			
301	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m22	昭和 14	下野	19.6	2.1			17.2	1.1	糖縁系 4 系 : 対物性		
302	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2n4	昭和 14	下野	20.0	2.05			17.4	1.2	炭系・一部炭化		
303	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2n3	昭和 14	下野	21.0	1.05			18.4	0.95			
304	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m14	昭和 14	下野	21.1	1.75			17.1	0.6	糖縁系 5 内系 : 対物性・一部炭化		
305	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m23	昭和 14	下野	21.4	2.0			18.4	0.65	内 : 炭化・対物性		
306	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2n3	昭和 14	下野					22.8	0.75			
307	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2n14	昭和 14	下野	35.4	3.7			31.2	0.6			
308	炭物製白粉	トナリ科	熊本・梶江	H	G2m22	昭和 14	下野	22.0	2.3			18.0	0.9	糖縁系 5 内 : 炭化・対物性		
309	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2n16	昭和 14	下野	24.0	2.3			20.0	0.8	炭系・同心円状径 2 一部炭化		
310	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m22	昭和 14	下野	22.4	2.25			19.8	0.9	糖縁系 27 内系 : 対物性		
311	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2n8	昭和 14	下野				0.25	18.4	0.65			
312	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m21	昭和 14	下野	25.4	2.6	2.68	0.55	21.5	0.6			
313	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m15	昭和 14	下野	11.4	3.35			8.2	0.3	系 : 炭化		
314	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m15	昭和 14	下野					9.2	1.3	内 : 対物性		
315	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m10	昭和 14	下野					9.35	0.9			
316	炭物製白粉	トナリ科	熊本・梶江	H	G2n5	昭和 14	下野	15.5	6.4	5.05	1.35	14.9	1.9	内径 15mm : 炭系 1 系		
317	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2n9	昭和 14	下野				3.0	9.6	2.0			
318	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2n9	昭和 14	下野				2.1	12.5	1.95	炭系 : 同心円状径 1mm 糖縁系 17 内 : 対物性		
319	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2g23	昭和 14	下野	12.2	2.3			8.8	2.0	糖縁系 5		
320	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2n9	昭和 14	下野	16.8	1.6			16.25	1.2			
321	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2g4	昭和 14	下野					14.6	0.85	中心に筒内径 1.5 × 1.0mm 系ある 1 系糖縁系		
322	炭物製白粉	トナリ科	梶江	H	G2n2	昭和 14	下野	長 11.7	幅 11.1				2.5			
323	炭物製白粉	トナリ科	梶江	H	G2m18	昭和 14	下野	長 13.9	幅 10.0				4.5			
324	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2m5	昭和 14	下野	長 16.8	幅 16.4				1.8			
325	炭物製白粉	ケヤキ科	熊本・梶江	H	G2n9	昭和 14	下野	長 16.4	幅 16.7				1.8			
326	炭物製白粉	トナリ科	梶江(中心)	H	G2m22	昭和 14	下野	長 14.25	幅 10.1					糖縁系 4		
012	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	F10n25	昭和 7		長 10.5				9.9		0.3 系 : 炭化(対物性)		
013	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	F10n25	昭和 7		長 11.5				3.7		0.45 内 : 炭化(対物性)		
036	炭物製白粉(炭)	トナリ科	梶江	HC	E11n6	昭和 1	5e	長 34.9	幅 22.2			13.0		0.3 木釘孔 12		
037	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11n10	昭和 1	5d	長 19.8				7.35		0.7		
038	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	D11x22	昭和 1	5e	長 23.9				2.9		0.3		
039	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11n1	昭和 1	5d					0.95	18.5	*	帆布	
040	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11n18	昭和 1	(5d) 5c					0.6	13.5		木釘孔 5	
041	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11n6	昭和 1	(5c) 5c					0.7	14.7		木釘孔 4	
042	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11n1	昭和 1	5e					0.75	17.3	*	系 : 対物性	
043	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11n7	昭和 1	5e					0.75	19.0	*		
044	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11n11	昭和 1	5e	長 23.7 幅 25.5				4.0			0.3	
045	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11n11	昭和 1	5e	長 14.2				3.9			0.3	内 : 炭化(対物性)
046	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11n8	昭和 1	(5c) 5e	長 4.8				4.5			0.3	
047	炭物製白粉(炭)	トナリ科	梶江	HC	E11n17	昭和 1	5e	長 20.8				3.3			0.5	
048	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11n1	昭和 1	5e	長 12.9				3.4			0.3	
049	炭物製白粉(炭)	トナリ科	梶江	HC	E11n17	昭和 1	5e					0.65	23.0	*		内 : 炭系
119	炭物製白粉	トナリ科	梶江 製 : 梶江 製 : 梶江	HC	E11p15	昭和 2	5d	長 16.8	4.05	3.15	0.9	17.4	*	0.2	内 : 炭化(対物性) 木釘孔 4	
120	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11n6	昭和 2	5c					0.8	13.3			木釘孔 6
121	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11x11	昭和 2	5d					0.8	15.8			内 : 炭系 木釘孔
122	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11p15	昭和 2	5d					0.6	12.7			木釘孔 6
123	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11p3	昭和 2	5c					0.9	14.4	*		木釘孔
124	炭物製白粉(炭)	トナリ科	梶江	HC	E11x17	昭和 2	5d					0.9	52.0	*		内径 : 対物性
125	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11p11	昭和 2	5d	長 15.8	4.75	4.0	0.75	17.8		0.3		糖縁系 4 系 : 対物性
126	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11p4	昭和 2	5c					0.8	17.4			糖縁系
127	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11p15	昭和 2	5d						0.7			
128	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11p15	昭和 2	5d	長 14.5				5.0			0.6	
129	炭物製白粉(炭)	トナリ科	梶江	HC	E11p15	昭和 2	5c	長 6.2				8.6			0.3	木釘孔
130	炭物製白粉(炭)	トナリ科	梶江	HC	E11p15	昭和 2	5d	長 5.1				7.6			0.2	木釘孔
131	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11p15	昭和 2	5d	長 22.0				4.0			0.15	
132	炭物製白粉(炭)	トナリ科	梶江	HC	E11p15	昭和 2	5d	長 21.0				3.5			0.4	木釘孔
133	炭物製白粉(炭)	トナリ科	梶江	HC	E11x17	昭和 2	5e	長 30.9				3.4			0.5	木釘孔
134	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11p15	昭和 2	5d	長 19.1				3.1			0.3	
135	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11p15	昭和 2	5d	長 5.4				8.9			0.35	
136	炭物製白粉(炭)	トナリ科	梶江	HC	E11x11	昭和 2	5e	長 48.78				3.8			0.49	木釘孔
137	炭物製白粉	トナリ科	梶江	HC	E11x16	昭和 2	5b	長 21.4				10.5			0.2	
161	炭物製白粉	トナリ科	梶江	D	H7n5	V1						1.1	22.6	*		木釘孔 対物性
162	炭物製白粉	トナリ科	梶江	D	O7n5	V1						15.6			4.2	0.7
163	炭物製白粉	トナリ科	梶江	D	G7n6	V1						7.8			6.1	0.7
239	炭物製白粉(炭)	トナリ科	梶江	H	G2n10	昭和 14	中野	長 17.4				3.85			0.3	

観 察 表

木製品観察表 (容器) (3)

報告 No.	種別	樹種	本取り 期日	加工位置				公差 (mm)						備 考			
				地区	グリッド 順位	選別番号	富士 標高	A 口径	許 容値	H1 材高	H2 高の 約率	C 材径	容 積 定		D 材高		
240	曲物板	杉	夏目	H G3a22	選別 14	中選										本板長 2 孔 1 月 2 期印 内外: 対物組	
241	曲物	ヒノキ	夏目	H G3b10	選別 14	中選	20.75	4.7	3.9	0.8	21.5	0.3				本板長 7 月: 黒澤徳 内外: 対物組	
242	曲物板	スギ	夏目	H G2b3	選別 14	5					0.9	18.25				本板長 0 一帯酸化	
243	曲物板	スギ	夏目	H G3a10	選別 14	中選					0.8	16.2				本板長 5	
244	曲物板	杉	夏目	H G3b10	選別 14	中選					0.9	17.6				本板長 表裏: 対物組 裏: 一帯酸化	
245	曲物板	杉	夏目	H G2b24	選別 14	中選					0.9	18.0				本板長 一帯酸化 対物組	
246	曲物板	杉	夏目	H G2c4	選別 14	中選					0.95	16.5				本板長 4 内: 対物組	
247	曲物板	ヒノキ	夏目	H G3a10	選別 14	中選					1.0	25.6 *				本板長 裏: 一帯酸化	
248	曲物板	杉	夏目	H G2b3	選別 14	5					0.9	20.0 *					
249	曲物板	ヒノキ	夏目	H F3a24	選別 14	中選					0.7	19.5 *				押収組 内外: 対物組 内: 酸化	
250	曲物板	杉	夏目	H G2c9	選別 14	中選					0.9	20.5				押収組 内: 対物組	
251	曲物	スギ	夏目	H G2b3	選別 14	5	17.85	7.1	5.7	1.4	19.0	0.3				押収組 4	
252a	曲物板	ヒノキ	夏目	H G2c4	選別 14	中選					1.1	19.2				押収組 4 内外: 対物組	
252b	曲物板	ヒノキ	夏目	H G2c4	選別 14	中選	長 14.3				2.1					0.25	
324	曲物	裏: ヒノキ 側: ヒノキ	夏目	H G2c9	選別 14	下選	12.7	4.6			12.1	0.2				本板長 6	
335	曲物	裏: ヒノキ 側: ヒノキ	夏目	H G2g13	選別 14	下選	10.8	4.3	3.75	0.55	10.8	0.2				本板長 4 一帯酸化 表外: 対物組	
336	曲物	裏: スギ 側: ヒノキ	夏目	H G2b15	選別 14	下選	19.9	3.4	2.4	1.0	20.75	0.25				本板長 7	
337	曲物板	ヒノキ	夏目	H G2c3	選別 14	下選	長 46.3 (E) 長 26.4 (G)			10.6 (E) 9.3 (G)						0.9	本板長
338	曲物	杉	夏目 側: 夏目 側: 夏目	H G2g5	選別 14	下選	17.9	2.1	1.3	0.8	17.9	0.2				本板長 4	
339	曲物	裏: スギ 側: ヒノキ	夏目	H G2b4	選別 14	下選	19.1	3.1	2.3	0.8	19.1	0.25				本板長 4 月: 黒澤徳	
340	曲物板	ヒノキ	夏目	H G2c13	選別 14	下選	長 17.2 長 18.5				4.5					0.35	本板長
341a	曲物板	杉	夏目	H G2b6_9	選別 14	下選					0.8	17.65					
341b	曲物板	杉	夏目	H G2b6_9	選別 14	下選	長 14.0				2.35					0.35	
342a	曲物板	杉	夏目	H G2m12	選別 14	下選					0.85	18.5					
342b	曲物板	杉	夏目	H G2m12	選別 14	下選	長 14.6				2.55					0.2	
343	曲物板	杉	夏目	H G2c3	選別 14	下選					1.2	16.5					
344	曲物板	杉	夏目	H G2c9	選別 14	下選					0.6	18.0 *					
345	曲物板	杉	夏目	H G2a2	選別 14	下選					0.9	15.2					
346	曲物板	杉	夏目	H G2m16	選別 14	下選					0.45	13.2					
347	曲物	裏: スギ 側: スギ	夏目 側: 夏目 側: 夏目	H G2a22	選別 14	下選					1.1	17.9				0.25	本板長 6 側板と裏板の間: 横
348	曲物板	杉	夏目	H G2g23 - G2b11	選別 14	下選					0.9	17.3					
349	曲物板	杉	夏目	H G2b8	選別 14	下選					0.85	18.8					
350	曲物板	杉	夏目	H G2b15	選別 14	下選					1.0	36.0 *					
351	曲物板	ヒノキ	夏目	H G2a25	選別 14	下選	長 31.6	幅 14.7			1.1						
352	曲物	ヒノキ	夏目	H G2b15	選別 14	下選	17.8	6.7	4.8	0.9	18.9	0.25				押収組 4 内: 対物組	
353	曲物	ヒノキ	夏目	H G2a22	選別 14	下選	18.5	6.7	6.5	1.2	19.9	0.35				押収組 4 内: 同心円状目立: 対物組 内: 黒色付着物: 対物組	
354	曲物板	杉	夏目	H G2a22 - G2c2	選別 14	下選					1.1	20.3					
355	曲物板	杉	夏目	H G2a22	選別 14	下選					1.15	20.0					
356	曲物板	杉	夏目	H F2a25	選別 14	下選					0.75	18.2 *					
357	曲物板	杉	夏目	H G2b3	選別 14	下選					1.1	19.3					
358	曲物板	杉	夏目	H G2b8	選別 14	下選					0.8	20.7					
360a	曲物板	杉	夏目	H G2b6_9	選別 14	下選					1.05	20.0 *					
360b	曲物板	杉	夏目	H G2b6_9	選別 14	下選	長 12.4				1.8					0.3	
361	曲物板	杉	夏目	H G2a22	選別 14	下選					1.0	24.0 *					
362a	曲物板	スギ	夏目	H G2c10	選別 14	下選	長 19.1				11.8					0.5	本板長
362b	曲物板	スギ	夏目	H G2c10	選別 14	下選	長 48.4				13.1					0.5	本板長
363	曲物板	杉	夏目	H G2m11	選別 14	下選	長 56.7				3.8					0.5	本板長 2 孔 1 月
225	樽か (樽か)	ケヤキ	榎木・夏目	H F3a15	選別 14	上選	長 20.2 長 19.5		7.2		長 15.5 長 13.8					樽 2.1 底 1.75	
227	樽か	モクレン属	榎木取り	H G3c5	選別 14	中選	長 47.2		6.1		幅 7.2					樽 1.8 底 3.2	
227	樽か	スノケ属	榎木取り	H G3a22	選別 14	下選	長 25.7				幅 13.5					樽 2.1 底 1.75	
328	樽か	スギ	榎木取り	H G2c5	選別 14	下選	24.4		35.0		22.0					樽 2.2 底 3.2	
329	樽か	ケヤキ	榎木・夏目	H G2b14	選別 14	下選	長 30.3		6.1		幅 25.6					樽 1.9 底 0.8	
330	樽か	スギ	榎木・夏目	H F2c21	選別 14	下選	長 24.8		4.1		幅 16.8					樽 2.2 底 3.5	
331	樽またけ	スノケ属	榎木・夏目	H G2b16	選別 14	中選	長 60.0		7.2		幅 30.4					樽 0.8 底 3.0	
332a	樽またけ	ケヤキ	榎木・夏目	H G2b8	選別 14	下選	長 84.0		5.1		幅 31.3					樽 4.5 底 3.0	
332b	樽またけ	ケヤキ	榎木・夏目	H G2b8	選別 14	下選	長 86.0		4.9		幅 29.3					樽 2.0 底 1.9	
333	樽	モクレン属	榎木・夏目	H G3c7	選別 14	下選	長 62.3		3.0		幅 11.7					樽 1.9	

木製品観察表（容器以外）(1)

No.	種 類	形状・断面	種 類	本制品	加工位置			長さ 寸法	重量 (mm)	厚さ 寸法	備 考		
					期別	グッド	割合					選別番号	加工 部位
001	柱板		タリ	丸木	RC	E10y13		P91 (S91)	47.9	12.4	10.0	底:タンニン	
002	柱板		タリ	丸木	RC	E10y19		P91 (S91)	56.4	13.4	12.5	底:タンニン	
003	柱板		タリ	平譲	RC	E10y16		P91 (S91)	56.1	16.25	9.5		
004	柱板		タリ	小譲	RC	E13y11		P91 (S91)	58.7	16.4	12.6		
005	柱板		タリ	丸木	RC	F10e5		P91 (S91)	75.0	19.9	12.9		
006	柱板		タリ	丸木	RC	E10y15		P91 (S91)	76.8	17.3	15.1	底:タンニン	
007	柱板		ケヤキ	丸木	RC	E10y24		P92 (S91)	73.1	17.2	19.0	底:タンニン	
008	柱板		タリ	丸木	RC	F10y4		P91 (S91)	47.6	13.2	11.4		
009	柱板		広	板目	RC	F10e2		P91 (S91)	38.2	11.3	6.3		
010	柱板		タリ	丸木	RC	F10e2		P91 (S91)	24.4	9.3	7.6		
011	月板		タリ	丸木	RC	F10e9		P91 (S91)	38.7	13.4	12.9	底:タンニン	
014	円形板か		杉	板目	RC	F10e25		S17	18.4	4.9	0.9	長さ径 23.5cm 片割れ	
050	榫継		イスノキ	一	RC	E11a5		取崩し	5e	12.0	4.25	0.7	
051	榫形継か	特殊(角)	杉	板目	RC	E11a16		取崩し	1e	34.1	1.7	1.6	本釘目
052	榫形継か		イイギリ	丸木	RC	E11a9		取崩し	5e	24.7	5.8	4.8	
053	榫状木製品		杉	板目	RC	E11a15		取崩し	1e	10.7	0.4	0.4	
054	継か		ショウブ	平譲	RC	E11a3		取崩し	1e	16.3	5.3	2.5	
055	継か		ショウブ	平譲	RC	E11a12		取崩し	1e	15.9	6.0	2.8	
056	円形木製品		ヒノキ	忌明け	RC	E11a5		取崩し	1e	16.6	7.25	0.7	動物排泄物も利用
057	榫継		杉	板目	RC	D11a16		取崩し	1e	10.9	1.3	0.4	
058	榫継		杉	板目	RC	E11a20		取崩し	1e	12.4	1.9	0.25	
059	榫継		杉	板目	RC	E11a11		取崩し	1e	17.95	2.05	0.4	
060	榫継		杉	忌明け	RC	E11a16		取崩し	1e	17.4	2.1	0.5	
061	榫継		杉	忌明け	RC	E11a20		取崩し	1e	18.0	1.9	0.3	
062	榫継		スギ	板目	RC	E11a20		取崩し	1e	17.9	2.0	0.45	
063	榫継		スギ	板目	RC	E11a13		取崩し	1e	18.2	1.4	0.7	
064	榫継		杉	板目	RC	E11a10		取崩し	1e	20.3	2.4	0.6	
065	榫継		杉	板目	RC	E11a5		取崩し	1e	22.4	2.3	0.75	
066	榫継		杉	板目	RC	E11a1		取崩し	1e	25.76	1.9	0.4	
067	板継		スギ	板目	RC	E11a5		取崩し	1e	20.55	2.9	1.0	
068	異形		ヒノキ	板目	RC	E11a11		取崩し	5e	11.5	3.4	0.6	表面片割れ
069	榫継		杉	忌明け	RC	E11a5		取崩し	1e	14.0	1.45	0.3	
070	榫継		杉	忌明け	RC	E11a10		取崩し	1e	11.7	1.35	0.3	
071	榫継		杉	板目	RC	E11a20		取崩し	1e	8.4	1.2	0.2	
072	榫継		杉	忌明け	RC	E11a5		取崩し	1e	15.5	1.85	0.45	
073	不明	短継状	杉	板目	RC	E11a25		取崩し	1e	13.9	2.4	0.75	下部酸化
074	不明	短継状	杉	板目	RC	D11a16		取崩し	1e	11.3	1.4	0.3	
075	不明	榫状(角)	杉	取崩し	RC	-		取崩し	1e	16.1	1.8	1.5	
076	不明	榫状(角)	杉	取崩し	RC	E11a15		取崩し	1e	16.2	0.8	0.5	裏と部:酸化
077	不明	榫状(円)	杉	取崩し	RC	E11a25		取崩し	1e	11.4	1.0	0.9	
078	不明	榫状(円)	杉	取崩し	RC	E11a21		取崩し	1e	10.5	0.6	0.45	
079	榫材	板状	スギ	板目	RC	E11a10		取崩し(古)	1e	9.8	3.9	0.9	裏:削り残し
080	榫材	板状	スギ	板目	RC	E11a15		取崩し	1e	27.3	0.2	0.6	片割れに丸割 片割れ
081	榫材	板状	ケヤキ	板目	RC	E11a25		取崩し	1e	26.2	9.7	0.6	片割れに丸割 片割れ
082	榫材	短継状	杉	板目	RC	D11a22		取崩し	1e	31.9	4.3	0.6	
083	榫材	短継状	杉	板目	RC	E11a15, 20		取崩し(古)	1e	22.3	2.9	0.5	
084	榫材	短継状	杉	板目	RC	E11a21		取崩し	1e	20.0	2.7	0.3	
085	榫材	短継状	杉	板目	RC	E11a5		取崩し	1e	26.8	4.5	0.5	
086	不明	加工材	コナラ製アカガシ産	取崩し(心材)	RC	E11a8		取崩し	1e	19.1	8.7	8.3	片割れ 本継か
087	不明	板状	広	丸木	RC	E11b10		取崩し	1e	16.9	2.65	2.8	
088	榫材	板状	コナラ製アカガシ産	取崩し(心材)	RC	E11a8		取崩し	1e	31.6	2.5	4.4	
089	不明	板状	杉	板目	RC	E11a25		取崩し	1e	22.2	10.35	1.5	
090	不明	榫状(角)	杉	取崩し	RC	E11a15		取崩し	1e	26.0	1.2	1.0	榫形の継か
091	板		広	丸木	RC	D11a21	VI	取崩し	1e	22.1	7.4	6.2	
092	板		広	丸木	RC	E11a16		取崩し	1e	22.05	3.4	2.8	
093	板		広	丸木	RC	E11a1		取崩し	1e	30.7	6.3	5.8	
094	板		広	丸木	RC	E11b10		取崩し	1e	47.9	12.1	10.3	
095	不明	榫状(円)	ハイノキ製ヤウナギ産	丸木	RC	E11a15		取崩し	1e	30.3	5.85	5.6	
096	不明	榫状(円)	広	取崩し(心材)	RC	E11a15		取崩し	1e	16.85	4.1	4.25	
097	不明	板状	スギ	取崩し	RC	E11a10		取崩し	1e	19.65	1.7	1.9	
138	大継目		スギ	取崩し	RC	E11p15		取崩し	2e	44.3	3.6	2.55	榫形製品も利用
139	榫状木製品		杉	取崩し	RC	E11w7		取崩し	2e	21.1	0.5	0.35	
140	円形板か		杉	板目	RC	E11p3		取崩し	2e	18.0	4.8	0.8	長さ径 27.0cm
141	一本継		ブナ属	取崩し	RC	E11a1		取崩し(古)	5e	全 83.6 骨 37.2	18.7	榫 継 3.7 骨 1.1 骨 2.25	
142	透肉下駄		モクレン属	板目	RC	E11X12		取崩し	1e	19.3	8.5	6.3	
143	不明	短継状	杉	板目	RC	E11q15		取崩し(古)	1e	9.9	1.8	0.3	
144	榫継		杉	板目	RC	E11w2		取崩し	1e	13.9	1.75	0.2	
145	榫継		杉	板目	RC	E11w8		取崩し	1e	15.3	1.3	0.35	
146	不明	加工材(角)	広	板目	RC	E11p15		取崩し	2e	35.0	9.3	7.9	
147	不明	板状	杉	取崩し	RC	E11a10		取崩し	2e	21.7	6.3	8.05	
148	不明	短継状	杉	板目	RC	E11p15		取崩し	2e	22.7	5.0	0.3	先端部の透肉のみ酸化
149	不明	板状	広	板目	RC	E11w8		取崩し	2e	35.0	4.5	0.7	
150	不明	短継状	杉	忌明け	RC	E11p15		取崩し	2e	31.4	1.8	0.3	
151	不明	短継状	杉	板目	RC	E11p15		取崩し	2e	24.7	2.1	0.2	
152	不明	榫状(角)	杉	取崩し	RC	E11p15		取崩し	2e	18.3	0.8	0.5	
153	不明	榫状(円)	杉	取崩し	RC	E11v2		取崩し	2e	15.7	0.9	0.9	榫形の継か
154	榫継	加工材	杉ノキ	板目	RC	E11p15		取崩し	2e	27.6	25.1	8.4	
155	不明	榫状(円)	杉	取崩し	RC	E11p15		取崩し	2e	68.9	1.95	1.95	榫形の継か

観 察 表

木製品観察表 (容器以外) (2)

No.	種 類	形状・画面	組 種	木 種	取付	加工状態			長さ (mm)	厚さ (mm)	備 考		
						彫刻	グリット	継合					
156	扉材	板状	扉	板付	板付	板付	板付	板付	54	36.1	3.2	0.65	
157	扉材	板状	扉	板付	板付	板付	板付	板付	5c	7.4	0.9	0.2	
158	扉材	板状	扉	板付	板付	板付	板付	板付	5c	37.6	3.5	0.9	
159	扉材(端部取付)	板状(円)	扉	板付(心付)	板付	板付	板付	板付	11.5	4.3	2.4		
164	扉材	板状	扉	板付	板付	板付	板付	板付	19.4	2.6	0.7		
165	横紐か			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	40.6	7.5	0.5	一部反化 腐朽痕多数	
166	火磨目			板付	板付	板付	板付	板付	21.1	2.8	1.3	工磨跡?転用	
167	礎石			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	27.1	13.3	8.5		
168	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	39.3	19.1	14.4		
169	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	60.4	26.1	18.9		
170	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	35.8	14.0	9.8		
171	礎石			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	28.0	27.4	5.2		
172	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	90.4	22.4	17.7		
173	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	72.9	16.8	12.6		
174	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	70.0	17.8	14.2		
175	礎石か			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	19.8	11.6	8.1		
176	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	21.4	7.7	7.7		
177	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	29.5	9.0	8.8	継ぎ接合	
178	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	37.1	8.9	8.4		
179	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	37.7	7.3	7.4	一部反化	
180	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	44.9	7.9	7.2		
181	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	51.8	8.6	7.4		
182	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	39.5	14.3	11.2		
183	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	29.0	7.7	7.0		
184	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	23.3	8.7	6.1		
185	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	20.1	12.4	7.7		
186	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	61.9	13.5	10.6		
187	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	76.26	18.4	13.9		
188	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	49.8	15.26	11.7		
189	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	53.9	13.0	11.6		
190	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	52.2	14.9	8.8		
191	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	53.0	19.6	10.3		
192	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	79.55	12.5	12.9		
193	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	62.8	14.4	8.0	継ぎ接合	
194	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	49.2	14.3	11.0		
195	礎			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	21.45	4.3	4.8		
196	礎			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	25.0	7.3	4.1		
197	礎			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	39.3	8.2	7.8		
198	礎			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	31.4	8.0	6.5		
199	礎			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	33.3	9.0	7.7	固定径 8.6cm	
200	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	41.55	15.7	18.0		
201	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	31.2	9.5	8.5		
202	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	36.9	7.7	7.8		
203	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	24.9	9.4	7.8		
204	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	17.0	8.2	7.4		
205	板			板付	板付	板付	板付	板付	33.2	14.3	2.4		
206	板			板付	板付	板付	板付	板付	29.2	9.9	2.8		
207	扉材	板状	扉	板付	板付	板付	板付	板付	22.3	6.1	2.0		
208	平組	枠状(円)		丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	9.9	0.8	0.8	基準寸	
211	直板平組	枠	枠	丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	2	32.8	9.8	2.1	丸物付
212	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	2	44.2	6.2	4.6	継ぎ接合
213	礎			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	2	19.0	4.7	4.6	
214	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	25.5	9.1	8.4		
215	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	42.9	19.5	19.9		
216	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	54.5	19.6	21.0		
217	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	44.9	20.3	21.7		
218	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	52.5	18.5	19.0		
219	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	40.3	21.5	16.6		
220	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	37.1	22.4	20.1		
221	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	49.7	19.7	22.8		
222	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	37.8	15.6	14.2		
223	柱			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	27.0	20.0	12.3		
224	平組	板状	扉	板付	板付	板付	板付	板付	4	32.5	22.3	5.2	
226	火磨目			板付	板付	板付	板付	板付	上割	21.8	2.3	1.25	
227	骨状木製品			板付	板付	板付	板付	板付	上割	14.3	0.55	0.45	
234	骨状木製品			板付	板付	板付	板付	板付	上割	25.5	0.7	0.5	
235	骨状木製品			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	中割	22.5	0.6	0.5	
236	平組	板状	扉	板付	板付	板付	板付	板付	中割	13.0	4.6	0.65	
237	扉材	板状	扉	板付	板付	板付	板付	板付	中割	20.1	7.9	0.5	動物肌転用
238	扉材	板状	扉	板付	板付	板付	板付	板付	中割	23.4	2.5	0.7	
239	扉材	板状	扉	板付	板付	板付	板付	板付	中割	10.5	2.5	0.63	
240	平組	加工材		丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	中割	10.2	9.5	1.8	動物肌の可能性あり
241	礎			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	5	16.9	5.7	2.4	
242	礎			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	16.65	6.1	4.5		
243	直板平組	枠	枠	丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	28.2	15.9	2.3		
244	礎			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	42.0	9.0	3.45		
245	骨状平組	枠	枠	丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	中割	67.2	7.5	5.1	新径 3.0
246	火磨目			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	中割	9.7	1.7	1.8	
247	3号木脚			丸木	丸木	丸木	丸木	丸木	中割	11.9	3.3	0.4	

木製品観察表（容器以外）(3)

No.	種 類	形状・画面	種 類	本局用	加工位置				長さ 1/10mm	幅 1/10mm	厚さ 1/10mm	備 考
					部位	ドリット	継 合	濃縮番号				
268	2号本脚		ビノキ	板目	組	G34-4		組	10.9	2.7	0.4	
269	1号本脚		ビノキまたはスギ	板目	組	G32-2		組	25.9	3.5	0.5	
270	基本寸		イノキまたはスギ	丸太	組	F36-3		組	78.6	2.9	2.5	
271	途中		スギ	板目	組	G26-5		組	32.0	1.6	0.4	
272	角部材		スギ	板目	組	G24-4		組	9.4	1.7	1.3	
273	工角材		スギ	板目	組	F36-19		組	9.5	2.0	1.2	
274	不明	短冊状	許	板目	組	G36-25		組	24.1	2.4	0.4	
275	不明	棒状(円)	スギ	板目	組	G30-20		組	43.2	1.1	0.75	
276	不明	棒状(円)	許	板目	組	G36-22		組	29.75	1.1	0.95	
277	不明	棒状(円)	許	板目	組	G36-24		組	37.8	1.4	1.4	
278	不明	棒状(円)	許	板目	組	G36-10		組	45.4	1.5	1.3	
279	建築部材か	板状	スギ	板目	組	G29-4		組	27.6	30.75	3.7	
309	窓枠か	板状	スギ	板目	組	G26-17		組	39.2	5.9	5.1	
304	大開口		許	板目	組	G36-9		組	35.8	2.9	1.5	部材も板目
305	大開口		許	板目	組	G36-5		組	22.8	2.7	1.8	
306	大開口		スギ	板目	組	F36-20		組	23.0	1.25	1.25	
307	明毛		スギ	板目	組	G36-18		組	15.6	1.15	0.85	濃縮丸
308	窓枠か		広	板目(心志)	組	G36-2		組	25.4	4.5	4.0	
309	窓枠か(内折れ)		広	板目	組	G36-23		組	17.5	9.6	0.7	
370	種 植		ツバキ属	板目(心折)	組	G36-3		組	44.5	7.5	7.2	
371	板目下駄(ソノバ)		トチノキ	板目	組	G36-17		組	34.5	24.9	7.8	釘打用・羽根皿 骨組み 2.3cm、U字釘 総釘 11cm
372	点納平線 漆		ケヤキ	板目	組	G36-13		組	27.9	11.5	2.1	
373	点納平線 漆		モクレン属	板目	組	G36-4		組	32.5	16.6	2.5	
374	点納平線 漆		アザミ	板目	組	G36-4		組	35.5	13.9	2.25	
375	漆塗せき線		バラ科ナシ属科	縦木取り	組	G36-23		組	15	22.7	13.4	釘幅 13cm、奥行 13cm、高さ 12cm (固定)
376	納行(身+納)		スギ	納・板目	組	G36-14		組	27.7	幅 7.9 厚 9.3	身 0.9 納 1.0	身はヒヨウタンを使用
377	納行(身+納)		スギ	納・板目	組	G26-5		組	9.15	10.6	0.9	身はヒヨウタンを使用
378	納行(身+納)		スギ	納・板目	組	G36-7		組	19.8	幅 9.9 厚 9.1	身 0.9 納 1.0	濃縮丸・濃縮丸も板目 身はヒヨウタンを使用
379	子子		スギ	板目	組	G24-4		組	18.45	1.4	0.75	
380	子子か		許	板目	組	G36-2		組	15.5	0.75	0.5	
381	子子か		スギ	板目	組	G36-3		組	17.1	3.6	0.7	
382	種 植		ツバキ属科	板目	組	G36-3		組	4.7	12.3	0.75	
383	製材木製品		許	板目	組	G36-2		組	17.9	0.7	0.5	
384	製材木製品か		許	板目	組	G36-2		組	18.0	0.95	0.45	
385	製材木製品		許	板目	組	G36-4		組	18.8	0.65	0.6	
386	製材木製品		許	板目	組	F36-25		組	18.8	0.7	0.5	
387	製材木製品		許	板目	組	G36-9		組	19.9	0.65	0.5	
388	製材木製品		許	板目	組	G36-14		組	21.9	0.8	0.5	
389	製材木製品		許	板目	組	G36-6		組	23.8	0.8	0.45	
390	製材木製品		許	板目	組	G36-5		組	26.7	1.2	0.6	
391	漆巾		許	板目	組	G36-21		組	32.4	1.7	0.8	
392	漆巾		許	板目	組	G36-10		組	21.0	1.85	0.25	
393	漆巾		許	板目	組	G36-9		組	18.2	1.45	0.3	
394	漆巾		許	板目	組	G36-20		組	15.5	1.7	0.3	
395	漆巾		スギ	板目	組	G36-9		組	13.3	1.0	0.3	
396	漆巾		許	板目	組	G36-3		組	13.3	1.4	0.25	
397	漆巾		許	板目	組	G36-9		組	6.9	1.2	0.4	
398	漆巾		スギ	板目	組	G29-3		組	14.25	1.55	0.35	
399	漆巾		許	板目	組	G26-5		組	6.0	2.0	0.25	
400	漆巾か		スギ	板目	組	G26-6		組	16.9	1.3	0.4	
401	漆巾か		許	板目	組	G36-10		組	20.4	1.5	0.55	
402	漆巾か		許	板目	組	G36-2		組	24.5	1.8	0.6	
403	漆巾か		許	板目	組	G36-10		組	14.6	2.15	0.6	
404	漆巾か		許	板目	組	G36-6		組	8.5	1.5	0.3	
405	漆巾か		許	板目	組	G36-5		組	20.3	3.1	0.45	
406	刀ノ部		スギ	板目	組	G36-4		組	26.5	1.85	1.3	
407	1号本脚		スギ	板目	組	G36-16		組	17.6	2.7	0.8	
408	5号本脚		スギ	板目	組	G36-14		組	16.2	1.9	0.2	
409	0号本脚		スギ	板目	組	G36-22		組	9.9	3.7	0.5	
410	部材	棒状(平)	スギ	板目	組	G36-9		組	36.8	3.9	1.4	
411	部材	棒状(平)	許	板目	組	G36-6		組	30.8	3.8	1.2	
412	部材	棒状(平)	ビノキ	板目	組	G36-13		組	27.5	3.5	1.1	
413	不明	短冊状	許	板目	組	G36-23		組	13.8	3.0	0.7	網釘の可能性がある
414	部材か	短冊状	許	板目	組	G36-4		組	9.9	2.2	0.25	
415	部材	板状	スギ	板目	組	F36-25		組	28.5	11.6	0.8	
416	部材	板状	ビノキ	板目	組	G36-9		組	22.2	10.6	1.9	
417	大板か		ケヤキ	板目	組	G36-5		組	62.8	31.5	2.8	
418	建築部材か	加工材	タリ	板目(心折)	組	G36-21		組	47.3	21.7	10.5	
419	建築部材か	棒状(平)	ケヤキ	板目	組	G36-3		組	99.3	10.3	3.3	
420	建築部材	棒状(角)	許	板目	組	G36-11		組	96.7	8.2	3.6	全体が漆の残存
421	部材	加工材	コナラ属ノキ科	板目	組	G36-2		組	47.0	4.8	5.2	422と同形
422	部材	加工材	ツバキ属	板目(心折)	組	F36-22		組	37.7	6.6	5.7	421と同形
423	不明	加工材	ケンボクシ属	板目	組	G36-6		組	23.7	6.4	3.7	製品か
424	部材	板状	スギ	板目	組	G36-22		組	10.8	3.1	1.3	
425	不明	加工材	モリノキ属	板目(心折)	組	G36-2		組	8.0	2.95	1.5	
426	部材	板状	許	板目	組	G36-23		組	23.75	4.9	2.1	建築部材か

観 察 表

木製品観察表（容器以外）(4)

No.	種 類	形状・表面	種 類	本取り	加工状態				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備 考
					彫刻	グリッド	継合	塗装番号				
427	漆材	加工材	スチ	彫刻	無	G3a18	道路14	下層	19.7	4.7	4.0	
428	漆材	加工材	スチ	彫刻	無	G3j19	道路14	下層	25.5	5.7	5.0	
429	漆材	加工材	スチ	彫刻	丸木	G3r13	道路14	下層	37.6	5.6	5.1	継合残存
430	漆材	棟状(平)	非	彫刻	丸木	G3r7	道路14	下層	38.7	4.4	3.4	
431	漆材	棟状(内)	スチ	彫刻	丸木	G3r19	道路14	下層	39.75	3.3	2.2	
432	漆材	棟状(内)	スチ	彫刻	丸木	G3r14	道路14	下層	23.0	2.5	1.2	
433	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3R10	道路14	下層	26.0	1.95	2.1	
434	工具柄か	棟状(平)	非	彫刻	無	G3g13	道路14	下層	17.7	1.2	1.05	
435	漆材	加工材	スチ	彫刻	無	G3g13	道路14	下層	16.0	1.85	1.6	
436	漆材	棟状(平)	スチ	彫刻	丸木	G3r7	道路14	下層	41.1	3.7	1.2	
437	漆材	棟状(平)	非	彫刻	無	G3r13	道路14	下層	39.7	4.4	1.1	
438	漆材	棟状(平)	非	彫刻	無	G3r7	道路14	下層	27.25	3.0	1.9	
439	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	F3s23	道路14	下層	38.3	1.25	1.1	
440	漆材	棟状(平)	非	彫刻	無	G3R30	道路14	下層	35.8	1.1	0.5	
441	丸鋸柄か	棟状(内)	非	彫刻	無	G3r3	道路14	下層	31.0	1.5	1.5	下層腐乱・炭化
442	浮子か	棟状(内)	非	彫刻	無	G3r3	道路14	下層	28.3	1.5	1.1	
443	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3r2	道路14	下層	21.6	1.3	1.4	
444	納戸柄か	棟状(内)	非	彫刻	無	G3r6	道路14	下層	59.5	1.7	1.4	
445	納戸柄か	棟状(内)	非	彫刻	無	G3g2	道路14	下層	37.65	1.5	1.1	
446	納戸柄か	棟状(内)	非	彫刻	無	G3a18	道路14	下層	29.3	1.05	0.9	
447	漆材	棟状(内)	スチ	彫刻	丸木	G3s5	道路14	下層	25.7	1.45	1.35	
448	納戸柄か	棟状(内)	スチ	彫刻	丸木	G3a20	道路14	下層	17.2	1.45	1.2	
449	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	F3a24	道路14	下層	13.7	1.0	0.7	
450	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3a17	道路14	下層	28.2	1.7	1.5	
451	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3r8	道路14	下層	30.3	1.5	1.4	
452	漆材	棟状(内)	イイザリ	丸木	無	G3g24	道路14	下層	37.7	1.7	1.6	継合残存
453	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3a23	道路14	下層	47.2	1.4	1.1	
454	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3a18	道路14	下層	24.1	1.3	1.0	
455	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3a16	道路14	下層	17.6	1.5	1.2	
456	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3a17	道路14	下層	36.2	1.3	1.2	
457	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3r2	道路14	下層	37.5	1.55	1.55	
458	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3r9	道路14	下層	27.8	1.4	1.2	
459	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3g3	道路14	下層	33.7	1.25	1.15	
460	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	F3b16	道路14	下層	32.0	1.2	0.9	
461	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3c3	道路14	下層	24.8	0.9	0.4	
462	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3a19	道路14	下層	31.0	2.5	2.5	
463	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	G3a4	道路14	下層	32.0	3.5	3.5	裏・炭化
464	漆材	棟状(内)	非	彫刻	無	F3b21	道路14	下層	32.1	2.1	1.4	
465	漆材	柄状	非	彫刻	無	F3a23	道路14	下層	23.5	3.5	1.5	上部炭化
466	漆材	加工材	広	彫刻	無	G3a16	道路14	下層	25.2	10.5	4.9	
467	漆材	加工材	広	平磨	無	G3a16	道路14	下層	40.5	10.3	4.9	継合残存
468	漆材	加工材	広	平磨	無	G3c3	道路14	下層	45.0	10.3	4.2	継合残存
469	漆材	加工材	コナラ製アカカシ塗膜	平磨	無	G3c5	道路14	下層	32.35	8.85	4.1	
470	漆材	加工材	コナラ製アカカシ塗膜	平磨	無	G3a16	道路14	下層	42.5	7.45	5.8	
471	柄か	広	丸木	無	G3g3	道路14	下層	29.8	5.2	4.8	継合残存	
472	漆材	加工材	ツバサ製	丸木	無	F3b21	道路14	下層	16.1	10.2	6.8	
473	漆材	加工材	マツ製単線管巻膜	平磨	無	G3R14	道路14	下層	15.9	4.35	2.5	
474	植物素材か	加工材	ケヤキ	彫刻	無	G3a4	道路14	下層	24.3	13.7	4.7	
475	作葉白または隠 彫か	板状	モクレン製	彫刻	無	F3a25	道路14	下層	43.9	20.6	5.1	
476	植物素材または隠 彫か	板状	ケヤキ	彫刻	無	G3g13	道路14	下層	30.7	21.8	4.8	裏・炭化・腐物粘
477	植物素材または隠 彫か	板状	ケヤキ	彫刻	無	G3g5	道路14	下層	24.2	18.8	3.9	
478	植物素材または隠 彫か	板状	ケヤキ	彫刻	無	G3R14, 15	道路14	下層	35.2	27.3	4.7	
479	漆材	加工材	ケヤキ	丸木	無	F3b21	道路14	下層	37.7	20.8	12.8	5×3cm厚み2か所
480	漆材	加工材	ケヤキ	丸木	無	G3r13	道路14	下層	79.9	19.8	11.8	
481	植物素材か	板状	ケヤキ	彫刻	無	G3r9	道路14	下層	74.5	33.9	4.9	
482	漆材	板状	無ハズ	彫刻	無	G3a14, 15	道路14	下層	94.4	15.7	2.8	
483	漆材	板状	無ハズ	彫刻	無	G3R14, 15	道路14	下層	94.1	13.4	3.8	
484	漆材	板状	タリ	彫刻	無	G3r13	道路14	下層	116.2	16.7	3.2	
485	柄	トネリコ製シロシシ	丸木	無	G3r9	道路14	下層	28.9	6.0	6.2	継合残存	
486	柄	アカメシロ	丸木	無	G3r15	道路14	下層	54.0	10.7	9.4	継合残存	
487	柄	コナラ製コナラ製	丸木	無	G3a6	SA75(道路14内)	F	54.7	13.3	様3.6	継合残存	
488	柄	イイザリ	丸木	無	G3r6	SA75(道路14内)	F	82.5	12.8	様5.8	継合残存	
489	柄	コナラ製コナラ製	丸木	無	G3a6	SA75(道路14内)	F	52.4	6.4	様4.1	継合残存	
490	柄	ヌルデ	丸木	無	G3a24	道路14 浪白状継合	A	無	88.6	9.0	様8.0	
491	柄	ケンケナシ製	丸木	無	G3R24	道路14 浪白状継合	A	下層	74.2	9.5	様6.5	
492	柄	イイザリ	丸木	無	G3r16	道路14 浪白状継合	B	下層	79.9	8.45	様6.9	上部炭化
493	柄	オニグルミ	丸木	無	G3c21	道路14 浪白状継合	B	下層	56.8	4.8	様4.8	
494	柄	イイザリ	丸木	無	G3r25/ G3c21	道路14 浪白状継合	B	下層	51.4	9.1	様8.1	継合残存
495	柄	広	丸木	無	G3r16	道路14 浪白状継合	B	下層	47.6	7.1	様6.1	継合残存
496	柄	オスエリ製	丸木	無	G3r11	道路14 浪白状継合	B	下層	68.5	7.9	様7.5	継合残存

木製品観察表 (容器以外) (5)

観 No.	種 類	形状・表面	組 種	木目	加工状態			長さ (mm)	厚さ (mm)	備 考		
					期別	ドリッド	磨位					
497	机		ガラス天板	丸木	机	G3:16	流路 14 頂肉状通欄 B	下磨	58.8	9.9	径 6.0	磨底残存
498	机		広	丸木	机	G3:16	流路 14 頂肉状通欄 B	下磨	130.3	6.6	6.1	磨底残存
499	机		コナラ鏡コナラ磨	— (欠版)	机	G3:16	流路 14 頂肉状通欄 B	下磨	80.0	10.1	径 6.5	磨底残存
500	机		トナノキ	丸木	机	G3:18	流路 14 頂肉状通欄 C	下磨	40.8	6.5	径 6.8	
501	机		広	丸木	机	G2:18	流路 14 頂肉状通欄 C	下磨	24.8	5.8	径 5.9	磨底残存

土製品観察表

No.	器種	ドリッド	中ドリッド	小ドリッド	遺精	磨位	径 (mm)	輪 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	焼成	遺存状況	備 考
1134	円筒支脚	G2	g/e	12・13・17・18・22/18	流路 14 下磨		111 (1.8)	134 (高)	11.6 (下磨)	—	焼成済	磨元	中付付近に円筒の透かし有
1135	円筒支脚	D11	s	17	流路 14 上磨		—	—	—	—	焼成済	磨元	磨元
1136	円筒支脚	G2	g	15	流路 14 下磨		67	56	57	238.6	焼成済	表面欠	内径の透かし有、外径 144mm
1137	円筒支脚	F3	v	25	流路 14 下磨		84	64	65	273.8	焼成済	表面欠	磨元
1138	中央支脚	F3	v	22	流路 14 下磨		56	62	40	145.1	焼成済	表面欠	磨元
1139	中央支脚	F3	v	21	流路 14 下磨		67	50	47	180.4	焼成済	磨元	磨元
1140	中央支脚	F3	k	11	日磨		118	29	27	92.8	焼成済	上下欠	磨元
1141	枡形傘	G3	b	9	流路 14 下磨		52 (1.8)	26 (高)	54 (下磨)	18.5	焼成済	磨元	約 1/4 残
1142	枡形傘	G3	h	13	流路 14 下磨		3.8	2.2	1.5	12.4	焼成済	磨元	約 1/3 残
1143	大型土鍋	14	a	12	日磨		52	47	45	71.3	焼成済	上下欠	磨元
1144	網型土鍋	H6	u	11	95 号		56	25	23	28.9	焼成済	磨元	高減あり
1145	網型土鍋	H5	W	6	SD1		49	14	13	6.9	焼成済	磨元	上下面に V 字状の磨痕
1146	網型土鍋	H5	a	25	流路 14 下磨		30	1.3	1.9	5.0	焼成済	上下欠	磨元
1147	丸形研習具	G2	a	9・10	流路 14 下磨		20	56	7	34.7	焼成済	磨元	土磨跡山登、磨などの磨痕破片を素材とする
1148	丸形研習具	E11	m	11	日磨		27	33	14	11.3	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1149	丸形研習具	P9	y	18	日磨		18	20	10	4.3	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1150	丸形研習具	G9	j	5	日磨		27	29	16	14.3	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1151	丸形研習具	G3	h	22~25	日磨		19	21	14	5.7	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1152	丸形研習具	G3	a	3・4・9・10	日磨		28	31	17	15.1	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1153	丸形研習具	G3	h	22~25	日磨		21	22	14	6.9	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1154	丸形研習具	E10	m	21	V 磨		24	26	11	9.5	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1155	丸形研習具	14	1	2	日磨		21	21	12	6.1	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1156	丸形研習具	H4	s/e	23・24/5・9	日磨		120	83	14	215.9	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1157	丸形研習具	H5	p	4	日磨		62	50	13	42.3	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1158	丸形研習具	H5	m	24	日磨		126	80	12	141.6	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1159	丸形研習具	H5	1	24	日磨		86	48	12	45.6	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1160	丸形研習具	H5	u	16	V 磨		105	76	15	114.9	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする
1161	丸形研習具	E11	1	20	V 磨		89	68	12	63.1	還元焼成	磨元	高減あり下磨、磨などの磨痕破片を素材とする

石器・石製品観察表

No.	器種	ドリッド	中ドリッド	小ドリッド	遺精	磨位	径 (mm)	輪 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	遺存状況	備 考	
1162	砥石	G3	b	10	流路 14 下磨		141	48	33	226.6	板状岩	下欠		
1163	砥石	G3	v	23・24	流路 14 上磨		49	28	4	7.7	灰岩	下右欠		
1164	砥石	G3	b	6	流路 14 下磨		119	107	44	817.1	安山岩	上下右欠		
1165	門石	G3	a	17	流路 14 下磨		162	95	74	1272.7	砂岩	下欠		
1166	砥石	G3	g	18	流路 14 下磨		41	20	3	19.8	板状岩	上欠		
1167	砥石	G3	b	25	流路 14 下磨		53	28	20	48.2	板状岩	上欠		
1168	砥石	G3	c	21	48 号	磨	47	31	27	34.7	板状岩	下欠	平面に磨痕なし	
1169	砥石	E11	v	19	流路 2 56 号	磨	88	180	105	1826.3		上下欠		
1170	砥石	E11	c	15	流路 2 56 号	磨	153	100	86	1398.8	板状岩	上下欠		
1171	砥石	G3	d	18	流路 2 56 号	磨	115	123	40	841.5	砂岩	上下欠		
1172	砥石	E11	v	12	流路 2 2 号	磨	64	42	25	14.6	板状岩	磨元		
1173	砥石	E11	v	7	流路 2 2 号	磨	34	32	30	6.4	板状岩	磨元		
1174	砥石	E10	v	23	流路 2 56 号	磨	79	35	27	77.4	安山岩	上下欠		
1175	砥石	H6	j	15	日磨		49	60	22	83.6	板状岩	下欠		
1176	石鏝	E11	m	10	日磨		90	68	20	194.5	安山岩	磨元		
1177	石鏝	E11	h	5	日磨		61	53	17	76.1	安山岩	磨元		
1178	石鏝	E11	g	5	日磨		76	61	14	79.2	安山岩	磨元	砥石に転用?	
1179	磨石石鏝	G3	e		SD1	磨	72	34	20	99.0	板状岩	上欠	刃部一次	
1180	石鏝	E11	e		磨	25	15	5	1.3	板状岩	磨元	磨し欠		
1181	石鏝	E11	d	19	日磨		25	18	5	1.3	板状岩	磨元	磨し、先磨欠	
1182	小玉	E11	v	19	流路 2 56 号	磨	5	5	3	0.1	板状岩	磨元		
1183	小玉	E11	v	8	流路 2 56 号	磨	4	4	3	1.3	板状岩	磨元		
1184	管玉	H5	q	1	SD8	磨	21	6	6	0.9	緑色結核石	磨元	両面穿孔	
1185	打製石鏝	F10	u	17	日磨		113	49	18	91.9	頁岩	上磨欠		
1186	磨石	H5	p	18	V 磨		80	65	58	452.8	安山岩	磨元		
1187	磨石	E11	b	25	日磨		83	68	57	374.8	安山岩	石欠		
1188	門石						108	81	45	861.0	安山岩	磨元		

観 察 表

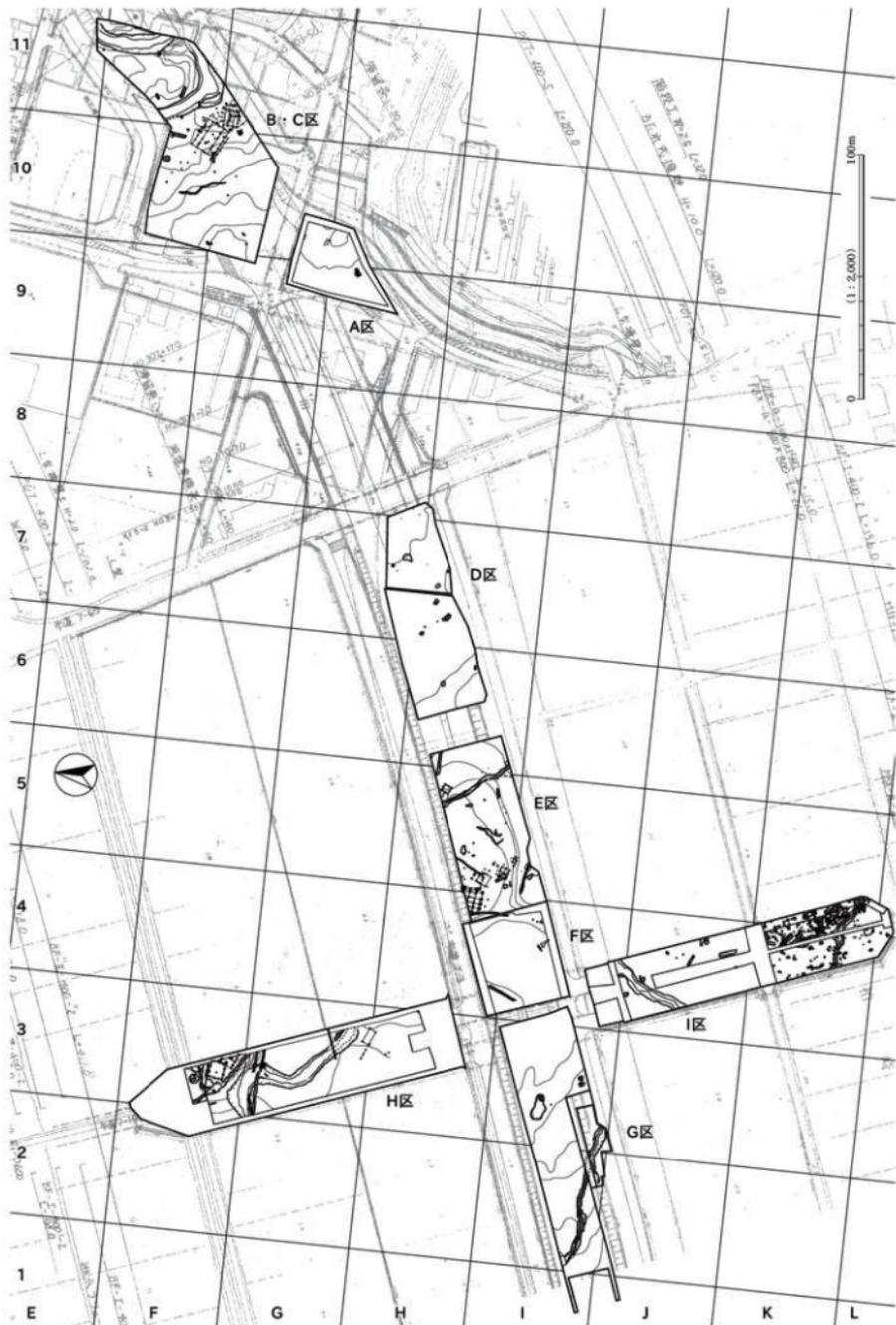
製鉄関連遺物・金属製品観察表

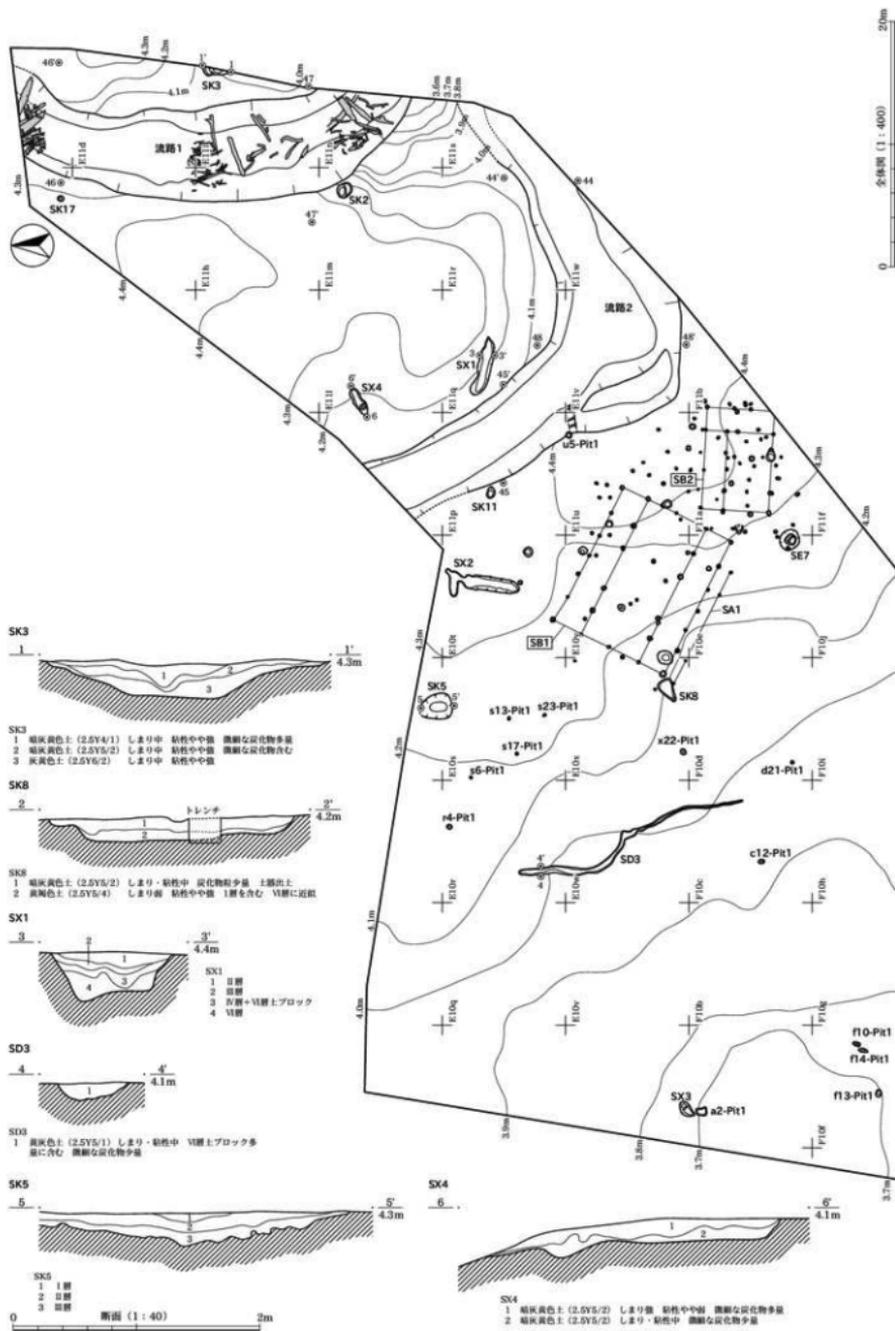
No.	品名	大グリッド	中グリッド	小グリッド	遺構	部位	長 (mm)	幅 (mm)	重 (g)	素材	遺存状況	備 考
1189	ワイゴロ(E1)	c	20		流路1		74	69	56	162.9	土曜鋼	左欠 区区土曜集中地点1
1190	ワイゴロ(F3)	v	21		流路14		89	76	73	302.6	土曜鋼	左欠 区区土曜集中地点1
1191	門弁	F1	u	2		遺構	47	50	21	39.2	流路	脆性に肉部あり
1192	ワイ	G3	b	9	流路14	下層	130	11	4	12.4	鉄	左欠欠 本区西心、区区土曜集中地点2
1193	ワイ	G3	b	15	流路14	下層	156	16	4	16.0	鉄	左欠欠 本区西心、区区土曜集中地点2
1184	ワイ	G3	m	6	流路14	下層	144	8	3	7.5	鉄	左欠欠 区区土曜集中地点1
1195	棒状鋼製品	G3	l	14	流路14	褐色色土層	207	9	5	9.4	鉄	左欠欠 区区土曜集中地点3
1196	曲り棒	G3	r	8	流路14	中層	162	32	5	59.6	鉄	左欠欠 区区土曜集中地点3
1197	ワイ	G3	s	5	流路14		151	13	3	16.6	鉄	脆欠欠 区区土曜集中地点3
1198	棒状鋼	G3	a	1	流路14	5層	35	21	6	6.4	鋼	脆欠欠 西郷村界、区区土曜集中地点1
1199	ワイ	E11	d	6	流路1	5e層	302	20	4	65.7	鉄	脆欠欠 区-C区土曜集中地点1
1200							72	59	16	36.4	鉄	上欠欠
1201	紐	H4	b	5	区層		56	54	5	19.7	鉄	左欠欠
1202	紐?	H4	s	9	区層		63	28	14	19.6	鉄	左欠欠
1203	ワイ	G7	v	19	区層		93	15	2	8.4	鉄	脆欠欠
1204	紐	H6	e	21	V層		70	19	10	44.1	鉄	脆欠欠
1205		H4	y	16	区層		25	46	0.3	2.6	鉄?	脆欠欠
1206	板状?	H4	w	20	区層		23	22	5	3.0	鋼	脆欠欠
1207	鉄棒	H4	l	5	遺構		15	15	-	18.1	鉛	脆欠欠
1208	鉄棒	H4	c	3	区層		12	12	-	8.5	鉛	脆欠欠
1209	鉄棒	H4	g	20	区層		12	12	-	8.2	鉛	脆欠欠
1210	鉄棒	F10	v	8	1層		10	10	-	5.0	鉛	脆欠欠

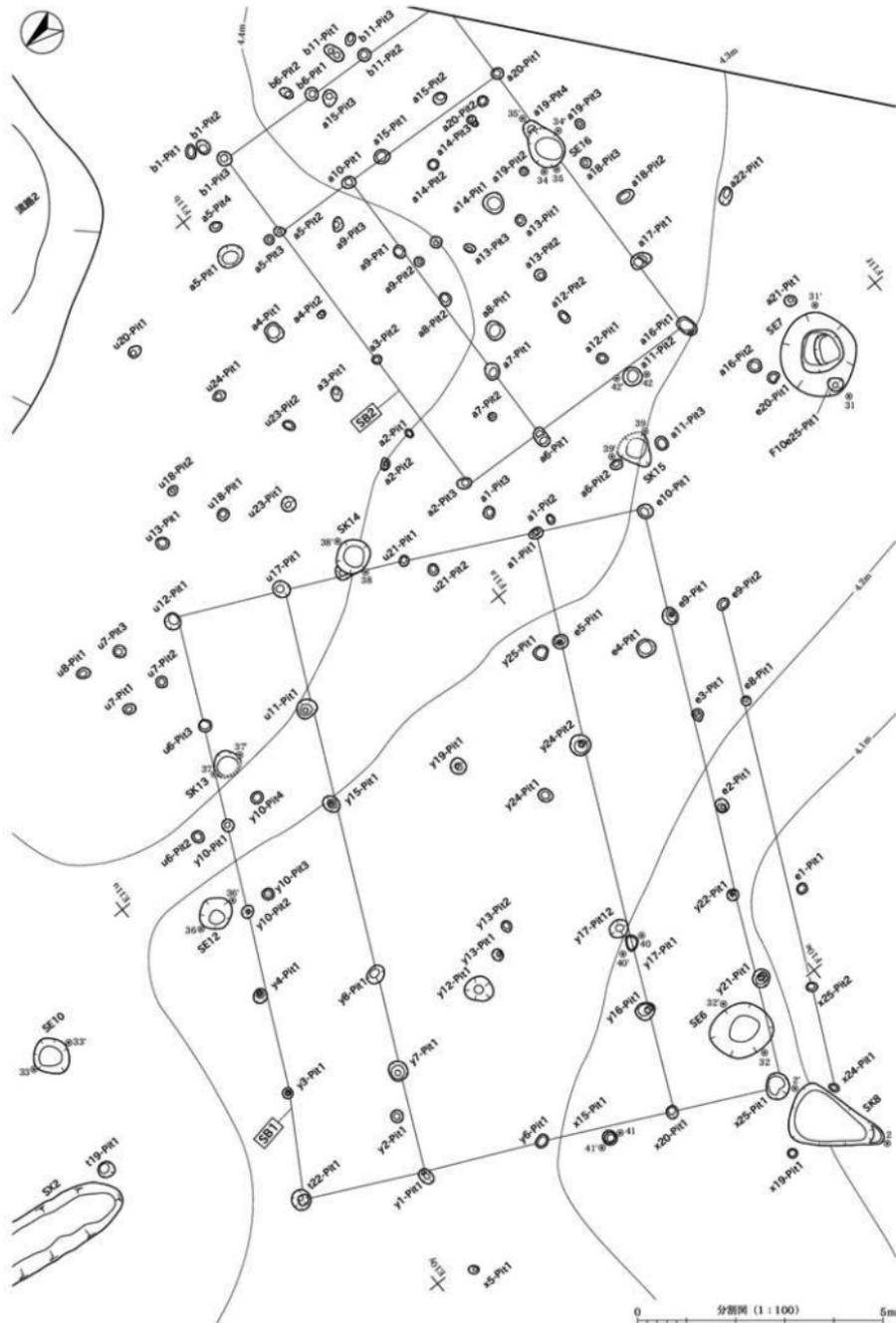
銭貨観察表

No.	品名	大グリッド	中グリッド	小グリッド	部位	外径 (mm)	内径 (mm)	重 (g)	遺存状況	総額 (高年)	工期	備 考
1211	銅貨	G9	e	6	区層	24	6	2.6	脆欠形	845年	唐	背「唐」
1212	大銀貨	G9	e	6	区層	26	6	3.4	脆欠形	1107年	北宋	
1213	流式通貨	A区経糸跡				23	5	2.5	脆欠形	1368年	明	
1214	銅貨	E11	d	24	区層	24	7	2.2	脆欠形	621年	唐	
1215	咸平元貨	F10	l	6	遺構	24	6	3.7	脆欠形	998年	北宋	
1216	寧寧通貨	P9	j	20	遺構	24	6	2.7	脆欠形	1038年	北宋	
1217	元寧通貨	F10	g	10	遺構	24	7	2.2	脆欠形	1066年	北宋	
1218	大銀貨	F10	d	17	遺構	24	6	3.0	脆欠形	1107年	北宋	
1219	流式通貨	F10	d	17	遺構	23	5	3.0	脆欠形	1368年	明	
1220	流式通貨	P9	e	20	区層	23	5	1.9	脆欠形	1368年	明	
1221	永安通貨	F10	g	19	遺構	25	6	2.5	脆欠形	1408年	明	
1222	永安通貨	F10	g	15	区層	25	6	1.8	脆欠形	1408年	明	
1223	寧寧通貨	E区経糸上				25	7	2.7	脆欠形	1038年	北宋	
1224	壽寧元貨	H7	f	18	V層	24	6	3.5	脆欠形	1056年	北宋	
1225	寧寧通貨	G7	v	9	V層	24	7	2.5	脆欠形	1038年	北宋	
1226	寧寧通貨	H6	l	10	V層	24	6	2.7	脆欠形	1054年	北宋	
1227	流式通貨	H6	m	10	区層	24	5	2.6	脆欠形	1368年	明	背「唐」
1228	永安通貨	H7	g	11	V層	25	4	3.3	脆欠形	1408年	明	
1229	永安通貨	D区高ベルト				25	5	4.2	脆欠形	1408年	明	
1230	寧寧通貨	H4	l	15	区層	25	7	2.6	脆欠形	1038年	北宋	
1231	壽寧通貨	H4	n	23	区層	25	7	2.5	脆欠形	1056年	北宋	
1232	紹寧元貨	H4	b	7	区層	25	7	2.8	脆欠形	1094年	北宋	背月
1233	紹寧元貨	H4	b	7	区層	24	6	3.0	脆欠形	1094年	北宋	
1234	太平元貨	G区経糸				25	7	2.6	脆欠形	1023年	北宋	
1235	咸平元貨	K4	e	19	区層	23	6	3.3	脆欠形	1046年	北宋	

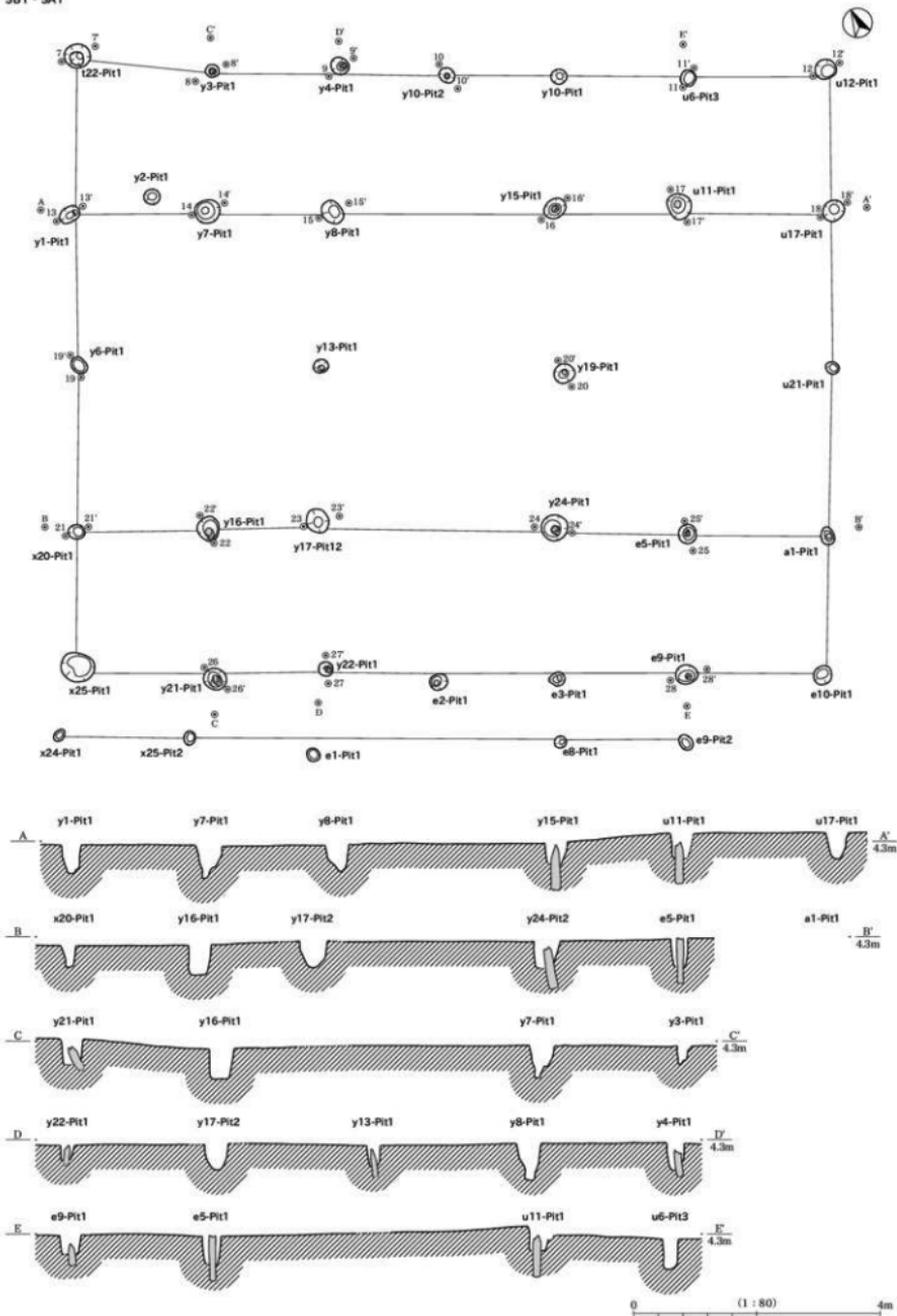
圖 版





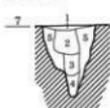


SB1·SA1



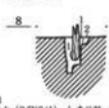
SB1

E10i22-Pit1



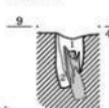
- E10i22-Pit1
- 1 褐灰色土 (2.5V4/2) しまり・粘液中 炭化物散在
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 炭化物土ブロックを含む
 - 3 灰黄色土 (2.5V6/1) しまり・粘液中 砂質シルト層を含む
 - 4 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 砂質シルト層を含む

E10y3-Pit1



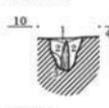
- E10y3-Pit1
- 1 灰黄色土 (2.5V6/1) しまり弱 粘液中や中 炭黄色土 砂多量を含む 炭化物散在
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 炭黄色土ブロック

E10y4-Pit1



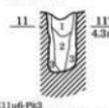
- E10y4-Pit1
- 1 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり弱 粘液中 炭黄色土砂多量を含む 炭化物散在
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまりや中 粘液中 炭黄色土砂多量

E10y10-Pit2



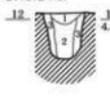
- E10y10-Pit2
- 1 褐灰色土 (2.5V5/2) しまりや中 粘液中 炭黄色土砂多量
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 砂質シルト層 炭化物散在
 - 3 灰黄色土 (2.5V6/1) しまり・粘液中 炭化物散在

E11u6-Pit3



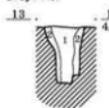
- E11u6-Pit3
- 1 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり・粘液中 炭黄色土砂多量 炭化物散在
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり弱 粘液中 炭黄色土砂を含む
 - 3 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 炭黄色土砂を含む

E11u12-Pit1



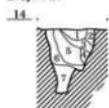
- E11u12-Pit1
- 1 褐灰色土 (2.5V5/2) しまり中 粘液中や中 炭黄色土ブロックを含む
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり弱 粘液中 炭黄色土ブロックを含む
 - 3 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 炭黄色土ブロックを含む

E10y1-Pit1



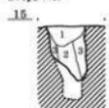
- E10y1-Pit1
- 1 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり弱 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 炭黄色土砂多量
 - 3 灰黄色土 (2.5V4/2) しまり中 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 4 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり中 粘液中や中 炭黄色土砂多量

E10y7-Pit1



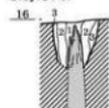
- E10y7-Pit1
- 1 黒褐色土 (2.5V3/1) しまり中 粘液中や中 炭黄色土砂多量 炭化物散在
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 炭黄色土砂多量
 - 3 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり弱 粘液中 炭黄色土砂多量
 - 4 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 炭黄色土砂多量
 - 5 黒褐色土 (2.5V2/1) しまり・粘液中 炭黄色土砂多量
 - 6 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 炭黄色土砂多量
 - 7 黒褐色土 (2.5V2/1) しまり・粘液中 炭黄色土砂多量

E10y8-Pit1



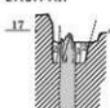
- E10y8-Pit1
- 1 褐灰色土 (2.5V4/2) しまり・粘液中 炭化物散在
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 炭化物散在
 - 3 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 炭化物散在

E10y15-Pit1



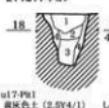
- E10y15-Pit1
- 1 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり弱 粘液中 炭化物散在
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり中 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 3 褐灰色土 (2.5V2/2) しまり・粘液中 炭黄色土砂多量

E11u11-Pit1



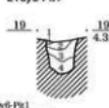
- E11u11-Pit1
- 1 灰黄色土 (2.5V6/1) しまり弱 粘液中や中 炭黄色土砂多量 炭化物散在
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/1) しまり弱 粘液中や中 炭黄色土砂多量 炭化物散在

E11u17-Pit1



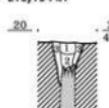
- E11u17-Pit1
- 1 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり中 粘液中や中 炭化物散在
 - 2 炭黄色土 (2.5V5/2) しまり・粘液中 炭黄色土砂多量
 - 3 褐灰色土 (2.5V4/2) しまり・粘液中 炭化物散在
 - 4 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり中 粘液中や中 炭黄色土砂多量

E10y6-Pit1



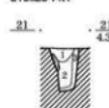
- E10y6-Pit1
- 1 粘液中の炭化物
 - 2 灰黄色土 (2.5V4/1) しまりや中 粘液中
 - 3 炭黄色土 (2.5V5/3) しまり中 粘液中 炭化物散在
 - 4 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり中 粘液中 炭化物散在

E10y19-Pit1



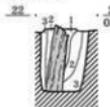
- E10y19-Pit1
- 1 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり弱 粘液中や中 炭化物散在
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/1) しまり弱 粘液中や中 炭化物散在
 - 3 灰黄色土 (2.5V6/1) しまり・粘液中や中 炭化物散在

E10x20-Pit1



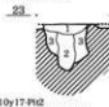
- E10x20-Pit1
- 1 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり中 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまりや中 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 3 灰黄色土 (2.5V6/2) しまりや中 粘液中や中 炭黄色土砂多量

E10y16-Pit1



- E10y16-Pit1
- 1 黒褐色土 (2.5V3/1) しまり中や中 粘液中や中 炭黄色土砂多量 炭化物散在
 - 2 褐灰色土 (2.5V5/2) しまり中や中 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 3 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり中や中 粘液中や中 炭黄色土砂多量

E10y17-Pit2



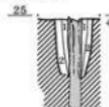
- E10y17-Pit2
- 1 黒褐色土 (2.5V2/1) しまり中や中 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 2 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり弱 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 3 炭黄色土 (2.5V5/3) しまり中 粘液中 炭化物散在
 - 4 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり中 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 5 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり中や中 粘液中や中 炭黄色土砂多量

E10y24-Pit2



- E10y24-Pit2
- 1 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり・粘液中 炭化物散在
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまりや中 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 3 灰黄色土 (2.5V6/2) しまりや中 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 4 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり・粘液中 炭黄色土砂多量
 - 5 灰黄色土 (2.5V6/2) しまりや中 粘液中や中 炭黄色土砂多量

F10x5-Pit1



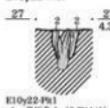
- F10x5-Pit1
- 1 灰黄色土 (2.5V5/1) しまり中 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/1) しまり弱 粘液中や中 炭黄色土砂多量

E10y21-Pit1



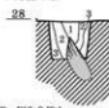
- E10y21-Pit1
- 1 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり弱 粘液中 炭化物散在
 - 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり弱 粘液中 炭化物散在
 - 3 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり弱 粘液中 炭化物散在

E10y22-Pit1



- E10y22-Pit1
- 1 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり弱 粘液中 炭化物散在
 - 2 炭黄色土 (2.5V5/2) しまり弱 粘液中や中 炭黄色土砂多量

F10x9-Pit1



- F10x9-Pit1
- 1 灰黄色土 (2.5V4/1) しまり・粘液中 炭化物散在
 - 2 褐灰色土 (2.5V5/2) しまり・粘液中 炭化物散在
 - 3 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり中 粘液中や中 炭黄色土砂多量

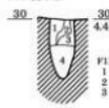
SB2

F11-a7-Pit1



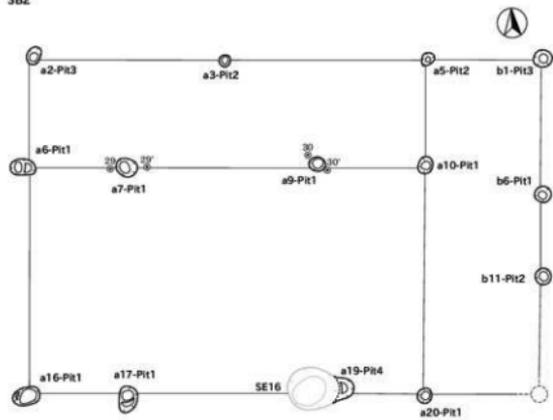
- F11-a7-Pit1
- 1 粘液中 (2.5V4/2) に炭散 白色土砂を含む
 - 2 黒褐色土 (2.5V2/1) しまり・粘液中 粘液中や中 炭黄色土砂多量 炭化物散在

F11-a9-Pit1



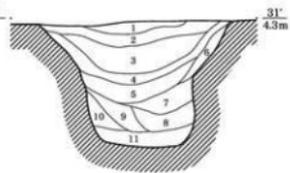
- F11-a9-Pit1
- 1 黒褐色土 (2.5V3/1)
 - 2 灰黄色土 (2.5V4/1)
 - 3 黒褐色土 (2.5V3/1) 粘液中や中 炭黄色土砂多量
 - 4 黒褐色土 (2.5V2/1) しまり弱 粘液中や中 炭黄色土砂多量

SB2



SE7

31



SK7

- 1 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまり中 粘姓中や弱 炭化物粘含む
- 2 黒色土 (2.5Y3/1) しまり中 粘姓中や弱 V質土灰含む 炭化物粘多量
- 3 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり中 粘姓中 V質土ブロック含む
- 4 暗灰褐色土 (2.5Y4/2) しまり中 粘姓中 炭化物ブロック・V質土ブロック・角礫含む
- 5 黄灰色土 (2.5Y4/2) しまり中 粘姓中や弱 砂質シルト多量・炭化物粘含む
- 6 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまり中 粘姓中や弱 腐植物粘含む
- 7 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり中やなし 粘姓中や弱 腐植物粘含む
- 8 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまり中 粘姓中や弱 黒褐色土ブロック・腐植物多量
- 9 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり中や弱 粘姓中や弱 炭化物粘含む
- 10 黄灰色土 (2.5Y6/1) しまりなし 粘姓強 腐植物粘含む
- 11 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) しまり弱 粘姓強 腐植物粘含む

SE6

32



SK6

- 1 黒褐色土 (2.5Y3/2) しまり弱 粘姓中 炭化物粘含む
- 2 黒土 (2.5Y2/1) しまり弱 粘姓中 炭化物粘含む
- 3 暗灰褐色土 (2.5Y4/2) V質の腐植土
- 4 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまりなし 粘姓強
- 5 黄灰色土 (2.5Y5/1) しまりなし 粘姓強 V質の腐植土

SE10

33

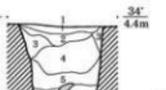


SK10

- 1 黄褐色土 (2.5Y3/2) しまり弱 粘姓中 炭化物粘多量
- 2 黄褐色土 (2.5Y3/2) しまり弱 粘姓中 炭化物粘多量
- 3 暗灰褐色土 (2.5Y4/2) V質の腐植土のみ
- 4 しまり弱 粘姓中
- 5 暗灰褐色土 (2.5Y3/1) しまり弱 粘姓中
- 6 暗灰褐色土 (2.5Y4/2) しまり中 粘姓中

SE16

34



SK16

- 1 丹層
- 2 黒褐色土 (2.5Y3/2) 炭化物粘含む
- 3 黒褐色土 (2.5Y3/2) →黄褐色土 (2.5Y5/3) しまり中 粘姓中や弱
- 4 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり弱 粘姓中や弱
- 5 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまりなし 粘姓中や弱 丹層土ブロック含む
- 6 黒色土 (2.5Y2/1) しまりなし 粘姓強 灰色土含む

F11a19-Pt4

35

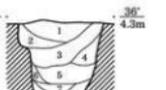


a19-Pt4

- 1 黄灰色土 (2.5Y4/1) しまり中 粘姓中や弱 V質土ブロック 炭化物粘含む
- 2 黄褐色土 (2.5Y3/1) しまり中 粘姓中や弱 砂質シルトブロック・塊状炭化物粘含む
- 3 黄褐色土 (2.5Y3/2) しまり中 粘姓中や弱 やや暗い色のシルト・塊状炭化物粘含む
- 4 黒色土 (2.5Y2/1) しまり弱 粘姓中 腐植物粘多量

SE12

36

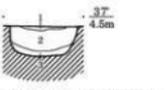


SK12

- 1 黒褐色土 (2.5Y3/2) しまり弱 粘姓中 V質土粘含む
- 2 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり弱 粘姓中 V質土ブロック多量
- 3 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり弱 粘姓中や弱 V質土ブロック含む
- 4 V質の腐植土
- 5 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまりなし 粘姓強 灰色土粘含む
- 6 黄灰色土 (2.5Y5/1) しまりなし 粘姓強 V質の腐植土
- 7 黒褐色土 (2.5Y2/1) しまりなし 粘姓強 灰色粘土・腐植物粘含む
- 8 暗灰褐色土 (2.5Y3/2) しまりなし 粘姓強

SK13

37

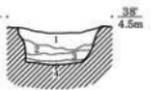


SK13

- 1 黒褐色土 (2.5Y3/2) しまり中 粘姓中 V質土粘含む
- 2 黒土 (2.5Y2/1) しまり弱 粘姓中や弱 炭化物粘含む
- 3 黄褐色土 (2.5Y4/1) しまり中 粘姓強

SK14

38

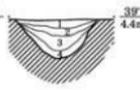


SK14

- 1 黒褐色土 (2.5Y3/2) しまり弱 粘姓中 炭化物粘含む
- 2 黒褐色土 (2.5Y5/3) しまり中 粘姓中 丹山の腐植土粘含む
- 3 暗灰褐色土 (2.5Y4/2) しまり弱 粘姓中 腐植物粘多量
- 4 土の灰色粘シルト (2.5Y5/4)

SK15

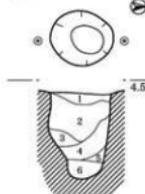
39



SK15

- 1 丹層 塊状炭化物粘含む
- 2 黒褐色土 (2.5Y2/2) しまり中 粘姓中 V質土粘・炭化物粘含む
- 3 黒色土 (2.5Y2/1) しまり弱 粘姓中や弱 V質土粘含む
- 4 黄褐色土 (2.5Y4/1) しまり中 粘姓強 腐植土粘含む (炭化物粘)

SK17



SK17

- 1 黒褐色土 (2.5Y3/2) しまり中 粘姓中や弱 炭化物粘含む
- 2 黒色土 (2.5Y2/1) しまり弱 粘姓強 炭化物粘含む
- 3 暗灰褐色土 (2.5Y3/3) しまり弱 粘姓強 土層に黒色土や角礫・V質の腐植土
- 4 黄褐色土 (2.5Y3/2) しまり弱 粘姓強 地山のブロックを含む
- 5 暗灰褐色土 (2.5Y5/2) しまりなし 粘姓強
- 6 黄褐色土 (2.5Y4/1) しまりなし 粘姓強 黒色土と黄灰色土層の腐植土少量

E10y17-Pt1

40

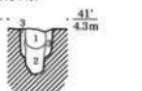


E10y17-Pt1

- 1 黄褐色土 (2.5Y3/2) しまり中 粘姓中 V質シルト層入
- 2 暗灰褐色土 (2.5Y4/2) しまり中 粘姓中

E10x15-Pt1

41

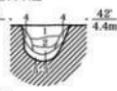


E10x15-Pt1

- 1 暗灰褐色土 (2.5Y4/2) しまり中 粘姓中 V質土ブロック 炭化物粘含む
- 2 黄褐色土 (2.5Y4/1) しまり中や弱 粘姓中 V質土ブロック・炭化物粘多量
- 3 暗灰褐色土 (2.5Y4/2) しまり中 粘姓中 暗灰褐色土ブロック含む

F11a11-Pt2

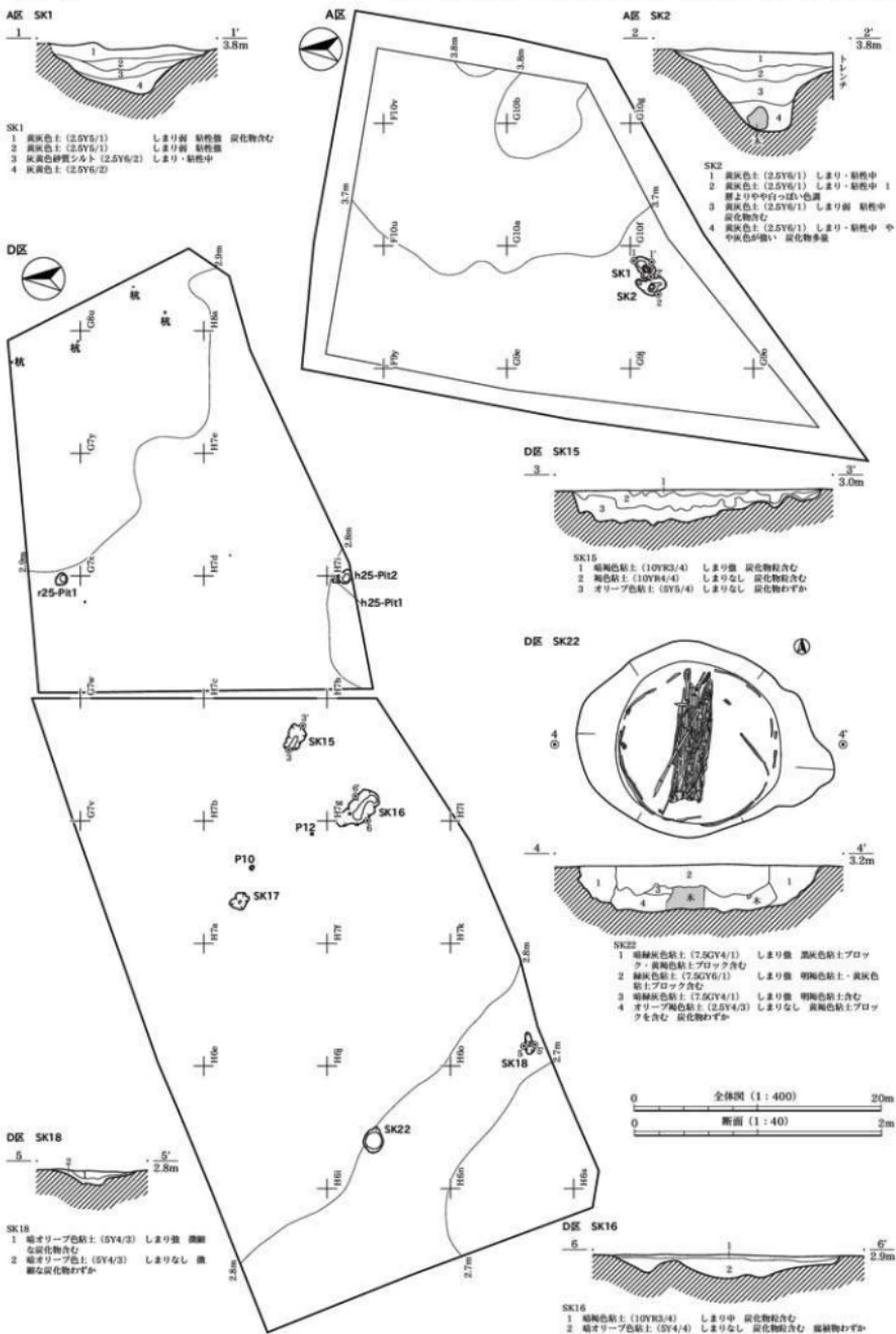
42

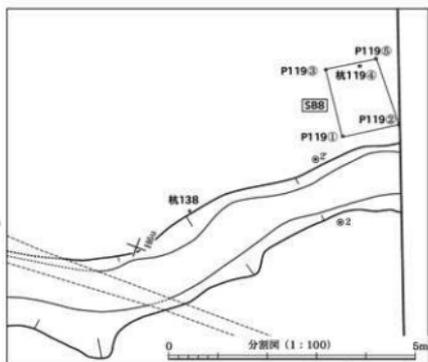
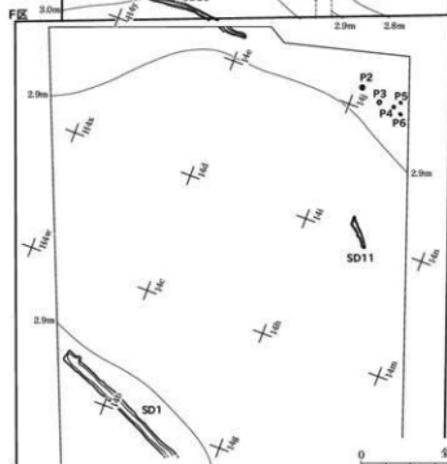
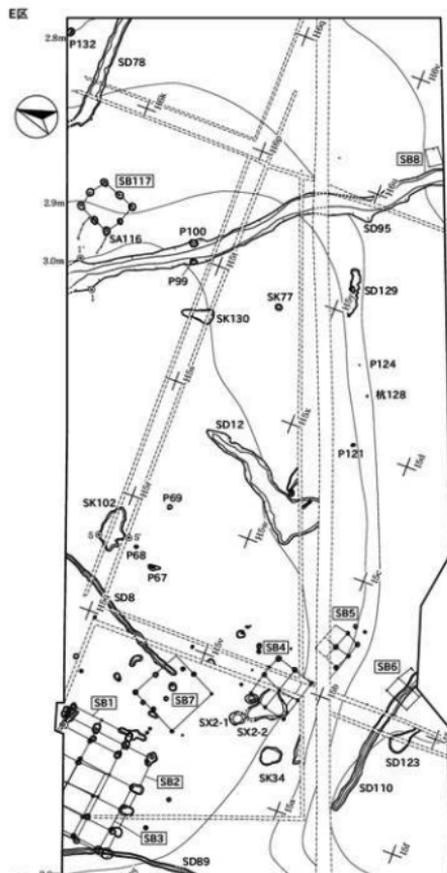


F11a11-Pt2

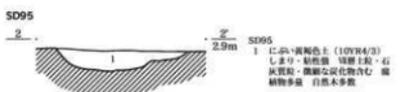
- 1 丹層・V質土ブロック層を含むしまり中 粘姓中
- 2 黒褐色土 (2.5Y3/2) V質土ブロック層を含むしまり中 粘姓中 炭化物粘含む
- 3 V質土・黒褐色土粘少量含むしまり弱 粘姓中や弱
- 4 V質腐植土 しまり弱 粘姓中や弱
- 5 暗灰褐色土 (2.5Y4/2) しまりなし 粘姓強 黒色土粘を含む







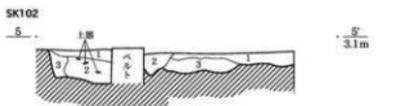
SD95
1 暗褐色粘土 (10YR3/3) しまり・粘性强 微細な炭化物含む 腐植物多量 自然本多数
2 黄灰色粘土 (10YR4/1) しまり・粘性强 団粒土状・微細な炭化物含む 腐植物多量 自然本多数



SD12
1 暗灰黄色粘土 (2.5Y4/2) 炭化物多量
2 暗灰黄色粘土 (2.5Y4/2)



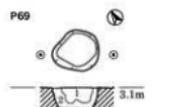
SX37
1 黄灰色シロト質土 (2.5Y6/1) しまり強 粘性强 微細な炭化物多量
2 黄灰色粘土 (2.5Y6/1) しまり・粘性强 微細な炭化物含む
3 黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり・粘性强



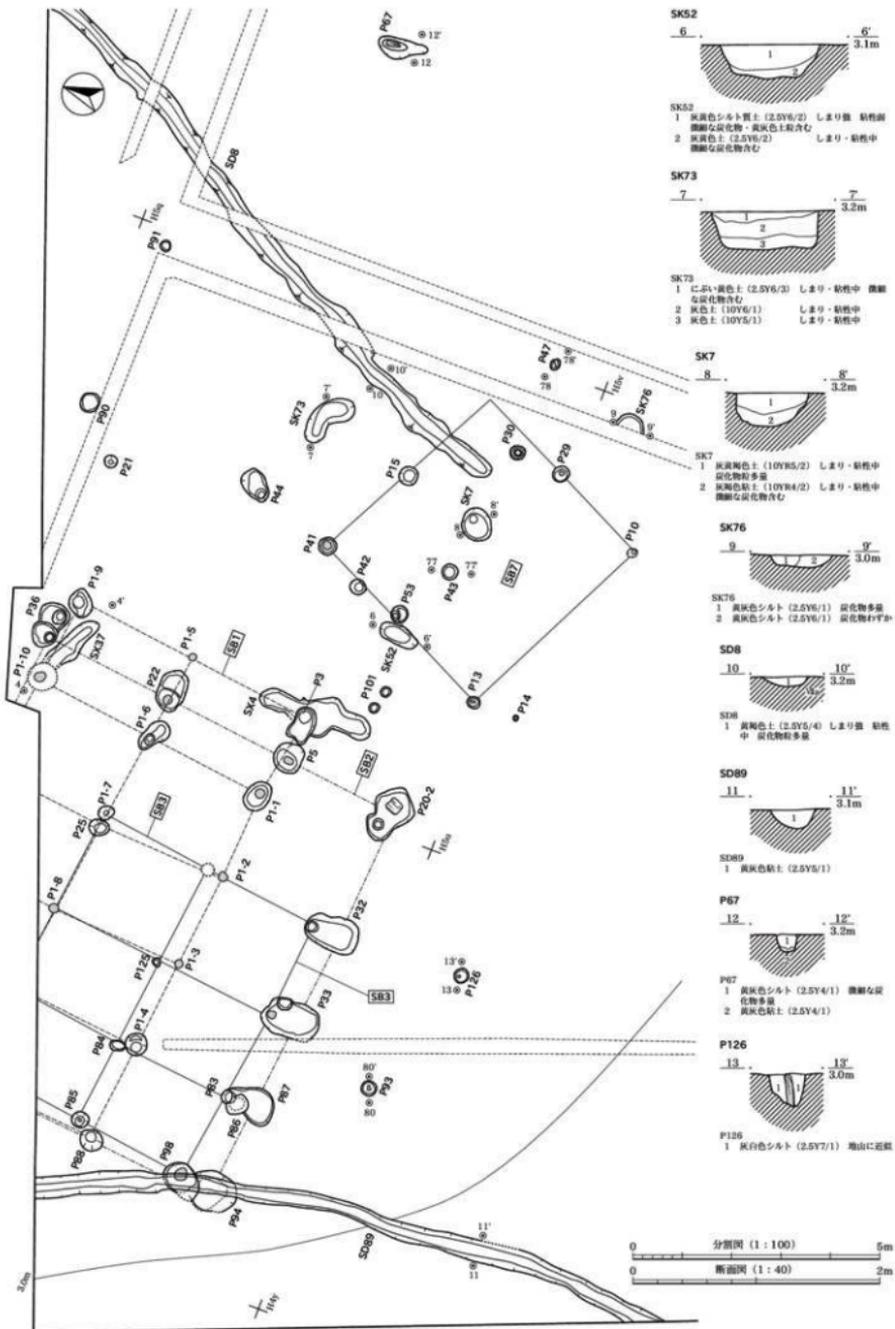
SK102 短縮セクション
1 黄灰色シロト (2.5Y6/1) 微細な炭化物含む
2 黄灰色シロト (2.5Y6/1) 微細な炭化物多量
3 灰白色粘土 (2.5Y7/1)

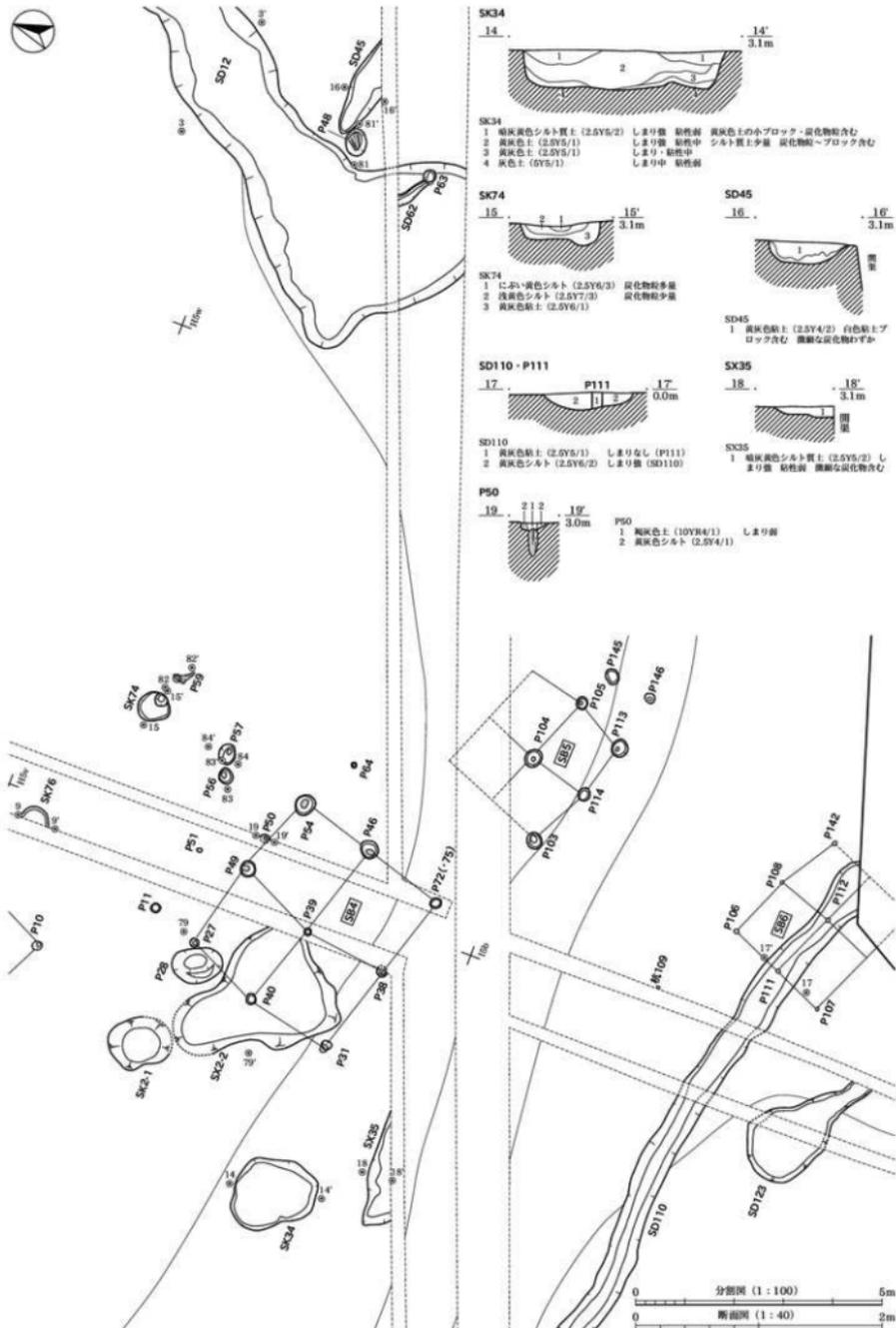


P68
1 黄灰色シロト質土 (2.5Y4/1)
2 黄灰色粘土 (2.5Y4/1)

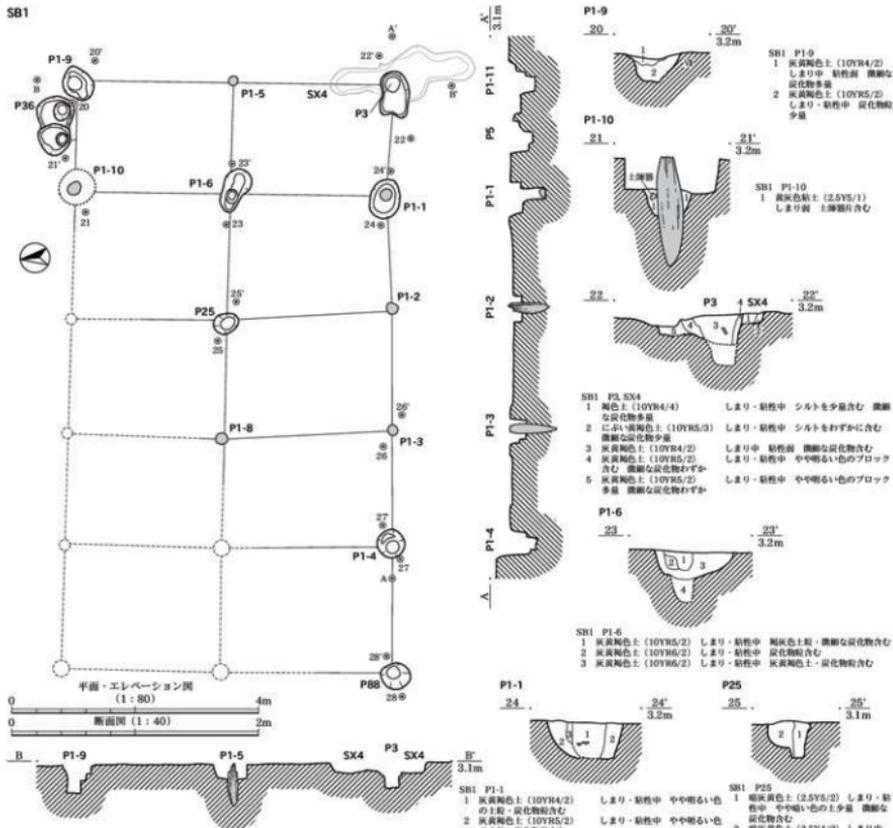


P69
1 黄灰色シロト質土 (2.5Y4/1)
2 灰白色粘土 (2.5Y7/1)

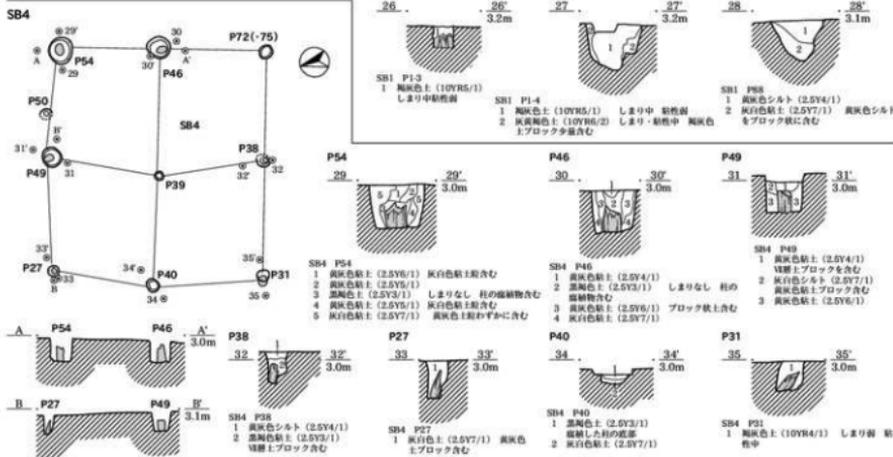




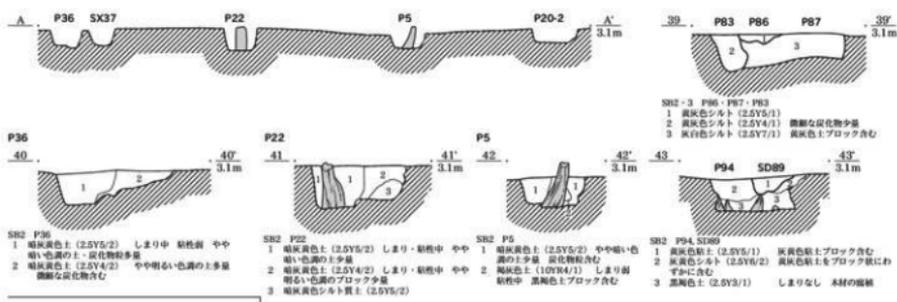
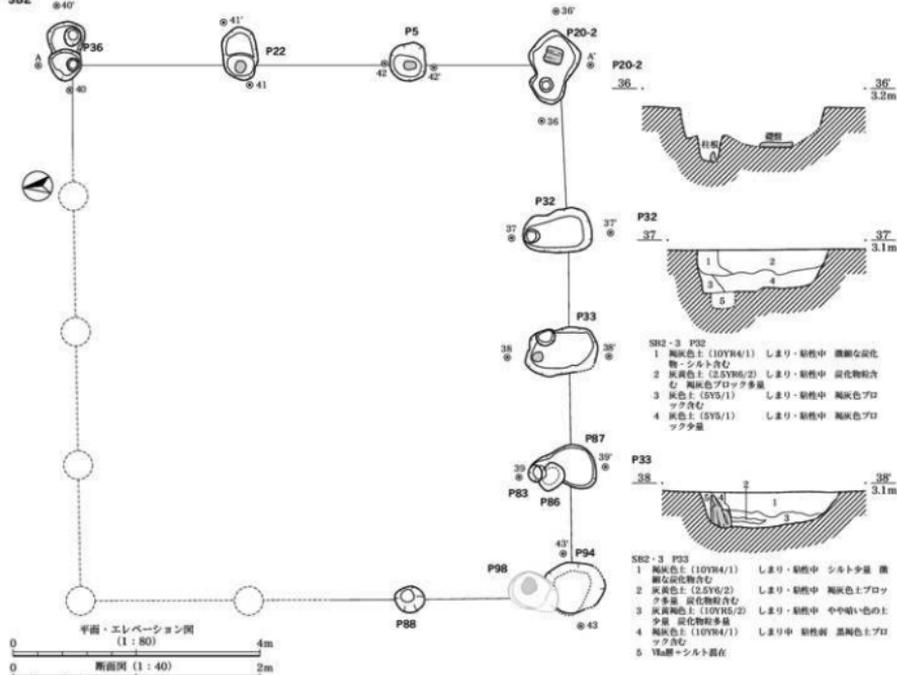
SB1



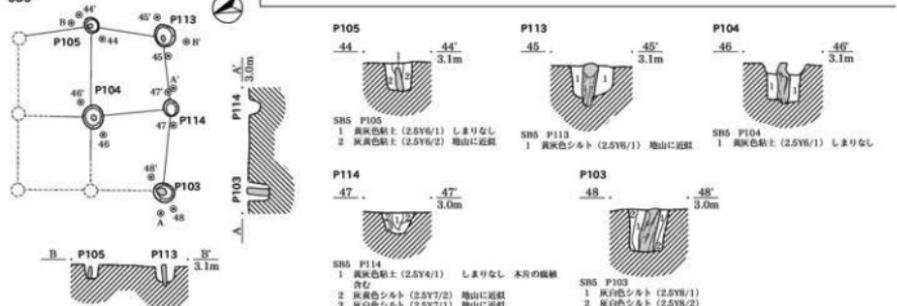
SB4



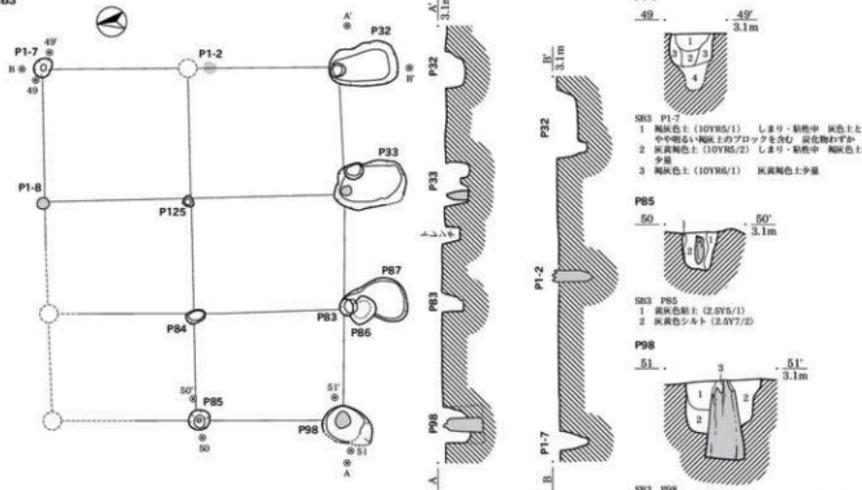
SB2



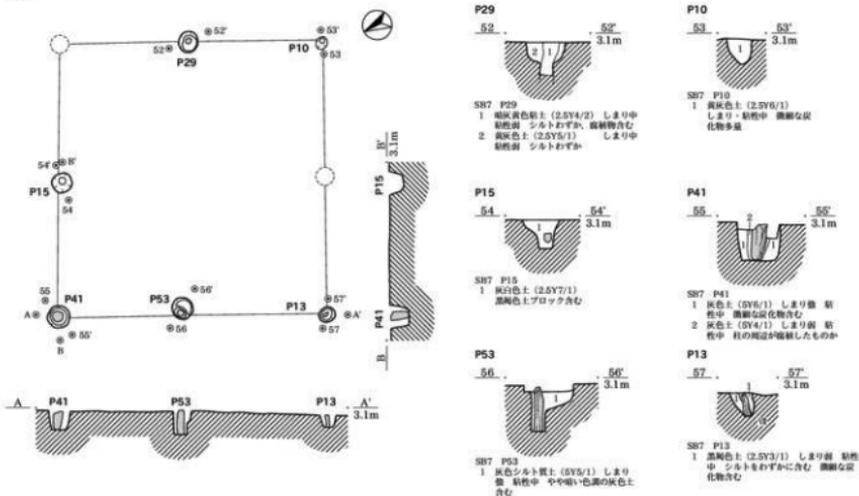
SB5



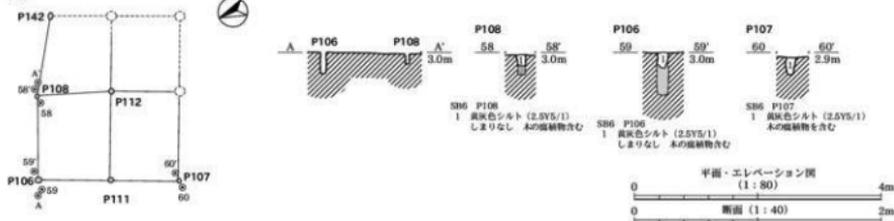
SB3



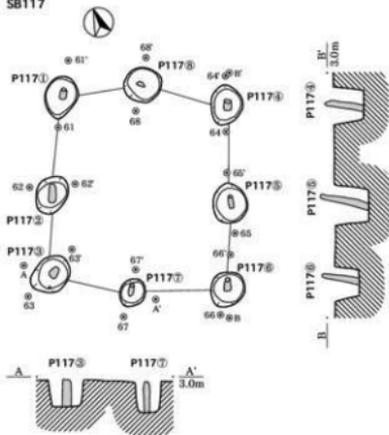
SB7



SB6

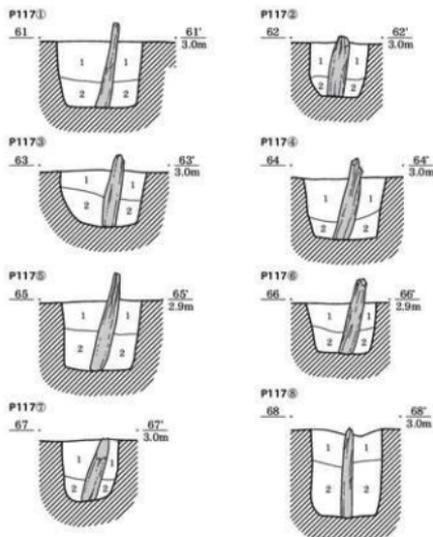


SB117

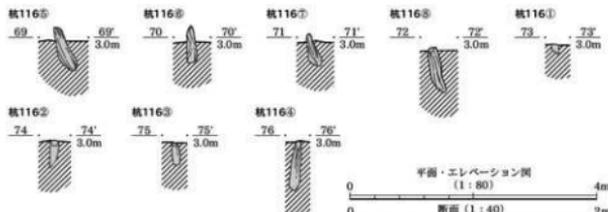
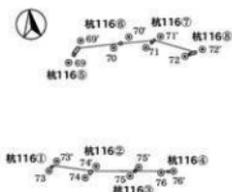


SB117 P117①～⑩ (共通)

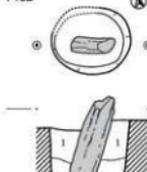
- 1 灰黄色土 (2.5V5/1) しまりなし 粘性强 腐植物・腐植土炭化物含む
- 2 灰黄色土 (7.5V5/1) しまりなし 粘性强 腐植物・腐植土炭化物多量



SA116

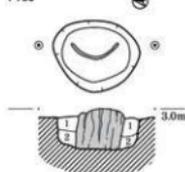


P132



- 1 灰黄色土 (7.5V5/1) 腐植土炭化物・腐植物含む
- 2 灰黄色土 (7.5V5/1) 粘0.3～0.5cmの炭化物・腐植物多量

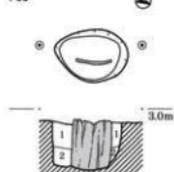
P100



P100

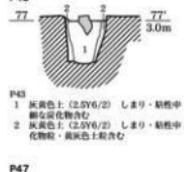
- 1 灰黄色土 (7.5V5/1) しまりなし 粘性强 腐植土炭化物含む
- 2 灰黄色土 (7.5V5/1) しまりなし 粘性强 腐植土炭化物多量

P99



- 1 灰黄色土 (7.5V5/1) しまりなし 粘性强 腐植土炭化物含む
- 2 灰黄色土 (7.5V5/1) しまりなし 粘性强 腐植土炭化物多量

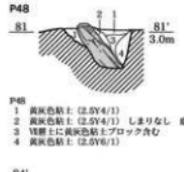
P43



P43

- 1 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり 粘性强 腐植土炭化物含む
- 2 灰黄色土 (2.5V6/2) しまり 粘性强 炭化物多量・灰黄色土を含む

P47



P47

- 1 黄灰色土 (2.5V6/1)

P48

- 1 黄灰色土 (2.5V4/1)
- 2 灰黄色土 (2.5V4/1) しまりなし 腐植土含む
- 3 腐植土に黄灰色土プロック含む
- 4 黄灰色土

P59



P59

- 1 黄灰色土 (2.5V3/1) しまりなし 腐植物含む

P56



P56

- 1 黄灰色土 (2.5V4/1)
- 2 黄白色土 (2.5V6/1)

P93



P93

- 1 黄灰色シルト (2.5V5/1)
- 2 黄褐色土 (2.5V3/1) しまりなし 本が腐植したもの
- 3 灰黄色シルト (2.5V7/2)

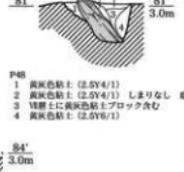
P81



P81

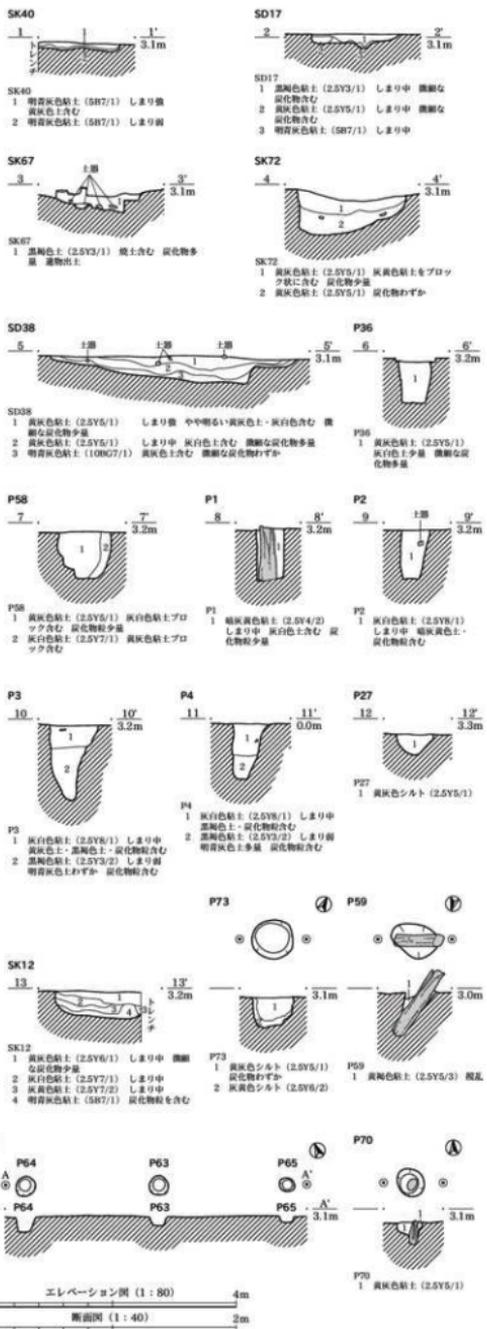
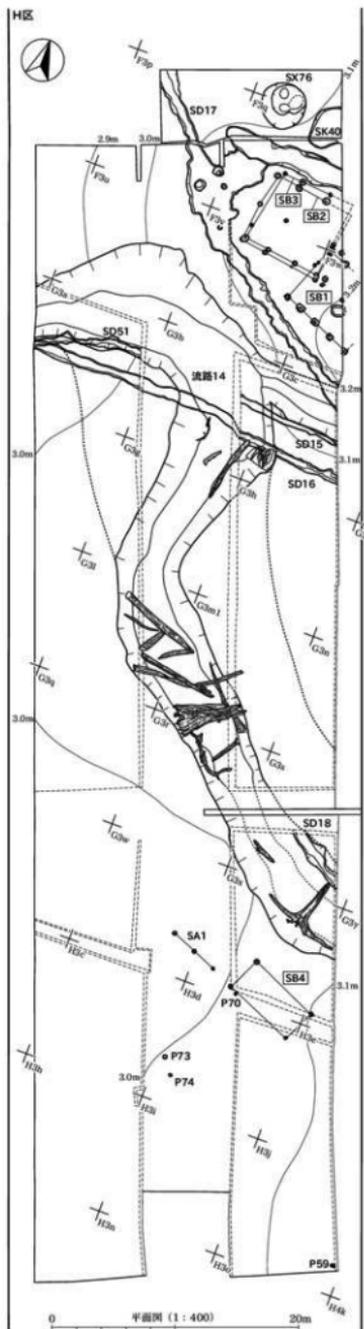
- 1 黄灰色土 (2.5V6/1)
- 2 灰白色土 (2.5V6/1)

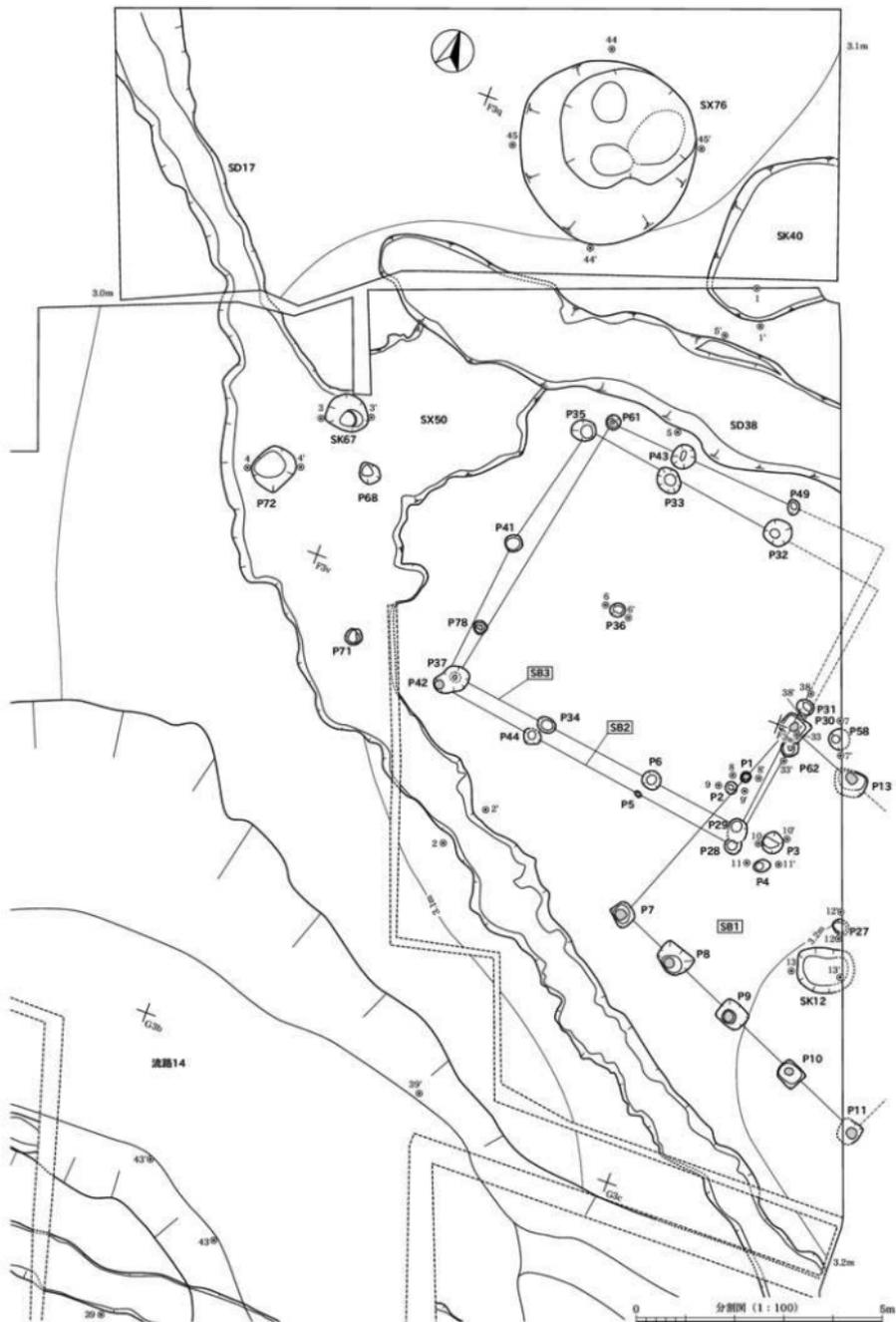
P82

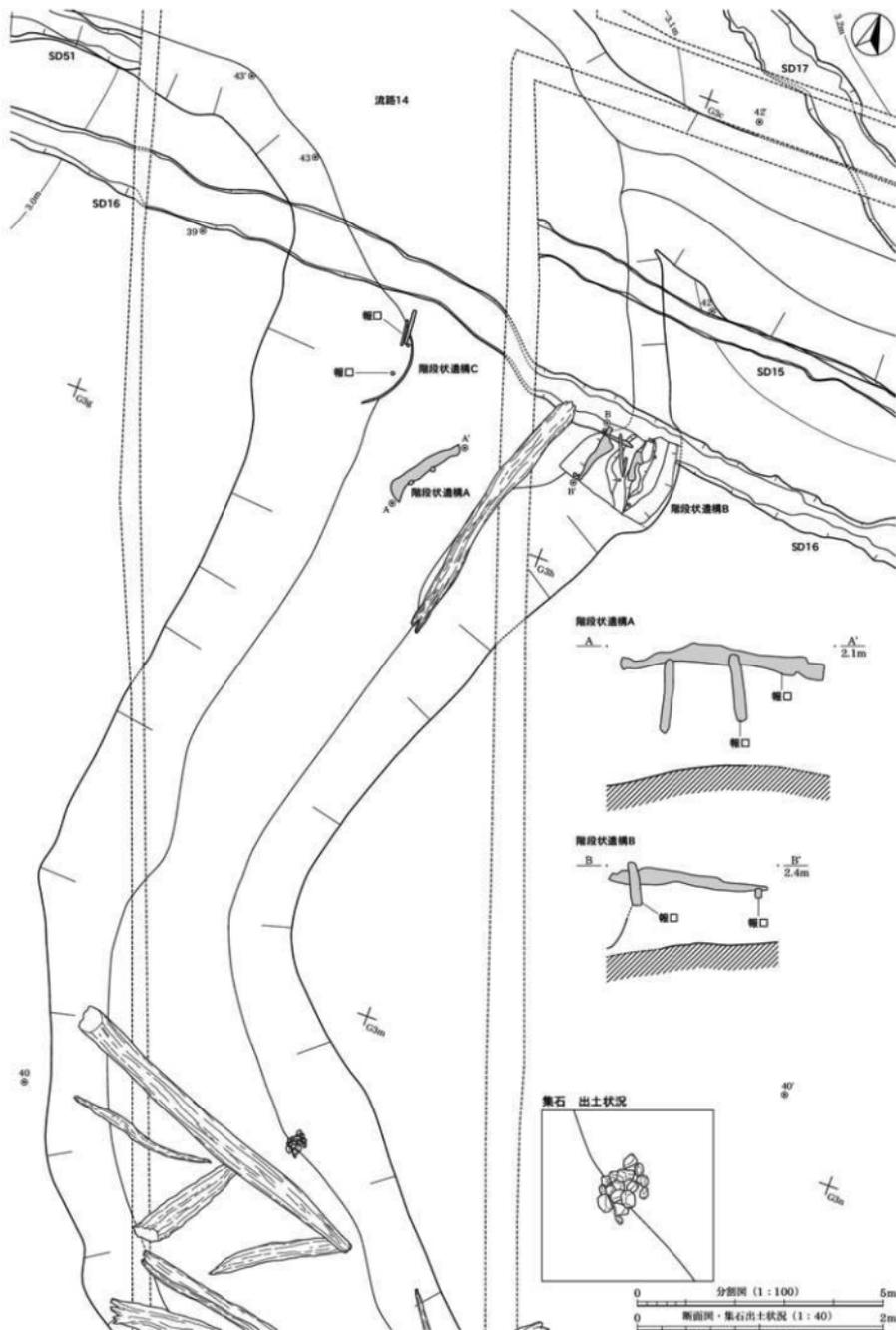


P82

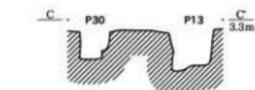
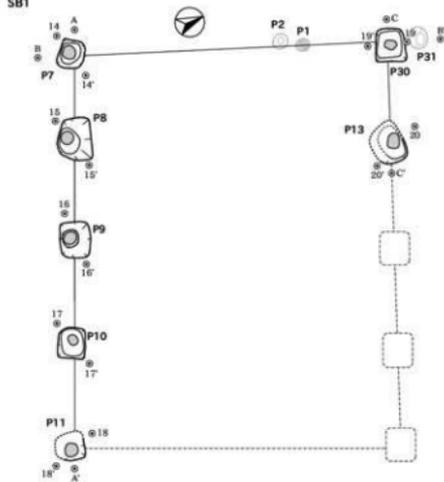
- 1 黄灰色土 (2.5V6/1)
- 2 灰白色土 (2.5V6/1)



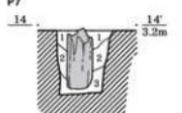




SB1

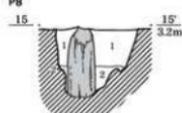


P7



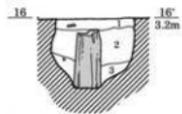
SB1 P7
1 灰白色粘土 (2.5V5/1) しまり
中 黄灰色土多量
2 灰白色粘土 (2.5V6/1) しまり
中 炭化物少量
3 黄灰色粘土 (108G7/1) シルト
少量

P8



SB1 P8
1 黄灰色粘土 (2.5V5/1) しまり中 炭
化物少量
2 黄灰色粘土 (108G7/1) しまり前 黄
色土含む

P9



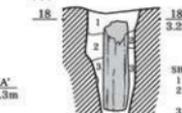
SB1 P9
1 灰白色粘土 (2.5V6/1) しまり中 黄
色土多量 炭化物少量
2 灰白色粘土 (2.5V6/1) しまり前
3 黄灰色粘土 (2.5V5/1) しまり前 明
灰色土・炭化物含む

P10



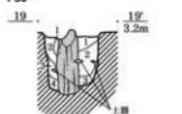
SB1 P10
1 黄灰色粘土 (2.5V5/1) しまり中 灰
白色土
2 黄灰色粘土 (2.5V3/2) しまり前 炭
化物少量

P11



SB1 P11
1 灰白色粘土 (2.5V5/1) しまり中 黄
灰色土多量
2 黄灰色粘土 (2.5V5/1) しまり中 灰
白色土少量
炭化物含む
3 黄灰色粘土 (5B7/1) しまり前 黄
灰色土少量

P30



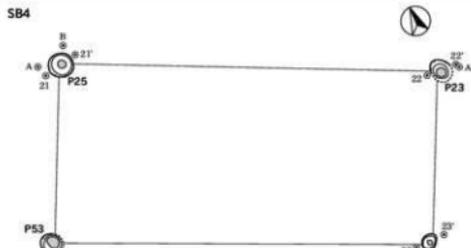
SB1 P30
1 黒褐色土 (2.5V3/1) しまり前
粘土質・炭化物含む
2 黄灰色土 (2.5V5/1) しまり前
粘土質・微細な炭化物含む
3 黄灰色粘土 (5B7/1) しまり前
黄灰色土・炭化物含む
4 黄灰色粘土 (5B7/1) しまり前

P13

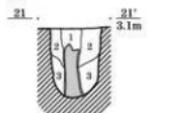


SB1 P13
1 灰白色粘土 (2.5V8/1) しまり中 黄
灰色土・炭化物少量
2 黄灰色粘土 (2.5V5/1) しまり中
土含む 炭化物少量
3 黄灰色粘土 (2.5V7/1) しまり前 黄
灰色土・微細な炭化物含む

SB4

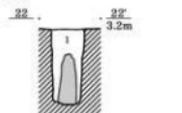


P25



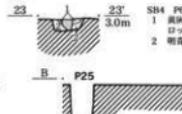
SB4 P25
1 黄灰色粘土 (2.5V5/1) しまり前
粘性强 灰白色粘土ブロック状・粒
が揃ったもの
2 灰白色粘土 (2.5V7/1) しまり前
粘性强 黄灰色粘土ブロック少量
3 黄灰色粘土 (108G7/1) しまり前
粘性强

P23



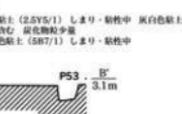
SB4 P23
1 黄灰色粘土 (2.5V5/1) しまり・粘
性强 微細な炭化物少量

P69



SB4 P69
1 黄灰色粘土 (2.5V5/1) しまり・粘
性强 灰白色粘土ブロック含む 炭
化物少量
2 黄灰色粘土 (5B7/1) しまり・粘
性强

P53



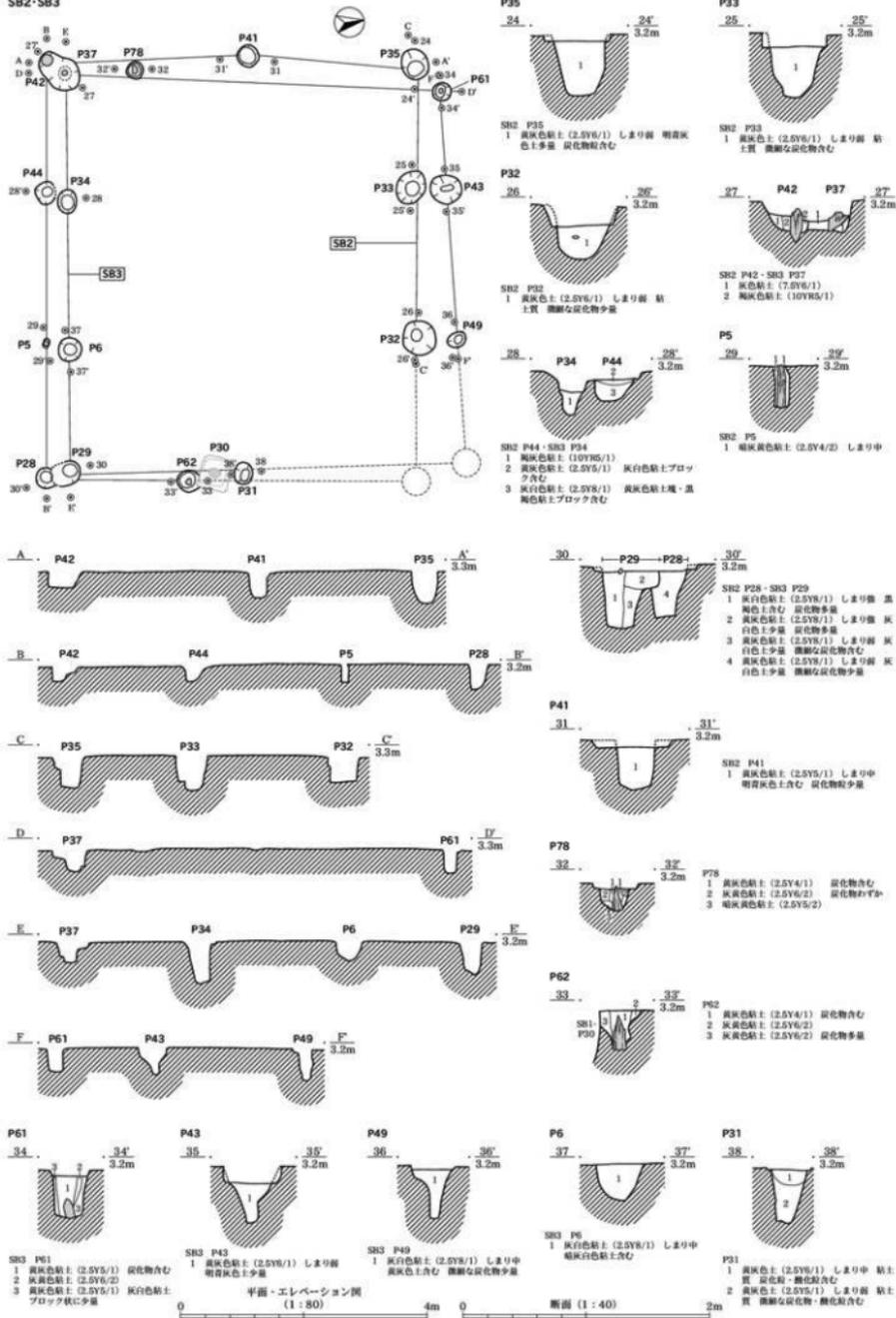
平面・エレベーション図

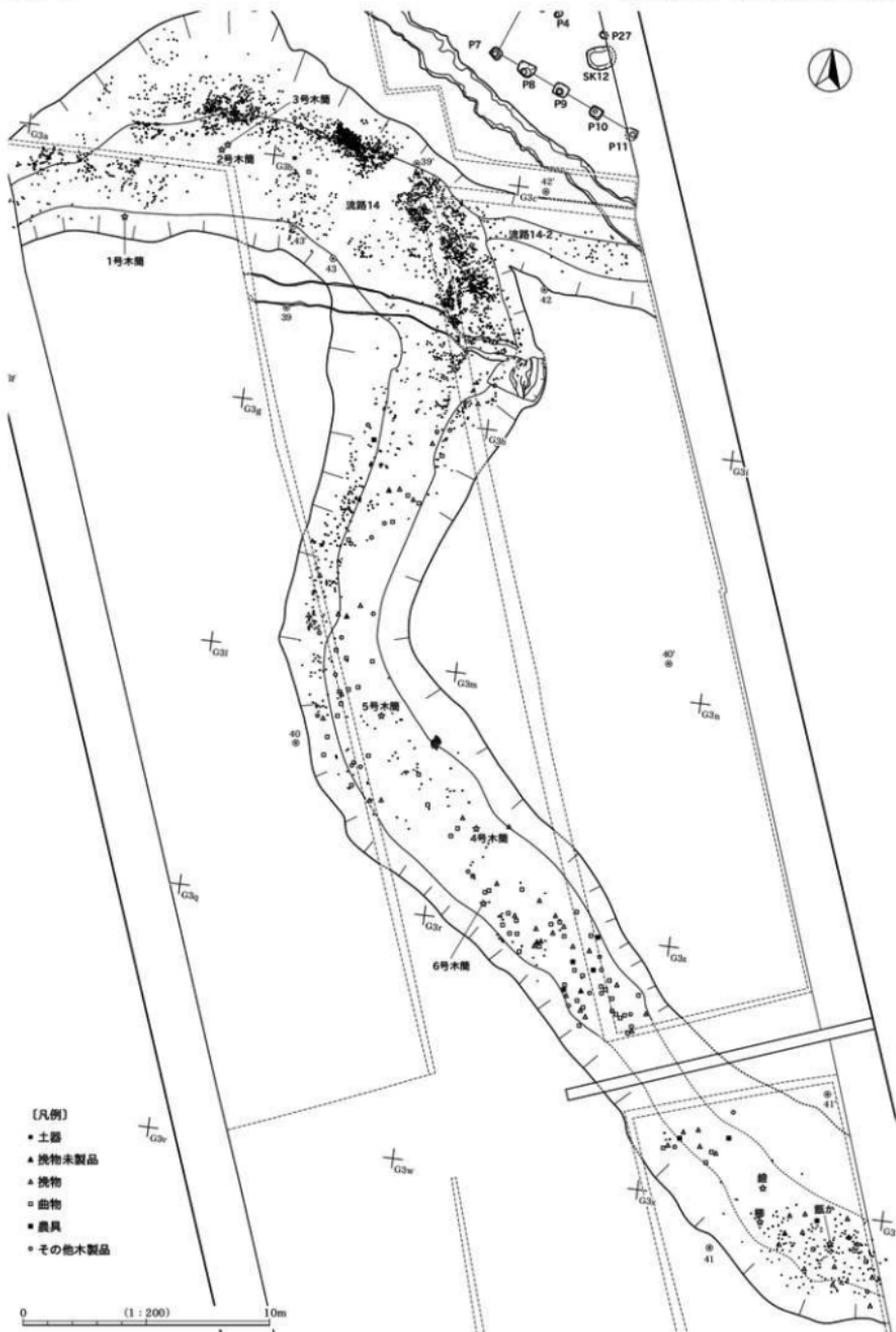
(1:80)

断面図 (1:40)

0 4m 0 2m

SB2-SB3

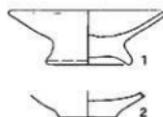




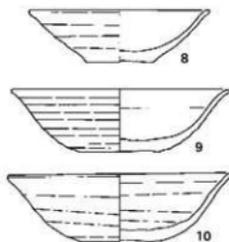
- 【凡例】
- 土器
 - ▲ 陶器未製品
 - △ 陶器
 - 曲物
 - 農具
 - その他木製品

0 (1:200) 10m

E10t19ピット1 (1~3)



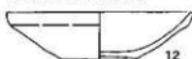
E10y17ピット1 (8~10)



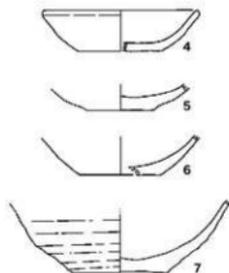
B・C区SK6 (11)



E10t20ピット1 (12)

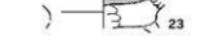
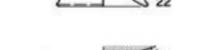
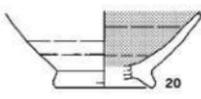
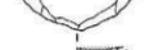
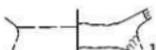


B・C区SE7 (4~7)

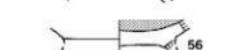
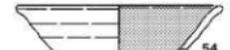
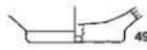
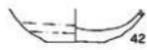
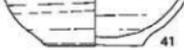
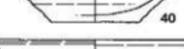
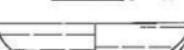
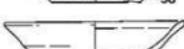
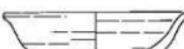
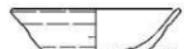
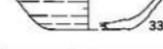
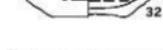
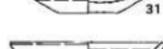
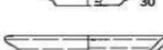
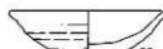
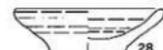


黒色処理・黒化

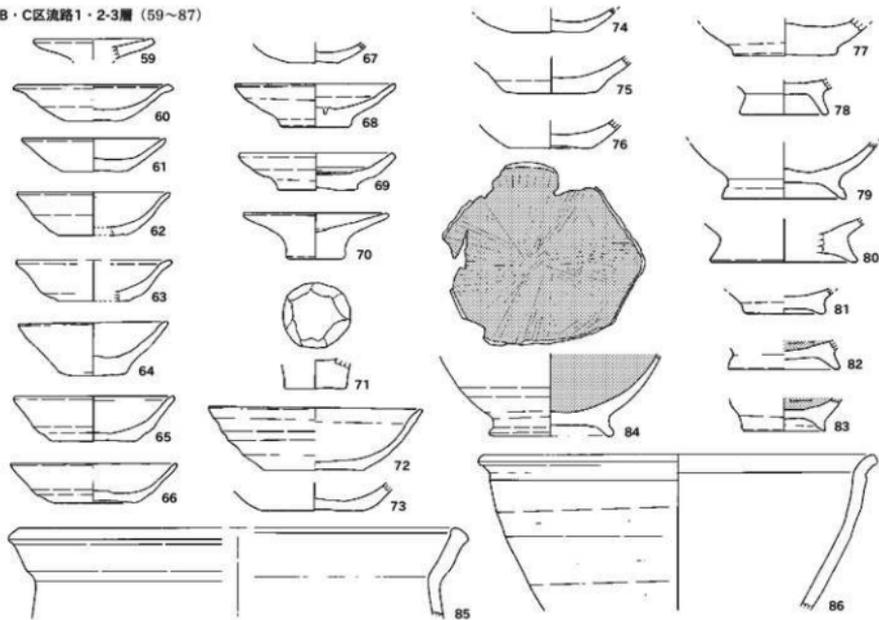
B・C区流路1・2-2層 (13~27)



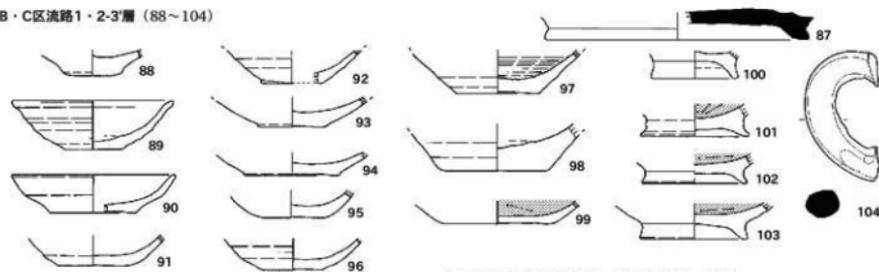
B・C区流路1・2-2'層 (28~58)



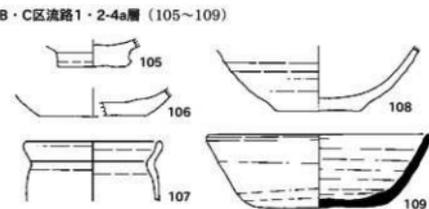
B·C区流路1·2-3层 (59~87)



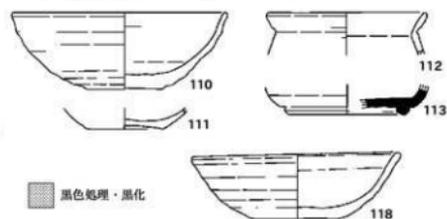
B·C区流路1·2-3'层 (88~104)



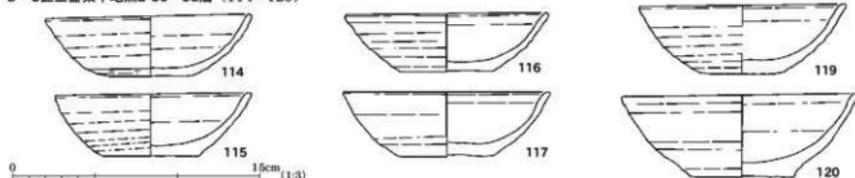
B·C区流路1·2-4a层 (105~109)

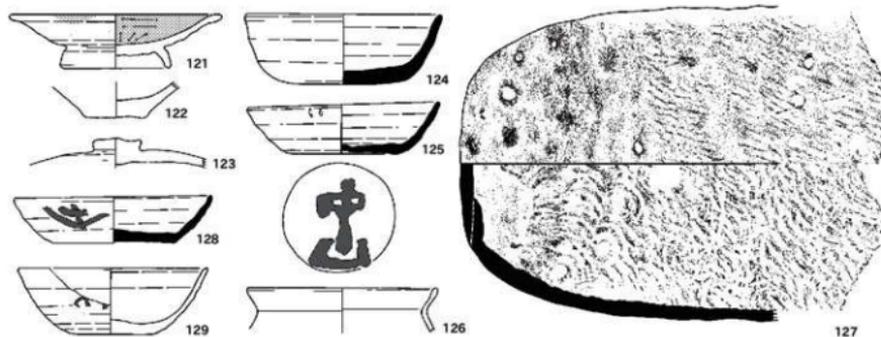


B·C区土器集中地点2-5a·5b层 (110~113)

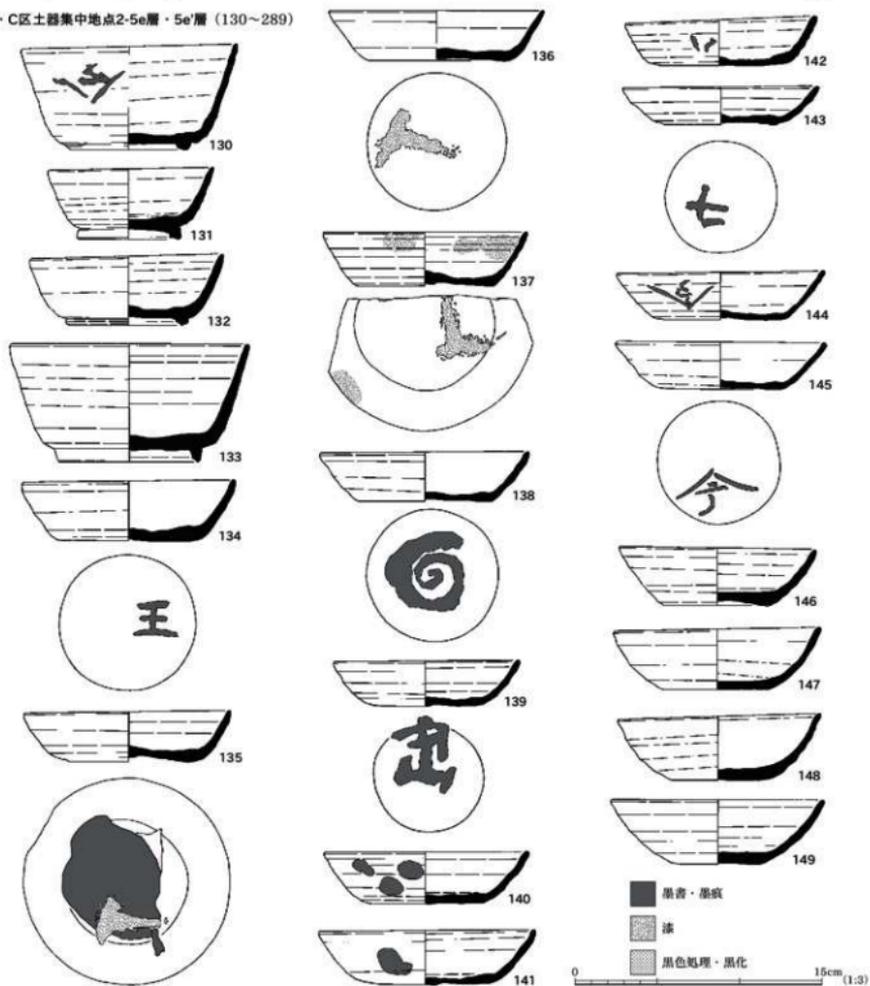


B·C区土器集中地点2-5c·5d层 (114~129)





B·C区土器集中地点2-5e層·5e'層 (130~289)





150



151



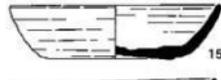
152



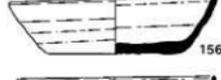
153



154



155



156



157



158



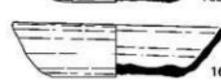
159



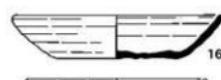
160



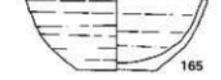
161



162



163



164



165



166

■ 漆器・漆灰



167



168



169



170



171



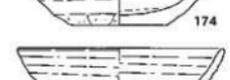
172



173



174



175



176



177



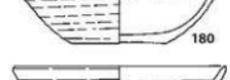
178



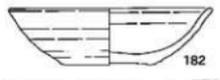
179



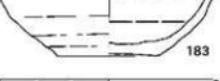
180



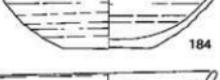
181



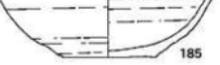
182



183



184



185



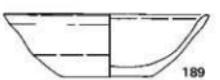
186



187



188



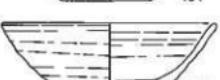
189



190



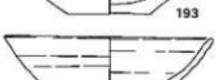
191



192



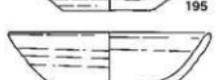
193



194

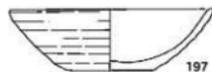


195



196

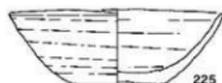
0 15cm (1:3)



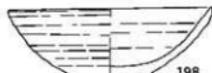
197



211



225



198



212



226



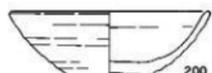
199



213



227



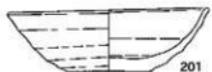
200



214



228



201



215



229



202



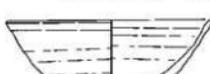
216



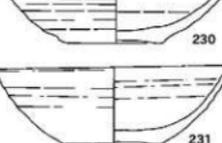
230



203



217



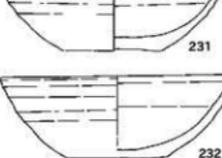
231



204



218



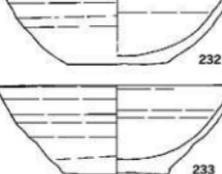
232



205



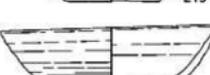
219



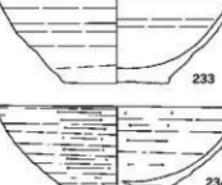
233



206



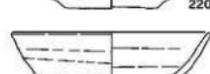
220



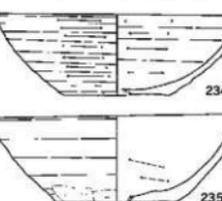
234



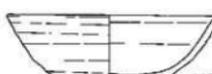
207



221



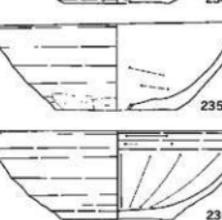
235



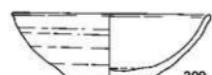
208



222



236



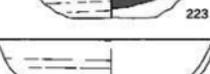
209



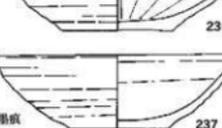
223



210



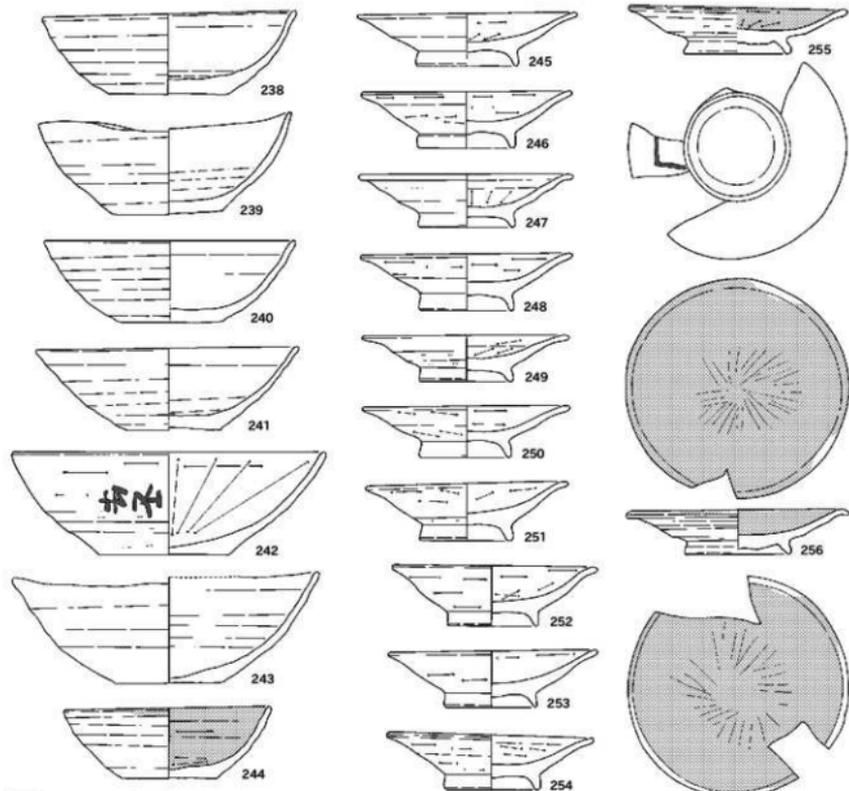
224



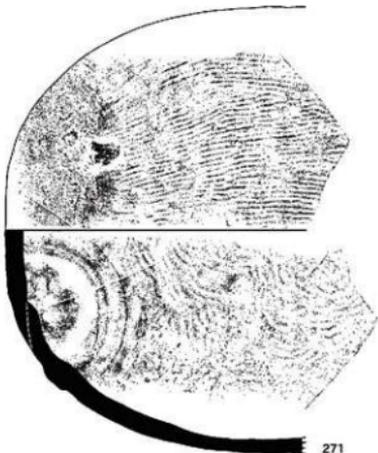
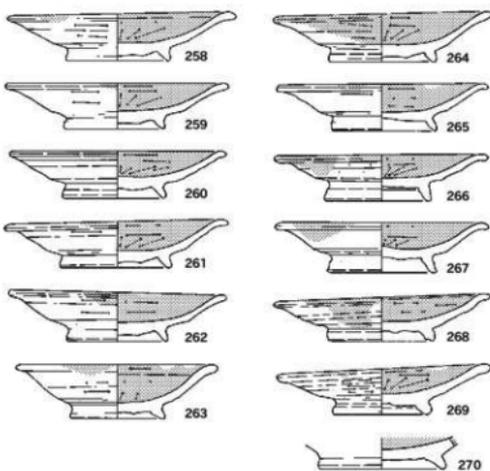
237

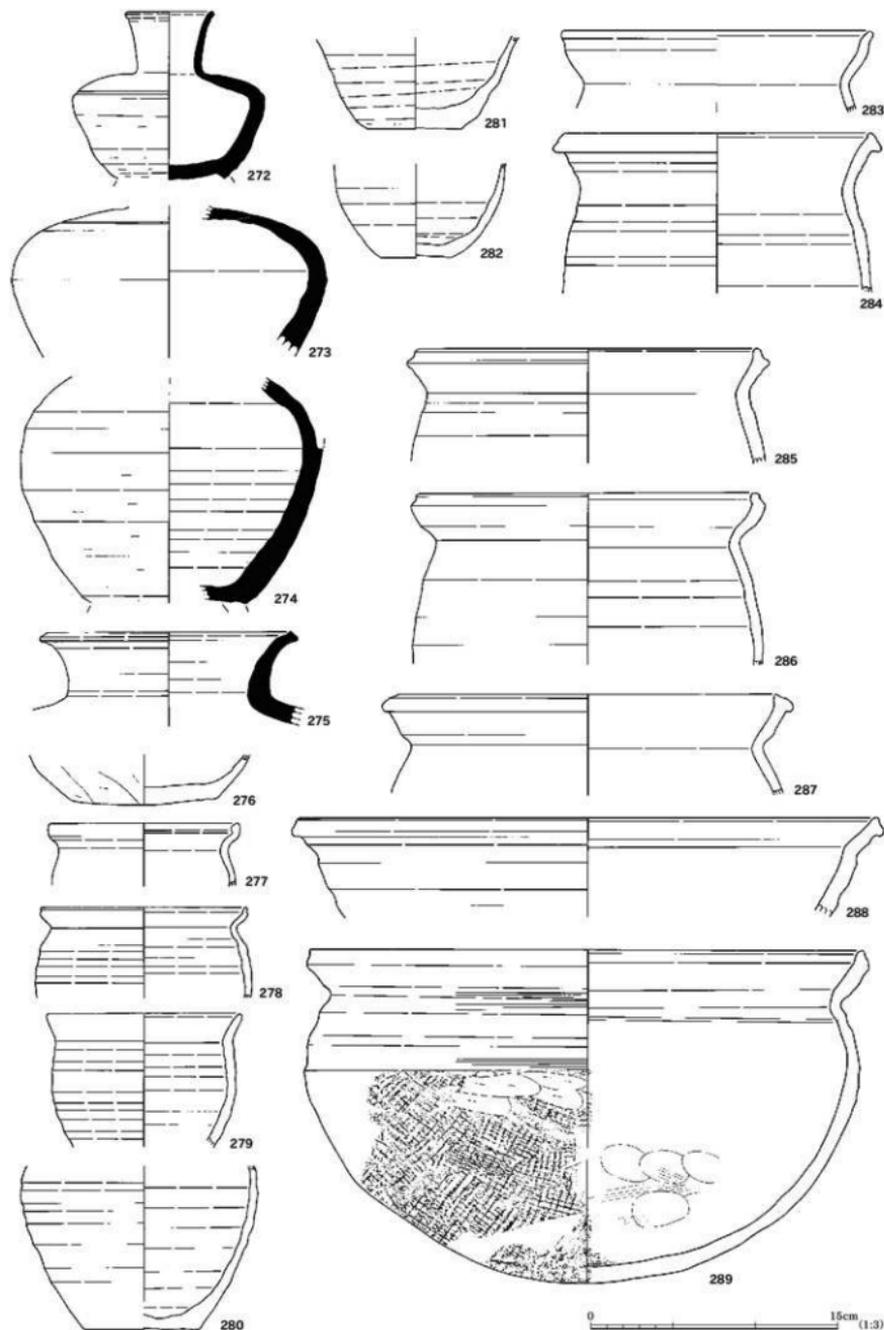
0 15cm (1:3)

■ 遺骨・墨底

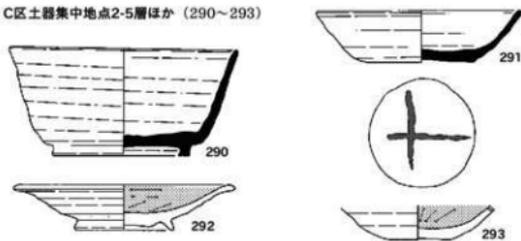


■ 黑色処理・黒化 ■ 墨書・墨痕

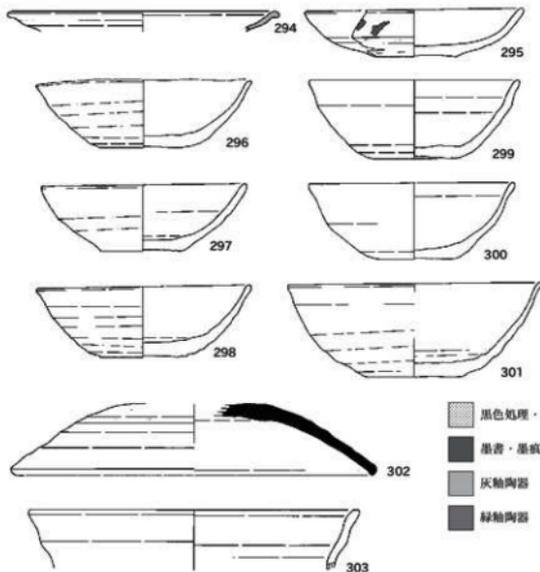




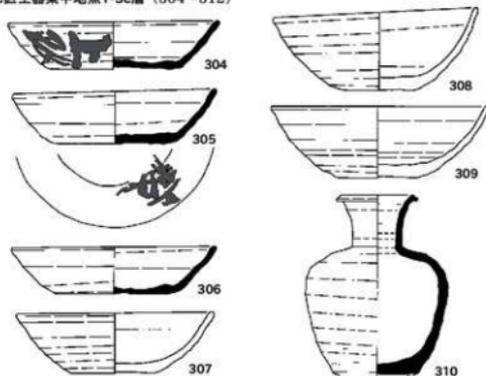
B・C区土器集中地点2-5層ほか (290~293)



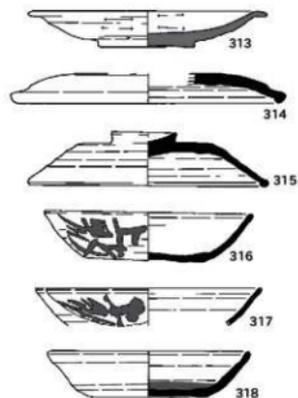
B・C区土器集中地点1-5a層・5b層 (294~303)



B・C区土器集中地点1-5c層 (304~312)



B・C区土器集中地点1-5d層 (313~399)

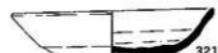




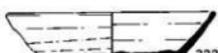
319



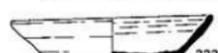
320



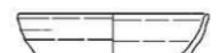
321



322



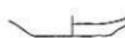
323



324



325



326



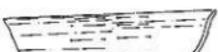
■ 墨書・墨痕



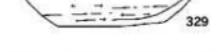
327



328



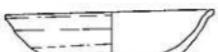
329



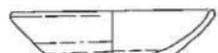
330



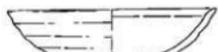
331



332



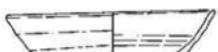
333



334



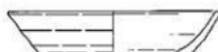
335



336



337



338



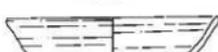
339



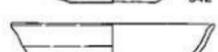
340



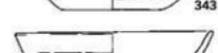
341



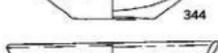
342



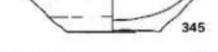
343



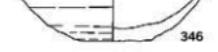
344



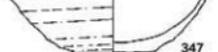
345



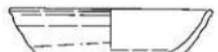
346



347



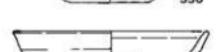
348



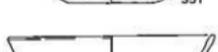
349



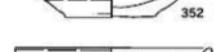
350



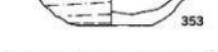
351



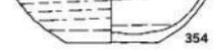
352



353



354



355



356



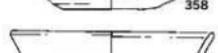
357



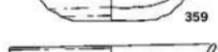
358



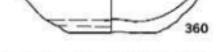
359



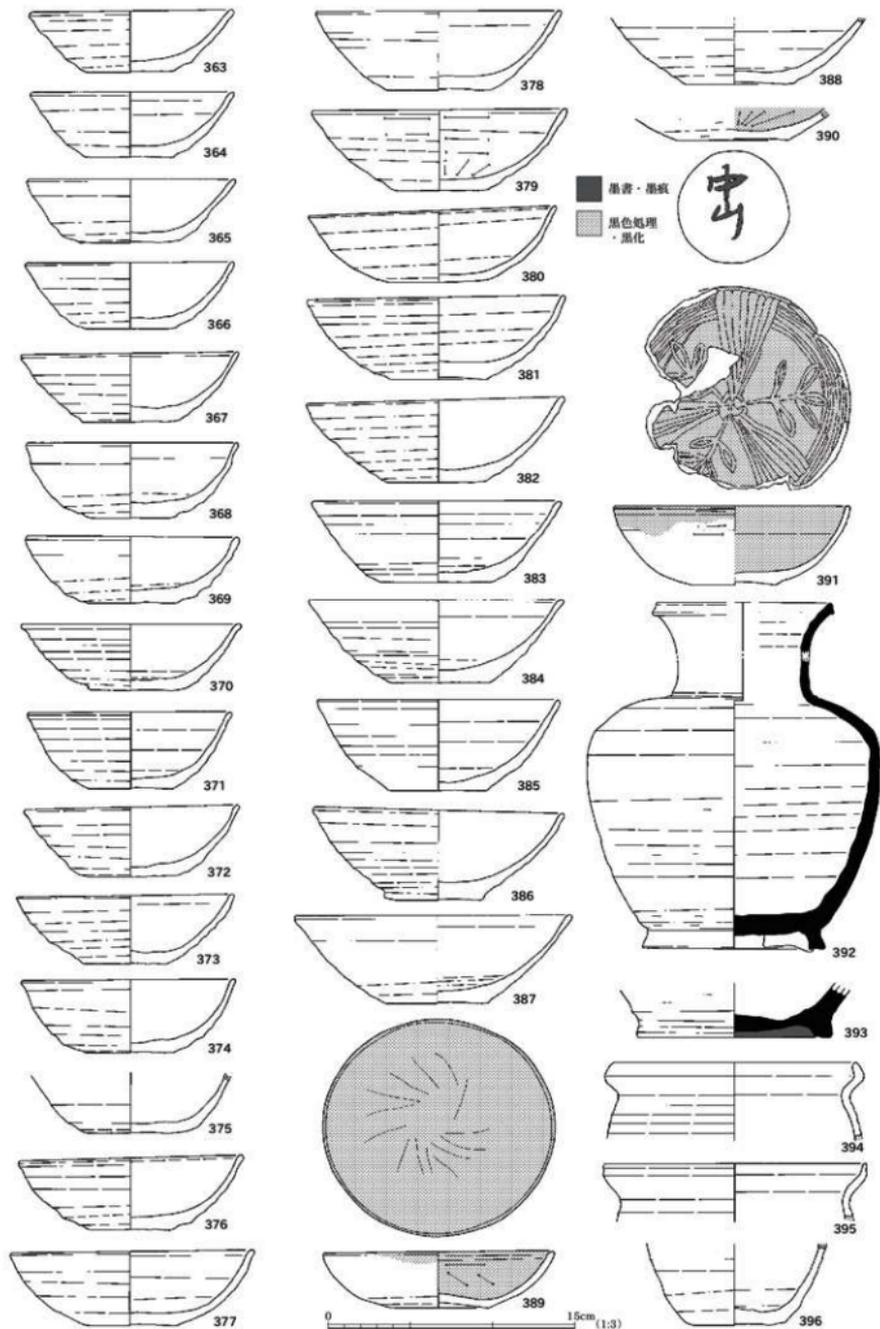
360



361



362

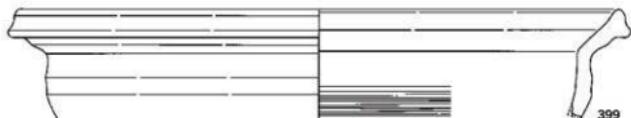




397



398



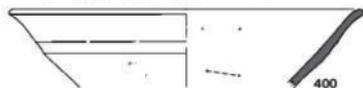
399

■ 黑書・墨底



413

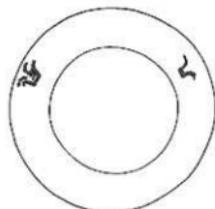
B·C区土器集中地点1-5e層 (400~647)



400



406



401



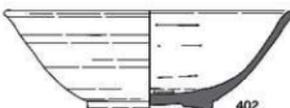
407



408



414



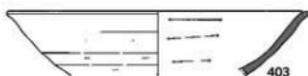
402



409



415



403



411



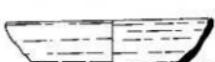
416



404



409+411

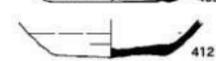


417



405

■ 緑釉陶器



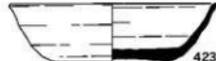
412



418



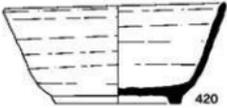
419



423



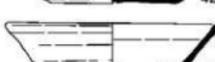
428



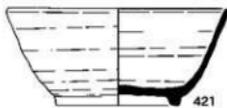
420



424



429



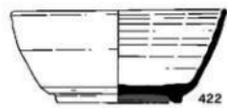
421



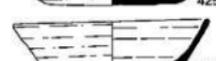
425



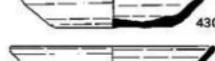
430



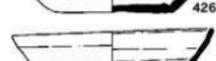
422



426



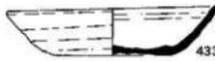
431



427

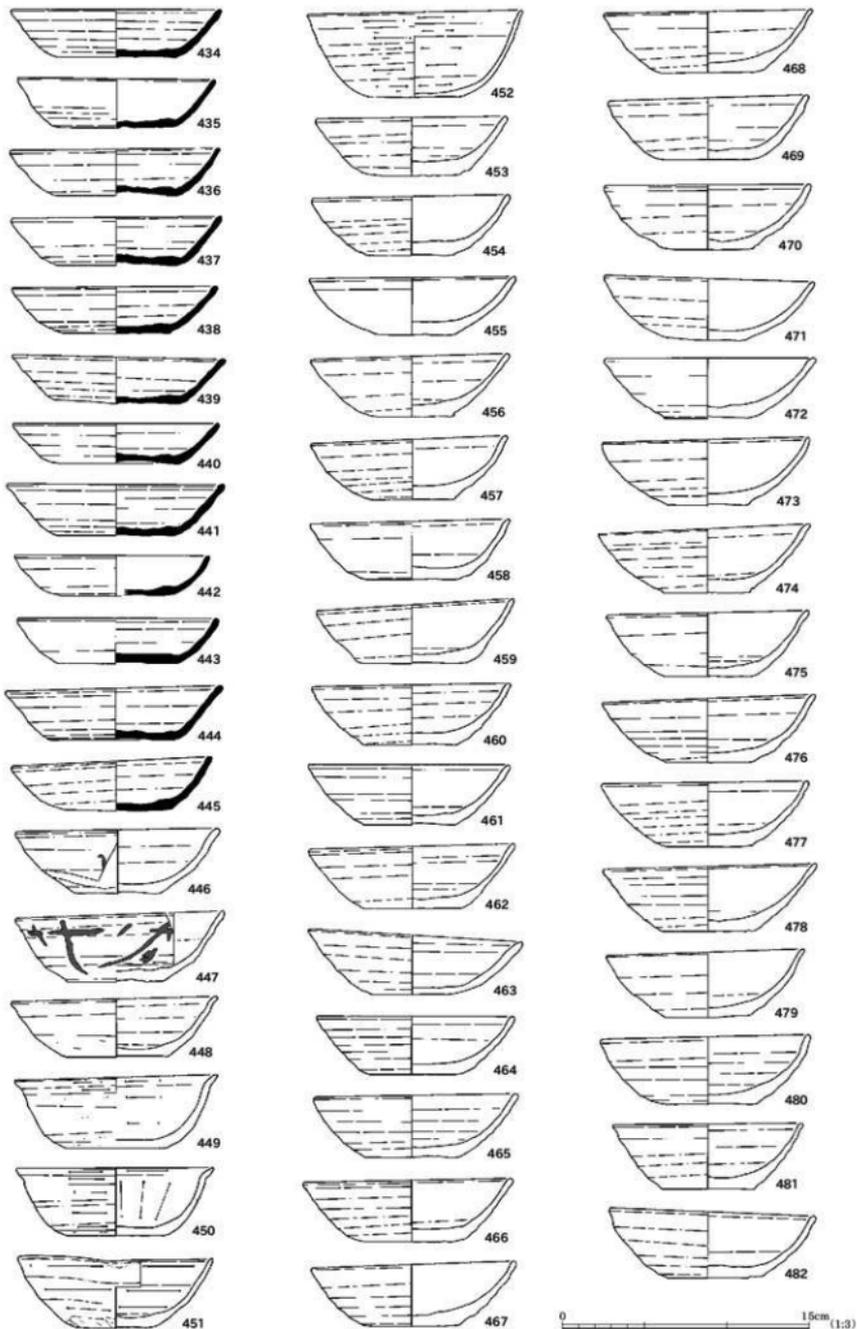


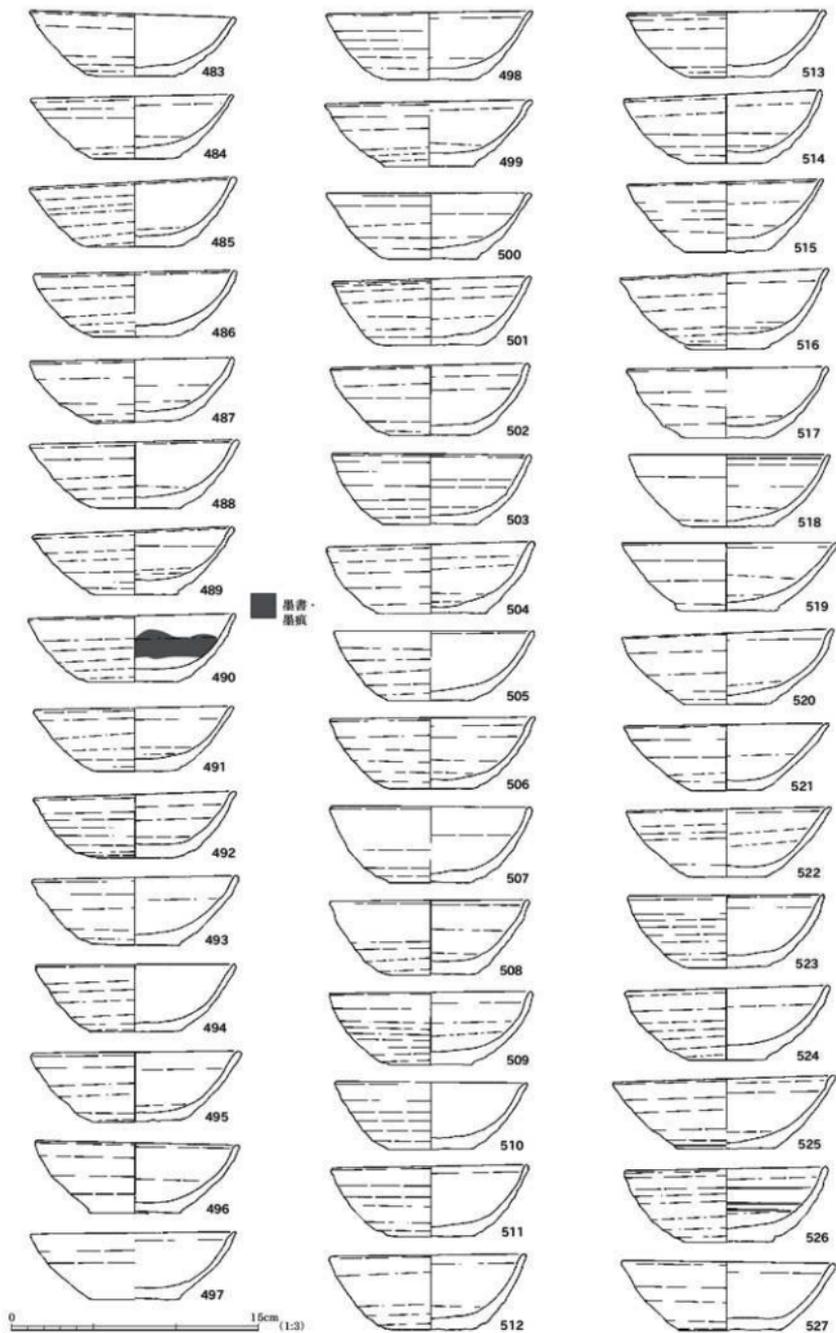
432



433

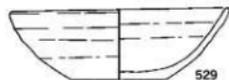
0 1.5cm (1:3)



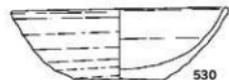




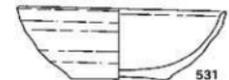
528



529



530



531



532



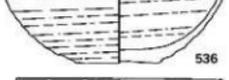
533



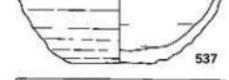
534



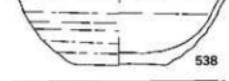
535



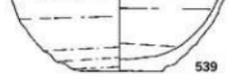
536



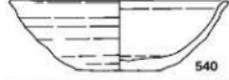
537



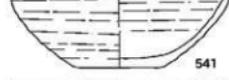
538



539



540



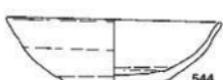
541



542



543



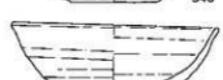
544



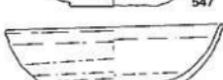
545



546



547



548



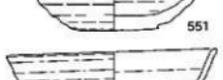
549



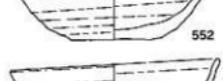
550



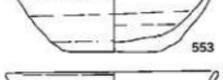
551



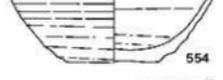
552



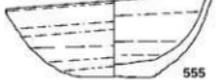
553



554



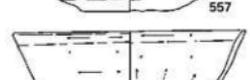
555



556



557



558



559



560



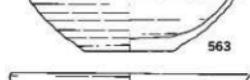
561



562



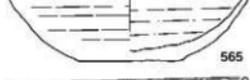
563



564



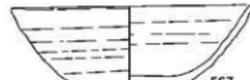
565



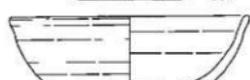
566



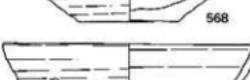
567



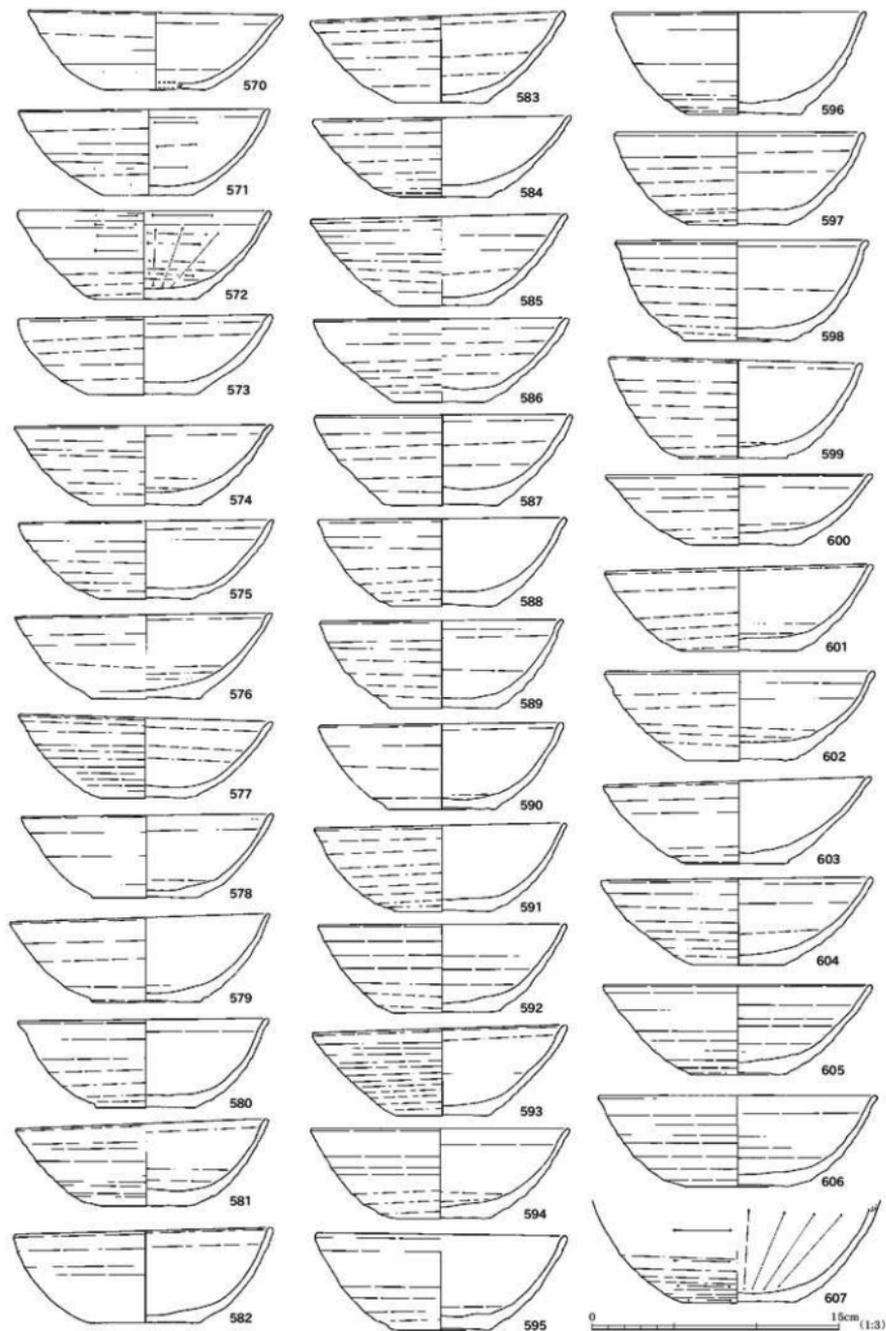
568

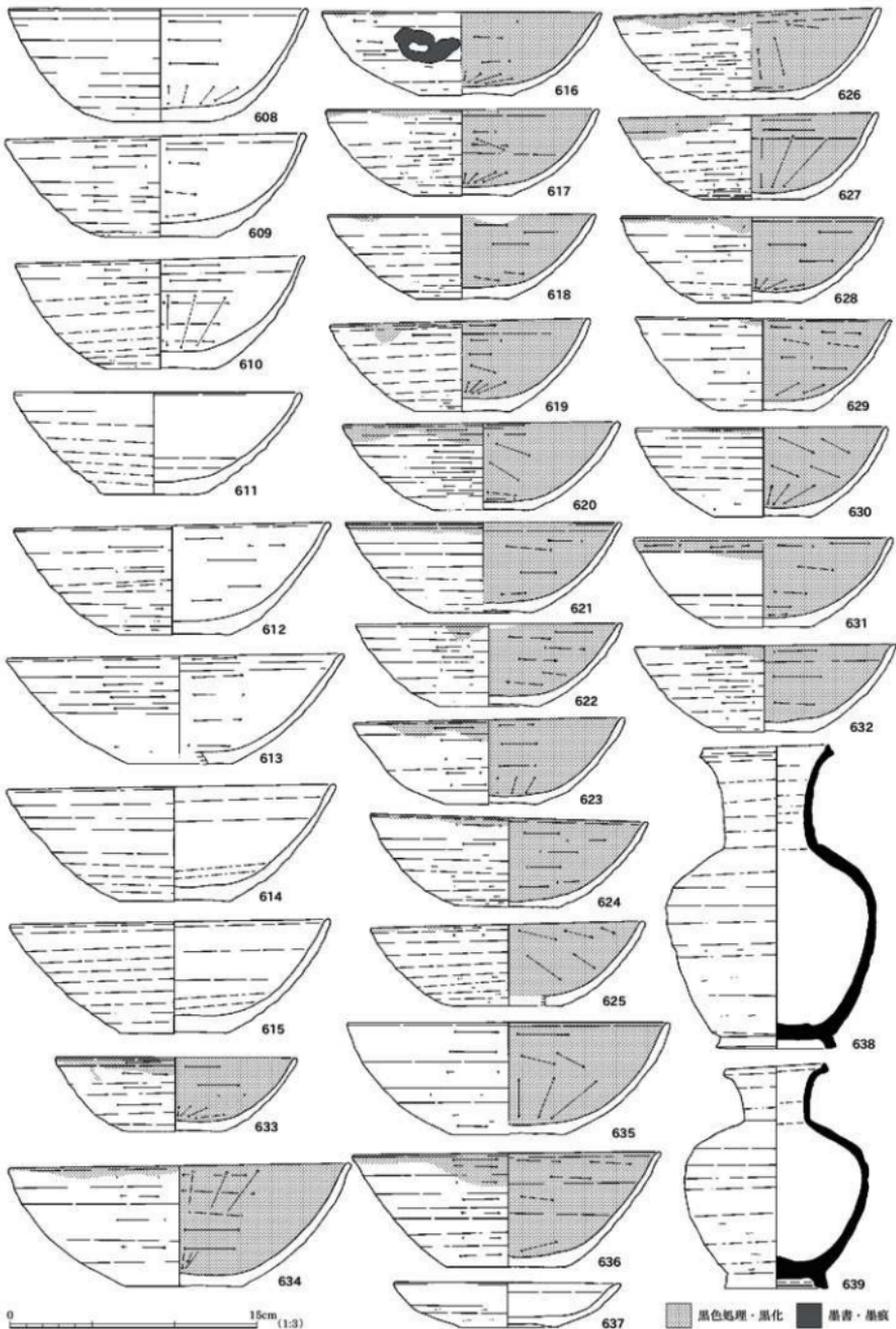


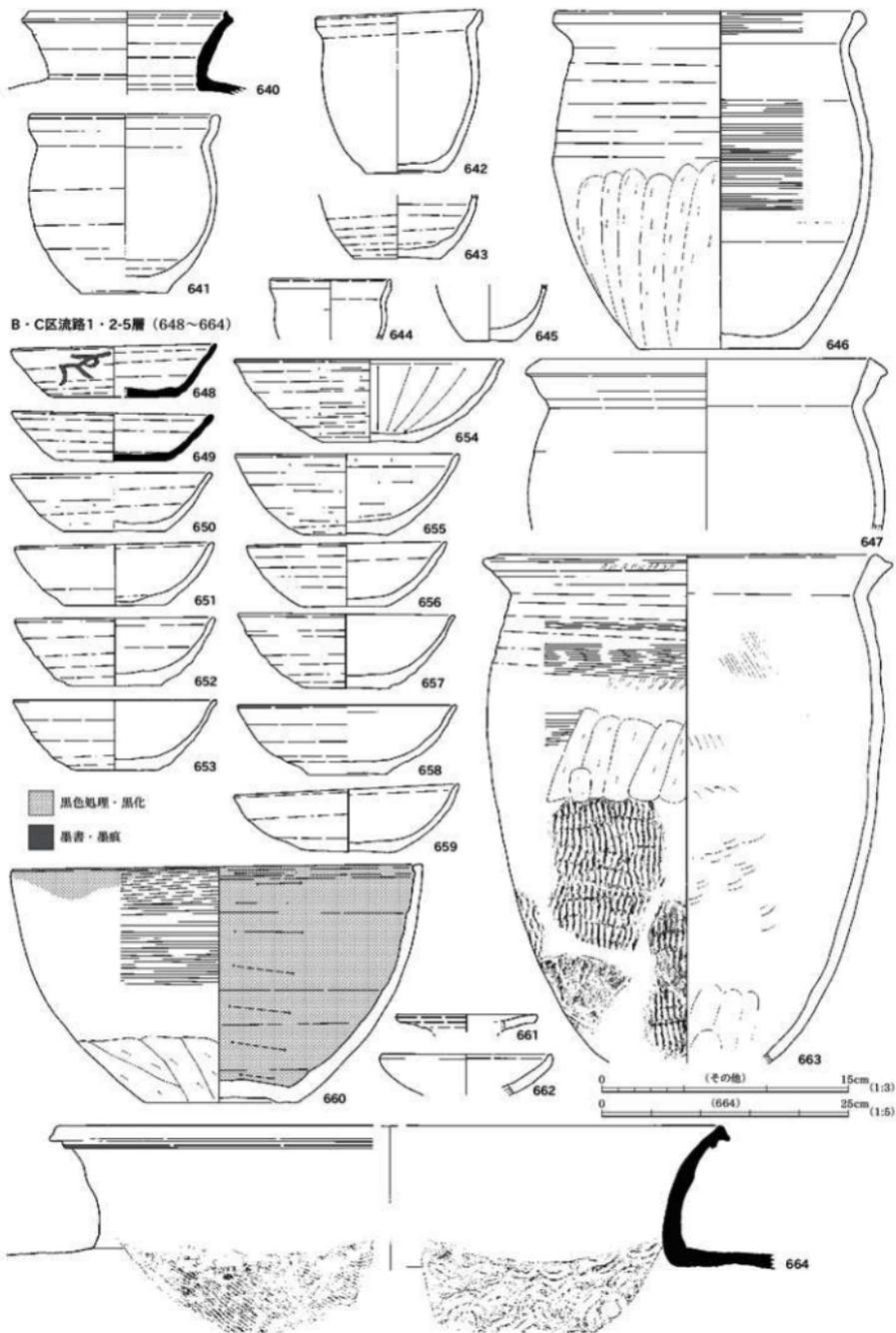
569



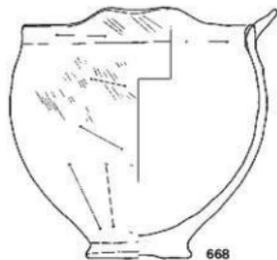
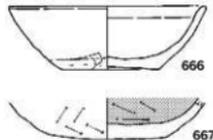
569



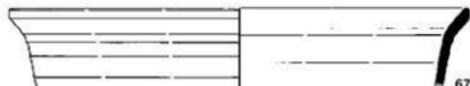
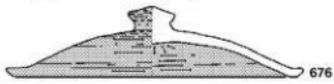
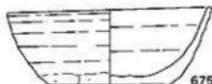
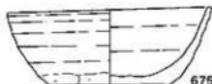
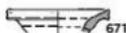




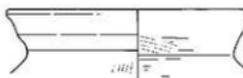
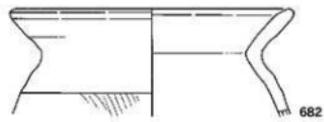
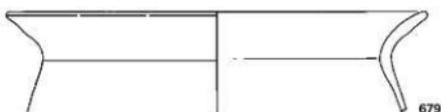
B・C区流路1・2・6～8層 (665～668)



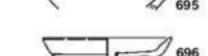
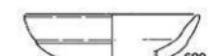
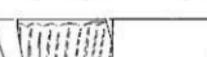
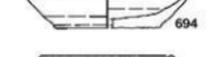
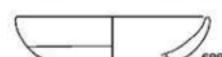
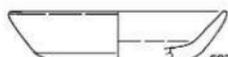
B・C区その他の土器 (669～678)

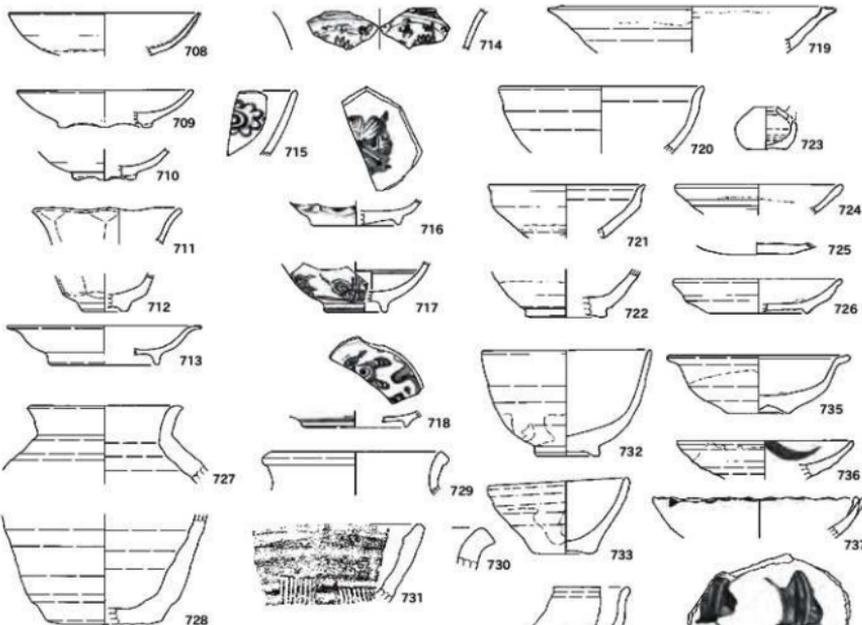


B・C区古墳時代の土器 (679～685)

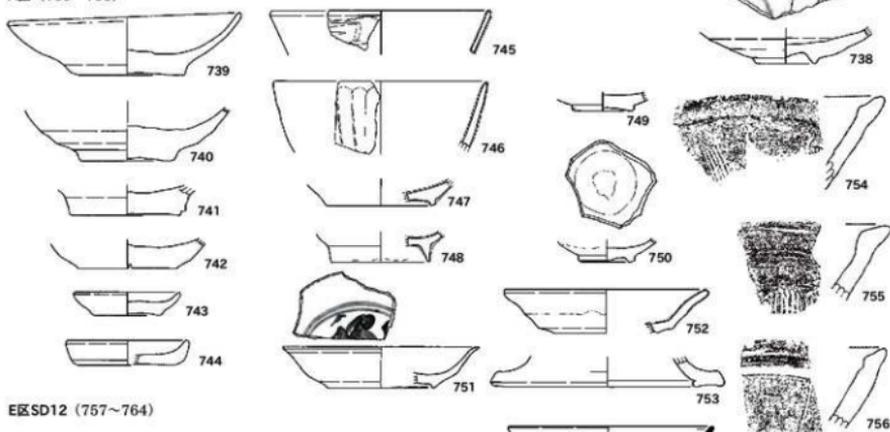


B・C区中世の土器・陶磁器 (686～738)

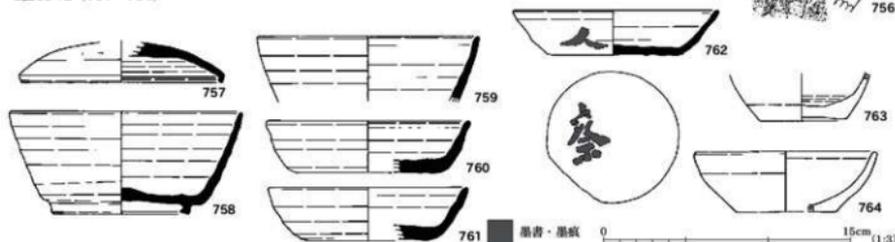




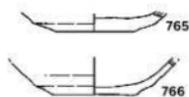
A区 (739~756)



E区SD12 (757~764)



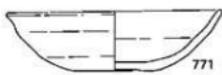
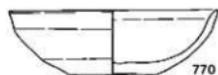
E区SB1 (765・766)



E区SX2 (767~769)

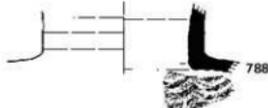
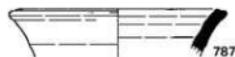
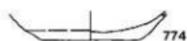
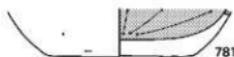
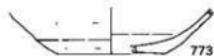


E区SK7 (770・771)

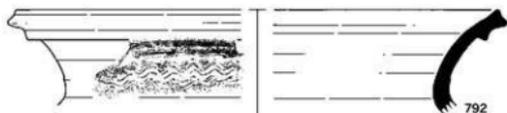
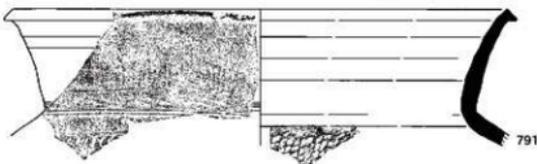
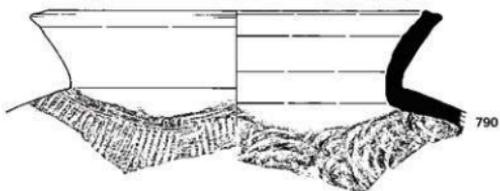


0 (その他) 15cm (1:3)

E区その他の遺構 (772~775)

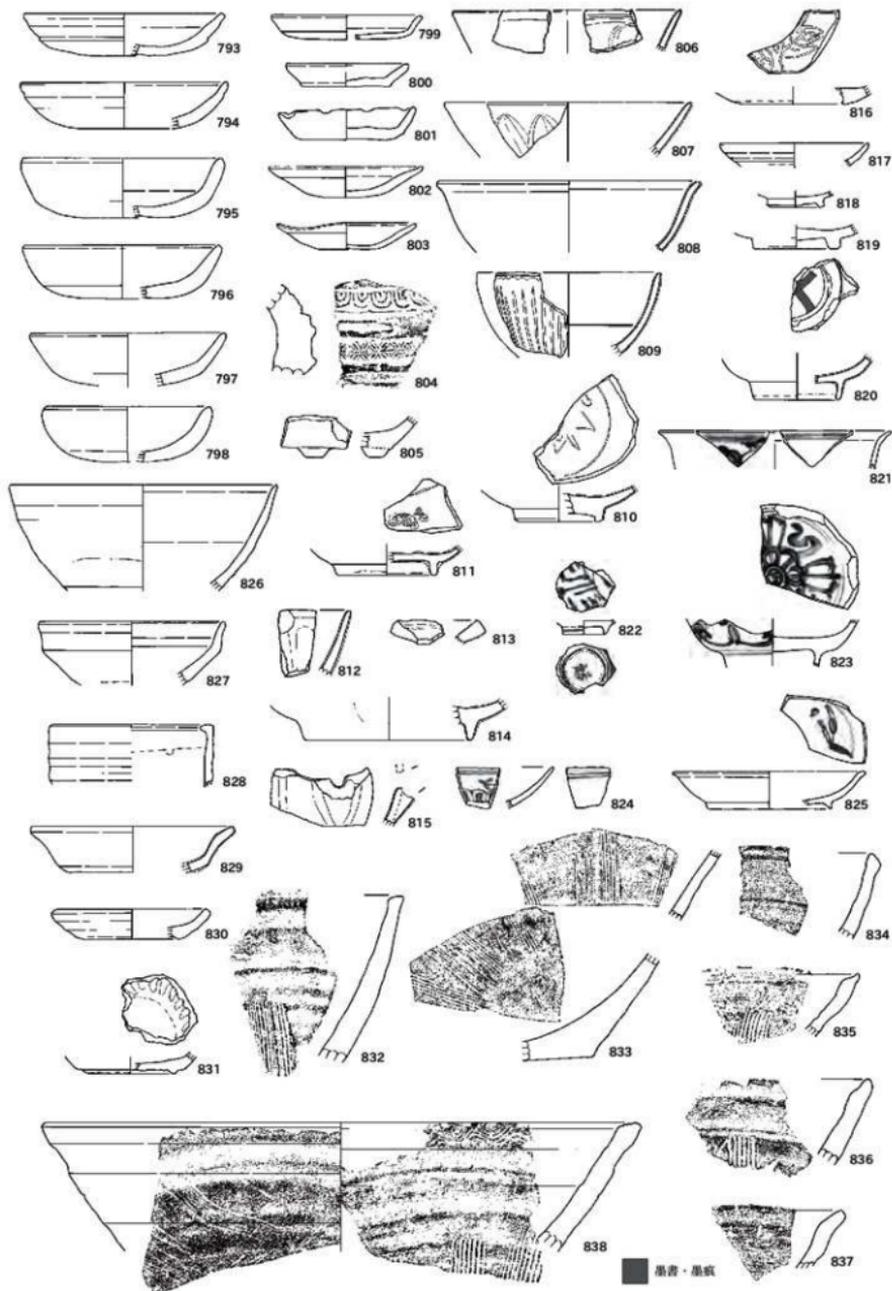


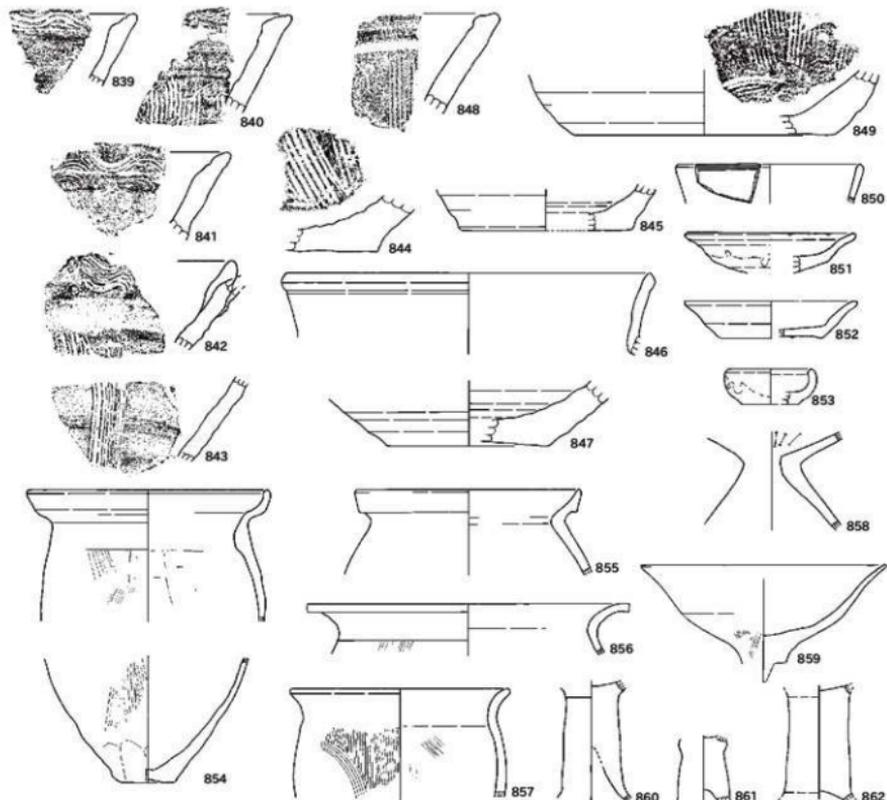
D・E・F・G区包含層ほか (776~862)



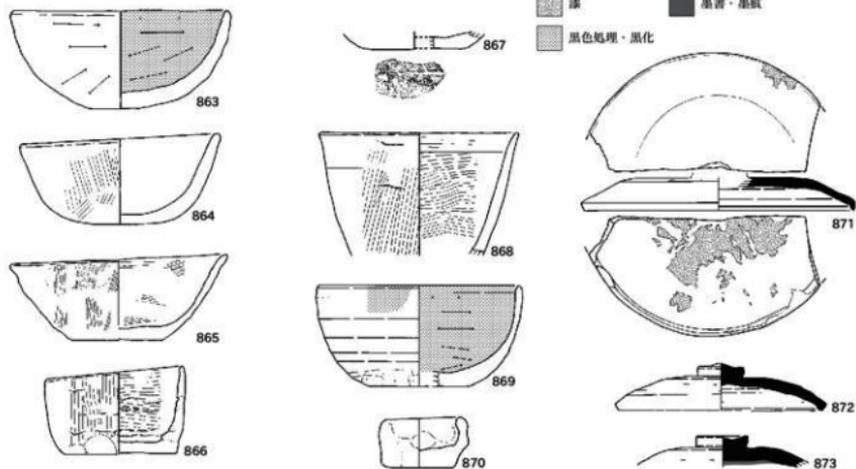
■ 黒色処理・黒化
■ 緑軸陶器
■ 黒書・黒疵

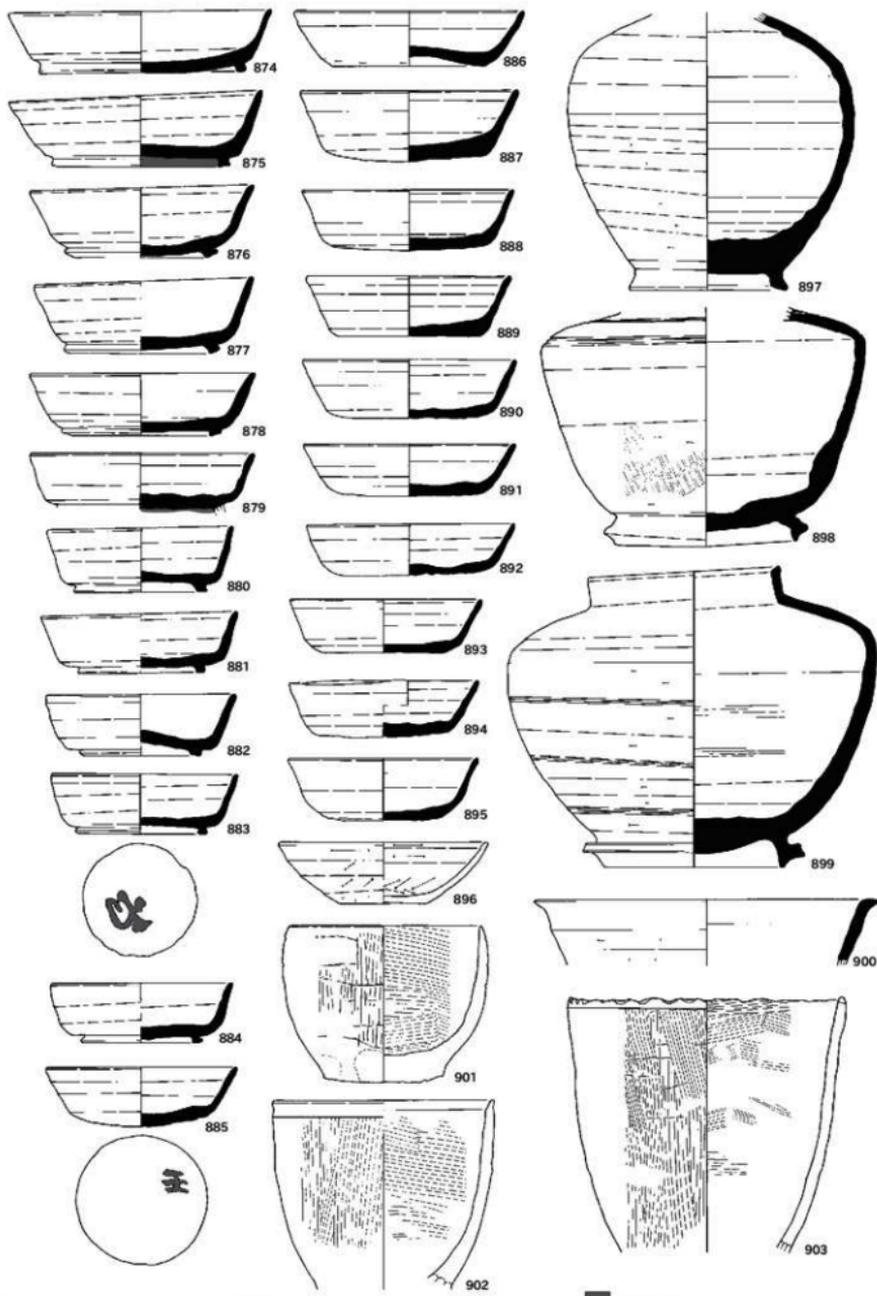
0 (792) 25cm (1:5)

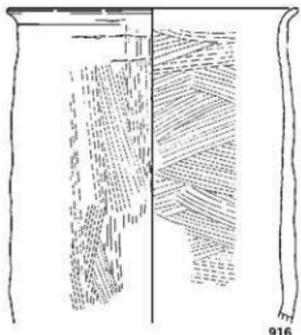
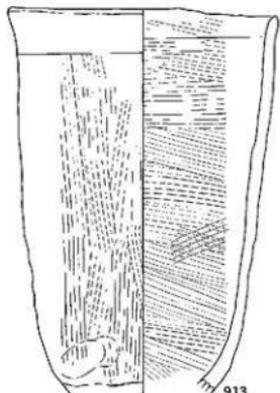
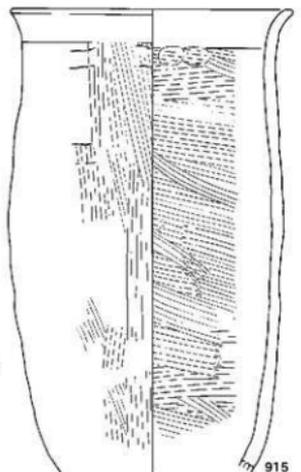
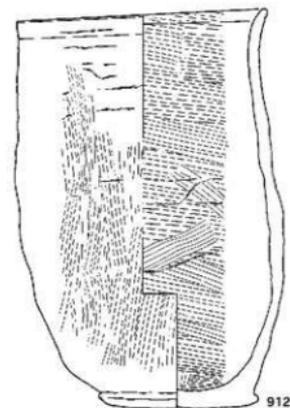
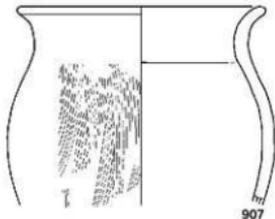
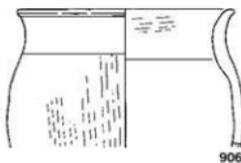
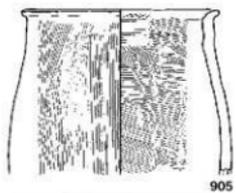
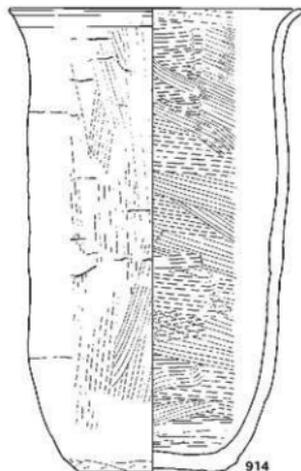
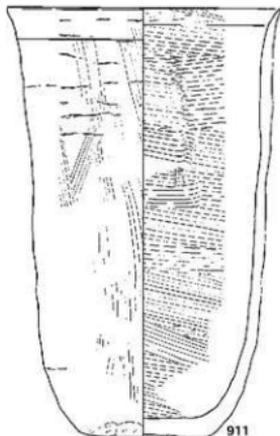
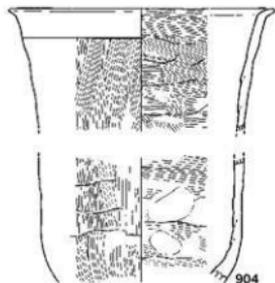




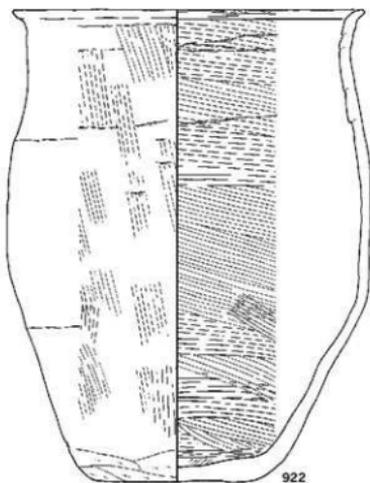
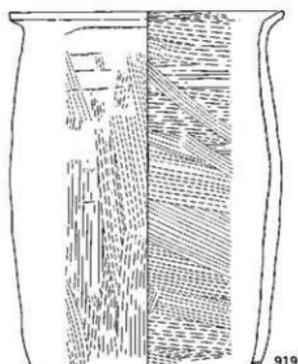
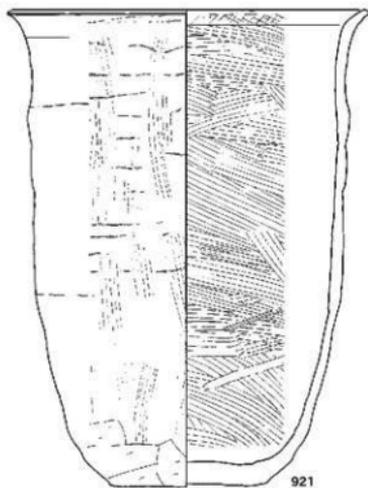
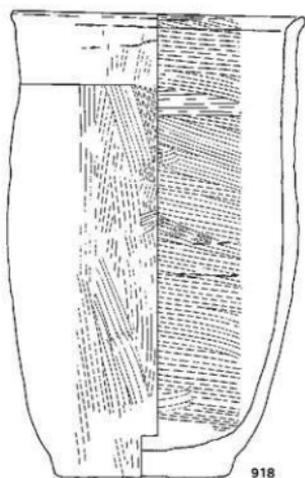
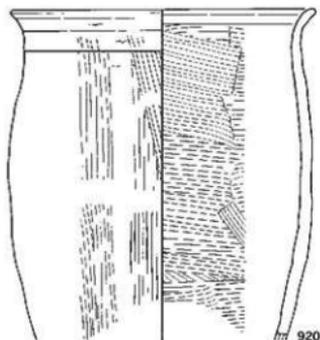
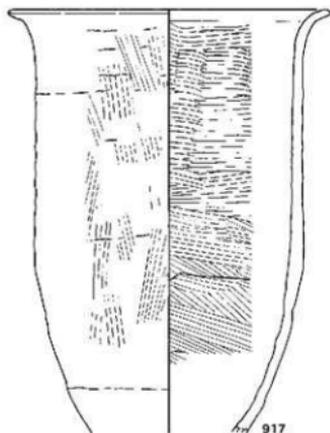
H区流路14下層土器集中地点1 (863~950)



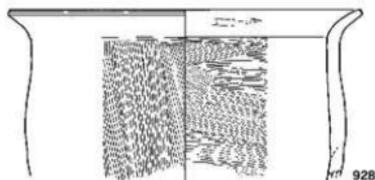
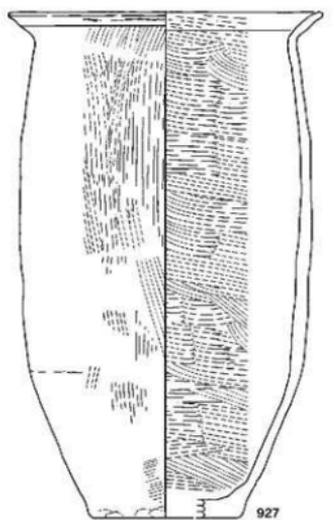
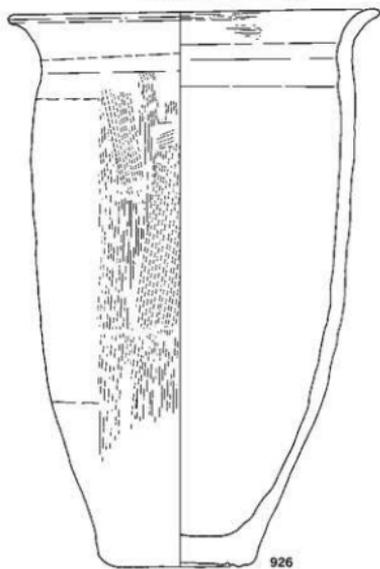
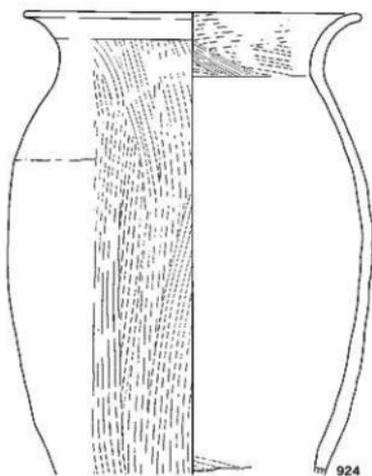
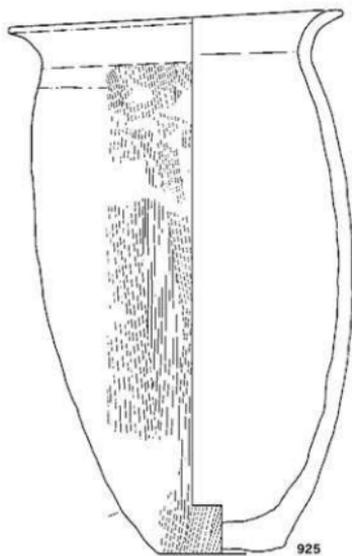
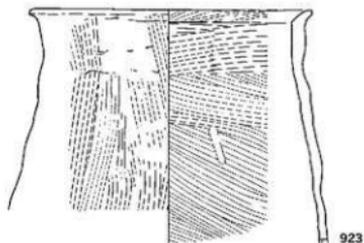


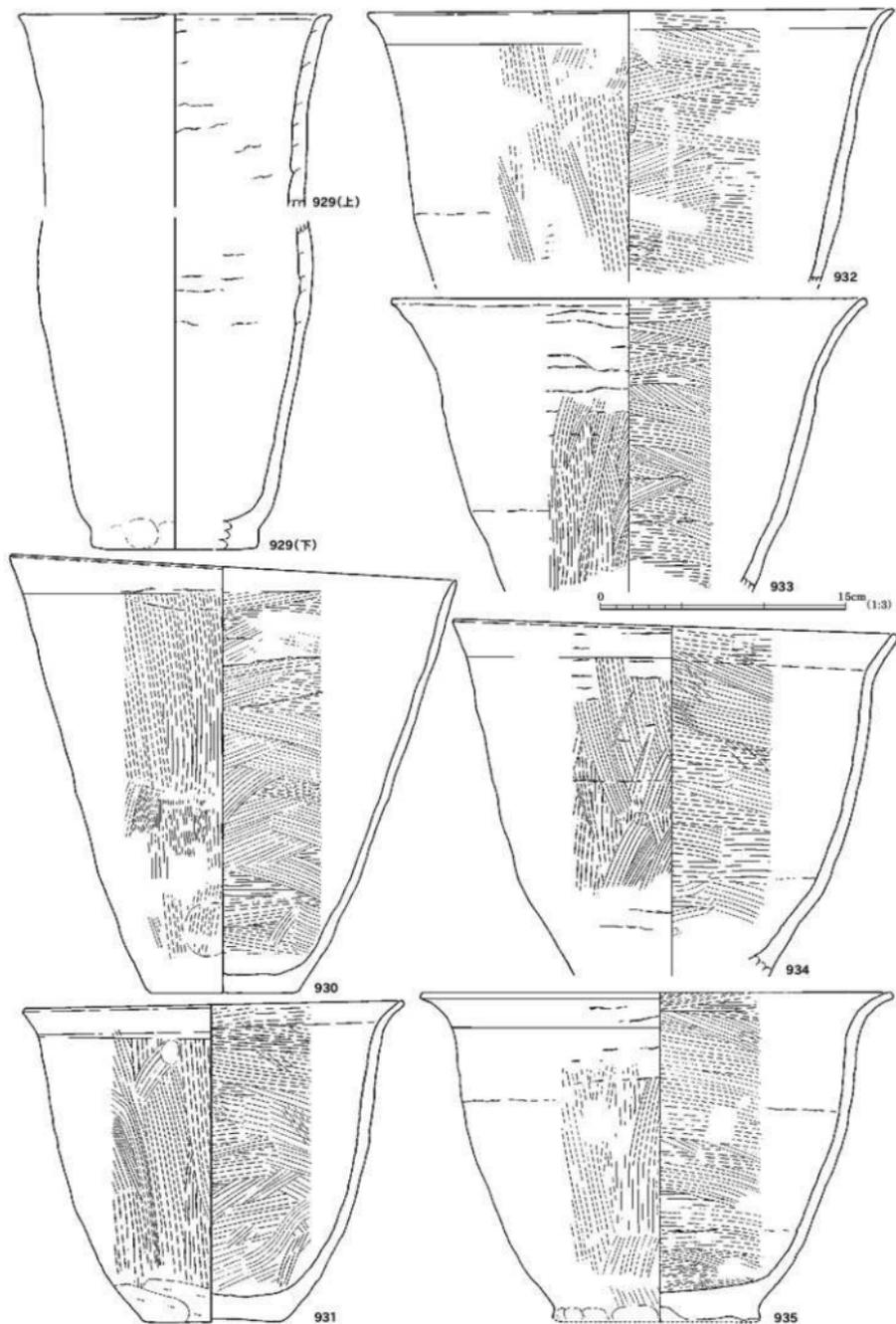


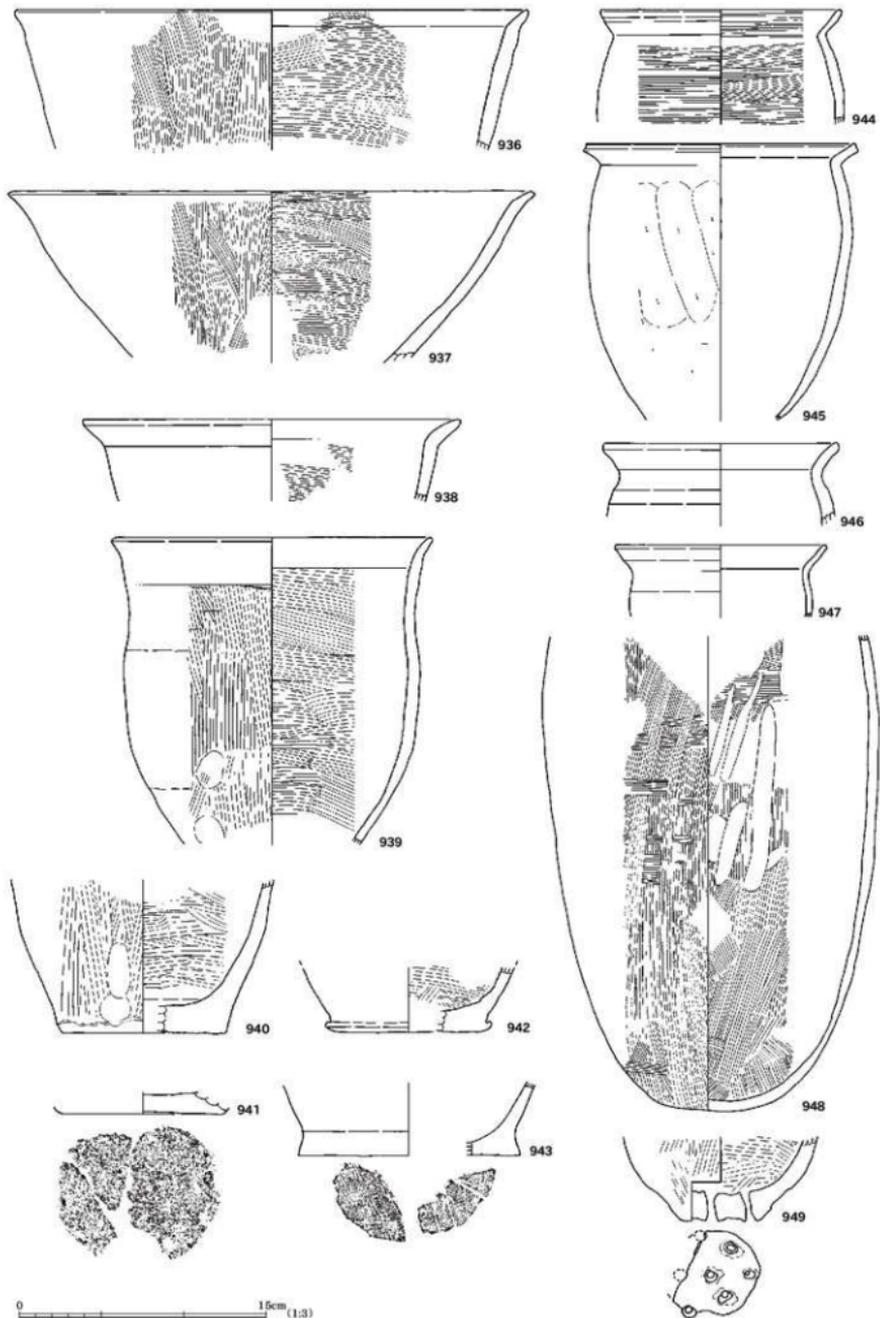
0 15cm (1:3)

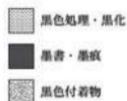
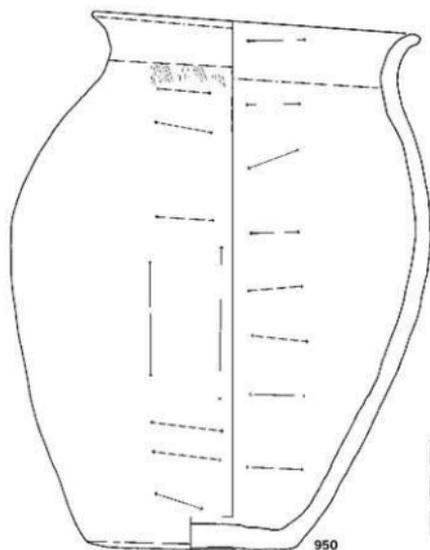


0 15cm (1:3)

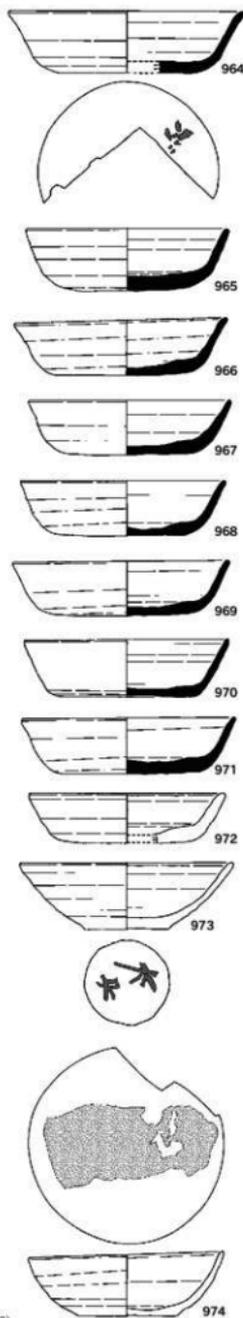
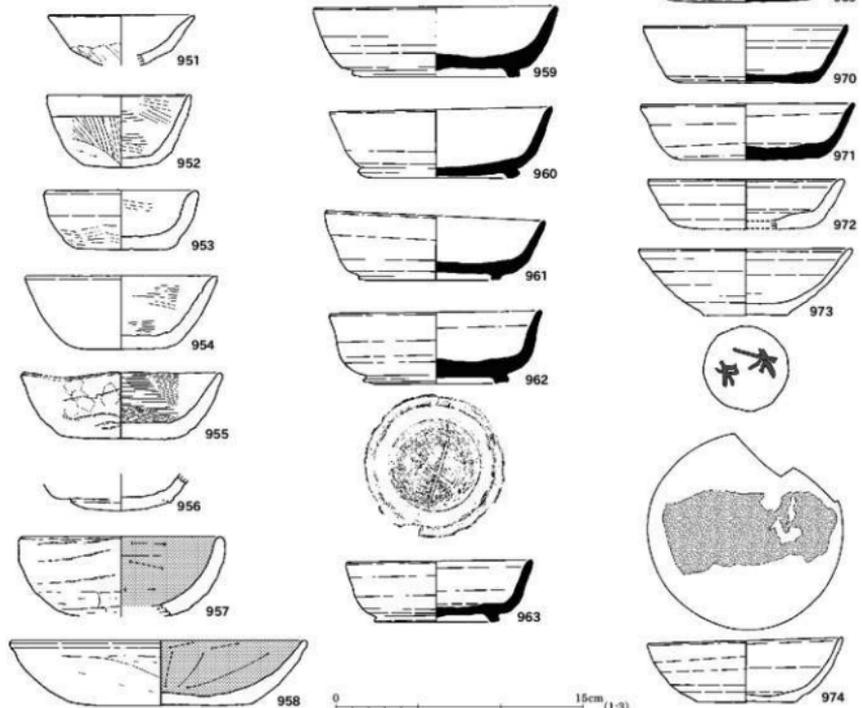


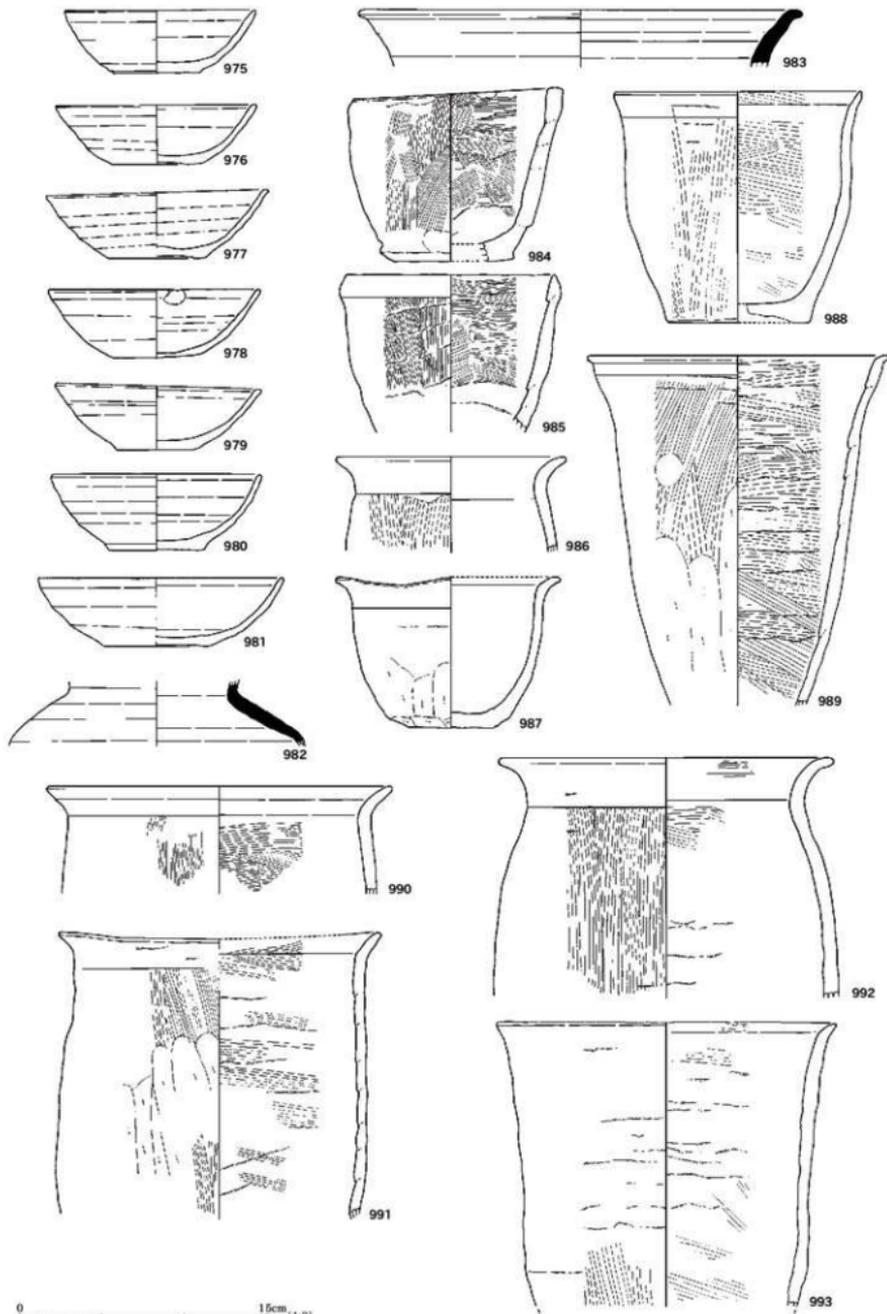


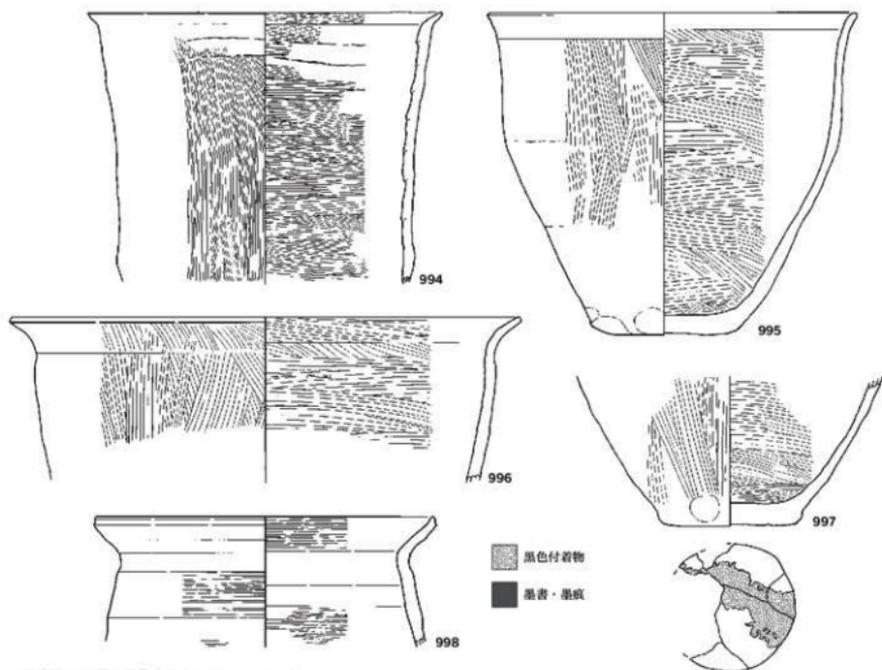




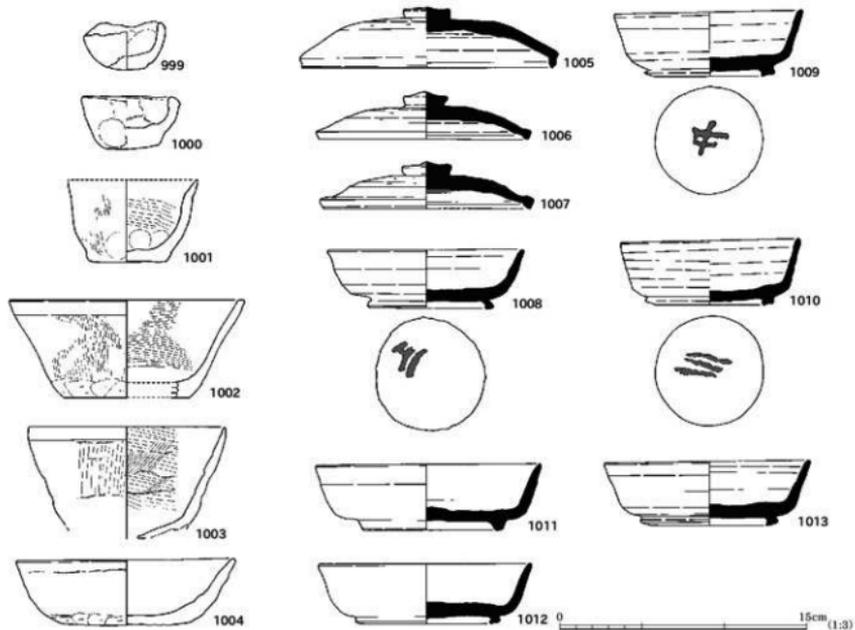
H区流路14下層土器集中地点2 (951~998)

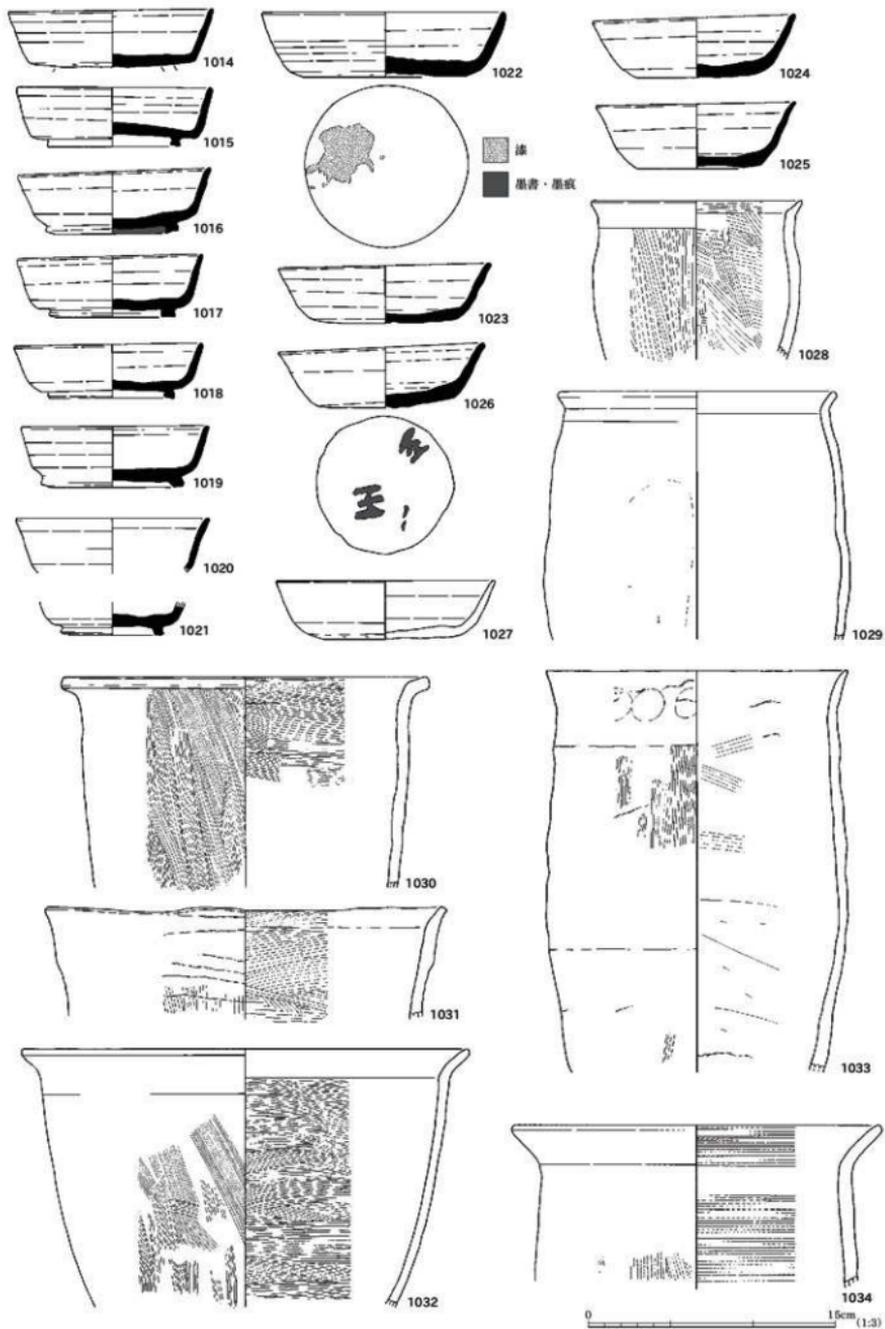






H区流路14下層土器集中地点3 (999~1039)



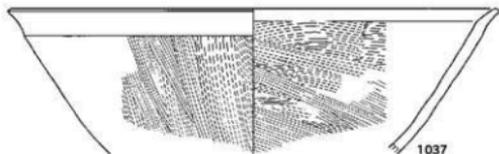




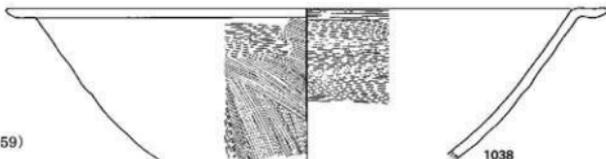
1035



1036



1037



1038

H区流路14下層土器集中地点4 (1040~1059)



1040



1041



1042



1043



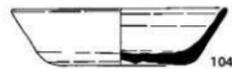
1044



■ 墨書・墨痕



1045



1046



1047



1048



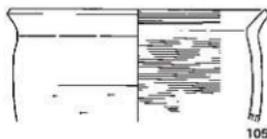
1049



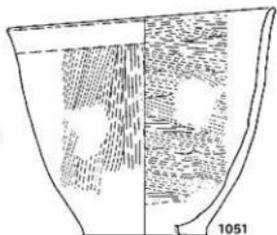
1039



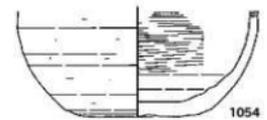
1050



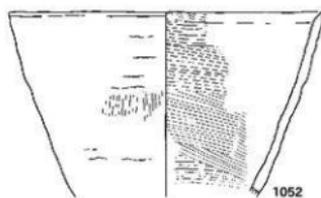
1053



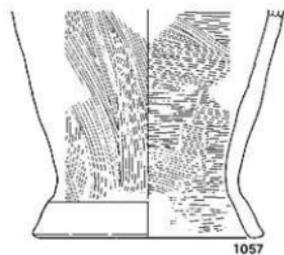
1051



1054



1052



1057

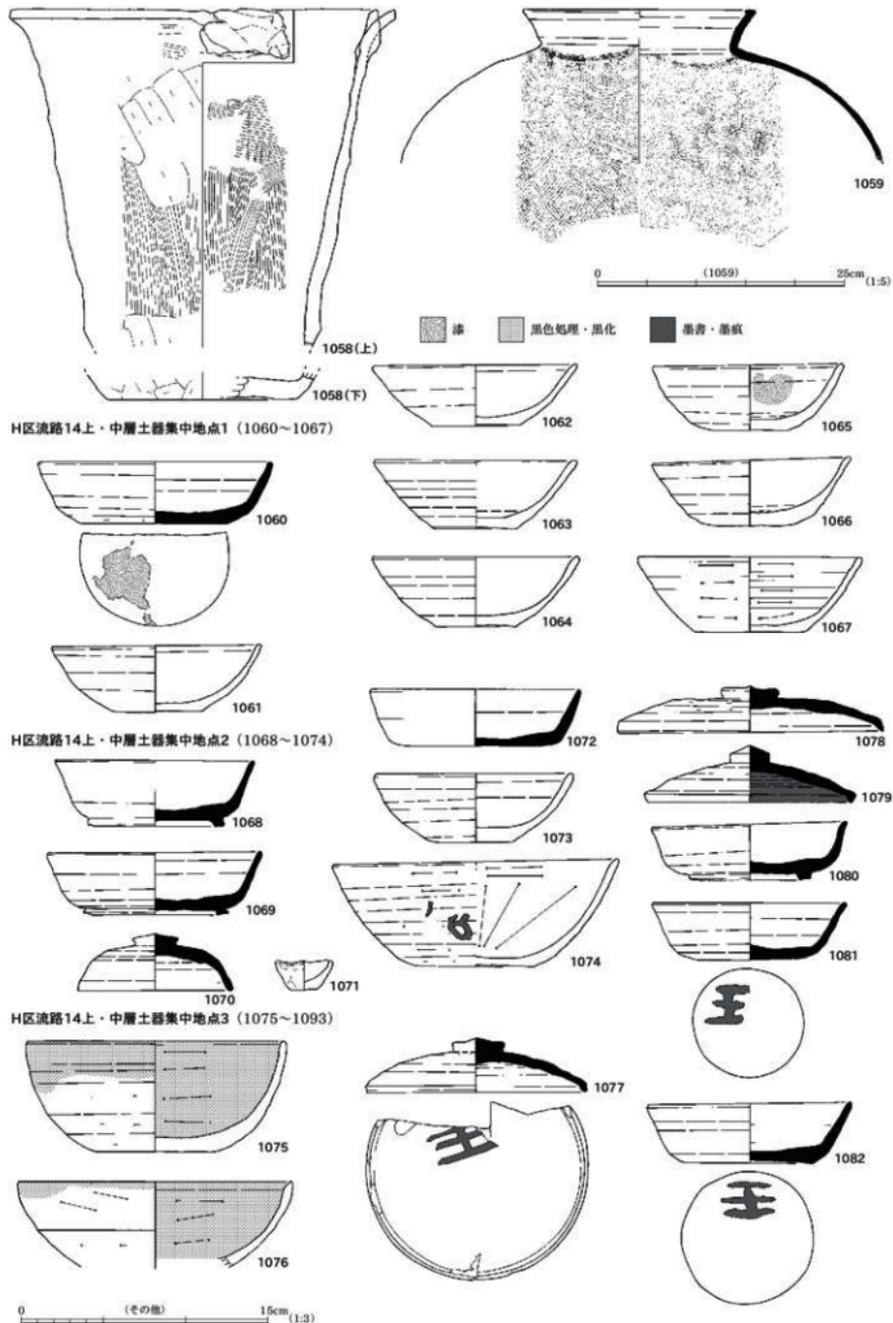


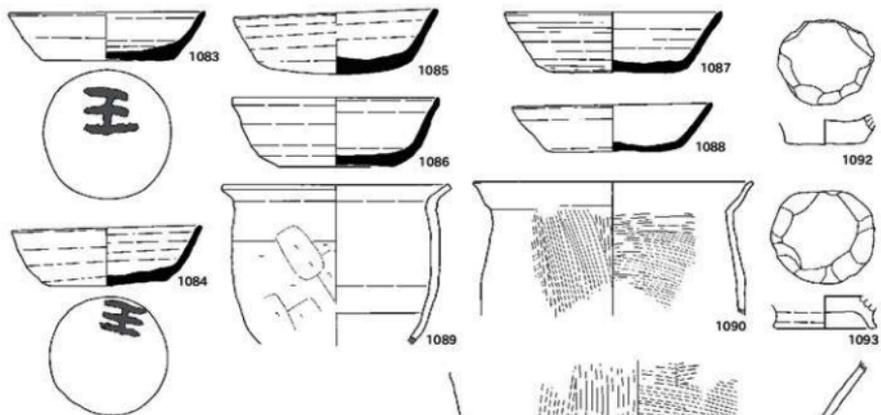
1055



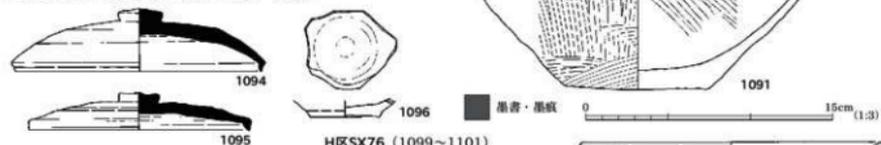
1056

0 15cm (1:3)

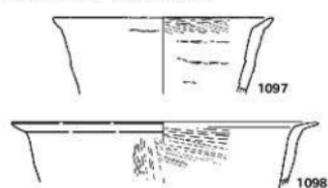




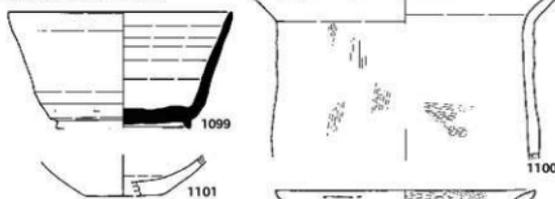
H区流路14上・中層土器集中地点4 (1094~1096)



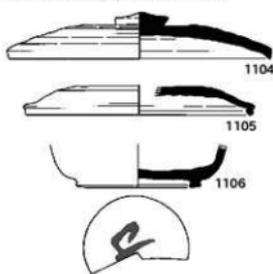
H区P30 (SB1) (1097・1098)



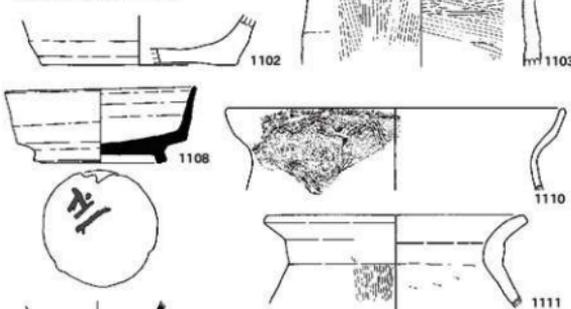
H区SX76 (1099~1101)



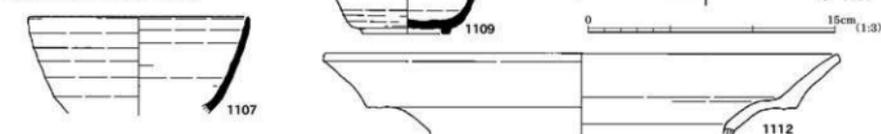
H区・その他の遺構 (1104~1106)

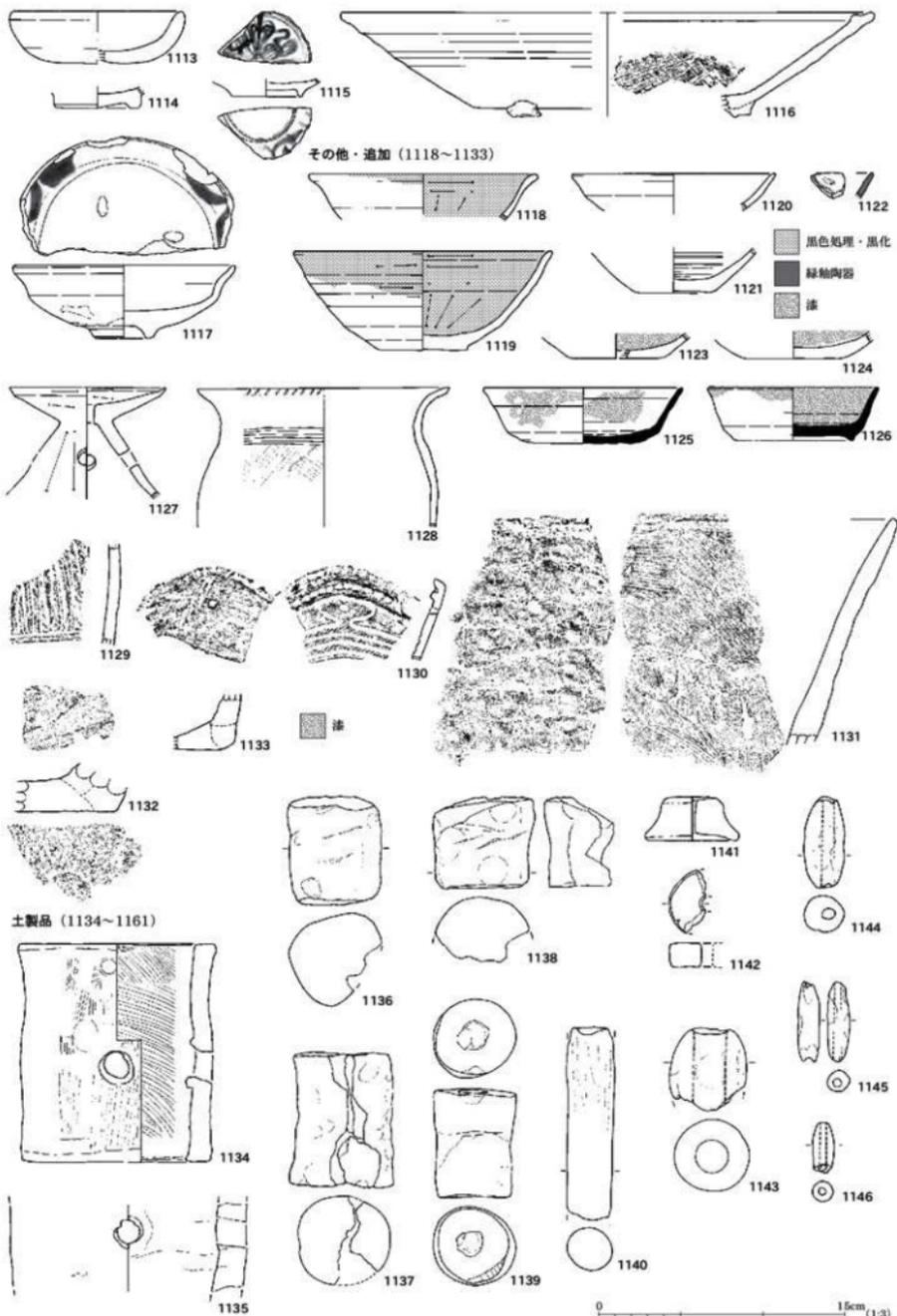


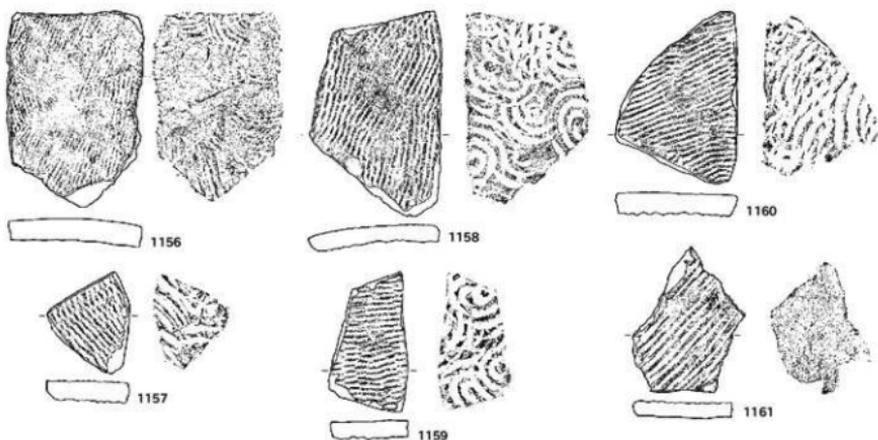
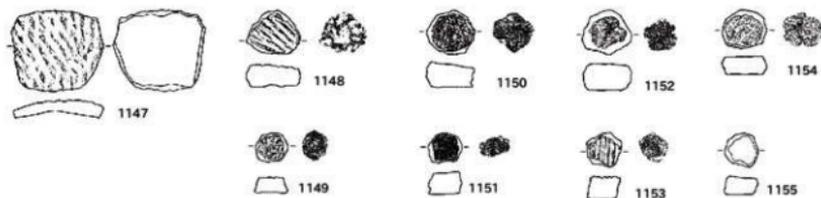
H区SK67 (1102・1103)



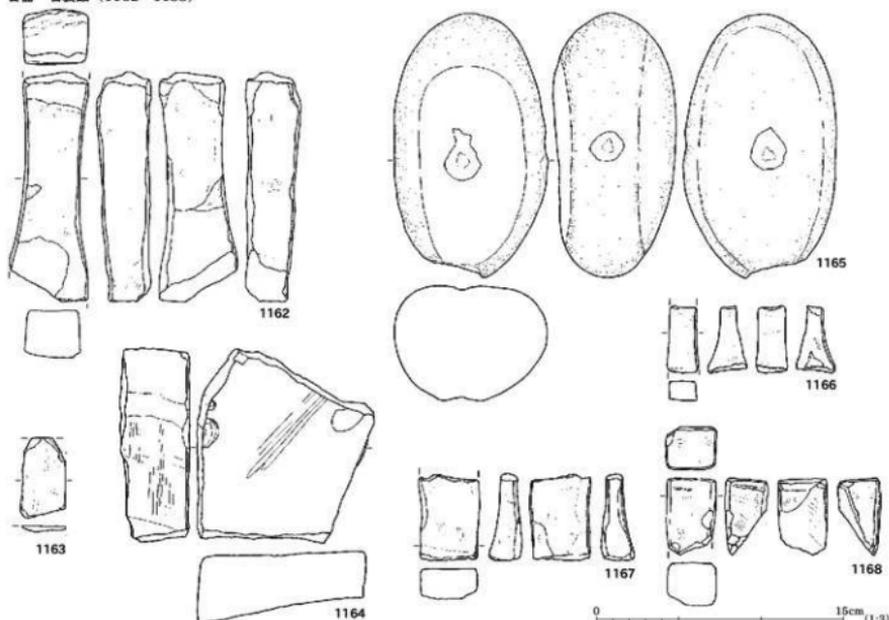
H区包含層ほか (1107~1117)

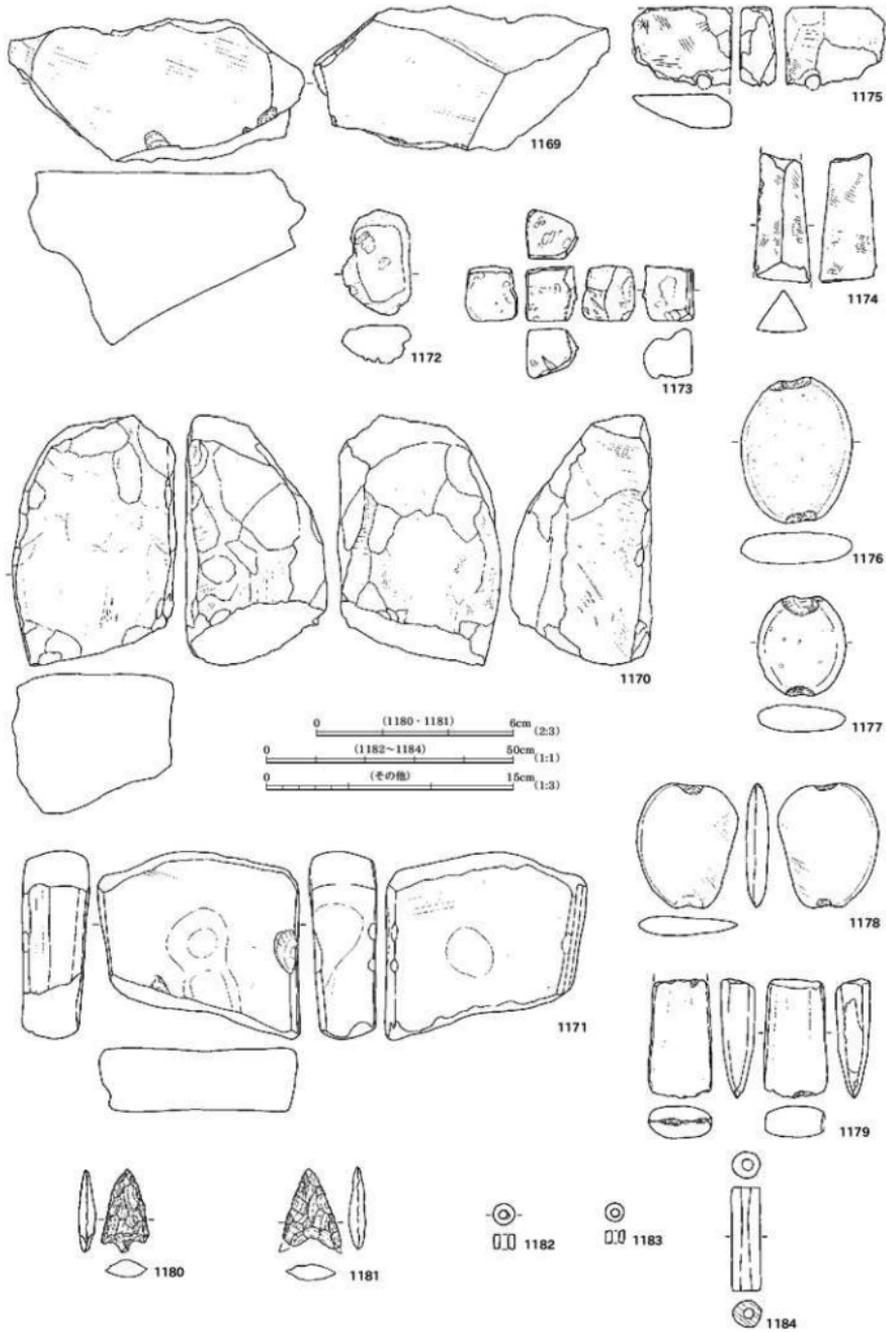


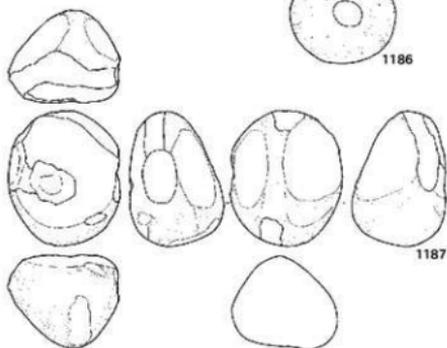
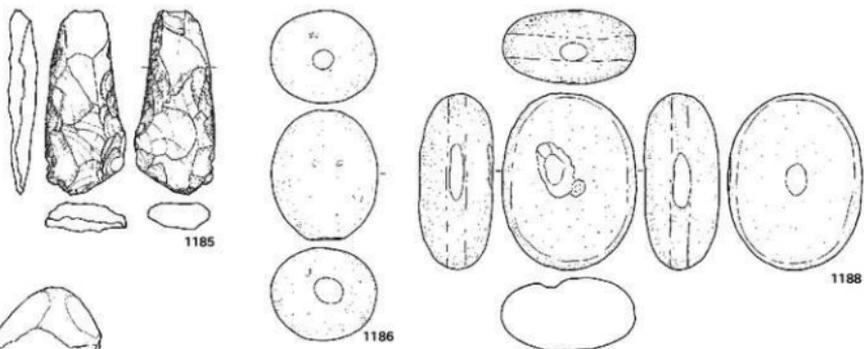




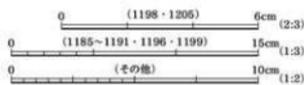
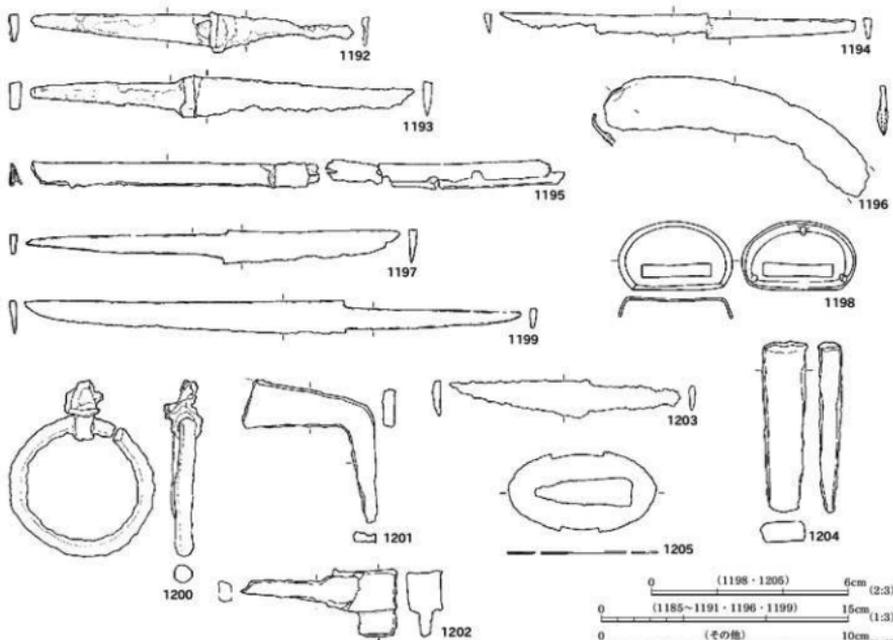
石器・石製品 (1162~1188)

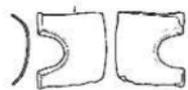




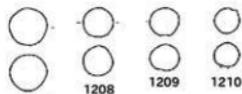


製鉄関連遺物・金属製品 (1189~1235)





1206



1207

1208

1209

1210



1211



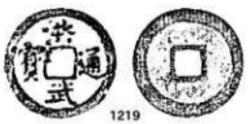
1218



1227



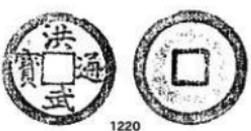
1212



1219



1228



1220



1229



1221



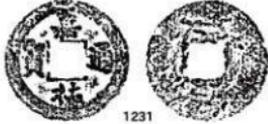
1230



1213



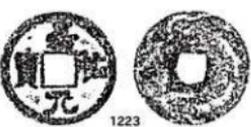
1222



1231



1214



1223



1232



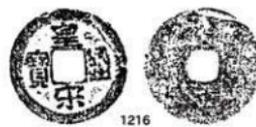
1215



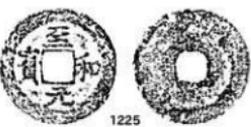
1224



1233



1216



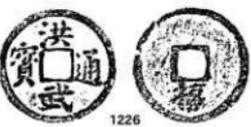
1225



1234



1217

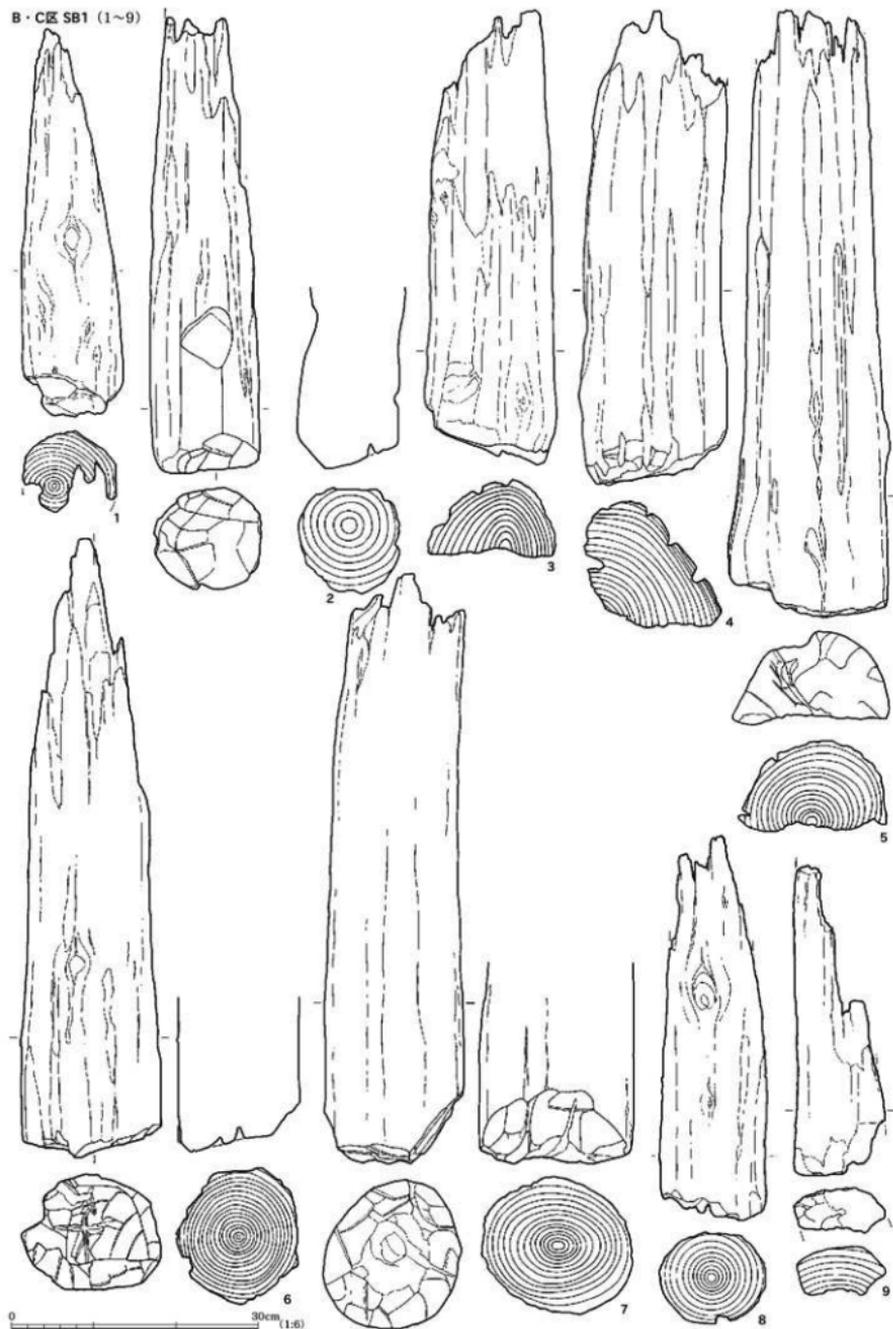


1226

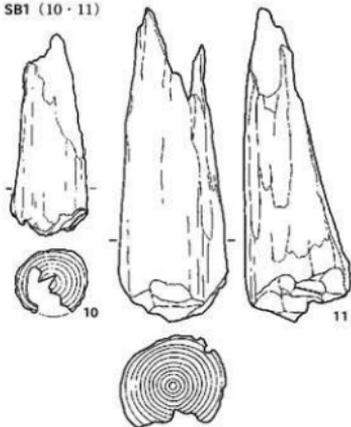


1235

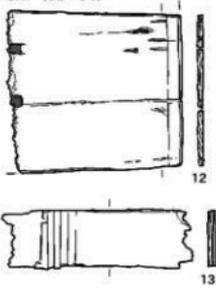
B・C区 SB1 (1~9)



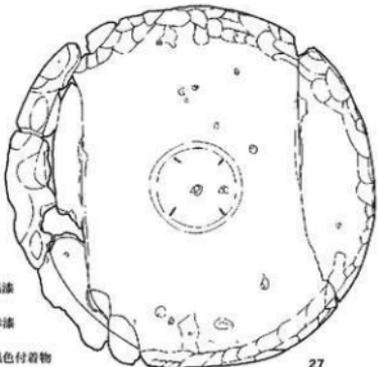
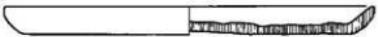
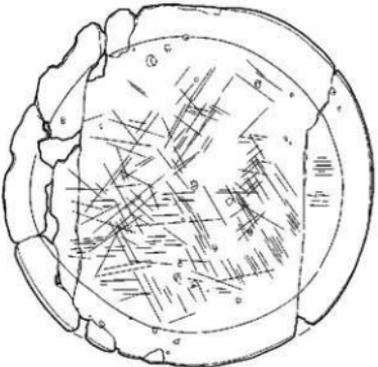
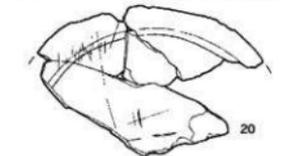
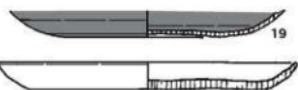
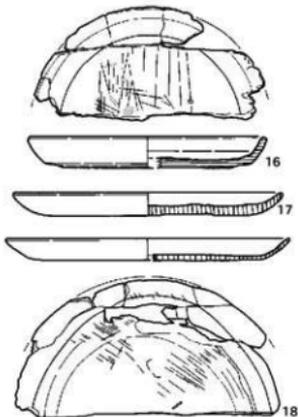
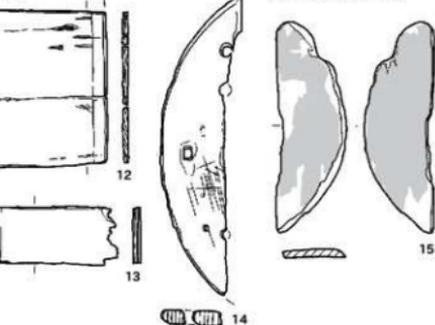
SBI (10・11)



SK7 (12~14)



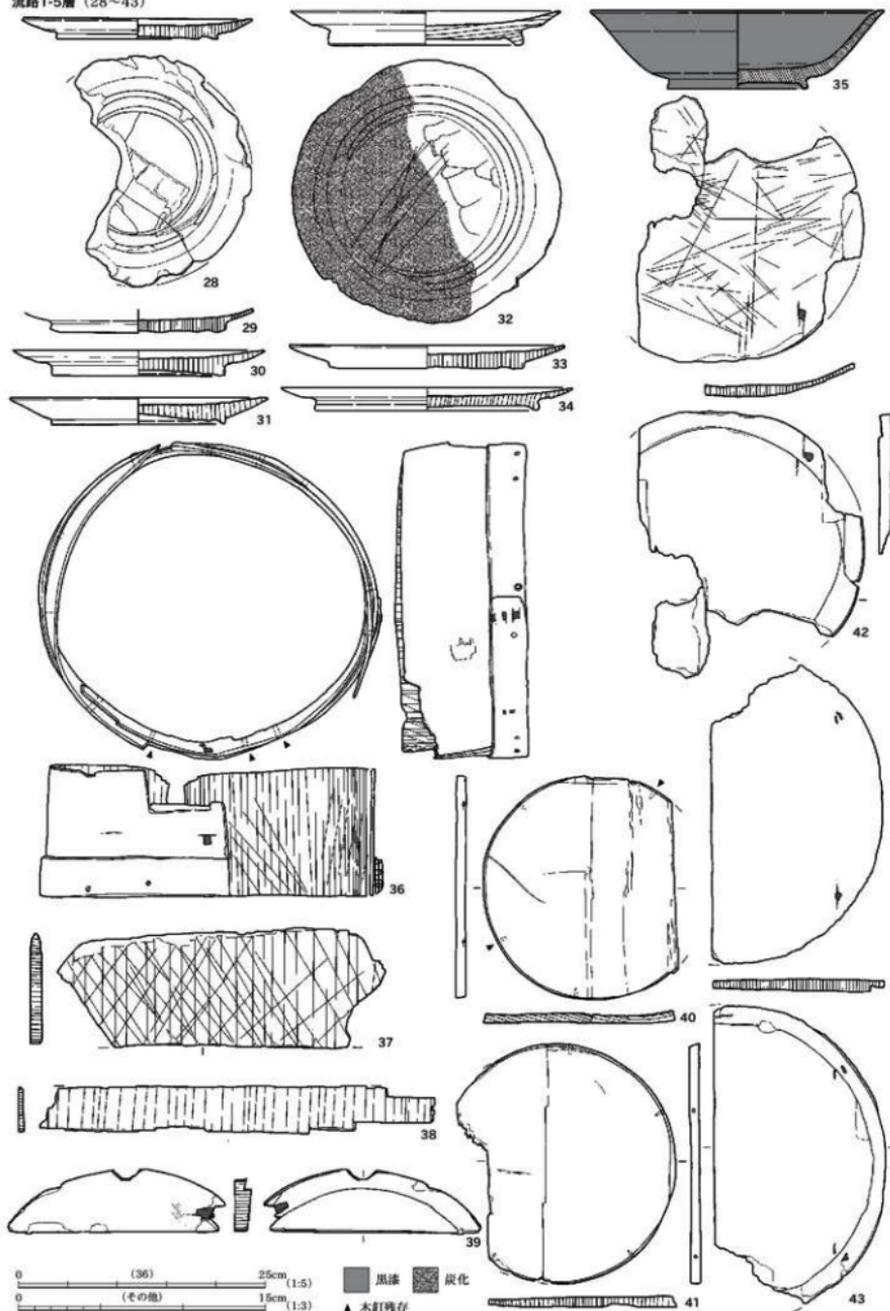
流路1-5層 (15~27)



■ 黒漆
■ 赤漆
■ 黒色付着物
(その他)

0 (10-11) 30cm (1:6) 0 (その他) 15cm (1:3)

流路1-5層 (28~43)

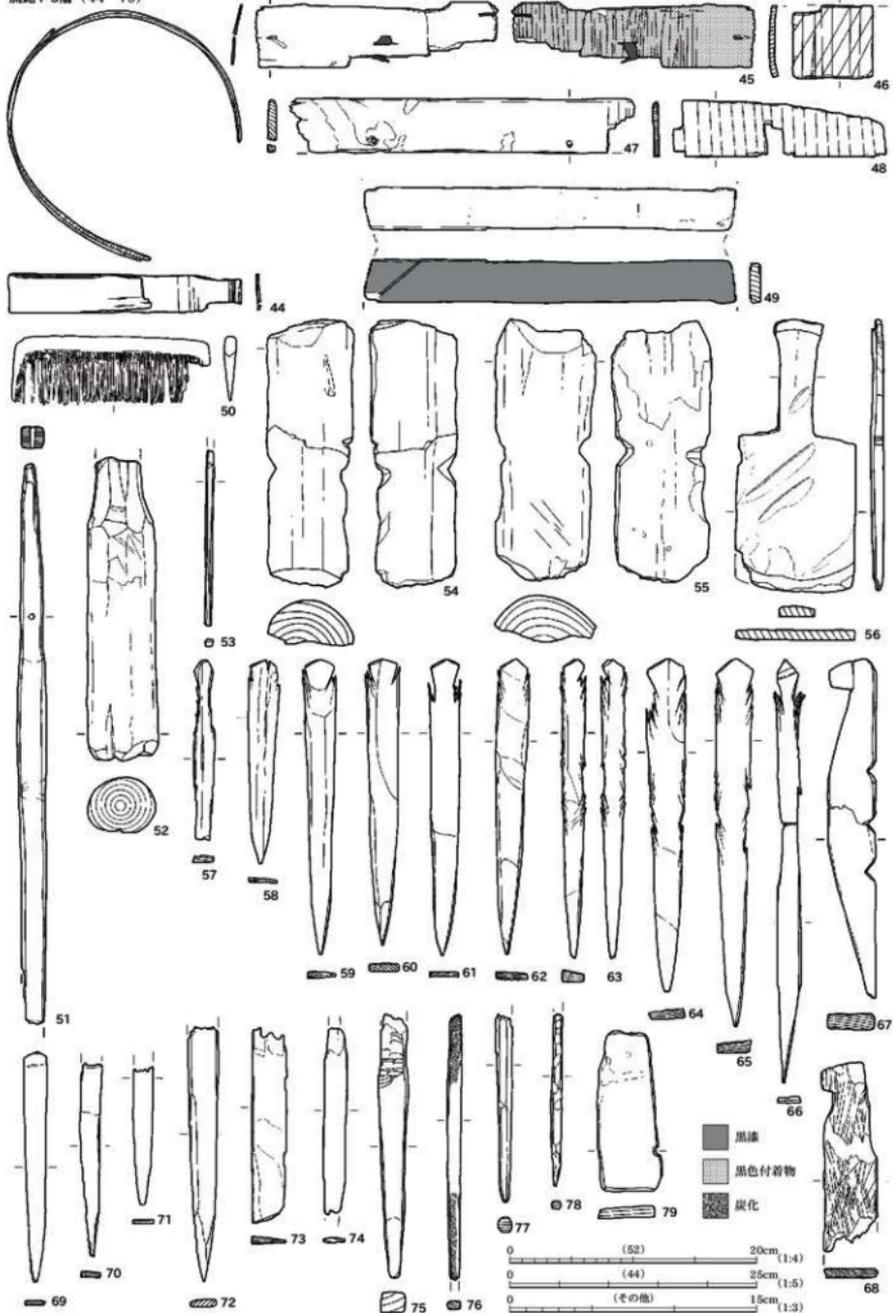


0 (36) 25cm (1:5)
0 (その他) 15cm (1:3)

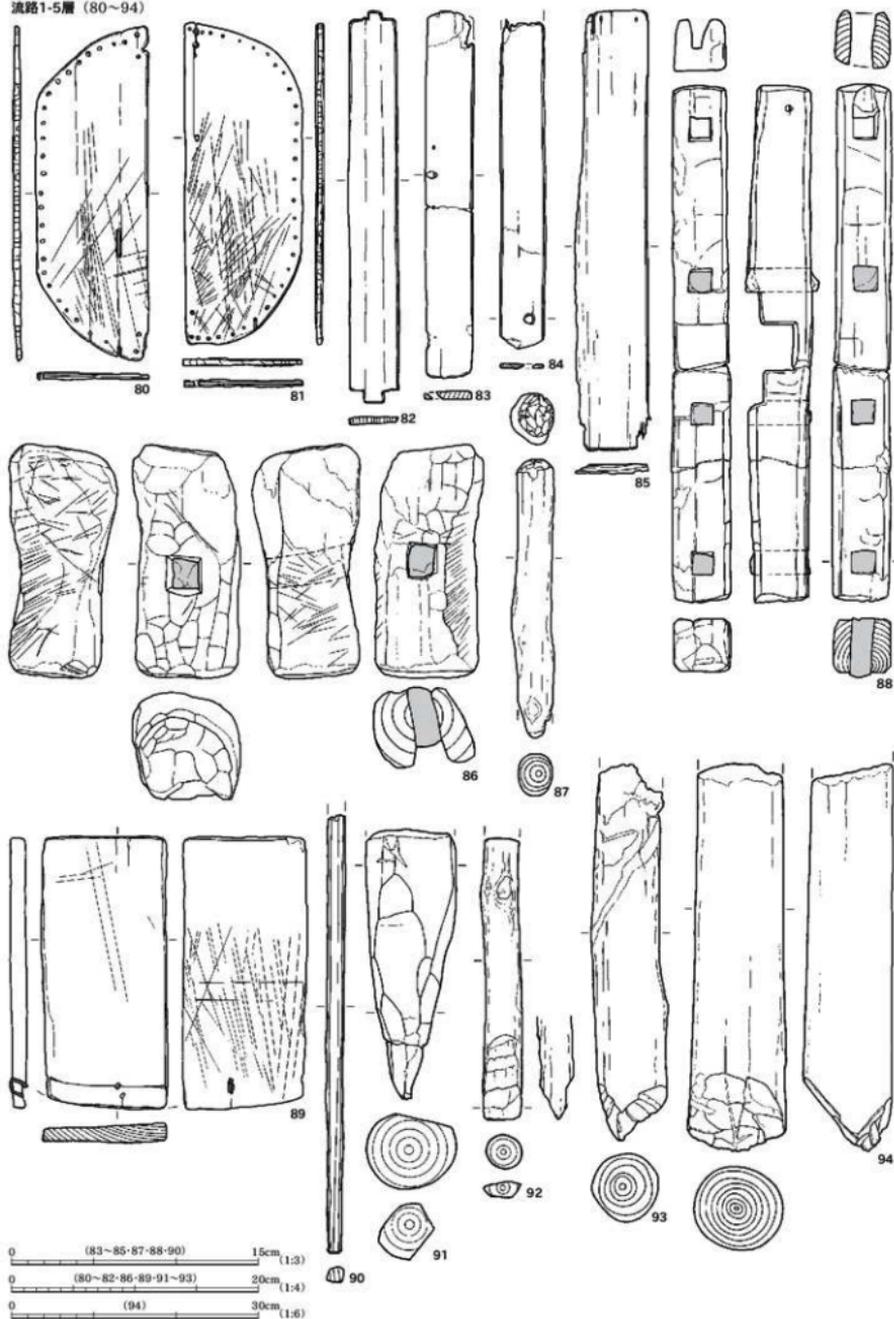
■ 黒漆 ■ 炭化

▲ 木釘残存

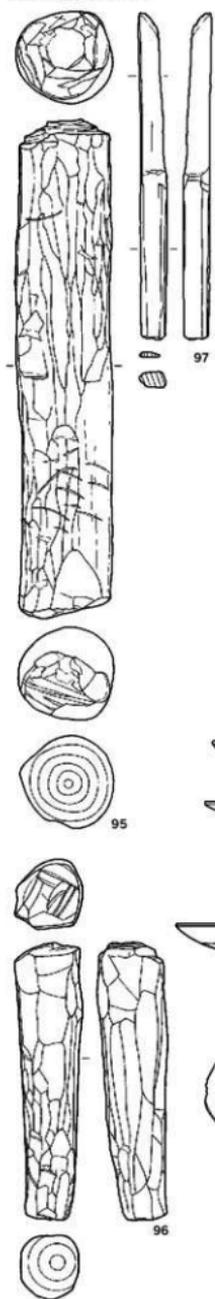
流路1-5層 (44~79)



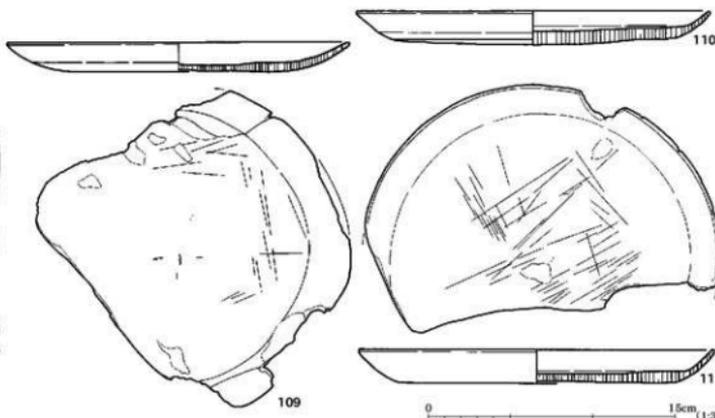
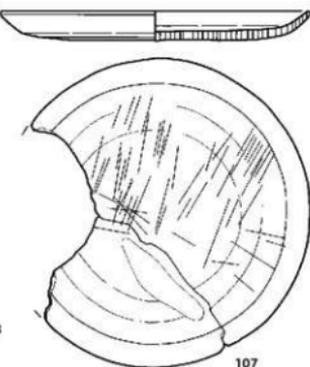
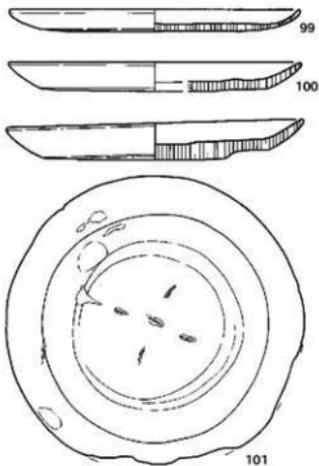
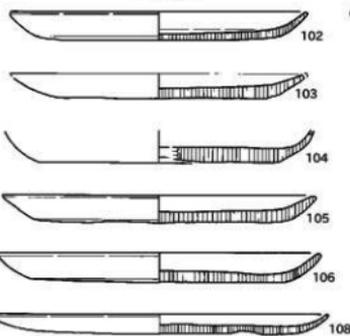
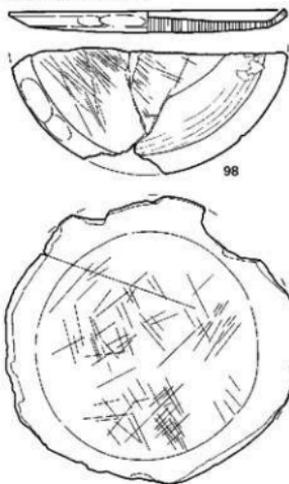
流路1-5層 (80~94)



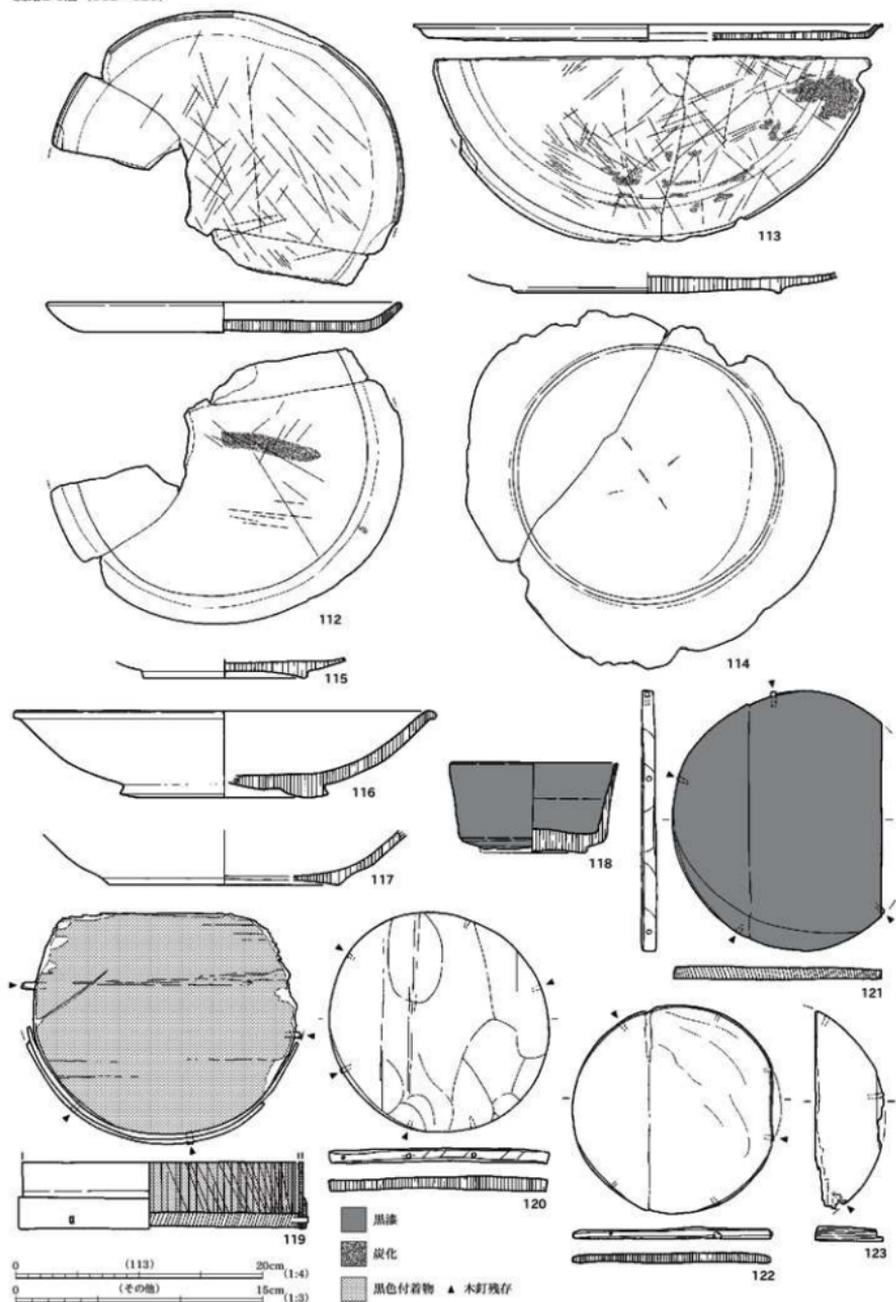
流路 1-6a 層 (95~97)



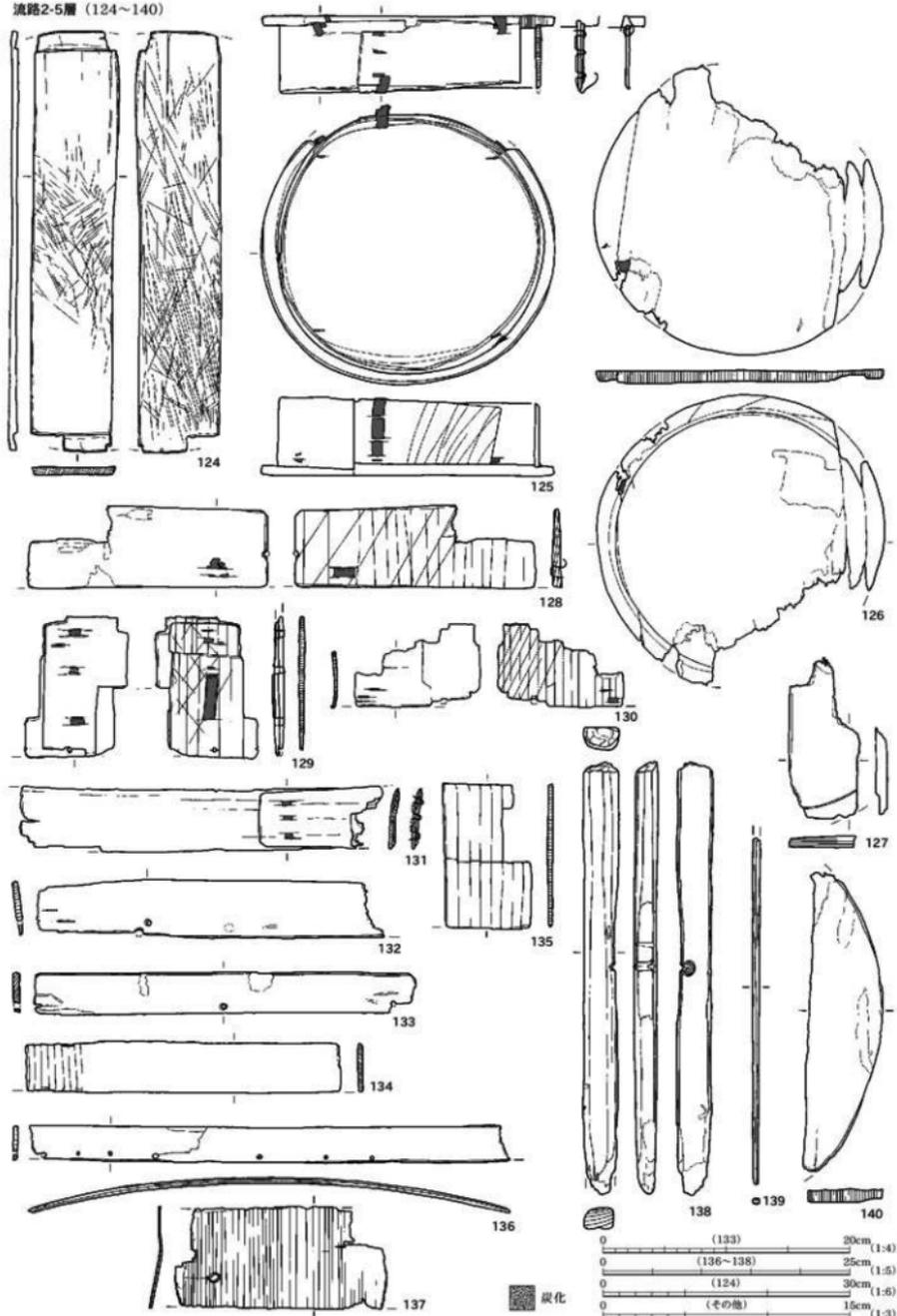
流路 2-5 層 (98~111)



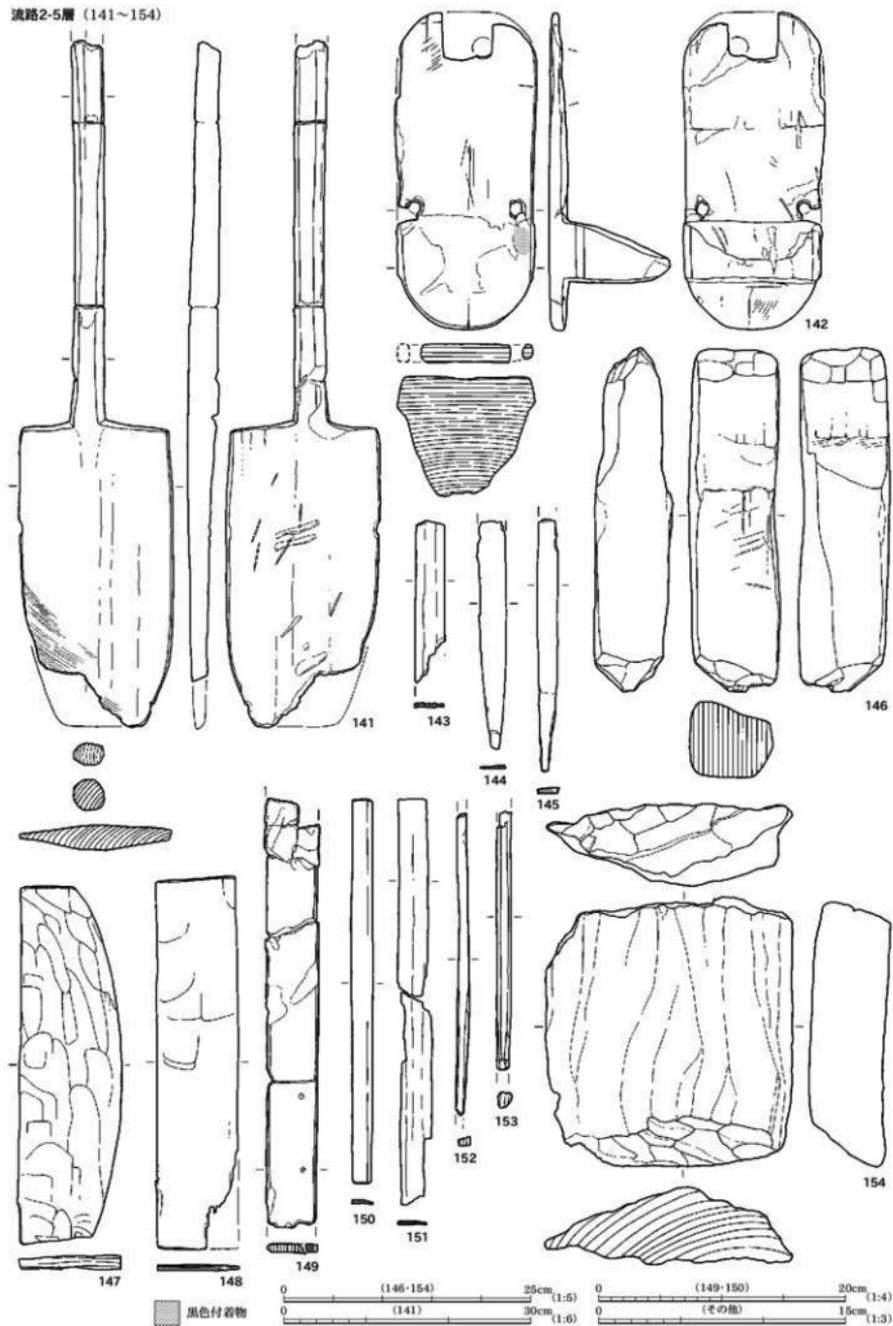
流路2-5層 (112~123)



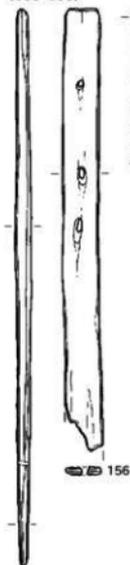
流路2-5層 (124~140)



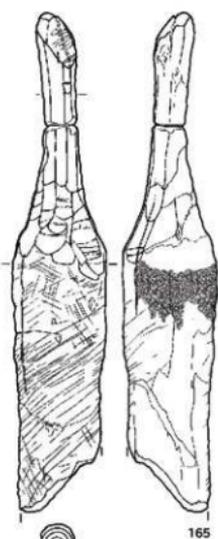
流路2-5層 (141~154)



流路2-5層
(155-156)



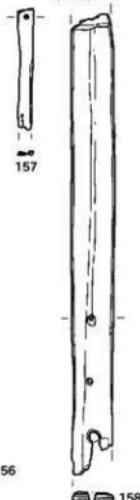
● 155



165



流路2-4b層
(158)



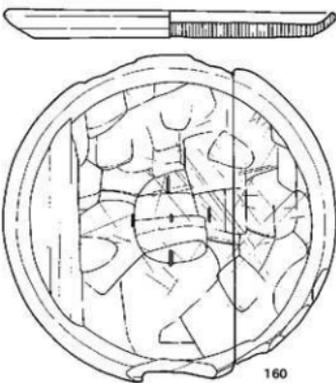
158

不明 (159)



159

D区 (160~166)



160



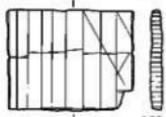
161



164



162



163

E区 SB3 (167-168)



167

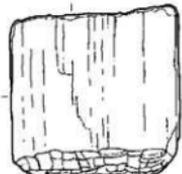


168

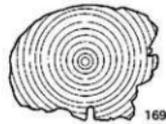
SB2 (169~171)



170

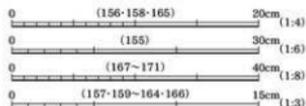


171

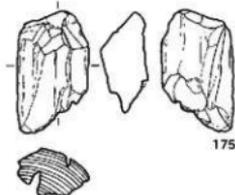
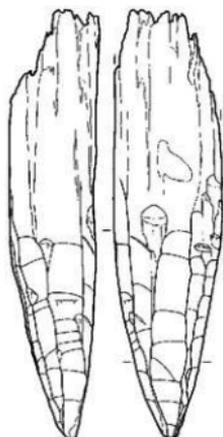
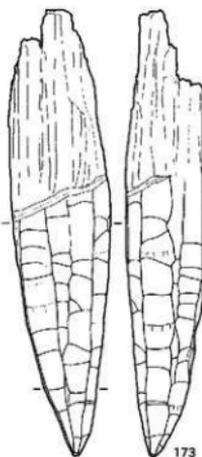
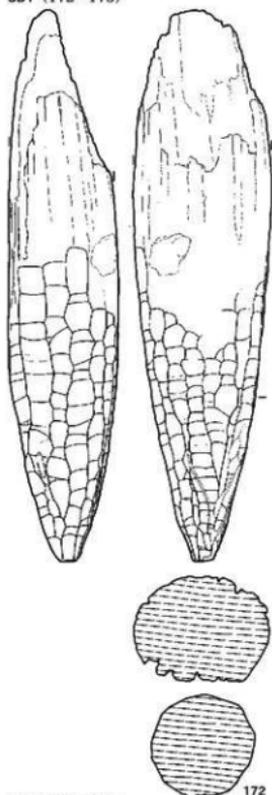


169

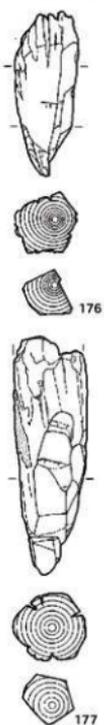
炭化



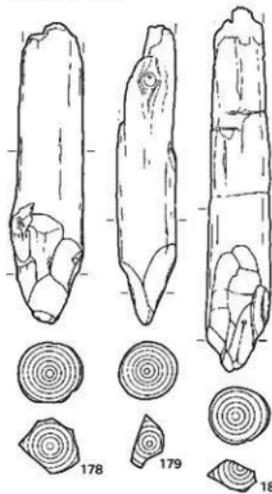
SB1 (172~175)



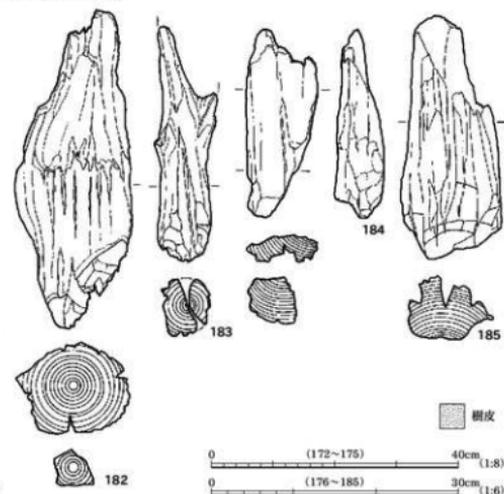
SB6 (176-177)



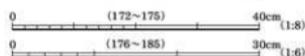
SB8 (178~181)



SB4 (182~185)



■ 樹皮



SB7 (186)



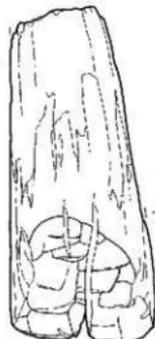
SB117 (187~194)



SA116 (195~199)



ビット・杭 (200)



186



187



188



189



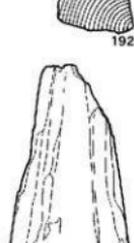
190



191



192

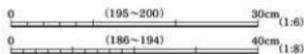


193

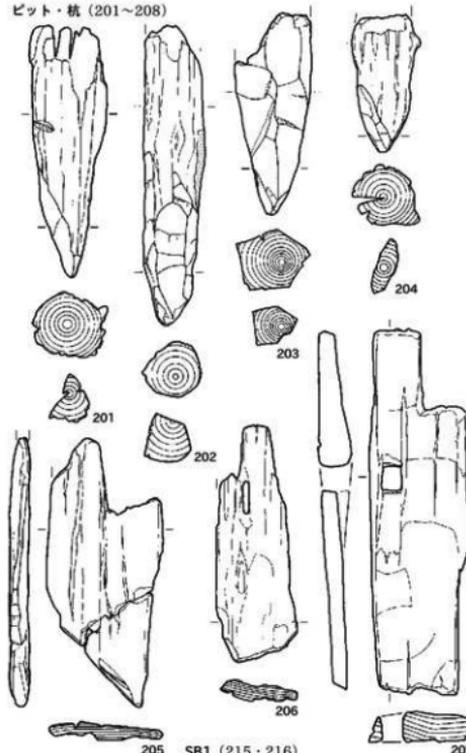


194

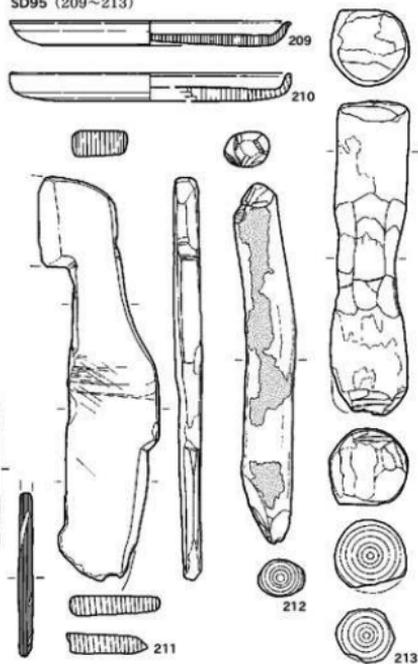
樹皮



ビット・杭 (201~208)



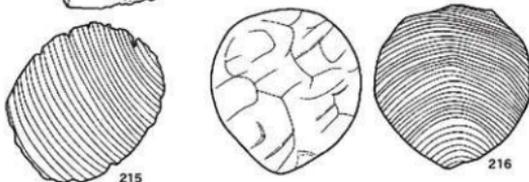
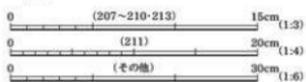
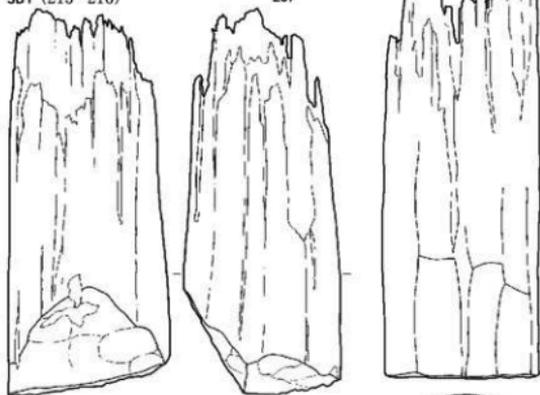
SD95 (209~213)



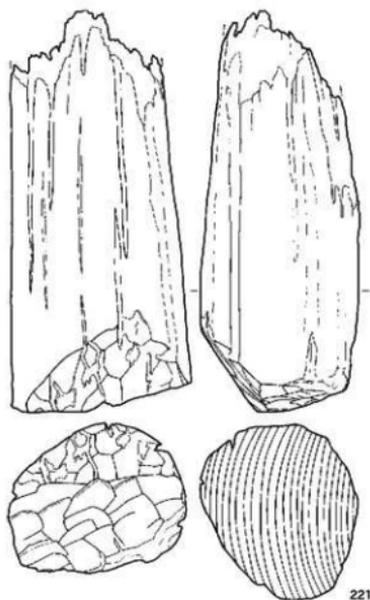
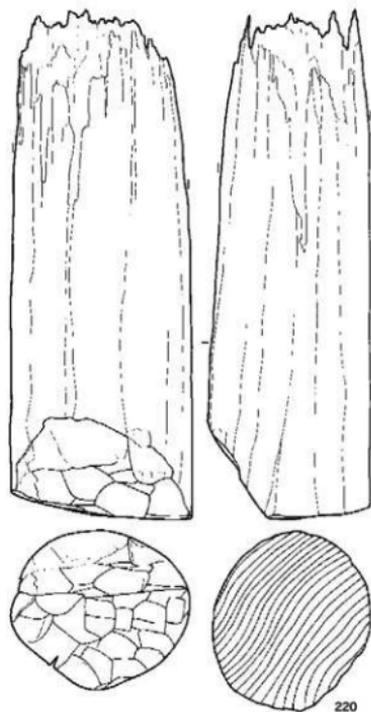
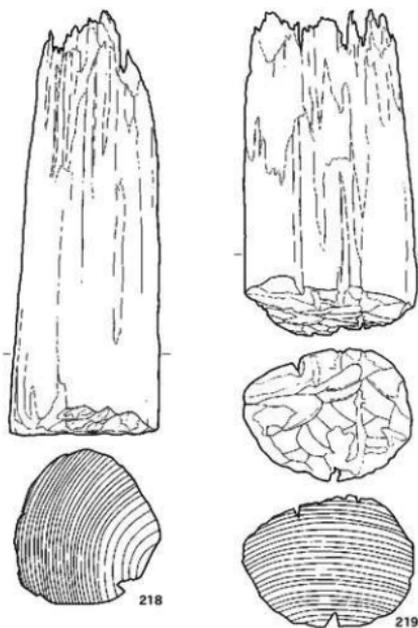
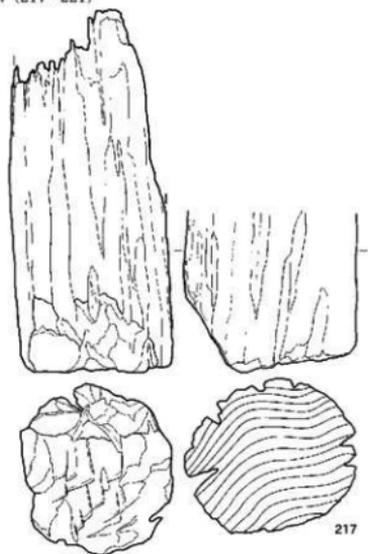
H区
SB3 (214)



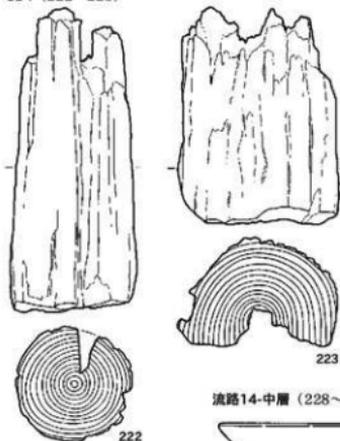
SB1 (215~216)



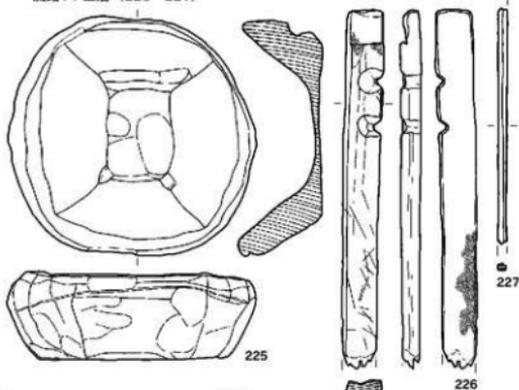
SB1 (217~221)



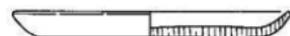
SB4 (222・223)



流路14-上層 (225~227)



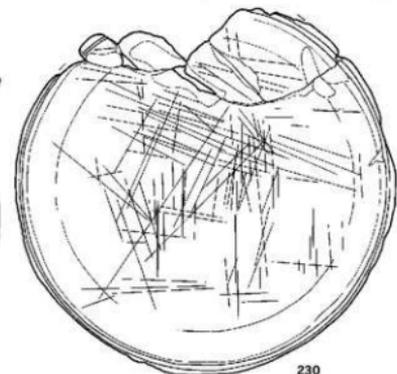
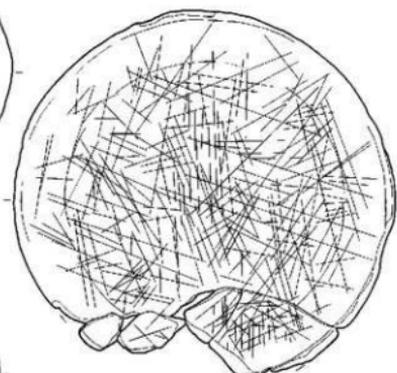
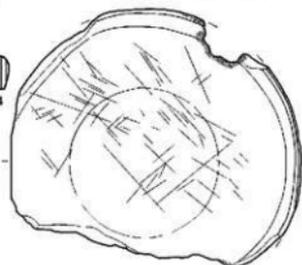
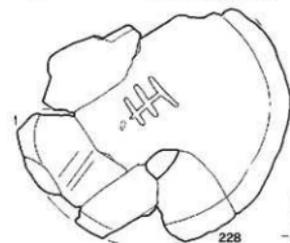
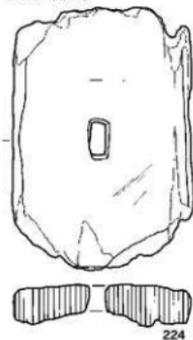
流路14-中層 (228~230)



炭化



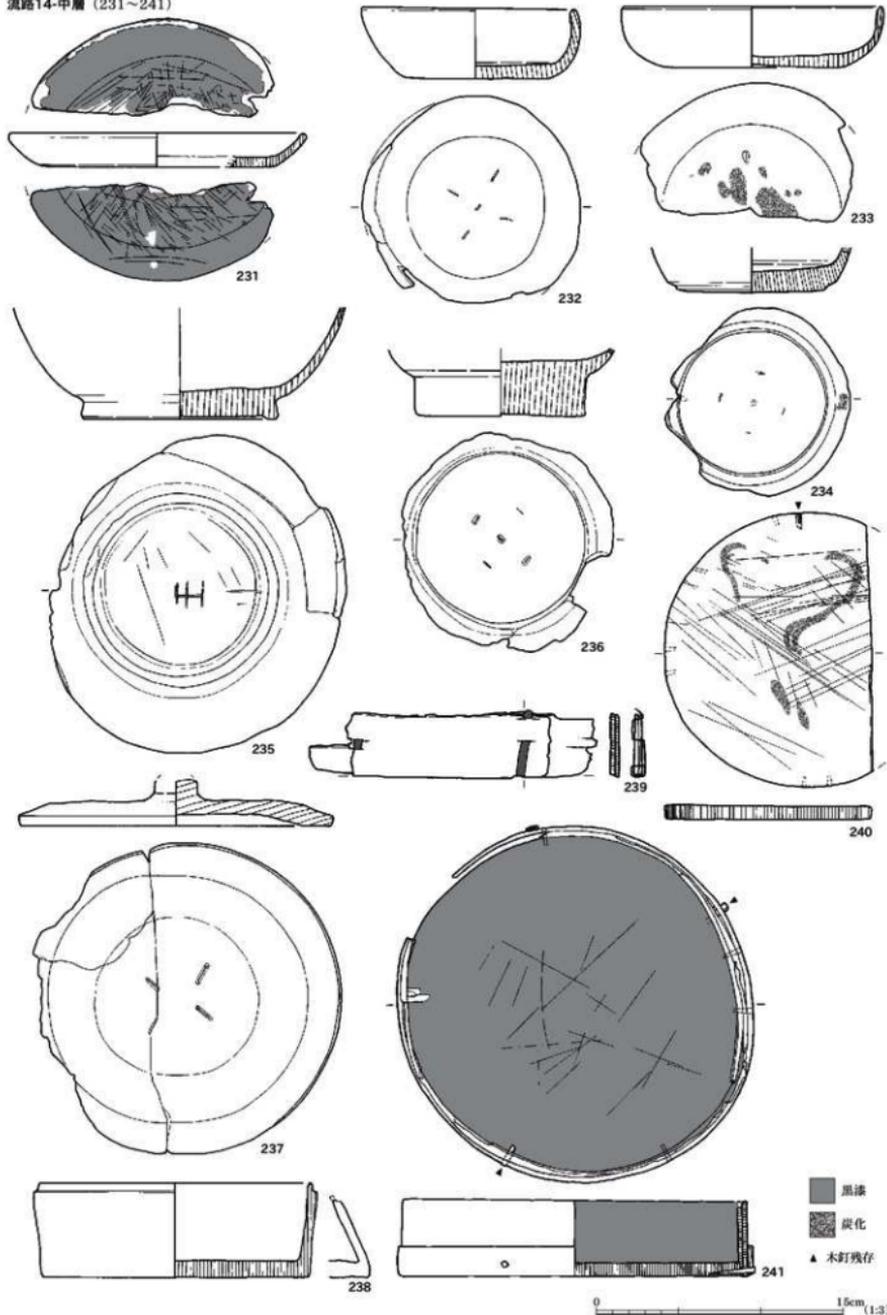
SX76 (224)



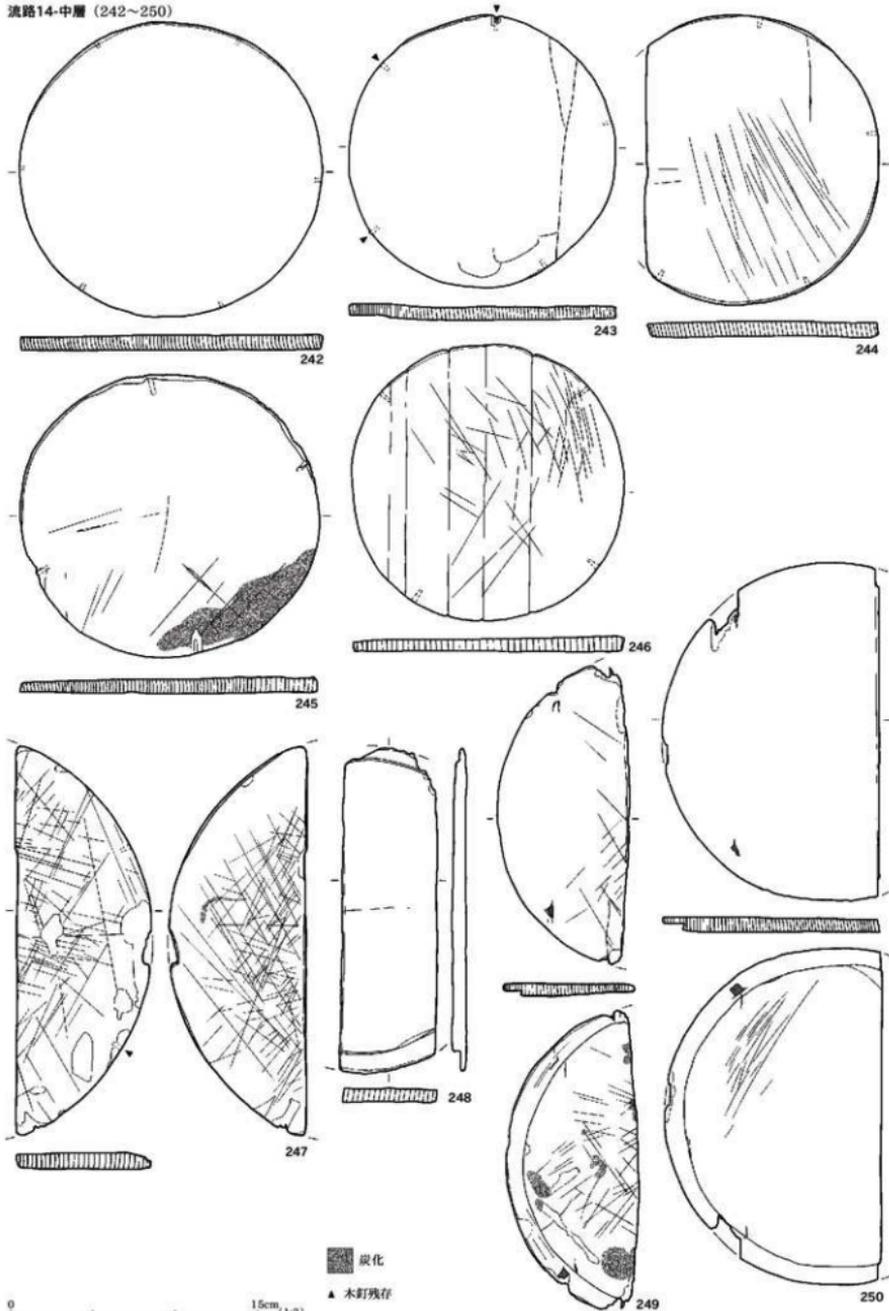
229

230

流路14-中層 (231~241)



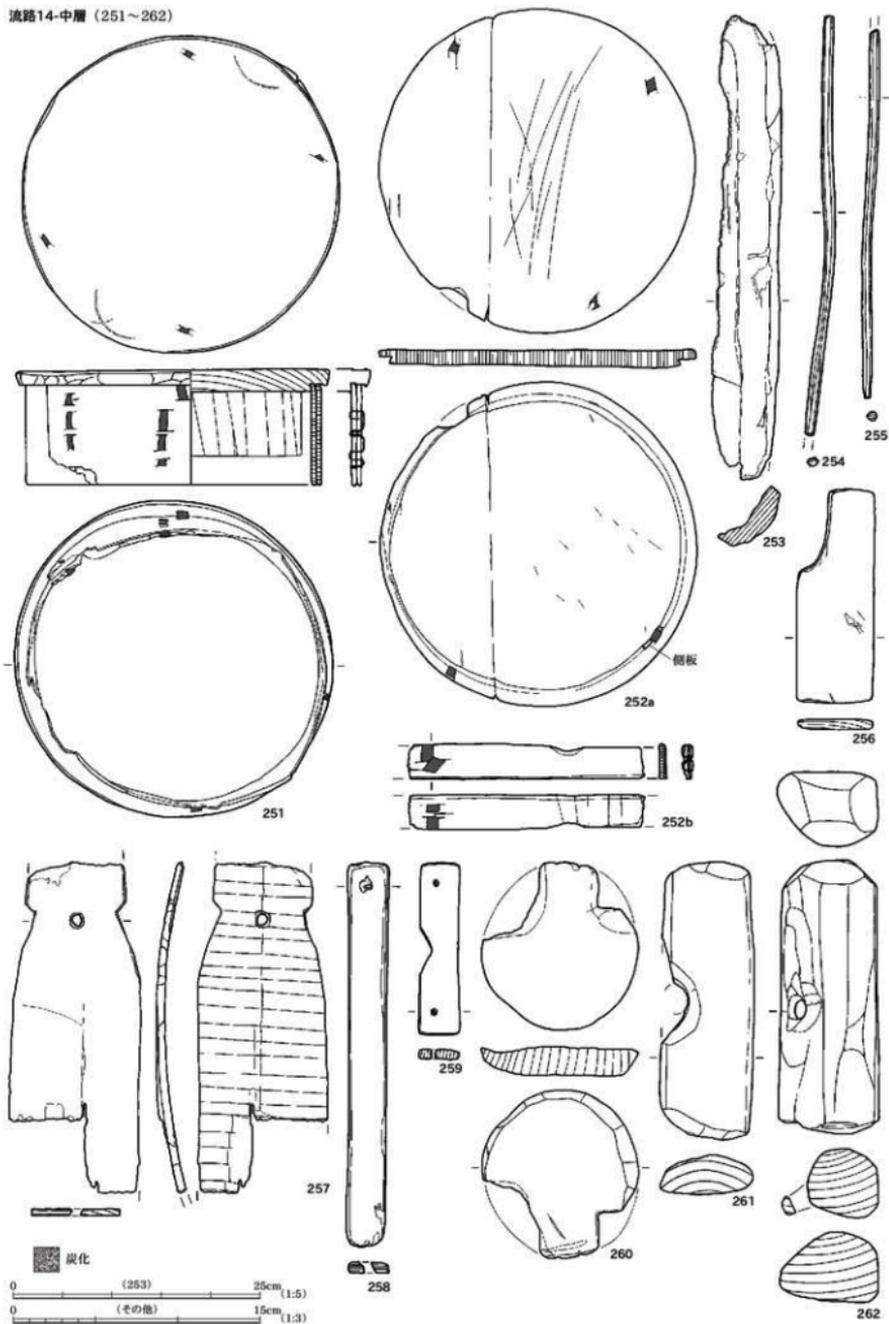
流路14-中層 (242~250)



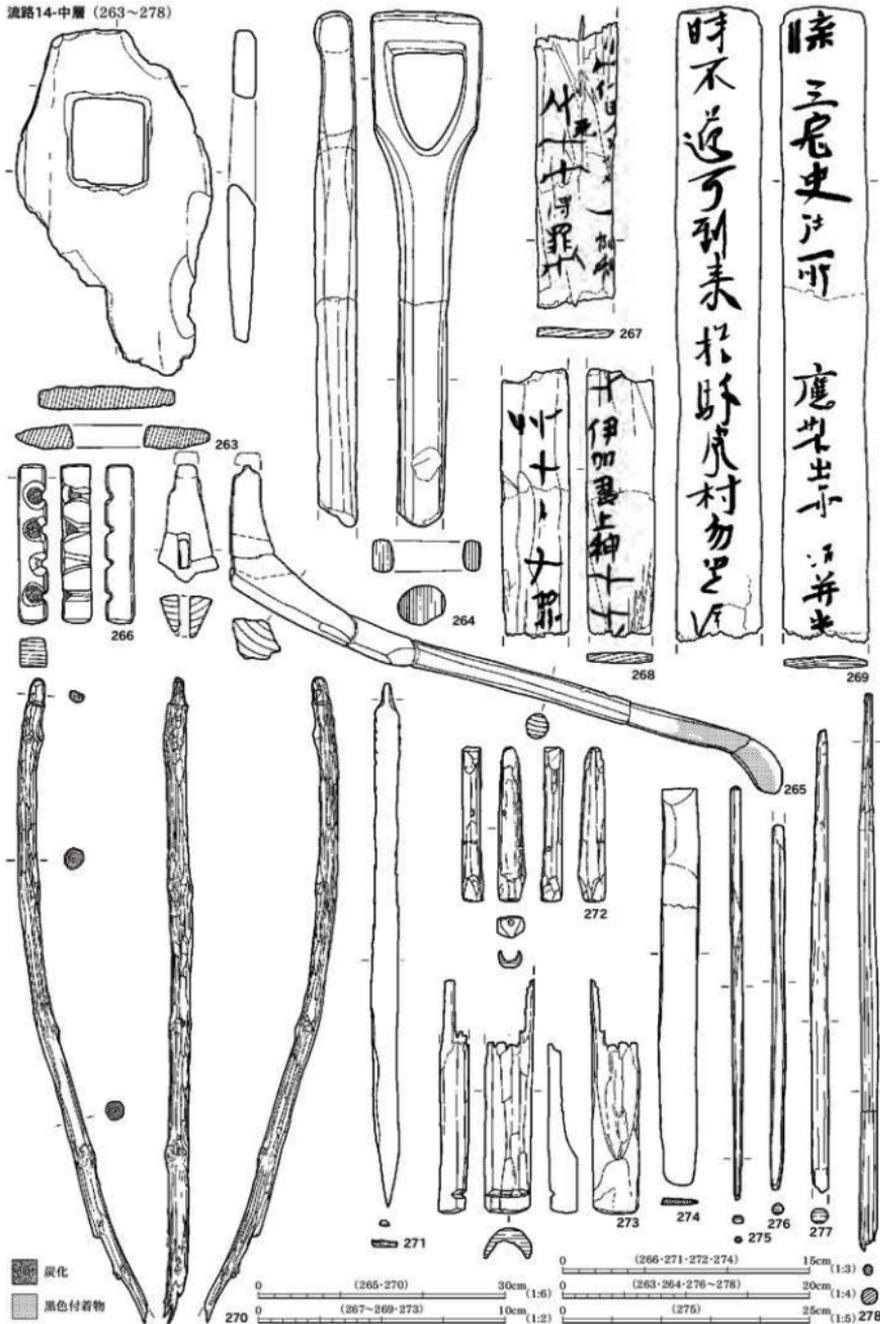
■ 炭化
▲ 木釘残存

0 15cm (1:3)

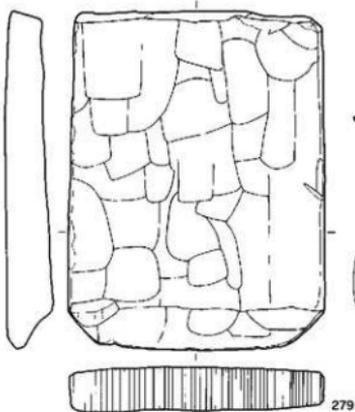
流路14-中層 (251~262)



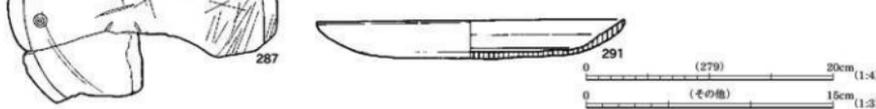
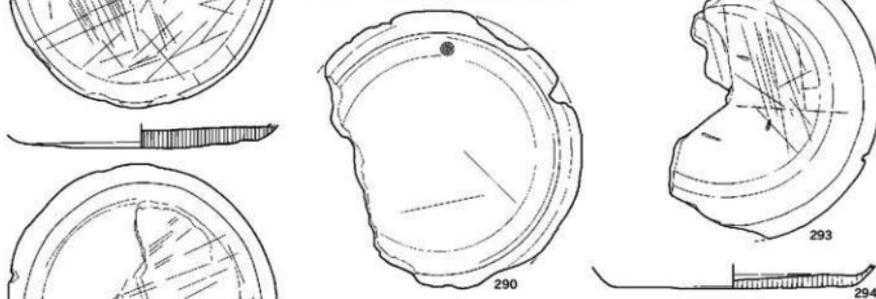
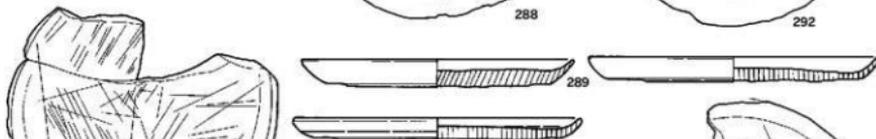
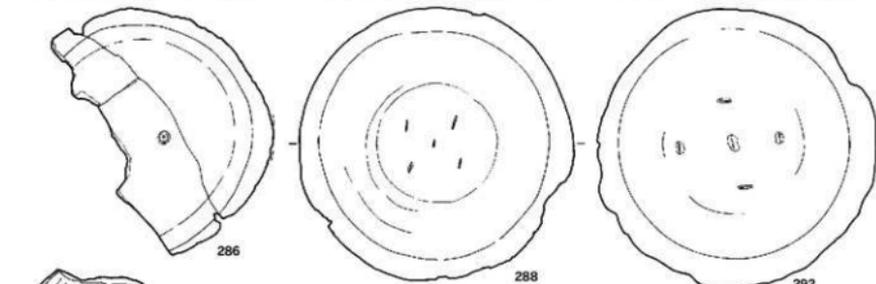
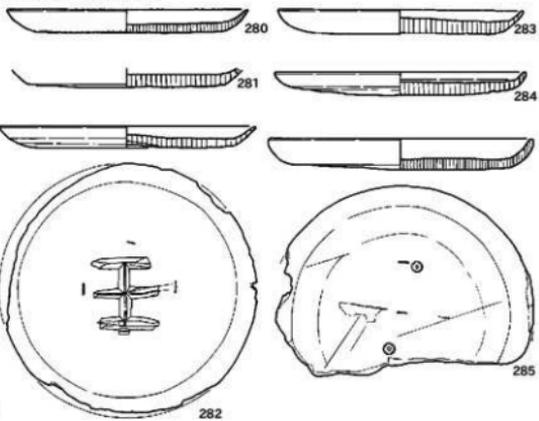
流路14-中層 (263~278)



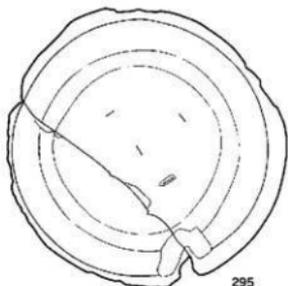
流路14-中層 (279)



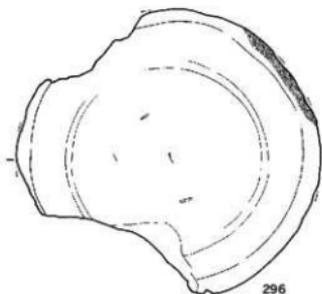
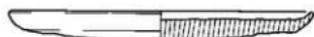
流路14-下層 (280~294)



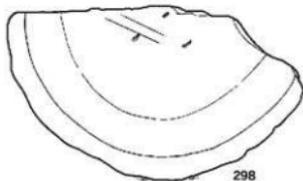
流路14-下層 (295~302)



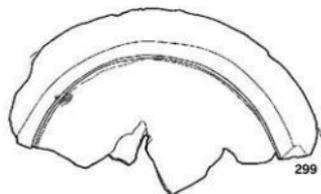
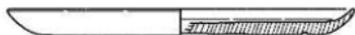
295



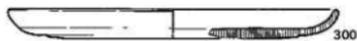
296



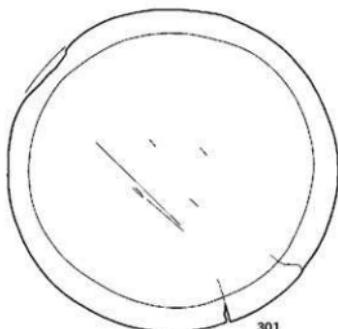
298



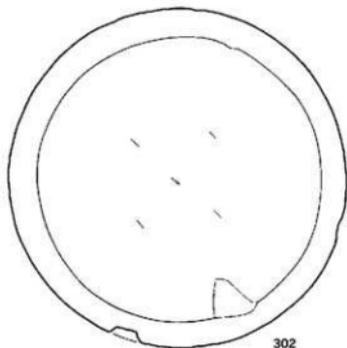
299



300

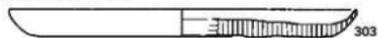


301

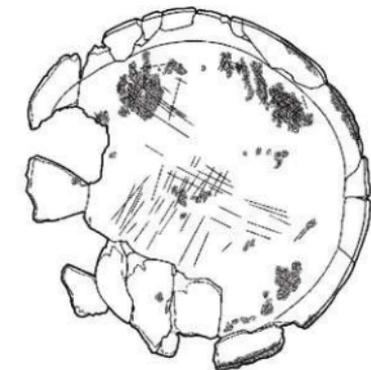
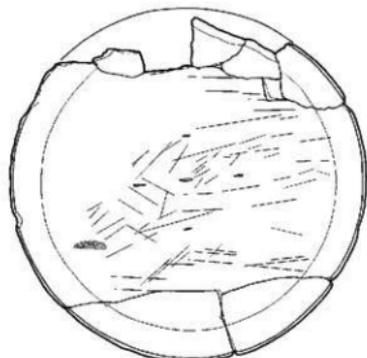


302

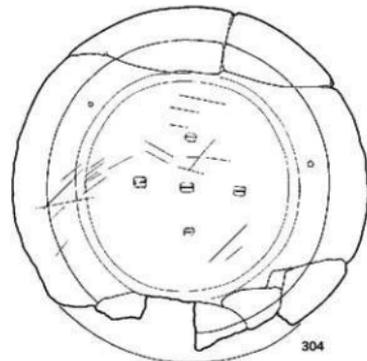
流路14-下層 (303~309)



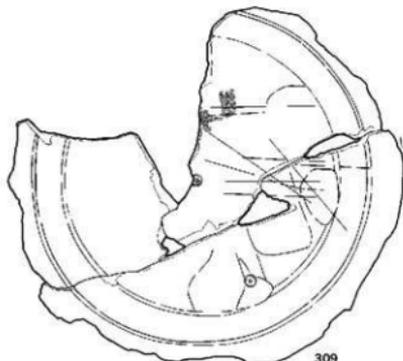
303



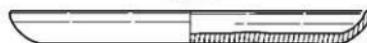
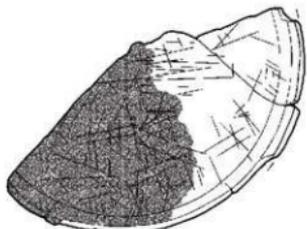
308



304



309



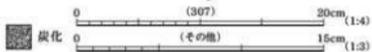
305



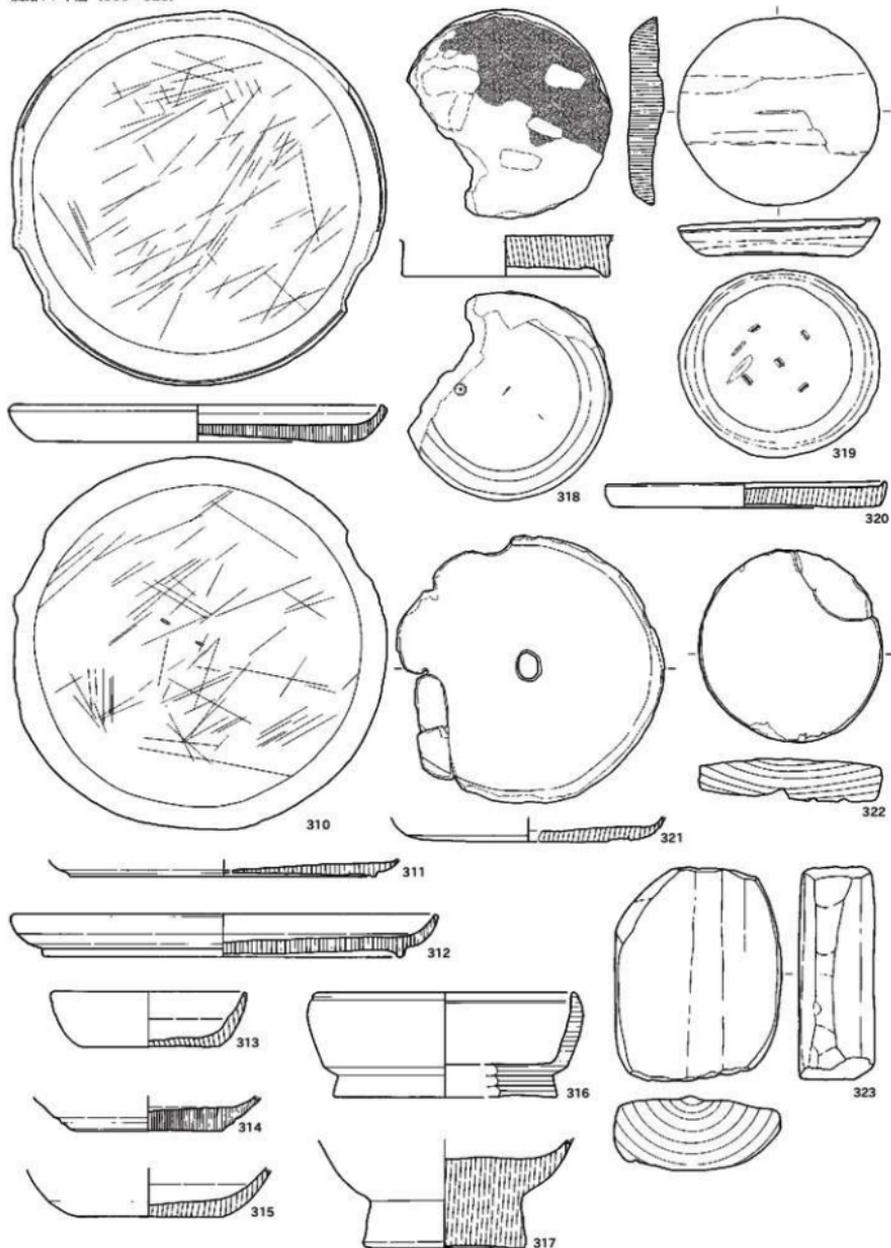
306



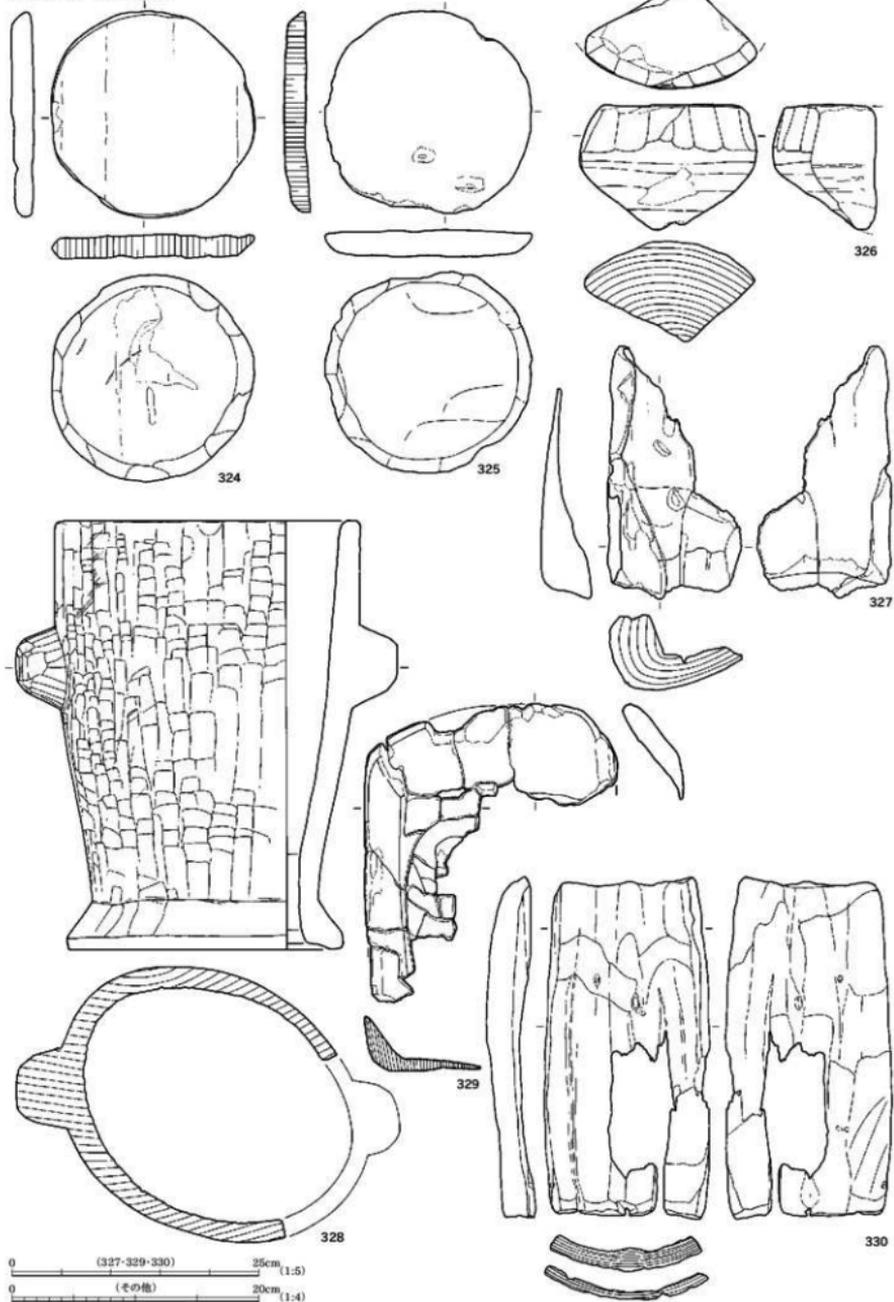
307



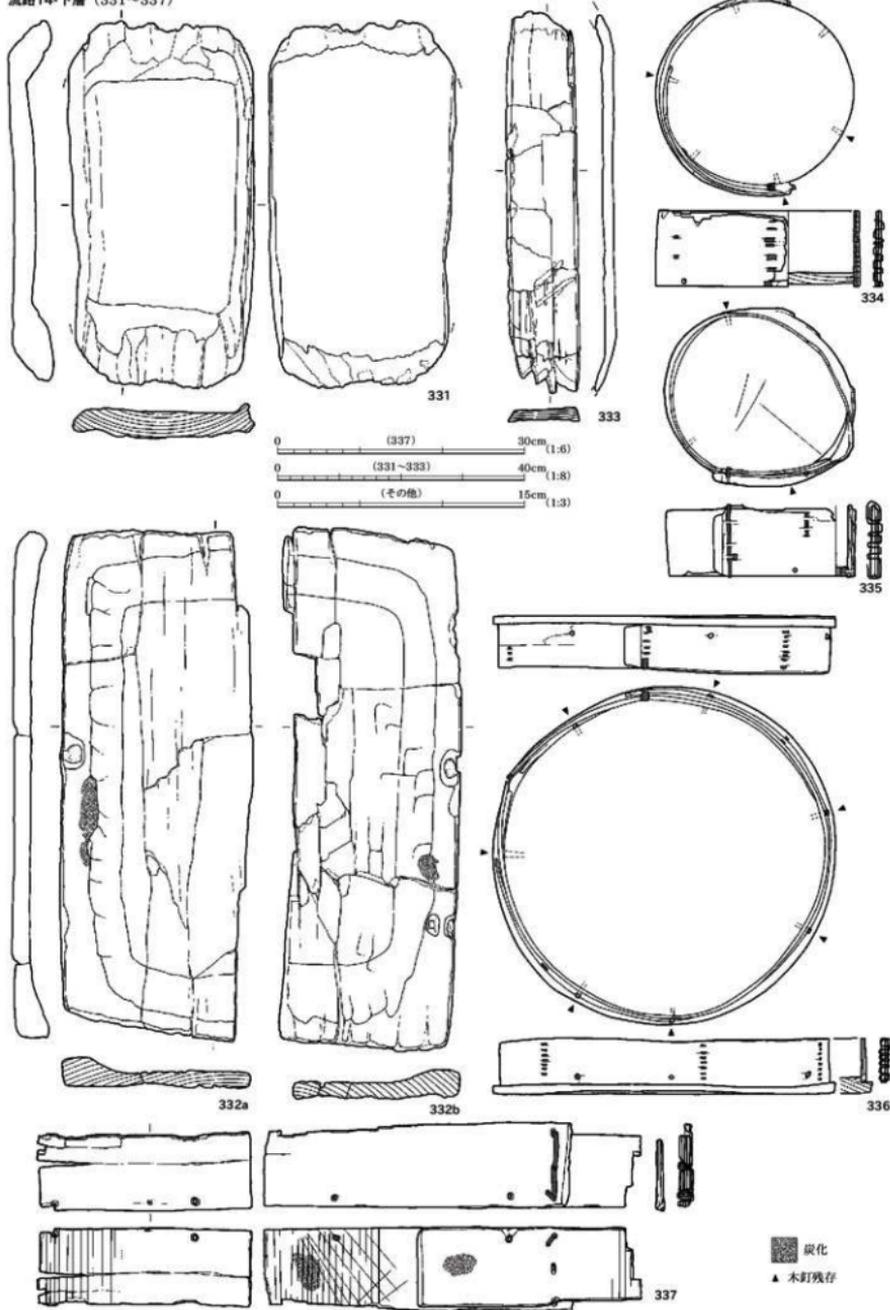
流路14-下層 (310~323)



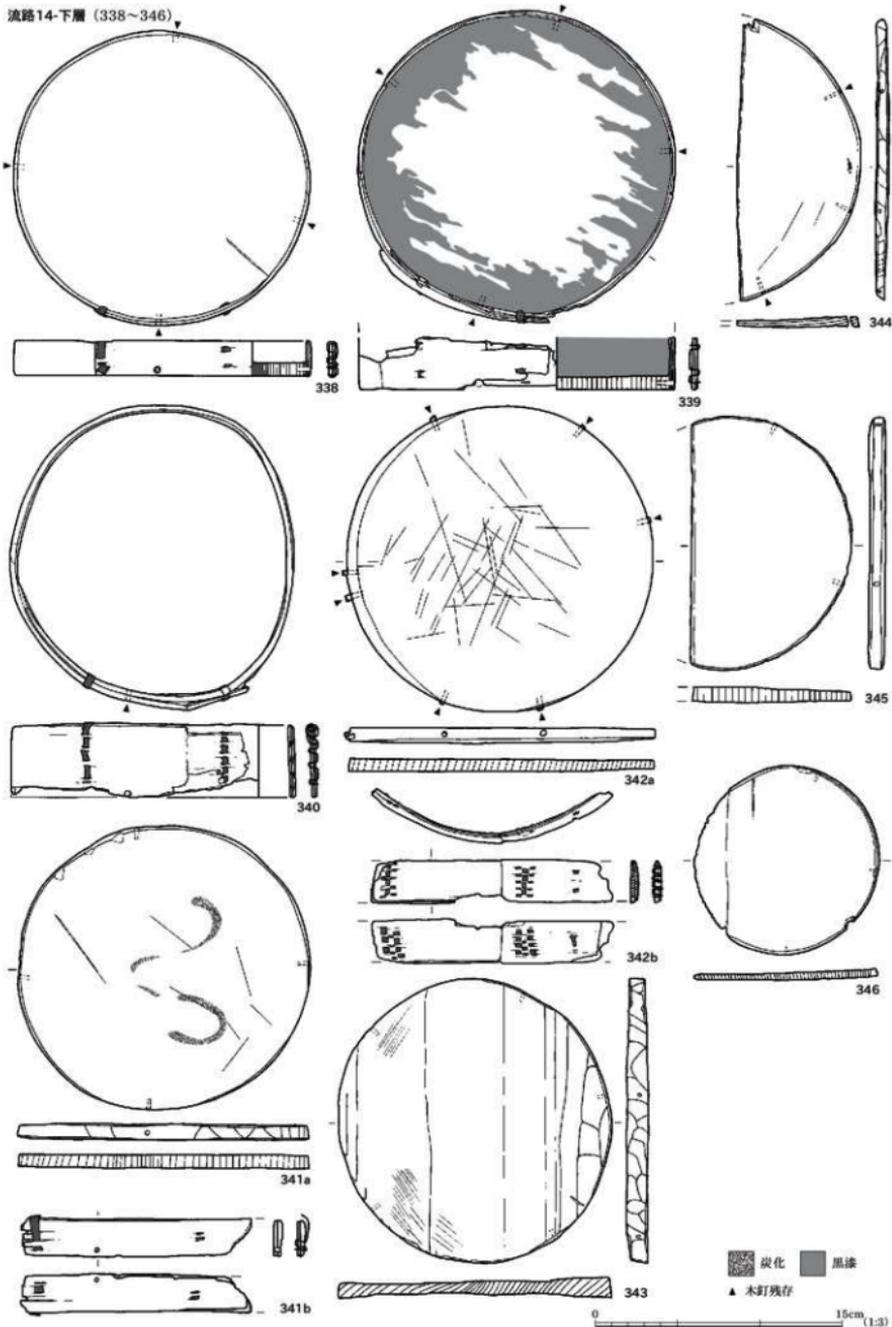
流路14-下層 (324~330)



流路14-下層 (331~337)



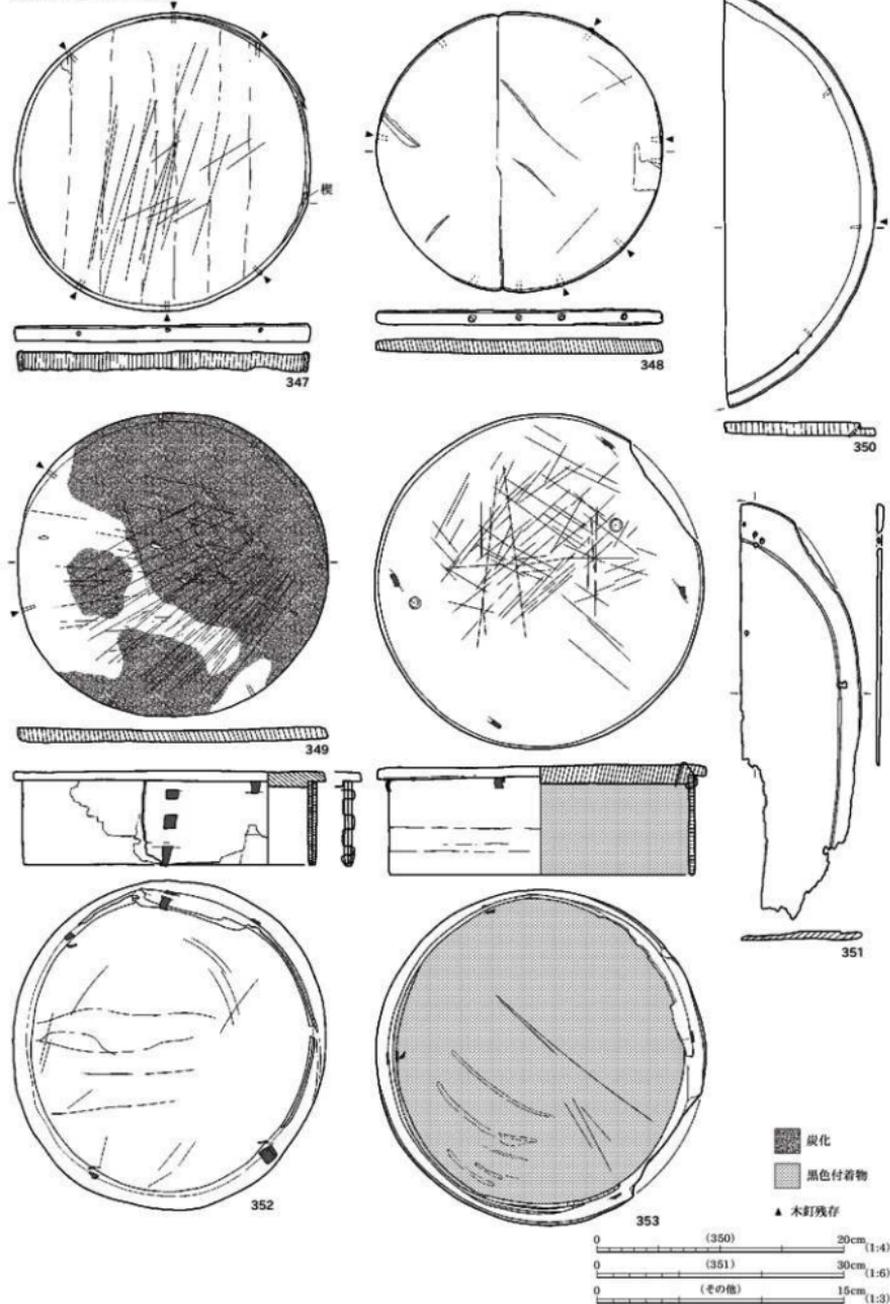
流路14-下層 (338~346)



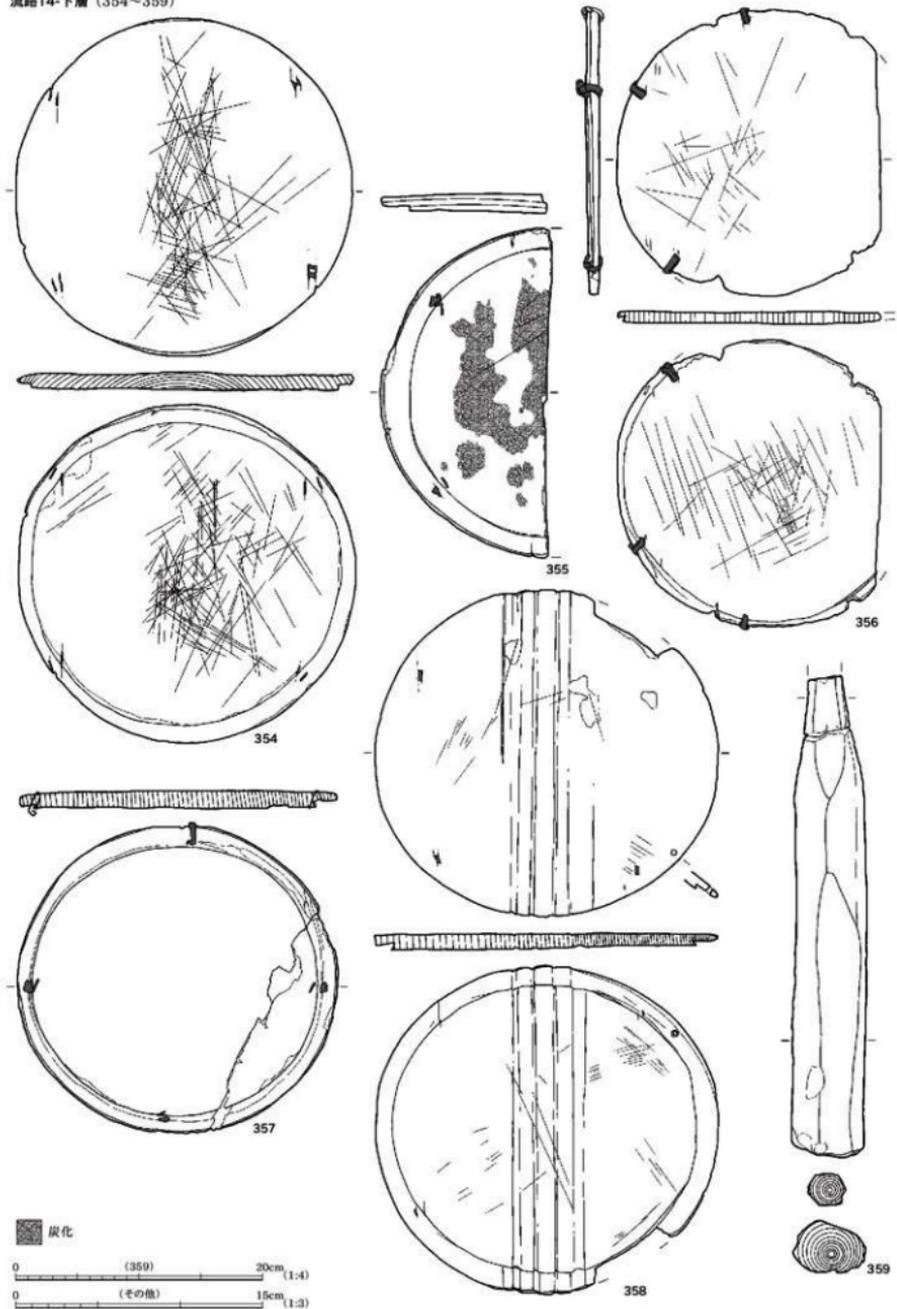
炭化 黒漆
▲ 木釘残存

0 15cm (1:3)

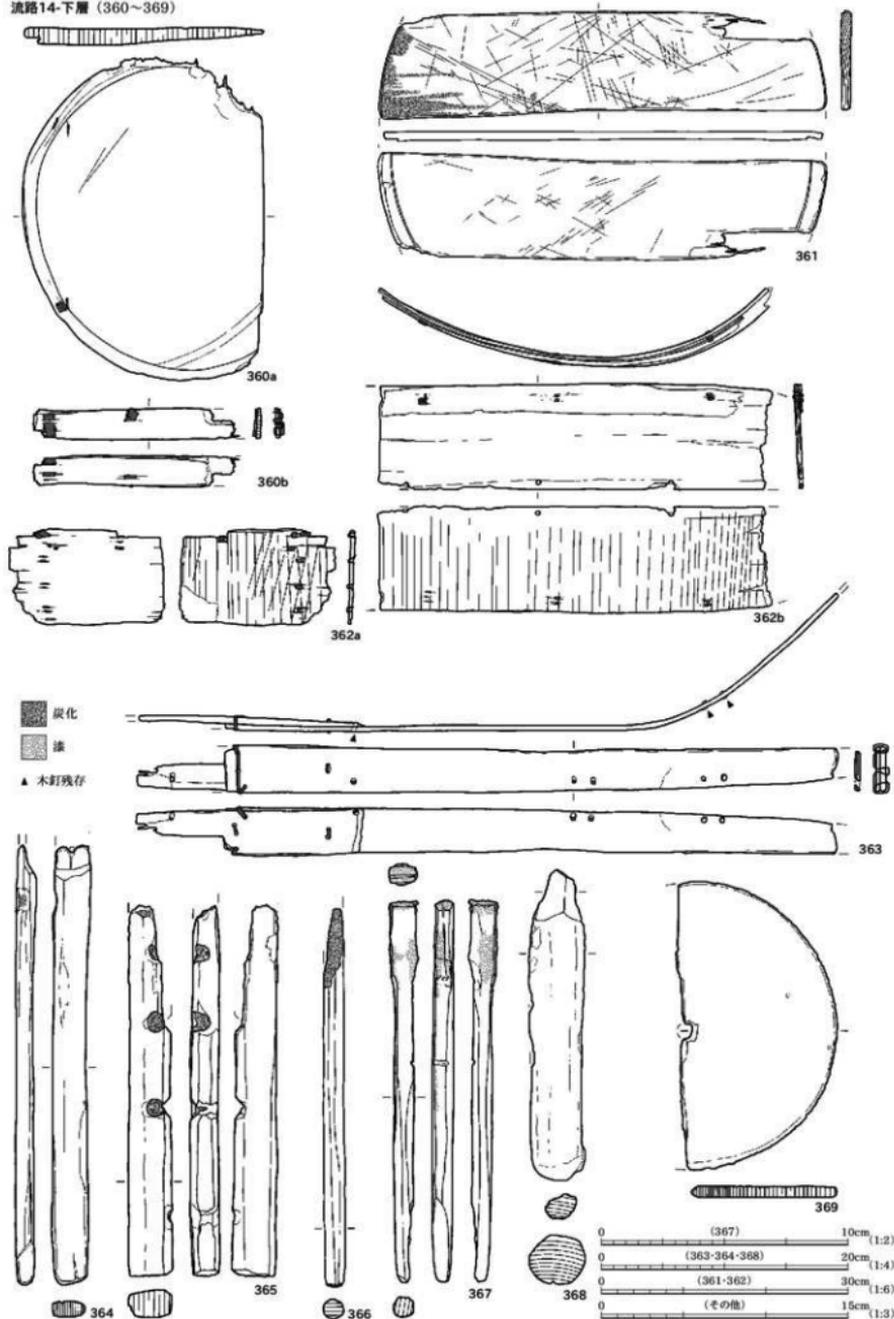
流路14-下層 (347~353)



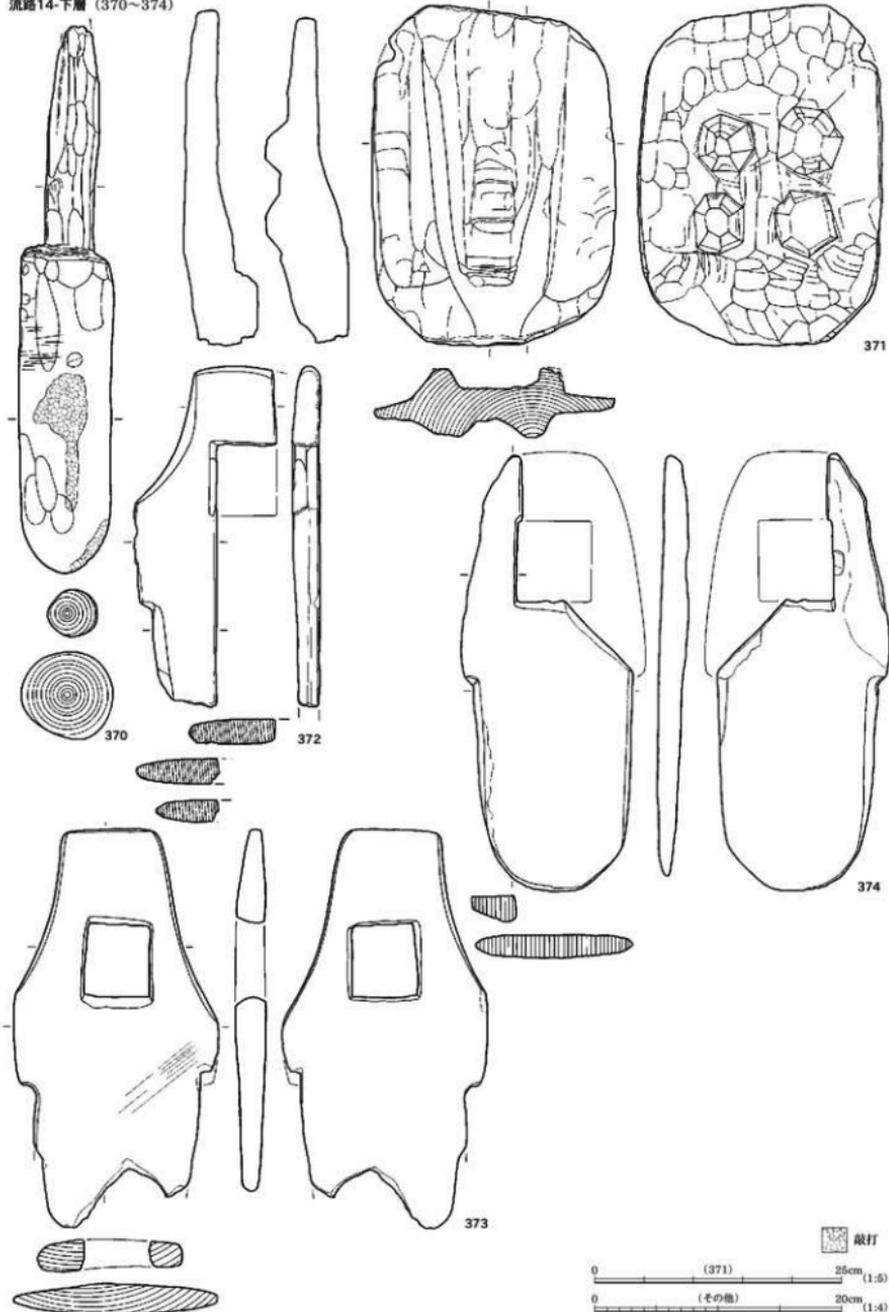
流路14-下層 (354~359)



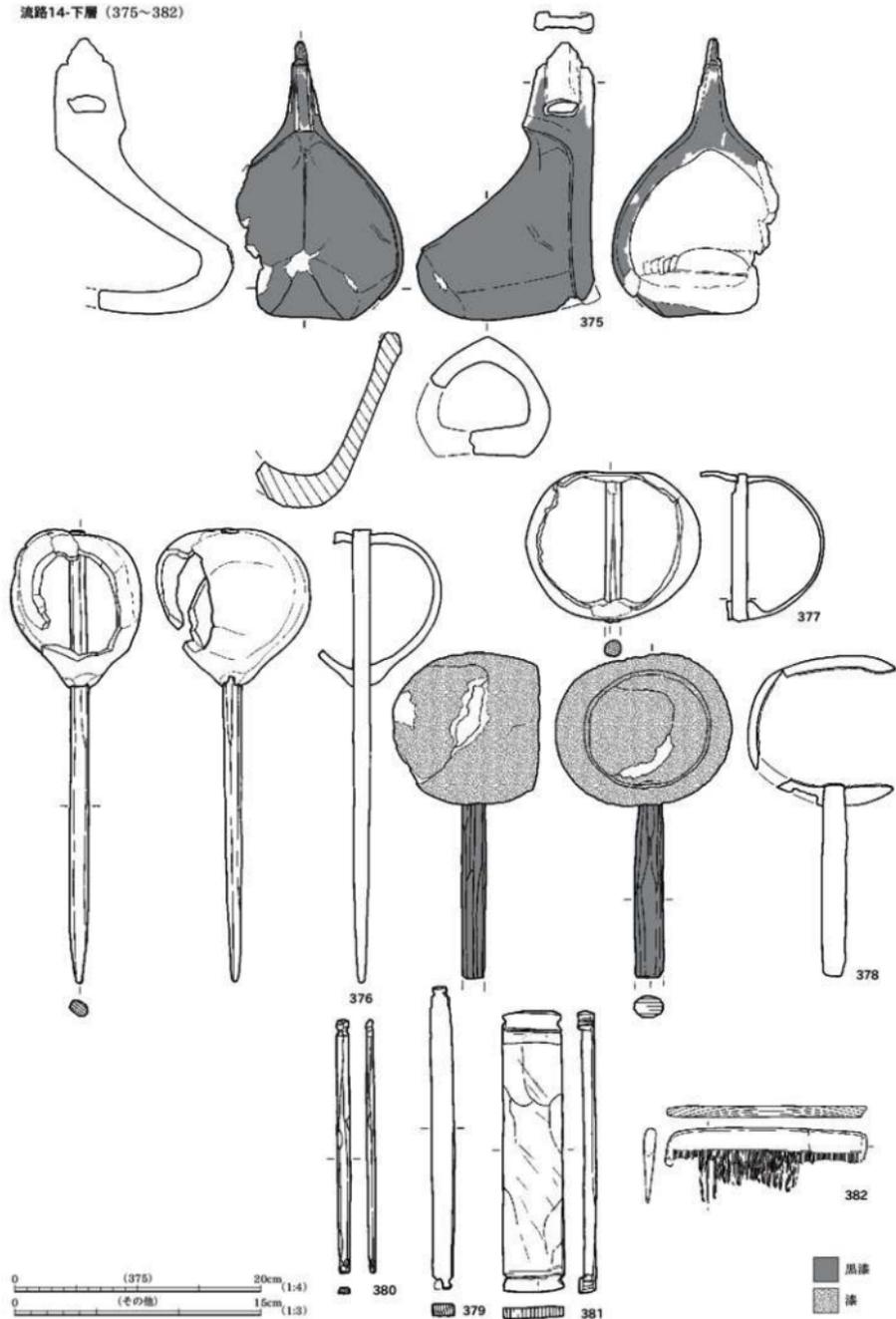
流路14-下層 (360~369)



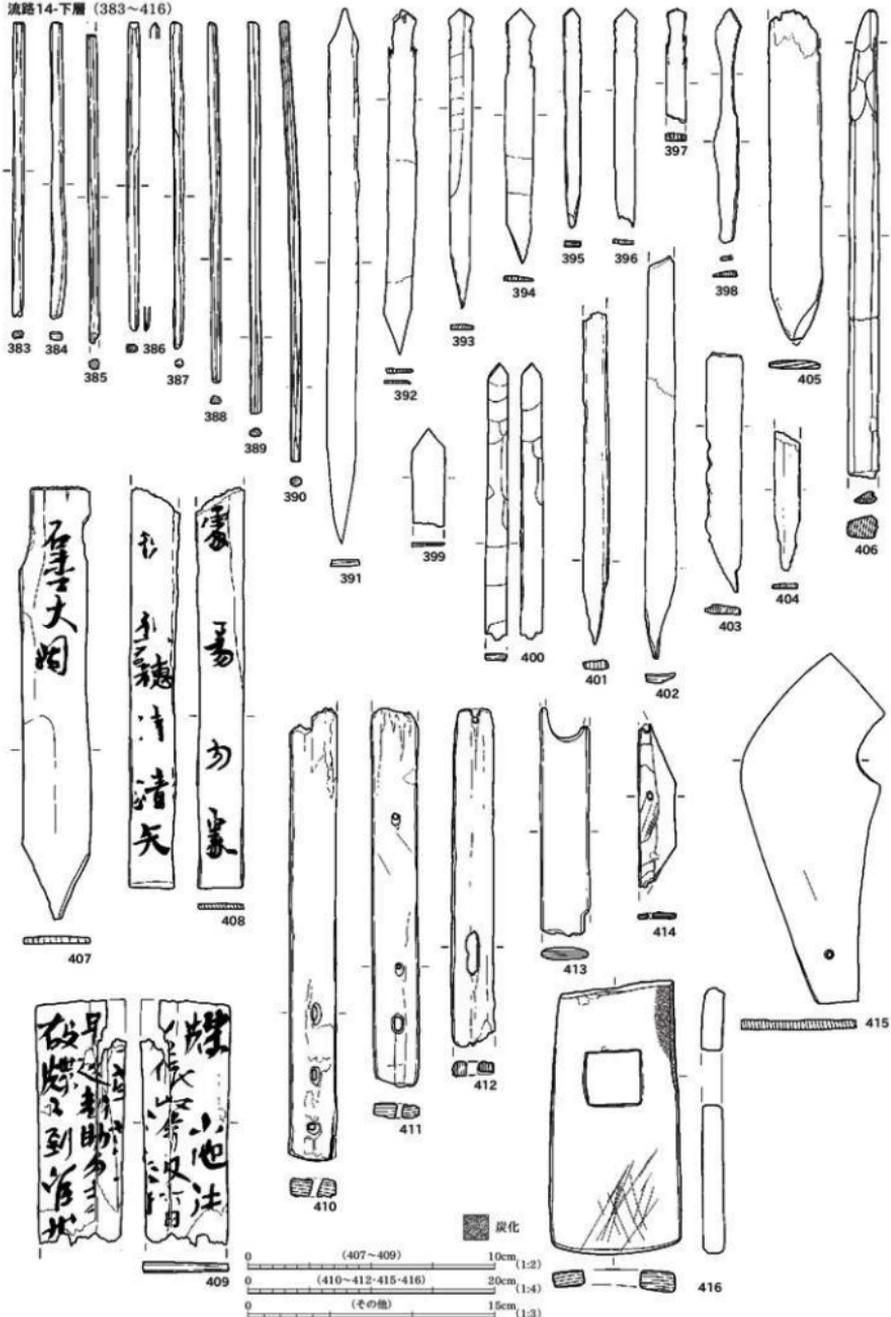
流路14-下層 (370~374)



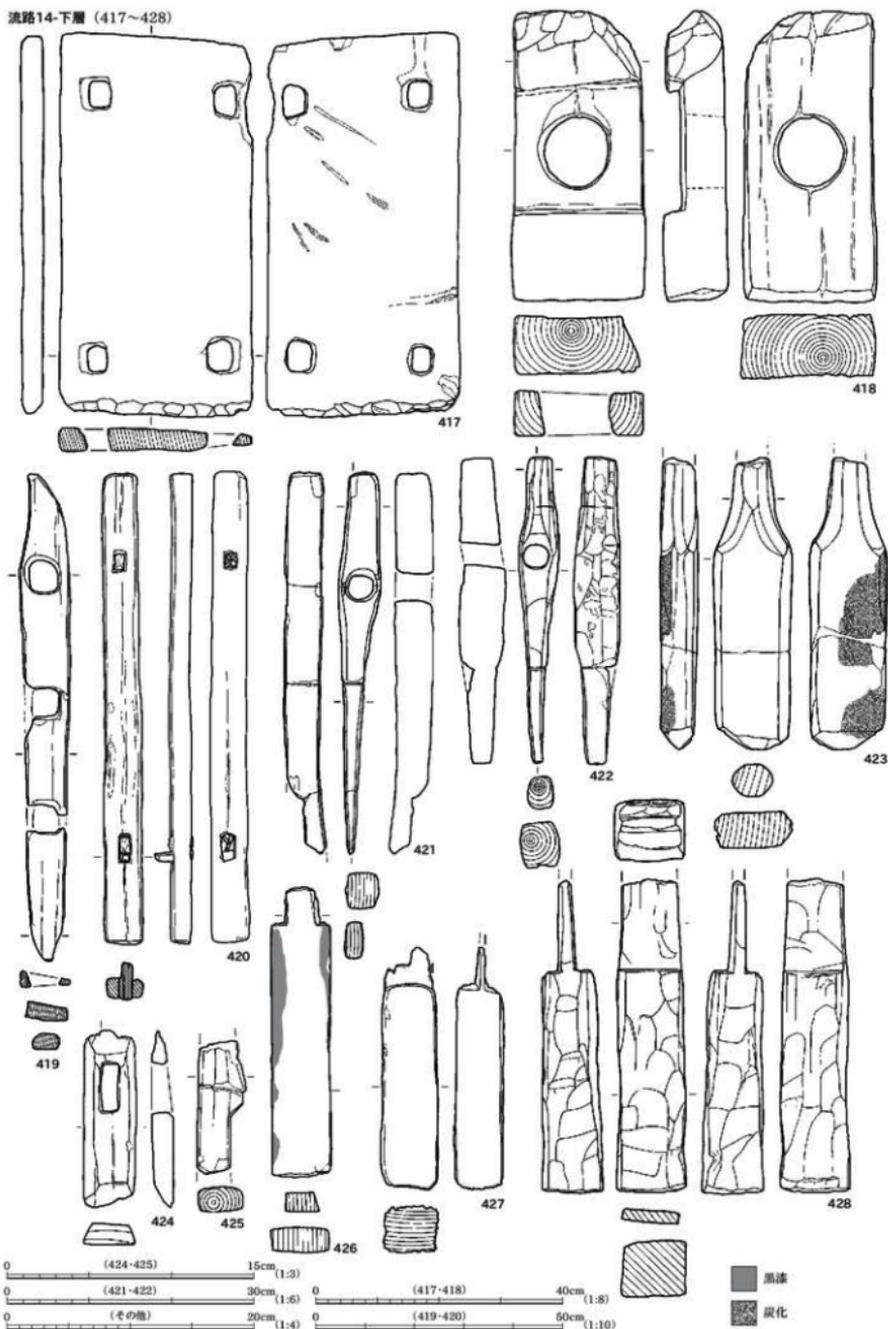
流路14-下層 (375~382)



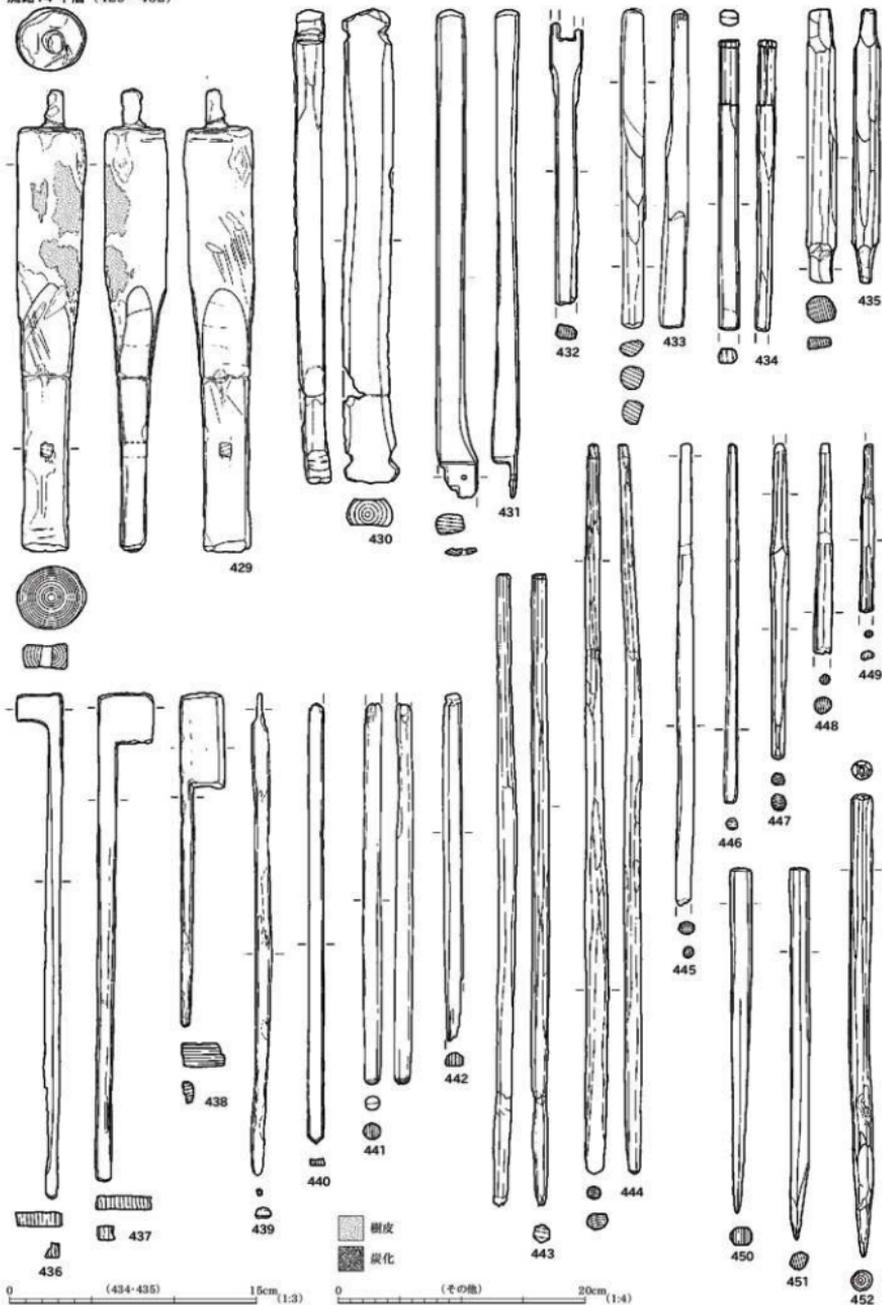
流路14-下層 (383~416)



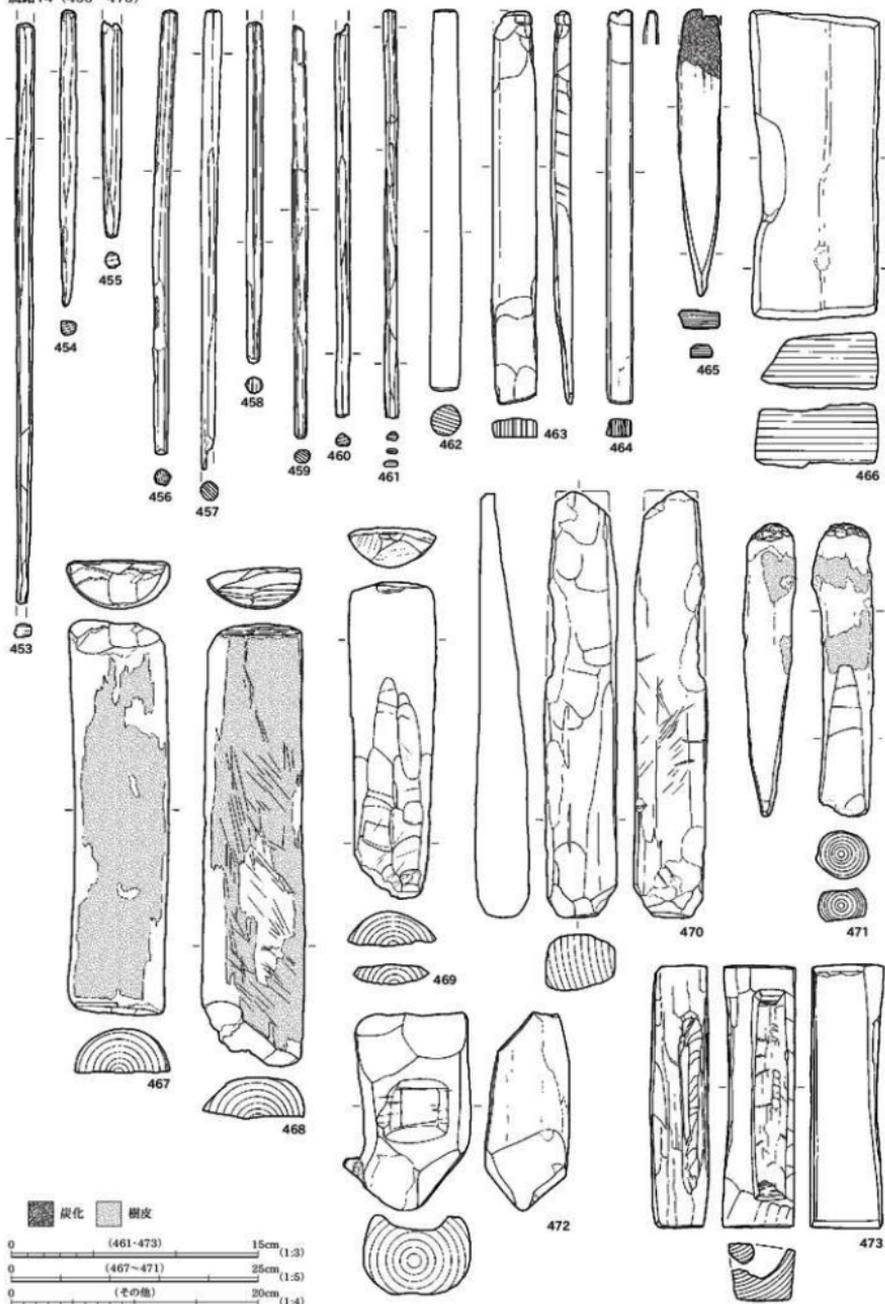
流路14-下層 (417~428)



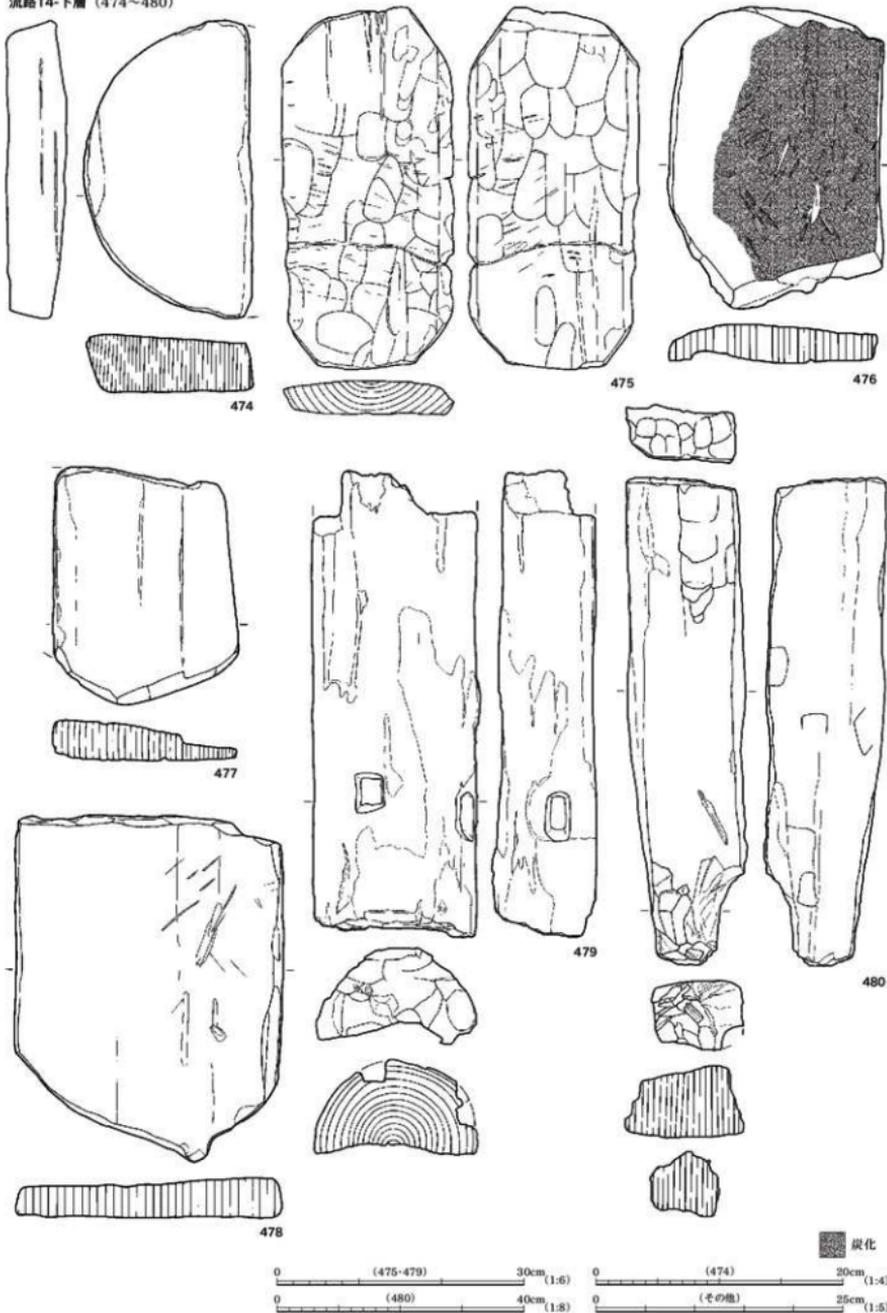
流路14-下層 (429~452)



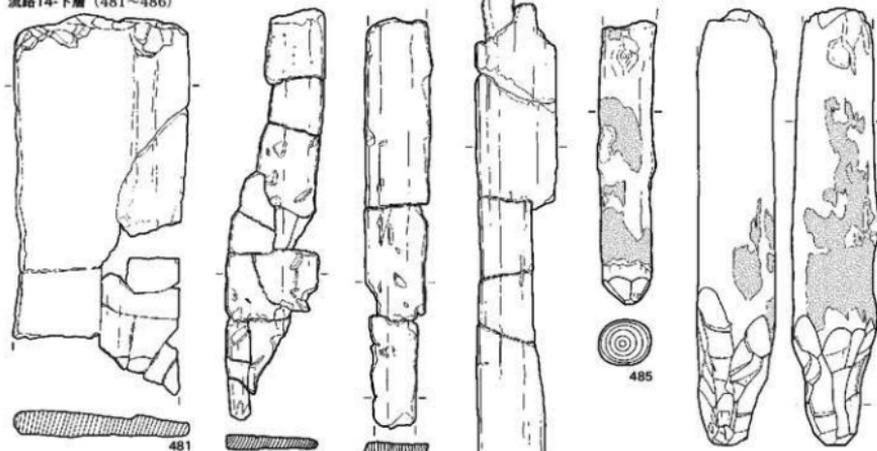
流路14 (453~473)



流路14-下層 (474~480)



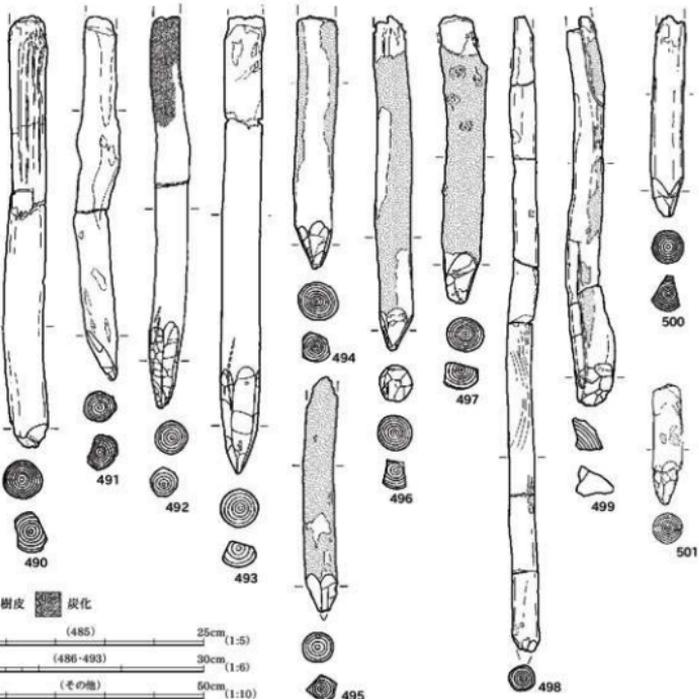
流路14-下層 (481~486)



SA75 (487~489)



階段状遺構 (A: 490・491
B: 492~499
C: 500・501)





遺跡遠景 北東から



B・C区 流路1 遺物出土状況 北から



B・C区 流路1 遺物出土状況 (E11c・d) 西から



B・C区 流路1 セクション (D11x) 南から



B・C区 流路2 完掘 北西から



B・C区 SB1・2 完掘 北から (手前:SB1、奥:SB2)



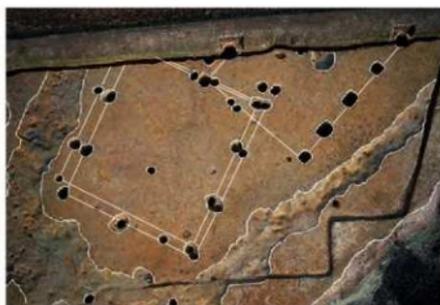
B・C区 SB1 F10e5-Pit1 半截 東から



E区 SB1・2 完掘 南から (白:SB1、黄:SB2)



E区 SB1 P1-10 半截 南から



H区 SB1～3 完掘 上から



H区 SB1-P8 セクション 南から



H区 流路14 セクション (G3s・x) 南東から



基本土層 (B・C区 F10i) 北から



基本土層 (E区 H5p4) 南から



箕輪遺跡 H区出土土器



箕輪遺跡 BC区河道土器集中地点 2



箕輪遺跡 BC区河道土器集中地点 1



H区流路14 下層墨書土器



B·C区出土 綠釉陶器



H区出土「王」墨書土器



青磁



B·C区土器集中地点1 出土墨書·漆書土器



白磁·青花



B·C区土器集中地点2 出土墨書土器



391 内面の文様



桶か (328)



黒漆塗籠 (375)



容器類



農具と火起こし具



柄杓 (376・378)



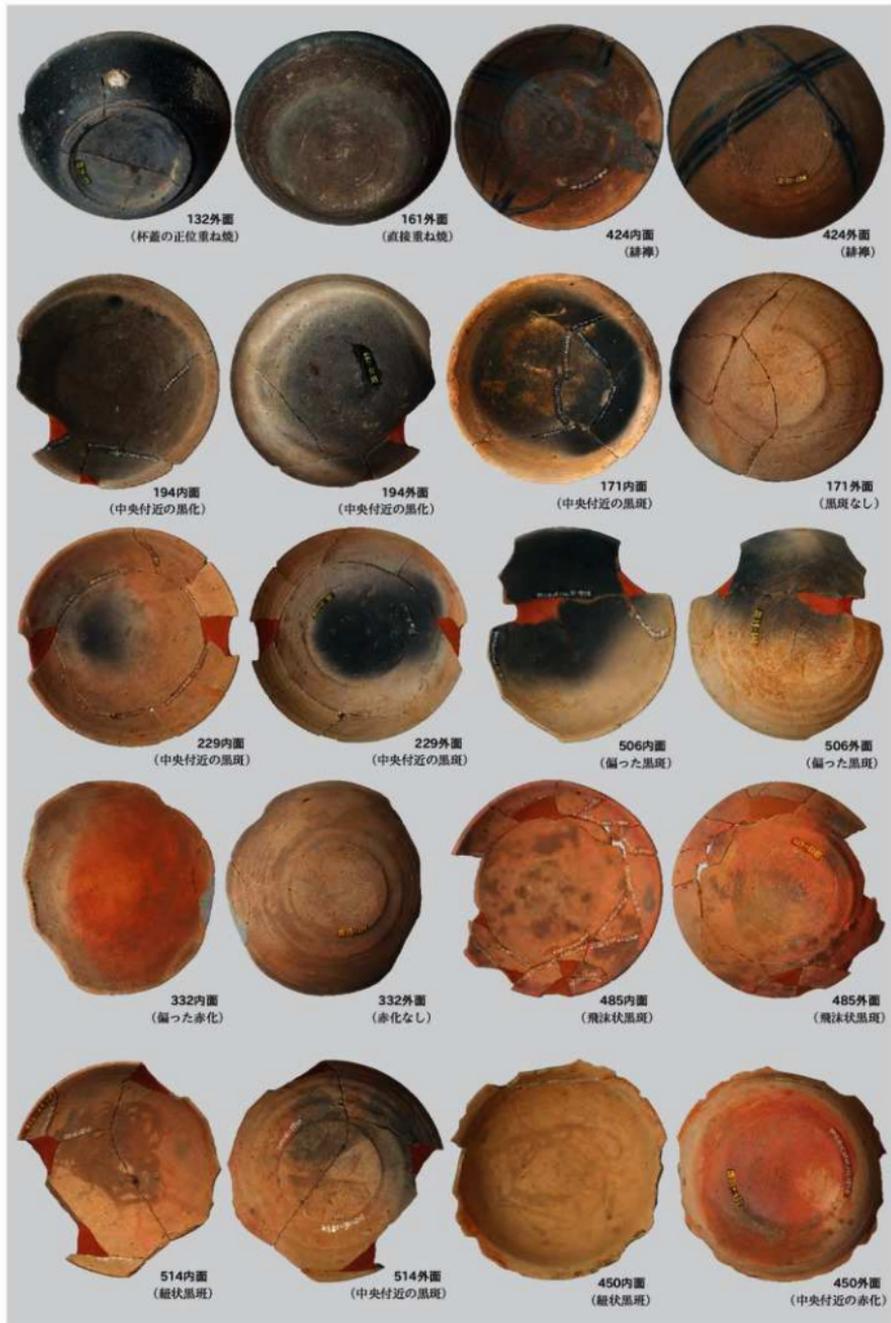
薙串・刀形・馬形



帯金具



銃弾

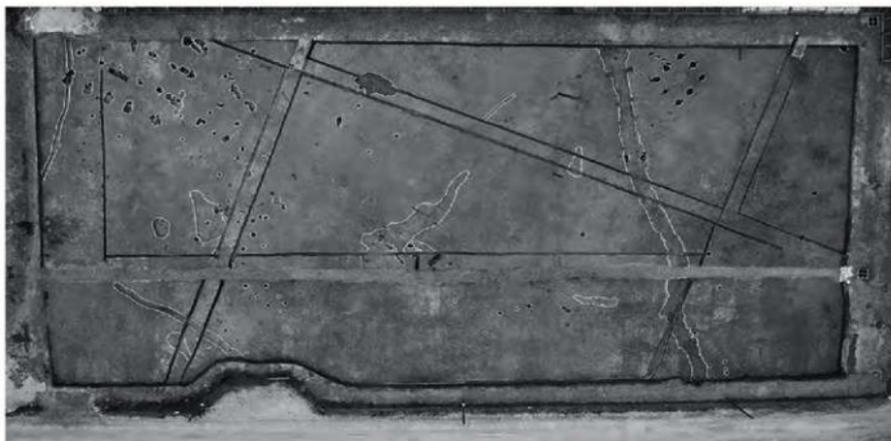








B・C区 完掘 南から



E区 完掘 南東から



H区 完掘 北東から



A区 完掘 南西から



A区 SK2 セクション 南から



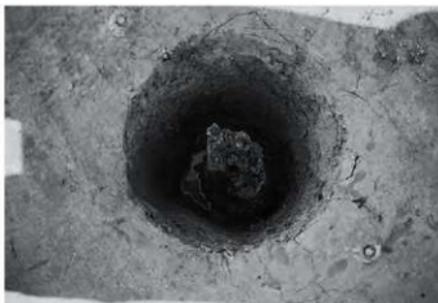
B・C区 SB1 E10t22-Pit1 セクション 南から



B・C区 SB1 E10y8-Pit1 セクション 南から



B・C区 SB1 E10y22-Pit1 セクション 東から



B・C区 SB1 E10y4-Pit1 完掘 南東から



B・C区 SB1 E11u11-Pit1 半截 東から



B・C区 SB1 E10y16-Pit1 半截 東から



B・C区 SB1 E10y19-Pit1 半截 南から



B・C区 SB2 F11a5-Pit2 セクション 東から



B・C区 SB2 F11a7-Pit1 セクション 南から



B・C区 SE10 セクション 西から



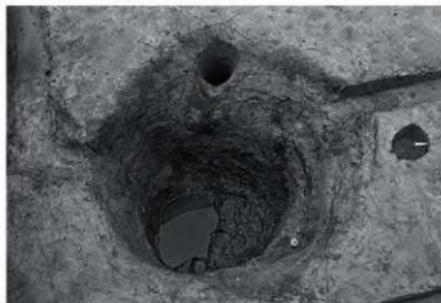
B・C区 SE6 セクション 南から



B・C区 SE6 半截 南から



B・C区 SE7 セクション 南西から



B・C区 SE7 完掘 南東から



B・C区 SK15 セクション 東から



B・C区 SE16 完掘 南から



B・C区 SE16 半截 西から



B・C区 SE12 セクション 西から



B・C区 SK13 セクション 西から



B・C区 SK14 セクション 南から



B・C区 SK8 土器出土状況 南から



B・C区 E10y17-Pit1 土器(8~10)出土状況 東から



B・C区 F11a14-Pit1 セクション 南から



B・C区 流路1 遺物出土状況 南から



B・C区 流路1 遺物出土状況 西から



B・C区 流路1 遺物出土状況 (E11c・d)



B・C区 流路1 遺物出土状況 (E11d16) 東から



B・C区 流路1 須恵器(311)出土状況 (E11h10) 東から



B・C区 流路1 木製品(39)出土状況 (E11d1) 西から



B・C区 流路1 自然木出土状況 (E11c20) 南から



B・C区 流路1 遺物出土状況(1回目取り上げ) 東から



B・C区 流路1 遺物出土状況(2回目取り上げ) 東から



B・C区 流路1 遺物出土状況(E11c15) 西から



B・C区 流路1 遺物出土状況(E11d) 北から



B・C区 流路2 遺物・自然木出土状況(E11v) 西から



B・C区 流路2 自然木出土状況(E11v・w) 東から



B・C区 流路2 黒書土器(316) 出土状況(E11q16) 南から



B・C区 流路2 遺物出土状況(E11w16) 西から



B・C区 流路2 木製品出土状況 (E11x1) 南西から



B・C区 流路2 階段状遺構セクション (E11v1) 南から



B・C区 流路1 セクション (E11i) 北から



B・C区 流路1 セクション (E11i) 北から



B・C区 流路1 セクション (D11x) 南から



B・C区 流路2 セクション (E11v) 東から



B・C区 流路2 セクション (E11p12・13) 北から



B・C区 流路2 セクション (E11p12・13) 北から



B・C区 流路1 完掘 東から



B・C区 流路2 完掘 東から



B・C区 流路2 完掘 西から



B・C区 流路1・2 完掘 北から



D区西側 完掘 北から



D区東側 完掘 東から



D区 SK22 竹筐類出土状況 東から



E区 SB1 P1-1 セクション 南から



E区 SB1 P1-1 木製品出土状況 南から



E区 SB1 P1-3 セクション 南から



E区 SB1 P1-4 完掘 南から



E区 SB1 P1-5 半掘 南から



E区 SB1-P3, SB2-P5, SK4 検出状況 西から



E区 SB1-P3・SK4 遺物出土状況 西から



E区 SB1 完掘 東から



E区 SB1~3 完掘 上から



E区 SB2 P5 セクション 西から



E区 SB2 P5 完掘 西



E区 SB2 P20-2 礎盤検出状況 東から



E区 SB2 P22 柱根出土状況 南から



E区 SB2・3 P36 セクション 西から



E区 SB2 P36 完掘 南から



E区 SB2・3 P33 セクション 西から



E区 SB2-P87, SB3-P83・P86 セクション 西から



E区 SB3 P98 セクション 南から



E区 SB3-P98, SB2-P94 完掘 北から



E区 SB4 完掘 南西から



E区 SB4 P38 セクション 東から



E区 SB4 P54 柱根出土状況 南から



E区 SB5 P113 セクション 南から



E区 SB5 P106 セクション 南から



E区 SB7 P15 遺物出土状況 北から



E区 SB7 P41 セクション 北から



E区 SB8 検出状況 東から



E区 SB8 P119 ㉔ セクション 東から



E区 SB8 P119 ㉕ セクション 東から



E区 SB117 P117 ㉔・㉕・㉖ 横出状況 南西から



E区 SB117 P117 ㉒ セクション 南から



E区 SB117 P117 ㉓ セクション 南から



E区 SB117 P117 ㉑ 柱根出土状況 南から



E区 SB117 P117 ㉗ 柱根出土状況 東から



E区 SB117 柱根出土状況 東から



E区 SB117・SA116 完掘 上から



E区 SA116 杭⑤ セクション 南から



E区 SA116 杭⑥ セクション 南から



E区 SA116 杭出土状況 西から



E区 SK7 セクション 南西から



E区 SK7 土器(770) 出土状況 北西から



E区 SK102 セクション 西から



E区 P30 土器(858) 出土状況 西から



E区 P99・100 検出、SD95 完掘 南から



E区 P99 木製品出土状況 北から



E区 SD95 セクション (H5n) 南から



E区 P100 木製品出土状況 西から



E区 SD95 完掘 南東から



E区 H5p16 V層 土器出土状況 西から



F区 完掘 北から



G区 SK3 セクション 南から



G区 SE4 セクション 南から



G区 SE4 15層遺物出土状況 南から



G区 SE4 完掘 南から



G区 SD1 映出状況 南西から



G区 SD1 セクション 東から



G区 SD1 完掘 北西から



H区 SB1 P9 柱根出土状況 北から



H区 SB1 P11 半截 西から



H区 SB1 P10 セクション 南から



H区 SB1 P10 柱根出土状況 南西から



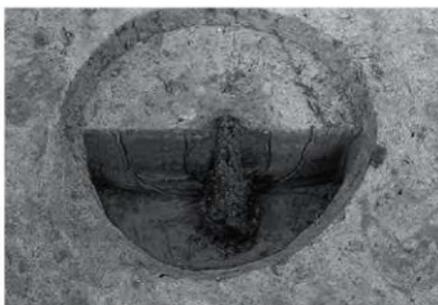
H区 SB1~3 完壘 西から



H区 SB2 P5 セクション 南から



H区 SB2 P32 セクション 南から



H区 SB2・3 P78 セクション 西から



H区 SB2・3 P62 セクション 東から



H区 SB2-P5、SB3-P6 遺物出土状況 西から



H区 SB2-P42、SB3-P37 セクション 南東から



H区 SB3-P29、SB2-P28 セクション 西から



H区 SB3-P29、SB2-P28 完掘 西から



H区 SB4 P23 セクション 南から



H区 SB4 P25 セクション 南から



H区 SB4 P53 柱根出土状況 南から



H区 P4 セクション 南から



H区 SD16 完掘、SD15 検出状況 南東から



H区 SD17 遺物出土状況 (E3v) 北西から



H区 SD38・SX50 遺物出土状況 南西から



H区 SX76 木製品 (224) 出土状況 南から



H区 流路 14 上層 遺物出土状況 南から



H区 流路 14 中層 棒状材検出状況 (G3a) 西から



H区 流路 14 階段状遺構 A (G3b24) 北から



H区 流路 14 階段状遺構 C (G3b18・19) 東から



H区 流路 14 階段状遺構 B (G3c16・21) 北から



H区 流路14 SA75 横出状況 北東から



H区 流路14下層 遺物出土状況 (G3x·y) 南東から



H区 流路14下層 土器出土状況 (F3v23) 東から



H区 流路14下層 遺物出土状況 (G3b9) 北東から



H区 流路14中層 1号木桶出土状況 (G3a8) 東から



H区 流路14下層 6号木筒・土器 (1005・1006) 出土状況 (G3m22) 東から



H区 流路14下層 遺物出土状況 (G3r2) 西から



H区 流路14下層 木製品 (307) 出土状況 (G3i14) 北から



H区 流路14下層 木製品(420)出土状況(G3m11) 北東から



H区 流路14下層 木製品(左:282)出土状況(G3m23) 南東から



H区 流路14下層 木製品出土状況(G3x10・y6) 西から



H区 流路14下層 遺物出土状況(G3x4・5) 南西から



H区 流路14下層 木製品(375)出土状況(G3s23) 東から



H区 流路14下層 木製品(328)出土状況(G3x5) 東から



H区 流路14下層 土器(899ほか)出土状況 西から



H区 流路14下層 木製品(右:478)出土状況(G3114・15) 北東から



H区 流路14下層 集石検出状況 (G3f15) 南西から



H区 流路14最下層 遺物出土状況 (G3b10) 南東から



H区 流路14 セクション (G3i) 南東から



H区 流路14 セクション (G3s-x) 南東から



H区 流路14・SD18 セクション (G3s) 東から



H区 流路14 古代以前の堆積状況 (G3i) 南から



H区 流路14-2 セクション 東から



H区 流路14 自然木出土状況 (G3i-m) 北から



H区 流路14 作業風景 南から



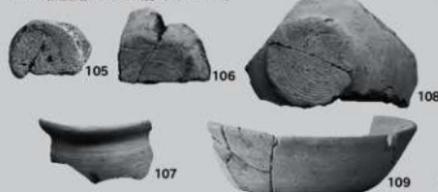
B・C区流路1・2・3層 (59~87)



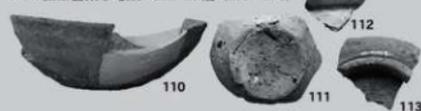
B・C区流路1・2・3'層 (88~104)



B・C区流路1・2・4a層 (105~109)

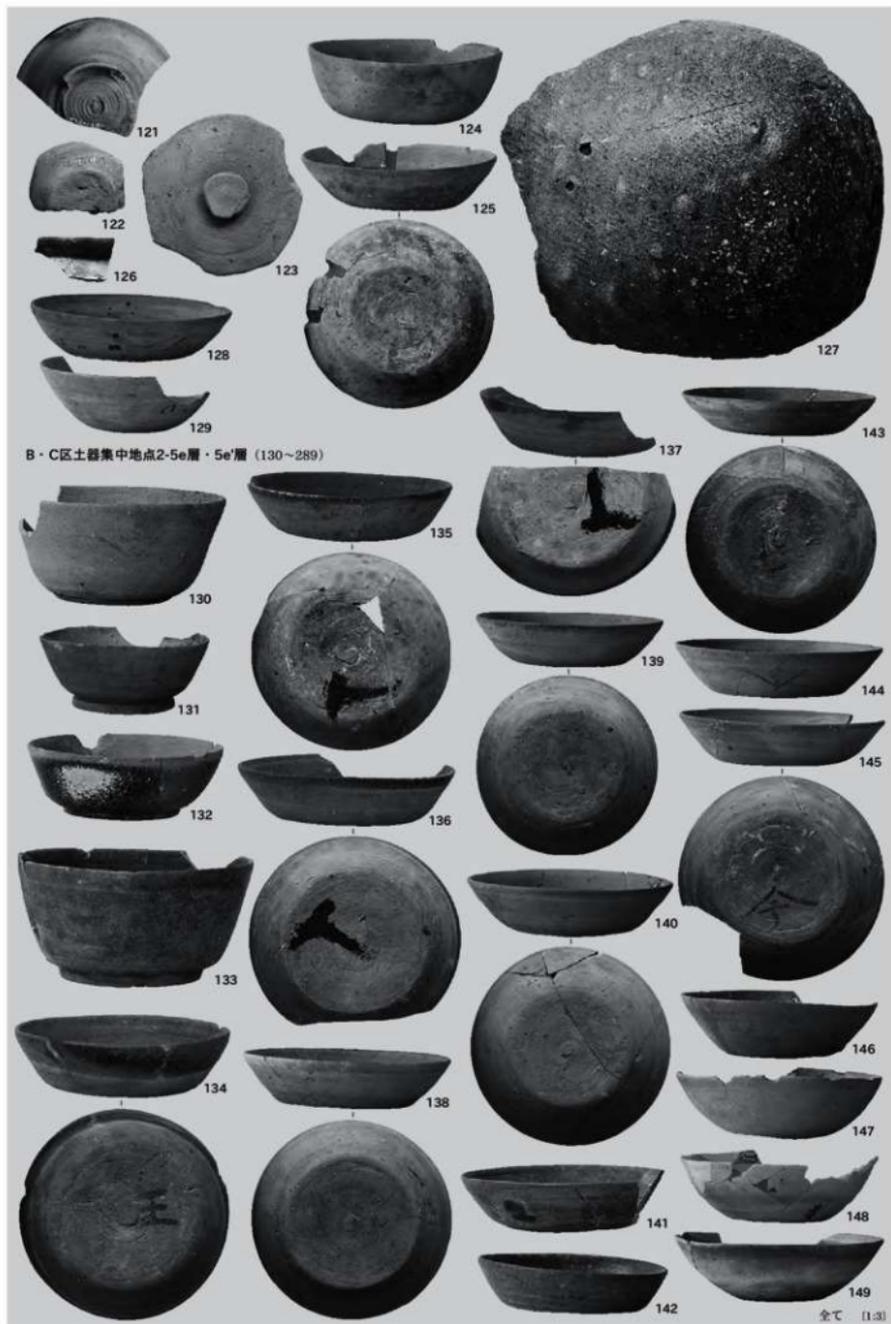


B・C区土器集中地点2-5a・5b層 (110~113)

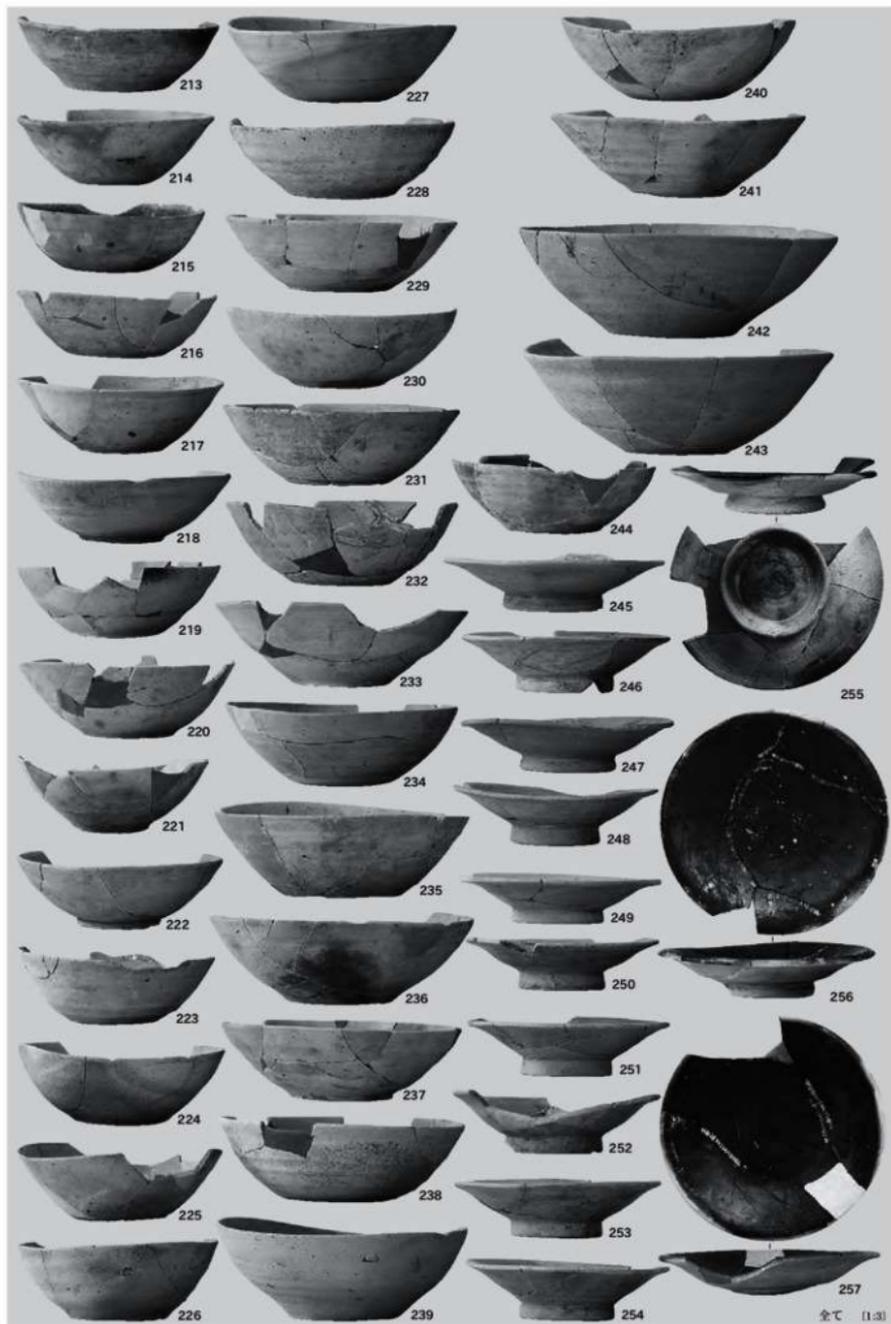


B・C区土器集中地点2-5c・5d層 (114~129)











B・C区土器集中地点2-5層ほか (290~293)



B・C区土器集中地点1-5a層・5b層 (294~303)



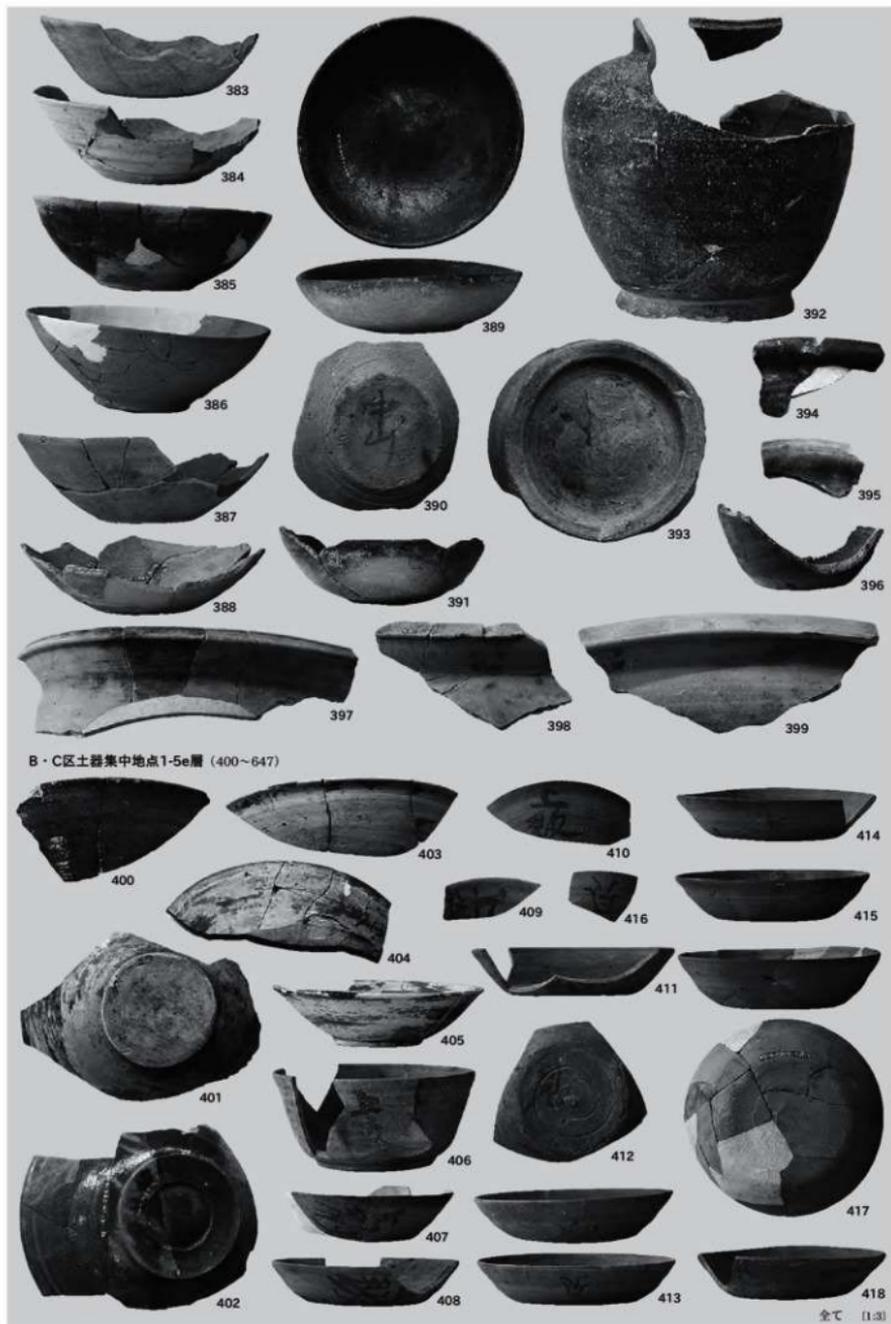
B・C区土器集中地点1 (304~312)



B・C区土器集中地点1-5d層 (313~399)

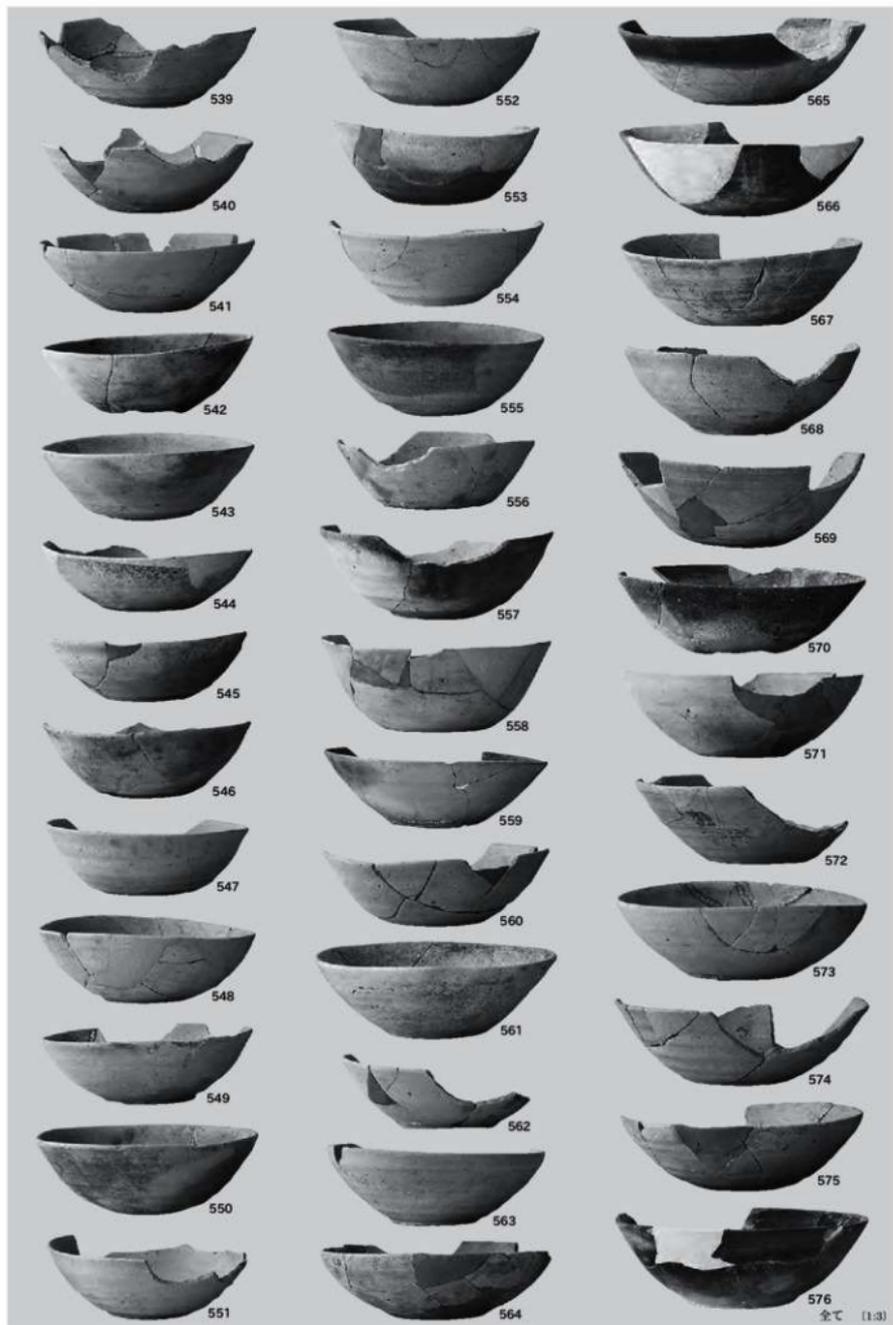






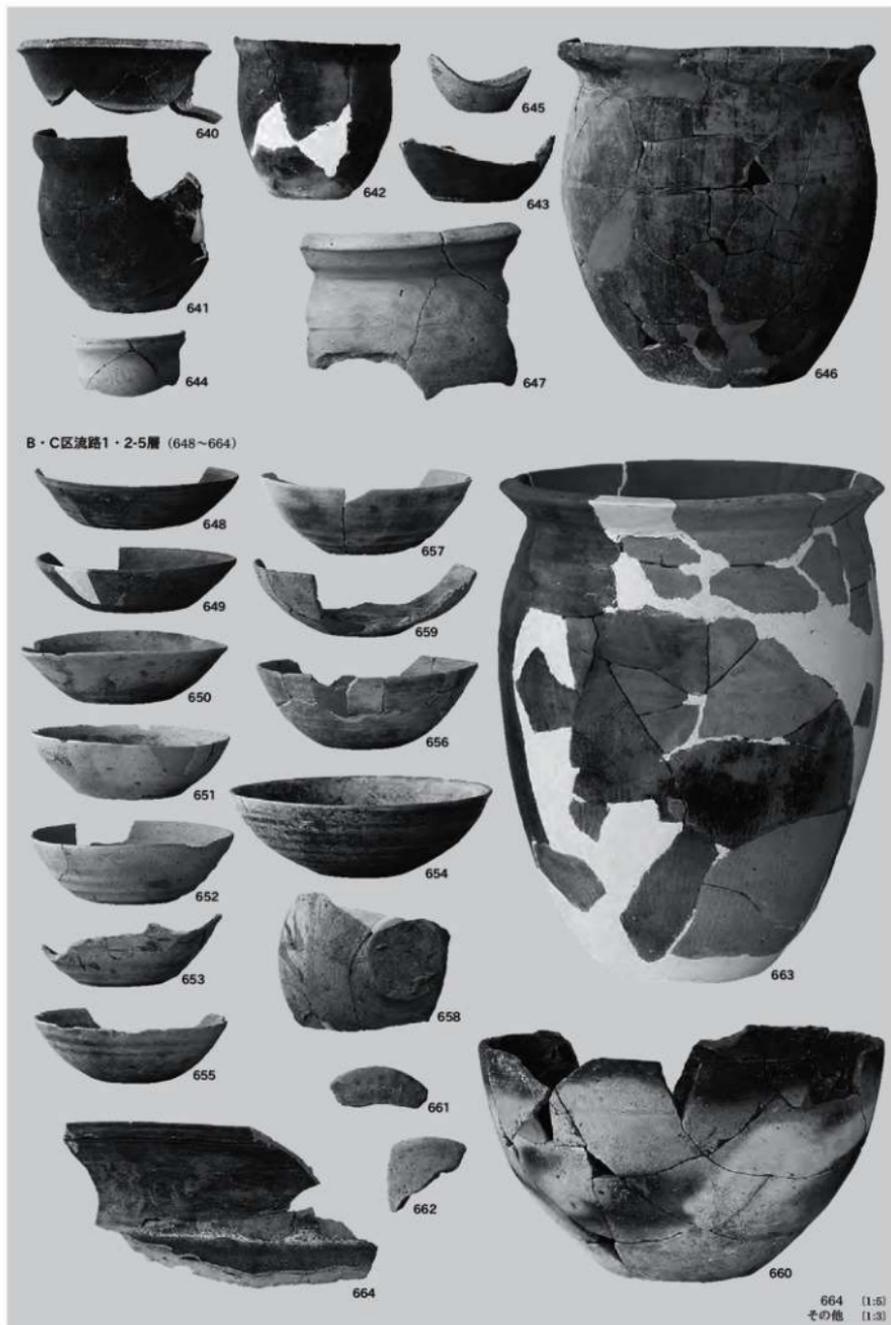








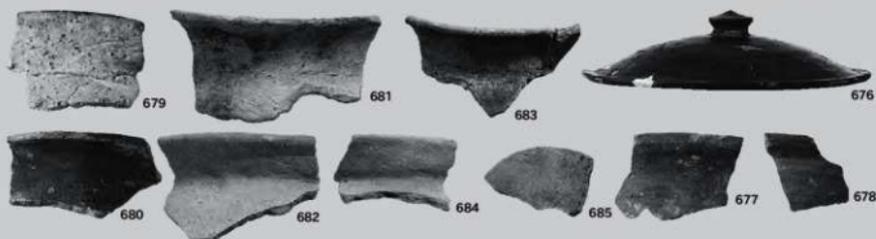




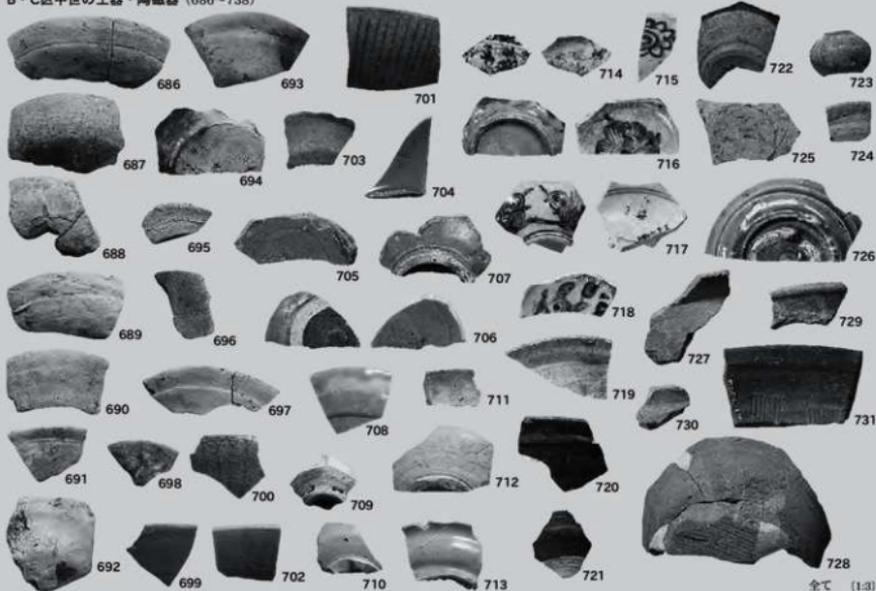
B・C区土流路1・2-6~8層 (665~668)

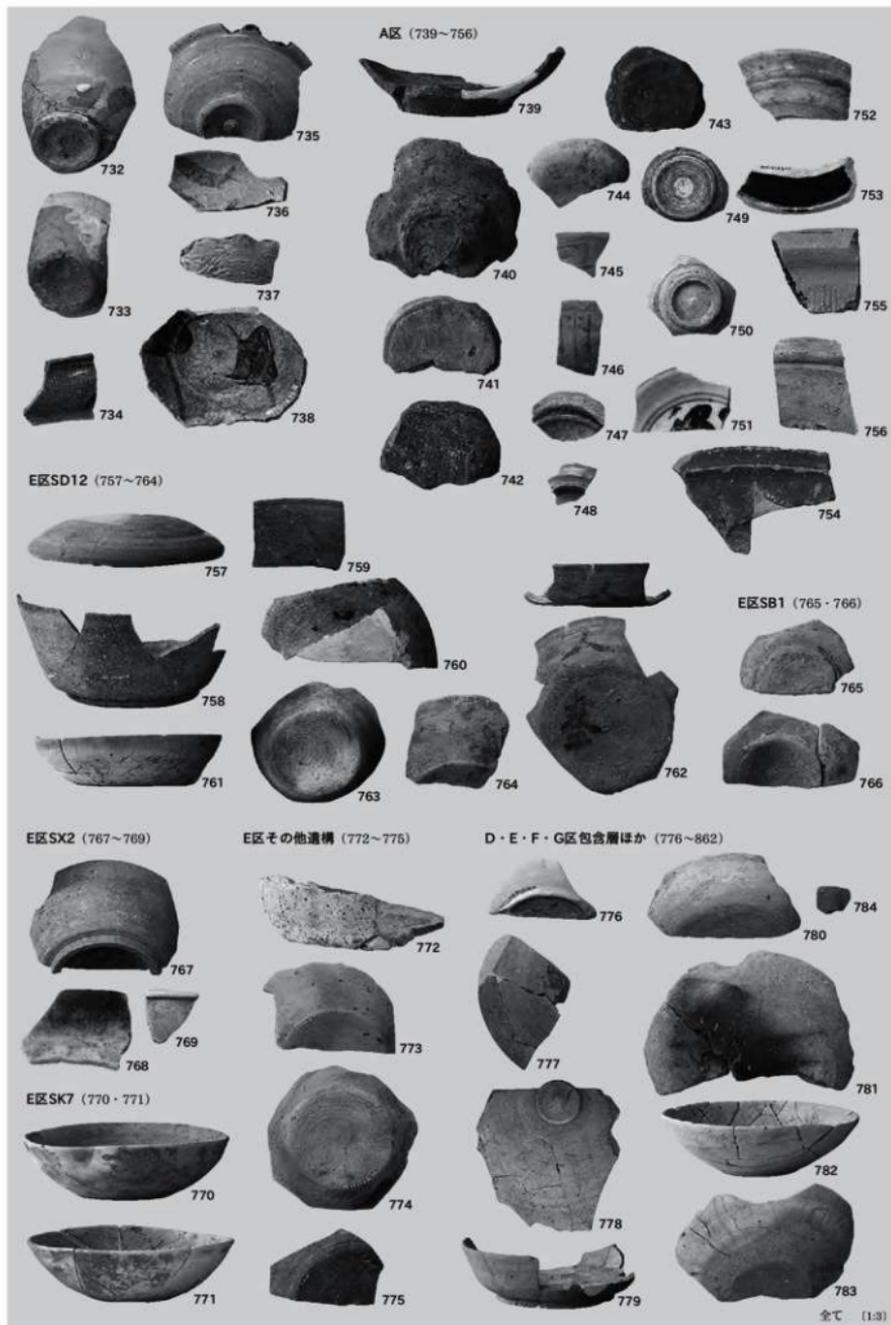


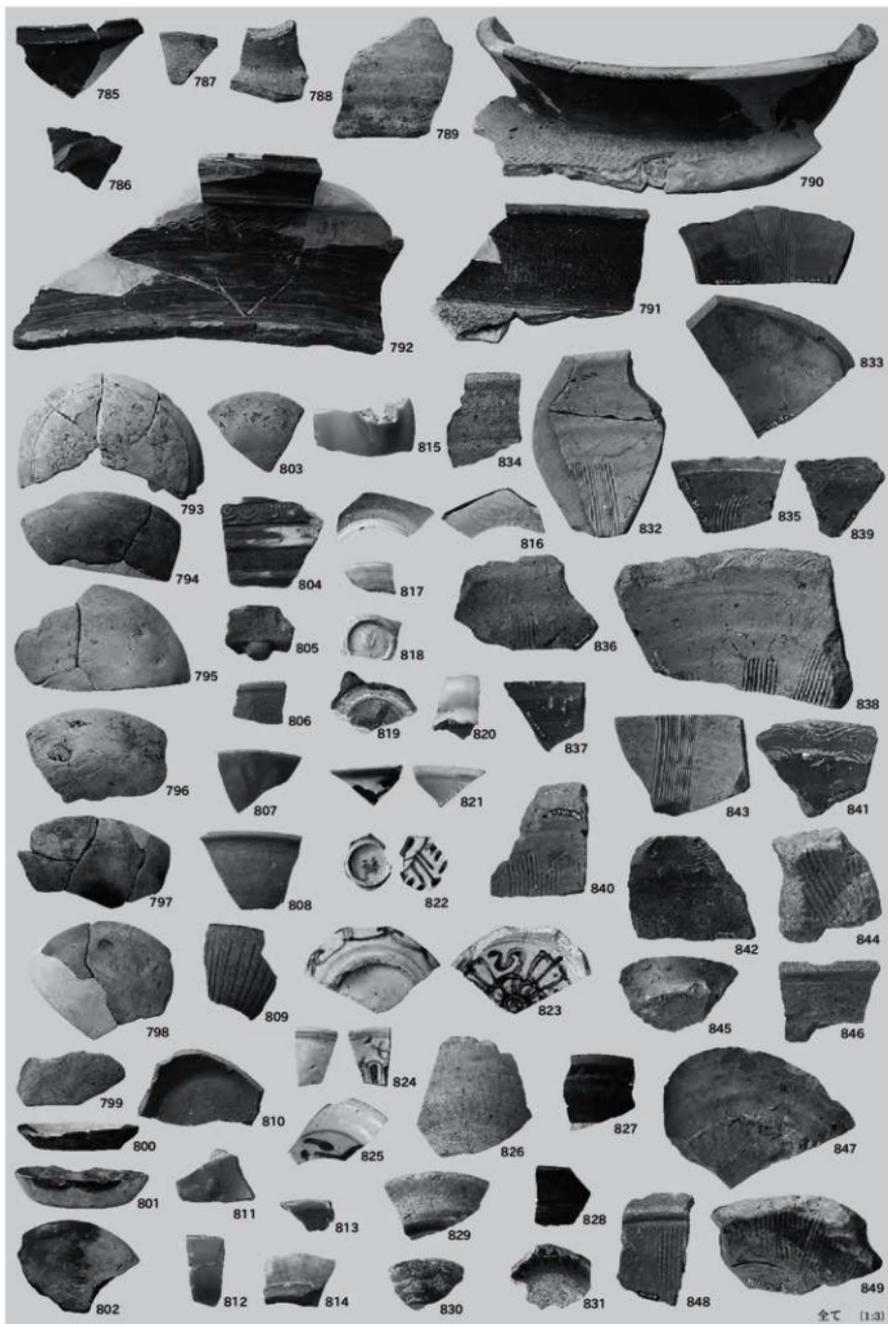
B・C区古墳時代の土器 (679~685)



B・C区中世の土器・陶磁器 (686~738)





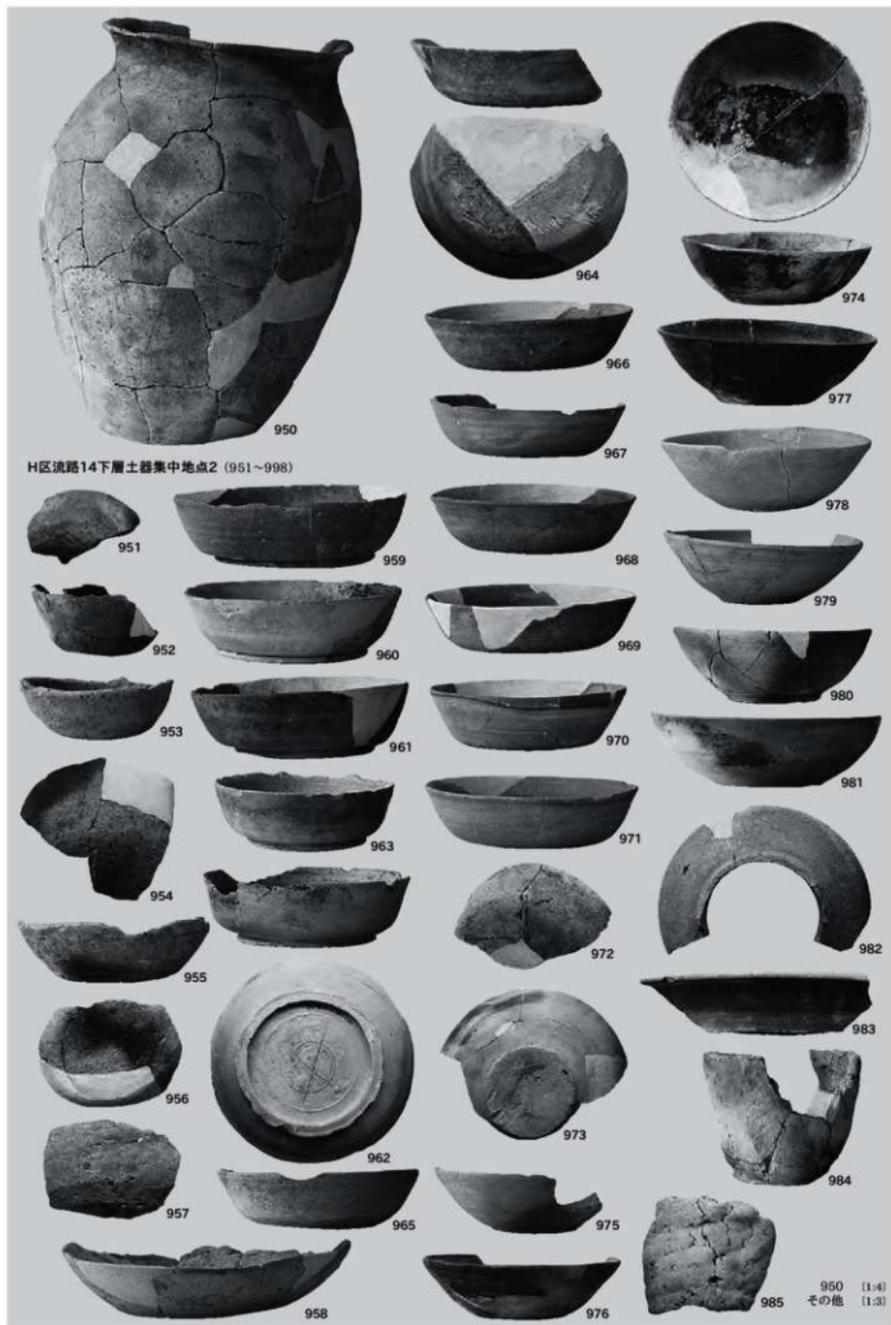








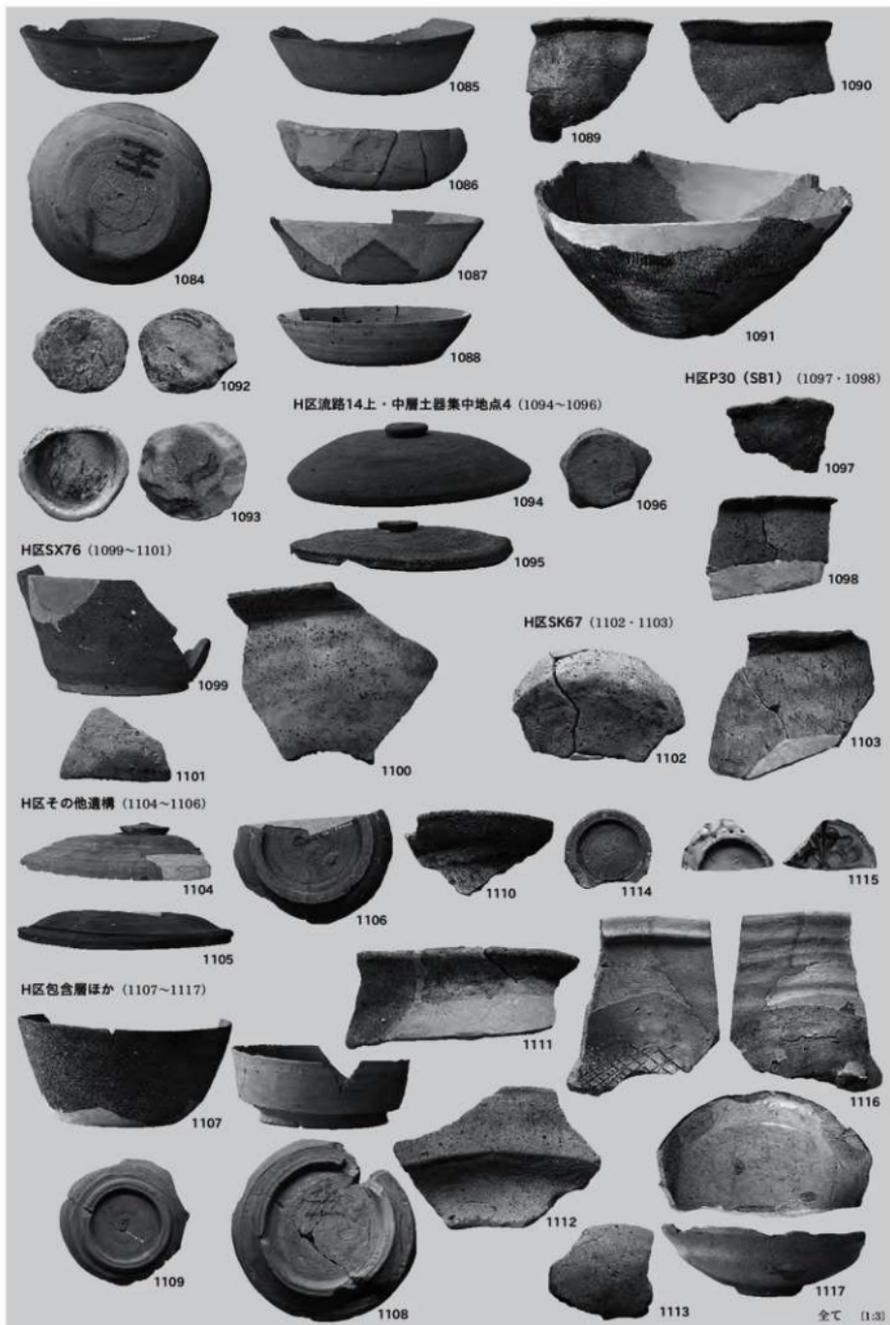




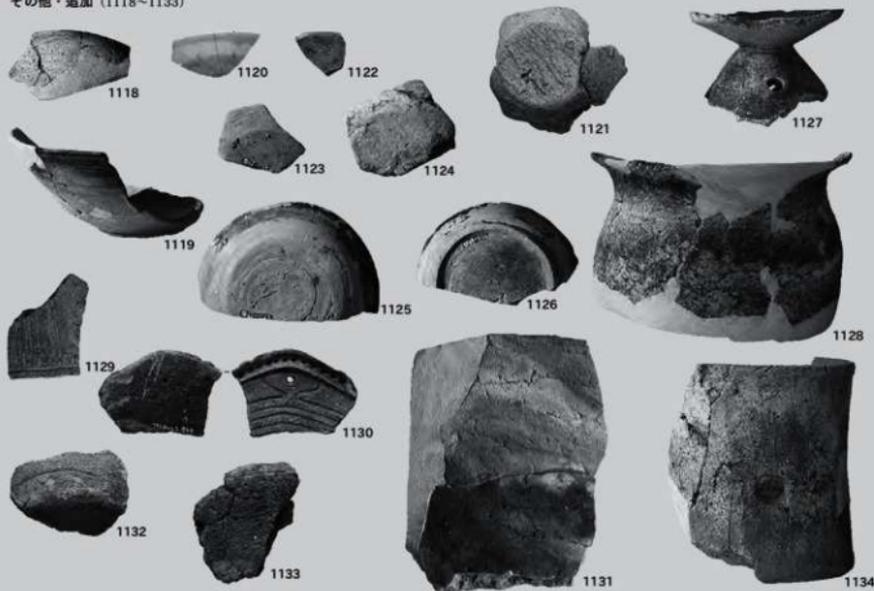




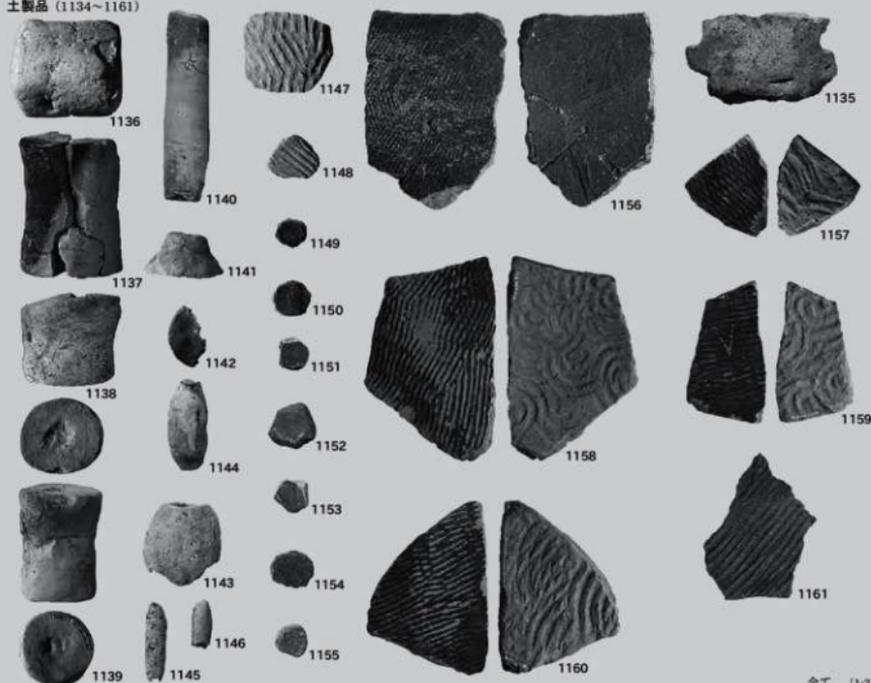




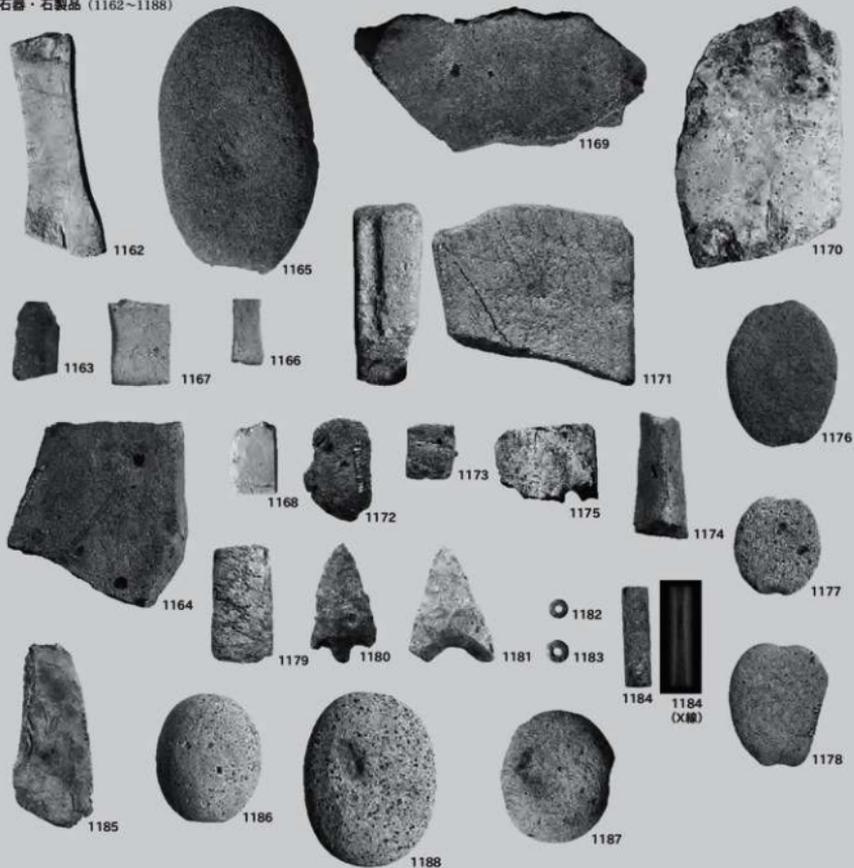
その他・追加 (1118~1133)



土製品 (1134~1161)



石器・石製品 (1162~1188)



製鉄関連遺物・金属製品 (1189~1235)



1180~1184 (1:1)

1198 (2:3)

1192~1195・1197・1199 (1:2)

その他 (1:3)



1200



1201



1202



1203



1204



1205



1206



1207



1208



1209



1210



1212



1219



1228



1213



1220



1229



1214



1221



1230



1215



1222



1231



1216



1223



1233



1211



1226



1217



1224



1234



1232



1218

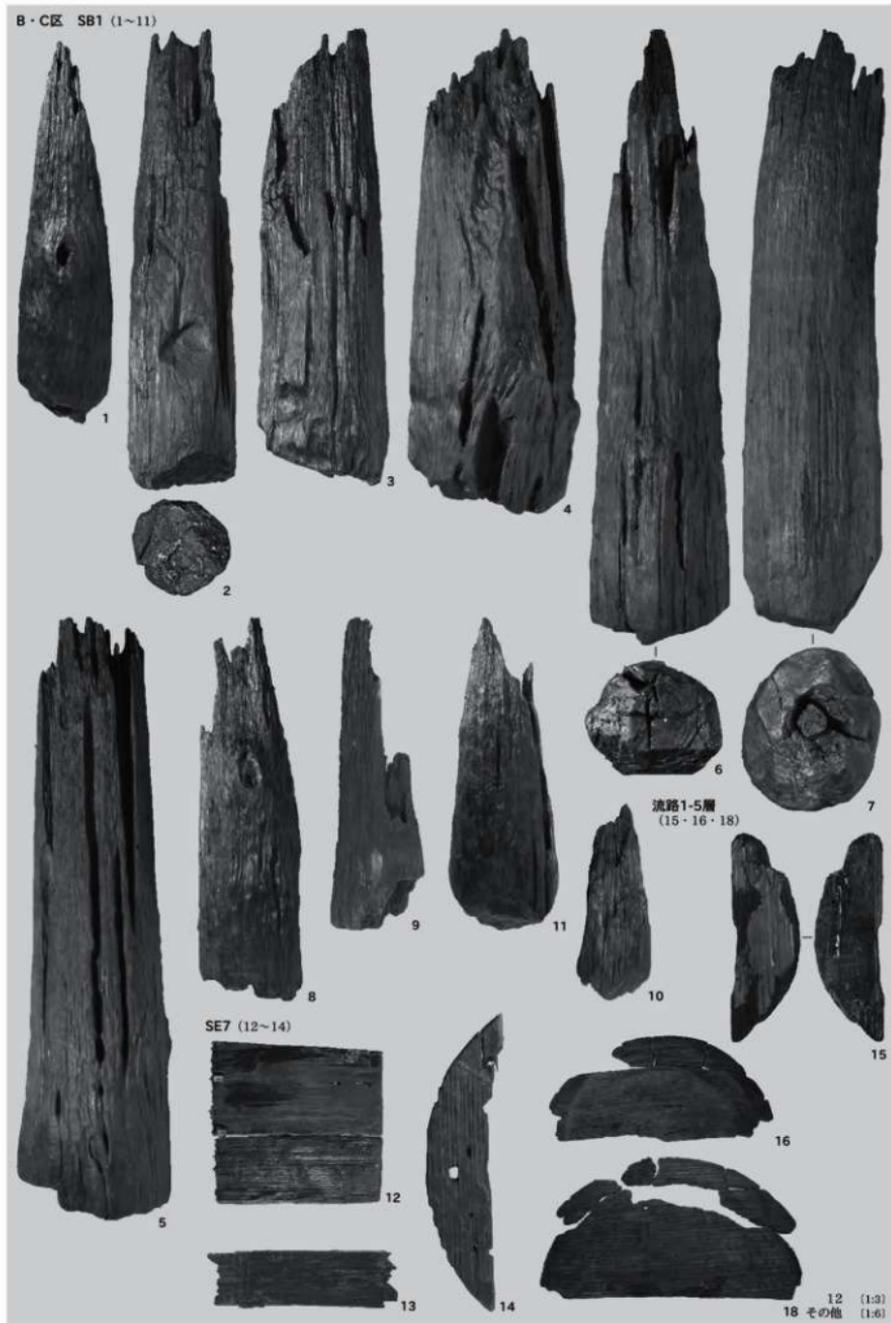


1225



1235

1200~1205 (1:3)
 1206 (2:3)
 その他 (1:1)



流路1-5層 (17・19~28)



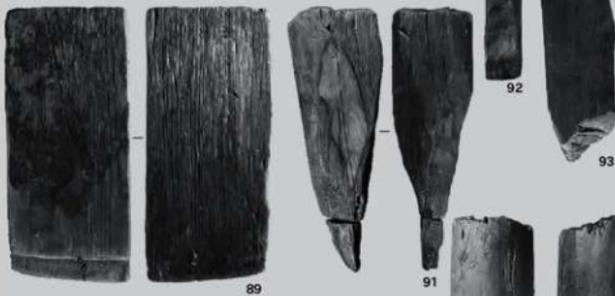
流路1-5層 (29~41・46)



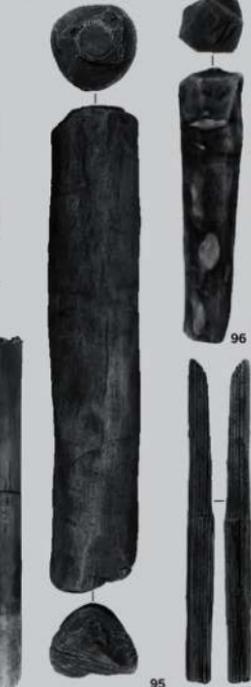
流路1-5層 (42~45・47~79)



流路1-5層 (80~94)



流路1-6a層 (95~97)

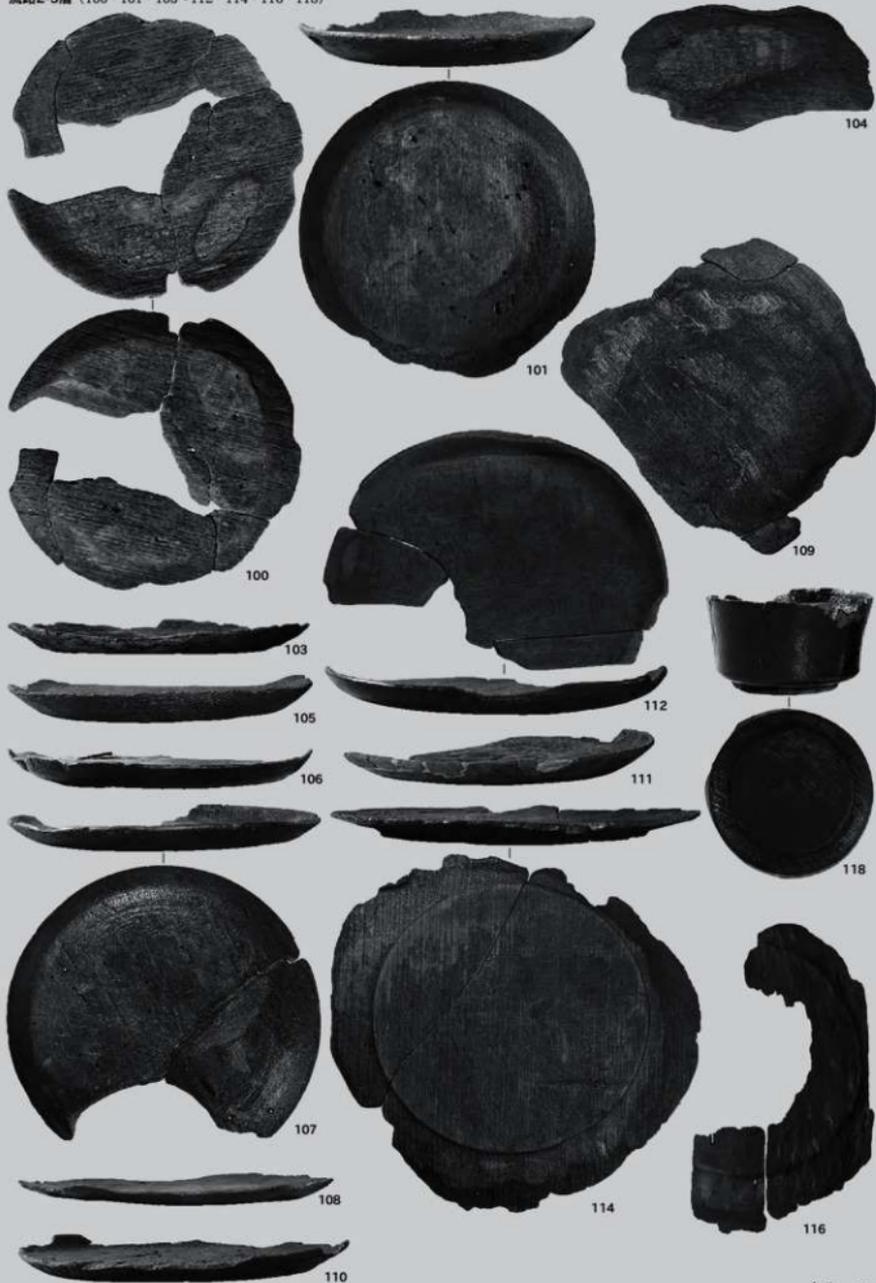


流路2-5層 (98・99・102)



94 (1:6)
80~82・86・89・91・92・93 (1:4)
その他 (1:3)

流路2-5層 (100・101・103~112・114・116・118)



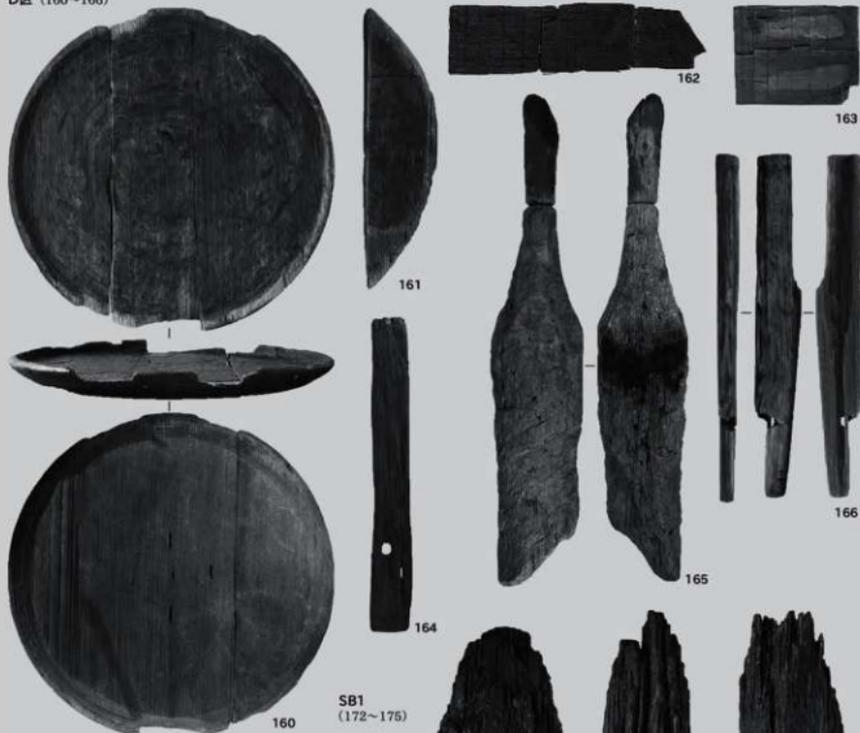
流路2-5層 (113・115・117~127・129~134)



流路2-5層 (128・135~157)



D区 (160~166)



E区 SB3 (167・168)



SB1 (172~176)



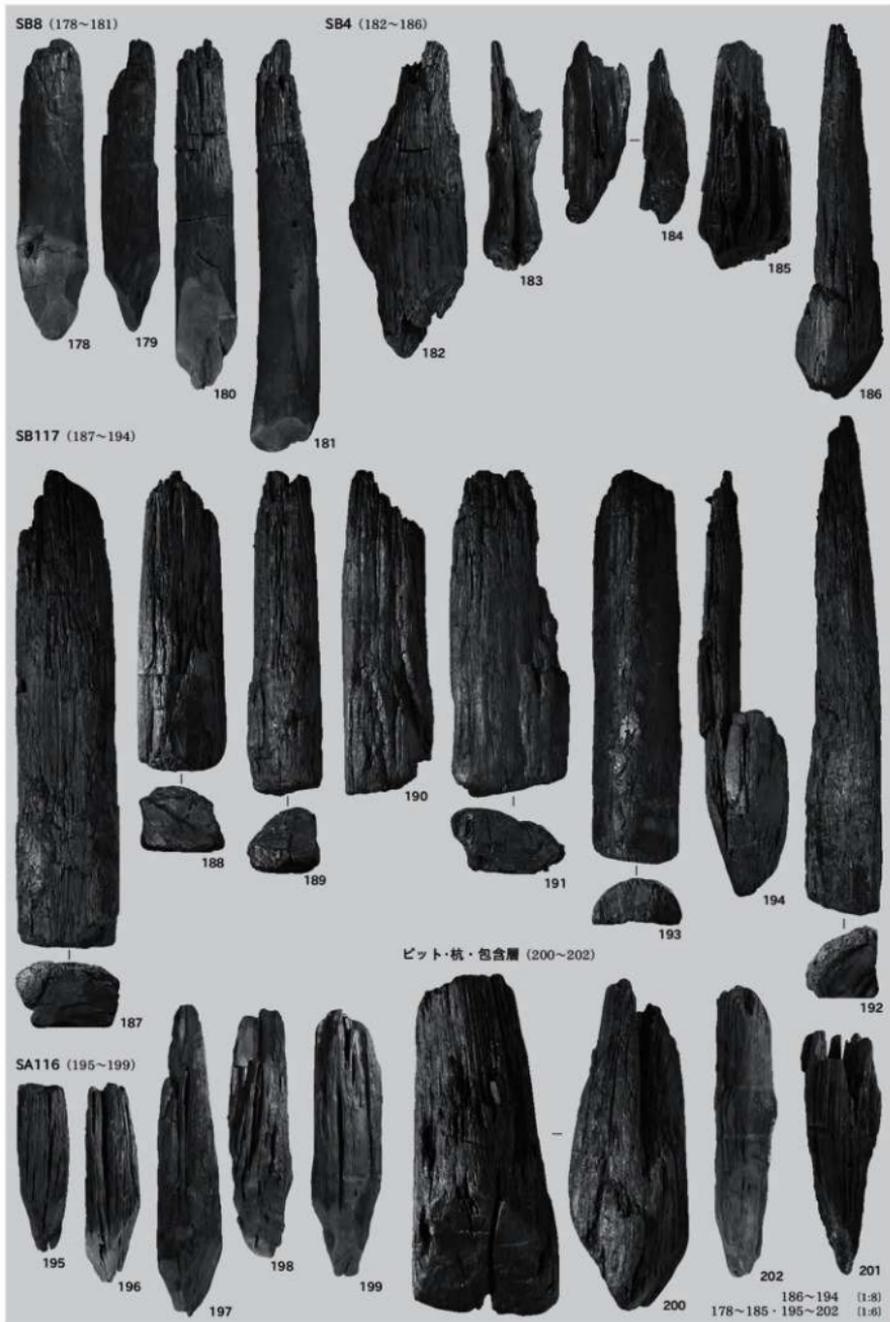
SB2 (169~171)

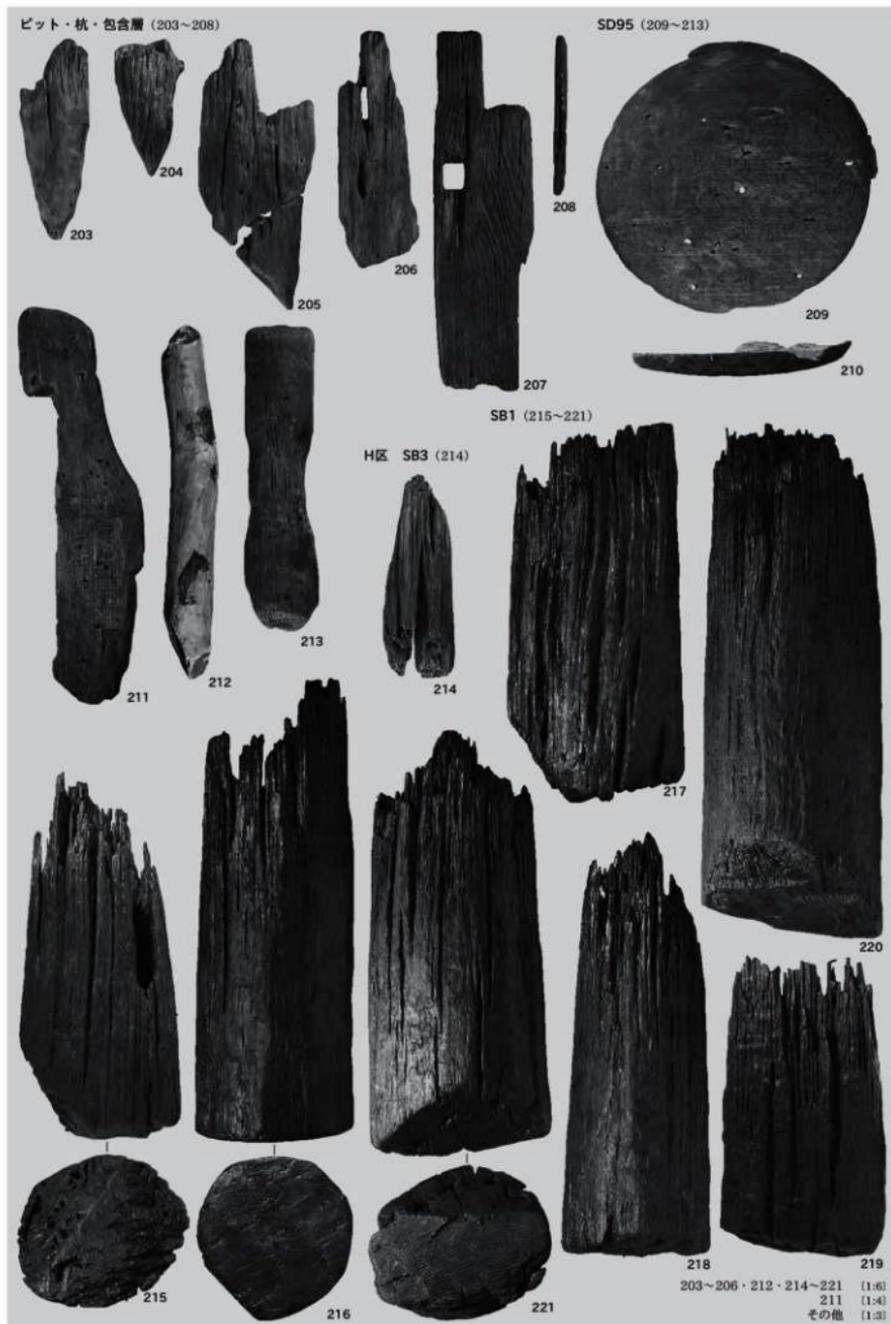


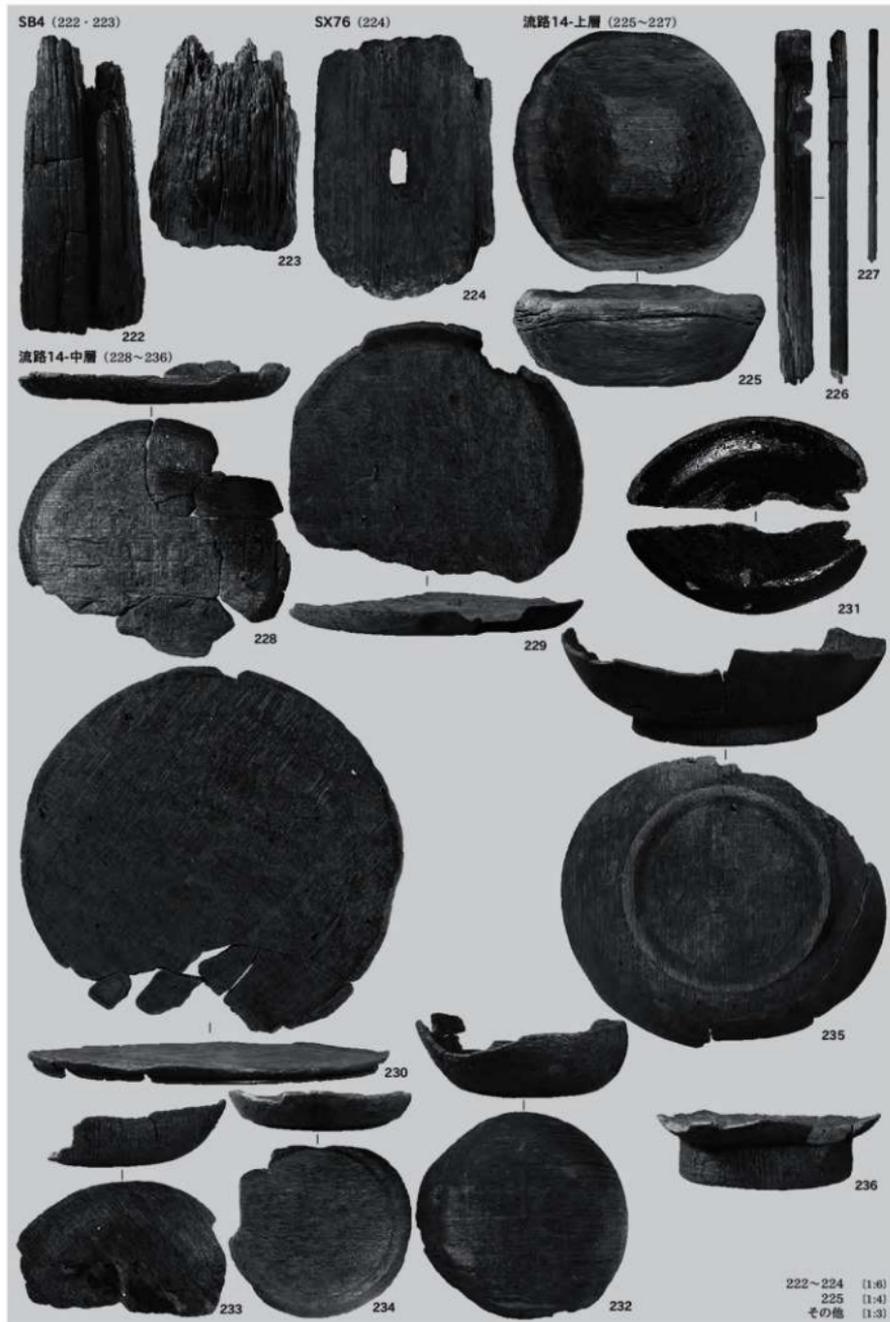
SB6 (176・177)



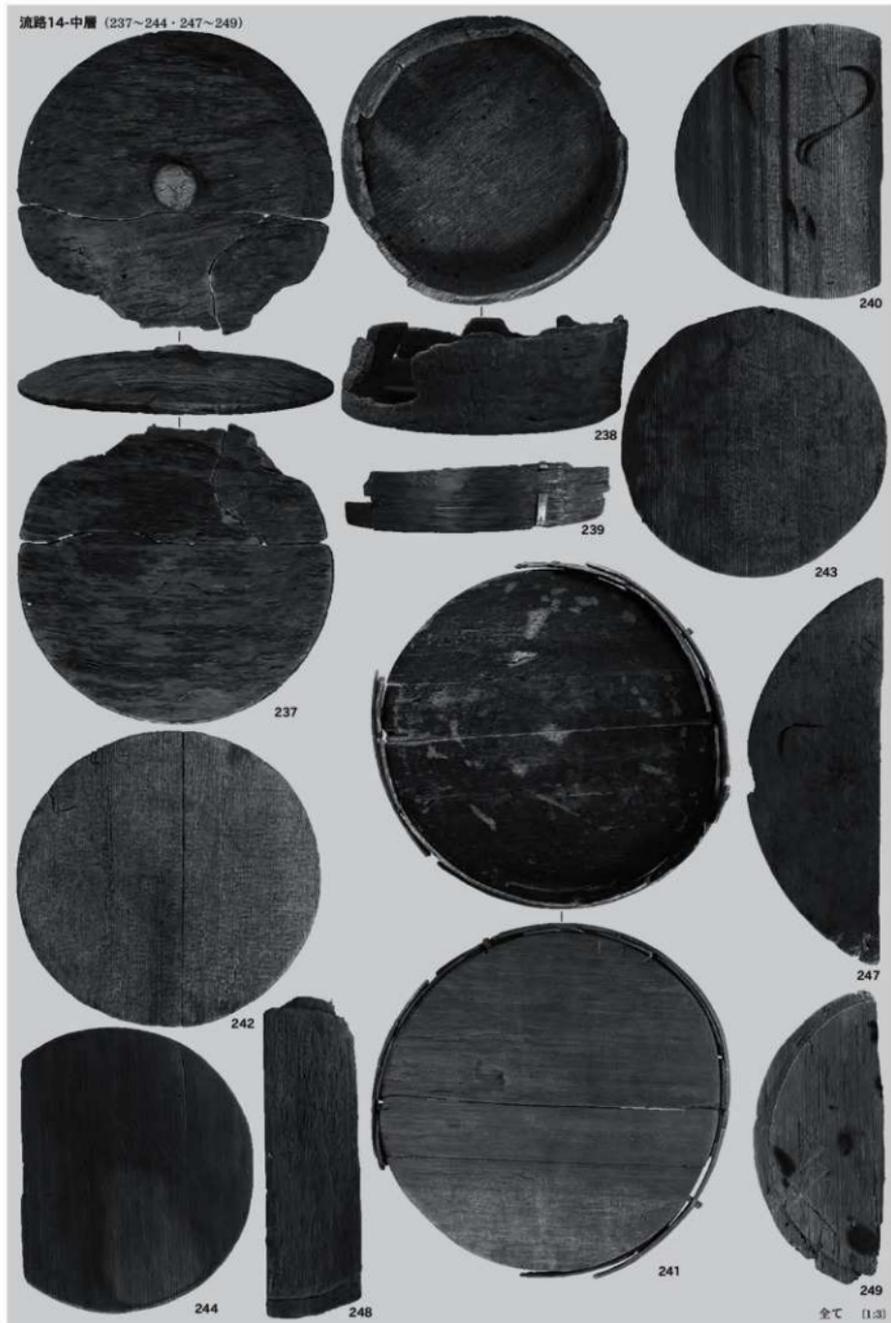
165 (1:4)
167~175 (1:8)
176・177 (1:6)
その他 (1:3)



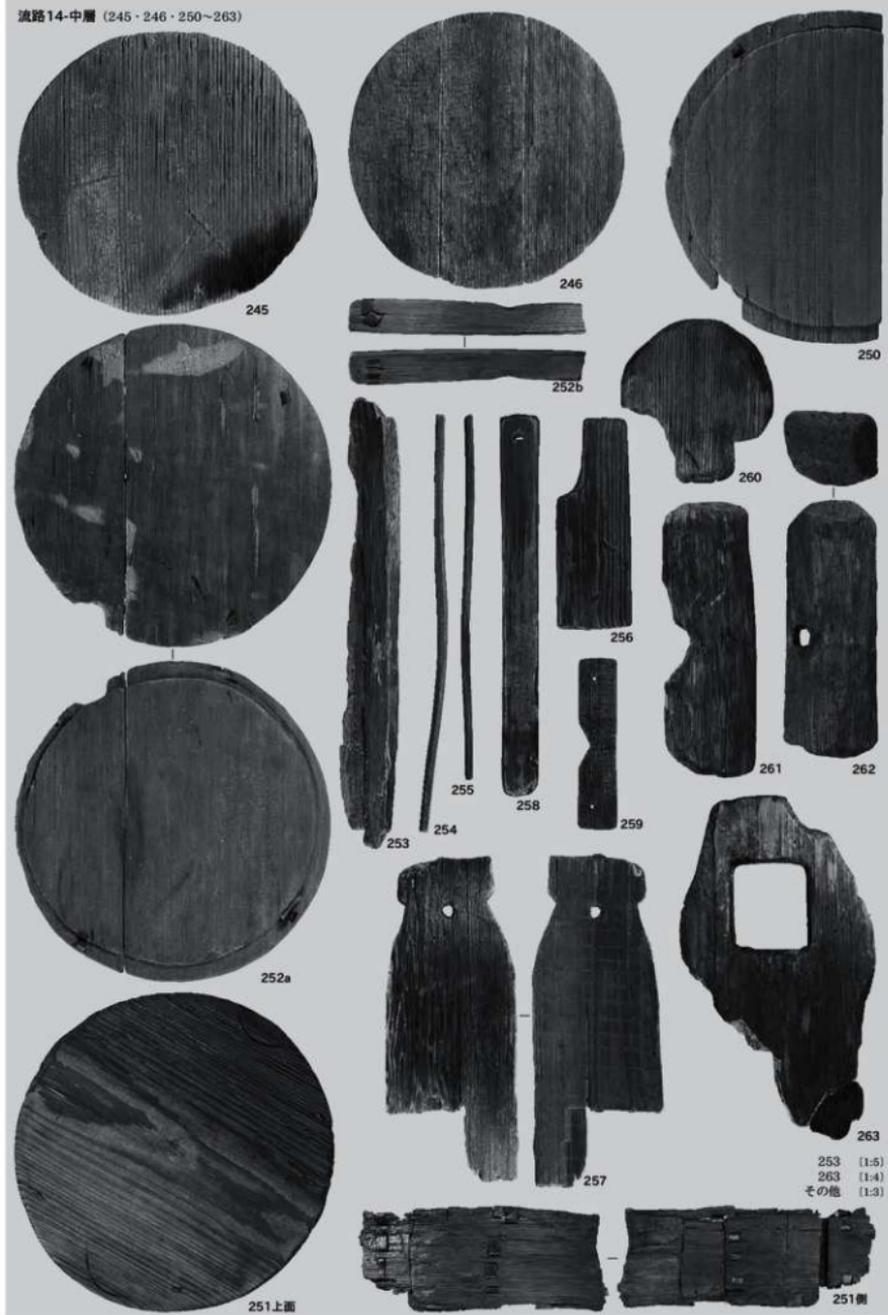


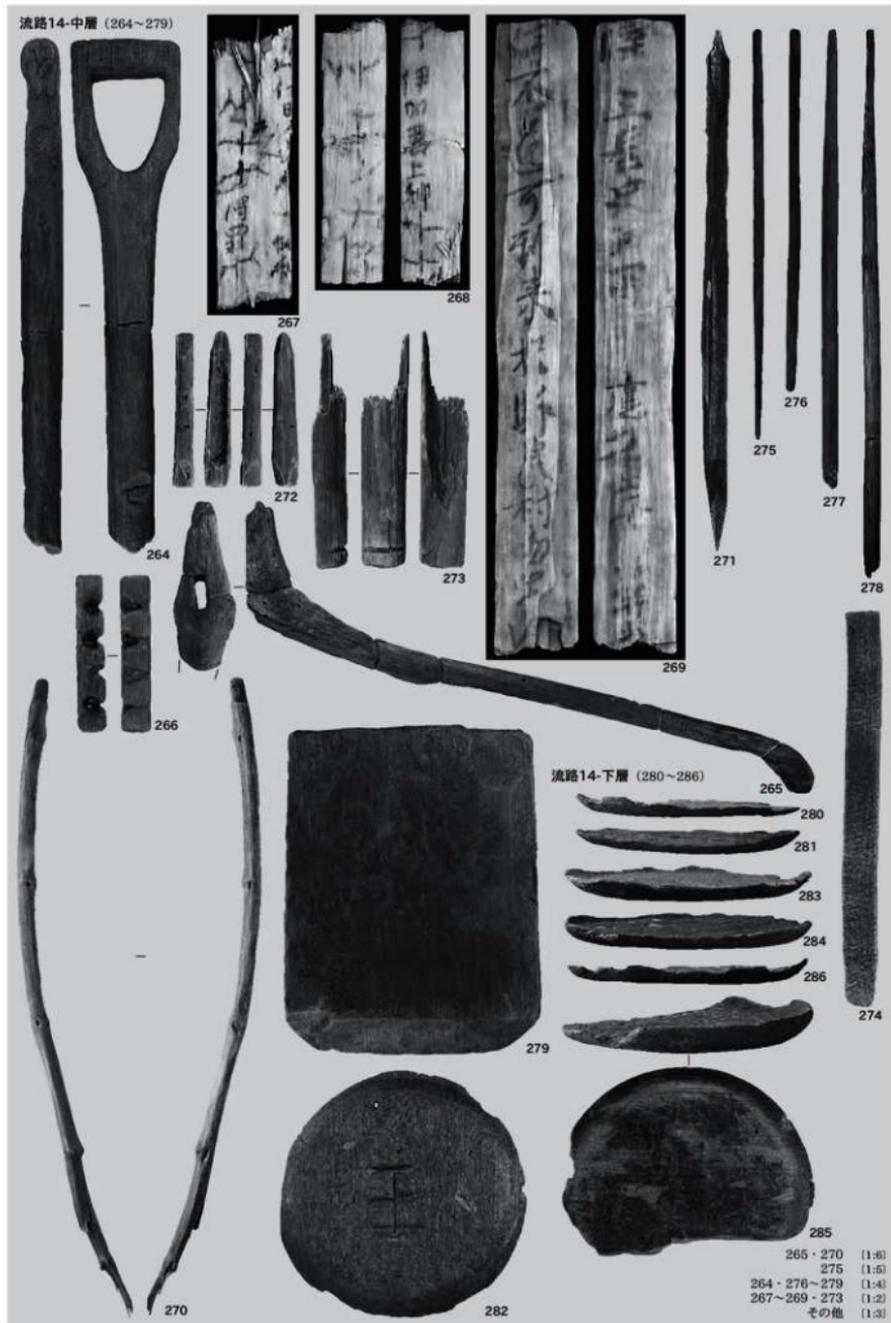


流路14-中層 (237~244・247~249)

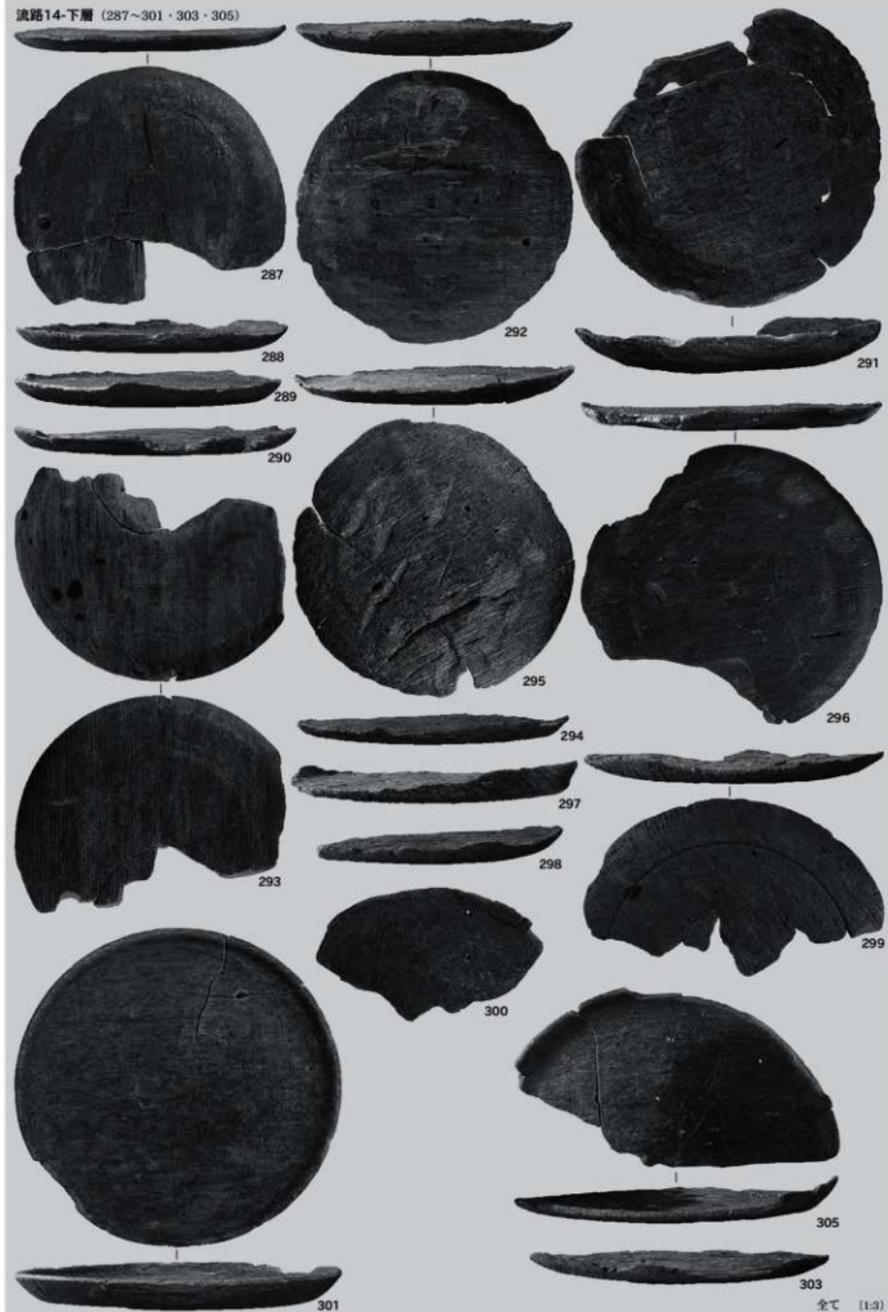


流路14-中層 (245・246・250~263)

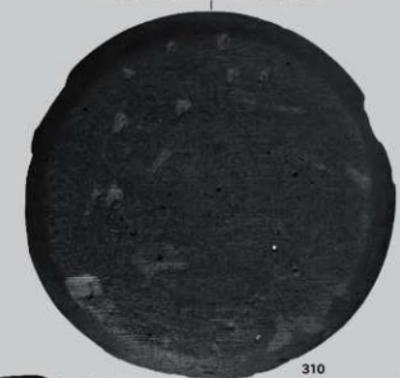




流路14-下層 (287~301・303・305)



流路14-下層 (302・304・306~310・312)



309

302

310

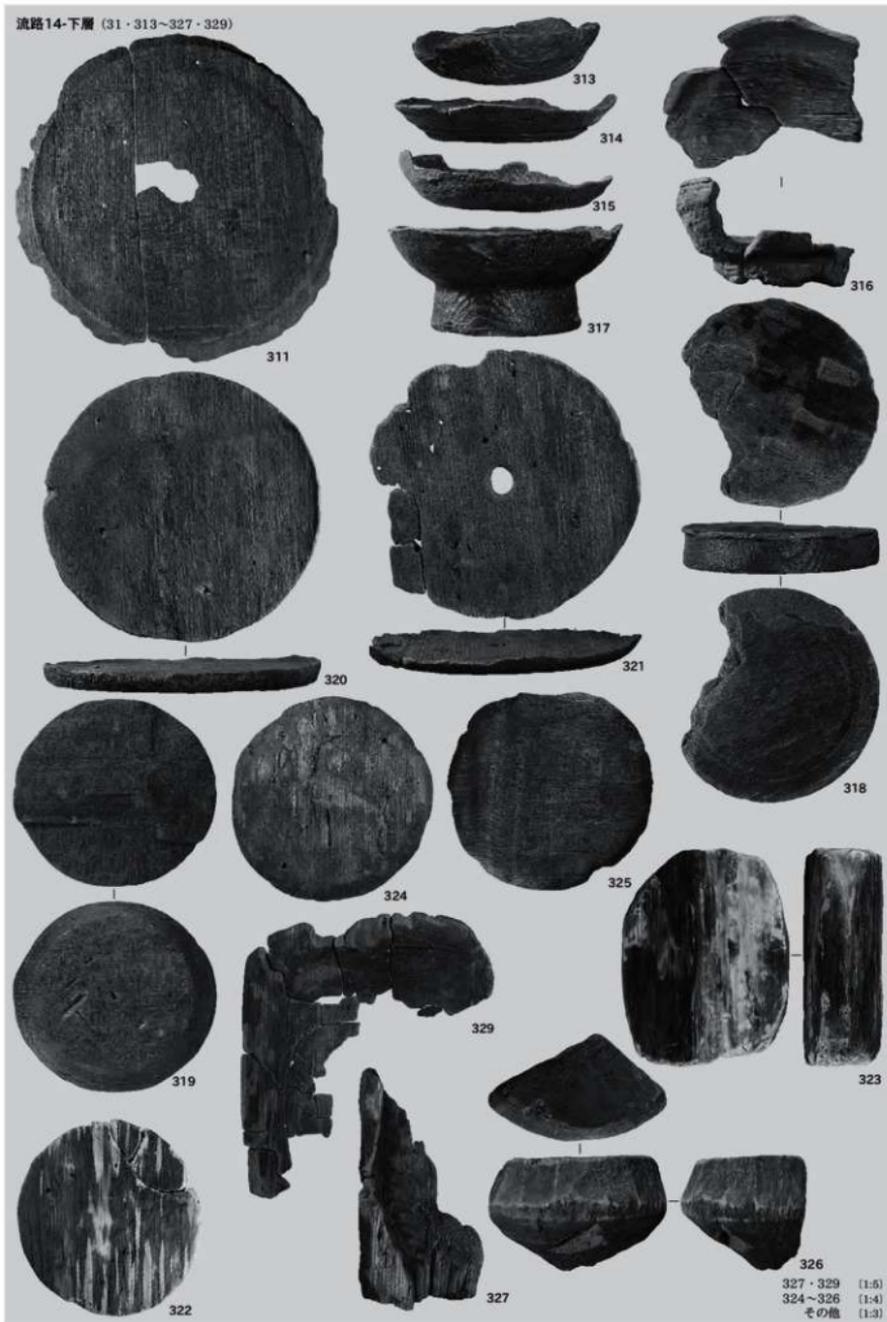
304

306

308

312

流路14-下層 (31・313~327・329)

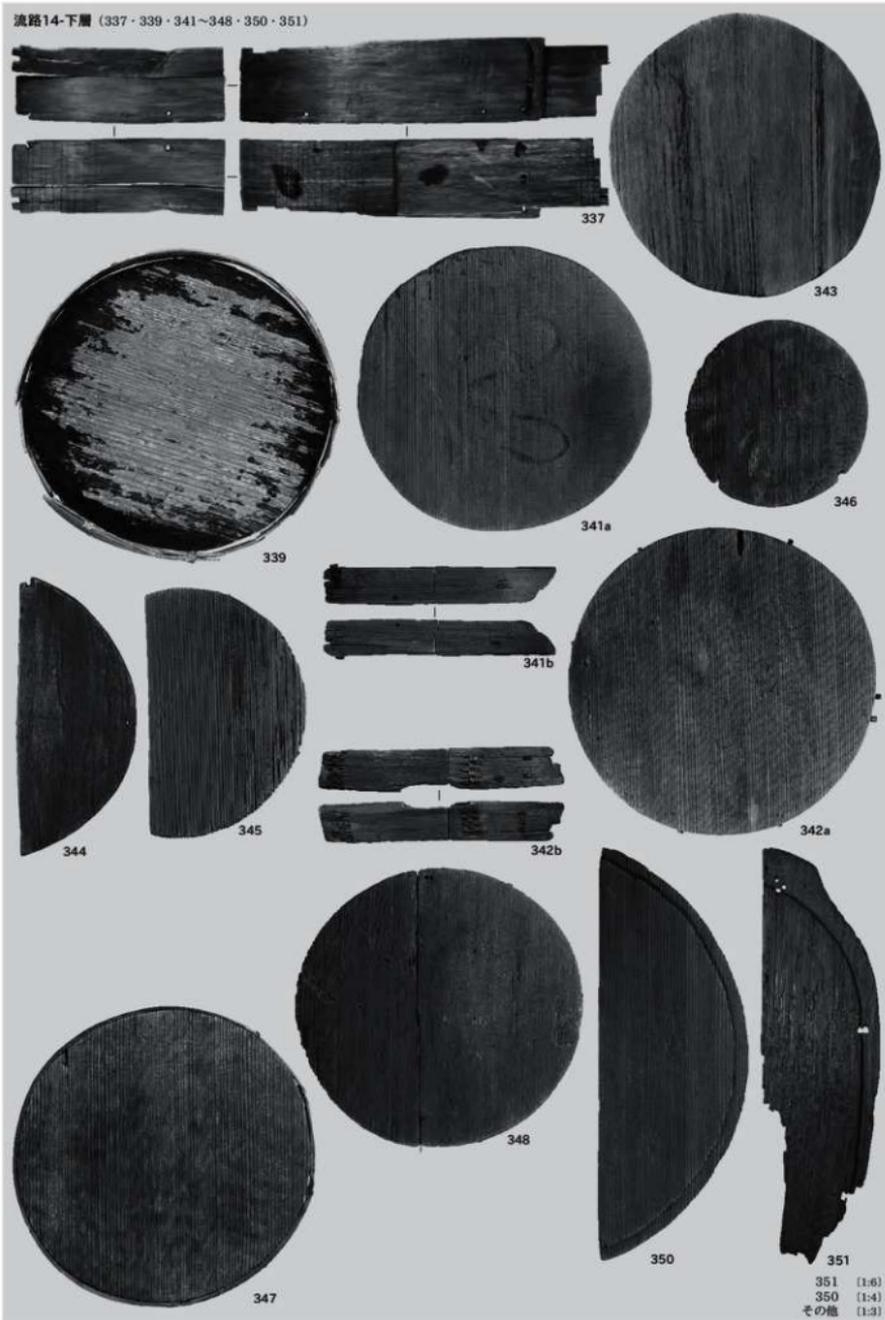


流路14-下層 (330~336・338・340)



331~333 (1:8)
 330 (1:5)
 その他 (1:3)

流路14-下層 (337・339・341~348・350・351)

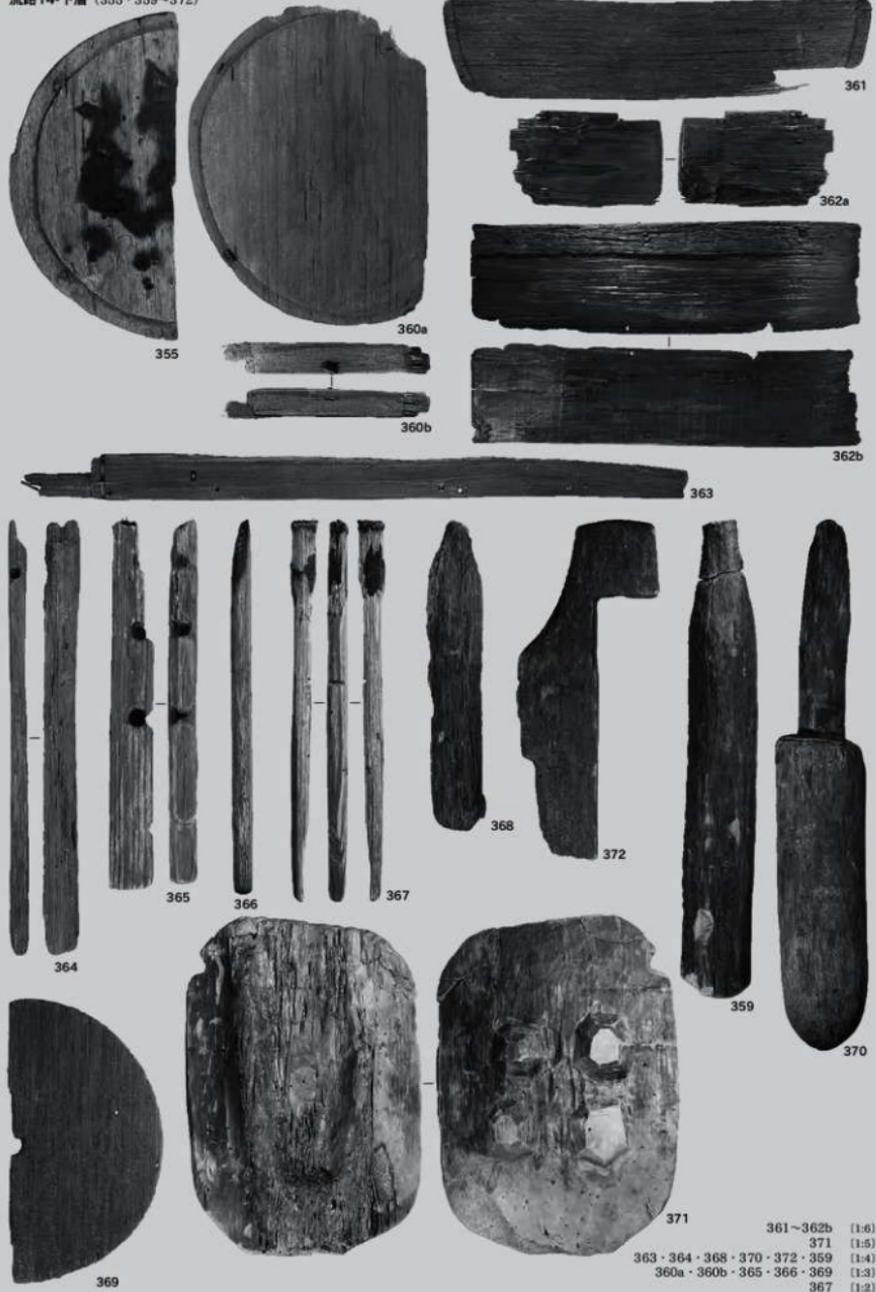


351 (1:6)
350 (1:4)
その他 (1:3)

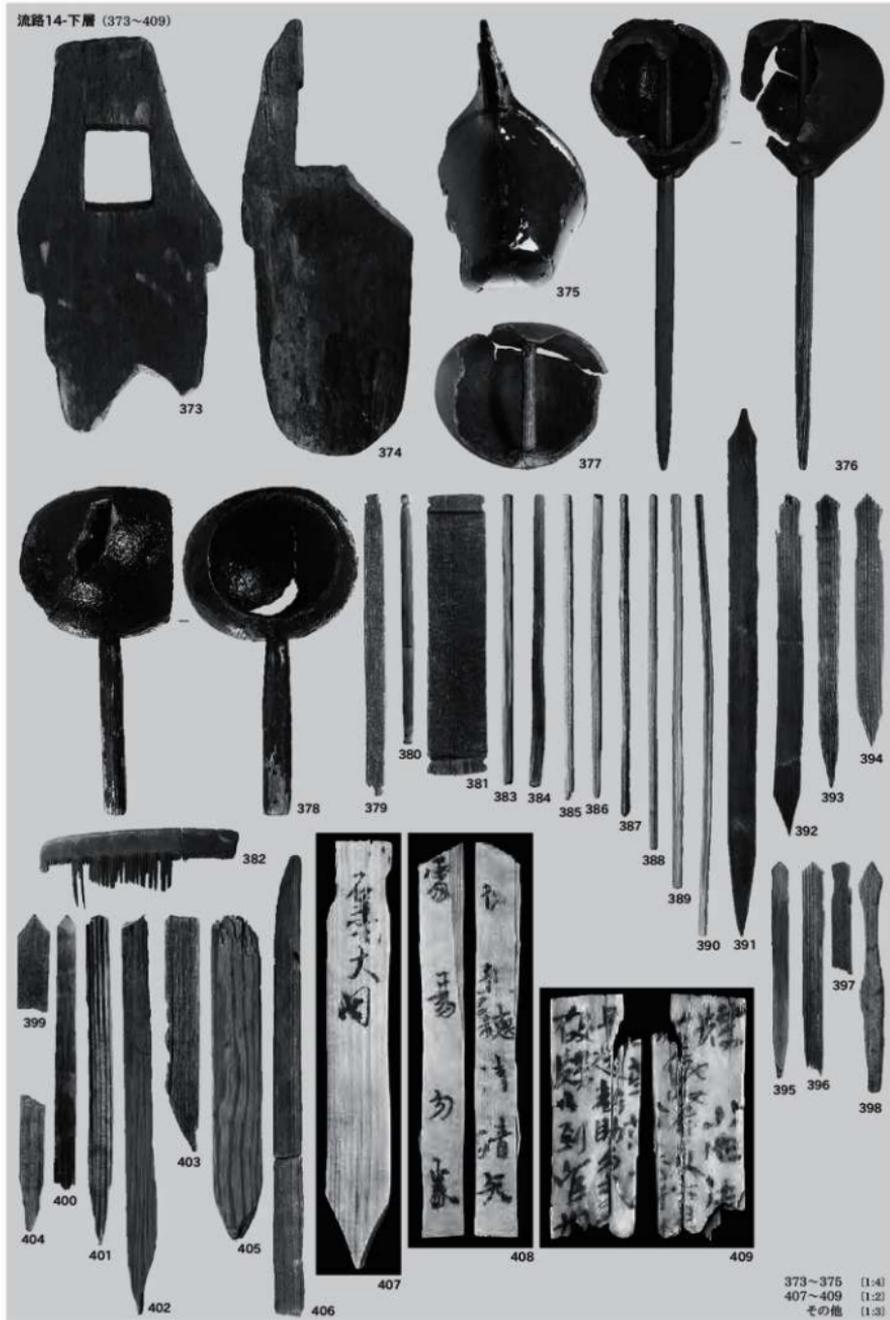
流路14-下層 (349・352~354・356~358)



流路14-下層 (355・359~372)



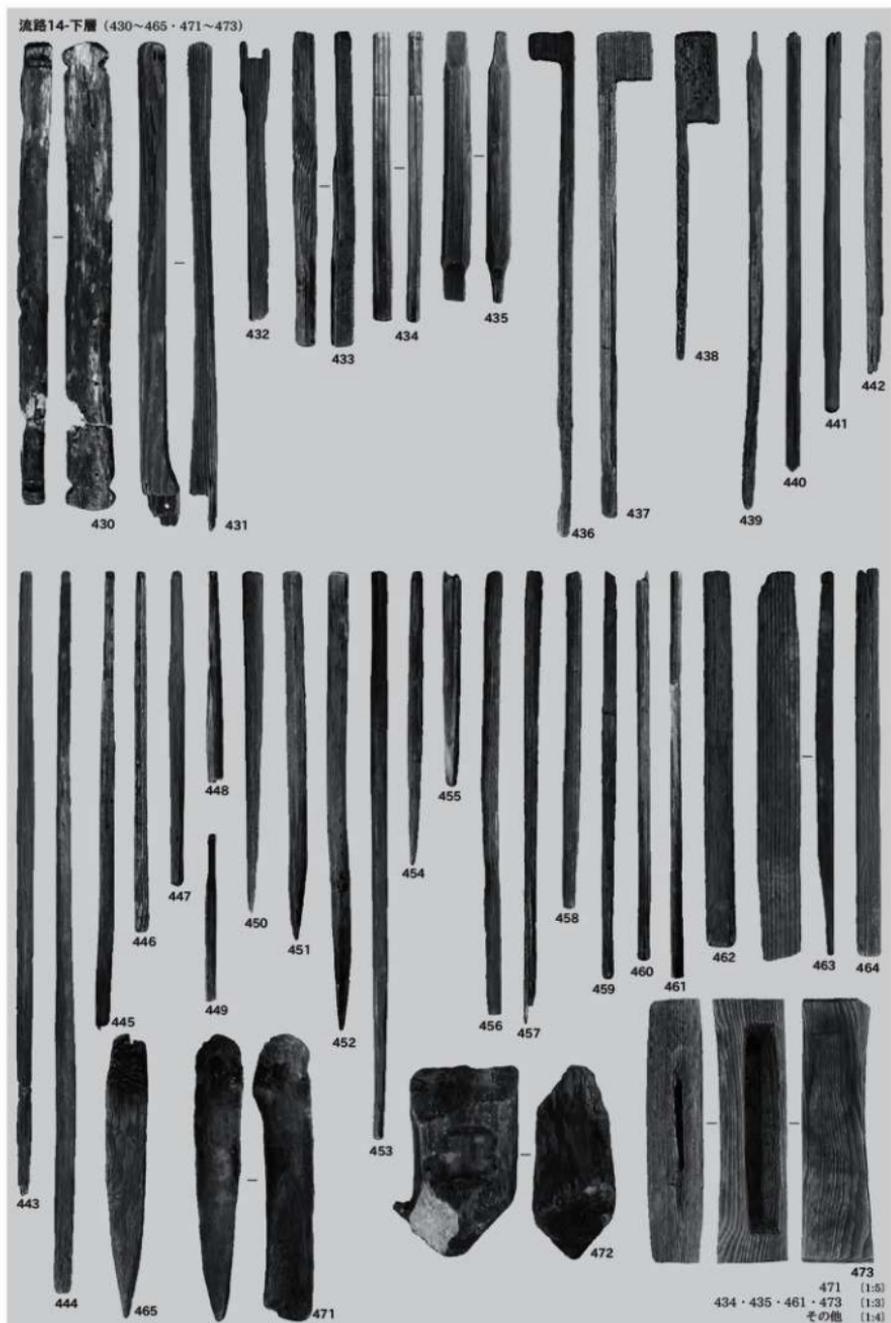
流路14-下層 (373~409)



流路14-下層 (410~429)

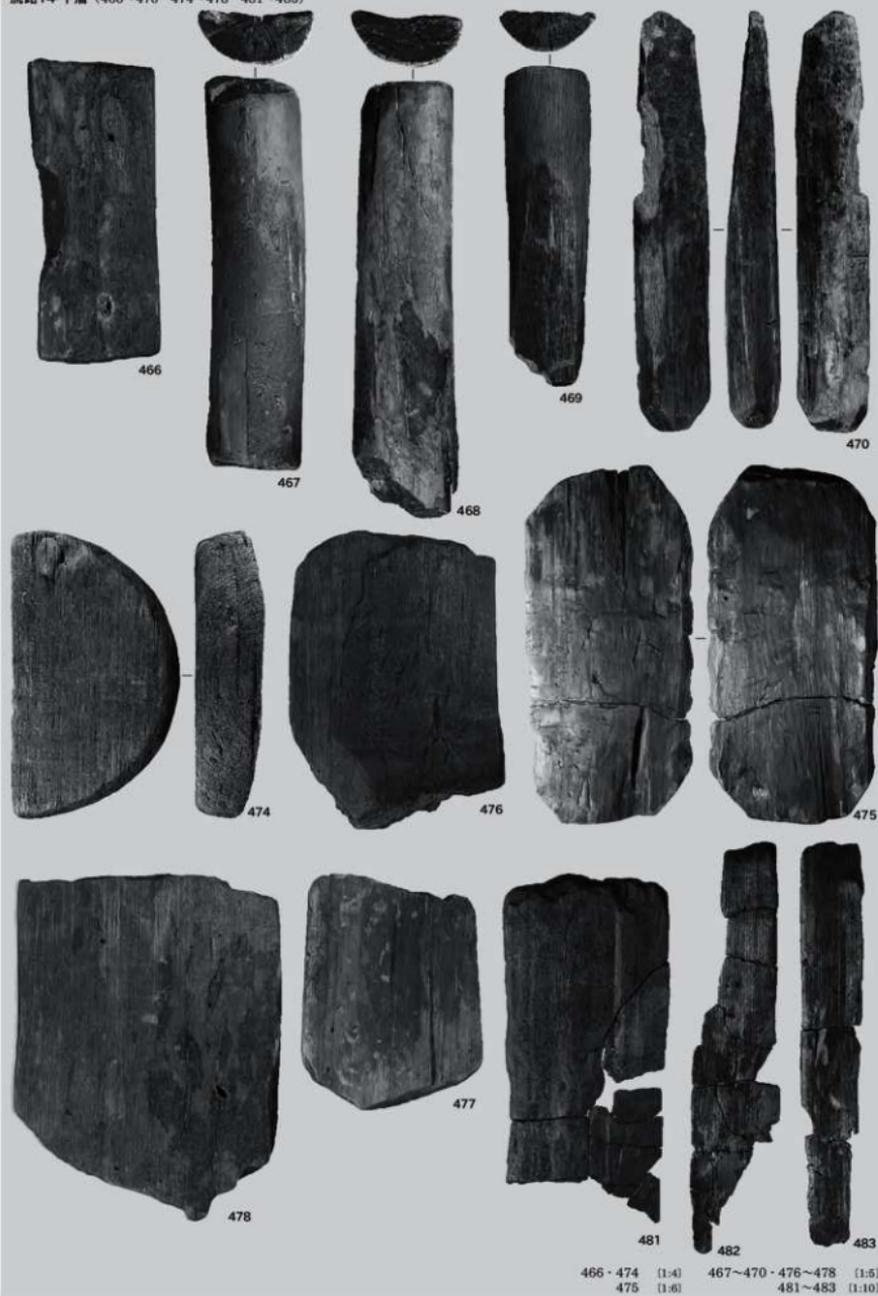


流路14-下層 (430~465・471~473)



471 (1:5)
 434・435・461・473 (1:3)
 その他 (1:4)

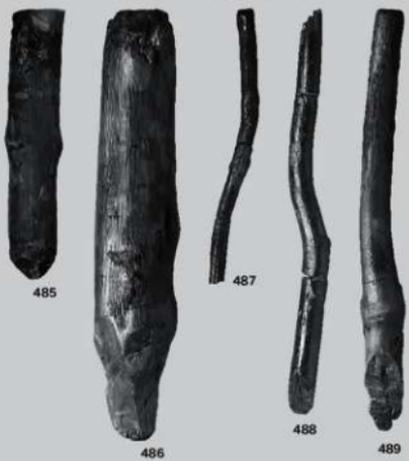
流路14-下層 (466~470・474~478・481~483)



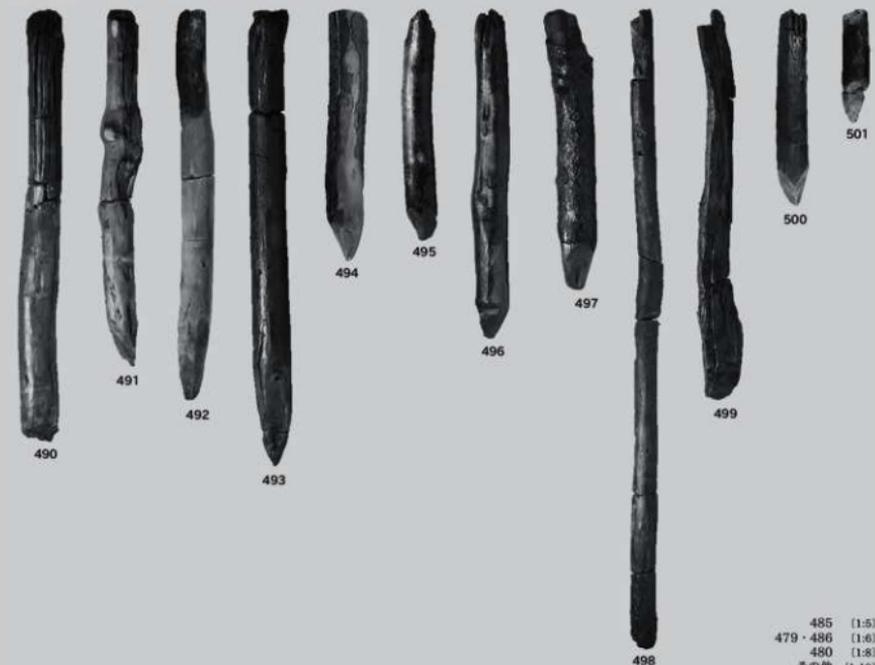
流路14-下層 (479・480・484~486)



SA75 (487~489)



階段状遺構 (A: 490・491, B: 492~499, C: 500・501)



485 (1:5)
 479・486 (1:6)
 480 (1:8)
 その他 (1:10)

報告書抄録

ふりがな	みのわいせき に							
書名	箕輪遺跡Ⅱ							
副書名	一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書							
巻次	IX							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第254集							
編著者名	春日真実・坂上史紀・小野本 敦（公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）、黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）、小林昌二（新潟市歴史博物館）、相澤 央（帝京大学）							
編集機関	公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL. 0250 (25) 3981							
発行年月日	2015(平成27)年1月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 東経	発掘期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
箕輪遺跡	新潟県柏崎市枇杷島字 箕輪3014番地3	15205	347	37° 21' 12"	138° 34' 02"	19960507～19961120 19970414～19971128 19980413～19981222 19990414～19991204	28,120㎡	一般国道8号柏崎 バイパス建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	出土遺物		特記事項		
箕輪遺跡	遺物包蔵地	縄文時代中期～古墳時代前期	ビット	縄文土器（新潟式・福之内Ⅱ式）、弥生土器（小松式・百瀬式）、土師器、石器・石製品（石鏃・磨製石斧・打製石斧・石錘・管玉・白玉・筋砥石）		遺物が散発的に出土した。今回の調査区ではビット以外の遺構は確認されていない。		
官衙関連遺跡	官衙関連遺跡	奈良・平安時代（8～11世紀）	堀立柱建物15 欄1 井戸5 土坑34 溝 ビット 流路	土師器・須恵器・灰輪陶器・緑釉陶器・製塩土器・木器（盤・合子・盤 未成品・挽物粗型・羽物槽・羽物桶・横樋・刷毛・火鑽白・駒・鎌・浮子・櫂・番車・木簡・柱根・杭など）、石器（砥石）、金属器（鈔帯金具・刀子・鎌・鉄洋など）、土製品（土錘・紡錘車・支脚・フイゴ羽口など）		遺構の多くは古代の可能性が高い。自然流路を中心に多量の土器・木製品が出土しており、これらの中には「駅家村」と記された木簡（1号木簡）や「上段」と記された墨書土器、黒漆塗の金釧などがある。		
集落	集落	中世（12～14世紀）		土師質土器・珠洲焼・瀬戸焼・美濃焼・青磁・白磁・青白磁・金属器（銭貨・砲弾など）・石器（砥石・温石など）		中世と断定できる遺構は少ないが、遺物が定量出土した。出土遺物には青磁水注や砲弾などの優品・希少遺物がある。		
要約	鶴川右岸の丘陵先端付近の沖積地に所在し、旧状は水田・宅地であった。調査の結果、奈良・平安時代（8～11世紀）と中世（12～16世紀）の遺構・遺物を検出した。堀立柱建物は15棟検出されたが、大半が古代のものである。そのうち6棟は蛇行する自然流路の岸辺に位置し、他の9棟も自然流路に近接していた可能性が高い。流路からは多量の土器・陶磁器、木製品が出土した。木製品のなかで特筆されるものは黒漆塗の金釧で、県内では初例である。正倉院御物等に見られる金属製品を模倣したものと推測でき貴重な資料である。古代の遺跡の性格は木簡や墨書土器の記載内容から考え、駅家・郡衙に係わる官衙関連遺跡と考える。木簡の記載内容により、これまで不明であった、駅家の物品請求の一端が明らかとなった。調査区内からは駅家や郡衙の中心施設と考え得る遺構は検出していない。遺構の分布状況などからバイパス建設後の沖積地や丘陵上に駅家や郡衙の中心施設が存在する可能性がある。							

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第254集 一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書IX

箕輪遺跡Ⅱ

2015(平成27)年1月29日印刷 編集・発行 新潟県教育委員会
2015(平成27)年1月30日発行 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
電話 025 (285) 5511
公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250 (25) 3981
FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 株式会社ハイングラフ
〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号
電話 025 (233) 0321

第257集 箕輪遺跡Ⅱ 正誤表

ページ	行	誤	正
例言	下から12行目	第V章5	第V章6
51	上から16行目	有台盤は7点出土したが、本遺跡では流路1が最も多い。流路1出土の有台盤は口縁の立ち上がりがほとんど認められず、皿状を呈することが特徴的である。	有台皿は6点出土したが、本遺跡では流路1以外では出土しておらず、特徴的である。土器についても有台皿が認められ、同様の傾向を示す。
51	下から11行目	有台盤は口径13.8～17.5cmの…	有台皿は口径13.8～16.6cmの…
63	上から10行目	第Ⅷ章3	第Ⅷ章5
99	下から1行目	(第44図)	(第46図)
102	下から16行目	39遺跡で52例・(中略)・壺甕は42例ほど	40遺跡で53例ほど・(中略)・壺甕は40例ほど